近代諸家集

三

例言

一、本卷は近代諸家集(二)として、小澤蘆庵の六帖詠草、上田秋成の藤簍冊子、伴蒿溪の閑田詠草、釋涌蓮の獅子巖和歌集、賀茂季鷹の雲錦翁歌集、石川依平の柳園詠草及び良寛和尚の良寛歌集を収めました。

一、本卷は山崎麓が擔當しました。

一、六帖詠草は、文化元年板、同拾遺は嘉永元年板をもととし、寫本蘆庵集を參照しました。

一、藤簍冊子は文化三年の刋本をもととし、上田秋成全集等を參考しました。

一、閑田詠草は文政元年板、獅子巖和歌集は文化五年板、雲錦翁歌集は天保二年板、柳園詠草は明治十四年板をとりました。

一、良寛歌集は、大正七年刋良寛會の玉木禮吉氏編良寛全集により、相馬御風氏の良寛詩歌集、大島淸作氏の良寛全集等を參考しました。

校註 國歌大系 第十七卷目次

六帖詠草……小澤蘆庵……一―三三四

序……三
春 春歌……五
夏 夏歌……五六
秋 秋歌……九八
冬 冬歌……一四八
戀 戀歌……一七一
雜上 雜歌……一九三
雜下 長歌……二三五
旋頭歌……二五六
物名……二五六
俳諧歌……二七七

六帖詠草拾遺

春歌……二八九
夏歌……二九八
秋歌……三〇四
冬歌……三一四
戀歌……三二〇
雜歌……三二四
跋……三三四

藤簍冊子……上田秋成……三三五―四三三

目次

序 …… 三三七
附言 …… 三三九
自序 …… 三四一
題六藻眉 …… 三四三
春歌 …… 三四九
夏歌 …… 三六四
秋歌 …… 三七二
冬歌 …… 三八六
雑歌 …… 三九二

閑田詠草 …… 伴　蒿　蹊 …… 四四五—五四〇

序 …… 四四七

上

春歌 …… 四四九
夏歌 …… 四六七

中

秋歌 …… 四七二
冬歌 …… 四八〇

下

戀歌 …… 四九一
雑歌 …… 五一三

獅子巌和歌集 …… 釋　涌　蓮 …… 五四一—六〇三

序 …… 五四三
春部 …… 五四五

夏部……五六八
秋部……五八四
冬部……六〇九
戀部……六二一
雜部……六三六

雲錦翁家集……賀茂季鷹……六六三―七六二

序……六六五

卷一

春歌……六六九
夏歌……六八四

卷二

秋歌……六九四
冬歌……七〇七

卷三

戀歌……七一五
賀歌……七二三

卷四

雜歌……七二五
羇旅歌……七四二
離別歌……七四四
哀傷歌……七四六
懷舊歌……七四八
俳體歌……七五〇
俳諧歌……七五四
長歌……七五五
跋……七五七

柳園詠草……石川依平……七六三―八四三

上

春歌……七六五
夏歌……七七四
秋歌……七八〇
冬歌……七八九
戀歌……七九四
雜歌……八〇一

下

長歌……八二八

良寛歌集……良寛和尚　八四三―九四三

長歌……八四五
旋頭歌……八七〇
短歌……八七三
春……八七三
夏……八九五
秋……八九九
冬……九〇五
雜……九一二

解題……卷首一―四〇

目次終

解題

六帖詠草附拾遺

小澤蘆庵は尾張の人、犬山の藩士であつたが後、京都に住んだ。名は玄中、通稱は帶刀、蘆庵は其の號である、又觀荷堂とも言つた。幼年の頃大阪に移つた。もと劍術を能くし、武者修業に出て、京都に來て某公に仕へ、その因緣を以て和歌を冷泉爲村に學んだ。爲村は烏丸光榮の門に出で、冷泉家中興の歌人である。

其の後蘆庵は三十五歲に及んで、居を洛東岡崎村に求め、母をも尾張から迎へ、幾許もなく歌によつて世に知られた。天明八年(二四四八)京都大火の時、その災にかゝつて太秦の地藏堂即ち十輪院に移り住んだ。

今は世をうつまさ人になりはてて都は雲のよそにこそ見れ

今朝見れば燒野の原となりにけりこゝや昨日の玉敷の宮

などは當時の詠である。此處に三年許り住んで、やがて永住を決心し、その堂の佛達に奉つたの

が、阿字を冠にして、圓形に書いた阿彌陀佛の折句歌三十二首と、南無藥師佛の五字を頭冠折句にした旋頭歌十六首、短歌十二首である。

　蘆庵は皇學、漢學にも達し、又尊王の心を抱いて居た。就中和歌は古今の諸體に出入し才氣煥發、伴蒿蹊、澄月、慈延と並べて平安四天王と稱せられ、弟子亦少なくなかつた。享和元年（二四六一）七月十一日に歿した。年七十九。其の前日別室に移した時

　　波の上を行く心地して磯近くなりにけらしな松の音きこゆ

と詠んだと傳へられて居る。墓は北白川の心性寺に在つて寂照院月江蘆庵居士と法諡せられた。

　其の生涯中に殘した逸事も亦少くない。嘗て冷泉爲村に師事した頃、師の手跡を贋書して破門せられた事がある。其の時彼はその使者に面接して深く罪を陳謝し、やがて奥に入つて短冊に次の一首を記して出した。

　　しるべせし和歌の浦風道絶えて身は捨舟の寄る方もなし

使者は歸つて、爲村に語れば、爲村は「彼才あり。いかでか永く我が下風に立つべき。後世名だたる歌人となるべし。」と、竊にその才氣を惜しんだのであつた。

　又一夜盗賊に見舞はれた。彼が點燈して見れば賊は既に逃げ去つてしまつた。然るに翌夜又入

つたので薙刀を取つて向つた。賊は事の意外に驚いて走り去つた。この時、

ありそ海の巖こゞしみ越えかねてよる〳〵歸る沖つ白波

と詠んだ。

彼は貧しかつた。洛東に住んだ或日、途中から駕籠を雇うて家に歸つたが、賃金が三文不足した。急いで鄰家に借らうとしたが其の家にも無かつたので、その代にとて、

津の國の難波の三つのあしを無みこと浦かけてからせけるかな

と詠んでやつた。その歌は、集中誹諧歌の部に見えて居る。

平生は其の居間に長刀をかけ置き、「禁裏に事あれば提げて難に赴かむ。」と言つて居た。されば蒲生君平が山陵志を作らうとして、畿内の地を經歴すると聞き、君平を其の家に宿して犒つた。その志の存する處を伺ひ知る事が出來よう。君平が歸國の際に、

君がため木曾の山みち雲分けて又いぬらむか木曾の山道

と詠んだ歌は詠草の雜部に見えて居る。

或は某法親王から屢召されても、固辭して參らぬ事もあつた。法親王は強ひて召し給はず、「隱者なり、殊には老人なり、風雅の事に強ひて招かむは、禮を失ふに似たれば、來らぬも理なり。自

らこそ尋ぬべけれ。」とて、太秦まで二里餘の路を訪はせ給うた。それから蘆庵も忝しとて、時々參り上つたと言ふ。

其の交友には、上田秋成、僧涌蓮、伴蒿蹊、香川景柄、香川景樹、橘千蔭、賴春水、大江昌熹等と最も好かつた。殊に景樹は弱年の頃から蘆庵と能く交はつた。次の話柄はその交情を語る好個の例である。

一夜、景樹の許に行き、「汝は才の過ぎたるが患なり。」など語つた。翌日景樹の許から、

千里までかけれと鞭は打ちながらあはれと見らむ醜のおそ馬

の一首を送つた。蘆庵は取敢へず、

鞭うつは海を越えよと思ひきやあな／＼危ふ醜の早馬

と返した。景樹はこの言を服膺したと言ふ。

又春水の子山陽は蘆庵の太秦歌稿の後に、

杜詩以二夔州後一、爲二上乘一、蘆庵翁和歌、爲二當代第一一、而其避レ災、寓二太秦一時、稱二最深妙一、故太秦者蘆庵之夔州也。

と。太秦に遷つて以後一層才氣學識共に進展したのであらう。本居宣長も「吾が企て及ぶ處にあ

らず。」と言つて居る。或年の暮春に、宣長は上洛して蘆庵を訪ひ、

思はずも都ながらに和歌の浦の木高き松を今日見つるかも

見るか君ひむがし山の花の春月の秋をも我が物にして

の二首を寄せた。その返しは拾遺の春歌に見えて居る。

其の門人には、小川布淑(後に剃髪して萍流と稱した)、田山敬儀、僧昇道、前波默軒などが著明である。柳園家集(本大系第十八巻所載)の作者、海野遊翁は默軒の門から出たのである。其の編又は著にかゝるものに、袖中和歌六帖、塵ひぢ、蘆かび、振分髪、古の中道(蘆かび、塵ひぢ、或問の三部を合したもの)、觀荷堂隨筆、觀荷堂一家言蘆庵集、六帖詠藻、同拾遺等がある。

蘆菴の歌論は「和歌とは何か」と言ふ事から出發した。和歌は人の心の自然の聲である。思ふ事を其の儘言葉に表現して意味の通つたものである。殊更に技巧を用ゐて、人の心の自然を失ふ事を嫌つて居た。されば彼の和歌は平易な言葉を用ゐて眞情を流露させる點に根據を置いた。卽ち「振分髪」に次の如き事を述べて居る。

すべて才なき人の、人に勝らんとするはいと見苦しき事なり。それよりも、おのが言はるべき程を知りて、

心を平易にして、理の正しき詞をもて一筋に續くれば、自らよく聞え別に竝ぶ事なし。

彼の「たゞこと歌」の論はこの思想から生まれて居る。眞淵一派が萬葉集の古語を用ゐる事は蘆庵の潔しとする所ではない。この説は香川景樹にも大いに影響したのである。これに對する非難もあつたが、兎もあれ蘆庵は冷泉爲村より承繼した擬古的な堂上風を脱し、その天分と修養の力とを十分に發揮した。殊に叙景の詠には溫藉な清鮮なものが多い。彼は又貫之を崇敬し、古今六帖を好んで居た。

六帖詠草は古今六帖の歌體を心にかけての名稱であらうと、其の跋に小川布淑は記して居る。この詠草は、丹波柏原の領主平信憑が、蘆庵の歌の三分の一許りを請ひ受けて梓行し、同好の士に頒布させようとし、小川布淑、前波默軒等に校合させて文化元年（二四六四）十月に着手した。その後、同八年（二四七一）に出來て世に傳はる事となつた。同拾遺は小川萍流が自ら書いて、版にするばかりで歿した。其の後三十年を經（蘆庵の歿後約九十年）、嘉永元年（二五〇八）十二月、萍流の子、蘗翁が版木に彫らせたものである。

次に集中の例を左に掲げて見よう。

大井川月と花との朧夜にひとり霞まぬ波の音かな

ほの見ゆる影も青みて若葉さすかへでの梢月ぞ小ぐらき

雨はれて雲たちのぼる山もとの里わの小田にさ苗取る見ゆ

蚊遣火の煙に咽ぶ緑子が聲もいぶせき宿の夕暮

今日も亦夕立すらし山の端の遠き梢の雲かくれゆく

衣うつ聲は殘りて夕霧にやゝ隱れゆく山本の里

波となり小舟となりて夕暮の雲の姿ぞはては消えゆく

これらが一層平淡になつて平凡な、所謂「たゞこと歌」になるものもあるが、又言葉を自由にしようとする主張の下に漢語を用ゐたのは、他人の企及し得なかつた一特色である。

蘭省の花の種とて大君のとひます今日ぞ色香殘すな

爛漫と咲きぬる見てぞしぼめる老も春を知りぬれ

これらは用語の自由であり、當時に在つては可なり極端な主張と見られたに相違ない。

老ぞひぬよもこの春は夏はとて秋過ぎ年も亦暮れぬめり

かくしつゝあればあるには似たれども唯かげろふの人の世の中

在りし世の人は年々稀になりて獨りぞ忍ぶ古の友

明日知らぬ身を長かれと祈るかな行末遠き人の別れに

敍情的のものは、稍說明となる點は、敍景の歌の流暢平易なのに比して稍遜色とも言ふべきであらう。要するに彼のたゞこと歌の主義に從つて居るが故に、一般に溫藉平暢であり、特に敍景中には出色のものが多い。

栗も笑み柹も色づきうなゐらが誇らしけなる時は來にけり

小鳥追ふ鳴子の繩に手をかけて竹の端山の夕日をぞ見る

夕月のほのめく野べを見渡せば尾花なびきて秋風ぞ吹く

昨日まで怪しき峯と見し雲も棚引きそめて秋風ぞ吹く

これらは彼の歌の特色をよく表はしたものである。

藤簍冊子

上田秋成はその出自を詳にしない。或に本姓を田中氏とも言ふが據る處は明らかでない。上田は多田源氏の後である故に又姓を阮とも言つた。源の音に因んだものである。秋成は通稱を東作又は藤作、號を無腸又は休西と言ひ、家の號を餘齋又は三餘亭、鶉居と言つた。剪枝畸人、和譯

太郎はその戲號である。秋成を秋也と書した事もある。

享保十九年(二三九四)に大阪曾根崎の茶屋に生まれた。兩親を明らかにし難い。一說に父は生田傳八郎、母は曾根崎花屋の女と言ふは誤りである。四歲の時母を失ひ、堂島の上田氏に養はれた。上田氏は丹波冰上郡黑井の士族であつたが、茂兵衛滿明と言ふ者が宰相と爭ひ、浪人して大阪に出で商に歸したのである。茂兵衛の子茂助は父と共に國書に造詣深く、又秋成を愛育した。

五歲の時痘を病んで殆んど危かつたが、養母の看護によつて全快した。然るに翌年養母を失ひ新たな母を得たけれども慈育せられて居た。少年時代の事跡は多く傳はらぬ。只多病であつた爲に比較的放任せられた教育を受け、遊蕩な日を送つたものらしい。

二十九歲の寶曆十二年(二四二二)、秋成は京都在九條の農家の女で、植山氏に養はれて大阪に居た者を娶つた。然し遊里に流連し蕩兒と交つて家事を顧みなかつた。かかる間に戲作の筆を取つて世間妾氣質、諸道聞耳世間猿を出し、明和五年(二四二八)に雨月物語を出した。これは其の漢字の師と傳へられる大阪の儒者都賀庭鐘即ち近路行者の英草紙や繁野話等に負ふ處もあるらしい。或は某中納言に和歌の點を乞ひ、和書の質疑をなし、のち契沖の著を見て大いに悟る所があつた。加藤宇萬伎が大阪城の定番として來た際は、其の門人とならうとしたが、學友として待遇

せられたと言ふ事を膽大小心錄の上に記して居る。

明和七年（二四三〇）に至つて俄に養父に死別し、彼も商家の主人となり、筆硯に親しむの閑を奪はれた。然るに翌年又火災に罹つて家産を失ひ、京攝の間に流浪し遂に財を失つた。これによつて志を立て、四十歲の安永二年（二四三三）に醫を學び、三年の後大阪に歸つて開業した。然るに診察は深切を盡したので好評を博し家をも新築した。然しこの頃から健康を害し、城崎溫泉にも屢湯治に行つたが、五十五歲の時には醫業を止めて、長柄川の畔なる西成郡加島村に移つて行つた。此の頃から一層學事を事とした。

寬政四年（二四五二）妻の母及び繼母を失つた。爲に妻は薙髮して名を瑚璉と改め、彼に京都に永住する事を慫慂したので、翌年六月初めて知恩院門前に卜居した。其の居は村瀨栲亭、松村月溪の居に近かつたので、月溪と誹諧に遊び、栲亭と煎茶を談じ、大いに其の普及に盡力した。後屢居を遷し、或は南禪寺內の常林庵の小庵や衣棚の丸太町等に住んだ事は、膽大小心錄の中に詳記して居る。もと久しく左眼を病んで稍快方に赴いた頃、又右眼の明を失して讀書不能となり、寬政十年（二四五八）五月、河內國日下の正法寺に轉地したが思はしくなかつた。のみならず、翌年十二月、瑚璉尼も急に死し不自由になつたので、羽倉信美の家に寄寓した。信美は蘆庵の門人、

六帖詠草中にも屢其の名は見えて居る人であるが、秋成を師として遇した。秋成は舊著を謄寫して希望者に與へ其の謝禮を得るを唯一の收入とした。卽ち多く友人門弟の同情に賴るのみであつた。今日自筆草稿も多く傳はり、又同一書に數部の草稿を殘したのは彼の不遇の致す處である。

文化三年(二四六六)七十三歲の時再び南禪寺の舊庵に移つた。膽大小心錄の中には次の如く記して居る。

羽倉と言うた藏人の所へ一寸腰かけたは、つい死ぬであろの覺悟であつたが、死なれぬ故、又南禪寺の昔の庵のあつた處へ小庵を建てて七十三歲の春移り申した。

大阪から金百七兩で上つたが、今年で十六年、何でやら暮した。蘆庵が勸める人寄せしたら、用意金は三年に盡すべし、麥食うたり、燒き米の湯飲んだりして、惜しからぬ命は生きる事ぢやが、書林の賴む事をして十兩十五兩の禮を取つて、十二年は過したが、もう何も出來ぬ故、煎茶飲んで死を極めて居る事ぢや。

この庵室は纔に數疊の廣さで、入口には鶉居の二字を書いた暖簾を掛けて居た。文化六年(二四六九)には羽倉信美の家に遷つて其の六月二十七日歿した。年七十六。三餘齋無腸居士と法諡して南禪寺側の西福寺に葬つた。墓は其の十三回忌なる文政四年(二四八一)、門人等の經營したものである。

著書は頗る多いが五括り許りを庵中の古井に投じて、「心涼しくなりたり。」と言つて居る。和歌も其の生涯の長きに比して少ないのは後半生の作品の故である。膽大小心錄別本に、

若き時は俳諧と言ふ事を習ひて、凡そ四十近くまで是れより外の遊びは無かりし。其の時は師の口まねせむ、何がしの樣には得なるまいとのみ思ひしに、四十にならむ頃に、人の言ふは、歌よめ、俳諧は卑しくと言ひしかど、歌はお公家樣の眞似が出來るものかと言ひしかど、すゝめるに任せて、下の冷泉殿のお點を乞ひしに、そなたはよい口ぢやとおほめなされて、物問へばしをらしい事能く問ふ。いつぞは考へておからとおしやつて、遂に御返答なし。

契沖の著述を買ひ集めて獨學の閒、又二三年、宇萬伎と言ふ人にあひて、師とかしづきたれど江戸の人故、七年が閒に文通で問うたこと僅かなり。此の師も五十過ぎて早く世を去らせしかば、二(ふ)たびカノ獨學にて、それも市井の醫の奔走に暇無ければ心に思うた許りぢや。

伊勢の宣長と言ふ人の著述を、人のつてに借りしが、これも心にたがふ事多し。思へば〳〵、歌も文も言ひたい事言うて遊ぶがよしと心がついて、師家と言ふわろ達の僞り言も知れて、これから誰にも交はるはいらぬ事と一決したりし。師と言ふ人はありしかど無いに同じく、又俳諧を顧みれば、貞德も宗因も桃青も、口前のみの者どもなり。古人は心のまゝにてありしも、移せど移らぬが人の性質なり。

これによれば彼の和歌は冷泉爲村に始まり、宇萬伎に負ふ所もあるが、結局は「移せど移らぬが人の性質なり。」と知り、「歌も文も言ひたい事言うて遊ぶがよし。」と悟つて詠んだ點で、彼の歌論の根柢を推量する事が出來る。蘆菴と親交あつてもたゞ事歌では無く、寧ろ萬葉と古今の中間の如き宇万伎の風があるけれども、畢竟彼自らの心を僞りなく表現したものである。其處に却つて清新味を豐富に保有して居る。

藤簍冊子（つゞらぶみ）六卷は、秋成の和歌、文章、物語、紀行等を自ら選んだものと、卷末に瑚璉尼の文二篇を載せて居る。弟子なる僧昇道が校訂し、文化元年（二四六四）三月成つた。即ち附言に「昇道杜多、岡崎の竹間裏にしるし侍る。」と記して居る。杜多は頭陀で、昇道は僧であるからである。但し刊行せられたのは同三年であつた。本大系には六卷の中卷一、二兩卷だけ、即ち和歌の部のみを採録した。

別に藤簍冊子脱漏は、藤簍冊子に漏れた遺詠を蒐集したものであるが、本大系には集録しなかつた。次に其の歌を掲げて見よう。

我が宿の梅の花咲けり宮人のかざし求むと使來むかも

この夕鴫鳴き渡る山城の伏見のわさ田刈りやそめけむ

久方のはて無き空に朝霞棚引き渡り春立つらしも

高圓の野べ見に來れば新草に古草交り鶯鳴くも

旅にしてさよ時鳥聞くわれな忍びて妹が寢ねがてぬかも

これらは萬葉調である。彼は萬葉集目安補正の校訂をやり、萬葉集會說や萬葉集話（これは今不傳）を著作し、又、冠辭考續貂を出し、縣居歌集の校訂をなして居る。彼の歌に萬葉調を帶びたことは當然である。

矢田の野の淺茅にすだく松蟲の鳴くねをとめて我が立ち惑ふ

の歌は萬葉集卷十に、「詠黃葉」の歌なる

八田の野の淺茅色づく有乳山峯の沫雪寒く降るらし

などが自ら口に出て來たものであらう。又古今、新古今集等の調も多い。

紀の海の南のはての空見ればしほけに曇る秋の夜の月

寒き夜を明かしかねてぞ今朝見れば生駒が嶽に雪の積れる

長閑なる日影はもれて篠竹に籠れる庵も春は來にけり

春の雪あがきに碎き信濃なる菅の荒野の駒勇むなり

春の水淺く流るゝ片岸は桃の林の山もとの里

村雨のはるゝ淺茅の露原に濡れてや秋の風は吹くらむ

朝露はまだき下葉に消え殘る野寺の庭の秋萩の花

萩が枝の末にさゝれに流れあひて波も花なる野路の玉川

此等の調は何れに就いても一家をなして居る。其の一を得る事も難いのに、彼はこれを兼ね、更に其の長を取つたものをも詠み出した。彼の特質は此處に在つたと見るべきであらう。即ち萬葉風の直覺的な、而も表現の技巧には、古今、新古今兩集を以て代表せしめ得る平安時代の洗練された調をも加味し、潑剌優婉な詠を殘して居る。景樹の調の說、蘆庵のたゞ事歌等は、特に彼等の庶幾する典型若しくは主義の下に統率したのである。然るに秋成は、「言ひたい事言うて遊ぶがよし。」の主張に從つて自由であつた。典型にも主義にも拘束せられる必要はない。此の點が却つて彼に特色ある詠を殘させた所以であらうと思はれる。其の特色を有する例を左に揭げて見る。

有明の月の光は埋もれて峯白妙の雪の降りはも

畝火山梢に騷ぐ鶴鳥のさきに羣れたつ輕の市人

陽炎の燃ゆる春日の小松原鶯遊ぶ枝うつりして

櫻花嬉しくもあるかこの夕嵐にかへて小雨そほ降る

吉野山岩のかけ路春ゆけばたぎつかふちに花散り浮ぶ

夏河に光を見せて飛ぶ魚の音する方に月は澄みけり

杉が枝を雲は走りて吉野なる檉の尾のへにはだれ雪降る

誰か來て住みつきにけむ山深き谷の一つ屋煙立つ見ゆ

この外に長歌も詠んで居る。これは人麿等の詠と古今集風の中間とも言ふべきであらう。

要するに彼はもと誹諧に遊び中年以後に和歌に入つた。然し既に學者として作家として、一家をなした後であり、殊に師傳の如きものの信ずるに足らず、又無益なものと知つて、自己の心の儘に自由に詠んだ。作品としては敍景のものが多いけれども、純粹の歌人に比して遜色なく、寧ろその清鮮潑剌たる點は、當時他に其の比を見易からぬものがある。

閑田詠草

蒿蹊は名を資芳と言ふ。蒿蹊は剃髪後の號である事は、六帖詠草雜歌の中に見えて居る。又閑田子とも號した。近江、八幡の富家に生まれた。性極めて淡泊で幼時から文字を好み、京都に出

て、大佛の邊に住んだ。はじめ北村季吟に學び、後に有賀長伯の門に入つて和學を修め、さらに武者小路實岳の門に入つて學んだ。實岳は實陰の孫で澄月の師でもある。實岳の歿後は專ら獨學し、深く古學に達して一家をなした。殊に國史に詳しく國文にも妙を得、漢學を修めて和漢の書にも通じて居た。和歌は平安四天王の一人である。又佛理にも通じて、林泉院の六如上人とも交はつて居た。性質は溫厚であつた爲に、秋成等と共に妙法院宮眞仁法親王にも寵遇せられたと傳へられて居る。文化三年(二四六六)七月二十五日に歿した。年七十四。

其の著には、國文世々の跡、閑田文草、閑田耕筆、同次筆、近世畸人傳、同續、譯文童諭等の外、和歌に關しては、國歌八論評、國歌或問等が著名である。

彼の歌論は閑田耕筆にも散見するが、それに據れば古今集を第一とする中古體を目標とした。蘆庵一派のたゞ事歌に對しては、却つて曲れるを矯めて直きに過ぎるものと見て居た。然し態即ち技巧を無視したのでは無い。習練によつて技巧の巧拙を生ずるものとし達意を旨とした。晩年には荷田春滿に私淑し、題を設けては戀歌を詠まないと誓つた。要するに彼は堂上派の風を取らず、又萬葉調を喜ばず、近體には賞せず、只管古今集の雍容寛厚なものを第一義として中庸の説をなした。所謂折衷派と稱すべきものである。

家集は晩年の自撰である。其の歿後二年を經て、文化五年(二四六八)嗣子貴見が橘千蔭に序を求めて梓行したものである。千蔭の序にも「心言葉古とて古になづまず、後とて後に移らず。」と記して居る。

今その歌を左に掲げて見よう。

うち霞み降るとは見えぬ雨にしも濡れて色添ふ春の青柳

白妙に盛りの梅の花までも朧に見する春の夜の月

舟人の港漕ぎ出づる曙に先だつ鴈は島がくれ行く

玉かとも見る程なしに蓮葉の露吹きこぼす池の朝風

岡のべにつれ無き松の夕日影はるゝと見れば又しぐるなり

池水に住むをし鳥の衾とも見えて散り浮く岸のもみぢ葉

夕まぐれ騒ぐ嵐の音絶えて初雪かゝる軒の竹むら

冬來ぬと眺むる空にことわりの時雨の雲こ風にたゞよふ

歌風は蘆庵などに似て一層温籍な感がある。又古今集の風を第一義とした爲に、客觀的敍景の詠に少なく、主觀的說明的敍景となつたものが少なくない。

曇る夜の空にはうとき月影を籬にしめて咲ける卯の花

唐崎のまつ甲斐ありて小波のよるの汀に鳴く杜鵑

吹き渡る風のまに／＼行き返り身を心ともせぬ螢かな

吹き渡る風もひまなき山松の木陰ぞ夏の宿りともがな

秋もはやちかの鹽がま浦波のよる／＼如何に涼しかるらむ

主観的敍景と、技巧を用ゐた例の一斑は此の如きものである。蘆庵、景樹、蒿蹊は殆んど歌風に共通な調子を持つて居る。

敍情的の詠としても亦平穏なものである。

翁さび思ふがまゝの言の葉を世に似ずとしも人な咎めそ

言の葉の道によらずば嬉しきも憂きも思ひを如何やらまし

垂乳根の思ひおきけむ甲斐もなし身をはつかしの森の下草

さして行く心の道し直からば何か人目を憚りの關

八橋の水の蜘蛛手の様々に世渡る道は易けくもなし

この他に詩經の關雎篇や蓼莪篇、莊子の逍遙遊篇を詠んだのや、釋教の歌などによつて、其の

博識をも知る事が出來る。

獅子巖歌集

僧涌蓮は伊勢一身田の人で、名を達容と稱し、又嵯峨居士と言つた。眞宗高田派の僧であつたが、一日、高僧傳を讀んで頻りに感奮し、遂に病に堪へぬ由の一封の書を止めて、窃に草衣を改め、忍んで京都に出奔した。はじめは生島なる人の假初の物見の亭に居たが、後には嵯峨の此處彼處に住んで居た。

和歌は冷泉爲村に學ぶ所もあつたが、自らは歌書一卷をも所持しない。日暮念佛を誦し、其の閑暇にぞ和歌を詠じて居た。生涯物を貯へる事をしなかつた。

其の交友中、蘆庵や蒿蹊とは殊に好かつた樣である。六帖詠草には處々に涌蓮の事も見えて居る。卽ち、

いつの年にや彌生十日許り嵯峨の花見むとて伴資芳よきぬ道なれば立ち寄られぬ。…………かくて打ちつれ遊びの岡、御室など過ぎて、大井の川邊におり居てはかなき事言ひかはし遊べば、心地の何むつかしかりしも凪ぎぬ。春の日もやゝ暮れて、花の色のほのかなる頃、涌蓮法師も來あひて興に入りぬ。

などがある。又は、

二尊院に行きて何くれと打ち語らふに、嵐(嵐山の界)の花も盛り過ぎぬと聞きて、この近きわたりに涌蓮道人住みける其のもとへとて言ひやる。

草の庵にすます心の如何ならむ花の爲うき雨風の空

或は、

いつの年にか卯月六日人々來あひて、拾遺集の歌を兎角言ふに、暮れて雨降り出で、いとしめやかに更けゆく頃、時鳥の音づれけるに、昔、今宵貫之主……、

こと夏はいかゞ聞きけむ時鳥今宵ばかりはあらじとぞ聞く

と……折にあへたれば、誰も〳〵あはれがりて詠めける序に、

今もその折を忘れず來鳴けども山杜鵑聞く人ぞ無き　　涌蓮法師

返し

古の初音も今日の時鳥折を忘れず聞く人もあり

などは其の一例である。涌蓮はまた畫を能くしたものと見える。同じく六帖詠草には、「涌蓮上人畫、おくて田もる庵あり。」や、「涌蓮上人のかける繪に。」なども見えて居る。安永三年(二四三四)

三月二十八日に歿した。

彼の歌風に關して、伴蒿蹊は其の著、近世畸人傳卷三に次の如く記して居る。

詞を飾る事もなく、思ひにまかせたるが、かへりて眞率、人の及ばぬ所ありき。

思ひにまかせて詠む主張は上田秋成などとも共通である。然し其の歌格は秋成と異なつて、蘆庵と殆んど同類である。但し蕪村の影響を多く受けて居るのであらう。語彙等は蘆庵の如く自由奔放ではない。

家集はその住んだ庵の名を採つて獅子巖集と名づけた。涌蓮は生前一首だに記して置かなかつたのを、歿後に多くの知人の中から拾集して一卷としたのである。文化五年（二四六八）文月の序を添へて出した。

次に其の歌を掲げて見よう。

鶯の涙のつらゝいつしかと解くる初音に春を知るらむ

里の子は若菜摘むなり足引の山田の冰今やとくらむ

影うつす花の鏡と咲きしよりちりも曇らぬ梅の下水

梅が香や苔の袂にとまりけむ人の咎むる春風ぞ吹く

龜の尾の山の岩根の初わらび千代を數ふる手に似たるかな

山風はいたくな吹きそ櫻花うつろふ枝は脆くこそ散れ

これらの例は當時の堂上派の風であり、涌蓮の詠にこの類が少なくないのは、即ち冷泉爲村などとの關係に依る事と思はれる。

長閑にも吹く朝風の匂ひ來て梅盛りなる春の山かげ

五月雨ははるゝと見えて行く雲の絶えまに月の影ぞほのめく

涼しくも露うち散りて吳竹の葉分けの風に月ぞ漏りくる

影殘る入日の岡の花薄まねくや草の袂なるらむ

小山田の笹の假庵に露散りてもる袖寒き秋風ぞ吹く

の如きものは集中見るべきものの一例であるが、客觀的敍景に主觀の色彩が濃く表現せられたものが多い。

要するに心のまゝに詠んだとしても、彼の歌には堂上風の調を通じての心のまゝである。其れにたゞこと歌の思想の影響をも受けて居るものであらうと思はれる。

雲錦翁家集

賀茂季鷹は賀茂神社の祠官である。本姓は山本氏。正四位下安房守に任ぜられて居た。其の居を雲錦亭と號し自ら雲錦翁と稱した。初め有栖川宮幟仁親王の門に入つて詠歌を學んだが、後には江戸に出て橘千蔭と交はり、學も亦大いに進み、又諸侯にも出入し、名聲次第に高くなつた。同時に和歌の揮毫を乞ふ者も亦多く、樵夫、漁人をも導いたと言ふ。又狂歌をも能くし、何れにも門人は多かつた。和歌和文の門人としては安田躬弦、松田直兄、川本公輔などが著明であり、富士谷御杖、小川布淑、岡本保孝とも交はつて居た。天保十三年(二五〇二)九月に歿した。

徳和歌後萬載集に見える彼の狂歌一首を掲げて見る。但し彼は狂名を用ゐなかつた。

初春大食の人を見て、

初春にあがつた飯の多ければ一座は除日驚かしけり

雲錦翁家集は彼が八十歳に近づいた天保二年(二四九一)二月の末に、門人長治祐義が、舊歌稿を乞ひ受け、やがて整理して、鈴木春蔭や菅原雪臣等の跋をも添へて世に出したものである。尤もそれより三十年許り前にも一度計畫したが、許されなかつたのであつた。

季鷹には國文の校註書などあるが、歌論を特に述べたものは見えない。但し其の歌風は涌蓮なとと類した堂上風のものが多い。

玉簾明くるも知らぬ枕よりあとより薫る窗の梅が香

咲きぬとは告げぬものから梅の花こてふに似たる風や吹きけむ

思ふどちそこととも言はずあくがれし春の山路の家づとぞこれ

やよや鳫花なき里に住みぬとも見捨てむ空の月の影かは

山の端はよし逃げぬとも如何にせむしのゝめ近き秋の夜の月

月かげを置き惑はせる霜かとて拂へば薫る露の白菊

蛩の刈るめくはすのみを賴みつゝいつまで我が身うみ渡るらむ

これらは稍本歌取に近い技巧であるが、此の如き詠の少なくないのを見ても、彼の歌風を大體推察する事が出來る。古今集等を目標とする堂上風の調となつて、技巧的の方面は見るべしとするも、單に部分的の修飾の如きもので、それによつて却つて一首の生命力を薄弱にする嫌ひ無きにしもあらぬものである。要するに全體の生命が、部分的裝飾の犧牲となる傾向のものを認めざるを得ない。蓋しこれは堂上風に一般の習慣であるかも知れない。然し中には堂上風の歌に見ない

境地を歌つたものも見えて居る。

巣だちせぬ軒の雀を捕り飼ふとあなかま騒ぐ里のうなゐ子

少女子が扇の風に醉きつゝなかく高く行く螢かな

この外に、

緣そふ籬の竹の茂みより風の見せたる月の涼しさ

秋なれや雲のはたてにほのめくも光異なる三日月の影

露の身をおく許りなる草の庵に宿借る月の影の靜けさ

いたづらに招くと見てし武藏野の雄花が末に出づる月影

與謝の海や松吹く風に霧はれて月澄み渡る天の橋立

隈となる木の葉は風にはらはせて獨り影澄む冬の夜の月

要するに知的な歌が多い。從つて敍景の歌も說明に傾く點はあるが、敍情的の歌には技巧の知的聰明を見せたものが少なくない。此の點に於て戀や賀等の歌に出色のものがある。

見せばやな人の心の秋風にあへず亂るゝ袖の夕露

戀ひわびてはれぬ心のうき雲は夕に歸る山だにもなし

言の葉も散り失せぬのみか萬代の聲も常磐の園の松風

この外の例は今省略するが、言はば學者の歌であるとも言ひ得よう。

柳園詠草

石川依平は遠江の人。通稱は爲藏、初めの名を方救(ヨリヒラ)と言ひ、後に依平と改め、柳園又は柵が本と號した。家にある木によつたものである。父の稱を嗣いで惣太夫とも言つた。

少年時代から和歌を好み、六歳の時既に成人の如き佳調を詠んだ。領主掛川侯は江戸に在つてこれを傳聞し、其の年十月、川千鳥、野冬月の二題を賜はつた。乃ち掛川の城に召されて當座に

川浪の音も寂しき夜もすがら友呼び交し千鳥鳴くなり

風寒し野邊の千草は枯れはてて霜に冱えゆく冬の月

と詠んで奉り、色紙短冊等を賜はつたと言ふ。

又七歳の時の事である。大和の郡山侯が江戸に上る途次、この村を通り、一民家に少年が窗前の机に倚つて居るのを見て、その故を問うた。少年は歌を考へて居ると答へたので、感じて其の父に會ひ種々の物語をした。其の時少年の詠んだ歌は宇津の山と題し、

吹く風の音もはげしくうつの山木の葉に埋む蔦の細道

と詠んで奉つた。郡山侯は感嘆して、

いとけなき心にかくる和歌の浦のなみ〳〵ならぬすさびをぞ思ふ

と懐紙に書いて賜はつた。

同じ年のはじめ、有栖川の姫宮が掛川にお宿りになつた時、御前に召され、冬戀、寄鶴祝の一題を詠ませられた。

思ひきや細谷川の薄氷とけても袖の濡れまさるとは

榮えゆく松の緑の色深み千代を重ぬる鶴の毛衣

はその折のものであると言ふ。

九歳の頃郡山侯の周旋によつて冷泉家に入門する事となり、父と先づ郡山侯を訪ひ、侯の前で梅の題で、

咲きしより朝露かけて庭の面に色もはえある梅の白妙

と詠み、更に二見浦で、

白波も岩に砕けて玉櫛笥二見の浦に春風ぞ吹く

と詠んだ。

當時參府の大名等に知られて歌を奉り、物を贈られる事が屢あつた。

十五歳の時掛川侯に召されて、七夕琴の題を賜はつて、

七夕の逢ふ夜の琴は千萬の秋をかけてや調べおきけむ

と奉つた。

其の後、本居宣長の玉霰を見て感奮し、遠江平尾村なる廣幡八幡宮の祠官栗田土滿の門人となり、これから國學に志し、後又宣長の門に入つた。土滿は岡廼屋と號し眞淵の門人である。かくて其の名の高くなるに從ひ、四方の歌人、學者等の來訪する者多く、或は數日、中には數十日も逗留する者もあつたが、常に優遇して倦厭の色は無かつた。門人亦三百餘人に及び、掛川侯からは終身二人扶持を賜はつた。安政六年(二五一九)九月四日歿した。時に年六十九。

其の交友には伴信友があり、近藤芳樹、加納諸平とも好かつた。殊に諸平は、もと同國白須賀の人夏目甕麿の子たりし故を以て、弱年から交誼も厚く、諸平の鰒玉集には依平の歌も見えて居る。

彼の歌論として特に傳ふべきものは無いが、本居宣長の所謂和歌は物のあはれを詠むものとな

す論、卽ち情趣が和歌の根柢たるべしと言ふを繼承した樣に見える。從つて其の歌風も自ら宣長に類するものがある。一般に優雅溫藉な詠を殘して居る。

鶯は塒にかへる夕ぐれの軒ば寂しく春雨ぞ降る

山もとのあふち花散る朝雨に聲もこぼるゝ杜鵑かな

みづ枝さす庭の椎の追風に影さへ香る夏の夜の月

露すがる玉ぐしの葉に照る月の光も淸し神の瑞垣

賤の男がをしね刈り干すはての上の夕日にそゝぐ村時雨かな

荒磯に碎くる波の月影を翅にかけて鳴く千鳥かな

ものゝふの命を露と爭ひしあら野の末に秋風ぞ吹く

古里の軒もる月のさやかにも君が御影を忍ぶ夜半かな

優雅な中に纖細な感覺をも表現し、部分的技巧よりも全體の格調に於て、自ら一家をなすものと見てよからう。此の點は宣長と等しく新古今風を庶幾したものと見られる。萬葉集に關しては萬葉集三山歌稿や、萬葉集新採百首續編なども著はし、又門人には萬葉集新採百首などを講じたけれども、萬葉調は殆んど彼の詠にない。只、萬葉集中の語彙が時にその歌に見える位である。

赤駒の腹ばふ野べとなりにけり昔知らしし長岡の宮

見れど飽かぬ繪島の浪を浦なれし蜑は幾年袖にかくらむ

これらは其の一例に過ぎないが、長歌は萬葉假字を用ゐて萬葉風の詠である。

要するに彼の歌は優雅纖細であり、敍情の歌すらも景情相融合して詩味横溢したものである。只平淡な說明的、主觀的に偏したものとは自ら選を異にして居る。

言の葉の花は都に殘しおきて身をばまかする須磨の浦風

影消えし都の空の秋の月忍べば今も霜曇りして

寢覺して思へばはかな夢の間に我が世も今は曉の空

今は我小萩のゆかりさし添ひて大方ならぬ袖の露かな

露わけてとふも甲斐なき草の原身にしむ秋の初風ぞ吹く

君まさで三度袂を濡らしけり花散る頃の春雨の空

何れも洗練せられたものである。彼の特色は其處に存するものと言ふべきであらう。

良寛歌集

僧良寬は、越後三島郡出雲崎町の人、寶曆八年(二四一八)に生まれた。その生地には近年、良寬堂が建立せられて居る。俗姓は山本氏、世々橘屋と號して出雲崎の名族であつた。日野中納言資朝が佐渡に流謫の際、其の家に宿泊したと言ふ。父は泰雄と言ひ又伊織とも稱し、薙髮して以南と號し、國典に通じ、又暮雨庵曉臺とは俳友であつた。良寬はその長子である。

良寬は、幼名を榮藏と言ひ、又文孝と改めて、西蒲原郡地藏堂町なる大森樂に學んだ。樂は字を子陽、號を狹川又は少翁と稱し北越四大儒の一人である。其の後、安永四年(二四三二)尼瀨町(現今は出雲崎町に合した)光照寺の破了和尚に就いて剃髮し、自ら良寬と言ひ、大愚と號した。同七年五月、備中の玉島圓通寺の國仙和尚が巡錫の途次、光照寺に寓したのに會ひ、その德を慕うて玉島に隨行し、居る事約二十年。寬政七年(二四五五)歸鄕した。時に年三十八。

少年捨レ父奔二他國一　辛苦描レ虎猫不レ成　箇中意志人倘問　箇是從來ノ榮藏生

は、後年の追憶である。其の後、西蒲原郡國上(クガミ)山の國上(コクジヤウ)寺を中心として托鉢を事とし、國上山下なる五合庵及び乙子神社社側に十餘年間住んだ。五合庵とは蓋し若干の粒米にて能く飢を凌ぐに足るの意であらう。庵中には只擂鉢と德とあるのみ。閑暇にも併せ用ゐて居た。春秋には山下の村に托鉢し、寒暑には出ない。時には數日閑臥して書を讀む事もある。或

は酒を携へて訪ふ者があれば、歡然對酌し、興に乘じては詩を賦し歌を詠じて唱酬した。若し意に叶はなければ僞り醉うて寢るを常とした。又、山下の村里の群兒と戲れて、倦めば死んだ眞似をし、如何にするも動かない。群兒の去るを見て徐ろに起きて行く。その鉢を忘却する事も少なくない。眞に放逸を以て終止した。但し、その放逸の中にも老いない童心が常に潑剌と動いて居る。本邦の寒山か拾得かといふ風があつた。遠近皆傳へて奇僧と稱し、其の逸話亦極めて多い。

一日托鉢して附近の村に至り、偶々其の家の盜難に會した。其の家では、良寬を誣ひて盜となし、忽ち縛して土中に埋めようとした。良寬は默然として敢て分疏しない。幸ひ來あはせた人に救はれ、纔に釋放せらるゝを得た。其の人は良寬が寃を辯ぜずに默々たりし故を問へば、笑つて言つた。「前世の因果は辯じても無益ぢや。」と。全く大悟徹底して居たのである。

又龜田鵬齋が北遊して江戶に歸つて後、常に人に、「北越の良寬は天下の偉人なり。」と語つた。他日、良寬は江戶に出て鵬齋を訪うた。偶々鵬齋は經を講じて居たので、其の門人は弊衲破笠、恰も乞丐の如き良寬を見て叱つて去らしめた。鵬齋は講を終へてこれを聞き、「必ず越後の高僧良寬ならむ。」と、門生をして追跡せしめたが遂に及ばなかつた。

或は長岡藩主牧野忠精侯にその奇行を慕はれて迎へられようとした。卽ち藩侯は新潟巡視の際

特に駕を其の庵に枉げた。良寛は不在である。村民は爭うて五合庵を掃き淸めて居ると、暫くの後良寛は忽焉と歸來し、「この秋はもう松蟲の聲を聞かれぬ。」と歎息した。旣にして藩侯の駕が至つたが、良寛は坐して一語をも發しない。藩侯は懇切に城下に迎へようと說いたが、彼は唯筆を執つて徐ろに、

焚くだけは　風が持て來る　落葉かな

と書いて示した。藩侯亦强ひて聘せず、厚く勞つて歸つたと言ふ。

恬淡な性質は多くこの類である。故に衣服金錢等を與へる者があれば、辭せずに受けて直に貧苦の人々に施與して惜しまなかつた。この他逸事は、今猶國上、出雲崎界隈に豐富に存在する。

かくて山に居る事二十餘年。晩年には島崎村の人、能登屋元右衞門の別舍に移つて、天保二年(二四九一)正月六日に入寂した。年七十五。同村、隆泉寺に葬つた。

良寛は放逸であつたが内外二典を極め、又書を能くし張懷の逸趣がある。殊に草書は飄逸の妙を極め、鵬齋は歎賞して止まなかつた。詩には聲病を避けず、たゞ言はんと欲する所を言つた、「我詩是レ非レ詩」と言つたが、其の韻致の高遠には及びがたいものがある。其の詩中に題を著けないものの多いのは、寒山集に倣つたのであらう。左に二三を錄して見る。

○

國上山下是僧宅　粗茶淡飯供此身　終年不遇穿耳客　只見空林拾葉人

○

頭髮蓬々耳卓朔　衲衣半破若雲煙　半醉半醒歸來道　兒童相擁後與前

○

仲秋十一月　清曉雲霧收　旭日上青嶂　輝光射高樓　稚子戲門闈
烏鵲噪檐頭　爐燒安息香　端座思好仇　持杖欲焉適　囘首思悠々

弔子陽先生墓

古墓荒岡側　年々愁草生　灑掃無人侍　適見芻蕘行　憶昔總角歲　從游狹水傍
一朝分飛後　消息兩茫々　歸來爲異物　何以對精靈　我灑一掬水　聊以弔先生
白日忽西沉　山野只松聲　徘徊不忍去　涕淚一沾裳

良寛の友、鈴木文臺は嘗て言つた。「良寛に傳ふべきもの三、詩は三隱の妙致あり、書は懷素の遺風あり。歌は萬葉の餘響がある。」と、決して過賞では無い。鵬齋も亦良寛によつて書の妙訣を悟つたと言ふ。

詩集に二種ある。一は草堂集と言ひ、文臺の序を載せて居るが、未だ梓行せられて居ない。他は良寛道人遺稿と稱し、慶應年間に其の徒、寒華子の刻したものである。

歌集には從來、村山半牧、小林逐舊等の梓行したものが傳來し、近年良寛研究の流行と共に全集の如きものも多く出た。本集は國上村の人玉木禮吉氏の良寛全集に據つた。

良寛の歌は恐くその生活の表現である。別に歌論として傳ふべきものはないが、たゞ、人の和歌を問ふ者があれば、萬葉集を讀ましめた。或は其の語の解し難きを言へば、「只、解し得るだけ解し、又思ふ處を歌へ。」と。此の語に彼の歌論と歌風は自ら推察出來ると思ふ。

即ち彼の放逸な生活は最も自然の儘である。虚飾も技巧も無い。天眞爛漫である。童心が其の生活を通じて直に和歌となつたものである。調は萬葉風であるけれども、必ずしも萬葉風を墨守するものではない。只萬葉風は素朴、純眞で、彼の性格と最も融合するものが多かつたのである。即ち其の歌は次の如きものである。

飯乞ふと我來しかども春の野に菫摘みつゝ時を經にけり

朝菜摘む賤が門田の田の畔にちきり鳴くなり春にはなりぬ

歌や詠まむ手毬やつかむ野にや出でむ心一つを定めかねつも

音に聞く樋曾の山邊の紅葉見に今年も行かむ老の名殘に

秋の野に咲きたる花を數へつゝ君が家路に來りぬるかも

飯乞ふと里にも出でずなりにけり昨日も今日も雪の降れれば

越の海野積の浦の雪海苔はかけて忍ばぬ月も日もなし

水や汲まむ薪やこらむ菜や摘まむ朝の時雨の降らぬその間に

良寛に辭世あるかと人問はば南無阿彌陀佛と言ふと答へよ

此等によれば、良寛の生活を想見する事が出來る。悠々自適、更に彼を拘束するものが無い。從つて安逸な生活の中に、天眞爛漫たる人間の本性が現はれて居る。只地方的の物の名などの用ゐられて居る點も却つて自然な感を與へる。ちきりは小鳥である。又、雪海苔とは、所謂淺草海苔の事を、この地方一般に稱する名稱である。地名に關して見ると、野積(ノヅミ)村は國上山の裏、日本海に面する一漁村であり、樋曾は國上から彌彦を過ぎ、石瀨(イシゼ)岩室(イハモロ)を通つて間瀨(マゼ)へ行く途中の峠で、國上からは約一里許りの處にある。

又彼は歌風として人にも萬葉集を推奬したけれども、必ずしも萬葉調を以て終始しない。意の趣くに從つて三代集の風もあり、新古今集の調もある。只心の欲する所に從つた。爲に往々、古

歌の一部又は大部分を其の儘用ゐたものもある、然しこれは強ひて咎むべきものではない。寧ろ其處に僞らざる彼の眞面目を認め得るであらう。

渡守はや船出せぬば玉の夜霧は立ちぬ川の瀬毎に
白妙の衣手寒し秋の夜の月中空に澄み渡るかも
秋風に露はこぼれて花薄亂るゝ方に月ぞいさよふ
岩室の田中の松を今日見れば時雨の雨に濡れつゝ立てり
この夕秋は來ぬらし我が宿の草の籬に蟲の鳴くなる

かかる四句切二句切や、代名詞「この」の出現、及び直覺的の萬葉調は集中に少なくないが、又

來て見れば我が古里は荒れにけり庭も籬も落葉のみして
山かげの垣根に咲ける卯の花は雪かとのみぞあやまたれける
もみぢ葉の散る山里は聞きわかぬ時雨する日も時雨せぬ日も
今日別れ明日はあふ身と思へども計り難きは命なりけり

これらは三代集調のものである。かの、

里は荒れて人は古りにし宿なれや庭も籬も秋の野らなる（古今、秋上）

三吉野の山邊に咲ける櫻花雪かとのみぞあやまたれける（古今、春上）

木の葉散る宿は聞き分く方ぞなき時雨する夜も時雨せぬ夜も

今日別れ明日はあふみと思へども夜や更けぬらむ袖の露けき（古今、離別）

などから自然に詠み出されたものである。

長歌亦彼の得意とする處、若しこれを具體化して言へば、繪畫的では無くて音樂的である。即ち赤人の亞流では無くて人麿の亞流と言はうか。

冬ごもり　春さり來れば　飯乞ふと　草の庵を　立ち出でて　里にい行けば　玉鉾の　道の巷に　子供らが　今を春べと　手毬つく　ひふみよいむな　汝がつけば　あは歌ひ　あがつけば　汝は歌ひ　つきて歌ひて　霞たつ　長き春日を　暮しつるかも

霞たつ長き春日に子供らと手毬つきつゝ今日も暮しつ

此の外旋頭歌、今樣、狂歌、俳句等も時につけて詠んだのである。

要するに良寛は其の詩、其の書、其の歌、共に異彩を放ち、後半年に於ける其の生活、また脱俗、超塵の風があつた。遐僻の山野に居て、從來は鄕人にすら一奇僧とのみ見られたに過ぎなかつた。所謂蛟龍蟄伏して人の識る無き者であつた。然るに近年漸く其の眞價を中央に認められた

のである。實に放逸天眞なる偉僧であつた。

最後に集中に見える「岩室の田中の松」に就いて一言しよう。この松は石瀬村と岩室村の中間にあるが、郷人は寧ろ「石瀬の松」と言ふ。今日は全く枯れて居るが、支柱によつて昔の儘に保たれて居る。この松に關して「石瀬のお松」として次の說話が傳へられて居る。

昔このお松が上方詣りをして宿屋に泊つたが、宿料が二百文不足した。それだけ借金して、さて歸りに宿の主人に言つた。

「私は越後の國蒲原郡の石瀬と岩室の間に住んで居るお松と申す者です。あちらへお通りがゝりの節は、左樣に聞いて尋ねて下され。お金は其の時お返し申します。」

他日、上方の宿の主人は新潟へ所用あつて來た。序に岩室に來て、お松は木であると聞いて大變驚いたが、敎へられた木の下へ來て見た。すると手の屆く程の枝に二百文の錢がつるされてあつた。宿屋の主人はその奇特を稱へて歸つたと言ふ。

これが良寛の頃にはまだ鬱蒼たるものであつた。

解題　終

六帖詠草

小澤蘆庵

四方の海浪をさまり、七つの道往きかひ安らなる、御代のいつくしみをかうぶりて、文のをしへいたらぬ隈もなくなりにたれば、大みくにぶりに心をよせぬ人やはある。それが中にも、小澤のおきな蘆庵といへるなむ、若きより此の道にふかく入りたち、老に到るまで詠める歌の、いとも多かめるを、かいつめたる卷々も、おほかたの人には見せずして、筐のうちにひめおけるを、おのれこの學びするとて、たいめせしついでに、年ごろの集をと、せちに求めしに、翁いへらく、なべてはいとあまたにて、いたづらなめれば、みつが一つばかり書かせて見せ參らせなむとて、此の六帖の詠草を贈られき。さるをこたび梓に刊らせておなじ流れ汲むともがらの、筆の勞たすけてよといふ人のあなるにまかせ、校じ合はすることを、小川布淑前波默軒などにあとらへて、板にはつけさせぬ。もとよりまたき物にしあらねば、もれたるにもよかなるが猶あべけれど、わが見ぬをばさておければ、つぎて補ふ人もありなむ。おのれもの〻ふの道を、もはらにすめる家にうまれて、かうやうのみやびわざにたづさはるも、をさまるみよのたまものと思はざらめや、いは

○四方の海云々　天下太平の意。
○七つの道　東海、東山、北陸、山陰、山陽、南海、西海の七道。
○大みくにぶり　大皇國振、和歌。
○小澤のおきな　小澤帶刀、名は玄中、號は蘆庵、観荷堂、歌を冷泉爲村に學び後破門された。享和元年七月十一日歿、年七十九。
○かいつめたる　かき集めた。
○たいめせし　對面した。
○小川布淑　小川雲、字は布淑。蒿蹊に詩流を習す、蘆庵の門下で蘆門四天王の一、文政二年二月歿、年六十五。
○前波默軒　前波黙軒、蘭園亭と號す。蘆門四天王の一、文政元年十二月十日歿、年七十四。
○あとらへて　註文し依頼して。
○板にはつけさせぬ　板に起させ剞劂に附せしめた。

○平ののぶ愚　織田信憑、丹波氷上郡柏原の領主、封禄二萬石。蘆庵と親交があつた。
○文化とあらたまれるとし云々　文化元年十月。

ざらめやと、平ののぶ愚筆をとりてかくしるすは、文化とあらたまれるとしのかみな月にてぞありける。

○ふるとしに春たつ日　古今和歌集巻頭の春の歌「年のうちに春は來にけり一年をこぞとやいはむ今年とやいはむ」を思ひ寄せた作。二十四氣の一なる立春が、陰暦では年内に來る事があるのだ。
○かすみを　前作と同じく「ふるとしに春たつ日」の題あるを畧したのだ。
○日かずをこめて　年内に日數を繰り上げて。
○としの日數はつきなくに　年内の日數はまだ殘つて居てなくならないのに。
○此の月のそはずは云々　此のうるふの十二月が加はらなかつたら正月に例年より遲く春が來るのであつたのに。
○手にむすぶ云々　古今集紀貫之の歌「袖ひぢてむすびし水のこほれるを春立つ今日の風やとくらむ」の聯想。

六帖詠草　春

春歌

ふるとしに春たつ日梅を見て

年のうちにはるきぬめりと梅や咲くうめさけりとて春やきぬらむ

かすみを

年のうちに日かずをこめてあら玉の春の霞はたな引きにけり

年内立春

かぞふればとしの日數はつきなくに花まちつべき春は來にけり

さらでだにとまらぬ年を急がせて殘るひかずも春になしつる

うるふ月ありけるしはすのなかばに春の立ちけるを

此の月のそはずはむつき常よりもおくれてきぬる春ぞといはまし

ついたちのあした手あらふとてよめる

手にむすぶ水もぬるめりいづくにもけさは春風冰解くらむ

とし明けなむとする曉からすの鳴きたれば

くる春をまつのとぼその明ぐれにとほ山がらす一聲の空

試筆とてよめる年々の歌の中に

けさよりはよし野の山の春霞誰が心にもかゝりそむらむ

人ならばなしといはましを蓬生のけがしき宿に春はきにけり

今ぞ知る老もわかゆといふなるは春たつけふの心なりけり

岩戸いでし光もかくやあら玉の春にあけゆくしのゝめの空

除夜に雪ふりてのついたちのあした

ふりにける夜のまの雪はあら玉のとし立ちかへる今朝のはつはな

岡崎のいほりにすみて三年といふ春にあひて

明けそむる野山のけしきうら／＼とこゝに三度の春をむかへつ

ふるとしより鶯のなくをついたちにも聞きて

ふるとしに聞きし鶯それながらあらたまりぬる初春の聲

としあくるあした雨ふりていとのどかなりけるに

いとはやもふるとし遠き心ちして雨にかすめるけさの初春

岡崎の近きわたりなる寺々へ百首歌奉らむとて人にもよますする時善正寺に奉る立春のうた

○まつのとぼそ　待つと松とをかけた、とぼそは後世扉の意。
○明ぐれ　明はとぼその縁語。
○試筆　新年の書き初め。
○かゝりそむらむ　心にかゝると山にかゝるとを掛けた。
○けがしき　穢らはしき。
○わかゆ　若やぐ。
○岩戸いでし　天の岩戸を出でた
○かくやあら玉の　かくやあらんにかけた。
○除夜　陰暦十二月三十日の夜。
○岡崎　京都鴨河の東北、當時は郊外であつた。今岡崎町。
○岡崎の近きわたりなる寺々　良恩寺、南禪院、善正寺、聖護院、などが存する。
○善正寺　聖護院の東北二丁に在る。慶長元年秀次の母日秀尼の創建、日蓮宗日鏡の開基。善正は豐臣秀次の法名。

けさははや春立ち來らしかぐら岡松風ゆるく霞わたれり

　おなじ題を滿願寺へ奉るには

から衣うらめづらしく立つ春をいのりかさぬる法のこゑ〴〵

　元日立春

あら玉のとしとのみこそ思ひしかおくれずたてる春霞かな

　立春

朝日さすみねのまさかき霞むなり春立ちくらし天のかぐ山

　とし立ちかへる

いにし春見しものぞともおぼえぬは年立ちかへる霞なりけり

　春從東來

此の國も猶ひがしよりくる春をもろこし人はまつや久しき

　雪消氷亦解

けさははや外山の雪ま見えそめてかけひのたるひ半おつなり

　太秦（うづまさ）にすめる時とし明くる曉のかねにつゞきてつゞみうち讀經の聲きこゆ

しらみゆくおまへのほかけ法の聲心すみぬるけさの初春

○かぐら岡　現今の神樂が岡、吉田町の東。
○滿願寺　岡崎町の南、元祿十年日蓮宗日亨の創建、東川通南二條通北。
○から衣　うらの枕詞。
○うらめづらしく　心中に珍らしく。
○おくれずたてる云々　春のみが立つたと思つたのに、遲れず霧までが立つたのは、立つに此の歌の中心がある。としに年と疾しとをかけた。
○まさかき　眞榊、まは接頭語。
○此の國も云々　東方に在る此の日本の國も猶東から春が來るのだ、日本より西に位する支那の人は、一層遲く來る春を長い間待つであらう。
○雪ま　雪の解けたすき間。
○たるひ　垂氷、つらゝ。
○太秦にすめる時　山城葛野郡太秦、[illegible]寺日宗寺の讀[illegible]の寺に住した土地。
○おまへのほかけ　佛前の燈の光

○蜂岡　山城葛野郡太秦の丘、丘に廣隆寺がある、一名蜂岡寺。
○春生人意中　春が主觀的に人の胸中に生ずる意。[illegible]、自然界よりも人の心に早く春の心持が通ふ事を詠じてある。春待つ心が切なるためだ。
○なつみ河　大和吉野、夏身、菜摘などの字をあてる。
○おい木さへ　[illegible]とかけ、若さの若及び老木の老と對照せしめた。大和[illegible]
[illegible]軒と號す、[illegible]歌を[illegible]當時四天王と稱せられた。寛政十一年五月寂。年八十五。
○[illegible]
○いたゞきの雪　頭上の白髪の比喩。
○せうそこ　消息、文のたより。
○消えのこる雪より云々　又一年生き[illegible]、[illegible]雪の降るのを見ようと故人の消息を聞かうとをかけた。

高き梢に朝日のうつるを見て

朝日さす梢のみゆき解けそめて春まちえたる蜂岡の松

春生人意中

春きぬとおもふ心にみよし野の山のかすみはおくれてぞ立つ

待ちつけし人の心の春はまだ花鶯も知らずぞあらまし

春到氷解

山陰もこほりとくらしなつみ河川おとゆるき水のはる風

初春雨ついとのどかなる日

おい木さへめぐみにもれぬ春雨のふる野の若菜いかにおふらむ

澄月法師より七十あまりみつのましたのことほぎとて「春たてばまづものまらうす我よりもそのそこいかに長閑けかるらむ」と聞えしかへしに

春さればまづ咲く花もいたゞきの雪にまがひてのどけくもなし

又あるとしのむつき六日といふに此の老僧よりせうそこして「うらゝなる春に越えけり君も我も老の盛りの花か柳か「消えのこる雪より雪のはじめをであらばや又もふることは見む」「又や見むことしはいたくとばかりの老もわするゝ春のことゝの葉」これのかへし

○もろともにけぬべき　共に消えぬべき。
○ありふるも　世に生きて年月を經る。
○鳥がなく　あづまの枕詞。
○霜雪のふりとふりにし　頭が非常に白くなると、非常に老いしさかけた。
○わかな　老も若やぐにかけた。
○隙のこまはとゞまらず　光陰の過ぐる事速き喩、莊子「人生天地之間、若白駒過隙、忽然而已。」
○あかきかゆくふ日　赤小豆粥食ふ日、正月十五日の風俗。
○なけどもいまだ　古今集卷二「梅が枝に來ゐる鶯春かけて鳴けどもいまだ雪は降りつゝ」
○うたげしらちあげあそぶ　酒宴し大いに遊ぶ。
○心をやる　氣を晴らす。
○句のはじめにおける　毎首の初めに、一字づゝ置いて歌を作る事。
○梓弓　張るにかけた春の枕詞。
○りう俗　世俗の。拾遺集雜歌の「流俗の色にはあらず梅の花、珍重すべきものとこそ見れ」から採つた。

君も我もおいの盛りにほこりなむ柳さくらはもとよりの春

もろともにけぬべき春にありふるもさだめなきよは雪も又見む

やそぢあまりみとせの春をまちつけし初ことのはの花を見しかな

鳥がなくあづまの空のしらむより神代もかくやと天地のけしきもやはらぎ松ふく風もことの外にのどかにて千代よばふ心ちのせらるれば霜雪のふりとふりにし老もさらにわかなうぐひすと見きくものごとにこそのさまはみなあら玉のはるめきたりされど　のこまはとゞまらずあけくれてあかきかゆくふ日になりて雪いとしろう降れるになけどもいまだとぞつぶやかるとしごとに今日はしたしきかぎりつどひ梅をかざしうたげしらちあげあそぶ日なりされぱおもへることをのこさでかたみにいひて心をやるとてあろじのおきなあやしき聲してまづうたふになゝそぢあまりななとせのはつはるのまどゐといふを句のはじめにおけるそが中に

ながらへて見るかひあるは梓弓はるたつ山の霞なりけり

まつ高き風のしらべにのこりける千年のあとの古きよの聲

りう俗の色香ならぬを梅の花など塵の世に咲きはそめけむ

のきちかく咲きぬる梅のこのまより遠山畑にわかなつむ見ゆ

はつ〳〵のわかなや萌ゆとあさるらむ人め見えそむる霜のふる畑

初夜過ぐるころ人々かへりたるに山野を見れば雲晴れて月さやかなるにねられねば布淑はいづくわたりまでかゆきつらむなどおもひやりて

あともなきすざく大路のふるきよを思ひいでつゝ雪や分くらむ

今はかつらにこそいなめとおもふに銀橋を月にわたせるけしきならむかしと思ひて

雪つもるよるのかつらの河はしは月にわたせるみちかとぞ見む

亥のときも過ぎ侍りければ

かつら人いまかかへらむかるもかきふす亥の時もはや過ぎにけり

日のかげすこし暖かなるあしたいほのとに出でたるにしらがの風になびくを雪かと見まがひて

春の日に雪かもちると見えつるはきえぬしらがの光なりけり

よも山のゆきはむら消えたるにひらの高ねは白かねをのべたらむやうに春日にかゞやくを見て

晴るゝ日は雲居に見えて白雪の高ねまがはぬひらの遠山

春日

○はつ〳〵の　わづかな。
○初夜　午後六時と、夜半十二時をさす場合とある、こゝでは前者であらう。
○布淑　序文に見えた小澤蘆庵の門弟の一人。
○すざく大路　朱雀大路、元京都の中央の大通。はやく荒廢して西の郊外となつた。あとは雪の縁語。
○かつら　桂、山城葛野郡桂村。
○亥のとき　午后十時。
○かつら人　地名の桂と月の桂人とをかけた、布淑をさす。
○かるもかき　枯草掻き、猪につゞく語。猪は枯草を掻き集め臥す性があると云ふ。亥刻にかけた。
○しらが　蘆庵自身の白髪。
○ひらの高ね　比良の高嶺、比叡山の北に續く山。

何となくのどけきものは初はるのみどりの空に匂ふ日の影

初春祝道

ゆくすゑののどかに見えて天のみちも正しきみよに春はきにけり

法眼純方より宮の御當座十首の巻頭とて初春霞をやがて詠進すべきよしいひ來れば則ちよみて奉る

淺みどり霞にもるゝ色もなし春立ちくらしよものやま〳〵

初春雪

霞みあへず猶ふる雪もけふよりの人の心の春はうづまず

早春梅

冬かけて吹きそめしかどうめの花春の色香はことにぞありける

春日望山といふことを甲斐權守季鷹がよませしに

春くればいづくの山もひとへ山かさなる嶺もわかずかすみて

子日の心を

春日野にいざといはましを山陰のけふの子の日はまつ人も來ず

はつ子におもふこと侍りて

子の日にも引く人なくてふりにける身をあはれとや松も思はむ

○當座　卽席の題で作る歌。
○甲斐權守季鷹　賀茂季鷹、京都上加茂神社の神官、雲錦亭と號す、天保十二年九月歿、年九十一。
○ひとへ山　他の山と重ならぬ單獨の山。
○子日　正月初の子日に小松引きに行く風俗、支那の踏青の風と、子の日を根のびと考ふる緣起を祝ふ心持から來た。
○まつ人　待つと松とかけた。
○引く人なくて　自分の袖を引く人がないと小松ひくとかけた。

霞

日にそひてさぞなこのめも春霞深くなりゆくみ吉野の山

おなじ題を白川心性寺百首卷頭に

久に經むわがまつ山に萬代の春をこめてぞかすみたな引く

あさがすみ

あさがすみたてるを見ればいつしかとおほつかなみし春はきにけり

山霞を

あさみどりかすみそめてぞあし引の山のかひある色はみせける

朝な夕な慣れても見ずば俤のかすみやはてむ春の遠やま

野山のかすみをめでて

霞たつ野山を見ればひとゝせの加はる老も打ちわすれぬる

杜霞

梢よりかつあらはれて朝がすみやゝ晴れそむる山もとのもり

河上霞

水無瀬川霞のみをのあらはれて一筋深き遠の山もと

水郷霞

○このめも春霞　木の芽の萌ゆることゝ春とかけた。古今集卷一の「霞立ち木の芽もはるの雪降れば」などの用法を攝つた。

○白川心性寺　洛の東北白川に在る寺院。

○おほつかなみし　心でたより無く思ひし。轉じて待ち遠しく思つた。

○かひある　山の峽と、しるしあるとをかけた。

○俤のかすみやはてむ　朝夕馴れ親しんで見なければ、山の容即ち俤うすくなつてしまふと霞むとをかけた。

○かつあらはれて　一方では現はれて。

○水無瀬川　攝津三島郡、大澤山尺代山より發し淀川に入る。

○霞のみを　霞の水脈、霞のたなびいて居るのを流れと見た。

一筋のかすみのうちや久世(くぜ)かつら梅津大ゐのあたりなるらむ

湖上霞

唐崎の心あてなるひともとの松もほのかに霞む浦々

海霞

かぎりなき青海原に立ちわたる春の霞や天のうき橋

霞春衣

花鳥をあやにおりはへ春のきる霞の衣いくへたつらむ

立ちそめし春の霞のうすごろもひをかさねてやそふ色も見む

羇中霞

春ふかみ分けこし嶺の朝な〳〵霞にきゆる跡のとほ山

定静が阿波國よりのぼりて都に十五年の春を迎ふるよしいひて「淺緑かすみの衣たちかさね猶こゝのへの春にあひぬる」とよめるかへしに

十年あまりいつなれぬとも思はぬに霞の衣さや重ねつる

いたくかすめる日松のむらだちたるを見て

時わかぬ松の煙もかげろふのもゆる春日ぞ立ちまさりける

鶯

○久世かつら云々　久世は山城乙訓郡、訓世とも云ふ。かつらは桂で前出、梅津は同葛野郡梅津。大ゐは同葛野郡の大堰河。

○おりはへ　長く織り續けて。あや、いくへ、たつ、皆衣の縁語。

○ひをかさねて　日を重ねてと、かさねは衣の縁語。

○こゝのへ　九重、帝都。たちかさねと共に衣の縁語。

○さや　さらに。

○時わかぬ　四季を區別せぬ。

花になく心の色もおのづから音にあらはるゝ春のうぐひす

何事のはらだたしかる折にしも聞けばゑまるゝ鶯のこゑ

初　鶯

やがて此の垣根や古巣けさよりの春つげそむる宿の鶯

早鶯猶若

心とく春告げ初むるうぐひすもまだ舌だみて聲の聞ゆる

朝ごとになくを

朝ごとに來啼くうぐひすきなけ猶春知らぬ身も春と知るべく

山家鶯

山かげや柴のあみ戸をあけさして初鶯の聲をこそきけ

名所鶯

春寒きくらまの山のうぐひすはたどる〳〵や雪になくらむ

あるゆふぐれに

鶯はそこともいはず花に寢て古巣の春や忘れ果つらむ

鶯聲和琴

雪寒き梅が枝うたふ琴の音に來る鶯聲あはすなり

○花になく云々　古今集序の「花に鳴く鶯」によつた。

○舌だみて　聲が濁つて。或は訛つて。

○くらまの山　京都北山の一部、鞍馬と晴朗とかけて、たどる〳〵と云つたのである。

○そこともいはず　何處と定めないで。

○梅が枝うたふ　梅が枝は琴唄の曲名。鶯に縁が深いから、聲あはすと續けた。

うづまさ寺にて鶯のなくを聞きてむかしかでの小路の家の松に朝ごと時もたがへず鳴きける事などおもひいでて

鶯のなく聲きけばいそのかみふりし都の春ぞ戀しき

鶯語漸々稀

鳴きとめぬ花の梢はうぐひすのまれになりゆく聲にこそ知れ

野若菜

末遠き春野のわかなかぞふれば摘むべき千世ぞかぎり知られぬ

わかなつむ人につかはしける

春の野に出でてといふ句を

たのむなよ若なといふはなき名にて年つむごとに身こそ老いぬれ

年ごとの春の野に出でて摘みつれば若なや老の數を知るらむ

古今集のことばをいれて春の歌よむとて

春日野のとぶひの野守老いぬらし幾代の春の若菜摘みつゝ

雪中若菜

つむことのかたみの若菜それをさへ惜しとや雪の降りかくすらむ

むつき末つかた雪のふる日いかにふるやとかみさうじあくれば軒あさき

○うづまさ寺　太秦に在る廣隆寺眞言宗、推古帝十一年聖徳太子開基。

○いそのかみ　古の枕詞。

○若なといふはなき名にて　若やぐ菜といふのは事實のない名であつて。

○年つむごとに　年を重ね積むと、若菜摘むとかけた。

○古今集のことばをいれて云々　古今集卷一春歌上の「春日野の飛火の野守いでゝ見よいま幾日ありて若菜摘みてむ」を用ゐた。

○かたみ　筐と形身とをかけた

○かみさうじ　紙障子、あかり障子ともいふ、現今の障子。

いほにて爐邊にもさながらつもるべくおぼえければ

風さえて猶うづみ火のあたりまで春としもなく雪ぞ吹き入る

いたく寒き夜

春寒み猶きさらぎのあつぶすまかさねて四方の嵐をぞきく

二月餘寒

ともすれば花にまがひて散る雪に梅が香寒き二月(きさらぎ)の空

餘寒月

更け行けば猶かけ寒し春の月かすむと見しや雪げなりけむ

のどかなる日松風を聞きて

松にふく春風ぬるくなりけりいづくの山も雪はのこらじ

春草

いづれをかあはれとは見む朽ちのこる霜のふるはもこぞの若草

雪はまだきえも果てぬを野べははや薄緑なる春の若草

春草短

おひまじる昔のみどりもわかぬまでまだはつかなる春のわか草

梅

○猶きさらぎ　きさらぎは二月の異名、着更着にかけて、寒いので猶重ね著する意に用ゐた。
○かさねて　衣を重ねること、春になつたのに又再びの意にかけた。

○おひまじる　まざつて生えた。

日のめぐる南の枝の霜どけにぬれてほゝゑむ梅の初花

見し夢はあとなき花の下ぶしに梅が香深きかたしきの袖

太秦にてむ月六七日の頃軒の梅こゝかしこ咲きたるを

かりそめに香をとめてこし花のもとになれてみとせの春もへにけり

梅にそへて布淑が「鶯のねながらとまで君がため思ひ折りける梅の枝ぞこれ」といへるかへし

うぐひすのあかで別れし花の枝(え)をとひかも來べく匂ふ梅が香

夕梅といふことを

花の色はたそがれ時の垣ねみち行き過ぎがてに匂ふ梅が香

闇夜梅の繪に

にほふより木立ながらに思ひやる心のうめは闇もかくさず

ある人の讃をもとめし梅のゑを打ちおきしに見出でて

うゑしよりいつしか見むと思ふまに年も立枝(たちえ)の梅咲きにけり

雪中梅

ねたしとて花をば雪のかこふともいかゞはすべき匂ふうめが香

梅度年花

○かたしきの袖　片敷きの袖、一人寝る意。

○鶯のねながら　梅に宿り啼く鶯の音も共に。

○木立ながらに云々　梅の香にその立木まで共に聯想し心に描く梅は、闇もかくさない。

○打ちおきしに　打ちすて置いたのに。

○立枝の　年月のたつと、立てる枝とをかけた。

○玉くしげ　ふたの枕詞。
○座主宮　仁和寺宮か、明記しないので蘆庵の傳記に皆單に宮としてある。蘆庵が召されたけれど拜辭して赴かなかつたので、宮自身彼の庵を訪はれ、以來贔屓にして伺候したと云ふ逸話がある。
○みその　見ると御苑のみとをかけた。
○咲きぬやと云々　咲いたかと人も訪れるであらう、であるから風よ梅の香を垣の外へ誘ひ出して、人に知らして呉れるなよ。
○人をもわかず　人を區別せず。
○友すり　共擦り、互にすり合ふ事。茲では梅の枝が互にすれて。
○伏見山　山城紀伊郡、伏見町の東、最高所を桃山と云ふ。
○荷田何がし　荷田氏は伏見稻荷神社の神官の家。

梅ならで何の草木か玉くしげ二とせかけて咲きにほふべき

座主宮より春風先發苑中梅といふ題にて歌めされけるに

こと木には吹くともわかぬ春風をけさぞみそのの梅の初花

野　梅

さしてゆくかたもなけれど香にめでて梅さくのべは遠く來にけり

閑庭梅

咲きぬやと人もこそ訪へ梅が香を垣ねの外に風な誘ひそ

梅薫袖

見ぬ人のためとて折れる梅なれど花のにほひは袖にこそしめ

梅香留袖

梅が香は人をもわかず日を重ね立ちよる袖ぞふかくしみける

風揺白梅朶

冴えかへる風の立枝の友すりに花ぶさながら梅やちらまし

伏見山の梅さく頃はかならずとひてむとちぎり侍りけれど久しくかぜのこゝちにわづらひ侍るほどに頃も過ぎぬなりと聞きて荷田何がしがりいひ遣はしける

さく花のあたりをいとふかぜのまに契りし梅の折も過ぎぬる

紅梅の木たれたる縮をもて來て讃をこふに見ればその枝に短尺を付けたりそれに

紅は人の目につく色ぞかしあまりこたれてあだに折らるな

柳

青柳のいとへだてても見つるかなよりきては猶まさるみどりを

門柳

春來ればさせることなき賤がやの門の柳のいともめづらし

春くれば人ぞとひけるかくれがの門の柳のいとはしきまで

鄰柳

青柳のいとをとなりに見る宿は思ひかけずぞ人にとはるゝ

川柳

かげひたす川べの柳風ふけば水のみどりの色ぞわかるゝ

岸柳

川風になびく霞の絶間よりかつ見えそむる岸の青柳

柳絲綠新

○こたれて　木垂れて、木が生ひ延び垂れて。

○いとへだてても　非常にと柳の絲とをかけた。

○よりきては　絲を縒ると寄るとをかけた。

○いともめづらし　柳の絲と非常にとかけた。

○いとはしきまで　柳の絲と厭はしきとかけた。

○思ひかけずぞ　思ひがけないと、絲を掛けるとをかけた。

あら玉の春のやなぎの淺みどりいとくりかへし幾よへぬらむ

柳の繪に

淺みどりよりて見ぬまに青柳のいと深くこそ春もなりぬれ

早蕨

都人とはずば春もつれ〴〵とひとりやをらむ嶺のさわらび

うづまさにて庭のわらびもえいでぬる頃

足曳の山の櫻は咲きぬやと垣ねのわらびをり〳〵ぞ見る

やよひ初めつかた仁和寺わたりの花見てならびの岡にやすらひたるに雨降り出づべくおぼえければ立ちかへるに母のすき給へれば蕨をとりてかへりつさきのさがのかへさにもたづさへかへりしなどおもひ出でて

西山の花見てかへるをり〳〵のつともかはらぬ嶺のさわらび

桂より布淑が「かつら鮎とると出で立つ道のべのわらびをさへにけふ奉る」とて二くさおこせたるかへし

かつら鮎かはべのわらびとり〳〵にをりを過さぬ春の音づれ

春月

暮ふかく霞こめたる花の色もほの〴〵見えてにほふ月影

○くりかへし　絲を繰り返すと、年の繰り返し來るとかけた。

○をり〳〵ぞ見る　わらびを折ると時々とをかけた。

○仁和寺　山城葛野郡花園村御室にある眞言宗の寺、大内山仁和寺、光孝帝の勅願、宇多帝建立。

○ならびの岡　仁和寺の南にある丘。舊京都西京極の西。

○さが　嵯峨、山城葛野郡嵯峨村、京都西方の郊外。

○西山　愛宕山一帶、京都西方の山の總稱。

○つと　家づとの意、土產。

○二くさ　二種

○をりを過さぬ　機會をのがさぬ

去年よりもかすみそひつゝ春ごとにわがよのふけをみする月かげ

中空に見るかげよりも春の月いづさいるさは猶ぞかすめる

江春月

そことなく夕しほみちてかすむ江の春のみるめは月にこそあれ

春雨

春雨のあやおる池は時わかぬ水のみどりもそふかとぞ見る

梅柳のさかりに雨のふる日

梅かをり柳けぶりて絲雨のつれ〴〵とふる春の日長さ

朝に庭の面しめりて雨ふりしけしきを見て

ふるとしも知らで寢し夜の春の雨をあけて見るこそのどけかりけれ

小雨ふる夕暮からすのなくを聞きて

小雨ふる春の夕の山がらすぬれてねにゆく聲ぞ寂しき

雨の音のすれば櫻の梢いかならむとて

春雨の音きく度に窗あけて軒の櫻のこの芽をぞ見る

遊絲

春の日のゆた野のはらに遊ぶ絲のいつ暮るべくも見えぬ空かな

（わがよのふけ）我が身の老いと夜の更けたのをかけた。

○いづさいるさ　出るきは入る際

○春のみるめは　見る目と、海草の海松布（みるめ）とをかけた。

○ゆた野　湯田野、諸方にあるが玆では伊勢度會郡有田村をさす。ゆたかにかけた。

○遊ぶ絲　遊絲、陽炎。野に遊ぶとかけた。

○いつ暮るべくも　何時暮るべくと、絲を繰ることにかけた。

○常にもがなと　永久に生きたいと。
○一年はわすれて立ちもおくれなむ　一年位はたまには、歸るのを忘れて出發も遲れてよからうのに
○別れがたみや　別れ難くしてや
○とひすてて　一寸問ひしまゝ去つて。
○よぶこどり　郭公鳥の異名かと云ふ。
○よぶこの山　肥前東松浦郡呼子をさすか。

春曙

露の身を常にもがなと思ふまで心ぞとまる春のあけぼの

歸雁知春

一年はわすれて立ちもおくれなむかすめばかへる春のかりがね

春曙雁

行くかりも別れがたみや音に鳴きてかへりみすらむ春の曙

夜歸雁

春の夜の夢の枕をとひすてて闇のうつゝに歸るかりがね

いとあたゝかなる日かげにありて打ちねぶるにけぢかくきじの鳴くを聞きて

人めなき垣ねのきゞすねになきて春の眠りをおどろかしつる

よぶこどり

いづこぞやよぶこの山のよぶこ鳥霞がくれの夕ぐれの聲

ひばりを

霞わけ今かおつらし夕雲雀はるかに聞きし聲の近づく

雲雀落

野べ近き垣ねに牀やしめつらむかすめる軒にひばり落つなり

春駒

のるこまのうらやましとやいばゆらむとりもつながぬ春の野飼を

花の歌

一年の花てふ花をつくしてもさくらにたぐふ色やなからむ

長閑なる頃しもさきて疾くちるぞ花のめでたきいはれなりける

あだなりと花やかへりて思ふらむ常なき色にそむる心を

みやづかへせし時殿にて常にある所の軒端の花のさかりなるに人々の大きなる枝どもおろしてとり〳〵あかれゆくにおもひしこと

折らでたゞかくながらみよ庭ざくら風のさそふも惜しくやはあらぬ

こゝかしこ花咲きたりときく頃雨風のはげしきに

咲き初めてさかりまだきに雨かぜのあわたゞしかる花の春かな

いつのとしにや彌生十日ばかりさが山の花見むとて伴資芳よきぬみちなれば立ちよられぬ此のころは日まぜに雨ふりてけふもいかゞなど思ひしによくはれたり朝戸出の寒きはれいの風などに冒されけるにやあらむ

さくら花まちどほなりし年なれば盛りもいまだ朝寒き空

○しめつらむ　もつて居るのであらう。
○いばゆ　嘶く。
○野飼　野に放し飼ひの馬。
○たぐふ　比する。
○あだなりと　輕薄だと。
○常なき色に云々　絶えず變る戀にそめる人間の心。
○みやづかへせし時　京都で某公に仕へ三十五歳で致仕したと云ふ其の折の事であらう。
○あかれゆく　別れ行く、解散し行く。
○かくながら　此のまゝで。
○さかりまだきに　盛り未だき、まだ盛りにならいなのに。
○伴資芳　蒿蹊、閑田子、閑田廬と號す、近江八幡の人、武者小路實陰門、文化三年七月歿、年七十四。
○よきぬみち　傍道でない、順路。
○日まぜに　一日隔きに。
○朝戸出　朝早く外出する事。
○いまだ朝寒き　盛りが淺いと朝寒さをかけた。

○御室　仁和寺をさす。天子或は法親王がいますので起つた名稱。
○はかなきこと　つまらぬ世間話
○物むづかし　何となく不愉快な
○涌蓮法師　伊勢の人、高田派の僧、安永三年五月寂。
○夕つけて　夕暮になりかゝつて
○嵐の櫻　山の名と吹く嵐とかけた。
○二尊院　山城葛野郡小倉山の麓、法然上人開基、四宗兼學。
○ふりはへ　わざ〳〵。

かくて打ちつれてならびの岡御室など過ぎ大井の川邊におりゐてはかなきこといひかはし遊べば心ちの物むづかしかりしもなぎぬ春の日もやゝくれて花の色のほのかなるころ涌蓮法師も來あひてきようにいりぬ月かすみながらさしていはむかたなくしづけし

大井川月と花とのおぼろ夜にひとりかすまぬ浪の音かな

又ある時則尹の訪ひきてあらしの花見むとあるに打ちつれてゆく雨いたうふりいづ道もあしかりなむとていへにかへりしが夕つけてはれげに見えける時かの人のいへる「春雨の雲もはれゆくあらし山日はたけぬともおもひたたばや」かへし

よしさらばこよひは花の陰にねて嵐の櫻ちるをだに見む

二尊院に行きて何くれとうちかたらふに嵐の花も盛り過ぎぬと聞きて

春雨にふりはへとひしさがの山さればよ花の移ろひにけり

この近きわたりに涌蓮道人すみ侍りけるそのもとへとていひやる

草の庵にすます心のいかならむ花のためうき雨風の空

あるとしの二月末つかた人々あまたさがの山の花見にまかれりをりよくさかりにて花のもとにまどゐつゝ往事をおもふに年々この花になれぬれど

○えとはず　訪ふ事が出來ず。
○來むとしの春云々　自分も老年であるから、來年の春花見に來る事は、あてにならぬから。
○櫻花見ざらむ後の云々　櫻花を見ない來年の春までをあはせて思へば、非常に花の下陰が立ち去り難い。
○ときぎぬ　解き衣、春の枕詞。
○けふのいでたち　今日の花見の服裝。
○ときぎぬのおもひみだる云々　みだる、袖共解き衣の緣語。
○如意寺　恐らく如意嶽に在る小寺であらう。
○心のごとき寺　如意寺の意。

このニとせ三とせやまひにおかされてえとはずいたく老いぬれば來むとしの春ともたのまれねば

櫻花見ざらむ後の春かけて思へばいとゞかげぞ立ちうき

其の折しもある人のもとより「ときぎぬの春とも知らぬ身にしあれば花の錦にたちもまじらず」といへるはいたくよにわびて今日のいでたちなども心にまかせぬとなるべしいとあはれにて

ときぎぬのおもひ亂ると聞くからに花を見るにも袖ぞ露けき

默軒がたちまにあるほど花の頃かれより「山ざくら咲きそめしより九重の都の春ぞいとゞゆかしき」といへりけるかへし

花といへば鄙も都も常なきを何かはこふる九重の春

梅見にまかりありきけるころ東山にいとおほきなるさくらのあるを見て花の頃は又もとひこむなどいひたるを此の頃思ひいでてひとり二人いざなひて尋ね行くに心あての花咲きぬと見えて山の半ばにし雲のおりゐたらむやうなり分けのぼりて見るに半ばちり過ぎたり盛りをこそとはめと思ひしをいとくちをしこゝを如意寺といふと聞きて

我が思ふ心のごとき寺ならば風には花をまかせざらまし

雪とふるころしもとひて山櫻心あささを花にみえぬる

吹きのぼる谷のあらしにさそはれて空にぞ花の雪は散りゆく

いかばかりしづけからまし山ざくらをり〳〵風のさそはざりせば

山ざくらちるこのもとは谷川の音も嵐に聞きなされつゝ

かゝることどもいひて木のもとにしばしまどろみ侍りて

咲く花の木かげならずは物すごき山の岩ねに旅ねせましや

やめる身はいとゞあはれにおぼえて

こぬ春はいかでか見むと思ふ身に猶をしめとや花の散るらむ

あるとしの春さが山の花見にまかりけるに月くれければ大井の里にやどりて

大ゐ川かは音たかくなりにけり嵐の花に風すさぶらし

うづまさ寺にうつりすむ春さがの近ければまだしき程より花のつて聞くにおぼつかなからず

この春はさが山近く家居して花の便りを聞かぬ日もなし

信言がもとより「おもふどちむれつゝとはむさくら咲く君があたりの春をつげこせ」といひおこせたるに

○花にみえぬる　散る時分にやつて來て、自分の心の淺さを花に見せた。

○こぬ春はいかでか見む　來春はどうしても見られぬ。

○まだしき程より云々　まだ花の咲かぬ頃から、花の消息を聞くに確實である。

しづかにと住む山里の花ざかりむれつゝ問はばなしとこたへむ

またさがの花の頃をとひたりしに

春寒きことしのさがの花なればやよひの末や盛りならまし

やゝちりぬべく開きて行きて見るくるゝまでありてかへりがてにおぼえければ

又こそと思ひし花のさかりだにかへさはかげの立ちうかりしを

禪林寺あたりにえさらぬことあり行きて一夜あかしてつとめてかへるさにこのわたりの花年々見にこし事をおもひ出でて東北をかへり見るに如意寺の一木の花さかりなる行きて見ばやとおもへど太秦にけふをすぐすまじきことのあればしひてかへるに

陰なれし昔の花をよそに見て我がすむ山に急ぐ春かな

廣前の花のもとを法師の過ぎがてに行くを

あだしよに心をとめぬ法師(のりのし)も猶かへりみる山ざくらかな

きのふひねもす風ふきあれこの曉雨おびたゞしく降るによもの梢を思ひやりて

散りかたの昨日の嵐けふの雨いかでか花の堪へてのこらむ

○春寒きことしのさがの云々　春寒いのが今年の癖であるから、嵯峨の花は三月の末が盛りであらう。習はしと地名とをかけた。

○禪林寺　永觀堂禪林寺、禪林寺の址に永觀律師が中興したのである、今淨土宗、本山南禪寺の北。

○えさらぬこと　よんどころなき用事。

○つとめて　早朝。

○けふをすぐすまじきこと　今日中にすまさねばならぬ用事。

○廣前　こゝでは寺の本堂の前庭

○あだしよに　浮世に、俗世間に。

花散りしより心ちも例ならず立ちゐもことにくるしら覺えければ

ちりしより立ちゐくるしき老波は花によりてやしばし忘れし

ちりのこる花を尋ねわびて

花はみなちり果てにけり今よりは何にまぎれて春をくらさむ

まどろみもあへず目覺めて蝶のとぶを見て

をしみかねまどろむ夢のたましひや花の跡とふこてふとはなる

太秦にあるほど花さかりなるころゆふさりつがたつれ〲とながめゐたるに道覺つと入り來ていへらく今朝より嵯峨山の花もてあそばせ給ふと宮のおはしましたりけるがいかなるみ心にかおほんかへさ急がせ給ひつるが道の空にてゐあんがかくれたる蜂岡寺にあないせよと仰す今いらせ給ふべしとく〲かどむかへをとおどろかすにゆくりなければ座うちはらふひまもあらでずさなどがうかゞひ奉らむも畏く障子おしたてなどして門邊に出づればはや御輿かきいれぬおましだつかたにさうじ奉れば何くれのうたろんぎをも聞しめすついでにけふの御題つかふまつれとて給はせけるを開き見れば春夕花とありけるをやがてよみて奉れりき

立ちならぶ松のみどりもわかぬまでくるゝ色見ぬ山陰の花

○花によりてや　よりては老波の緣語。前の立ちゐの立ちも散りも波の緣語。

○をしみかね云々　夢に蝶となつた思想は莊子の聯想。

○ゆふさりつがた　夕しありつがたの約、夕方の意。

○道覺　法親王宮の侍僧であらう。

○道の空にて　途中で。

○蜂岡寺　前出、大秦廣隆寺。

○ゆくりなければ　不意であるから。

○ずさ　從者。

○おましだつかた　御座所。

○さうじ　請じ、案内する。

○うたろんぎ　和歌に關する討論

山の宮のみこゝろばへいかたじけなさにこれよりぞまうのぼることにはなりける

あらし山の花見にまかりて京の友にあひて

さけばちるさが山ざくら露の間の色にめでつと人にかたるな

宮のおまへにめしいでられていとのどやかなる夕こゝかしこの花のみものがたりの序に翁が庵の一樹はむかし紀宗直が南殿の種をうつしうゑたるが年ごとににほへどいまはさるよし知る人もなくて蓬がかげに春を忘れず咲けるはくちをしき花のちぎりにぞ侍るなど聞えあげしを例のすたれたるをおこさまほしうおぼす御心にやあらむそれみそなはさむさかりつげよとのたまふにうちおどろきあしく申してけりとわきをかきていかでかさることと侍らむ入れ奉るべきおまし所も侍らずいとかたじけなくとわぶれど花あればすなはち入るとこそいへ何かは苦しからむたゞそのいなしきのまゝにてとのたまふにいかゞはせむむぐら蓬のふる葉かきはらひふりたる松かげにくさのおまし所まうけて待ち奉るはみちとせになるてふ桃をもてはやせしきのふのなごりなほのどかなるけふの空のいたくかすみて雨にやならむとあやぶみしもいとよくはれ花もすこしまだしく

[illegible]これより以後蘆庵が宮家に伺候するやうになつたと云ふのである。夫れまで度々召されたけれども固辭して行かなかつたのである。

○さけばちるさが山ざくら　咲けば散る習はしと地名とをかけた。

○紀宗直　高橋宗直、圖南と號す、宗恆の子、廚子所預を勤めた、野宮定基の門。天明五年正月二十四日歿、年八十[illegible]。

○南殿の種　紫宸殿の左近の櫻の種子。

○花のちぎり　花の因縁、花の運命。

○わきをかきて　脇を掻いて、恐縮して恥ぢ入る形容。

○おまし所　宮の御座所。

○花あればすなはち入る　和漢朗詠集の「[illegible]見人家、有花入。」

○いなしきのまゝにて　稻がらを敷きたる所、卽ちつくろはぬまゝで。

○みちとせになるてふ桃　西王母の故事、漢武帝に「此桃非世間所有、三千年一實耳。」こゝでは宮の宮殿に參上した事を仙境に入つたのに喩へた。

やと思ひしかどさかりみちて折にあひたりいらせ給ひて御湯たてまつり御くだものまゐる夕かけておほみき奉り御おろしあまたたび給はりゑひさまたれておのがよろぼひわたるうしろでをも忘れてふたへにかゞまれる腰をしひてのばしてあなたふとけふのなどうたひ舞ふさまはえびのおよぐに似たりとをかしがら給ふべしかうかしこみ嬉しみ思ふはもとのあるじのたまも我にとりつきてよろこびをそふるにぞあらむかし宮も興にいらせ給ひて欲情遊絲繫夕陽の御句玉聲ひゞけり慈延御次にはひわたりめでまどひて御和を奉る「君がためつなぎとめなむ絲遊のながきにあかぬけふの夕陽を」などやうにぞきこえしげにも君が光にはひまの駒もつながるべくぞおぼゆるけふゐたちけいめいするうち櫻花をおきて思へることをよめる

さかりをやいそぎたるらむきのふまでふゝめる花もけふは咲きぬる

くちをしと何かこちけむ櫻花色そふけふもありけるものを

蘭省（らんせい）の花の種とて大君のとひますけふぞいろかのこすな

春をへて知られぬ花も今よりはとはれぞせましよもぎふのかげ

永きよのおもておこしをいのちにてふるきの宅も人に[illegible]まで

○御おろし　おさがりの意、即ち宮から酒を頂戴した事。
○ゑひさまたれて　亂醉して。
○うしろで　後方。老人が腰の後に手をやる様子。
○むかしのあるじのたまも　舊主人の魂も。
○慈延　大愚、吐屑庵、[illegible]、天台の僧、冷泉爲村の門。文化二年七月寂。
○けふゐたちけいめいする　今日居たり起つたり經營する、即ち宮をいろ／＼たち働いておとりもちする。
○ふゝめる花　含んでゐた花。
○蘭省の花の種　南殿の花の種の意。白樂天の詩「蘭省花時錦帳下」。枕草子、和漢朗詠集に出て居る。
○よもぎふのかげ　蓬生のかげ、草の庵をかく謙遜したのである。
○永きよのおもておこし　永久の光榮、面目。

宮のたまへる御うた「春あきのながめ盡きせで朝なゆふな老をやしなふ松の下庵」御かへし

常に我みなみの山のことぶきを君がみあへにけふ奉る

都にかへりすめどいたくおとろへていでたゝむも物うくておもひやりつつのみあるに布淑が花をたづさへ來りて「わきてとく咲きぬる花の心にもまつらむ人に見えむとやおもふ」と聞えしかへし

をとゝしもこぞもことしも手折りきて君ぞみせける初櫻花

あるとしの二月十日ばかり宮より初花たまへるに

この春はたまはむ花を見むとてやけふまで老のながらへにけむ

きのふのかしこまりにたへではつ櫻をいたゞきかはづふしにふしみゝずがきにかきてけふことあげし奉る

はげみつゝ花も咲きけりよにひゞく君がことばの玉の光に

つまづかず咲きぬる花か人はまだ寒きひま行く駒にならはで

さす竹の君がみはしの初花はよにまれらなる種にぞあるらむ

くれはとりあやにめづらし二月(きさらぎ)の望(もち)も待ちあへず咲けるさくらは

爛漫と咲きぬる見てぞ霜にまたしぼめる老も春を知りぬれ

○みなみの山のことぶき　詩經に「如南山之壽、不騫不崩。」南山は終南山を云ふ、長安の南にある。
○みあへ　御饗應、おもてなし。
○わきてとく　特別に早く。

○かしこまり　こゝでは御禮の意
○かはづふしにふし　蛙の如く平伏し。
○みゝづがきにかきて　蚯蚓の如き字を書いて、拙い字で書いて。

○つまづかず　駒の緣語。
○さす竹の　生え出づる竹、君の枕詞。
○みはし　御階。玆では宮の御所の御前を意味する。
○くれはとりあやにめづらし　くれはとりは綾の枕詞。

をくに

かくなむときこえあげてよかはづ鳴くゐでの山吹をりもよからば

あるふるみやの花さかりなるいけべにてそこにある人らと物がたりする程水面に文(あや)見えて雨ふり出で山陰の池邊雨中の樹色のえもいはずおもしろければ夕のかね聞ゆる頃までありてかへるかぐらをかの東の路より昔見し山をのぞめば松の色のけぶりたる中よりこゝかしこの花のくれのこる色のしづかなるけしきいはむかたなし

松の色は雨にくれそふ木の間より猶ほのみゆる山櫻かな

例のおほん方より御使とて御文ありひらき見れば御詞はなくて「あかざりしこその遊びを思ひいでて又もとひよるまつのした庵」「しら雲をしるべにこそはとひきつる庵のとぼその花はちりしか」見もあへずいらせ給ひ暮ごろまでおはしますに御かへしにたてまつる

塵をだにはらひもあへず松かげの苔を御座(おまし)になすがかしこさ

御かへさもよほさるゝ頃野べに鶯の鳴きければ

うつりゆく花の夕のみくるまをしばしとぞなく野べのうぐひす

くるつあした雪のごとちるを見て

○きこえあげてよ　蛙の聲上げて鳴くのにかけた語。
○をりもよからば　時機もよかつたらばと、山吹を折ることにかけた。
○文　水面に雨滴のため出來る波紋。
○例のおほん方　宮を指す。
○見もあへず云々　御手紙を讀み終らぬうちにはやおいでになり。
○御かへさもよほさるゝ頃　歸途に就かれようとする頃。
○くるつあした　翌朝。來らむとする朝の意。

かきくづしけさよりちるは君がこむ昨日を待ちし花にやありけむ

昇道がさがの山櫻見しかへさにうづまさの花を見て「古郷となりにし宿のさくら花なつかしきかに心とまりぬ」とあるにかきそへし

盛りぞときけばなつかし陰しめてよとせはなれし太秦の花

寒咲ほどよくなりてこゝかしこの花の所もおもひやられつゝ

山櫻咲きそめしよりわたつみのおきな心も花になりぬる

曙花

花はたゞ霞み渡れる絶間よりしらみそめたるあけぼのの色

見花

春ごとに見るとはすれど櫻花あかで數多の年もへにけり

年々見花

見る友はとし〴〵かはる花の下になれぬとおもふ身はふりにけり

心靜見花

物ごとに心ちらねば名にたちてあだなる花ものどかにぞ見る

隔路見花

舟もがな波路さしはへかの見ゆる磯山櫻たをりてもこむ

○かきくづし　亂れくづれ。

○陰しめて　居住して。

○わたつみの　沖にかけた枕詞。
○花になりぬる　諸方の花が見たく、老いし心も浮華になつた。

○あだなる花云々　古今集巻一春歌上の「あだなりと名にこそ立てれ櫻花年に稀なる人も待ちけり」を思ひ寄せた。
○波路さしはへ　波路を特に目ざして。

歎花

かぎりある花の日数をぬば玉の夜のま見ざらむことのくやしさ

花未飽

わけのこす野山を多み櫻花心ゆくまで見し春ぞなき

依花待人

訪はれぬは誰がためか憂き蓬生の花よ人めを待ちつけて見よ

花下送日

おもほえず立つことやすき日数かななれてもあかぬ花の下かげ

花下逢友

咲きしよりあひ見ぬ友の戀しくば花の陰をぞとふべかりける

花時無外人

咲きしより日ごとにとひて山守も木こりも花の友となりぬる

花自有情

外のちる頃しも咲きて山ざくら心ふかさを見するひともと

依花忘行

妹がりといそぐ心をわすれめや道の行くての花しさかずば

○わけのこす　跋渉し殘す。
○多み　多いので、多さに。

○蓬生の花　僻遠な草庵の櫻。

○たつことやすき　思はず花下に立ちやすいこと、立ちやすい日數とかけた。

○花の陰をぞ云々　友も同じく花見に出て居るからだ。

○山守も　山の番人も。

○外のちる頃しも　外の櫻の散る頃に丁度咲いて。

○妹がり　妻或は戀人の許。

山花

一むらの雲こそかゝれ山のはの遠き梢の花や咲くらむ

山鳥のをのへの櫻咲きにけり長き日さらず雲のかゝれる

嶺花

ちらぬ間も心づくしを風越(かざこし)の峯にしもなど花の咲くらむ

暖雨晴開一徑花

春山の雨あたゝけきあと見えてかけぢに咲ける一本のはな

關花

あしがらの八重山ざくら咲きにけり春の嵐のせき守もがな

磯花

春深き沖つしほ風吹くたびに花の波こす磯の松原

花林朧月

おぼろよの月もかげをやわきつらむ花の林はさしもかすまず

雲花無定樹

咲くころと思ふ心に松杉もわかでやかゝる花のしら雲

古寺花

○心づくし　氣がもめる、心配な。
○風越の峯　信濃伊那郡に在る山、今權現山と云ふ、飯田の西。散らぬ間も心をなやます花が、何故風の越すと云ふ危い山に咲いたのであらう。
○かけぢ　棧路。
○わきつらむ　分けたであらう。特に月も心あつて光を分けたのであらう。
○かゝる　心がかゝると花の白雲のかゝること。

色に香にめでずば花のさがの山めぐりもあはじ法の輪の寺

山家花

いかなれや世をもいとひし山里の花の色香にそむる心は

閑居心

人とはぬ宿とて風の吹かざらば猶靜かにぞ花を見てまし

花麻

櫻花香ごめにぬさと散りしより塵にや神のまじり初めけむ

花與春匂

誰か知るさけばかたみに匂ひそふ花と春との深き契りは

老木櫻のゑを

我も老いさくらも古木ふりせぬはあかぬ心と花の色香と

八重櫻のゑに信美が歌こふに

深くなる春の行くへも一枝に思ひやらるゝ八重さくらかな

春ぞすくなきといふ句を

かげなれむ春ぞすくなき老が身はよしや日ごとに花を見るとも

長門介彦明が白詩選新刻なりぬとておくれりふせる枕上におきてをりを

○法の輪の寺　法輪寺、嵐山の東方、虚空藏を祀す、眞言宗、貞觀十六年道昌僧都の建立。めぐりは輪の縁語。
○そむる心　執着する心。

○花麻　花のぬさ、花の幣。
○香ごめに　花の香と共に。
○ぬさ　麻、紙などを細く刻んで幣として神に奉るのである、落花をそれに譬へたのだ。
○塵にまじり　和光同塵の意、老子の「和其光、同其塵」から出て、佛が人間社會に神となつて垂跡する意。

○信美　羽倉信美、荷田氏、伏見稻荷神社の祠官、從四位上總介、小澤蘆庵の門人、文政十年歿、年七十八。

○かげなれむ　陰に馴れる。花の下陰に親しむ。

り見などすそがうちの五言律を見て花下數白髪を

しらかみにまがふ櫻をうつらく見れどもいはむ言のはぞなき

一乘法師が殘花を折りて「心ある人に見せずば山ざくらあだに散るとや花のなげかむ」とよめるかへし

手折りきて君し見せずば花ははや散り過ぎにきと我やなげかむ

禪林寺に花見にまかりしに誦經の聲の聞えてあらしに花のちりみだれけるを

うべしこそ世は常なしと說く法の聲のうちにも花ぞ散り行く

志賀山越

こえなづむ妹が袂に咲きかけて花をかさぬるしがの山風

東山にあそび侍りけるにあらしの山にちりのこりたる花のみえしが夕かけていとさだかならねば

それとなくかすみはてても見し花の俤のこすゆふぐれの山

惜花馬蹄遲

乘る駒もふまじとや思ふ散る花の陰ゆく道は過ぎがてにする

花のころはと思ひしにもとはざりける人をおもひて

○あだに散る　空しく散る。
○うべしこそ　尤も千萬である。
○志賀山越　山城から近江の志賀へ出る山路。
○こえなづむ　越え煩ふ。越えしぶる。
○花をかさぬる　美しい袖の上に花が宿つた意。
○あらしの山にちりのこりたる云云　東山から遙に西方嵐山の霞を遠望したのである。夕かけて云々は晝から夕暮になつて、花の樣がはつきりしないので。
○過ぎがてに　通りにくさうにする。

来ぬ人をいつとかまたむあら玉の年に稀なる花も散りけり

落　花

をしむとてとまるべきにはあらねども散る花ごとにあたらとぞ思ふ

ちるがうへに散り行く見れば櫻花をしむ身のみや又のこらまし

纔見落花

この春のうきはまだ見ぬ木の本の花はいづれの枝よりかちる

落花を見て

さくら花今はとさそふ山風に心あはせて散り行くもうし

花落樹猶香

木の下を猶にほはせてさくら花散りても人をあこがらせつる

夕落花

よしやふけ暮れなばなげの櫻花ちるをだに見む春の夕風

月前落花

面影を後もしのべとやよひ山有明の月に花のちるらむ

夜思落花

をしみつる人はかへりて櫻ばなひとりやちらむ夜の山かげ

○この春のうきは　此の春の悲しさは。

○暮れなばなげの櫻花　日が暮れたならば散つてなささうな櫻の花、古今集の卷二の「暮れなばなげの花のかげかは」のなげさは意味が違ふやうだ。

○やよひ山　三月にかけた。固有名詞ではあるまい。

河落花

よしの川散りかひくもる水の上の嵐を見する花のしら波

海邊落花

櫻ちる春のみなとの追風に花つみそへていづる百舟

さが山の花見にまかれりけるにはやう散り過ぎてはべりければかひなくて山ふかく尋ね侍るに一木ちりおくれたるがことさらにめでたくおぼえければ

吹きのこす嵐の山のさくら花盛りをのみやあはれとは見む

殘花誰家

たれか住む庵のかきねの花一木よそには見えぬ春を殘して

深山殘花

おそく咲く花なりけらし山寒きをきその奥に見ゆる白雲

ひゝなの讃をこひけるに

ひとかたにうきをはらはば咲く花のもゝよろこびのみの日なるべし

彌生三日いといたうさむかりけるに彌清がかつらにかへるにつけて布淑がもとに文つかはすかへりがきに

○ちりかひくもる　花が互に散り亂れて曇らせる。

○盛りをのみやあはれとは見む　盛りの時ばかりを趣深いとは見ない。

○をきそ　をは接頭語、木曾。

○ひとかたに　一方に。

○もゝよろこび　百の喜びと、桃とをかけた。

○みの日　身と巳とをかけた。上巳の節供が後世の雛祭の日となつた。

○かへりがき　返書、返事。

まち〳〵し春の寒さはさくもゝの三千とせをふる心地こそすれ

苗　代

種蒔きていくか經ぬらむみごもりに薄もえぎなる小田の苗代

河苗代

こむ秋のたのみもさぞな河ぞひの苗代水はゆたかにぞひく

いたくかすめるにかへるのなくをつらねうた

霞そひくもれる春の夕暮に池のかはづの雨こひてなく

ほどもなくふりいづ

乞ひてなくかはづの聲やきこえけむ天津空より雨くだるなり

雨くだる夕の空をながめつゝ入相のかねの聲をこそ聞け

夕　蛙

春深きゐでのわたりの夕閒暮霞む汀にかはづ鳴くなり

大根の花麥の中にまじれり

白妙の大根の花は雪に似てもゆる草葉と見ゆる麥畑

菜花のさかりなるころ山吹もさけりければ

山吹も菜もうき花の色ぞかしさけば近づく春の別れ路

○三千とせ　西王母の故事、前出。

○苗代　もみを蒔いて稻の苗としたもの。又それを作る田をも稱した。

○みごもり　水に淺って居る事。

○こむ秋のたのみもさぞな　來る可き此の秋の收穫も、さぞや多い事であらう。

○つらねうた　連歌。

○ゐで　山城相樂郡井手、山吹の名所である。

○うき花の色　悲しき花の色。

菫

あかずしてくるゝ春野の露ながらつめるすみれに月ぞうつろふ

紫のすみれの花のにほへばやなべて春野のあかず見ゆらむ

古砌菫

あれ果てて野となる庭のすみれ草こゝぞ昔の垣ねとや咲く

つゝじ

旅人のいほる山べにたく火かとこぐれにみえて咲くつゝじかな

樵路躑躅

白妙のつゝじ花咲く柴人(しばびと)のかへるさ遅き頃もきにけり

杜若

水かれてふるき澤べのかきつばた咲けるわたりや八橋のあと

かきつばたを折りて人におくらむとて手づからもてまうで行きけるに

杜若しをれやすると道すがら袖に日かげをへだててぞ來し

夕山吹

暮れ行くをおのが色とや夕露に咲きものこらぬ山吹の花

おもふこといはでやけふも山吹のくるゝまがきを人も訪ひこず

○露ながら　露のまゝ。

○古砌　家の周園軒下に石又は瓦など敷きたる所。それの古いもの。

○いほる　庵の動詞、宿って居る。

○こぐれ　木陰の暗い所。

○八橋　川し折れ〳〵に細板を架けた橋。此の歌は言ふまでもなく伊勢物語の聯想。

○暮れ行くをおのが色とや　夕暮を黄昏と云ふので、山吹が自分の色と思ったのかの。

○おもふこといはでや　古今集誹諧歌「山吹の花色衣主や誰問へど答へず口なしにして」の聯想。

里山吹

山吹のさかりとなればやへ／＼の人もとひけり玉川のさと

光ある里は玉川やまぶきのさかりは人のむれてこそとへ

笆山吹

しめゆひしまがきも見えず山吹のやへにかさなる花の盛りは

かつらよりあゆに山吹をかざしておくれるに

いはぬ色はいふことさしてわかあゆのかざしにくめば玉川のつと

慈照寺にあそびけるに池の藤はいまだしくてそれかあらぬかなどいひて

かへりざまに

咲くもまだおぼつかなきを立ちかへり又こそとはめ藤波の花

折藤

をりて見む夏をかけては匂ふともかへらぬ春の藤波の花

池藤

いつしかとふぢ咲く池の水かゞみうつりにけりな春の日數は

松間藤

松の色の又一しほの藤かづらかゝれとてしも花はさかじを

○やへ／＼の　幾重となく仲の遠くへだてた。八重山吹にかけたのだ。

○光ある　玉川の玉にかけた緣語

○笆　籬と同じい。

○いはぬ色は　古今集誹諧歌に據つた。何處の土產とも山吹の口なし色で言はぬからわからぬが、若鮎のかざしにさした山吹で推測すれば井手の玉川の土產であらう。

○慈照寺　一名銀閣寺、淨土寺町の北、足利義政の山莊、歿後寺とした、臨濟宗。

○おぼつかなきを　徒然草に出て居る藤の花の形容。立ちかへりは又出直しての意で、波の緣語。

○うつりにけりな　水に映ると、日數の經過するとをかけた。

○かゝれとてしも　藤がかゝり垂れると、かやうであれとをかけた語。

○そぼちつゝ　ずぶぬれになつて
○ふぢのふること　伊勢物語に出て居る、或榮へた家の主人、三月の晦日に雨にぬれつゝ庭の藤の花を折つて人の許へ贈り歌をつけた「ぬれつゝぞ強ひて折りつる藤の花春は幾日もあらじと思へば」古今集巻二に在原業平の歌として出て居る。
○そこごなく　どこどなく。

○のどけきかげ　かげは日の光と鹿毛とをかけた。

○柳さくらとうつるより　古今集素性法師の「柳櫻をこきまぜて」の歌を思ひ寄せた。

○行く舟の跡なき波　満誓沙彌の「世の中を何にたとへむ朝ぼらけ漕ぎ行く舟の跡の白波」によつた。

雨中藤花

そぼちつゝ折りけむふぢのふることもかくこそ雨のけふのぬれ色

春煙

春寒き松がうら島かすませて心ある蜑や煙立つらむ

春夕

そことなく花の香かをり櫻色になべてかすめる春の夕暮

春獸

春とてもとまらぬひまの駒なるをのどけきかげとなどかたのみし

春のとく過ぐるを惜しみて

梅ちりて柳さくらとうつるより見る〳〵花の春ぞたけ行く

暮春月

をしと思ふ春の日數はくれそひてよな〳〵遲き有明の月

暮春花

咲きちるは程なき花のさかりをもまたでや春の暮れて行くらむ

江上暮春

けふの日も入江かすみて行く舟の跡なき波に春ぞくれぬる

山家暮春

山ざとの垣ねのわらびをりに見し人めも絶えて春ぞくれ行く

旅宿暮春

鴈もいぬ春もかへりぬ草枕たびにやひとりわがのこらまし

此の十日あまりまでに花はちりはてたればやよひの末つかたはたゞ青葉のみしげりて夏にもかはらざりければよめる

花もなき春の日なみの末の山夏にこゆとも色はかはらじ

春の別

うつりゆく春を惜しむもあす知らぬ身を歎くとや人の思はむ

殘春

花鳥におくれて又や此の春ものこる日數をひとり惜しまむ

殘春二日

けふくればあすも暮れなむあす暮ればことしの春は殘らざるべし

春光只是在明朝

春はたゞ明けむあしたを限りぞと思ふこよひのいやは寢らるゝ

三十日に

○をりに見し　わらびを折ること、たまに見しとをかけた。

○末の山　末の松山、陸前宮城郡末松山八幡の砂丘、古今集大歌所の「君を措きてあだし心を我もたば末の松山波も越えなむ」に據つた、越ゆると云ふのはその爲である。春の日の末とかけた。

○いやはねらるゝ　とてもねむられない。

きのふまで猶けふありとたのみしをそもかたぶきぬ春の日の影

三月盡

暮れぬるか春はこてふの夢のまになれ見し花を俤にして

三月盡夜

まどろまで猶ぞ惜しまむ花鳥の春も一夜の夢とこそなれ

天明八年の正月はての日かも河の東なる小家より火あやまちたるが風あらましく吹きて時のまにひろごり内裏よりはじめみやこの家ゐのこりなくやけたりしかばおのれもすむべきところなくて二月十三日のゆふべより太秦十輪院に移りすむ此の寺十とせばかりすむ人なしひろき寺のいたうあれたる所なりうつりける夜ことのほか寒くよもすがらいもねず

荒れにけるはちをか寺の旅ねには春さへ寒し身をさすがごと

よあけて見れば軒に梅ありいとよくさけり都は一木ものこらずうせたるをも知らぬさまなる色香なるもあはれにて

世離れて人もすさめぬ梅なれや思ひの外の春にあふらむ

これも都にさきてましかばいかでかこたびの煙にもれましとぞおぼゆる

○そもかたむきぬ　それも傾きぬ、三十日の日かげも傾いた。

○あらましく　荒く。

○十輪院　山城乙訓郡の十輪寺であらう。小塩村に在る。嘉祥三年染殿皇后の勅建と云ふ。

○身をさすがごと　上の句の蜂岡寺の蜂の縁語。

○人もすさめぬ　人も賞美しない

わらはやみしておこたりぬれどいといたうよわくなれれば今は京にかへりてをといふにまかせて住みなれしうづまさ寺をいでくとて

あら玉の年の四とせをふる寺の別れは春も袖ぞ露けき

こぞより心ちそこなへれどおどろ〱しくもあらねば寒さにたへて此の頃まではかくあれどこの後をり〱あしくてふしおきしつゝあるに二月十五日夕よりことの外心ちあしくいにし年のわらはやみのごとあつしくなりて何事も覺えずあかつきがたすこしさめたるに人々あまたたすけなどするを見てよべのことをひと聞きて知りぬこれよりあつしさはさしもあらでうちふしてあるに三月朔日頃すこしくふ物の味などいできたる三日に又ありしごとあつしくなり四日より又すこしおこたり侍り瘧にあらず疫にあらでいとあやしければこたびは中にし何がしといふ醫師にちぎりしことあれば薬たうく日をへて快ければ老病つかれすみやかにいえがたしなき事もすべてやめて此のうちの所爲にはおもふことあれば人してかい付けさすあけぼのに

とことはにあかぬの山のいつにかはおもひくらべむ春のあけぼの

夜のあくるを待ちわびて

○わらはやみして　熱病、瘧。
○おこたりぬれど　全快したけれど。
○京にかへりてを　をは感歎の意。
○おどろ〱しく　こゝでは非常に騒いの意。
○ふしおきしつゝ　臥たり起きたり氣分のすぐれぬこと。
○あつしくなりて　病重くなつて
○ありしごと　以前の如く。
○疫　流行病。
○此のうちの　此の病中の。
○とことはに　永久に。
○あかぬの山　飽かぬにかけた。

病みぬれば夢ばかりなる春の夜も明くるまつ間ぞ久しかりける

よもすがら雨ふることゝかしこもる音をやみなくいもねられぬまゝによめる

もる音にいの寝られぬは春雨のふるやにたへてすめばなりけり

むかしの住家も漏りて牀かへてねたる夜のことなどおもひいでて

雨もりてねざりし夜半をおもふにも身にはふるやぞ契りありける

初春のころ上田餘齋がとひし後これよりいひやるいと〳〵うとく經し我をとひ給へりし御心ざしのうれしさ言にもつきぬを筆にはいかでと思ひながら禮をだにとてなむ去年見奉りしより、ゐたちおもちいといたうわかやぎたまへるなむ道のためにもいとゞたのもしうこそおぼえ侍れ寒さもいましばしならむいとようしのぎたまへ初春のつどひおぼしいでて梅何くれと心よせたまへりしに老いたる馬の重荷おふに小付とやらむ病にさへなやまされ寒きにうてては こたへせで過ぎつるつみさりどころなくなむ

言(こと)そへてたまへる梅ぞはつ春の草のむしろのみやびなりつれ

藥たまへるうれしさに

○夢ばかりなる春の夜も　千載集卷十六「春の夜の夢許りなる手枕にかひなく立たむ名こそ惜しけれ」

○ふるや　雨のふること、古い家とをかけた。

○たへて　古い家を我慢して。

○契りありける　緣があつた。

○上田餘齋　通稱東作、秋成と云ふ。餘齋、無腸、鶉の居と號す、大阪の人後京都に住む、小說家にして歌人、文化七年十一月二十六日歿、年七十八。

○うとく經し　長く無沙汰して過した。

○ゐたちおももち　動作容貌。

○馬の重荷おふに小付とやらむ俗諺「重荷に小付」一つ重い負擔ある上に更に負擔の出來た意、小付は小荷物のこと。

○うてては　負けては。

○さりどころなく　罪の消しやうがない。

○わかえつる君にあゆやと　若やいで居る貴君にあやかるかと。
○いかむとぞ　生き延らうと。
○新室　新築の家。
○花にいとひし　花の爲に風をいやがつた。
○思ひ入る身こそ云々　及ばねこの人よに猫の字が讀み込まれて居るのは技巧であらう。
○水のあせたる　水の涸れて淺くなつた。
○室山　陸前志田郡室山、一名師山。
○蘆屋里　攝津武庫郡。
○あしのや　あしはたどる足とかけた。

わかえつる君にあゆやとたまへりし藥のみつゝいかむとぞ思ふ

新室のもよほしを聞きて

とくたてよさらば都に住みぬ　き心おちゐむ君がにひむろ

心ちそこなひてこもりゐけるほとまれに見いだすに日のうら〳〵とてるを

いたづらにねても經るかな花みてもをしかりぬべき春の永日を

風のこゝちにてわづらはぬ人なかりけるを春みづからもやみて

みな人の身にしむ風は春ごとの花にいとひしむくいなるらむ

櫻のちるしたにこれこのざれたるかた源氏物語の心と見ゆ

思ひ入る身こそ及ばねこの人よなどすのうちの花にむつれぬ

朝ごとにこのあたりありくに草川の水のあせたるを見て

朝な〳〵かれ行く水や草川のをちこち分くる苗代の頃

室　山

室山の老木ももとは若櫻世にめでられし花にやはあらぬ

蘆屋里

あま人のわがすむかたもたどるらし霞む夕のあしのやの里

千葉野

おもふことちば野の春にもえ出づるこのてがしはのいつか開けむ

鹽竈浦霞を

しほがまの煙もかぎりあるものをうらの名だてに立つ霞かな

末松山花

松かげに咲ける櫻は末の山したより浪のこすかとぞ見る

古人のよめる詞を題にして人みなよませみづからもよみける春の歌の中に

殘りたる雪にまじりて山里の垣ねはだらに生ふる若草

子の日とてかずまへらればあづさ弓おしてもとはめ今日のまどゐに

とくるかと見るほどもなくこほりけりまだ春あさき池の水なみ

梅がはら鳴く鶯にすかされて花もやさくと尋ね來にけり

明けそむるみねの霞のひとなびき春のけしきは花ばかりかは

こよひ誰やすいもねずにみ吉野の花ちる山を月に分くらむ

とき駒に猶鞭をこそそへてけれ花もやちると心はやりて

ちりがたのみねの櫻に風ふけばをしむ心のそらにこそなれ

○千葉野　下總千葉郡、豐田、白井、更科諸村一帶の平野。
○おもふこと　ちは野　思ふ事多いと千をかけた。
○鹽竈浦　陸前宮城郡松島灣の南一帶をさす。
○うらの名だて　鹽がまの浦は有名であるから、其の浦の名を宣傳するために。

○はだらに　斑に生えた若草。
○かずまへられば　子の日に招かれ人數の數に數へられれば。梓弓は押しにかけた、强ひても訪れよう。
○春あさき　春が淺いと池の淺いとをかけた。
○梅がはら云々　梅原、山城愛宕郡上賀茂村、梅と云ふ名に惹かされ鶯が啼くのにすかし出され。

○ちりがたの云々　散らうとする。心が上の空になるとかけた。

ながからぬこのよなるまは春の日のゆほびかにてぞ經ぬべかりける

をとめらが袖ふる山のすそべらの赤く見ゆるは岩つゝじかも

なはしろのあつくる畷もちる花のせきとめがたき春やをしまむ

すきかへす春のあら田をたつ雲雀いづくに草の枕かふらむ

　おいの後岡崎にあるほどやよひの末つかたなにはにゆかむとするに經亮燧袋などたづさへきて「おもひいでばうちつけに見よかりそめの別れをだにもをしむ心を」とありしかへし

うちいでてみねどもしるし石かねをいれし袋の中のおもひは

　こたびのわかれに布淑がよめる「すみよしの春に心はとまるとも都の人のまつを忘るな」京にかへりきてかへしはつかはしける

都にて待つらむとだにおもはずば立ちかへらめや住よしの里

　重愛がいへる「野山なる盛りの花をめにかけてこがれぞゆかむよどの川舟」これも京にかへりて

舟くだすかはべ山べの花盛りともに見ざりしことぞくやしき

　花のちるを見て敬儀「さかりなる花も旅ゆく君がためぬさとなりてや風にちるらむ」

○ゆほびかにてぞ　ゆるやかな様

○をとめらが袖ふる云々　すそべら、山の裾邊と衣の裾をかけた。

○あつくる　畦を作る。

○すきかへす云々　雲雀の巣が鋤き返されてないからだ。

○經亮　橋本經亮、香園と號す、京都梅宮神社の神官、高橋宗直の門人、文化二年四月歿、年四十七。

○うちつけに見よ　むきだしに卒直に見よ、うちつけは燧袋の縁語

○すみよしの云々　住吉は松の名所、待つにかけた。

○こがれぞゆかむ　焦れ慕はむと漕ぐことにかけた。

○敬儀　田山敬儀、通稱順吉、或は從事、伊賀藤堂家の士、蘆庵の門、文化十一年四月九日歿年四十九。蘆門四天王の一。

○ぬさ　幣、道中の無事を祈るため神へ捧ぐる風料。
○このくれ　この日の夕暮。
○澄月　融阿と稱し、垂雲軒、醉夢庵と號す、備中又備後の人と云ふ、比叡山の僧、歌を武者小路實岳に學び、蘆庵、蒿蹊、慈延と共に平安歌壇の四天王と稱せられた、寛政十年五月歿、一説十一年、年八十五。
○老いらく　老ゆるの延、轉じて老人の意。

○あかぬことなき　厭く事無き、あかぬよあけぼのの意。
○辰の刻　午前八時。
○巳ばかりに　午前十時頃に。
○八幡　山城綴喜郡八幡町、そこに男山があり石清水八幡宮がある
○山崎　山城乙訓郡の南端。

○心ゆくさま　心の慰む有樣。

此の度のぬさとちりなば櫻花かへりくまではのこりしもせじ

あす立たむとするこのくれに澄月より「しばしだに別るゝはをし老いらくはあすの夢路もはかりがたきに」わかれをしむとて人のたちこみけるほどにてかへしもせで夜ふけぬ曉いでたつとていひつかはしける

しばしなる別れとおもへどおいらくはこれもや終の旅路ならまし

二十日のあかつきなりければかすめる月のやゝうすらぐまゝ山々の花の色わき初めたるけしきいはむかたなし

月はのこり花さく山に雉なきてあかぬことなき春のあけぼの

辰の刻ばかりふしみにつく舟のこと何くれとして巳ばかりになりぬさてこぎいだす遠ざかるまゝ川邊にたちて見おくる人のいとちひさく見えてはてはうせぬかくて八幡山崎のあひだをくだる

あけくれに遙かに見つる山々のふもとをけふは下る川舟

こゝかしこ花の盛りなるもありちりたるもあり京なる人に見せまほし水つねよりもおほくてとく下るにかへりみれば今ははるかにきぬれば

かへりみる都の山もかすむまでとほざかりぬる淀の川ふね

いとひろき川づらにこゝかしこにかもめのうちむれてあそぶ心ゆくさま

に見ゆ

鳥すらもおのがむれ〳〵あそべるを獨りうかるゝ我や何なり

今はながらわたりにもなりぬつく〴〵おもふにむかしよりたえたる橋もあまたある中にこのはしこそわきて名高かりけれとおもふに

聞きわたるながらの橋の名ばかりも殘るは難き世にこそありけれ

申さがりてなにはにつくむかしのずさの今はこゝにすむがまちつけてかたみに悅ぶ契れるやどりにてこしかたの事こたびの事などかたらふことおほくて夜更けぬればあすとく來とてかへしつ今はねなむとてぬるにねられねば

なには江のあしの一よとおもへども旅はふしうき物にぞありける

とくおきて心ざす御寺にまうで誦經などはてて御墓をがみす

なき人のいそぢのあとたとふまでも猶名もいでぬ身をやもどかむ

きのふ佛事はてつればけふは住よしにまうづべしと聞きて以直といふ人舟にて迎ひに來たゞこの近きほりえに舟よすとしらせたればいとうれしうて行きてのりぬ何くれのほりえを過ぎて小川を南にくだすこれより住吉にゆく舟路とぞいふなるつのぐむあしはさはるべくもあらず流しこま

○獨りうかるゝ　獨り友を離れて放浪する。
○ながら　長柄、攝津西成郡豐崎村、淀川に有名な長柄橋があった。
○申さがりて　午後四時過ぎて。
○むかしのずさ　昔の從者、昔蘆庵に仕へた男。
○契れるやどり　約束した宿屋。
○なには江のあしの一よと云々　千載集卷十三「難波江の蘆の假寢の一夜故身を盡してや戀ひ渡るべき」に據った。
○もどかむ　自身で非難しよう。
○ほりえ　堀江、大阪市中天滿川筋、南へ掘った河。昔山城河內兩水の合する附近であると云ふ。
○つのぐむあし　芽ぐむ蘆。

かせとゝえはく川舟なりつゝみのふりたる松のかたえは枯れながらさり
げなく春めく色を見て

潮風にかた枝かれぬる老松も猶一しほの春に逢ひぬる

松原のほとりよりおりてかちよりまうづむかしいはけなき頃はゝうへ姉君などともにまうで奉りしことも今のやうにおもひいづとしごとに遙拜し歌奉れどいと遠ければえしもまうでぬをけふ廣前にぬかづき

今はよにまつこともなく老いぬれど猶いのらるゝことのはの道

ふりぬとて松やはかはることのはも昔にかへせ住よしの神

松のすがたのさま〴〵なるを見て

ことのはもかかれとぞ思ふおのがじゝすがたかはれる浦の松原

こゝにきあひて僧日騰がいへる「古里の松も忘れてすみよしの春のうみべをあはれとも見よ」このかへし

故郷の松もけふこそわすれぐさ生ふてふ春の海べ訪ひきて

濱べをかなたこなた見めぐるにげにかへるやらもおぼえず時らつりけるなるべし遙かに見えしひがたもみつ汐になれれば舟にのりなむとす猶あかずおぼえて

○かちよりまうづ　徒歩で參詣する。

○廣前　社の正面の廣庭。

○よにまつこともなく　世に期待し望む事なく。

○きあひて　來合はせて。

○わすれぐさ　住吉の濱の產と云ふ。忘れ草、萱草（百合科の草本）土佐日記に貫之歌「住の江に舟さしよせよ忘れ草しるしありやと摘みて行くべく」「攝陽奇觀」に一異說が出て居る、住吉神社の宮司津守家では小松を忘れ草と代々言ひ傳へて居ると云ふのである。

住よしの潮干のなごりいつかはとかへり見らるゝあとのうら波

くれはてゝもけしきいはむかたなし日勝秋もかならずなどいひて「春霞立ちわかれなばすみよしの菊咲く秋をまつと知らなむ」かへし

立ちかへる春のうらみは住のえの秋の月見む時ぞわすれむ

くるつあしたは入江昌熹が亭にまねかれてきのふの物がたりあるはふるごとどもかたりあひて歌よむべうもあらず夜ふけぬ

二十七日にか夕つかた舟にのらむとするにかなたこなたより人々來て別れをしみ秋をちぎりなどすさわがしければもらしつ日勝「うら風はけふはな吹きそなにはえに老の浪よるかげをとゞめむ」かへし

しばしだに影はつかしき老の波何かなにはのみつにとゞめむ

むかへにとて都よりくだる人ものりあひ舟の中物がたりがちなる

日暮れて何のはえなきよどの波にさかふおとのみ聞ゆ明けはなるゝ頃ふしみにつく經亮元廣などよべよりやどりてまつ經亮「のぼり舟まつほどもなしかねてより君が心のときにまかせて」かへし

わが舟の遲くもあらねどかねてとくやどりてまつにいかで及ばむ

いとにぎはしくてかへりぬゆくさまにかへり見られし軒の花のかつゞく

○立ちわかれなば　霞の立つにかけた。
○入江昌熹　通称平次郎、又長川と云ふ、自得老人、俊房子、幽遊軒と號す、大阪の商人、契沖門人、寛政十二年八月歿、年七十九。
○秋をちぎり　秋に來る約束。
○老の波　蘆庵老人をさす。
○何かなにはの　なにの音の繰返し。
○何のはえなき云々　何の興味なき淀の河に逆らふ音ばかり聞えた。淀河の瀬の光景。
○君が心のときにまかせて　君の歸心矢の如くはやきによつて。
○かねてとくやどりて云々　豫め早くから泊つて待つ君達の早きにくらべてはいかで及ばう。
○ゆくさまに　行く際に。
○かつゞく　僅かに。

のこれるを見て

なにはにていかでとおもひし古郷の垣ねの花は猶のこりけり

六帖詠草　夏

夏歌

やよひに立夏のせちありての卯月朔日によめる

春かけて夏はきぬれどみな人の花の衣はけふぞかへける

首夏

神まつるうづき來ぬらし山もとのもりの榊にしめはへてけり

首夏藤

けさよりの夏をせにとや咲きかけし春はきのふの藤浪の花

やんごとなき御方の春の末つかたおはしまさむときこえしにうづきたつ日におはしましければ

などかれしきのふの春を惜しみけむ夏とともにぞ君がきませる

花もけふまではいかゞあらむなどおもひしかどなほにほひやかによくさきしはなり〳〵ちるがかへりて見所ある心地す

君まちて夏ぞさかりに匂ひけるしげき蓬がやぶかけの花

○立夏のせち　立夏の節、二十四氣の一、陽暦五月五六日に當る。
○う月　卯の花月、四月。
○花の衣　花染の衣、玆では花の時分着る衣と解してよからう。
○しめはへてけり　標縄が引いてしまつてある。
○夏をせにとや云々　夏を境と考へたのであらう。せは瀬で波の縁語。
○やんごとなき御方　尊き御方、宮をさすのであらう。
○蓬がやぶかけの花　蓬の家と藪とかけた。

いにしやよひの立夏の日

夏のくるやよひの山のほとゝぎすいづくにけふの初音つぐらむ

更衣

なつにけさかへしはうとき心地してきならし衣猶ぞ戀しき

夏のきてかふるとならば花衣そめし心ののこらずもがな

更衣惜春

昨日にもかへましものをはなごろもかさねて惜しむ春の別れ路

四月十七日ばかりにや宮より花をたまひて御言のはをさへたびけるかしこまりに「神代にはありもやしけむ」といひしふることはかかるにやとおもひあはする事も侍らざりしがそもなべての春のおくれたる年にこそありけめことしは二月のなかばより咲き初めたれば春のおくれたるにはあらでのどけき御代にあえけるにぞあらむといと〳〵めづらしきあまりかしこさもわすれて思へるまゝを例のたゞごとにとひこたへなどしてながき日の御わらひをすゝめ奉らむとて

夏やとき春やおくれしうの花に咲きあはせたる遲櫻かな

一とせをまちつけて見し初花とおそき櫻といづれまさらむ

○きならし衣　著なれた衣。

○かしこまりに　御禮に。

○神代にはありもやしけむ　新古今集卷十六「神代にはありもやしけむ櫻花今日のかざしに折れる例は」

○あえけるにぞ　太平の御代にあやかつたので。

○たゞごとに　平凡な言葉。

○とひこたへ　問答の歌。

○夏やとき春やおくれし　卯の花の咲いて居るのを見れば夏の來るのが早いのか、櫻の花の咲いて居るのを見れば春が遲れたのか。

待ち〳〵て見初めし春の初花におくれぞせまし遲きさくらは

後にまた咲きつぐべくもあらぬまでおくれし花ぞあはれなりける

見る時の心によれる花なればいづれまさるといかゞ定めむ

はつ櫻たまひし日よりむそ日あまり世に珍らしき花を見しかな

花ざかりはしにいのりしいにしへもかくまで久に見しとやはきく

外のちる後のさくらを見つるかな高きみ山のかげにかくれて

ことにとくことにおくれし花見るも君がみかげによればなりけり

初ざくら見しは生まれしこゝちにておくれし花は命とぞ思ふ

殘花少

きのふまで殘ると見しもちりそひて青葉の底の花ぞまれなる

花落枝綠といふことを

昨日見し花はいづれの梢ぞと青葉にたどるあさ戸出の庭

いとながき日のつれ〴〵なるにおぼえずうちねぶるほどかをる香におどろきたれば桐の花なりけり

みどりなる廣葉がくれの花ちりてすゞしくかをるきりの下かぜ

新樹の風になびくを

○おくれぞせまし　劣ると遲るとをかけた。

○むそ日あまり　六十日ばかり。

○花ざかりはしにいのりし　櫻町中納言成範が花の散らむことを惜しみ、泰山府君に祈り、花が二十一日間散らなかつたと云ふ說話によつたのであらう。謠曲泰山府君に出て居る、しかし泰山府君は五道冥官で星ではない、平家物語には天照大神に祈つたとしてある。

○外のちる　外の櫻の散つた後で

○あさ戸出　朝戸をあけて出ること。

きのふまで花にいとひし心さへ青葉にかはる風のいろかな

新樹露

朝な〳〵ぬれて色そふ若かへでみどりをさへや露はそむらむ

新樹妨月

ほのみゆるかげも青みて若葉さすかへでの梢月ぞをぐらき

夏山のいと深くしげれるを見て

この頃はいづくのやまもつくば山深くぞ夏のかげはなりぬる

うづきのころ禪師のみこよりめすことありてまゐりしに御前栽の藤杜若さかりなれば

此の殿はときはに春の色見えて花かきつばた猶さかりなり

清翠亭といふあなり東より北にめぐりておほきなる池にのぞめり其の池のめぐり松かへでいとおほくて水にうつる歌よめとありけるによみてたてまつる

水青きみ池にたゝむ木々の色をうつすばかりのことの葉もがな

初夏のころ麥はしげり大根花ざかりなるを

白たへの大ねの花は雪に似てもゆる草葉と見ゆるむぎ畑

○いづくのやまもつくば山　葉がつくと筑波山とをかけた、筑波山は常陸新治郡に在る名山。

○御前栽　前庭の園。

○ときはに　常磐に、永久に。

○白たへの大ねの花は云々　白き大根の花と、青き麥の葉とを、雪に萌え初めた若菜に喩へた。一本にこの歌がなくて、葵の題で「葵草しらがにかけて神祭る心もさこそ若がへるらめ」の歌がある。

うつぎ

ほとゝぎす今かきなかむ山がつのかきねの卯木(うつぎ)花さきにけり

卯　花

しげりゆく楓かしはのこぐれよりしろく見ゆるやさけるうの花

浪の色をうばひてなどか玉川のひかりをそへし岸の卯のはな

雨ふれる日布淑がうの花をたづさへきて「雨の中にたをれる袖はうの花の雪のしづくにぬれしばかりぞ」といへるかへし

折る袖にさぞなわがとるたもとさへ花にたまれる雨にぬれつゝ

卯花似月

うの花のさけるあたりは心せよ月夜よしとて人もとひけり

いにし春の末より時ならずさむしかくてはほとゝぎすいかゞとおもへるとき

けふよりは花を惜しみし心をや山ほとゝぎすまつにかへなむ

みかのあした

うづき来て二日へぬれど郭公まだ一聲もきかずぞありける

いつの年にか卯月六日人々来あひて拾遺集の歌をとかくいふにくれて月

○こぐれ　木の陰の暗い所。

○ひかり　玉川の玉の縁語。

○さぞな　さぞぬれたであらう。

○いにし春　過ぎし春。

○拾遺集　寛弘年に出た、後撰集につぐ勅撰集。花山法皇撰と称せられる。

ふりいでいとしめやかに更け行く頃郭公の音信(おとづ)れけるに昔こよひ貫之主承香殿にて歌をえらびける時仁壽殿の櫻の木にて郭公の鳴きけるをめづらしがらせ給ひて貫之に歌奉らせ給ひしに「こと夏はいかゞなきけむ時鳥今宵ばかりはあらじとぞきく」とつかうまつりけるよしかの家集に見えたるなどいひて折にあへばたれ〳〵もあはれがりてよみけるついでに

今もそのをりをわすれず來なけども山郭公聞く人ぞなき

かへし　　涌蓮法師

いにしへのはつねもけふのほとゝぎすをりをわすれずきく人もあり

これもおなじころにや夜ふくるまでありてほとゝぎすを聞きて

まどろまぬよはの枕のほとゝぎす物思ふ身はまたでこそ聞け

またの年の卯月六日の夜曉がた時鳥を聞きて

ねてやきく覺めてや聞きし夏の夜の夢のさかひの山ほとゝぎす

こぞもこよひ聞きつることをおもひいでて

明けばまづ人にかたらむね覺めして山ほとゝぎすこよひ聞きつと

いつの頃にか月にやなく雨にやなく朝にや夕にやなどおもひて日ごとにまてどなかぬに二十一日といふ朝あまた聲聞きて

○めづらしがらせ　時の天皇の。
○ことなつはいかゞなきけむ　外の夏には時鳥がどんなに鳴いたであらうか知らぬが、今夜のよい聲ではあるまいと聞くのである。風雅和歌集卷四には「延喜の御時古今集撰び始められけるに夜更くるまで御前に侍ふに時鳥の鳴きければ」として此の歌があり、大鏡卷八には下句を「この宵ばかりあやしきぞなき」として出て居る。
○かの家集　紀貫之家集。
○きく人ぞなき　當時聞いた貫之は居ないと古人を偲ぶ心持。

郭公卯月といふもはつかあまりひと日の數をねにや鳴くらむ

ある家にて時鳥を

散りのこる花をたづねて郭公青葉がくれのはつ音をぞきく

さ月八日といふにいまだきかねば滿願寺わたりは鳴きなむとてかれこれ行きて郭公を尋ぬといふ心を

ほとゝぎすおのがさ月の山にてもなほつれなくばいづち尋ねむ

待郭公

夢にだにきく夜半ぞなき時鳥やすいもねずに待ちし明かせば

つれなきもえこそうらみね時鳥ながたのめたる夕ならねば

始聞郭公

郭公しひてまたずば人傳にあすこそきかめよはの初こゑ

郭公語少

宵の間にほのかたらひし郭公まただになかであけぬ此の夜は

友だちのとひきて歌よみけるに時鳥を

思ふどちかたらふ宵のほとゝぎす心とけてや聲もをしまぬ

一字百首よめるうちに網を

○はつかあまりひと日の數を云々　二十一日分を一度に啼くのであらう。

○滿願寺　清水寺の末寺。一條帝の世、伊豫守佐伯公行建立、元延暦寺の末寺、後曹洞宗、本尊は千手觀音。

○かれこれ　誰彼二三人と。

○やすいもねずに　安眠もしないで。

○つれなきもえこそうらみね云々　無情にも啼かないのを決して恨む事は出來ない、時鳥よ、汝があてにさせた夕暮ではないのだから

○しひてまたずば　強ひて自分で聞かうと待たないならば。

○ほのかたらひし　微かに啼いた

○まただに　も一度とは。

○やどりてをなけ　宿りてよ、啼け。をは感歎詞。

○ふりいづる聲　聲をふり立てて啼く聲。ふりは村雨の縁語。

○卯月もおのがさつきとや鳴く　四月も自分の一月に加はつたので、自分の世界なる五月であると鳴くのか。

○つらからば　我につらく當り、啼かぬならば。一本「たが名かたたむ」

○こととりも云々　他の鳥もなく聲をやめて聞け、時鳥は此の五月が過ぎたらもう來て鳴かないのだ

人なみに待へとも我をとひはこじ尋ねてきかむ山ほとゝぎす

雨のうちにほとゝぎすを聞きて

我が宿にやどりてをなけ郭公ぬれし雨夜の袖くらべせむ

むら雨の空に郭公鳴くかた

やよしばしかさやどりせよ時鳥一むらさめにふりいづる聲

なくほとゝぎす

舟とめていづくときけば磯山の松の梢に鳴くほとゝぎす

三月にうるふありける年のうづきにほとゝぎすあまた聞きて

ほとゝぎすやよひ加はる年なれば卯月もおのがさつきとや鳴く

五月までほとゝぎすをきかざりし年に

つらからばたが名かたらむ今よりは待たじさつきの山郭公

うづまさにて此の鳥の鳴く折しもはとのかしましくなくいとにくくて

こととりも聲やめてきけ郭公さ月過ぎなばいつか來鳴かむ

郭公留客

時鳥ながなく聲に山がつの垣ねも人の過ぎがてにする

曉郭公

横雲のわかるゝみねのほとゝぎすたがきぬ〴〵の涙そふらむ

深夜郭公

郭公しのぶ心やゆるぶらむ人しづまれるよはに鳴くなり

郭公驚夢

待ちたゆむ夢のまくらのほとゝぎすさむれば聲の遠ざかりぬる

杜郭公

さよ中に誰をとふとか津の國のいくたの杜に鳴くほとゝぎす

野郭公

里ごとに待つなるものを郭公なぞしもひなのあら野には鳴く

磯郭公

郭公いま一聲ははなれその波のまぎれに遠ざかりぬる

山家郭公

昔わが初音尋ねしほとゝぎす今は軒ばのやまにこそ聞け

羇中郭公

郭公おのがさ月も旅人のやどりせむ野は心して鳴け

郭公數聲

○きぬ〴〵　夜逢ひし男女の曉に別るゝ事。衣々、後朝。

○しのぶ心やゆるぶらむ　かくれ忍ぶ心がゆるんで、氣を許すのであらう。

○待ちたゆむ　待つ心の少し怠りゆるむ。待ちくたびれるのである。

○いくたの杜　生田杜、行くにかけた。

○はなれそ　離れ磯と離るゝたとかけた。

ほとゝぎす聲のたえまも夏引の手引の絲の亂れてぞなく

短夜にたび〳〵ね覺めてよめる

郭公なく一聲にあくる夜も老は幾たびねざめしつらむ

郭公幽

靜かなるねざめならずばほとゝぎす聞きもさだめじ遠の一聲

五月

ますらをは駒くらべせりをとめらも今日のあやめのねを合はせ見む

さつき五日

ともにけふもてはやさるゝ契りにてなどかあやめを駒のすさめぬ

年々かぎりとおもふにまた五日のめぐり來にけるあした庭のあやめを

ながらへてけふもみぎりのあやめ草あやしきものは命なりけり

五月五日におもへること

ことの葉はなにのあやめもわかぬまにさ月のいつか老となりけむ

あやめ

すなほなるすがたにいかでならはましあやめにかくる露のことのは

あやしくも心のとまる匂ひかなあやめの草のかりの此の世に

○夏引の手引の絲の云々　夏絲を繰り引くのを夏引さ云ふ、手引は手で引いた絲、その絲の如く亂れて。古今集無歌に「夏引の手引の絲を繰り返しことしげくとも絕えむと思ふな」夏引は絕間も無くにかけた。

○郭公なく一聲にあくる夜も　古今集卷三「夏の夜はふすかとすれば時鳥なく一こゑに明くるしのゝめ」に據つた。

○聞きもさだめじ・聞き確めまい

○ますらをは駒くらべせり云々　男は五月に勇しく競馬をなし、處女等はやさしく菖蒲の根の長さくらべをするであらう。

○契りにて　因緣でありながら。

○駒のすさめぬ　なぜ駒が菖蒲を賞翫しないのであらう。

○ながらへて云々　今日も見るさ砌さをかけた。あやしきはあやめの音の繰返し。

○ことの葉は云々　言葉の用ゐ樣は何の區別も辨へない間に。文目さあやめ。五月さ何時かさをかけた。

○あやめの草のかりの　菖蒲を刈るさ、假さをかけた。

さみだれの空だきものは宿ごとにしめりてかをるあやめなりけり

尋ねてあやめをひく

人知らぬねざしやあると山陰のみくまのあやめ尋ねてぞひく

池菖蒲

かる跡にさゞ波こえて水廣き池はあやめの香こそみちぬれ

軒菖蒲

更にけふふくとはすれど苔深き軒はあやめもわかれざりけり

袖上のあやめ

色もなき麻の袖にもかけてけふ菖蒲の草の香をぞしめつる

六日にあやめを見て

何事もけふはきのふのあやめ草たゞ露のまのすさびなりけり

又ある年の六日にあやめのしをれたるを

昨日だにひかれざりつるかくれぬのあやめは知らじけふのうきふし

軒のあふちの咲きぬるを見て

ながらへてあふちの花も咲きにけりことしの夏のかげは過ぎむか

風前盧橘芳

○空だきもの　五月雨の空と、空薫物とをかけた。

○みくま　水隈、水の曲つて居る所。

○ふくとはすれど　葺かうとはすれど。端午に菖蒲を軒にかける事。

○けはかきのふの云々　端午にのみもてはやされる菖蒲であるからかく云つた。

○ひかれざりつる　菖蒲を採るのを引くと云ふ、根を珍重するからである。

○かくれぬ　隠れ沼、人目につかぬ沼。

○うきふし　憂き時、根の節にかけた。

○あふち　樗、逢ふにかけた。

○かごとがましき　恨みかこつ樣らしいこと、香ことをかけた。
○うきによごるれど　泥によごれるけれど。
○みしぶつき　水澁つき。水垢がついて。
○里わ　里のほとり。
○田うた　田歌、田植唄。

木の葉さへゆるがぬ風に匂ひたつはな立花ぞかごとがましき

早苗

さなへとる袂はうきによごるれど心は清き賤がなりはひ

みしぶつきうゑし澤田の若なへのしげるに賤がうさや忘れむ

みどりなるひとつ門田の若苗も幾千町にか引きわかるらむ

山畦早苗

うねごとにまづつかねおく早苗もて山田はけふや植ゑつくすらむ

遠村早苗

雨晴れて雲立ちのぼる山本の里わの小田にさなへとる見ゆ

夕に田うたうたふを聞きて

太秦の杜にひゞきて聞ゆなり四方の田歌の夕暮の聲

いかなるにかきこえぬ日に

ひゞきくる田歌も今は友となりて稀に聞えぬ暮ぞ寂しき

早苗多

暮るゝまでうたふ田歌に長き日もうゑはつくさぬ早苗をぞ知る

苦雨初入梅

軒くらく木々の雫のをやまぬは憂しやけふより五月雨の空

五月雨を

かりてふく軒のあやめの白露の玉ぬき亂し五月雨ぞふる

よのつねは東南に雲のゆけば日をふる雨もはれぬるをいやかさなりてかきくもれば

晴れぬべきけしきをやがて立ちかへて雲の往來もさみだれの空

默軒がもとより「さみだれはいくへか雲にうづまさの里は春さへ寂しかりしを」ときこゆるに

雨晴れぬさ月の雲のうづまさはあらぬよにふる心地こそすれ

まれ〳〵はきこえし都のつても此の頃は絶えてなければ

雲まよひさみだれ初めぬ今よりは都のつても絶えて聞えじ

なが雨降りつゞきていたくもりけるによめる

しばしこそもるとはしつれ五月雨のふるやは瀧を居ながらぞ見る

梅雨久といふことを

降る雨のはれぬ日數もあらはれて軒端の梅の色ぞそひゆく

五月雨久

○日をふる雨も　日を經ると降るとかけた。

○雲の往來もさみだれの　雲の往來の亂れると、五月雨とをかけた。

○いくへか雲にうづまさの　幾重か雲に埋まると、太秦とをかけた。

○しばしこそもるとはしつれ云々　暫時の間は雨がもるのであつたが、やがて盛んに家の中に五月雨が流れ入つて、居ながら瀧が見えるのである。降ると古家とをかけた。

をやみなきさ月の空のながめかな降り出でし月もわするばかりに

さみだれの晴れぬ日數をかぞふればさつきの空も殘りすくなし

梅雨送日

雲とぢて日をふる山の寂しさもおもひやらるゝさみだれの頃

深夜五月雨

あめをのみ聞きて更けぬるさつきやみおぼつかなしや鐘も音せず

さみだれにあぜこす水を田草とるをとこのかへり見たるかた

五月雨に畦こえぬなりたが田にも今は水口とめよといはまし

さつき七日のつとめて織田君のあづまよりのぼり給ふを粟田山のふもとに待ち奉るに此の頃ふりつゞきたる雨をふくめる松風いと寒かりければ

ふらぬ間もさつきの雨のけを深み露ちる松のかぜの寒けさ

山家水鷄

くひな鳴く木の間に月はかたぶきて人音もせぬ山陰の庵

夏月を

あつさをもわするゝかげのあやにくにたえてみじかき夏の夜の月

ひとへだにいとはしかりし夏衣かさねまほしき月の涼しさ

○なかめかな　長雨と眺めとをかけた。

○水口　水を流し入れる口。

○つとめて　早朝。

○粟田山　東山一帶、如意嶽、日岡峠、花頂山等の總稱。東方から來る人を迎へに出たと云ふのは、日岡峠の東の粟田口である、京都への入口。

○雨のけを深み　雨の氣が深くなつて。

（むねの雲　胸中の憂へ。

（露ぬるばみて　露がぬれた景色で。

（あしならぬ庭の小草の云々　蘆刈りは萬葉集以來歌詞となつて居るからかく云つたもので夏かりに夏季に刈る事。

（むつかしげなる蟲　氣味の惡い蟲。

（むくめくも　むく〳〵動く。

（こゝろの道のゆくへ　人間の心の道の進む方。少し油斷すれば惡しき方へ行く人心の弱點。

みな月の頃うづまさにて夜々默軒と月を見たるにかれ京に行きてやどりけるつとめて「むかひゐしわがなきほどの夜半の月ひとり心をすましてぞ見む」と聞えたるかへし

むねの雲はれねば獨りむかふ夜も月にこゝろはすますぞありける

夏草に朝露おきたるを見て

朝おきの露ぬるばみてふく風を待つ心なるころもきにけり

うづまさに住むころ夏になりて庭くさ高くなれば手づからかりそぐにあたりの人來ていつならひてかどいふにおもひしことと

あしならぬ庭の小草の夏かりもよのうきにこそならひそめつれ

庭のいといたうしげりけるげにやむづかしげなる蟲などのむくめくもうるさくてもとよりうゑぬ草は拂はせなどするによめる

秋の野につくりし庭もおのづから花さかぬ草のかくやしげりし

またある時

かりはらふ跡よりしげる夏草にこゝろの道のゆくへをぞ見る

風前夏草

はらはじな庭の夏くさ繁ればぞ露をたづねて風もとひける

來客夏稀

夏の來て庭草しげくなるまゝにかれこそまされ宿の人めは

夏野

日をさふる陰しなければおのづから野べの往來は夏ぞまれなる

いとあつき日人の野べゆくを見て

みな月のてりはたゝける日ざかりに野べゆく人やあはれ旅人

瞿麥

露だにもいたくな置きそうれを重みまだかたなりに見ゆるなでしこ

天つ日の色にはさけど草がくれ光すゞしきなでしこの花

瞿麥副牆

咲きにけり殿のみつぼのあやひがきかきねのまゝに植ゑし撫子

なでしこのさかりなるを見て

花の色はからくれなゐに匂へどもみなしき島の大和なでしこ

かでの小路の家にうつりすむにゆりなでしこの露にしをれて咲きたるを

かしら見ゆればさきのあるじにいひやる

種まきし人を戀ひつゝ姫ゆりのそひてやねぬる撫子の花

○かれこそまされ云々　人目が離れまさる、人の來なくなる意。離れさ枯れさかけた。枯れは草の縁語。
○日をさふる　日光を支へる。日を妨げる。
○てりはたゝける　照りつける意
○うれを重み　末端の重さに。
○まだかたなりに　未だ發育の不十分、未熟な。
○天つ日の云々　紅色に太陽の色に映え、。
○殿のみつぼ　宮殿の御壺、中庭
○ませのひかき　籬檜垣、檜の薄板で網代に編んだ垣。
○花の色は云々　花は唐紅の色に咲いて支那のものらしいが、皆敷島の大和の名ある撫子である。
○姫ゆりの云々　姫百合の傍に、撫子を[illegible]へ植ゑたのである

この花もほどなくちりてあくたとなりぬたゞ日かずのみうつりにうつりて此のすまひもはやみそか過ぎぬるほどにこのとなりむかひなどにはかなくなりし人三人ばかりもあなり世のはかなさを思ひて

なでしこもさゆりの花もちりにけりはかなき露のみのみ残して

かのさかりなりしをり

撫子の露のひるねをうらやみてうなだれけりな姫ゆりの花

またおもひし

我が宿に似げなきものぞなでしこに添ひてふしたる姫ゆりの花

照射

風わたる夏野の草の露のまの身を忘れてやともしさすらむ

曉照射

うかるべきむくいにかへてともしさし鹿まつ業もやすけなの身や

曉に夜はなりぬらしさ月山木のまのともしかげしらみぬる

山中照射

鹿のたつあら山中のあらをらがよすがはよるのともしなりけり

鵜川

○撫子の露のひるねを云々　露重きため撫子のうなだれたのを、晝寝で眠れたのである。ひるは乾るで露の縁語。
○照射　ともし、山中で火串に小松明を點じ、鹿が明きを慕ひ寄る時射殺するをいふ。
○ともしさす　照射に火を點ずる意。
○うかるべきむくい云々　殺生戒を犯すので、悪報ある可き意。その悪報に換へても照射し鹿を待つ、獵師の業の安け無き身の上よ。
○よすが　たより。
○鵜川　鵜を用ゐて鮎とる事をかく云ふ。

夕月の入方ちかき山かげはやみもまちあへずう舟さすなり

かかるみの契りもかなしうがひ人なれものちせを思はざらめや

かゞりさす夏みのう舟かずそひて下す夜川は山かげもなし

夜河篝

みじかよのう舟のかゞりもえ盡きば何に後せのやみをてらさむ

深夜鵜川を

深きよの川せにのこるかゞり火やおくれて下すう舟なるらむ

大ゐ川くだすうぶねのかゞり火のさよ更けぬれば稀になり行く

毎夜鵜川

夕月の入るさのおそくなるまゝによな〳〵更けて下すかゞり火

螢をよめる

けちはてぬ思ひの草やくちてしもほたるとなりて身をこがすらむ

雨ふるべくくもれりといふに松の木のまのきらめくは星にやとおもひて

はるゝ夜の星かと見れば松の葉にすがるほたるの光なりけり

橋螢

とぶ螢もえこそわたれ川橋のくもでに物や思ひみだるゝ

○う舟さすなり　鵜を運ふ舟が棹さし出る意。

○のちせ　後の世、未來の世。

○夏みの　大和吉野の川の名。夏身、又菜摘川。

○かずそひて　數加はつて。

○何に後せのやみをてらさむ　篝火が燃え盡して消えたら、何によつて夜の闇を照らさうか、佛の光明がなくなつたら何で未來の世の無明を照らさうかとかけた。殺生を忌む佛家の思想である。

○入るさ　入り際。

○けちはてぬ云々　消してしまへない思ひ草が腐れ化して螢となり、その螢となつて身を焦すのであらう。禮記月令に「腐草化爲螢。」思ひ草の[illegible]を螢として取扱つたのである。

○くもでに　蜘蛛手に、八方に、いろ〳〵に。伊勢物語の八つ橋の條から出た語。

窗前螢

八重とづるむぐらの露やもとむらむよな／＼すだく窗の螢は

小扇撲螢

うなゐらがきそふ扇を打ちやめてあがるほたるを悔しとぞ見る

蚊遣火をよめる

たきさしてのこる煙もすゞしきは月になる夜の軒の蚊遣火

さよ更けてもえほたれたるかやり火の薄きけぶりに月ぞにほへる

かやり火の煙にむせぶみどり子が聲もいぶせき宿の夕ぐれ

里蚊遣火

かびたつる賤がけぶりのいぶせさもよそめにしるき里の夕暮

六月いつかといふに鶯の庵のあたりさらで啼くに

鶯よさのみな啼きそなれとても老いぬる聲は誰かすさめむ

瀧上蟬

おちたぎつ岩せの音にあらそひて山下とよみ蟬ぞ鳴くなる

五月三十日さながらふりてみな月の初めさへはるべくもなければ

名にふりしさ月はさてもいかゞせむ晴間だにあれみな月の雨

○すだく　蟲のあつまる意。

○もえほたれたる　燃え殘つて微かな。

○かびたつる　蚊火立つる。蚊やりを燃やし立てる。いぶせきは煙のいぶせきと、賤しくきたないとをかけた。

○おちたぎつ　落ちて湧き返る。○とよみ　鳴り響かせ。○さながらふりて　其のまゝ續けて降つて。○名にふりし　五月は雨の降るにきまつて居り、五月雨の名も古くなつた。○さてもいかゞせむ　さて詮方もないが。五月はし方がないが。

夕がほのかた大ひさごかたへになれり

はしたなくみのなりぬとや思ふらむつゝましげなる夕がほの花

ある年の六月中の八日などにや筑前介信郷のそゝのかして左衛門尉東興宮寄など伴ひ伏見のみすといふところに蓮池あるに舟をうけてあそびし歌よめといへりしに

かつまたのむかしの蓮も玉だれのみすの池の花におよばじ

蓮

ありときくむねの蓮も池水の濁りにしめる身にはひらけず

荷露似玉

玉かとてつゝめば消えぬ蓮葉におく白露は手もふれで見む

ひむろ

いかでわれもるてふ人に身をかへてひむろの山に夏をすぐさむ

夕立をよめる

山陰やめなれぬ瀧を岩がねに殘してはるゝ夕だちの雲

夕立を見て

みるがうちに雨きほひきて夕立の雲にかくるゝ嶺の松原

○夕がほの云々　夕顔の花の絵、圖中傍に瓢の大きいのが描いてある。

○筑前介信郷　羽倉信郷、荷田東満の孫、信満の子、蘆庵の門人、伏見稲荷神社の神官。従四位播磨守となる。

○かつまた　勝間田池、大和生駒郡、萬葉集巻十六に新田部親王出遊の事を記して居る。

○ありときく云々　心中に蓮ありと云ふ佛教思想、心蓮、自性心の清淨を蓮に譬へた。

○ひむろ　氷室、山などに室を造り雪を貯へ置く所。

○もるてふ人　守ると云ふ人、氷室の番人。

○めなれぬ瀧　見なれぬ瀧、夕立で出來た一時的の瀧。

○きほひきて　競ひ來て。

○あしときー雲の走る脚が早いのであらうか。

○むな車　空車、からぐるま。

○うす霧の山　秋の氣分のうすく催したこと、霧のうすいのとをかけた。

○秋はすみける　秋の氣分の澄んで居ること、秋の存すること。

○かげろふ　陰となる。

○夕さりくれば　夕しありくれば、夕になれば。

雨よりも雲やあしとき夕立のはれもあへぬに日影こそさせ

野夕立

ゆふだちの雨そほふ野のひとつ松たのむかげとやいそぐたび人

遠夕立を

けふもまた夕立すらし山のはのとほき梢の雲がくれゆく

空うちくらがりていま夕立のきほひくるにくるまをはしらせてゆく音を聞きて

鳴神の聲かときけばむな車ぬれじと雨に急ぐなりけり

夕立のなごりすゞしき山を見て

夏深き雨のなごりの夕より秋のけしきのうす霧の山

避暑

水音の涼しき山のまつの陰あつきさかりはこゝに過さむ

納涼

まだ知らぬ人に告げばやおく山の清水がもとぞ秋はすみける

夕納涼

みな月の照る日もさすがかげろふの夕さりくれば風ぞすゞしき

梅津川にのぞみて亭ある所にて夕がたまであそびていとすゞしきに

みなぎしの柳かたよる河風を袖にならしてけふは暮しつ

いとあつければ例のごとねやへもえいらでよめる

くれゆけど猶あつき日は端居して月なきよるも風をこそまて

あつき日松の梢のたえず聞ゆるに

山風が松にやどしてきく宿は吹きおちぬ閒も涼しかりけり

泉

いつしかと思ひし秋は山陰のいづみの水に今もすみけり

泉聲入夜寒

音きくもよるはひやけきま清水をいかで日ぐらしむすびなれけむ

燭影寫水

わたどののともしの火影またゝきて夕風ながら寫すやり水

扇不離手

たが手より置きかはじめむまどゐして風まつ宵のそでの扇は

扇風秋近

程もなく涼しかるべき秋ぞとはならす扇のかぜぞ告げける

○梅津川　山城葛野郡梅津を流るゝ桂川を梅津川と稱する。
○亭　ちん、四阿、あづま屋。
○みなぎし　水岸。
○袖にならして　袖に鳴らすと、馴らすとかけた。

吹きおちぬ閒も　宿の部屋に風の吹き落ちぬ間も。

○ま清水　眞清水、眞は接頭語。澄すにかけた。
○いかで日ぐらし云々　夜は水の音だけでも冷いのを、どうして終日手ですくひなれたのであらう。
○わたどの　渡殿、幅の狭い廊下。
○夕風ながら　夕風も共に。
○やり水　池から流れて庭をめぐる泉水。
○たが手より云々　誰の手から最初扇を離してそこに置き始めるであらう。

六月中ごろ大雨うちつゞき陰雲はれざりける時

土さけて照るみな月も名のみして曇りふたがり日の影もみず

祇園の神輿をあらふ日あめふるに

八雲のや神のみこし洗ふには天津水さへふりそゝぎけり

いとあつき日そらのなべてくもれるに南にわづかばかり雲間の見えたるに

わづかなる雲間をもりて天津風吹きもやくると待つぞ久しき

雲間やゝひろごりて風吹きおつるに

わづかなる雲間をひつゝあまつ風まちし袂に今宵吹くなり

世の人はなどやかくたゞごとなるとわらはむかし

涼しげにはれたる夕あはた山の返照をめづるほどにかげうつろひければ

あはた山たかねの夕日消えにけり入相のかねも今ひゞくめり

六月末つかた友だちのもとにて夜ふくるまで物がたりして歸るに北風いと涼しく吹きぬこの頃深更になればかくあるをおぼえて

夏深きよはの麻ぎぬに吹きそめてをり〳〵ならす袖の秋風

○土さけて　日に乾燥し土がわれて。

○祇園　京都四條の東。八坂神社をいふ。

○そらのなべて　空全體。

○世の人はなどやかく云々　世間の人はどうしてこんな平凡な事を詠んだり[illegible]のだらう。

○返照　夕燒。

○うつる日影もをしまれず　移り行く日、過ぐる光陰も惜しまれず。

○ほしうり　乾した瓜、漬物にするためにほすのであらう。風ゆふだちて　夕立ちて。夕方に吹き立ちて。

○心ほぞち　心細いと蔕落ちとをかけた。蔕落はよく熟した瓜。

○めうつし　目移し。目を轉じて他の物を見る事。

○露にみだれむ　露に葉の亂れると、心の亂れとにかけた。

○猶へだてけり　うすい袖が隔てて邪魔に感ずる意。

二十八日ごろにやいとあつき日

此の頃はうつろ日影もをしまれずくれ行く空の風をこそまて

瓜

賤の女が門のほしうり取り入れよ風ゆふだちて雨こぼれきぬ

ほぞち

かかる身のはてをつらく〱思ふには心ほぞちとまづなりにけり

みな月中ごろきり〲すを聞きて

きり〲すな鳴きそ我も夏かけて秋をかなしぶ山陰の露

夏草にまじりて女郎花のさけるを見て

めうつしの花なき頃の女郎花なまめく色のほこらしげなる

すゝきのいたくしげるを

夏ふかくしげるにつけてむらすゝき露にみだれむ秋をこそ思へ

夏風

なつの日のあつきさかりは吹く風もうすき袂を猶へだてけり

暑き日は草ばに待ちて見る風も猶袖までは吹きもかよはず

夏夕

〇音羽川　東山の南、清水寺境内の音羽の瀧の上流。

〇あやとも夏は云々　夏の暑い時には、錦さへ綾さへ熱い、そんな物はいらぬ、夏と無しとかけた。

〇かけしく　掛に敷くと月の影しくとかけた。

松陰のちり打ちはらへけふの日も夕風たちぬゆふすゞみせむ

夏海

夕されば南の風に雲消えてみるめすゞしき沖のいさり火

夏河

水無月の照る日にかれてふみ渡るさゞれもあつき夏の山川

夏瀧

涼しさをこゝにせき入れて音羽川たきの外をや夏は行くらむ

夏田

はるばると見ゆる水田の若苗に葉なみかたよる風ぞ涼しき

夏筵

にしきとゝあやとゝ夏はすがむしろかけしく月のよるの涼しさ

夏鐘

なつ來れば背あかつきの短夜に時つくかねの聲もひまなし

月眞院にて月あかき夜かねを聞きて

月にこそひるのあつさも忘るゝを誰にねよとのかねひゞくらむ

夏蟲

夏の野に露をもとめてとぶてふのつばさに見ゆるも著き日の影

六月祓といふ心を

いたづらに過ぐる月日と身のうさとかたへはをしき夏はらへしつ

荒和祓

みそぎ川なみかずならぬ人がたははらへすつとも猶やしづまむ

夏祓を

何事もすつるとならば身につもる老もなごしの祓ならなむ

みなかみもあはれと見ませ老の波立ちそふ身にもはらふうきせを

つごもりがたにはらへの日ぞと思ひいでて

けふごとにはらへてすてし年月のいかに殘りて老となりけむ

みな月のはての日かもにまうでて

さても猶うきせはおなじみそぎ川又人なみに祓をやせむ

うづまさにあるころ難波の呂蕉が春はこむとかねていひたりしに此の里はなにのもてなしもなしかきねのわらびもえむ頃かならずなどいひやりしが音もせで夏もなかばにかれより「かならずと契りし春もくれはどりあやめふくなる月もへにけり」とありけるかへし

○六月祓　六月晦日、年の半分の罪をはらひそゝぐ神道の儀式。夏越祓、夏祓とも云ふ。

○かたへは云々　半分は、一方は惜しい。月日の方が惜しいのである。

○荒和祓　あらにごのはらへ。六月祓と同じい。

○なみかずならぬ　人並の數に入らぬ、なみは川の緣語。

○しづまむ　川の緣語。

○なごし　夏越、その祓は六月祓と同じい。

○みなかみ　水上と、皆神とかけた。老の波、立ちそふ、憂き瀬、皆緣語。

○つごもり　月ごもり、晦日、玆では六月三十日をさす。

○かも　賀茂、京都の北、上賀茂、下賀茂兩社に分れて居る。今官幣大社。

○くれはどり　暮れにかけた、あやの枕詞。吳服綾服と續くから來たのである。

契りつるをりはしばしと待たれしがわらびもわかずしげる夏草

ある夜の夢に母とともに北の山の木深くしげりたるを見るにともしの松のしらむけしきのをかしきを母のよめとのたまへれば夢中に

山とほき松の木の間に殘る火や夜のともしの名殘なるらむ

久しく心地そこなひてうづき十五日といふに病の牀をはらひたる時

ながき日を春よりふして夏引の麻のをがらの空しくぞへし

夏の末つかたにやありけむある亭に人をまねきけるに女郎花を折りて花がめにさされけりその待ちし人のうちにさはることありてこざりけるもとへまたの日其の花をつかはすあるじにかはりてよむ

女郎花色ゆゑ君がとひくやとまちてをりつる一枝ぞかし

軒みじかくてさし入る日のほとぼりてたへがたかりければ夏の末つかたすだれこもなどにてひさしつくらすとて

我も世を秋田にさせるかり庵のひさしからじのたのみばかりぞ

古人のよめる句を題にてよめる夏の歌の中に

ひとへなるすゞしもあつき夏の日につくしのわたは見るもうるさし

みな月のもちにけぬればその夜又降るをやふじのはつ雪にせむ

○病の牀をはらひたる時　病氣全快して牀をあげた時。
○夏引の　春から夏とかけた、麻の枕詞。
○をがらの　麻殼の如く。
○我もよを秋田に　我も此の世を厭きはてたにかけた。
○させるかりいほ　設けた假廬。
○ひさし　廂と久しさをかけた。
○ひとへなる云々　一重の生絹衣には涼しいと云ふ語音があつても暑い夏の日に、筑紫の和田と綿と云ふ暑苦しい音があつて見るもいやだ。
○みな月の云々　萬葉集卷三山部赤人の「富士のねに降り置ける雪は六月の十五日に消ぬれば其の夜降りけり」に據つた。

みな月の暑きさかりは草の葉のゆるぐばかりの風もともしき

あつき日をいのちのうちと知りながら心よわくも秋をまつかな

名所をよめる時布計里を

やどごとに秋や待つらむ夕風のふけの里人かどすゞみして

楢小河

風わたるならの小河の夕すゞみみそぎもあへずなつぞながるゝ

勝間田池

海だにもかはる世ぞかし早苗とるあたりやもとのかつまたの池

布留

ふるの山宮ゐあれぬと神やつこいかにわぶらむさみだれの頃

葛飾

五月雨はくむ人もなしかつしかやにごり初めたるまゝの井の水

名取川霖雨を

はれ間なきさ月の雨の名取河もと見しせゞやふちの水底

筑摩

さみだれはあやめの葉末なみこえて岸のうはてにつくまえの水

○布計里　伊勢鈴鹿郡布氣。風吹けにかけた。

○風わたる云々　新勅撰集巻四「風そよぐならの小河の夕暮は御祓ぞ夏のしるしなりける」に據つた。

○海だにも云々　書言故事等に見える「滄海變爲桑田」に據つた。

○布留　大和山邊郡、布留神社。

○神やつこ　神社に附屬して雑役をつとめる下僕。

○葛飾　下總葛飾郡、眞間の井は古跡が今[illegible]境にある。

○名取川　陸前名取郡秋保から發し、廣瀬川と合し海に入る。

○筑摩　近江坂田郡入江村、太湖畔の一村、故に筑摩江と稱する。岸の上邊につくとかけた。

○藪浪　越中礪波郡藪波村。
○大葉山　相模高座郡大庭か。
○みむろと　三室戸。山城宇治郡宇治村大字莵道。
○しぞく　親屬、親類。
○あふ人も夏草しげみ　逢ふ人も無しと夏草とかけた。
○心あての　目的の。
○大とこ　大徳。僧の尊稱。
○おこなひ　佛教の行。
○たのもしきそら　時鳥の啼きさうな空模様。

藪浪里

降る雨にかやりの煙うちしめりいぶせく見ゆるやぶなみの里

大葉山

霞たちこのめけづりし程もなく大葉のやまに夏は來にけり

さきの日宇治の山ざとにたづね入ることの侍りしが友とする人はみむろとのあなた何とかやいふ里にしぞくありてそこにとゞまりぬそれよりひとり山ふかく道も知らでまどひ行くに鳥の聲松のひゞきいと心ぼそし

わけなれぬ山のした道あふ人も夏草しげみたづねわびぬる

今は二十餘丁も來ぬらむと思ふに里ちかくなりぬるなるべし樵歌の聲ほのかに聞ゆ知る人にあひたらむ心ちしていとうれしちかづきてとふに今しばし行きて木深くしげりたる谷の水音聞ゆるかたにぞさとはあなりとこたふをしへにたがはず心あての庵にゆきつきぬあるじの大とこおこなひのいとまにてのどかにうち物がたらひて「おもはずよ青葉がくれの山里に都の人のとはむものとは」再吟におよぶにもだしがたくて

とひよれば言葉の花の時わかずにほふみ山の木がくれの庵

ほとゝぎすは聞き給ひつやと問ふによべはおとづれ侍りきけふもたのも

しきそらにこそあめれことよひはとゞまりて待ち給ひねかし日もかたぶきぬいで其の道の行くてにとまりつる人をもこゝにいざなひてむ文たまへ人していふともおはさじ我ゐてこむといはるれど分けこしほどを思ふにいとはるかなる道をといへば京の人はさもおぼすべかめれど山ぶしの身には何ばかりの事かはとせちにこはれてそのひとのもとにとて

山ふかく尋ねもすべき時鳥人つてにやは聞きてかへらむ

軒ばの山のそばのかけぢげにものならず見るがうちに行き過ぎぬこの寺はひがしにむきて旭耀山といふ額あり南は庭より西につゞきて分けこし山なりあるじいと情ある人にて前栽にはさゆりなでしこすゝき萩さらぬ草をも見どころおほくうゑわたしてしげりあひたるにまだこぬ秋の面かげも立ちそひていとをかし東のみね高くそびえてふもとに水の音幽に聞ゆ作者にとへばこれなむ横川といふなりかの木こりのをしへし川なるべしすべて心もすみわたる所のさまなり

我もよをうぢの山べに家ゐせむつねに心のかくもすむやと

おもふにもまづ思ひいづる事ぞおほかるやかく打ち詠むるほどにあるじの聲きこゆいとはやうも物したまひしかなといふにいざなはむと云ひつ

〇分けこし程　分けて來た道程。
〇山ぶし　山伏、山に起臥する意。
〇かけぢ　懸路。けはしい山路。
〇ものならず　險阻を何とも思はず平氣で。
〇情ある人　風雅な人。
〇横川　宇治川に流れ入る宇治郡山中の小流であらう。
〇我もよをうぢの山べに云々　我も此の世をもの憂く思ふとかけた住むと心の澄むとかけた。
〇物したまひしかな　行って來られたよ。

る人のかへりごとには道のあないもとめてこれよりとありむら雨をりをりしてまつかひあるべき空のけしきに都の友をさへおもひいづ

おのがすむ山ほとゝぎす尋ねきぬまだ世につけぬ初音きかせよ

かの人はいたう打ちぬれてまどひきぬめづらかなる道のほどの物がたりなどするに鶯を聞きつとて「散り殘る花もやあらむ山深み猶春ながらうぐひすの鳴く」我はきかざりけるもねたくて

わがためはうぐひすだにもつれなきを山ほとゝぎすいかゞあるへき

などたはぶれごとどもいふほどあるじは何くれと谷の底よりもとめ出でてもてなさるゝもいとめづらかに興あり暮れもてゆくまゝしめやかなる雨に水鷄のおとづれけるを

柴の戶もまださしあへぬ夕暮にたゝく水鷄のこゝろみじかさ

友の人「あけくれの戶ざしさだめぬこの庵になれてくひなのさぞたゝくらむ」あるじ「夜もすがらねてもきかなむ柴の戶の明くるも知らずたゝく水鷄を」樵歌のきこえければ「都人たづねてきぬと聞きしよりましばの道やいそぐ山がつ」といへるに

暮ふかき道しるべとやをちこちにうたひかはしてかへるしば人

○まつかひあるべき空　時鳥を待つしるしのある空の樣子。

○おのがすむ山ほとゝぎす　汝の住む山を尋ねて來た、山時鳥よ、であるから未だ世に聞かせぬ初音を聞かせよ。

○ねたくて　口惜しくて。

○さしあへぬ　とざし終らぬ。

○明くるも知らず　柴の戶を明けると夜の明けるとにかけた。

○しば人　柴人、樵木を刈る人、木こり。

友の人「山ひとのうたひつれたる聲だにも遠ざかりゆく夕さびしも」かかることどもを口ずさぶほどにくれはてぬれどそれかとたどる一聲もきこえねばつれ〴〵なるまゝに所にあひたる題どもいだされたり

山家松　　愚詠

かきつめていく世へぬらむ山ざとの軒に木だかき松のことの葉　　あるじ

山家水

むら雨によしにごるとも明暮にすましてくまむ山の井の水　　友の人

山家橋

たぎつ瀬のながれにわたす丸木橋このやまざとのありとばかりに　　愚詠

山家路

分け入るも心ぼそしや山ざとのひとめまれなるみちしばの露　　友

山家煙

山ふかみいつかはかかる宿しめておなじ眞柴のけぶりくらべむ　　あるじ

山家暮

やまでらの法の戸ぼその明けくれはしきみになるゝこけの通ひ路　　愚

山家夢

○それかとたどる一聲云々　それか知らんとさがす時鳥の一聲さへ聞えないから。
○所にあひたる　場所に相應な。
○かきつめて　かき集めて。
○松のことの葉　松の葉と松を詠める歌と。
○たぎつ瀬　水の激する淺瀬。
○心ぼそしや　心細いと路の細いと。
○明けくれは　朝夕はと戸ぼそを明くるにかけた。
○しきみ　しきゐと佛敎に緣ある樒とにかけた。

○さゝ枕　小さい枕と笹にかけた
○[illegible]なければ　と[illegible]こよく時鳥が鳴かないから。
○ふりいでゝ　聲の振り出でたのと、時鳥の聲ふり立てるのとかけた。
○ふりはへて　わざ〳〵の意と、聲ふりてとかけた。
○[illegible]見ゆるに　山家の窓のすきが、夜が白んで見えるので。
○打ちわびて　獨では寂しがりつまらながつて。
○あさけの雲　[illegible]たく雲。
○こゝにもゆづけなどたうべ　こちらでも茶漬でも食し。
○打ち過ぎがたし　素通りが出來ない。
○岩橋　流れの中に石を並べて渡るを稱する。

かりねする山のいほりのさゝ枕なれはあらしに夢もむすばず

かくてふけゆけど猶つれなければ

ふりいでゝ鳴けとはなしにほとゝぎすまつ夜の雨の聲のさびしさ

といひければあるじ「ふりはへて鳴くほどまではあらずとも一聲もらせ雨のよのそら」また友の人「谷水の音もさびしき柴の戸にあはれをそふるよはのむらさめ」とかくかたらふうち短夜のならひにて山まどのひま見ゆるにおどろきてあるじ「ほとゝぎす初音の後のことゝひぞとおもふにたがふあけがたのそら」友の人も「郭公まつかひもなきつれなさをおもふまくらに夢もむすばず」とよめるに

猶ぞうき山ほとゝぎす一聲も待ちあへず明くるみじか夜の空

打ちわびてしばしまどろむほど日さしあがりぬよべの雨なごりなくはれて見おろす谷の樹よりあさけの雲ほそく立ちていとおもしろしこゝにもゆづけなどたうべていざ此のあたり見むとて南に行くにみ山ではまだつつじのさかりなるを人もなければいと打ち過ぎがたし

夏山の青葉がくれに咲くつゝじしのびに殘る春の色かも

谷河のながれにつきてわたす岩橋をかなたこなたにつたひて行くにこゝ

○こ〔…〕である事は支那思想、西陽雑俎などに見える。

○うぢ川　宇治川。玆は宇治川の上流なのである。

○柴ゆふ翁　雑木をたばねる老人

○うきよをわたる道　憂世を生活する道。渡世の道。

○やすげなき世のわざ　楽でない渡世の仕事。

○杣木こる　杣林の木を樵る。

○うきはへだてぬ云々　世の憂き事は隔てずかかる深山にも存するかな。

かしこ築生ひたりこれぞわとせふべき友なめる秋はかならずなど契りても猶いへづとにして母君に見せ奉らばやとぞ思ふ十丁ばかりをへてはまといふ所に出づこゝぞうぢ川なりける薪柴などのたえず流るゝいかなるにかととへば舟もかよひがたき川上よりながしおとして下にて待ちつけてとるなりとぞ其の濱に柴ゆふ翁のかたるめづらかなる事たぐひなし友なる人のよめる「めなれずよ宇治の川上はやきせの水のまに〳〵くだす山柴」とありけるに

せをはやみ舟もかよはぬ山川もうきよをわたる道たすくなり

川ごしの山の高うさかしきそばづたひに山人の行きかふ見ゆよそめもいとあやふしふもとは大きなる岩いくへともなくわざとたゝみあげたらむやうにて四五丈ばかりの瀧おちたり繪にかかまほしきけしきどもなり

おちたぎつ音もきこえず山河の岩瀬をこゆる波のひゞきに

もとの道を半ばかへりて此のたびは東の山ぎはにつきてくるに木をこる山あり斧の音谷にひゞきて幽なりいろ〳〵やすげなき世のわざども見聞くもいとあはれにて

杣木こる賤にとはばやかくてしもうきはへだてぬ山のおくかと

西はやどりつる庵なりげに名もしるくけざやかに見わたさる

あきらけきのりの光も見えてけさあさ日かゞやく山のふもとでら

それより瀧がたきといふにいたる此の道を三十丁ばかり行きて喜撰がすみける跡ありといふにいとゆかしけれど日も午にちかくけふはきはめてかへるべきなればおもひとゞまりてかの庵にてしばしやすらひてたちいづるにあるじなごりつきずとて山のなかばまで見おくらるゝ情あさからず後をちぎりてわかれぬ京にきつきても柴のいほりながらかの地に似るべくもあらねば猶幽閑の氣味しのばしくひとり燈のもとにありつる事どもかいつけ侍りぬ

庵は因性寺　友は作資芳

をの山にある音なしの瀧見むと思ふどち卯月二十日あまり月しらむ頃京をいでて松がさきのわたり山ばなといふ所にやすらふほど東の山ぎはより雲たちのぼりあさけのけぶりこゝかしこに見ゆ

朝けたく山もと見ればたちのぼる雲も煙もいろぞわかれぬ

高野村を過ぎ行けば右にみかげ山あり山もとに一むら松しげりたる木のまより社ぞ見ゆる皇御神のあまくだり給ふ所ときけばいとたふとし小野

○名もしるく云々　旭雛山と云ふ山號の寺であるからだ。

○喜撰　基泉とも云ふ、和歌に長じ、眞言宗の僧、山城宇治山に住む。元山城乙訓郡の人と云ふ。六歌仙の一人。其の住址は宇治山に在る、一名喜撰嶽。

○いさゆかし　非常に行きたい。

○かいつけ　書きつけ。

○因性寺　旭雛山と云ふ點から見て朝日山に在る小寺であらう。

○作資芳　前出、作者錄。

○をの山　山城愛宕郡小野の山の總稱。

○音なしの瀧　山城愛宕郡大原村來迎院の東に在る瀧。

○松がさき　山城愛宕郡、下加茂村の北半里、丘になつて居るので遠望し得るのだ。

○高野村　愛宕郡修學院村。

○みかげ山　御蔭山、比叡山麓、修學院村の東北。御生社がある、別雷神の天降られし址と稱せられる。

郷大原みかげ山とぞ舊きものには見えたる此の道川を右になし左に見てゆく山あひなり石たかくて老いぬるにはいとくるしきにさかしき山ひとつこえて八瀨につく猶山路のはるかに見やらるれば

大原の山路の末のとほければやせゆくほどに身ぞつかれぬる

四五丁をへて右にいる山路ありひえのくろ谷にゆく道となむそのちまたにしばしやすむ今日はつれなき郭公をこそきくべけれと友のいへば

郭公空にこそきけ音なしのたきみに行くといひてなかせよ

かの見えつる山路はるばると分けのぼるにうの花さきつゞきたり

ひむろもるをのの山路は雪も猶消えのこるかと見ゆるうの花

木しげき谷風のいと寒く吹きのぼれば

雪わけていりけむをりのいかならむ夏さへ寒きをのの山道

このみちのいたくさかしきに馬に柴おふせみづからもいたゞきて賤の女のあまた都にいづるにあふをこゝかしこによきつゝからうじて大原の里にいづ此の所より谷ひらけてかなたこなたの里見わたされていとをかしき所なりかかればこそむかし人もおほく住みけれとおもふに老いたる女の何事にかうきよぞかしとかたりあひて行くを聞けば

○八瀨　愛宕郡八瀨村。
○やせゆく　地名と瘦せ行くとをかけた。
○くろ谷　八瀨村の東、叡山西塔の北谷。
○ちまた　分れ道。
○ひむろもる　氷室を番する。
○雪わけていりけむ云々　伊勢物語に見える雪中在原業平が惟喬親王を小野の里に訪れた事をさす。
○よきつゝ　避けつゝ。
○大原の里　愛宕郡、八瀨村の北。

よそめこそすめよく見ゆれ住みなれば又うき事やおほはらの里

そこより勝林寺といふしるしあるかたの道を行くにさきだつ人の時鳥は聞きつやといふに鳴きてけりとおもふはうれしきものながら

谷川の音にまぎれてねたくわが聞きもらしつる山ほとゝぎす

なしもとのむかしの御坊のまへをへて來迎院にまうづ本尊藥師佛天仁の頃良忍大德の融通念佛はじめたまふ所とぞ此の寺のまへを東に入ること五六丁ばかりのぼりてすこし右の谷にいるむかひにぞ瀧はおちくる七丈に四丈ばかりもあらむとおぼゆる巖のなゝめなるをつたひて東より西におつるたきたり世のつねのたきは山ひゞく樣かしましく瀧つぼなどいひて青みたる淵の水まきて見るもおそろしうのみこそあれこはさるけしきなくて見るにあかず聞くにやさしければ酒とうでゝあまたたびさかづきめぐらしかたみにおもふ事いひつゝときうつるまで侍りて

しらぎぬのたゞひとへもて岩がねをつゝむと見ゆる瀧にもあるかな

つたひくるいはほのうへの山水は千すぢみだる絲かとも見ゆ

をの山の岩ねのたきは白雪のこぼすがごとくふるかとも見ゆ

今はとてもとのみちにいでて勝林寺にまゐることにこそまづ參るべかり

○住みなれば　住み馴れれば。
○又うき事や云々　又いやな事の多いことを歎いた。
○勝林寺　愛宕郡大原村にあり、長元二年寂源の創建、天台宗三千院の別院。
○しるしある　標のある。
○なしもと　來迎院の西北に三千院と云ふ寺がある、天台宗延暦寺の別所、梨本門跡とも稱する。
○來迎院　一名三千坊淨蓮華寺、良忍の創建、天台宗延暦寺の別院、大原村の中央に在る。
○天仁の頃　鳥羽帝の御世。
○良忍　尾張知多郡の人、良賀、永意に師事し融通念佛宗を開き、天仁二年來迎院を創めた、天承元年二月一日寂、年六十一、勅して聖應大師の諡號を賜はつた。
○酒こうで　酒とり出で。

けるをとおもへば

瀧見つゝかへるたよりにまうできとたれも佛にさかしらなせそ

　このみちに呂川律川とて二筋ながれたり

あみだぶと打ちとなふれば呂律川水のしらべも聲あはすなり

　この佛を土人證據のみだといふときゝて

魚山の瀧のあたりのあみだぶはのちの世すくふしるしにやます

　こゝにてぞほとゝぎすはさだかに聞きたる

耳うときわがためならし時鳥けぢかく鳴きしいまのひと聲

　又にしの野にいでゝ寂光院を尋ね行くみちのかたはらにおぼろの淸水と石にゑりて水あり此の名後拾遺に見えたり數百年をへたる淸水さだかにそのあとなりや袖中抄にはえふみ山の東といだせりとおぼゆればうたがひなきにしもあらず

大原やおぼろの淸水さだかなるしるしに人を惑はするかな

　こゝはくさ生といふ

山かげや軒ばも見えず茂りあひて草生のさとの名こそ隱れね

　寂光院は西の山ぎはにあり本尊地藏ぼさちふるきものには三尊のみだと

○かへるたよりに云々　歸るついでに參詣したこ。

○さかしらなせそ　りこう振って密告するなよ。

○呂律川　呂律共に、雅樂の兩調、呂は十二律中の陽、律は陰に屬する音調。水のしらべ、聲あはす、皆之に緣ある詞。呂律川は來迎院の東に在る瀧の名、一名音無の瀧とも云ふ。

○さだかに　はつきり、確かに。

○寂光院　山城愛宕郡大原村の西北、草生、[illegible]。[illegible]今の[illegible]。

○袖中抄に云々　[illegible]「[illegible]心につきの影はうかぶや」

○えふみ山　江文山、愛宕郡大原村字井出の西。

○おぼろの淸水云々　[illegible]と云ふが、はつきりしたしるしの[illegible]

○くさ生　[illegible]

○[illegible]小原御幸をさすのであらう。

見えたりこゝも再興までにあともなくなりたるべしあかだな清げにしつらひしきみつゝじなどありあないして建禮門院の御像あはの内侍像ありときけばをがむ繪卷ありと聞きてこひいでて見る後白河法皇御幸の所を平家物がたりの詞をもてかきぬきたり雅經卿の筆といへれどおぼつかなし書は後藤長乗とかありしあるじの尼まだいとわかくていかでかかるさびしきすまひに堪ふらむといとあはれにて所のさまなど問ひきくに常はさしも侍らずかんな月の末懸樋はたえあらしの音のみすさまじうなる頃は都のそらも戀しうなむとかたるもよのうきにかへて聞き侍るなどいはむよりはなかなか心深くおぼえて

かけひだに冬は絶ゆてふやま水にすますす心のおくぞゆかしき

園の筍（たかんな）ぬきてもてなさるゝもめづらし此の寺のうしろに女院の御墓とてありまた南のみちを二丁ばかりのぼりて伊勢兩宮おはしますそのならびに一宇ありてとざせり後にきけば女院御てう度どもをほりうづめたるあとゝぞとかくするほどに日もいたくかたぶけばかへさの道とひて出づえふみ山ときくわたりにて郭公數聲なく

神のますえふみの山のほとゝぎすみそぎやすらむゆふかけて啼く

○建禮門院　平徳子、清盛の女、高倉帝の皇后、安徳帝の御生母。建保元年十二月崩ず、年五十七。
○右京の内侍　藤原伊行の女、建禮門院附きの女房。
○雅經　飛鳥井雅經、頼經の子、新古今集撰者の一人、承久三年薨ず。
○後藤長乗　通稱七郎兵衛、名は光家、金工で法橋に叙せられた、元和二年三月二十六日歿。
○よのうきにかへて云々　世の憂きにひきかへて住みよいなどと尼の語るより却って心深く感じた。
○女院の御墓　建禮門院の御墓。
○御てう度　御調度、家具。
○ゆふかけて　夕邊にかけてと、木綿をかけてとにかけた。木綿かくは神へ獻ける榊に白き緒をかける義。

けさ見し賤の女もやゝかへりけるなるべしこゝかしこの里より夕けのけぶりたちのぼり山路の末はるかに見えて人め絶えたるにうの花のみ河風に打ちなびきたるいはむかたなくものさびし家づとにと折りつゝゆくままにくれそへばうちいそぐたそがれにけさ見し老女にあひぬ

わがごとや老いてつかれし賤の女がおくれてかへるをのの山みち

かへりつくらむほどを思ふもいとくるしこなたはくれ過ぐるほど山ばなにいたり初夜過ぐる頃京にぞいりし

○

春の梅津と名にたてる花のさかりも流るゝがごとくうつり青葉のみどり深くなりゆく木の下麦のはしり穂のめづらかなりしもいつしか色づきわたり刈りもはてぬになが雨うちつゞきいとゞ心のおほゝしき老の寐覺もおのが時えてなく鳥の聲になぐさめつゝあかしくらすにからうじてけふは雲間見え朝日うつれば立ち出でて見渡す宮どころのふるき程よりはすこしあらはなりと思ひしも此の頃の雨に梅やしげりつらむ奥まりて見えみとしろ水ゆたかに絶えぬ惠みうけつゝをちこち千まちづくれる田面いとたのもしく今かへすもあり青み渡れる中に白鷺のむれゐるはまた取り

○やゝ　漸く。

○くれそへば　夕暮が加はつたから、あたりがくらくなりかけたから。

○初夜　こゝでは今の午後八時。

○はしり穂　他より早く出た穂。

○おほゝしき　憂鬱な。

○時えてなく鳥　ほとゝぎすをさす。

○みとしろ水　御戸代田の水。御戸代田は神の御料の田。

○千まち　千町、廣い田の義。

わけぬ苗代田なるべしこゝら行きかふ人に驚かぬもゆたかに見ゆ彼方はおりたちてけふぞ早苗植うめる歌うたふ聲賑しく麥はこなぐるからさをに打ちそへて聞ゆる里のかたにゆけばむね／＼しうたてつゞけたる家ゐの中に岡のなにがしが河にのぞみてつくれるいでゐの亭こそいと興ありけれ名を柳陰といふもしるくみなぎしにいと大きなる柳二三株たてりかなたこなた見やるに山水はるかにはれて西は松尾南は生駒につゞきて見ゆるは大和路の山々なるべし河のをちかたにおりたつは網引釣たれなどすめり橋行きかふ人の木の間より見ゆるもから繪めきてをかしこゝに來て此の頃くしたる心もなごりなくはれぬ京の友にもけさいひやりたればみな來あひてかたみに思ふ事いふも心行くわざなればながき日のくるゝもおぼえず久かたの月さへ波にうつるまでぞありけるかくても猶あかぬ心をかしましきまでいひあへる中に宇米都かはのなつといふことを上におきてよめるをのみかいつくるは後にもけふをおもひいでなむよなるべし

うべしこそしのに鳴きけれ神がきの梅もいろづく時の鳥とて

めもはるにわたす河はし行きかひの絶えず見ゆるやすゞみとる人　維済

○こゝら　多く、澤山。
○おりたちて　田の中に下り立つて。
○麥はこなぐるからさを　麥の如き麥の穂をなぎ打つ殻竿。殻竿は殻粒を分離させる農具。
○むね／＼しう　重だつた風に。
○いでゐの亭　離れのあづま屋。
○みなぎし　水岸。
○松尾　山城葛野郡松尾村、松尾山が在る。
○生駒　大和と河内の堺なる生駒山。
○くしたる心も云々　屈託した心持も全く晴れた。
○うべしこそしのに鳴きけれ　成程しげく鳴く筈であるよ。
○時の鳥　時鳥、時季の鳥の意。

月うつる河ぞひをだにかへるさもわすれて猶やさなへとるらむ　房共

河風の吹きのまにまにうちなびく柳のかげにあそぶすゞしさ　經亮

はるかなる山はさながら水ぐきのみどりにうつすすがたとぞ見る　重愛

のどけしな生ひそめしよりふしごとに千代をこめたる宿の若竹　喜之

夏やとく流れゆく瀬の水の面をふきくる風は秋にまがひて　宗美

釣の絲のながながし日もあかなくにせのぼるあゆも見えずくれぬる　布淑

○水ぐきのみどりに云々　筆を以て線を寫し描く。

○釣の絲のながながし日も　絲の長いと、永い日とをかけた。

六帖詠草秋

秋歌

ふん月朔日になれるに

おもふことひとつもなさであら玉の年の半ばもまた過ぎにけり

初秋

誰とてか身にしまざらむ野も山も色かはるべき秋のはつ風

夏の末秋立ちてほどもなきつとめて桐よりおつるしづく雨のしたゝるがごとし

うけためしきりの廣葉のよるの露をおつるあしたの雫にぞ知る

同じころ夕に

はしゐする袖のにはかにすゞしきはこの夕風に秋や立つらむ

うづまさにて初秋のころ

おそく消えはやくむすびて山陰は露のひるまぞすくなかりける

曉風告秋

○ふん月　文月、七月の異名。

○身にしまざらむ　身にしみて感じなからうや。しまざらむは染むで色の緣語。

○つとめて　早朝。

○うけためし　受け溜めし。

○はしゐする　端居する。

○袖のにはかに　俄にと庭とをかけた。庭ははしゐの緣語。

○おそく消えはやくむすびて云々　山陰で日の出るのが遲く入るのが早いから、遲く露が消え、早く結ぶのである。ひるまは露の乾る間と、晝間とをかけた。

あやにくに身にしむ老のね覺をや尋ねてつぐる秋の初風

曉知早涼

宵のまのあつさはいづらすゞしさにめさめし秋の曉のとこ

初秋露

ふかき夜のねざめのまくら露ぞおく夢のたゞぢに秋や來ぬらむ

幽栖秋來

この夕秋來にけらし庭もせにつゆの玉しくよもぎふのやど

霧わたる芦路しめりてひやゝかにくる秋しるき庭の木隱れ

秋のはじめつかた

きり〴〵す鳴く夕かげの山風によわり初めぬる日ぐらしの聲

人々とひ來て殘暑といふことをよめるに

夏よりも猶たへまうき暑さかな涼しかるべき秋ぞと思へば

初秋いとあつきに

秋のたつきのふの風は身にしみてけふはあつさに又かへりぬる

文月末つかた猶あつかりければ

朝夕のけしきばかりは秋めきて暑さは夏にかはらざりけり

○夢のたゞぢ　夢の眞直な路。

○たへまうき　堪へがたき。

いとすゞしき夕

夏衣袂になれぬ西風の涼しくふきて秋は來にけり

しら雲のたな引きたるくれに

きのふまであやしきみねと見し雲も棚引きそめて秋風ぞ吹く

西風飄一葉

あへずちる桐の一葉のことわりも身に知る老の秋の初風

秋淺向泉

むかふよりのころあつさもわするゝは泉にのみや秋は來ぬらむ

初秋のころ夕立の後いさゝか暑さを忘れたるに

あらましき雨のなごりの夕よりはじて秋の風は吹きける

風すゞしとて人のよろこべるに

みな人のまちよろこべる秋風のなぞしも老の身にはしむらむ

のこりしあつさにはしるして見わたすに野火の焰のかなたこなたにたなびくを

一かたに吹きもさだめぬ秋風を野火のけぶりの行方にぞ見る

又いとあつき夕

○あやしきみねと見し雲も　「夏雲奇峯多」に思ひ寄せた。

○あへずちる　堪へず散る。

○桐の一葉のことわりも　李子卿秋聲賦の「一葉落兮天地秋」などに思ひ寄せた。小なる現象に依り大なる物の變遷を知る義。

○むかふより　泉に向ふと同時に

○あらましき　荒々しい。

○一かたに　一方にばかり。

しばしぞとおもへば堪へてあられけり残るあつさも老のよはひも

秋のはじめつかたあはたを見て

あはた山ふもとのあはふ色づきて薄霧なびき秋風ぞ吹く

七夕の心を

人のよにかけてはいはじながれてもかぎり知られぬ天の川波

夕月はまだきな入りそたなばたのあふ夜ふけぬとかこちもぞする

いつも同じねぎごとすとて

たなばたは耳なれけらしあまたとし同じことのみいのりきぬれば

待七夕

いつしかと思ひし秋はまちつけつ今いくかあらばほし合の空

七夕月

こよひこそ心のやみもはれぬらめ星のゆふべの月清き空

七夕烟

月かげのにほふもすゞしほし合の空だきもののうすき煙に

七夕山

たなばたのつもる思ひをかさねあげば富士もふもとのちりひぢの山

○あはふ　粟生、粟畑、山の名の粟田の縁返し。

○まだきないりそ　まだ早い時期に沈み入るな。

○たなばた　棚機つ女の略、織女星をさす。

○ほし合　牽牛星、織女星の合ふ事。

○にほふもすゞし云々　月の光の照るのも涼しい。空とそらだきの香とをかけ、匂ふと云ふ縁語を用ゐた。

○高ねも云々　兩星の積る思ひの高さに比すれば、富士もその麓の塵の山位の高さである。

ことしの手むけは地儀にやよせむとておもひ出づるまゝを

山

よゝかけて絶えぬ契りはたなばたのいとかの山のはつ秋のそら

岡

我が庵に近きよし田のかぐら岡のぼりてぞ見るほし合の空

野

ねぎかくるふたつの星も一すぢのふる野の道の末てらさなむ

里

逢ふことのときはの里の名を聞かばともにすままくほしや思はむ

河

こよひあふ星の光もにし川にかたぶくまでも更けぬなるかな

橋

こよひのみわたしやすらむたなばたのたへぬ涙のみなぞこのはし

濱

けふことにふたつの星のならび濱ならべむかげもいく秋の空

七夕に信美がとひ來てかぢの一葉かきたる箱にうたこふに

○手むけは地儀に　星を祭る供へ物には、地頭儀にしよう。
○いとかの山　紀伊有田郡絲鹿山、棚機の絲にかけた。
○よし田　京都の東の丘、吉田神社がある。
○ねぎかくる　願ひ祈りかける。
○ふる野　大和山邊郡布留野。
○ときはの里　山城葛野郡太秦村にある常盤、永久變らぬにかけた。
○にし川　備後内郡に在る川、星の西に傾くにかけた。
○ならび濱　讃岐香川郡成相の海岸か、星の並ぶにかけた。
○かぢの一葉　梶の葉に祈る事を書いて流せば、兩星が願ひを叶へてくれると云ふ信仰。

この秋はちりくるかぢに七かへり我がことのはをかきてたむけむ

七夕に葛花を

一とせのうらみもあらじくず花のひもとく秋にあへる棚機

七夕蓮のちれるを見て

さけばちる蓮の花びら見るまなきたぐひもありと星にたむけむ

七夕雁

たなばたはかりをかごとにいひなしてこむ春まではきみなかへしそ

七夕鶴

この夕ねを鳴くつるはおのが經むちよをひとよの星にかすとか

七夕にはぎの花尾ばなくず花なでしこの花女郎花又ふぢばかま朝がほの花といふ古歌をおもひいでてやがてこれを題にして人々にもよませみづからもよむとて

たなばたのかざしにをさせ紫の色なつかしき秋はぎの花

いつしかと思ひし秋のはつ尾花ほにいでてほしの枕にやかる

こよひとや花のひもとく葛かづらくる秋ごとの契りかはらで

ちりつもるたなばたつめの牀夏はうちはらふにも袖やつゆけき

○七かへり　七度、葉のひるがへるにかけた語。

○うらみもあらじ云々　葛の葉は風によく翻るので、裏見と云ふ縁語と恨みとをかけた、ひもとくは花が開くと、星が紐解くにかけた。

○見るまなき　見る間もない程はかない。

○かごと　かこつけ言。

○きみ　夫の君、牽牛星をさす。

○はぎの花尾花云々　萬葉集第八卷に出て居る山上憶良の秋の七草を詠める旋頭歌。

○かざしにをさせ　をは感歎詞。

○ほにいでて云々　穂と星と、ほの音の繰り返し。かるは借ると刈るとにかけた。

○くる秋ごと　來ると繰るとにかけた。

○牀夏　牀と常夏の花とをかけた。一年越しに用ゐるので塵つもると云ふのだ。牀に塵あるは男女の情の疎きを暗示してある。

久方の天のかはらのをみなへし人のさがののうさは知らじな

秋ごとに來てもとまらぬたなばたのかたみに匂ふ藤袴かも

たなばたの秋まちえても露のまの契りをいはば朝がほの花

これよみはてゝ猶人々あまたくるに草あれば木もなどかあらざらむとて七木をかきいでて人々によませみづからも

梶

思ふことかぢの七葉にかきつけてふたつの星にけふはたむけむ

桐

めづらしな軒ばのきりの散りそめてかつあらはるゝ星合の空

桃

さゝがにのいともたのもし思ふことなるてふもゝを星に手向けて

梨

棚機にいざねぎかけて今よりはうきことなしの身ともなりなむ

合歡

戀ひ／＼てあふうれしさにねぶの木のねぶたしとしも星はおもはじ

楸

○人のさがのの　人間の習はしと嵯峨野とにかけた。

○かたみに匂ふ藤袴かも　古今集秋歌に「宿りせし人の形見か藤袴忘られがたき香に匂ひつゝ」

○かつあらはるゝ　一方では現はれる。桐と霧とをかけたのだ。

○さゝがにの　絲の枕詞、蜘蛛の意。

○うきことなしの云々　無い身と梨の實とをかけた。

○ねぶたしとしも　ねぶの木の音の繰返し。兩星は眠たいとも思ふまい。

いく秋ぞ天のかはらの濱楸(はまひさぎ)久しき世よりくちぬちぎりは

楓

わかれゆく星の涙に染みぬべしまだ色づかぬ秋のかへでも

七夕蟲

としごとにまつぞ久しきたなばたのあふはこてふの夢の一夜を

たなばたのあふ夜のてまにかはるとてはたおる蟲はあるよなりけり

七夕七首うたあまた見るほどに日くれにければ例のごと七首もよまで手向くとて

七夕絲

七種にねがはば星やみまがはむたゞ一ことのはにも知らなむ

七夕衣

打ちみだれむすぼゝれたる棚ばたのこゝろの絲や今宵とくらむ

七夕扇

かさねても夢とや思ふたなばたのかへし馴れたる天の羽衣

星夕燈火

たなばたの手ならす宵の扇より吹きやそむらむ秋の初風

〇濱楸　きさゝぎ、紫蔵科の植物、久しと言はむための序詞。

〇てまにかはるとて　織女星が夫に逢ふため機織るのを休む、其の間に代ると云ふので。

〇はたおる蟲　織機蟲、現今のきりぎりす。

〇みまがはむ云々　眼うつりして間違へるであらう。唯一言葉こ、梶の葉を思ひ寄せたのである。

〇打ちみだれ云々　亂れ、むすぼほれ、とく、皆絲の縁語。棚機に思ひ寄せたのである。

〇かさねても云々　重ね、かへし、皆衣の縁語。かさねてもは二人同衾の意。

〇手ならす　手に持ち馴れる。

ともし火のかけ更けにけりあすもまた手向けむ星の契りならぬに

牛女悦秋來

思ふことなるてふけふの悦びにたへずや星の瓜まろびせむ

夜更憶牛女

月入りて夜の更けゆけばたなばたの心のやみもさぞなとぞ思ふ

七夕後朝

けさはまた天の羽衣立ちかへりうらみやすらむうすき契りを

露を

かりの世を思ふ淚かかべに生ふるいつまで草に結ぶ白露

とりたてていへば色なき露ながらあやしく花の光をぞそふ

百草の花といふとも秋の露おかずばかかる光をも見じ

はぐゝみてうるふを見ればおく露や秋のこぐさのちおもなるらむ

色なしといひなおとしそ草も木もちくさにそむる秋の白露

苔路露

人とはぬ庭の苔ぢにしく玉は秋くる宵の露にぞありける

太秦寺にて露のいとふかきを見て

○瓜まろび　瓜の如くころび轉じて喜ぶ形容。
○心のやみも　月の縁語、別れが近づいて心のくらくなる義。
○さぞなとぞ思ふ　さぞかしであらうと思ふ。
○けさはまた云々　立ちかへり、うらみ、うすき、羽衣の縁語。
○いつまで草　壁、土塀などに生ずる雜草、いつまで生存するかはかない形容に用ゐる。
○あやしく　彩と怪しくにかけた。
○ちおも　乳母。それで、はぐゝむ、うるふ、こくさの如き縁語を用ゐた。
○いひなおとしそ　惡く言ひけなすな。
○ちくさ　千種と千草とかけた。
○秋くる宵　人とはぬに照應する語。

我だにもすまずなりなむ秋かけて思ひやらるゝ露の古寺

　露ふかしといふ句をはじめにおきて

露ふかし雨のなごりの野べよりもはらはぬ庭の葎よもぎ生

　ある人の悲露といふ心はいかゞよみてむととふに

むすぶよりけやすき草の露の上をおもへば袖ぞまづしをれける

　夕やみにいなづまを見て

夕やみのあやなき小田をもる賤が心なぐさやかよふいなづま

　稲妻

遠近の見えさす野田のいなづまはくらきをそふる光なりけり

　たままつらむとするまへの日ある人の蓮花をおくりたるにこれよりいもをなむやるとて

いたづらに葉のみ茂りて花さかぬ胸のはちすに似たるはたいも

　たままづりするとて

みそなはゞきませ亡きたま此の秋も猶ながらへてむかへまつるを

　すみかのたび／＼かはりてけふにあふを思ひて

なきたまのあやしとや見むけふごとにむかふる宿のあまたかはれば

○むすぶよりけやすき　結ぶと同時に消えやすい。

○心なぐさやかよふいなづま　小田を耕す賤の男の、心慰めに通ふ稲妻。稲妻は女性に擬したのである。

○胸のはちす　心蓮、自性心の清淨を譬へて云ふ。蓮華三昧經に「常住妙法心蓮臺」。

○はたいも　畑芋。

○むかへまつる　迎へ奉ると、祭るをとかけた。

○けふごとに　魂祭る此の日毎に

　またの日何くれのものをにへにして

おりたちてつくりなしたるはたつもの今日のみあへにわがたてまつる

　たままつる夕おもふことありて

我死なばわがちゝはゝのなきたまをむかへおくりて誰かまつらむ

我死なばわがなきたまは來む秋の野べの尾花や招きてあらむ

　またの夜舟のかたに火ともせる見て

なきたまをおくるみのりの舟なれば西の方にぞへはむかひける

　七月十七日堤の家にあそびて見るにひがしの山に大もじのかたちに火をともせり年ごとに昨日の夕なりしをことの外の雨風にてけふになりけるなるべし文字のかたちこと所にともすよりもいきほひことなりなどとりどりいふ程にかたへより消えゆく諸行無常のことわりにもれぬもいとあはれと見るにみねほのめきて月さしいづ

ともす火は消えてあやなき高ねより光をかへて月ぞいでくる

　をぎ

こと草も吹きはすらめど荻ぞまづしらせ初めつる秋の初風

　荻驚夢

○にへにして　供物にして。
○はたつもの　畑つ物、畑に出來た物。
○みあへに　饗應に。
○みのりの舟　御法の舟、佛教で衆生を救ひ乘せて彼岸（極樂）へ到達せしむる佛の力を舟に喩へた。
○西の方にぞ云々　西方淨土へ舟のへさきが向つて居るよ。
○大もじのかたちに云々　東山中の如意嶽の山腹で、毎年陰曆七月十六日大の字形に火を焚く、室町時代から起つたと云ふ。
○昨日の夕　七月十六日。
○こと所に云々　京都の北方、松崎、大北山等でも焚くからである。
○諸行無常　あらゆるもの永久性なしの意。
○月ぞいでくる　月は眞如の光と稱し、永久性をもつ佛の本體に喩へたのである。
○こと草も　外の草も。

老いぬれば秋のはつ夜のはつかなる荻の音にも夢ぞさめぬる

月前荻

風よりも身にしむ色は月かげのほのめきそむる軒の下荻

萩

はぎのさかりなるを見て

秋風に鹿のねきこゆたかまどの野べのまはぎの花やちるらむ

風たつな雨もなふりそ山姫の萩のにしきをさらすけふなり

禪林寺の萩見にまかりたりしにたとしへなく靜かにて「てる日のひかり見るときなしに」といひしふることゝ思ひいでられて

山深み露にうもれて秋萩の花の盛りも見る人ぞなき

萩の宴せしに朝萩を

朝まだきしらみて見ゆる秋はぎは露もや深き花やうつろふ

身のいたうよわくなりける秋はぎのかた枝のこりたる見て

萩の花久しくのこれ來む秋をまちみるべくもあらぬ我が身ぞ

禁中萩

咲きぬればよもぎがかげもまばゆきたさぞむらさきの庭の秋はぎ

○はつかなる　僅かな、はつ夜のはつと音の繰り返し。

○たかまど　高圓、大和添上郡春日にある野。萬葉集卷二に「高圓の野邊の秋萩いたづらに咲きか散るらむ見る人無しに」

○てる日のひかり云々　古今集卷六「奥山のいはがき紅葉散りぬべし照る日の光見る時なくて」を思ひ寄せたのであらう。

○しらみて見ゆる云々　花の色が白けて見える萩は、露が深いので左様見えるのか、花の色がうつり變じて左様になつたのか。

○むらさきの庭　紫苑、大内の庭と、萩の色の紫とかけた。

名所萩

咲きしよりをばなが袖も紫のむらごに見ゆるまの野のうら萩

遠思秋萩

誰わけて袖ぬらすらむふるさとのみかきがはらの秋はぎのつゆ

夕立してはれたるあとのむらはぎ玉をしけるごとなるを見て

たれ見よと雨の名殘の萩の露風にきらめき日にみがくらむ

萩のかつ〴〵のこれるに入日さすを

夕日こそさしてみせけれこがくれてうつろひ殘る秋萩の花

女郎花

人ごとのさがのにたてるをみなへしあだなる秋の風になびくな

霧隔女郎花

女郎花色のさかりをねたしとや立ちかくすらむ野べの秋霧

女郎花翫露

女郎花かざしにすとかさゝがにのいともてぬける露のしら玉

澤女郎花

をみなへし露のさかりを澤水にうつしておのがかげたのむらし

○をばなが袖　尾花のなびく樣を袖に喩へた。
○むらご　斑濃、濃淡ある染め方
○まの野　攝津國兎原郡眞野。
○みかきがはら　大和平羣郡三室山に對し三垣山がある、その麓の野であらう。
○人ごとのさがの　人の言葉のけはしいさ、嵯峨の地名にかけた。
○あだなる　變りやすく頼まれぬ
○女郎花色のさかりを云々　以下女郎花の歌は、古今集以後の歌に倣ひ、女性と見なしての詠である。
○おのがかげたのむらし　女郎花が自分の美なる姿を恃むらしい。

香川景樹より女郎花にそへて「老いらくの身につきなしとをみなへしすてばすてなむひとめ見てのち」とありしかへし

老いぬればたをらぬのみぞ女郎花何かはよそに思ひすつべき

薄

とはれじの宿になうゑそ花薄ほにいづる秋は人招きけり

夕月のほのめく野べを見わたせば尾花なびきて秋風ぞふく

誰しかもまねくと見しは山もとの田くろにたてる尾花なりけり

かぐらをかにて

秋風になびく尾花はかぐら岡きねがおきふす袖かとも見ゆ

刈萱

日をへつゝ鎌がかるかやつかのまに吹きみだしぬる野べの秋風

おきあまる露をおもみやみだるらむ風のたえまの野べのかるかや

ふぢばかま

ふぢばかまあやなな咲きそにほふとてきて見る人もあらぬ垣ねに

芭蘭

花の色は露のまがきの藤袴にほひのみこそやつれざりけれ

○老いらくの身につきなし　老い行く身に似合はぬ。

○たくろ　田のあぜ。田畔。

○きね　かんなぎ、巫子。地名の神楽にかけた。

○つかのまに　僅かの間に。刈る鎌の柄にかけた。

○おもみや　重さにか。

○ふぢばかまあやな云々　あや、きて、皆袴の縁語。あやなくは無暗に。来て見ると著て見るとかけた。

○芭蘭　芭は蘆、蘭は藤袴。

○露のまがき　露の間と、露の宿れる垣根とかけた。

野　蘭

来て見ればうす紫の藤袴こき香にいかで野邊をにほはす

槿

あさがほの花をはかなと思ひしや千年の後の松を見ぬほど

槿未開

朝がほの咲くをまつ間の久しさははかなかるべき花ともなし

鄰　槿

咲きぬやとやどの中垣かいまめばうちそむきたる朝がほの花

秋　香

種々の中にもわきてふぢばかま菊こそ秋の香はつくしけれ

野花を

みどりなる草のいともてなみなへし花の錦を織らぬ野ぞなき

山寺にまうづるみちにて月草のさかりなるを見て

秋の月はうつろひやすし月草の露のさかりの色にほこるな

秋花逐夜開

ねぬる夜の人まにさきて朝な〳〵見ぬ色そふる秋草の花

○思ひしや　思はなかつた。

○中垣　間を隔つ垣。

○かいまめば　垣間見れば。物のすきから見れば。

○月草　鴨跖草、現今のつゆくさ、うつろひやすしは月にかけた形容

○人ま　人の居らぬ間。

秋花色々

秋草の花をし見れば色々に露も心をうつしてぞおく

法印榮川が畫に秋野のかた

小草咲く秋野を見ればつゆならぬ心もうつる花のいろ〳〵

秋海棠とひとへ菊と垣ねにさきたるかけるに

秋を知る庭の一花二花に色のちくさの野べも思はず

しら河のながれに色々の花のうつりたるを

色ごとに心ぞうつるもゝ草の花のかげゆくしら河の水

雨はれて蝶のとぶを見て

雨はるゝ花野のてふのおのがどちむれて遊ぶはいかゞたのしき

くものいに蝶のかゝれるを見て

飛ぶ蝶のかゝればこそはさゝがにのいとはしきよと思ひ知りぬれ

蟲を

秋寒みわがきぬつゞる窓にきていそがしたつる蛬(きりぎりす)かな

月さゆるかべのあれまのきり〴〵すうちともわかぬ霜よとぞなく

聞蟲

○法印榮川　名は典信、白玉齋と號す、徳川幕府抱の畫家、木挽町狩野の第五世。法印に叙せられ榮川院と稱す、四世榮川古信の子、寛政二年八月四日歿、年六十一。

○ちくさ　色の千種と千草とをかけた。

○しら河　京都の東北の郊外の地名、又同名の河。白い河水に種々の花の色彩が映ずる意。心が移り變ると映るとかけた。

○くものい　蜘蛛の網。

○いとはしきよ　くもの絲といつて厭はしきと續けた。

○蛬かな　現今のこほろぎ。其の鳴聲がつゞれさせと聞えると言ひ傳へた、古今集誹諧歌の中にある。

○うちともわかぬ云々　月光がさえて壁の破れ間から照らし内外の區別も出來ぬ程白い霜よとなく。

○つぶ〳〵と　玉水の玉の緣語。水の滴る音と、かごとがましい蟲の聲にかけた。

○さしやわぶらむ　ほろをつくろひなやむのであらう。

○同じよもぎが云々　蟲の宿は蓬の下陰である、それと同様にたのむかげと鳴いてやつて來る自分の家も、蓬生の賤しい家だの意。

○つねうとき云々　平常は老いて聞えぬ耳をも隔てぬは。へだてぬは垣の緣語。

○われかととへば云々　松蟲の名の通り待つのは自分かと尋ね行けば鳴きやんでしまつて、自分の分けて來たあとの徑で松蟲が鳴く。

○聲ふり立つる　ふり立つは鈴蟲の緣語。

露やうき思ひやしげき夕されば草ねの蟲の亂れてぞ鳴く

曉がたむしを聞きて

いつまでかかくても聞かむ鳴きよわる霜夜の蟲の曉の聲

雨夜蟲

雨はれぬ軒の玉水つぶ〳〵とさゝめくよはのきり〴〵すかな

雨夜のむしのさやかにもあらぬをよめる

月くらき雨夜の窗のきり〴〵すおのがつゞりもさしやわぶらむ

聞蟲

きり〴〵すたのむかげとて鳴きよるも同じよもぎが閨のさむしろ

むしのかしましく鳴くに

つねうとき老の耳をもへだてぬは垣ねの野べの蟲のこゑ〴〵

徑蟲

露わけてわれかととへばねを絶えて分け來し跡に松むしの鳴く

ものへまかる道のうらがれたる野はらに鈴むしのなくを

秋寒くなりゆくまゝにひるまのみ聲ふり立つる野べのすゞ蟲

はたおるむしの

きり／＼すを

いかにうき秋の夜なればきり／＼すこわだえもせず鳴きあかすらむ

なにはより呂よしが消息してある方より松蟲を籠に入れておくりけるい
とよう鳴き侍るとて人々興じけれど翁が耳にはふつときこえざりければ
「まつこともなき老が身は松蟲の聲きくほどの耳ももたらず」とよめる
といひおこせけるかへりごとに

聞かざらば人にきかせてかずをとれ君がちとせを松むしの聲

萩はうつろひはてて尾花はうらなだれよものこずゑは色づきわたりてうち
しぐれたるいはむかたなく物がなし

しぐれつゝふかくなりゆく山ざとの秋のけしきぞあはれなりける

海邊秋風

立ちわたる浦わのきりのひま見えてあしの葉なびく秋の汐風

秋風催興

秋風に吹きかへされて小山田のほなみをよそに過ぐる村鳥

老後秋風をききて

○こわだえもせず　聲が途中で絕えもしない。
○ふつと　少しも。
○もたらず　もちてあらず。
○かずをとれ　多くの數を勘定する方法、十度或は百度目だけを一つと數へて行く事。
○うらわ　浦回。浦の入江。
○ほなみ　穂波、穂の波の如く戦ぐを云ふのかへされ・はその縁語。

いつまでか草木のうへに聞きつらむ我が身をしをる秋かぜの聲

うづまさにあるほど夕つかた風ふきあれてたかき木の枝をれかはらもちりていとすさまじき暮

瓦さへ木のはとちりてふる寺の野分の風に又やあれなむ

野火のけぶりの中ぞらにをれたるを見て

秋風や高くふくらむ立ちのぼる煙の空に横ほれて見ゆ

おなじころ雲のあしとく風ふくべきけしきなる夕

今ふかば民の愁へとなりぬべししなとのみ神風やめてたべ

八朔に

文月くれ月たちかはるけふたのしもいつの世よりかことほぎはせし

こたかがり

あだしよと思はば誰もうづらふす花野をのみやかりに見るべき

霧中初鴈

いくつらぞつばさも見えぬ夕霧にきむかふかりの聲ぞみだるゝ

あしでに

[illegible]

○しをる　草木を萎らせるこ、自分の身を弱らせるにかけた。
○木のはこちりて云々　木の葉の如く散って。ふる寺は降ると古さかけた。
○野分　のわき、野を分けて吹く意、秋の嵐。
○雲のあしとく　雲の動きが疾く。
○今ふかば云々　風荒ければ稲の花散って實らねばかく云ふのである。
○しなとのみ神　風を支配すると信ぜらるゝ科戸神。
○八朔　陰暦八月朔日、農家では初めて其の年の豊熟を祝ふのである。
○こたかがり　小鷹狩、秋の鷹狩を云ふ、獲物が主として小鳥類であるからだ、これに對し冬のを大鷹狩こ稱する。
○あだしよこ云々　うづらは憂、かりは狩こ假こをかけ、皆あだし世の縁語。
○きむかふ　來向ふ。此方へやつて來る。
○このしまの森　山城葛野郡太秦

空のうみやたな引く雲をすさきにて沖こぐ船と見ゆるかりがね

鹿をよめる

秋風はたえずふけども高砂のをのへの鹿はまれにこそきけ

しかの立ちどの

秋風に木陰の霧も吹きはれて鹿の立ちどの月にかくれぬ

旅泊鹿

秋寒き磯山おろし海ふけば波のうきねにをしかをぞ聞く

山田かりのこしたるに鹿ふたつゐたるかた

かり残す小田の田ぬしの心をやつままつ鹿のうれしみて鳴く

うづら

かりにきて過ぎもやられずうづらなく野べのむかしの妹が垣ねを

秋田

我も世を秋田のそほづ露しもにおのれのみやは立ちつかるべき

旱したるところ

てりまさる秋田の月に雨たべと言あげしつゝ賤つゞみうつ

と譬へた。

○をのへ　尾上と山頂とをかけた、尾上は播磨の名所と云はれるが實は地名でなかつたのが謡曲「高砂」などから地名と見做されるやうになつたのだ。

○しかの立ちど　鹿の立てる所。

○波のうきね　波上の浮寝、船中に宿泊する事、憂き寝にかけた。

○かりに來て　狩に來てと假に一寸來てをかけた。

○秋田のそほづ　世を儚きたにかく、田のそほづは田の僧都、案山子の義。古今集誹諧歌に「足引の山田のそほづおのれさへわれをほしと云ふうれはしきこと」案山子よ汝許りが立ち疲れて居るのではない。

○言あげしつゝ賤つゞみうつ　祭を催して神に祈りつゝ、百姓達が雨乞ひの太鼓を打つ。

かきねより見わたして

秋はたのみどりの中にまじれるやおくての小田のかりしほの色

霧

夕霧は物思ふ人の何なれやたつより袖のぬれまさるらむ

初霧を

初ぎりの立ち初めしより草も木も色ことになる秋のやま／＼

霧のいと深き朝もとすみしうづまさをおもひやりて

岡さきの垣ねも見えず霧たちぬ今朝いかならむうづまさのもり

堤霧

川ぞひのつゝみをこめて立つきりに限りも見えぬ秋の夕浪

遠村霧

衣うつ聲は残りて夕霧にやゝかくれゆく山もとのさと

秋晩

遠山は入日のなごり猶見えて野は霧わたる秋の夕暮

夕をわびて

なべてよのあはれと人やおもふらむふりまさる身の秋の夕ぐれ

○何なれや　何であるか知らん。
○たつより　たつは袖の縁語、霧のたつにかけた。
○やゝかくれゆく　だん／＼かくれ行く。
○なべてよの　おしなべて世間一般の。
○ふりまさる　古りまさる。

波となり小舟となりて夕暮の雲のすがたぞはては消えゆく

尾花のみほのかにみえて霧わたる山田の畔(くろ)の秋の夕暮

秋夕

うづまさにてひとりながめて

うしとてもいかゞはすべき心もて入りにし山のあきのゆふぐれ

うづまさの深き林をひゞきくる風のとすごきあきのゆふぐれ

山風はやゝをさまりて立つ霧に林も見えぬあきの夕暮

人とはぬ庭の尾花のほに出でゝたれをかまねく秋の夕ぐれ

草のはら消えてふりなむ露をさへかけてぞおもふ秋の夕ぐれ

雨はれたるに風などもたえていとしづかなるほど

けふの雨に萩も尾花もうなだれてうれへがほなる秋の夕暮

松風はふけどふかねど身にぞしむ山のとかげの秋のゆふぐれ

よそにわが聞きしはものかきり〴〵すなく山陰の秋の夕暮

軒はあれて庭は野となる古寺のふりていくよの秋の夕ぐれ

ま萩ちり尾花みだれて吹く風のやゝはだ寒き秋の夕暮

○心もて　自分の心がらで。

○庭の尾花のほに出でて　尾花の穂に出でと、外形にあらはしてとをかけた。

○かけてぞおもふ　自分の身にかけて思ふ。

○山のとかげ　山のいつも日の當らぬ陰、山の常陰。

○ものか　何でもなかつた。

夕に飛ぶ鳥を見て

とぶ鳥の行くかた遠く見おくれば霧にかくるゝ秋の夕ぐれ

又ある夕に

山とほくたなびく雲にうつる日もやゝうすくなる秋の夕ぐれ

ひとりつく〴〵とながむる暮のさびしきまゝ秋の夕ぐれとおきてよめる中に

遠山田よそに思ひしひたの音も風に聞ゆる秋の夕ぐれ

立ちこめてそこともわかぬかねの音の霧よりもるゝ秋の夕ぐれ

山本の賤も衣をうちわびてながめやすらむ秋の夕ぐれ

雲居とぶかりの涙も詠（なが）むれば袖にぞおつる秋の夕暮

鳴く鹿はこふるつまだにあるものを老いて友なき秋の夕暮

野べ遠く旅行く人の袖の上も思ひやらるゝあきの夕ぐれ

遠（をち）かたの川べに見えししらさぎもねぐらにかへる秋の夕ぐれ

かきねののべにいでて

寂しさは住むやどからのならひかと立ち出づる野べも秋の夕ぐれ

○ひたの音　引板の音、田の鳥をおどす鳴子の音。

○そこともわかぬ　何處とも區別の出來ぬ、わからぬ。

○ながめやすらむ　眺めるであらうさ、長きため息をつくであらうさをかけた。

○袖にぞおつる　雁の涙に誘はれ自分も悲しくなる意。

○寂しさは云々　寂しいのは自分の住む家故の習はしかと思つて。

○駒迎　陰暦八月十五日　左馬寮の使が東北地方の牧場から來る駒

…の關の清水に影見えて今や引くらむ望月の駒」に據った。
〇立ちまちの月　舊暦八月十七日の月の異稱。
〇ほさか　地名、薄の穗にかけた。
〇さがにくらべても　習はしに比較しても。
〇にしとほくはれたる庵　極樂淨土を示顯する意を含む。
〇秋をことわる　秋である事を示す。

も[illegible]隠こそ[illegible]れし望月のこまよりも[illegible]影ぞさやけき

立ちまちの月ににほひて花薄ほさかのみうま引きのぼる見ゆ

月

みちかけを咲きちるさがにくらべても猶花よりも月ぞのどけき

二日月を見て

にしとほくはれたる庵にすめばこそ二日の月の影をしも見れ

落梧新月

ちり初めし桐の一葉のひまより見せて秋をことわる三日月の影

雲まよりみか月のほの見ゆるを

村雲をつなげるいとと見るばかりほそくかゝれるみか月のかげ

四日の夜にや野火の煙の月をへだつるに

月はまだ三日月ばかり影ほそし野火の煙よ立ちなへだてそ

夕月の雲にまがへるを

くれぬまはむらちる空のしら雲にまがひて見ゆる夕月の色

夜々月のけしきのまさるを見て

入る山のよひ〳〵とほくなるがうへに光さへそふ夕月のそら

○仲秋　舊暦八月。七月九月の間で秋の眞中である。
○ありくて云々　茲では、とゞのつまり、結局曇った月の見えぬ夜にでも来るのであらう。
○くる人なしに　葛の蔓を繰ると来るとをかけた。
○心のこまのくつわ蟲　心の駒は意馬心猿、月を見たいと逸る心、駒と轡とをかけた。
○すゞりの海の月影　硯の深い所の水に映る月の影。
○身さへうつりて　身までうつり變つてと月の映るとをかけた。

ゆふべに月を見て

ながめつる野は秋霧にへだゝりて軒ばの松に月ぞきらめく

仲秋十日より三日ばかり夜々月明なり京の人はこのほどにとへとおもへど来ずありくてくもれる夜もや来らむかし二日ばかり例のたゞごとに

くずかづらくる人なしにけふもまた夕日かくるゝ山陰の庭

入相の鐘にきほひて鳴くなるは月まつ蟲の聲にやはあらぬ

夜よしとて人まつべくもあらなくにひとりぞ見つる山かげの月

おもひやる心のこまのくつわ蟲野山の月にわれやいざなふ

うす墨にかけるもじすら老のめに見ゆばかりなる秋の夜の月

うちむかふすゞりの海の月影のさもせはしかるよにもすむかな

あるはきえあるはへだてて白雲のをちにぞすめる月の友垣

心さへ身さへうつりていにしへにかはりはてたる月を見るかな

ふくろふの聲の外なるおとづれや月にすみぬる軒の松かぜ

照る月の傾くまゝににし川の河瀬の音も空にこそすめ

尾張の宗則がもとより、ま萩さき垣ねの蟲も鳴くらめどなぐさめかねむ

松風明月休閑の雲君におくりがたし

十五夜月のはれたるをおもふにわかかりしより三四夜には過ぎずさるをことし乙巳の秋のなかばは空にちりばかりの雲もなくてよもすがらむかへどなほあかぬあまりに

ながらへて猶よにしばしすむとてもこよひばかりの月や見ざらむ

あきのつきといふことをおきて

あつめきて秋にやてらす月々のよひあかつきにかけし光を

木々の葉のきばみきばまぬ色々もわきてぞ見ゆる秋の夜の月

後に見む人もあらむをけふの月ひかり惜しまずてりつくすかな

月ひとりあめにかゝりてあらがねの土もとほれとてる光かな

きしかたも秋はかならずすむ月にかはらぬ天のまことをぞ知る

いつのあきにか

ひととせの月のさかりは秋の空秋はもなかにしく影ぞなき

十五夜惜月

めぐりあふ秋のなかばの空の月てりみつ光いつに較べむ

○乙巳　天明五年乙巳であらう。彼の六十三歳の時。

○すむとても　住むと澄むとかけた。

○こよひばかりの月や見ざらむ　今夜程の月はもう見ないであらう

○あらがねの　土の枕詞。

○きしかたも　過去も。

○もなか　八月十五夜。

よのつねのもちをもゝちの光にも秋のひと夜の月やまさらむ

いつのとしにやはづき十五夜十五首のうたといふ字を上におきてけふはくる人にかへしさせむとてよめりし中に

はるかにぞ春はおもひしこの秋の半ばの月もめぐりきにけり

こゝろなき雲さへ月にはるゝよとたれもこと葉の露をへて見よ

うけれども雲は晴間もありぬべし待つかひなしや月に來ぬ人

たづがねのはるかにきこゆすめる夜の澤べの月や霜と見ゆらむ

望のひるよりおびたゞしく雨ふりてくれつかた雨はやみたれどなごりの雲に空はるべくも見えねどさすがにうちもねられずまつほどに軒の松の梢にほのめき出でてよはにいとよくはれたるに

はるゝ夜をまつの梢に今ぞ見る秋もなかばの中空の月

またあるとしはくれ頃よりくもりてなぐさむことなきまゝ

名にたてる影をかくしてうき雲のかゝるよぞとや月の見すらむ

庭草の露もかげ見ぬうき雲に風まつむしや月こひてなく

東の山際に念佛三昧のいとしづかなる寺ありよるよる鹿のけぢかく鳴く

○よのつねのもちを云々　平常の十五夜の月を百千集めた光にも秋の八月十五夜の光はまさるであらう。

○はづき　葉落月、八月の異名。

○こと葉の露をへて見よ　歌の詞の花を添へて御覽なさい、返歌を寄せよの意。

○たづがね　田鶴の聲。

○ほのめき出で　ほのかにあかるくなつて月が出で。

○名にたてる影を　名月と人に知られて居る此の十五夜の月の光を
○かゝるよぞと　かやうな世と雲のかゝる夜とをかけた。

○念佛三昧　念佛に專心する事。
○けぢかく　近く。

中に

この寺は東の山のかげなればもちの月さへ出でがてにする

居待月

いもとわがならび居待ちのいにしへをおもひいづれば月も出でけり

臥待月

月やすむくもりやすると笛竹のふしまつほどもねがたかりけり

わらはやみの後こゝちわづらはしくして月もえまたでねやにいこはむとて

夕露のおきゐむことのくるしさに月のいづるも待たで入りぬる

うづまさにあるころ十七夜の月東山をいづればやがてまつにやどれるいと興ありき

遠山のたかねの月をうづまさの松のしづ枝にやどしてぞ見る

おなじ十九日にや木のまに待ちつけたる月のくもれるを

村松のこのまの月をあやにくに立ち隔てたるうき雲のそら

九月十三夜月のうたあまたよみ侍る中に

○出でがてにする　出にくさうにして居る。
○居待月　舊暦八月十八日の月の異名。
○臥待月　寢待月と同じい、舊暦八月十九日の月の異名。
○笛竹の　節の枕詞、上句のすむ、くもりは[illegible]の縁語。
○ふしまつほど　節と臥とをかけた。寢て待つ間も。
○わらはやみ　瘧病、[illegible]、おこり。

○みよの長月　御代の長いと、長月とをかけた。

○さよ秋つす　豊秋津洲、日本の一稱。

○十三夜　陰暦九月十三夜、その夜の月を賞する、これを後の月とも云ふ。

○かはづこそ云々　蛙が鳴いて雨を呼ぶと云ふ説が存するからである。

○かぞへて見れば長月の　過去を數へ見れば長いにかけた。

夕まぐれかつ〴〵軒に残る蚊のかず見るばかり月ぞさやけき

心あれや月の行方のうき雲もさはらぬかたにはらふ秋風

名に高き空にはくもる年もあれどすめるはみよの長月の影

　おなじ心を

こよひはと唐人(もろこしびと)もあふぎみむとよ秋つすのながつきのかけ

　十三夜くもれり中秋にはいとさやけかりけるを思へば

名にたかき二夜ながらに月影のさやけき年ぞすくなかりける

　なが月十三日人々とひて先の月もくもりけるにこよひもおなじやうなればわびつゝもかずのうたよむにながつきのとをかあまりみかと上におきて

なすわざもまつうちおきてくれゆかば見るべき月のいそぎをぞする

かはづこそ雨をこひけれ打ちくもるこよひの月を見せじとや思ふ

つきはいま松の木の間に見えそめぬ日の入りはてばひかりそはまし

きしかたをかぞへて見れば長月のくもれる夜こそすくなかりけれ

過ぎきて世にすみわびしやどなれど月は心のまゝにこそ見れ

○かさなる空に　笠とかけた。雨雲の縁語。

○ふるきかゞみ　古き鏡は曇りがちであるからだ。古き鏡の如く。

○をす　小簾。

○弓槻が下　五百槻、多くの槻の木の下。萬葉集卷十一の旋頭歌、「泊瀬の五百槻が下に吾が隱せる妻、茜さし照れる月夜に人見てむかも」を思ひ寄せた。

○をしほの山　小鹽山、一名大原山、山城乙訓郡大原に在る。淳和帝山陵の所在地。

をりしもあれ都の人のとひきつる二夜の月のくもるべしやは

かくながらはれずばこよひこの國の光をさへや月にかくさむ

あすの空はよしはれずとも都人とひし今宵は月さやけかれ

松に吹く秋風たえて雨雲のかさなる空に月をこそまて

林閒のむしの音ばかりさやかにて雲居の月ぞ影おぼろなる

みがきなす玉かときのふ見し月のふるきかゞみとくもれるぞうき

限りある人のよそかしまち〳〵しこよひの月のくもらずもがな

秋月入簾

月清みをすのうちとのへだてなくふたへに松の影ぞうつろふ

夜更くるまで前の林中に月さし入りていとあらはなれば

ひるならば弓槻が下はくらからむ木がくれもなきよはの月かな

東の木しげくてまだ月は見えねどにしのかたよりあからなりゆくもをかし

山のはの月出でにけりわが松の梢のかげの野べにうつれる

塵ばかりの雲もなくて西山とほく見わたさるゝにあかで

照る月の入るかた見れば大はらやをしほの山のみねの松ばら

月あかき夜ふくるまでながめて
みやこ人まつとはなしに月すめばまづ思ひいづる秋のよな〳〵
翁がいひおこせたる「きみがあたりかへり見すればくれはてゝ山のはたかく月さしのぼる」かへし
かへりみしほどにかあるらむ月影のみやこのかたにさしそめしくれ
夜ふかくめさめていねられねば月はいかにと南面の戸をはなちて見れば中空にかゞやき庭の露きら〳〵と見えてよもはものおともせず
よをふかくおきでて見れば庵のとの月こそひとりすみわたりけれ
雲はれつきていときよくすめる夜
人知れぬ心の塵もはらふめり月すめる夜の松風の聲
雲のむら〳〵なる中をもる月のをり〳〵さやけかりければ
大空の水まさ雲をもる月は淵にしづめる玉かとぞ見る
しぐるゝ月を
風はやみしぐれながらにゆく月のそらさだめなきむら雲のかげ
狂雲妒佳月
月清し風なたゆみそかゝる夜はかならず雲のねたしとぞたつ

○かへりみしほどにかあるらむ　君が私の方を顧みた頃であらう。

○水まさ雲　水の出て增る兆ありと考へられる雲。淵はその縁語。

○霧ににほへる　霧の中で光の輝いてゐる。

○そむくべきくまも云々　月に背いて影になるべき所も残らぬ。

○けちぬる　消した。

○月にうかれ鳥　月のあかるさに浮かれ起きた鳥、普通鶏である。

○もりかはる月云々　古き家からもれ入る月にかはつて、今度は雨がもるのを。

月前霧

晴れのこるくまをたづねて木隱れの霧ににほへる秋の夜の月

月前燈

そむくべきくまも殘らぬあばらやは月にけちぬる秋のともし火

むら雲のたえまにさやかなる月を見るにほどなくかげのかくれたる

のどかにも思ひけるかなすみはてぬ雲まの月の障もなきよを

曉月

さやかなるあかつき月にうかれ鳥つげずばかかる影を見ましや

霧間曉月

秋霧ににほへるかげのうすらぐはしらみやすらむ有明の月

曉月入窓

有明の月さすかたにまどをあけてねざめうからぬ宿となしつる

しぐれてめざめたるに月さやかなる曉

もりかはる月を見よとやさ夜時雨ふるき軒ばに音づれてゆく

遠山曉月

まちどほくむかひし山のかひもなくいづればしらむしのゝめの月

海邊曉月

わたつみのはてなき波も秋の夜の限りを見せてしらむ月影

月前眺望

秋の月かげしく海のしま〳〵は鏡にうかぶ塵かとぞ見る

月前達情

こよひたれ枕もとらでみわが崎さ野のわたりの月にゆくらむ

ながむればとほき松島きさがたの月も心のうちにこそすめ

老後見月

むかし見し月やあらぬとかこつかなおいの涙にくもるよのかげ

海人見月

藻しほくむ手間打ちやめてあま人もまづさやかなる月をこそ見れ

老の後世の中わづらはしくて山里に在る頃夜更くるまで月を見るに涙落つとも覺えぬに袖もしぼるばかりなれば

いにしへもひとりながめし月なれどかくやは袖の露けかりける

翫月

秋の月さてもやかげのさやけきと木の下露にうつしてぞ見る

○かげしく　月の光のひろがり蔽ふ。

○みわが崎さ野のわたり　紀伊東牟婁郡三輪崎、佐野は今其の大字となつて居る。

○松島きさがた　羽後由利郡象潟、陸奥の宮城郡。芭蕉の奥の細道にも「松島は笑ふが如く、象潟はうらめるが如し。」とある。

○藻しほくむ　海藻を積み、汐水を注ぎ、幾度もこれに注ぎ、鹽分を濃く含ませ、これを燒いて水に溶かせ、上水を煮て鹽を製するのである。藻にかける汐水を汲むこと。

○手間　仕事に費す時間。

○かくやは袖の云々　昔若い時にはこんなに涙もこぼさなかつた。

毎秋翫月

いつの秋もおもひくまなき我が身とはなれみし月ぞ空にしるらむ

客依月來

里わかぬ月の便りといひながらうとかる人のよはにとはめや

月夜逢友

照る月にわれもうかれてうとかりし友にさへこそめぐりあひぬれ

布淑がかつらの家にしたしきかぎり月見にまかりける時の歌どもかきなべみするおくに「いかばかりさびしとか思ふみやこ人かへりしあとのよはの月かげ」とかけるを見てむかしおもひ出でられてかきそへたりし

都人かへりし後に月ひとりすみしやいつのうつまさの秋

月夜に敬儀が獨り居て「こよひ誰おきなとともに山里の松の木かげに月を見るらむ」とよめりしにわれも友なしに見ければかの詠草のおくに

友もなきはしるをさむみ火桶のみいだきてぞ見し老のよの月

月出山

山の端をかつ出でそめし月影のみやこのよもにはやみちにけり

嶺月照松

○里わかぬ月の便りと云々　相手の住む里がよくわからず、月の光をたよりに來た、とは云ひながら、自分を親しみあればこそ、此の夜半に來てくれたのであらう。

○かつらの家　山城葛野郡桂に住める小川布淑の家。

○したしきかぎり　親友殘らず。

○こよひ誰おきなとともに　今夜誰が迎へて居るか、翁とをかけた。翁は小澤蘆庵をさす。田山敬儀は彼の門人である。

○火桶　火鉢。

○かつ出でそめし　一方では出でそめた。

ちよの影よるもくもらず辛崎の松のかゞみの山のはの月

山月入簾

山はまだいでもはなれぬ月影をすごしにうつす松のむらだち

江山夜月明

山かげもくまなくてらす江の月にのこりかねたる水の浮霧

月のうた十首よみ侍りける中に河月似氷

初瀨川はやみ早瀨もこほるかとみな底かけてすめる月影

湊月

あこがれてよはにや出でしみなと舟からろの音の月にきこゆる

海月

梓弓いるさの月にまとかたの湊のすどりたちさわぐ見ゆ

まつらがた山なきにしに行く月をはるかにひたす神津しら波

島月

照る月のあかしのとなみをさまりて夜舟こぎいづるかこの島人

松島の栫を月のいづるよりなみに消えゆく蜑のいさり火

古寺月

○辛崎の松のかゞみの山　鏡山は近江蒲生郡鏡山村の南に在る山。辛崎は同滋賀郡滋賀村。
○すごしに　簾越しに。
○初瀨川　大和磯城郡小夫山から發し、長谷寺の前を流れ、山邊郡で佐保川と合し、更に大和川に入る、長さ十里。
○からろ　空櫓、水を淺く漕ぐ事。
○梓弓いるさの月に云々　梓弓はいるの枕詞。いるさは入り際。射るにかけた。まとかたは的形、伊勢多氣郡、弓の縁語。
○まつらがた　肥前松浦潟。
○あかしのとなみ　明石の門浪、門浪は瀨戸にたつ浪。久安百首旅の歌「播磨潟明石のとなみ騒ぐめりしばしな出でそかこの島人」などに思ひ寄せたものであらう。
○かこの島　播磨加古郡に屬する可古島、一名を南毗都麻島と云ふ。

○み佛のみかげ　佛像の姿。

○寂しさにたへではよもと　山里の寂しいのは普通であるから、其の寂しさに耐へないでは、住まれないとは思ふけれども。

○くだけもはてず云々　玉の縁語

○くらぶの山　近江甲賀郡暗部山夜の闇のくらいにかけた。

○黒髪山　下野國日光、男體山の一名。黒い山などとは秋のあかるい月を見ない間の名であつたよ。

人すまであれゆく寺の軒ばもる月のひかりや法のともしび

蕭寺月

いらかくちとばりやぶれてみ佛のみかげあらはに月ぞさし入る

里月

里の犬の聲のみ月の空に澄みて人はしづまる宇治の山陰

山家月

松杉の木の間をもりて山までにかつ／＼月の影ぞさし入る

やまざとにて月を見て

寂しさにたへではよもと思へども月すむ頃の秋の山里

井月

くむ袖にくだけもはてず月影のあとよりうかぶ玉の井の水

宮のおほせごとにて名所月といふことをよみてたてまつれる

月夜よし夜よしとこゆる旅人はくらぶの山の名をやたどらむ

この題はあまたよまるべしとてつぎ／＼おもひいづるまゝかいつけたる

中に

ぬば玉の黒髪山は秋の夜の月見ぬほどの名にこそありけれ

あふみの海八十の湊も照る月のひとつ光のうちにこそ見れ

照る月の光をちらすよしの川花にもこえし秋のいはなみ

飽かざりし春の海べもわすれ草かりなく秋の住吉の月

こさふかば吹かせてをみよみちのくのえぞもこよひの月はかくさじ

路明殘月在

夜をこめてわれよりさきに朝立ちし人のゆくへも見ゆる月影

月向白波沉

山のはをなどかこちけむにしの海やさはりなみにも月は入りけり

かくるべき月ををしとやたちさへていねじとすまふ沖つ白浪

殘月掛峯

山とほき松にかゝりて殘る夜をしばしとてらすみねの月影

擣衣のうたの中に

秋風のしき〲ふけばしつのめがてもすまにこそ衣打ちけれ

たび人の身にやしむらむ秋かぜのさむきゆふべに衣うつ聲

谷ふかみ住む里あれや衣うつ槌のひゞきの峯に聞ゆる

秋來擣衣

○八十の湊云々　萬葉集卷三の「磯の崎漕ぎたみ行けば近江の海八十の湊に鶴さはに鳴く」に據つた。多くの湊、磯の崎は近江の名所。

○こさふかば云々　胡沙吹かば、北支那の沙漠吹く風を蝦夷に思ひ寄せたのである。夫木集卷十三「胡沙吹かば曇りもぞする陸奥の蝦夷には見せじ秋の夜の月」に據つた。

○さはりなみにも　障り波にも、汐崎の、いさ波にかけた。月が沈むのに山の端と許り思ひ歎いて居たが。

○たちさへて　浪が立ち邪魔をして。

○いねじとすまふ　月の入るのを入れまいと爭ふ。

○しき〲ふけば　しひく吹けば

○てもすまに　手も休まずにと須磨をかけた。

○ひと夜もおちず　一夜も闕かさず。

○めかり鹽やく　若布刈り鹽を燒る。

○みをやすくねむ　身を安らかに寢ようか。

○今やわかゆと　今や若やぐと。菊は不老長壽の藥と云ふ支那傳說

○ちとせふるてふ　菊によつて千年の壽を保つと云ふ。菊の異稱ちとせ草。

秋風のさむく吹きぬる夕よりひと夜もおちず衣うつなり

海邊擣衣

あま人の波かけごろもうつほどやめかり鹽やくいとまなるらむ

秋夜

月清くあきかぜ寒し今よりはいかでか老のみをやすくねむ

秋さむみ牀のべさらず蟲鳴きてねざめがちにぞ夜はなりにける

曉におく

山とほく夜ぎりのこりてしらむ野のむしのねたかき秋のあけぼの

菊のうたの中に

つみつれば今やわかゆとまつほどに老のかずそふけふのしら菊

つむごとにわかゆとも身を思はねどあかぬはけふの白菊の花

この秋やかぎりとおもへばいとゞしくもてはやさるゝ白菊の花

ながらへてふりゆくそでにおく露や老の光のしらぎくの花

けふにあふつゆのこの身もいつまでの契りかかけししら菊の花

秋をへて老となるまで色もなきことばの露を菊にかけつゝ

つゆのまもちとせふるてふけふの菊見つゝぞ我は久にへにける

春たてばまづ咲くうめの花よりも秋の末野ににほふ白菊

何事をなすともなくてことしも長月のけふになりぬとし〴〵にかけて色なきことばのつゆはむかふ菊にもおもなけれど又こむ秋にあはむもいとたのまれぬ身なればおもひよるふしをかりそめにかいつけてみばやとてあまたよみける中に

長月のけふのためとやきのふよりつくろひたてしきくのきせ綿

水底のいさごにまじるこがねかと岸根の菊のかげをこそ見れ

露のまと思はばなにのかひの國つるの郡のきくのちとせも

ながめのこゝぬかといふことを上におきてよめりしことを思ひいでてまたよめるうちに

野の宮のふるきいがきににほふ菊あはれいく代の秋をへぬらむ

ぬれぬともほさじ袂のきくのつゆかゝればこそは香もうつりけめ

宮より御題たまはりたるに、菊有新花

園にまだめなれぬ菊のにほへるやこの秋よりの千代のはつ花

月前菊

月淸みそらには稀になる星の光あまたにさけるしら菊

○おもなけれど　面目ないが。

○きくのきせ綿　菊の花に綿を著せて露と菊の香を移して祝ぶ平安朝以來の風俗。

○かひの國つるの郡　甲斐都留郡、國の東方、今南北に分れた。忠岑家集に「君がため[illegible]て我は行く鶴てふ郡千代を經るなり」都留を鶴として千歳と云つた。

○野の宮　齋宮の伊勢に赴かるゝまで深齋される宮。いがきは宮を圍む齋垣。

○かゝればこそは　露のかゝると、かくあればこそとをかけた。

○千代のはつ花　菊の異名を千代草と云ふからだ。

しぐれしあとのよものけしき見むとて庭に出でたるにいろ〳〵の菊の露をおびてさとうち薫るをかへりみたるに目もはなちがたくおもしろかりければよめる

わがやどのよもぎにまじるしら菊をいとおほよそに思ひけるかな

いづれをかあはれといはむ色ごとにおのが光をみする村ぎく

なにごとも人に遲れしわが宿は秋の暮にぞ菊も咲きける

紅葉

まづそむる谷の小柴をしをりにて猶山深きもみぢをぞとふ

染め果てぬほどにを見ばやもみぢ葉のちしほをまたば散りもこそすれ

寛政六年の秋にやありけむ木の葉のいとこくそめたるを見て

言の葉をそめむきのえのとらなれど口なれぬ身はいふかひもなし

心性寺にまうづるに白川山を見て

秋山の薄霧こもりむら〳〵に染むる紅葉の色わきて見ゆ

南山の秋をのぞみて

夕日さす尾上の松のした紅葉そめずば知らじ遠きよそめに

さが山のもみぢ見にまかりて

○いとおほよそに　いといい加減に。

○ちしほを　紅の濃いのを千入の紅と云ふ。千度も紅の染料に入れて染める意。

○きのえのとら　甲寅、寛政六年彼の七十二歳の時に當る。きのえと、木とかけた。

○白川山　白川一帯の山であらう、京の東部、粟田山附近。

○南山　單に南方の山。

○さが山　嵐山一帯をさす。

もみぢ葉のちしほの上のひとしほをそふるは松のみどりなりけり

人のもみぢを折りてもてきたりけるをむねみつが見て「道とはみこきてもくべきもみぢ葉を君に見せむと枝ながらこそ」とよめるにかへし

わがためにこの一枝をたをりてこし心の色は君ぞ見せける

はじもみぢ

はじもみぢ薄き柞(ははそ)にまじればやわきて立枝の色こかるらむ

柞

しぐれてもうすき柞を白露のひとしほ染と思ひけるかな

紅葉霜

おのが色もはては紅葉にそめられて薄紅に匂ふ朝霜

霜岡紅葉多

古里は園の山がき蔦楓染めものこさぬ霜のひところ

谷川のもみぢの散るかたかける人のよませしに

もみぢ葉を風と水とにまかせおきて見る人ぞなき山陰の秋

紅葉盛

とへかしな染め盡しては花よりももろき紅葉の露のさかりを

○ひとしほ　一層と千入に對する一入の意とかけた。一入染。

○道とはみこきてもくべき云々　道が遠きに葉だけこいで持って來べき紅葉を、貴君に見せようと思つて枝のまゝで持つて來ました。

○はじもみぢ　櫨の紅葉。

○柞　はゝそ、[illegible]の異稱。古今集[illegible]の「佐保山の柞の色は薄けれど秋は深くもなりにけるかな」に據つた。

○散るかたかける　散る錦を[illegible]た。

松間紅葉

薄けれど松にはあらぬ秋の色を木の間に見せて染むるもみぢ葉

江紅葉

山陰やあるよりもこき江の水に色染めませてうつるもみぢ葉

法輪寺にまうでてかへさわたし舟をまつほど

渡し舟しばしとまつの陰にゐて波よる岸の紅葉をぞ見る

立田の山川を人の見るかた

よも山の秋をうつして唐錦たつたは水の色ものこらず

なが月末つかた時雨ふりくらしたるに

龍田姫秋の別れの涙もやしぐれとなりて木々をそむらむ

小ぐら山の紅葉を紙におして歌よませたるに

夕月夜小倉の山路くれぬとて袖にこき入れしもみぢ葉やこれ

南の林の中にあまたのうなゐ子どもかしましくくるを見て

栗もゑみ栃も色づきうなゐらがほこらしげなる時もきにけり

穭田(ひつぢだ)を

かれる田におふるひつぢは我なれやほにいづることもなくて枯れぬる

○しばしとまつの　松と待つとをかけた。

○たつたは云々　龍田の地名を錦の縁語に用ゐた。裁つの意。

○龍田姫　秋の女神の名、奈良の西に在る山名より出來た。春は東、秋は西を以て象る。春の女神を東の山名を取り佐保姫と云ふ。

○小ぐら山　山城葛野郡嵯峨村の西に在る丘。

○夕月夜小倉の山　夕月夜が小暗いにかけた。

○ほこらしげ　得意さうな。

○穭田　刈つた後の稲の再び芽を生ずるを穭と云ふ、その田。

○ほにいづることもなくて　稲の穂に出る事もないといふと、自分が世に秀づる事もないのとをかけた。古今集巻二「刈れる田に生ふる穭の穂に出ぬは世を今更にあきはてぬとか」

風吹きあれていとさむき夕

打ち時雨れ木の葉みだれてかなしきは冬ちかくなる秋の山ざと

故郷秋闌

きり〴〵す鳴きよるかべもあれはててたのむかけなき秋のふる里

九月末つかたいと寒かりければ風かくれなどすとて

吹きおろす嵐をさむみまだきより冬がまへするあきの山ざと

秋のくるゝををしみて

くれてゆく秋のかたみは消えのこる霜のおきなの身にこそありけれ

暮秋聞鴈

旅にして秋もくれぬと鳴きわたるかりのなみだや打ちしぐるらむ

長月二十四日のあしたにし山に雪の見ゆるに

老いらくのあたごの高ね雪白し暮れあへぬ秋に冬や立つらむ

秋徐暮

日にそひて近づく秋の別れ路もよな〳〵ほそきつきにこそ知れ

なが月二十九日といふに秋はくれぬもみぢはなかば染めのこせり

水鳥のたちのいそぎにたわすれて秋やもみぢをそめさしにけむ

○風かくれ　風隠れ、防風の設備。

○冬がまへ　冬構へ、冬の防寒の用意すること。

○霜のおきな　霜が置くと翁とをかけた。

○老いらくの　單に老いる意。

○たちのいそぎにたわすれて云々　水鳥のは立ちの枕詞。秋が出發をいそぐために忘れて、紅葉を途中で染め殘したのであらう。

○なが月の云々　長いと云ふ評判の秋にかけた。

○秋にあふみ　秋に逢ふ身と近江とをかけた。

○たりさかゆべき　茄子の實のなるのと、これより大いに世に成功すべきとをかけた。

○からき世　もしほの辛いのと、つらい世とをかけた。

○月にだにかへても云々　日頃なら月の清いのを賞し雨を厭ふ可きであるが、今は日でりで水に苦しむ時であるから、月にすら換へて雨をほしく思ふ秋であるよ。

○雨もふらなむ　雨も降ってほしいものだ。

九月盡

ながつきの名にたつ秋もつきぬるを惜しむ心のなど殘るらむ

初秋のころ方倹よりあふみのなすびにそへて「よの中をまだあきはてず秋なすびすてかれし身をあはれとは見よ」といひおこせたるかへし

今よりの秋にあふみのはたなすびなりさかゆべき君にやはあらぬ

夏より久しく日でりつゞきてこのわたりすべて井の水もかれぬればおのがじゝ親しきかたにこひもとめて日を送りけるころ

海人のくむもしほにはあらぬ井の水もかれてぞからき世をしらせける

同じ頃萩の盛りなるに月のさやかなるゆふべ

まち〳〵て萩咲く頃の月にだにかへても雨をおもふ秋かな

このわたりのをとこをうなおのがどちつどひていかゞせましなどいふを聞けばむねつぶる

つちさけて照る日にぬれし民の袖かわくばかりの雨もふらなむ

秋のはてに田夫の鳥おふいとまなしといひたるをたすくとて

小鳥おふなるこの繩に手をかけて竹のは山の夕日をぞ見る

浦蓮上人畫おくて田もる庵あり

もる人の衣手いかにかり殘す山田のおしね霜むすぶたゐ

有明の月におしねもる庵のなるこを風の吹きしきたるかた

あり明にもるおくて田の露もさぞ霜となるこの風すごき影

信美が上田秋成ともなひ來て初めて逢ひたるに經亮もきあひゐて箏和琴かきあはせたるを聞きて秋成「山里の松の二木の聲あひて秋のしらべは聞くべかりけり」とよめるかへし

山陰の二木の松のあきの聲人にきかるゝ時もまちけり

鹿のあとあるに紅葉のちりたるかけるに

この秋も更けてかへらぬ跡見れば我さへ音にぞなきぬべらなる

古人のよめる詞を題にてよみける秋の歌の中に

一年にふたゝびゆかぬ久方の天の川路ぞ波たつなゆめ

日くるれば打ちぬる萩をよもすがら露のおきゐて恨むべらなり

やちくさの秋の野分の風のまを命とたのむ露もはかなし

はら〳〵とおつる涙に似たりけり朝風わたるかしは木のつゆ

露しげきよもぎが原をながめつゝ消えなむ後の夕をぞ思ふ

そでにこそ涙はおつれ鳴く鳩のこもり聲きく秋の夕暮

○もる人　田を番する人。
○おしね　おくて、晩稻。
○霜となるこの　霜と成ると鳴子とをかけた。
○信美　伏見稻荷神主の[illegible]官、蘆庵の門人、文政十[illegible]七十八。
○經亮　[illegible]
○箏　十三絃の琴、[illegible]箏と云ふ。
○和琴　わごん、あづま琴とも云ふ、六絃の琴、神樂及び雅樂に用ゐる。
○なきぬべらなる　古今集時代の古調を用ゐた、なきぬべくあるの意。
○一年にふたゝび云々　牽牛織女兩星が一年に一度しか逢はぬ事。
○露のおきゐて云々　萩のねるのを露は起きて居て恨むらしい。露の置くのを起き居て、と續けたのである。
○こもり聲　含み聲。新六帖卷二に「茂りつゝ木深き山の夕暮はこもり聲にぞ鳩は鳴きける」

をみなへしみなへし折りてもていなむ人の見むのもねたくし思へば
月すめば雲間はるかにとぶ雁のよめにもさやに数ぞ見えける
いかでかと思ひし秋の長雨のはれて初よの月をこそ見れ
露さむき草のうへ白く影みちてみかきが原に月ぞ傾く
ふけぬとも夜越にこえむ雲はれて名にあふ月のさやの中山
ひら山のみねのふし松心あれやゐまちの月を立ちながら見つ
花は猶そのよの秋のさがの野に萩あそびせし友ぞ残らぬ
にひばりのかみ田のわせをおほしたててことしの初穂奉りてむ
秋ふかくなりにけるかなせきいれし門田のおくて霜むすぶなり
八束穂のかぶきわたりて賤のをがたのみゆたかに見ゆる秋かな
秋さむみまだきに霜やふる里の初もみぢ葉も色こかりけり
照る月に雲かゝる夜はこひわびぬ花のかたきといひしあらしも
鷺のとぶ蘆の霧のひとなびき吹くかた見ゆる遠の川かぜ
稲がらにすだくすゞめは葉がくれて稀に残れる穂をや争ふ
たなばたのおくる朝の初あらしさぞきぬ〴〵の身にしみぬらむ

嵯峨野

○さやの中山　駿河国小夜の中山、月のさやかなるのとかけた。
○ゐまちの月を云々　八月十八日の月は遅く出るので坐つて待つのを立つたまゝ見たと云ふ意。
○秋のさがの野　秋の習ひと嵯峨野とをかけた。
○にひばり　新治、新に開墾した。
○かぶきわたりて　傾き渡りて、一面に穂がみのつて頭を傾けて居て。
○たのみゆたかに　希望ゆたかにと、田の實とかけたのである。
○稲がら　實をとつた稲の殻。

月は今をぐらの山に影おちてさが野の蟲の聲ぞ殘れる

名所岡

波よするなぎさの岡の花すゝきなき名をたてて秋風ぞ吹く

竹田里

秋の夜のふしみの夢もさむるまで竹田の里にうつ衣かな

栗栖野

草のいとたれくるす野に打ちはへて秋おく露を玉にぬくらむ

藤井原

分けわびぬふぢゐが原の大みかどふりて幾世の秋のしら露

檀岡

引きつれていさまとゐせむ武士のまゆみの岡べ紅葉しぬべし

高野

秋風に夜や寒からし鹿のねのふけてたか野のかたに聞ゆる

大島峯

立ちめぐる麓の霧は海に似て大島峯の名こそかくれね

御幣島

○なぎさの岡　河内北河内郡渚。波よする渚とかけた。

○竹田の里　山城紀伊郡竹田村、深草の西、鳥羽の東、伏見の北。臥して見る夢と伏見とをかけ、砧の音がたけしいとかけた。

○くるす野　草の絲が繰來る栗栖野とかけた。栗栖野は山城宇治郡。

○藤井原　大和高市郡、藤原宮、持統帝文武帝の皇居、藤井原又藤原宮に井があつて出來た地名かと云ふ。

○大みかど　皇居。大御門。萬葉集卷一、「藤原宮の御井歌」に「荒栲の藤井が原に御門始め給ひて」とあるに據つた。

○檀岡　眞弓岡、大和高市郡坂合村大字[illegible]。武士の持つ眞弓とかけた。

○高野　山城愛宕郡修學院村。夜更けて鹿の聲が高いにかけた。

○大島峯　肥後玉名郡荒尾村大島山か。

○御幣島　攝津西成郡歌島村の大字、今は島でない。

安　濃

白妙のをばなや川のみな上に秋のたむくるみてぐらの島

三香野橋

しほ風のあのののみなと田吹くなべにほなみかたよりなびく秋霧

あはれなる老のみか野の橋柱たつ月ごとにふりまさりつゝ

桂　潟

あま人はをるとも見えずかつらがたかたぶく月の影のみぞ澄む

玉　川

うづら鳴く野路の秋萩散り過ぎてひかりかくるゝ玉川の水

宇良古山

松陰に染むる紅葉はから衣うらごの山の名におひにけり

衣　崎

吹きまよふ衣が崎の秋風に立ちもつゞかぬ波のうき霧

骨登濱

都にて聞きしよりけにかなしきは秋立つころのそとの濱風

戸絶橋

○安濃　伊勢安濃郡安濃村。
○三香野橋　遠江磐田郡田原村に三香野がある、其處を流る、大田川に架つた橋名。
○桂潟　筑前宗像郡勝浦村の江灣。
○あま人はをるとも　居るを折るにかけた、桂は月の桂に寄せた。
○玉川　近江栗太郡野路のほとりを流る、玉川、所謂野路の玉川。ひかりは玉の緣語。
○宇良古山　裏濃にかけた。
○衣崎　信濃諏訪郡上諏訪、諏訪湖の一角。立つは裁つにかけた緣語。
○骨登濱　陸奥東津輕郡一帶の濱、外濱。
○戸絶橋　固有名詞であるか疑はしい。

波にしくかげのとだえとなりにけりよわたる月をはしにへだてて

有明浦

なみ遠くかたぶくまゝにしらむよの月影をしき有明の浦

神南備山

ちはやぶる神なび山の榊葉をいかにせむとか打ちしぐるらむ

長田村

行末のながたのいな穂かりつみてゆたかなる世のほどをこそ知れ

長尾村

八束穂のながをの村の秋をさめたのみおほかる御世ぞたのしき

假寢岡

つゆのまも夢やはむすぶ草枕かりねの岡のまつのあき風

衣浦

秋寒き衣が浦に立つ波をいくへか風のたゝみよすらむ

味鎌

てる月にあこがれぬらし味鎌の鹽津をさして夜舟こぐ見ゆ

西山にまかりたりしに何とかいひける山川のかなたにかすかなる庵のあ

○有明浦　肥前の内海。

○神南備山　大和生駒郡、三室山とも云ふ。

○長田村　攝津武庫郡林田村大字長田。

○長尾村　大和北葛城郡長尾村、其の他同名の地が河内、伊勢、丹波にもある。

○をさめ　秋の收穫。

○衣浦　三河碧海郡、尾張知多郡にまたがる知多灣の一名。

○味鎌　讃岐、備前、鎌倉の海浦あるのを併せたものであると云ふ。萬葉集巻十一は「味鎌の鹽津を指して漕ぐ船の名は宣りてしを逢はざらめやも」に據つた。

りし誰とふとしも見えずかきねなどはいとをかしうしつらひて菊など咲
きみだれたるすままほしげなれば

うらやまし竹のあみ戸の明けくれもよをかりそめに住みなせる宿

秋山のうすきもこきもとし〴〵おなじ色なるをおもひて

萬代をかけて思へば秋ごとの紅葉の色ぞときはなりける

（一）明けくれも　戸の緣語。

○北窗ふたげ　北窗は夏は涼しいが冬は寒いので塞ぐ意。

○すゞりのすみやかに　すの音の繰返し。鳴らすと馴らすとかけ鈴にかけた。

○あだにふりぬる　空しく古りたと雨の降るとかけた。

六帖詠草　冬

冬歌

ふゆたちて風のあらましくふくに

松にふく風もあらしになりにけり北窓ふたげ冬籠りせむ

日にゝさむくなれば

朝ごとにならすすゞりのすみやかに手もうら寒き冬は來にけり

冬のはじめしぐれを

ふゆもきぬさてやことしも初時雨あだにふりぬる身にぞ驚く

曉がたしぐれを聞きて

あはれよにふるほどもなき曉の老のねざめをとふ時雨かな

夕時雨

冬の日のほどなき空にいく度かけふもしぐれてくるゝ山かげ

しぐるゝ音するに見あぐれば夕日さしたり

さよしぐれ板やののきばふり過ぎぬ又たが夢かおどろかすらむ

月前時雨

てる月にさはらでふるは久方のかつらの露や風にしぐるゝ

月やどるかや屋が軒の玉水におとせですぎししぐれをぞ知る

秋時雨

吹きさそふ風になびきてゆく雲のうきたの森や今しぐるらむ

十月紅葉

かみな月もみづる木々は時雨にやあつらへつけて秋のいにけむ

この秋は見ざりし木々のからにしき冬たちてこそ織りつくしけれ

深山葉殘

山かぜのたえずたづぬる秋の葉をひはらがくれに殘してぞ見る

宮のおほせごとにて神無月の題に松なびきて風はげしくらす紅葉の殘れるかた

落葉

吹きしをる松風早し染め殘す秋の木の葉もさてや散りなむ

○かつらの露　月中に在りと云ふ桂樹の露。

○うきたの森　浮田、日向、武藏陸奥等に同名がある。雲の浮ぶにかけた。

○もみづる　紅葉するの動詞。

○あつらへつけて　秋が時雨にたのみつけて。

○ひはらがくれ　檜原隱れ、檜の森の下陰。

ふきおろす磯山風を追手にていづる千船や木々のもみぢ葉

さもこそはあらしの風のさそふらめしぐれにだにもちる紅葉かな

落葉埋菊

散るまゝに垣ねの花はうづもれてこのはぞ菊の香ににほひぬる

夕落葉

吹きさそふもみぢの色はくれはてて軒ばにのこる木枯の聲

落葉混雨

かみな月木の葉みだれて古里はわきて時雨のおとも聞えず

山路落葉

山かげは木々のおち葉にうづもれて雪よりさきに道ぞ絶えぬる

林葉不殘

冬の來て風のはやしとなりしより秋のいろ葉はつゆも殘らず

太秦にすみつきたるはじめずさも二三人侍りけるがいとひろく荒れたる寺の秋になりて物寂しく今又冬のはじめなればこゝかしこより吹きとほすあらしの聲たえまなくよるは何となき物おとひし〳〵としてすごき所なればみなえさらぬ事つくり出でわりなきかごとまうけゝさまからさま

○追手　順風。木々の紅葉の散るのを船に譬へた。

○わきて　時雨の云々　落葉の降る音が騒がしく雨のやうなので、時雨の音も特に耳立つて聞えない。

○いろ葉　色づける葉。

○ずさ　従者。

○何となき物おと　とり留めのない物音。

○えさらぬ事つくり出で　よんどころ無い用事をつくり設けて。

○わりなきかごとまうけ　已なを得ぬ口實を作り。

にいにはてて今はめひのをむなひとり残れり水くみ木の葉をあつめてけふのけぶりをたつるわびしなどは世のつねの事なりかしあつめたる木の葉もけふのたき木には猶あまりたるを見てあすのたき木のあらしをぞまつといひし山住はいとにぎはしきけぶりにこそありけめなどほゝゑまれて京なる人のもとにいひやりし

おもひやれあらしをまたぬ落葉さへけふのたき木にあまるすみかを

十月十日ばかりいたく寒かりければ火爐をひらき四方に帳をたれて居れりひねもす風さえあれて暮つかたしぐれたり

よるかけて雪にやならむ夕あらし松吹きしをりしぐれ來にけり

布淑がもとよりたよりに「都だに霜さむくなるこの頃のおきふしさぞなうづまさの里」といひおこせしかへしに「此の山住もなれはまさらでことしは寒さもことにおぼゆれば」とかきて

おく霜はこぞもことしもかはらじをさえとほる身やふりまさるらむ

寒きあした雀のかしましく鳴くに

むれきてや朝餌あらそふ霜寒き庭の垣ねにすゞめしばなく

寒苦鳥のこゝろをさへ思ひやる

〇わびしなどは世のつねの事なり　寂しくつらいなどと云ふ形容は平凡である。
〇あすのたき木のあらしをぞまつ　明日の焚木を折り與るゝ嵐を待つ。
〇しをり　枝折戸の畧。木の枝を折り編みなどして作つた扉。
〇おきふしさぞなうづまさの里　起き臥しにさぞ憂い事であらうと太秦とをかけた。
〇なれはまさらで　馴れて良くならないで。
〇寒苦鳥　印度大雪山に棲むと云ふ佛典の假設的の鳥、夜の寒さに苦しみ夜が明けたら巣を造らうと鳴くが、さて夜が明け暖くなれば苦しさを忘れ巣を造らず、いつも之れを繰返して居ると云ふ。

日にゆるぶ老の眠りは霜とくる軒のしづくぞ驚かしつる

霜

ふりそひてのこる色なき黒髪に見しやいづれの秋の初しも

夜を寒みねての朝けにながむればはつ霜しろし水莖の岡

しものあした

日かげさすかたへは消えて軒たかき屋かげにのこる霜の寒けさ

霜深きあした

見し秋のちくさを何に思ひけむ霜を花なる野への冬枯

朝霜

しらみゆく垣ねの野べを見わたせば雪もや降るとまがふ朝しも

朝けたくわらやの軒のけぶりにも猶きえがてに霜ぞ殘れる

ある人菊を折りておくりしに

あさ寒き霜をはらひて手折りこし菊ぞ心の色は見せける

殘菊

かみな月うつろふ菊に月さえて琴のねかをる宿の木枯

咲く花におくれて染めし木の葉さへちりしく庭に殘る菊かな

○ふりそひてのこる色なき云々　霜が降り添つて一層白髪になつて殘つて居る黒髪がないが、それはいつの秋におきそめた初霜であらう。

○水ぐきの岡　水ぐきは岡の枕詞

〇かつのこる　一方には殘つて居る。

〇こやの池水　攝津國武庫郡昆陽野にある池、伊丹町の西。

〇なには江は　波も枯葉色に立つといふのであるが、波も涸れるしかけた。

冬のはじめいたくうつろへる菊を見て

おく霜にうつろひはてしきく見れば久しかれとも身をば思はず

菊のゆきおもげにいたゞけるを見て

紅ににほふがうへのしら雪をのこれる菊のまがきにぞ見る

風いやましにはげしき朝尾花のちるを見て

あしびきの山さむけれや散りみだる風のをばなも雪と見ゆらむ

寒草少

かつのこる緑もはかな冬くさのおのが枯葉に霜をへだてて

寒草藏水

したれふす蘆のかれ葉にうづもれてすむとも見えぬこやの池水

寒蘆

おく霜はひと夜ふた夜と見るがうちにのこる色なき蘆の冬枯

寒蘆滿江

なには江はたれふす蘆にうづもれて波もかれ葉の色にこそ立て

湊寒蘆

みなと江にさはれるあしも枯れふせばやがて小舟にこぎしかれつゝ

冰始結

夏だにもすゞしかりつる山陰の清水よりこそこほり初めけれ

水結冰

冬寒み今はこほらぬ水もなしたぎつひゞきや山風のこゑ

池水冰滿

きのふまでとぢ残したる池水のみ中もけさはこほり果てけり

神無月はじめつかた慈照寺に遊びて月を見て

落葉して月の色のみしろかねのうてなさびたるよるの木枯

冬月

夜をさむみ霜やふるらむてる月のさやけきかげの薄曇りぬる

曉千鳥を

川波の冰にむせぶあかつきにちどりの聲は高く聞ゆる

津千鳥

よる波のしきつのちどりむれたてど猶こりずまにおりゐてぞ鳴く

磯千鳥

こゆるぎのいそぎて立てどむら千鳥波のあとにぞ聲は聞ゆる

（一）たぎつひゞき云々　水の激して流れる響、それと思つたのは山風の音である。

（一）月の色のみしろかねの　月色のみ白いと銀の臺とかけた。慈照寺は一名銀閣寺であるから銀の臺がよく利いて居るのである。

（一）よる波のしきつのちどり　打ち寄せる波の頻りなのと敷津とをかけた。

（一）こゆるぎのいそぎて立てど　小動の磯と急ぐとをかけた。小動の磯は相模の名所だ。

○おのが名におふ河水に　卽ち鴨川を意味する。

○豐の明　陰暦十一月、新嘗祭の翌日卽ち中辰の日、天皇新穀をきこし召され羣臣にも賜ふ宴會。

○冬至　每年十二月二十一日頃、太陽が冬至點に來た日、此の日を一年の陰の極とし、一陽來復の節日とする。晝の最も短く、夜の最も長い日である。

○春のけ　春の氣分。

冬の夜の月かげふけてひくしほの遠つひがたにちどり鳴くなり

水鳥

水とりのつばさの霜をはらふまにうきねの牀やかつ冰るらむ

鴨とりのおのが名におふ河水にすみていくよをなれしうきねぞ

池水鳥

碎けちる冰と見えて水とりの羽風にさわぐいけの月かげ

夕網代

川上の山のかげよりくれそめてあじろのきりににほふ篝火

しも月

霜さえて笛のね高し雲の上の豐(とよ)の明(あかり)やこよひなるらむ

冬至によめる

春のけの土にきざすといふ日より更にはげしき木枯の風

冬夜

さえとほるかねのひゞきに閨のとの霜になる夜の氣色をぞ思ふ

山家冬夜

山里は竹のすのこのしたさえてふしぞかねぬる冬のよな〳〵

冬夜難曙

むらしぐれいく度きかばふゆの夜のつれなき闇のひましらむべき

冬夜長

よひのまのしぐれあられは昨日かとたどるばかりの冬の夜ながさ

寒夜重衾

かさぬれどあさで小ぶすま下さえてしも夜覺ゆる麻手小衾

太秦にていと寒き夜狐のなくを

月くらくあられみだれてふる寺の寒き垣ねにきつね鳴くなり

寐覺霰

降ると見しねやのあられは夢なれやさむる枕に音も殘らず

屋上霰

ふり過ぐる板やの軒のくちめにぞしばしあられの玉は殘れる

いたくあられのふる日女どものおほく行くに

わぎも子が赤裳裾引く道とてや風もあられの玉をしくらむ

○ふしぞかねぬる　竹の縁語の節と臥とをかけた。

○よな〳〵　夜な〳〵と、竹の節と節との閒をよと稱するのをかけた。

○麻手小衾　麻布で製つた蒲團、萬葉集卷十四東歌の「庭に立つ麻手小衾今宵だに夫寄し來せね麻手小衾」の詞を思ひ寄せたのである。

○板やの軒のくちめ　板屋根の軒の腐れた閒に。

○玉をしくらむ　玉敷く道とは美しい道の形容。

ふるさとをわかれがたみやおくれけむ夕の雪にわたるかりがね

初雪のふりぬるあした

身につもる老はわすれてとし〴〵にめづらしと見る庭の初雪

もみぢのまだ殘れるに雪深くふりたるがめづらしければ澄月のがりやらむとて

君は知るやもみぢにふれる初雪のうづむばかりのあとぞおぼえぬ

とおもひたるに人あまた來てまぎれぬまたの日もいと事しげくて過ぎぬ

三日へたるあした

なごりなく雪はきえけりつもりたる言の葉ばかりけさも殘りて

となむいひつかはしけるにかへし澄月「もみぢ葉ものこる梢のはつゆきはふりにし身にも覺えざりけり」「はつ雪は消えものこらぬ朝風に花とちりくる君がことの葉」

初雪のいとふかくふりたるあした

いとゞしくふる木の松の枝たれて雪にをぐらき宿のあけぼの

西風に雪ふりて見るが中に若松の色かはるを見てわかかりける人のやゝおとろへゆくをおもふ

○わかれがたみや　別れにくいためであらうか。

○身につもる老はわすれて　つもるは雪の縁語。

○ふりにし身にも覺えざりけり　年とつた自分にも今まで經驗がなかつた。ふりにしは古りこ降りことをかけた。

○花ことの葉　花と葉の縁語。

○いとゞしくふる木の　非常に降るこ古木こかけた。

○わかかりける人の云々　若松に雪の松の枝につもるのを、青年の黒髪がだん〳〵白髪になるに聯想した。

にしかぜに雪よこぎりて若松のなかば白くぞはやふりにける

いやしきに降りくるに

ふみわけてとひこむ人もおもほえずつもらばつもれけさの白雪

雪のふりたるあした山里にて

はなならで花なるものは朝日かげにほへる山の木々のしら雪

雪のふりたる夕

降りつもる雪はうすゆき松竹もわかるゝほどの夕ぐれの色

よるかけて雪のふりくる音いとさやかなふけておとの聞えぬに

さゝの葉にふりしく音の聞えぬはふかくやなりしよはのしら雪

遠山見えてちかき林に雪のいとふりうづもれるかた

足引の山のたかねのいかならむまぢかきもりは雪のした草

雪かくとて

ふるき世をおもひ出づれど軒の雪かくまでふかき跡もすくなし

人をまつあした

降る雪に訪へとはいはでまち見ばや人の心の深さ淺さも

雨の夜ふけて寒かりければ

○いやしきに　いよく盛んに。

○ふみわけてとひこむ人云々　梁平が[illegible]を雪踏み分けて訪れた事の聯想。

○花なるものは　花やかなるものは。

○かくまでふかき　こんなに深いさ掻くまでさをかけた。

○人のこゝろの深さ淺さも　人の自分を思ふ情の深いか淺いかを、此の雪の中を訪問してくれるかくれないかに依つて知らう。深淺は雪の縁語。

ふくろ夜の軒のしづくのたえゆくは雨もや雪にふりかはるらむ

雪のうたの中に

沖津風雪吹きかくと見るがうちに晴れてつもりの松ぞ靜けき

この頃はふりかくされてあかはたの山は名のみや雪にのこらむ

黑髪のふりてかはらむ色ぞとも知らでめでこし年々の雪

うづもれぬ道の光はしら雪のふりても殘る跡にこそ知れ

ふりつもるけさのひかりに月花もおもひけたれてむかふしら雪

朝雪

山かげのねぐらをいづる朝鳥のはぶきにこぼす木々のしら雪

雪朝待友

けさはまだふみわけつべき山里の雪もともまつほどにとはなむ

雪の日友子がもとより「かきくらしふりぬる雪に道たえて寂しささぞな冬の山里」とかへし

さびしさもあとこそなけれ道たえて人めも草もうづまさの雪

雪のあしたに垣ねの野べを見て人のもとへ

見せばやなかたさがりなる山畑のけぢめわかれて積るしら雪

○つもりの松　津守の松、積りにかけた。津守は攝津西成郡、今の難波、今宮邊と云ふ。
○あかはたの山　大和生駒郡赤膚山。ふりは旗をふるにかけた。
○黑髪の云々　降りてと古りてとかけた。白髮となる色とも氣がつかず、毎年賞美して來た白雪であるよ。
○ふりつもるけさのひかりに云々　雪月花を對照せしめた技巧。
○はぶき　鳥の羽ばたき。
○あとこそなけれ　寂しいあとのないのと人の足跡のないのとをかけた。
○うづまさの雪　埋もれると太秦とをかけた。
○かたさがりなる　片下りなる、一方に傾斜して居る。

里雪

はれまなく日をふる雪にくれ竹のふしみの里は道やたえなむ

川雪

一すぢのゆく瀬を見せて埋まぬもなか／＼雪のあやの川水

見てぞ知るけさの時雨は川上の雪つみそへてくだす柴舟

雪上淺深

ふきためし垣ねを見ればしら雪の深さあさゝは風のまに／＼

鳥翅拂雪

花と見しふゆの林のゆきちらすとりのはぶきや春の山風

古木の松に雪つもりて葉のところ／＼見えたるに

かゝればぞ下よをふる木の松の葉の緑の色の雪にきほへる

山河の邊に家あり深く雪のつもれるかたに

今よりは川音をのみ友として雪のしたにぞ春をまたまし

雪のあした布淑がきて「さえとほるよそぢあまりの身をつみて猶老いらくの雪をこそとへ」といへるかへし

君も今わがあとふみてなゝそぢのゆきつむ年の寒さをも知れ

○くれ竹の　伏見の枕詞、暮れるにかけた。

○一すぢのゆく瀬を見せて云々　凡兆の句「長々と川一すぢや雪の原」の趣。

○あやの川水　讃岐綾歌郡の綾川。雪に心あるにかけた。

○とりのはぶきや春の山風　古今集巻二「木傳へばおのが羽風に散る花を誰におほせてこゝら鳴くらむ」鳥が羽を振つて花と見ゆる雪を散らすのを見れば、羽風は春の山風を思はせる。

○かゝればぞ　かくあればこそ、雪のかゝればこそ。

○さえとほる云々　冴え徹る。夜と四十とをかけた。つみては雪の緣語。

○あとふみて　雪の緣語、私の徑路を踏んで。

澄月のもとより「いにしへにかへる心のはなもけさゆきのふるえにさかせてや見る」「とふことはかたみに老のあとをのみをしむに似たる初雪のには」とありけるかへし

いにしへをしのぶの草も埋もれて雪のふる葉ぞいとゞいろなき

とひとはれめでこしかたのあとをのみかぞへてぞふるけさの初雪

又のとし雪の日かれより「老のかずつもれる外はあともなしことしの雪やこぞのふること」「こぞをけさ思ひいづれど身の老はわすれてむかふ庭の白雪」「見るがごとみやこの四方を君がけさわがものがほのにはのしら雪」かへし

これも亦つもれば老のふることにめでじとおもへどけさのしら雪

身につもる老をわすれて見る雪の消えゆくにこそ驚かれぬれ

ことたらぬやどにみてるは山かけてみやこの雪のひかりなりけり

澄月より「いかにふる庭のけしきぞ夢のまにこぞのあと見るけさのしら雪」かへし

ふり〳〵てきえをあらそふ我のみぞ去年にかはれるけさの白雪

しはすばかり此の老僧がりやれる「むかし親しかりし人はみな消えらせ

○ふるえ　古枝と降るとかけた。

○とふことはかたみに云々　訪ふ事は難いと、互にとをかけた。老のあとは過去と足跡を雪につける事とをかけた。

○めでこしかた　賞美して來たと越し方とをかけた。

○こぞをけさ云々　去年の雪は思ひ出すが、自身の老年になつた事は忘れて向ひ見る。

○見るがごと　君の風貌が目前に見えるやうである。

○ことたらぬやどにみてるは　缺乏がちな自分の家に十分あるのは

○きえをあらそふ　雪の緣語、いつ死ぬかもわからぬ。

○此の老僧　澄月をさす。

ぬそのよの事をたれにかたらむ」と又雪に催されて

ふたもとのすぎしむかしはしら雪のふりて見ゆるも後おひの松

君も我もともにきえなむ跡はたがこと葉の花か雪にさくべき

とひかはす跡もはづかし窗の雪あつめあつめぬけぢめわかれて

かれよりかへし「ふたもとのすぎなば君やのこるらむ我ぞふる河野べの白雪」「あとはたがことばの道にふる雪もしばしけぬまの花とこそ見れ」「とひかはす窗のみゆきの花ざかり跡のけぢめはさもあらばあれ」盛子より「君はさぞ野山の雪を見ても猶こと葉のはなの色やそふらむ」といひおこせしかへし

ふりにける身にはあたらし君にこそ野山の雪は見すべかりけれ

たかがりをよめるうた

かりくらし今はとかへる道のべの鳥立（とだち）に鷹をまたあはせつる

あすもこむかた野の眞柴しをりせよあかずくれぬるけふのみかりは

くれぬとて眞柴をりしきくむ酒にやどるもさむきみかり野の月

野鷹狩

みかり人今やいる野のしもがれにみだれて見ゆる袖のいろいろ

○雪に催されて　雪に歌想を誘はれて。

○ふたもとのすぎしむかし　二本の杉を親友に喩へた。杉を過ぎにかけた。

○窗の雪云々　車胤の故事、勉強したしないの區別がわかつて恥かしい。

○あたらし云々　老人の私には惜しい。

○鳥立　茲では鷹狩の折、鳥の驚き立つ事。

○かた野　河内北河内郡交野、北野と相竝んで禁野中有名なものである。

○しをりせよ　案内をせよ。

○みかり野　天皇の御獵場として私人の狩獵を禁じた野。禁野。

○いる野　山城乙訓郡人野、御狩人が今や踏み入るにかけた。

鷹狩欲暮

あかずいまふたよりみより狩り行かば鳥立も見えず野べはくれなむ

連日鷹狩

をとつ日もきのふも野べに狩りくれぬあすは山路のとだち尋ねむ

炭竈

ことさらにけぶりて見ゆる松山やすみやく小野のあたりなるらむ

たえまなき煙にしるし山人ややくとやくらむみねの炭がま

冬の日のかげほどなしといかばかりすみやかるらむ小野の山人

埋火

しばしとてむかひしけさの埋火のあたりながらに日をくらしつる

さしそへし炭もいくたび霜の色にさゆる夜しるき閨のうづみ火

爐火

かきおこしほだきりくべよ埋火のあたりもさむき冬の山里

うづみ火のもとみし友をかぞふれば消え残れるぞすくなかりける

寒夜いたく更けて爐火を見て

埋火の炭さへも夜の更けぬれば翁がかみの色にこそなれ

○いまふたよりみより　もう二度三度。

○やくとやくらむ　盛んに焚くであらう。

○しばしとて云々　一寸と思つて向つた埋火に、あたつたまゝで一日過してしまつた。

○ほだきりくべよ　榾切りくべよ、焚物にする木片を切りくべよ。

○あたりも　火に當ると附近にかけた。

○もとみし友　埋火の許と以前親しみし友とをかけた。

○翁がかみの色にこそなれ　白くなる意。

向爐火

うとからぬ友もかくやはむかふべきあたりをさらずなるゝ埋火

佛名夜聞

西になる月にきこえてみ佛のみなの聲こそたかくすみぬれ

宮より題たびたりし年中早梅を

暮れて行くとしの心やいそぐらむ春もまだきに梅にほふなり

柴垣のうめのさけるを見て

おのれのみ冬ごもりせで霜がれの垣しばがくれ匂ふ梅が香

しはすうめのさけるを見て

待ちつけむ春に知らねど梅が枝のはな咲くまではながらへてみつ

梅告春近

春ちかくなるをも知らぬ山ずみをおどろかしつる梅のはつ花

としの暮れがた直方より梅にそへて一年の内に咲きぬと人のおくりたる梅のはつ花わかちてぞやるにとありけるかへし

君がえし梅たれわかてる心こそ色香の外のいろかなりけれ

ふゆぞさびしさ

○佛名　佛名會、陰暦十二月十九日から三日間、佛名經を誦し罪障を懺悔する法會。佛名懺ともいふ。

○春もまだきに　春もまだなのに

○直方　伴直方であらう、江戸の國學者、通稱彌五郎。伴信友の門。

秋くれて冬ぞさびしさわすれけるみ雪ちりぼひ梅かをるころ

冬興

夜もすがら舟さしくだし月雪のひかりわかるゝさかひをも見む

うづまさにて年の暮れがたに庭の小篠かりそぐとて

山里の垣ねのをざゝかりそめによをのがるとて年もくれぬる

おりたちてをざゝかりそぐ燒鎌のとくこそけふに年は暮れけれ

おなじころ惟徳がとひ來てかへるさに「春は又とひて盛りの花を見む老木にしのげ霜雪のころ」といへるかへし

霜雪のふる木も冬をしのぎなむ今ひと春の花も見るべく

旅宿待春

つもりそふこしぢの雪の中やどにけぬべき春を待つぞひさしき

としのくれに一室をとひて

暮れのこるけふしとはずばもろともに今年のかげを又や見ざらむ

七十のとしのくれに

稀なりときくもけふのみあすよりやあやしき年と人にいはれむ

うのとしの暮によめる

○かりそめに　一寸の意と刈りとをかけた。
○とくこそ　鋭利の意と速いとの意をかけた。
○惟徳　村田惟徳、通稱東之進、字は子馨、春海の子なる岡田郎風の養子、京都の歌人、文政十年歿。
○一室　櫻井一室、名は道敏、京都の歌人、武者小路家の門人。
○今年のかげを　今年の日を。
○稀なりと　人生七十古來稀の意
○うのとし　卯の年、寛政七年乙卯であらう。蘆庵七十二歳の時。

何事をなすともなくてなゝかへりめぐる卯年も又くれにけり

老送年

老いそひぬよもこの春は夏はとて秋過ぎ年もまたくれぬめり

歳暮

わかざかりをしみしことは何ならず老のかずそふ年の別れ路

年欲暮

ほどもなく春にやこえむ年波の立ちもかへらぬ末のまつ山

歳暮雪

春に猶のこれことしの雪の山かひなく暮れしなごりとも見む

水邊歳暮

行く水のかへらぬ年のなごりには波のしわのみ身にぞよりける

河歳暮

はやくともくれ行く年の川ならば柵（しがらみ）わたしせかましものを

爐邊惜年

埋火は炭さしそへむけふのみの年の光はなにかつがまし

かきおこしおもひかへせばうづみ火の消えしに似たる一年のあと

○なゝかへり　七へん。

○よもこの春は云々　よもや此の春は生きのびまい、此の夏は生きのびまいと思ひながら。

○立ちもかへらぬ　波の緣語。

○行く水の云々　かへらぬ、なごり、波のしわ、よりける、皆緣語。

○なにかつがまし　炭火の消えたのには、炭をつぎ加へるが、年の光陰のなくなるのには、つぎたすべきものもない。

○かきおこし　炭を掻き起すと、心に想ひ起すとをかけた。

都鄙歳暮

都にもとまらぬ年はいなしきの伏屋といへどよはにこそ行け

除夜

ふけにけるわがよをそへて思はずば年をのみこそ惜しみあかさめ

年くるゝ夜いときなきむかし春待ちていもねざりし事を思ひいでて

春待つといもねざりつる我もわれ夜もおなじよを惜しむ年かな

曉鐘を聞きて

聲のうちにをしむことしはつきはてて春にやならむあかつきの鐘

この道にこゝろざしはありながらざえなき身をかこちて冬のころ

難波江や霜にをれふす蘆の葉のみがくれながら朽ちやはてまし

やまひしたる朝に初雪を見て

足引のやまひしをれば初雪のめづらしきさへ身にぞしみける

くるつあした雪ふかくふりたるに

草も木もあたゝかげなる雪なれどふりのみまさる身にはさむけし

布淑が桂にすめるほど雪のうた五十首見せしにおもしろくおぼえしかば巻のおくにかきたりし

○いなしきの　稻殼を敷く事から田舍の意に用ゐる。

○ふけにけるわがよ　更けた夜と、老いた自分の世とをかけた。

○この道　和歌の道。
○ざえなき身　才能無き身。
○みがくれながら　水隱れながら。水にかくれたまゝと、身が物にかくれ埋沒したまゝとをかけた。

○くるつあした　その翌朝。

秋にそふかつらの色と思ひしは雪を見ぬまの光なりけり

心性寺にたてまつる百首のうちに雪を

ゆきに身はうづもれながらつたへこしみのりの跡ぞよゝに残れる

興子が詠草に「おく山に朽ちはてむ木もやくすみとなりての後ぞ里にいでぬる」とあるを見てをかしさにかきそへし

やくすみとなりて都にいでぬればなげきの果てはよろこびぞかし

炭の急に喜之がうたこふに

あかねさすひるはみじかしひにつがむ炭ぞみ冬のながき夜の友

餘齋へ炭をおくれりけるつとめてかれより「うづみ火のすみつきがたきみやこにもおもひをおこす友はありけり」ときこえしかへし

おもひやるかひもなけれど埋火のすみつきて猶久にませとぞ

しはす十五日ばかり重愛がきて歌よみぐるしとまうし侍りしかばたゞごとによめといふそれなむ詠みいでがたきよし語るによみておくらむとちぎりしが十七日にや思ひいでしまゝ年の暮なればいまいくかばかりかとて

かぞふればことしも今は十日あまり二日ばかりぞくれのこりける

○秋にそふかつらの色　地名と秋の月光とをかけた。

○やくすみとなりて　燒く炭となつてと、役が濟んでとをかけた。

○なげきのはては　悲しみの後に木と云ふ炭の縁語。

○ひにつがむ　火につがむと日に繼ぐとをかけた。

○餘齋　前出、上田秋成。

○すみつきがたき云々　炭つきがたきと、住み付きがたきとかけた。思ひは火にかけた。

○おもひやる云々　思ひのひ、久のひ、埋火の縁語。

○歌よみぐるし　歌がよみにくい

○たゞごとによめ　尋常にありのまゝによめ。古今集序には歌の六義の一として雅によむ意であるが、後世のは内容が轉じたのだ。

○かぞふれば云々　ありのまゝに詠じた歌の一例。

又こむ春はおいのかずそふべくおもひて

むそぢあまり八つといふ年に一年をまたや添へまし春のきたらば

のこる日のいやすくなくなれば

暮れのこる日かずすくなくなるまゝに年の惜しさはいやまさりけり

あしたにつま戸軒などに寒雲のたちこみたるを見て

うづまさやこりたる雲のうちになどけふまでわが身消え殘りけむ

古人のよめる詞を題にてよめる時の冬のうたに

夜をさむみめのみさめつゝ霜さやぐ竹のまろねぞふしうかりける

霜の上に霰みだれてあられぢのしらあやしける庭かとぞ見る

風そひてほどろ／＼にふる雪はさかぬにちれる花かとぞ思ふ

よひのまの雪にをれ木の松たきて冬の夜ふかき寒さしのがむ

けふの日も夕なみちどり音に鳴きてたちもかへらぬ昔をぞおもふ

行く年を今二日ばかりをしむともかぎりとならば今日にかはらじ

楢小川

きのふこそみそぐとせしか風さゆる楢の小川は氷ゐにけり

眞神原

〇むそぢあまり八つといふ年　六十八歳、寛政二年に當る。
〇いやすくな　愈少なく。
〇ふしうかりける　節と臥とをかけた。まろねは竹の丸く曲りねるとかけた、帶も解かずそのまゝ寢る事。
〇あられぢのしらあやしける　霰模様の白綾を敷いた。
〇ほどろ／＼に　斑々に。
〇楢小川　山城愛宕郡上賀茂神社境内の御手洗川を奈良の小川と云ふ。新古今集、藤原家隆の「みそぎぞ夏のしるしなりける」を思ひ寄せた。
〇眞神原　大和法隆寺の附近、天武帝御殿の所在地。

日は暮れぬ雪はふりきぬ大くちのまかみが原をいかで過ぎまし

○大くちの　まかみの枕詞。

六帖詠草　戀

戀歌

こひのこゝろを

物思ふけはひや見えむわが袖にたえぬ涙はよしつゝむとも

初戀

けふよりや人をこひぢにまどふらむあやしく袖のぬれてかわかぬ

まだ知らぬ思ひこそつけこれや身のこがれ行くべきはじめならまし

思不言戀

いひ初めてつれなからばとさりげなくつゝむ思ひぞいとゞ苦しき

しのぶ戀

よのうきにおつる涙といひなしておもひの色は猶ぞつゝまむ

忍久戀

打ち出でていつかは見えむさゞれよりなれる巖の中のおもひを

忍涙戀

○思ひこそつけ云々　思ひと火とかけ、こがれ行くと緣語を用ゐた。

○いひ初めて　先方の人へ言ひ出して。

○打ち出でて云々　打出の濱にかけ、さゞれ、巖と緣語を用ゐた。近江の打出濱よりむしろ攝津武庫郡打出濱であらう。

紅にそめてこそ着め戀衣さらば涙のいろやまがふと

しのびたる中らひにいとつらく見えければ

いとはるゝわが身を知らでつらからぬ人めをのみもかこちけるかな

忍絕戀

しのびこしわが中河はたえぬるをなどか涙のしたむせぶらむ

聞戀

なぞやかくへだつる人のきぬの音を聞きておもひのつまとなすらむ

聞聲戀

をりて見むよそにのみやはきくの花よしく袖に露にぬるとも

不見戀

へだつるはうきものごしの聲をしも又もやきくと立ちぞやすらふ

我ながらあやしやいつの契りとでみぬ面影の身にはそふらむ

纔見戀

ほの見えし軒のいよすのすきかげの心にかゝる黃昏の宿

白地戀

行きずりの袖の香ばかり身にしみて思ふはいつの契りなるらむ

○いとはるゝ云々　いやがられて居る自分の身とも氣がつかないで、人のつらいのは人目のためであると、つらくもない人目ばかりを恨んでゐた事よ。

○中河は云々　男女の仲を河にたとへた、したむせぶは河の緣語。

○きぬの音を云々　衣摺れの音、おもひのつまは思ひの端緒、つまは褄で衣の緣語。

○よそにのみやはきくの花　よそながら噂にばかり聞いて居ようや、聞くと菊とをかけた。

○へだつるはうきものごしの　間を隔てて居るのはいやな物越しの聲。

○いよす　伊豫簾、細い竹の簾。

○すきかげ　透き影、簾を透いて見える姿。かゝるは簾の緣語。

○行きずりの　行く時すれ違ふこと。

遣書戀

つらくとも人めを忍ぶ玉章にくだく心のほどは知らなむ

逢ふ事ぞよどみがちなる水ぐきのかよふばかりを身の契りにて

失返事戀

ちらさじと忍ぶあまりに見もわかでおきまがへける露の玉づさ

ある夜の夢にかたらひける女のもとより文もてきたれり見れば久しらおとづれざりけることよなどありうちおどろかれて目さめぬればはやら身まかりにける人になむありける

見るふみにわが怠りを驚けばあかで別れしいにしへの夢

尋戀

よそながらとふべかりけりうき人のたづぬときかば猶やかくれむ

祈戀

逢瀬をや更にいのらむ戀せじのみそぎはうけぬかものみづ垣

祈難逢戀

いのりこし神のみしめはくちゆけどとくべくもなき人のつれなさ

契少人戀

○よどみがちなる水ぐきの　水莖は文字又は手紙の意、よどみがちなるは水の縁語、筆の澀りがちなること。かよふも水の縁語。

○ちらさじと云々　露の縁語。

○おきまがへける　置き忘れて失つた。置くは露の縁語。

○戀せじのみそぎはうけぬ云々　もう逢はしまいと誓ひの御祈は、賀茂の社で受けないのであるから、又の逢ふ機會を祈らう。賀茂の水をかけた。

○いのりこしめ　御標、とくべくはその注連も朽ち行くが、自分の思ひをといて呉れさうにもない人の無情さよ。

いはけなき心にだにも忘るなよおひさき遠く契ることの葉

契待戀

かならずとたのめしけふの暮なれど訪はれぬ程はいかゞとぞ思ふ

くちかたむ

いつはりに聞きなさるとも武隈(たけくま)のまつをも見きと人にかたるな

不憑戀

たび／＼のうき僞りにならはずばたのみぞせまし人のことよさ

憑媒戀

つれもなき人もあはれときくばかり猶言そへていひなびけてよ

失媒戀

楫をたえ便りなぎさの蜑小舟こがれわびぬといかで知らせむ

不逢戀

さきのよにいかにむすべる契りとてかくとけがたき中の下紐

僞戀

ことよきはまことすくなき心とも思ひかへさでたのみしもうし

待戀

○訪はれぬ程は云々　實際尋ねて來ない間は、どうであらうかと思ふ。

○武隈のまつをも見きと　陸前名取郡鵜崎に武隈二本松がある。後撰集卷十七藤原元善の歌「植ゑし時契りやしけむ武隈の松を再び逢ひ見つるかな」に思ひ寄せた。

○うき僞りにならはずは　物うき僞りの戀に馴れてゐなければ。

○人のことよさ　先方の人の口のうまさ。

○便りなぎさ　行くべき方法もないと渚とをかけた。

○こがれわびぬ　焦れなやむと、漕ぐとかけた。

○とけがたき　紐の緣語。

○ことよきは　言葉の美しいのは、論語の「巧言令色鮮矣仁。」

○さはるかごとも云々　差支へのあると云ふかこつけ言も、今はもう云つて來なくなつた。

○かげとなる身に　痩せ細る身。かげは燈火の緣語。

○うつゝとも思ひぞわかぬ　正氣とも思ひ分けられぬ。

○つれもなき云々　相手もない正氣に歸る。さよは夜と夜の衣とにかけた。○さよ衣かさぬと見しや云々　衾を同じうして寢たと見たのは戀人を思ひ寢の夢であつた。

とひこぬをならひになして宵々にさはるかごとも今は聞えず

まちくらすまの

あはでふるとし月よりも契りおきてまちくらすまの久しきやなぞ

空閨殘燭夜

まつよはのむなしき閨の燈火をかげとなる身にいつまでか見む

あふよはこよひ

まちつけし君はかへさじたまさかにあふ夜はこよひ明けはてぬとも

ふたりをり

まどろまじ日頃のうさを夢に見ばふたりぬる夜のかひやなからむ

初逢戀

うつゝとも思ひぞわかぬ夢にさへうかりし人にとけてあふ夜は

忍逢戀

しのぶればふけて逢ふ夜の程なきにいそぐわかれをそへて悲しき

夢逢戀

つれもなきうつゝにかへすさよ衣かさぬと見しや思ひねの夢

逢増戀

つらしともかこつかたなくうちとけてあひ見し後ぞ戀は添ひぬる

兼惜別戀

わりなしやうきは逢ふ夜も身をさらでまだきに惜しむきぬ〴〵の空

曉別戀

ゆふつけのとりとめがたき別れかなしらむは月にかこちよせても

悲離戀といふことを

わするなよかけはなるとも山の井の淺からざりし中の契りを

とゞまらず

とまらぬもしひて恨みずなごりなく絶えもやせむの心よわさに

從門歸戀

おもはずよさしもたのめし松のかどあけぬ夜ながら歸るべしとは

後朝戀

暮をだにたのみざりせばおきてこし露のいのちは何にかゝらむ

後朝切戀

暮れなばと契りおきつる朝露のひるまを何にかけてたへまし

逢不遇戀

○うきは逢ふ夜も身をさらで　人と逢ふ夜も憂きは身からなくならないで、まだあきぬに後朝の時を惜しむ事よ。

○ゆふつけのとりとめがたき　木綿附鳥卽ち鷄と取り留めがたいとをかけた。

○山の井の云々　萬葉集卷十六「安積香山影さへ見ゆる山の井の淺き心を吾が思はなくに」を引用。

○松のかど　待つとかけた、あけぬは門の縁語。

○暮をだに云々　おきて、かゝらむ、共に露の縁語。

○ひるま　露の干る間と晝間とをかけた。

○何にかけてたへまし　何をたよりにして堪へて居よう。かけては露の縁語。

○人のことよせて　戀人のそれにかこつけて。

○猶かけそへよ　衣の縁語。

○人まだに　人の居らぬ間だけでも。

○なか〳〵人に　却つて人に知られ始めた。

○逢ふにかへむと云々　逢ふ事が出來たら捨てゝも構はぬと思ひ込み來た我が身であるよ。

○いとふにはゆる云々　先方で嫌がるのにいよ〳〵生ずる我が戀であるから、一度はいやがらずに、思ふと云つて試みて下さい、君よ。

さりげなくもてはなれぬるつらさかな見しは夢かとたどるばかりに

歎無名戀

またきよりたつなに人のことよせていとゞつれなくなり行くぞ憂き

老ののち人と名たてけるに

ぬれ衣は猶かけそへよそれにだにふりそふ老の涙かくさむ

顯戀

人まだにゆるさぬものをわが袖の涙のなどかよにはもれけむ

人にしらるゝ

わがおもひつゝめばつゝむけはひよりなか〳〵人に知られそめぬる

おもかげは

おもかげは身にそふかひもなかりけり心のかよふ契りならねば

切戀

消えぬべき露のいのちよ待てしばし逢ふにかへむと思ひこし身ぞ

いとふにはゆる

かくばかりいとふにはゆる戀なれば思ふといひて試みよ君

悔戀

悔しくもうらみつるかななごりなくたえてのうさも思ひかへさで

變戀

今はたゞ袖こす浪をかたみにてたのめし末のまつこともなし

臨期變詞戀

聞くもうし今とひくやと待つ暮の訪れかへてさはる便りは

戀心

しられじと心をためし人めさへ今はいとはぬまでぞ戀しき

戀催意

戀ゆゑは心ぞちゞにくだかるゝとせばかくせば逢ひも見るやと

寒鴈添戀

はとのなくを聞きて

さえとほる霜夜の鴈の聲に猶かさねぬ袖の氷をぞ添ふ

負戀

夕まぐれつまよぶ鳩よつれもなき人のあたりに聲たててなけ

久戀

つれなくばまたじ今はの心にもまけて戀しき夕ぐれの空

○末のまつこともなし　古今集卷二十東歌「末の松山浪も越えなむ」に據つた。今はたゞ袖に宿る涙ばかりが戀の記念で、心頼みにした將來に期待する事もない。

○訪れかへて　尋ねて來るのに變つて。

○心をためし　自分の心を撓めて制してゐた。

○かさねぬ袖の　逢はぬ戀を意味する。

○つれもなき人のあたりに　情こはく來てもくれない人の近邊で。

○つれなくばまたじ今はの云々　先方で情なく來ねば、今はもう待つまいと決心した我が心も、いつか負けて、人の戀しい夕暮時である。

こひしくて心につゝみこしとし月を涙は知りて色にいでぬる

舊戀

我をのみふるしはつれど石上（いそのかみ）めづらしげなき人のつれなさ

遠戀

海山のへだてを中のかごとにて通ひし文の道もたえぬる

ふたよへだてたる

時のまもおぼつかなきをもしや君こよひとはずばみよやへだてむ

隔海路戀

隔てきてからくも潮のやしほちのをちにやつらき人をしのばむ

卜戀

あふことのかたきをつくる石神のまさしきうらはとふかひもなし

かたこひ

わが戀はありそによするかたし貝思ひくだけどあふよしもなし

かた戀はくるしきものと知りぬとも猶うき人は我をおもはじ

思

下にのみくゆる思ひのくるしさを何につけてか人に見えまし

〇布留 大和山邊郡の地名、布留と接近して居るので、ふるにかけた。

〇中のかごとにて 海山を隔てて居ると云ふのは、我等の間のかこつけにして。

〇みよやへだてむ 三夜を隔てる事にならうと御世を隔てむとかけた、世を隔つとは死ぬ意。

〇隔てきてからくも 潮の縁語。

〇石神の 神として祭つた石、しやくじとも云ふ、生殖器崇拜の傳説と關係がある。金葉集雑歌「逢ふ事を問ふ石神のつれなきに我が心のみ動きぬるかな」かたきは石の縁語。

〇かたし貝 貝殼の離れて一片となつたもの。片貝。くだくはその縁語。

〇下にのみくゆる思ひ 心中で許り燃える戀の思ひ。

つれなさをかこつ涙の水にしも消えぬぞむねの思ひ　りける

になきおもひ

身をこがすたぐひなるべきふじのねも人をおもひの煙とやきく

誰知相念心

もろともに思ふが中はちはやぶる神ならずして誰か知るべき

被忘戀

わするゝかさらばわすれも果てずして何なか〳〵にのこる面影

わすらるゝ身を今更になげくかな逢ふにかふべき命なりしを

恨戀

ことわりと聞きもなされぬもののゆゑに恨みしさへぞ今はくやしき

うらみ

葛の葉のうらみぞたえぬあだ人の心に秋の風たちしより

心中恨戀

つらくともことに出でてはいはじたゞ恨みはつべき契りならぬを

披書恨戀

見ればまたうらみを添へて濱千鳥つれなきあとにねこそなかるれ

○さらばわすれも果てずして云々　先方で忘れたのか、そんなら此方でも忘れよう、と思ひながら忘れもせずして、何故か却つて戀人の面影が殘つて居るよ。

○逢ふにかふべき命なりしを　逢ふ事が出來れば、捨ててもよい命であつたのを。

○ことわりと聞きもなされぬものゆゑに　尤もであると聞きなしてもくれぬものである故、恨んだ事まで今更殘念である。ものゆゑには古くものながらと反對を現はす用法であるが、茲ではその意味に用ゐてないやうだ。

○葛の葉のうらみぞたえぬ　裏見と恨みとかけた。

○あだ人　浮氣心の人。

○ことに出でては　言葉に出しては。

○濱千鳥　鳥の足跡にかけて手紙を意味する。ねこそなかるれ、聲[illegible]

つれなさはいつをはてともしら雲のうはの空なるながめのみして

六帖題にてよみける中に夕づく夜を

わが戀はまつの葉ごしの夕月夜おぼつかなくてやみぬべきかな

わがせこ

わがせこが衣やつれぬ七はかりおりてきすべきしら絲もがな

春恨戀

うつり行く人に恨みの猶ぞそふ花はことしもおなじ色香に

夏忍戀

うちしのび我ぞねになく時鳥まつをかごとに更くる夜の空

旅戀

思ひやれあまたたびねの夜の袖かさねしをりもかわきやはせし

古人のよみたる詞をよみ入れ侍る戀のうた

ひくしほのなるとの海の荒浪のよるとはすれど遠ざかりつゝ

花見ると人にはいひてたをやめの裳引きの姿あからめもせず

戀ひかねてことのなぐさに世の中をうじといふをぞ口なれにける

○うはの空　雲の緣語。

○六帖　古今六帖。

○七はかり　七斤、絲の數量。

○うつりゆく　花の移り行くと、人の心の變り行くとをかけた。

○あまたたびねの　度と旅とをかけた。

○ひくしほの　鳴門の枕詞、よる、遠ざかり、皆潮の緣語。

○あからめもせず　熟と目守る意、あかは、たをやめの裳引きの紅にかけた。

○ことのなぐさに　言の慰め。單に言葉だけの慰めに。

かみつけのさ野のくゝたち月たちてまつらむ妹をいつ行きて見む

いかさまにことはかりせばつれなくてたえばたえにし人にとはれむ

ふゝめりし花のちるまでとはれねば身を鶯の音にぞ鳴かるゝ

かくばかりつれなき人の戀しさは何のいはれと知るよしもがな

よしきえね命の玉のありかずに人のおもはぬ露の身なれば

人をわがおもふ心にほだされて忘らるゝをも知らずざりける

まけはせで命やたえむつれなさにすまひて戀ふる力合はせは

うくつらき妹がかくせる文とりてせめてはいかで脇をかかせむ

あふことのかたかけぶねに乗りつれば打ち越す波に袖ぬらしつゝ

日によする戀

人を思ふ心は常にくもり日のめに見ぬ影の身にそふもうし

月によす

あふことの涙にくもる秋の月それも見しよのかけはとゞめず

風によす

さむくなるよの秋よりも人心あらしの風ぞ身にはしみける

○さ野のくゝたち　萬葉集卷十四「上毛野佐野の莖立折りはやし吾は待たむゑ今年來ずとも」莖立は青菜の花咲かむとして伸びたもの

○いかさまにこそはかりせば　どう云ふ風に處置したら。

○ふゝめりし云々　蕾のふくらんだ花が咲き散るまで。

○よしきえね云々　まゝよ消えてしまへ。自分を人數の中にも入れて思はぬ、眼中に入れぬ。

○つれなさにすまひて　人の無情さと戰ひて。

○脇をかかせむ　せめて手紙の添書でも書かせよう。

○かたかけぶね　片掛船、片帆をあげた船。逢ふ事の難いにかけた。

○あふことの涙に　逢ふことがないと涙とをかけた。

身となつた。うきては雲の縁語。

○よそにだに云々　なびくむせぶ皆煙の縁語。

○とことはに云々　永久にありとは見せない石の火即ち胸の火を燃え出させていつか思ふ人に知らせよう。打ち出では石火の縁語。石火ははかない形容、白樂天對酒の詩に「石火光中寄此身」

○くたしやはてむ　朽ちさせてしまふかも知れない。

○みをの杣木の云々　み尾即ち山の裾の植林を樵り終りもなさで。忘れられる身を懲り果てもしないで。

○瓜生坂　山城愛宕郡白川村の東北方の瓜生山の坂であらう。

○うきはし　憂きと浮きことをかけた。よゝのかねごとは毎夜の約束する語。

○わすれ水　野などで絶え〳〵流れて人目につかぬ水。契るまで忘れるにかけた。

見る〳〵もうすらぐ雲の中ぞらに空しくならむ契りをぞ思ふ

煙によす

よそにだになびかざりせば藻鹽火の煙にむねのかくはむせばじ

火によす

とことはにありとは見せぬ石の火を打ち出でていつか人に知らせむ

杣によす

戀に名をくたしやはてむ忘らるゝみをの杣木のこりもはてなで

坂によす

わがおもひなるとしきかば瓜生坂日にやちたびもおりのぼりなむ

はしによす

末終にたえもやすらむ岩橋の夜をもとほさぬ中のちぎりは

たえぬべき人の心のうきはしにかけてくやしき世々のかねごと

信濃なるきそ路の橋も何ならずあやふき中にかゝる思ひは

水によす

結び置きし契りをさへやわすれ水かげだに見えず人のなりゆく

池によす

思へどもあだにいはれの池なれば深き心をえしももらさず

沼によす

とはぬまのうきになれたる草なればかつみながらも猶ぞ露けき

川によす

人はよし流れてとだにいはずとも山城川のやまじとぞ思ふ

わが中はかはるをぞまつ飛鳥川淀の淵もひとのうきせも

湊によす

つゝめ猶袖の湊による波のたちかへるべきうき名ならぬを

島によす

立ち寄りていつかたをらむみちのくの籬のしまのなでしこの花

潟によす

かりそめのみるめも今は遠干潟かたしや波のよるのちぎりは

岸によす

忘草生ふてふものを住吉のきしもやすると待つぞはかなき

○いはれの池　磐余の池、大和磯城郡、あだに言はれにかけた。深きは池の縁語。

○とはぬま　鳥羽沼であらう。山城紀伊郡。訪はぬ間の憂きにかけた。

○かつみながらも　水草の菰をかつみと云ふにかけた。一方で見つつも。

○山城川　山背川、一名泉川、山城相樂郡を流れる川。

○袖の湊　筑前博多灣の舊名。たちかへるは袖の縁語。

○籬のしま　陸前松島灣の島。籬の撫子とかけた。處女の譬喩。

○みるめも云々　見る目と海松布とをかけた。かりは其の縁語。かたしは潟の音の繰返し、よるは波の寄ると、夜とをかけた。

○きしもやすると　岸と來しとをかけた。

板鳴る鳴子と、一向とかけた。驚かすは引板の縁語。

○長岡　山城乙訓郡長岡、今の京都の前に都となつた地。

○よそになして見ば　自分を離れ第三者として見れば。

○はてがたの　秋の終り際。

○山の井の云々　かねてくみながらは井の縁語、あらかじめ推測しては居たものの意。深く、みづから、井の縁語。

○あはで朽ちめや　逢はないで老い朽ちようや。板の合ふとかけた。

○すがくさゝがにの　巣を作る蜘蛛の。いとたのみなきは、絲と非常にとをかけた。

○しげる歎きも　數加はる歎きも　しげるは松の縁語。

都によす

人を猶思ふ心の長岡やふるきみやことふるさるゝ身に

庵によす

人とはぬ我が身をよそになして見ば秋はてがたの小田の假庵

井によす

山の井の心はかねてくみながら深くたのみしみづからぞうき

簷によす

かず〳〵にたのめて年を古郷の軒の板間のあはで朽ちめや

人は今軒ばにすがくさゝがにのいとたのみなき中の秋風

草によす

露ばかりあはれはかけよ根なし草誰もかりなる世にすまふ身ぞ

萍によす

などやかく深くはおもふ萍のねざしとむべき契りならぬを

木によす

千年ふる松ならばこそあはでのみしげる歎きも末をたのまめ

檜によす

つげねどもやくるひはらをあふことの歎きのはてとよそにだに見よ

もみぢによす

染めてこそあらはれにけれわが袖よ秋のこの葉の色にならふな

杣木によす

このまゝに朽ちかもはてむ引きさしてうちおかれぬるみをの杣木は

鹽木によす

うらみても海人のこりつむもしほ木のこりずぞ人を思ひこがるゝ

鳥によす

鳴きこふる音にあらはれてむら鳥の立ちにし我が名誰にかこたむ

鴈によす

うき中は秋霧がくれなく鴈の聲のみきえて見るよしもなし

蟲によす

あこがるゝ胸のおもひやよひ〳〵に螢ともえて人に見ゆらむ

いとはれて絶えぬる中はさゝがにのまたかきつがむたのみだになし

○こりつむ　樵り積む。
○もしほ木　藻鹽を煮つめるために用ゐる焚木。こりを懲りにかけた。
○立ちにし　浮名の立つこと、鳥の立つことをかけた。
○あこがるゝ胸のおもひや　後拾遺集夏歌「音もせで思ひに燃ゆる螢こそなく蟲よりもあはれなりけれ」などに據つた。
○かきつがむ　蜘蛛の絲をつぐこ

匣によす

明けぬとてなどいそぎけむ玉くしげふたゝびとだにあはぬ契りを

まくらによす

しきたへの枕のちりを拂ひつゝねし夜の夢はまたや見ざらむ

裳によす

朝露にものすそぬらし妹がつむ野べの若菜にならましものを

衣によす

から衣裾のあはずてねたる夜は身に秋風の寒くこそふけ

あやによす

おりたちてきるとはなしに雲鳥のあやふき戀に身をややつさむ

紐によす

下紐のしるしもいかでたのまし人の心のとけぬかぎりは

硯によす

わが中は猶あふことやかたからむすゞりの石の世をつくすとも

筆によす

○ふたゝびとだに　二度だけでもと匣の蓋とをかけた。明けぬ、あはぬも匣の縁語。

○しきたへの　枕の枕詞。

○きるとはなしに云々　おりたちて、きる、やつさむも皆綾の縁語雲鳥は綾の模様。

○下紐の云々　後撰集戀歌に「人ごとは誠なりけり下紐のとけぬにしるき心と思へば」とある如く、下裳の紐が自ら解ければ男に戀されたと信ぜられた。先方の人の心が解けぬ限りは、此の兆もどうしてあてにならう。

○かたからむ　石の縁語。

○世をつくすとも　世を終っても、硯をすり盡してもにかけた。

わすれ行く人の心をとる筆にあはれと見えむすみつきもがな

弓によす

そりたかきあら木の眞弓おしかへしおきふしいつか手にならしみむ

わが方によりもよらずもしらま弓心ひきみむつかの間もがな

あふぎによす

手になれし扇の風もつたへてよふるさるゝ身の秋のこゝろを

注連によす

今よりはなかへりましそ通ひ路にしりくめ繩を引きはへぬなり

車によす

小車のうしやいつまでつれもなき人をおもひの家にすままし

網によす

月日のみつもりの海人の浦におく網の一目も見てややみなむ

繩によす

よりあはで此の世つきなばたく繩の長き恨みや人にのこらむ

筏によす

○わすれ行く云々　自分を忘れ行く人の心を捉へるこ、把る筆とかけた、すみつきは墨附、墨のつけ工合。

○そりたかき云々　弦をつけない弓の反の高い荒木の弓の如く。押し返し、弓の緣語。弓を手に馴らし、いつか親しんで見よう。

○しらま弓云々　白木の弓。知らずとかけた。ひき、つかの間皆弓の緣語。

○しりくめ繩云々　尻くめ繩、葉のなき藁のきらぬ繩、しめ繩と同じ、別に通路にしめ繩を張つてあるのではありませんから、急いで歸る事にありますまいの意。

○小車の云々　牛と憂しとをかけた。

○つもりの海人の云々　津守の海人、津守は攝津に同名の地二つある。月日のみ積りとかけた。

○よりあはで云々　縒り合はでと寄り合はでとかけた。たく繩は栲繩、楮の皮などで造つた物。

○なげきを組みこ　歎きと木とを

かゞりによす

おぼつかな何にかゝりてかゞり火の人のう川にもえわたるらむ

澪標によす

いさやまた逢瀬もなみのみをつくし戀ふるしるしはたつ名のみして

貝によす

われかひの身はなきものと思へばやくだく思ひもあはれとは見ぬ

箬簀によす

たのみしもうしやあだなる花がたみめならぶ色にうつる心を

燈によす

さりともとかゝげ盡して待つよはも苦しく明くる閨の燈火

名所によす

とひもこぬ人をいつまでよそにのみきくの濱なるまつことにせむ

稀に來てこよひかへるの山ならばいつはた我をとはむとすらむ

ふみかよふほどはたのめてけふも猶戀ひわたれとやいなむやの橋

年をへて戀をするがのあなたなるいつといはなむ命あるまに

たのめつゝいつかは人をまつ山のかはらぬ陰をくれごとに見む

○何にかゝりて　何に關係して、かゞり火の音を繰返し。
○人のう川　人が自分につれなきと鵜川とをかけた。
○みをつくし　身を盡すと舟の通路を示す澪標とをかけた。
○われかひの　割れ破られた貝。くだくはその縁語。
○箬簀　小さい籠の意、花籠の意に用ゐた。
○めならぶ色々　古今集卷十五「花がたみめならぶ人の數多あれば忘られぬらむ數ならぬ身は」に據つた。めならぶは目竝ぶで籠の編目竝ぶこと、それを見え竝ぶ意にかけた。同じ程度に見え眼うつりのすること意。
○きくの濱　豐前企救郡菊高濱、よそに聞くにかけた。
○かへるの山　還山、鹿蒜山、越前南條郡。
○いなむやの橋　いなやを阿波板野郡撫養にかけたのか。
○いつ　伊豆。戀をすると駿河とをかけ駿河の隣の伊豆として何時とかけた。
○くれごとに　暮毎にと榑（木材）とかけた。

あひ見ぬはたゞ一夜川年月をわたるばかりに戀しきやなぞ

矢釣山

ものゝふの弓に取りそふやつり山いるよりまどふ戀のみちかな

磐手杜

人知れぬ袖の涙やおもふことといはでの杜のつゆとおくらむ

粉濱

まつ人のこはまによするかたし貝見せばやあはでくだく思ひを

恨山

いりたちて何かは人を恨山へだつる中はかひもあらじを

會地關

はるけしなとしのみこえて行末のいつあふちとも知らぬ關路は

朽木橋

おひみしはたえなむ橋を朽木とも知らでぞよゝをかけて契りし

蓮浦

つみふかみ蓮の浦にしつむとも底のみるめはからむとぞ思ふ

〇矢釣山云々　大和高市郡。射るよりと戀の道に入るよりとかけた

〇磐手杜　陸中巖手郡澁民村に在る森。言はでにかけた。

〇粉濱　肥前高來郡小濱村、島原半島の西岸。待つ人の來よと思ふ粉濱とかけた。

〇恨山　信濃伊那郡山本村の山。

〇會地關　信濃伊那郡會地村。阿智とも云ふ、又榑關。中世關のあつた地。

〇朽木橋　岩代安達郡大桐木村にある朽木山中の橋か、朽ちた橋にかけた事は勿論である。

〇蓮浦　越前坂井郡細呂木村の入江。淨土から落ちてもにかけた。

角さはふ石見の海の深みるのふかくは思へど見るよしもなし

夢崎川

うつゝには猶ぞつれなきこひしくてわたると見しや夢さきの川

家島

さても我が戀しき波はなかねどもみまくぞほしき妹が家島

白鳥關

天かけるつばさもがなやしら鳥のせきとめらるゝ中もとふべく

加太浦

あふことのかたのうら浪たかければかへるさごとに袖ぞしをるゝ

俺等濱

うらやましやすくやひろふ人をとくあくらの濱の戀わすれ貝

子難海

君を思ふこゝろの色は紫のこかたの海のあさからめやは

插頭山

咲きそめば我ぞかざしの山ざくらよそめに見むと思ひやはせし

人妻里

○角さはふ　石の枕詞、萬葉集卷二に「角さ道ふ石見の海の」

○夢崎川　播磨飾磨郡手野を流る、今書寫川とも云ふ。

○家島　播磨揖保郡。

○白鳥關　紀伊海草郡山口附近に在る。

○加太浦　紀伊海草郡加太村の海岸。

○俺等濱　俺浦の濱、紀伊海草郡田倉埼の海岸。

○子難海　薩摩出水郡小潟であらう。

○插頭山　固有名詞か疑はしい。

○人妻里　未詳、蘆庵の題材にした歌の名所は、多く夫木集あたりに寄つたらしく、眞の固有名詞か疑はしいものが多い。此の人妻里は枕草子にもあるが、古來未詳となつて居る。

我ならぬ名のりをしてや月よよし夜よしととはむ人づまの里

戀　川

こひ川に身はしづむとも水の泡のうきたる名をば世には流さじ

○戀川　甲斐中巨摩郡小井川。

六帖詠草　雜上

雜歌

天のはら

蘇迷路の山には時のなければやみ空の色の常にかはらぬ

うづきついたち日蝕せりいにしへはこの蝕をさま〴〵にいひける事ありげなれど天文をもつぱらにかうがへしる世となりて今はいぶかる人もなくなりぬとおもふにつきて

天津日に月のかさなることわりもあきらけき世の光にぞ知る

晩風動簾

くる人も思ひかけぬをうたてわが心うごかす小簾の夕風

うづまさにすみし時軒に高き松ありて風の音信（おとづれ）をかしきを

此の宿の軒ばの松にことゝふやいづくの山の嵐なるらむ

雲はたゞこのかきねより立ちのぼるを見て

よそにのみおもひなれにし白雲を今は垣ねのものとこそ見れ

○蘇迷路の山　蘇迷盧とも書く、此の宇宙の絶頂にありと信ぜられる佛教の山、須彌山とも云ふ。色の變らぬと云つたのは、染め色にかけたからだ。
○いにしへはこの蝕を云々　日蝕を天下大變の前兆と考へたのは、支那でも禮記曾子問に「天子崩、大廟火、日食」とある、日本にも此の思想が入り、六國史に散見する。
○かうがへしる　考へ知る。
○天津日に云々　明らけき、光、皆日の緣語。
○くる人も思ひかけぬを　來る人を豫期しないのに。かけ、うごかす、共に簾の緣語。

○我のみや旅にうかれむ云々　自分ひとりが旅に心浮かれるのではない。うかれむ、たつ、皆雲の縁語

○見と見る方ぞ　見る限り何處も

○ちかながら　近い所でありながら。

雲有歸山情

我のみや旅にうかれむ雲だにも歸る山路におもひたつなり

晴

大空も野山もくものはれつきて見と見る方ぞみなみどりなる

やまもとより雲ののぼるがけぶりにまがひたるに

雨晴るゝ里のゆふけの煙かとおもへば雲ののぼるなりけり

くれつかた月くもりてふしたる夜雨の音のすれば

雨やいま降り出でぬらむ深き夜の軒にしたゝる音きこゆなり

今のいへあまりに雨もりければ政教はからひてふきかへたるのち雨だりのおつるに

ふきかへしふるやの軒のしたゝりは猶漏るかとぞ驚かれぬる

連日の雨にてみやこのたより絶えたれば

このごろは川橋たえてちかながら都は雨の雲のよそなる

橋雨

旅人のかづく袂に雨見えて雲たちわたる木曾のかけはし

遠峰收殘雨

○やつの風六つのちまたを　八風が六道を吹く意、八風は八世風又八法と云ふ、世間に愛憎し人心の煽動せらるる物八つを云ふ。利、衰、毀、譽、稱、譏、苦、樂。
○やがて我が身の云々　其のまゝ自分の身の將來もかやうであると考へる。
○なか〱影ぞおそくさしける　山の麓なので却つて日月が遲く當るのであるよ。

降りさして晴れ行くをちの山のはにのこれる雲やいつのむら雨

ち　り

やつの風六つのちまたを吹くたびに人のこゝろの塵ぞ立ちまふ

世のうさよつもらば積れはて〱は蓬が下(もと)のちりひぢの身に

かげろふ

あるものと見れば消えぬるかげろふにやがてわが身の行方をぞ思ふ

曉

水のおとも松のあらしも月かげもあかつきがたぞすみまさりける

あかつきはといふ句をはじめにすゑて

曉はねざめに知れど老いらくの耳にはかねやうとくきこゆる

夜

身のうさも月をし見ればなぐさみき闇こそ夜はわびしかりけれ

山

はてもなく立ちかさなりて青海の波のすがたにつゞく山々

ひむがし山

月も日もいでくる山のふもとにはなか〱影ぞおそくさしける

勝義があづまへまかりけるみちの記を見するにくさぐさをかしき事おほかなる中にかすめる富士のあけぼのの景色いはむかたなくよくかきたるにかきそへたりし

みずもあらず見もせぬふじの面影をさながらうつす言の葉の色

　そま

我のみやなげきこりつむ杣人のまさきの綱もくるしげに見ゆ

　野

春秋の色とりかへてめかれぬはまがきの野べのゆふべあけぼの

　野路

旅人や朝立ちくらむすが笠の見えがくれする野ぢの松原

　關

のがるべき道やはかたき世の中にとまるこゝろや關となるらむ

　寄水雑

雨はるゝあとよりすみて山川のにごるも水の心とは見ず

　桂宮といふがうづまさにありそこの清水をいさらゐと名づくこれをくみて茶をにるにいとよし

○勝義　小野勝義、京都の歌人、慶融門で、布淑、默軒等と四天王の一、中年江戸に出て加藤千蔭等と交はり、後京に歸つた。其の折の紀行文であらう。

○たゆきこりつむ　歎きと木を刈りつむとをかけた。

○まさきの綱云々　つるまさき、山葛等の長く這つた綱、繰ると苦しとをかけた。

○めかれぬ　茲では見飽きぬ。

○のがるべき道やは　此の世を遁る可き方法は困難でない、唯此の世に執着する心が自然障所となつて行かれぬのである。

○桂宮　山城葛野郡下桂にある、元桂御所と云ひ桂宮家の邸。

汲みて知れ清くすみぬる月のうちのかつらの宮のいさらゐの水

　雨後西南の風に川音のをちこちに聞ゆるに

河音のとほくちかくやきこゆらむ桂大井の風のまにまに

　谷水音幽

ひゞきくる松のあらしにうづもれて絶間がちなる谷の水音

　谷のこゝろや

山彦はわがよぶ聲のひゞきにて谷の心や常にむなしき

　流水浸雲根

立つ雲のうすきかたより岩がねにながるゝ水の苔あらふ見ゆ

　瀧水

白雲のたなびく山のたかねより落ち來るたきや天の河みづ

　養老瀧の下に人家ありおきなおむなありてうちおどろきたるさましたり

　わかき人ひさごに物いれてさしいだしたるかた人のよまするに

大君のみゆきましけるたどの瀧老もわかゆといふ水ぞこれ

　わかさのかみ宗直がしら河のほとりに博士たちいざなひてすゞみしをりの歌からうたにおのがをもかきなべてむさる歌ひとつとあれどおなじま

○桂大井　共に同じ川で、土地によつて名が變るのである。保津川が嵐山に來て大井と稱し、更に桂に來て桂川と云ふ。

○谷の心や常にむなしき　谷の心は虚ろである。

○養老瀧　一名多度の瀧。美濃養老郡養老村にある、[illegible]の說は元正帝の時、源丞内、酒を此の瀧から採り得て親に孝をつくしたと云ふ傳說である。

○大君のみゆきましける云々　十訓抄及び古今著聞集に出て居るもので、養老元年九月、元正帝瀧に行幸ありし事を云ふ。

○わかさのかみ宗直　若狹守高階宗直、圖南と號す、[illegible]、蘆庵澄月の次、天明五年正月二十四日歿。

とゐのつらにてだにむざえのもののまじれらむはいとかたはらいたきをましておくれてはいかでと思へりしかどよしある翁のせちにいへればすげなうもえいらへで日頃ふるにかれより「白河のしろきを後とすておかでらかべて見せよ瀧のことの葉」とく／＼などあり畫工の丹のかずつくしていろどるやうの言の葉にあらばこそ白きを後とものべやらめこれはいさゝかも

おもひよるふしなきまゝにしら河の瀧のいとこそ日頃へにけれ

かのこへるには

白河の清くきこえし波かずにあらぬもくづとかきおくれつる

涌蓮上人のかける繪に

山かけや江の水すごくすむ月にたれ憧れて夜舟こぐらむ

山水の繪に

水清く山影うつるあたりには心の塵もうかばざりけり

河

ながれてはさらしな川と思はずばよのうきせをばいかで渡らむ

河水流清

○むざえのもの　無才の者、才能の無い人。

○日頃ふるに　ぐづ／＼日を經過したので。

○しろきを後とすとおかで云々　白河の者の繰返し、しろきを後は論語八佾篇の「子曰繪事後素」を引いたのである。素は素粉で、繪は先づ下地をよくつくりて後五彩を施す如く、人は美しい質あつて文飾を加へなければならぬの意。

○おもひよるふし　據る節と思ひ寄る點とかけた絲の緣語。

○あらぬもくづとかきおくれつる　蓮將、自分の價値なき歌を書き遲れた。書くと搔くとをかけた。波かずにあらぬは　人並の數に入らぬ意。

○さらしな川　更級川、信濃更級郡。

山河のひとつみなもと清ければ千々のながれの末もにごらず

嵯峨の山川のかた

花もみぢ何かはそへむ人めなくしづかなるこそさがの山川

磯

よせかへりゆらるゝ磯のさゞれ石もいはほとならば波や砕けむ

磯巌

あら磯に立てる巌やいつの世の波のよせけるさゞれなるらむ

浪摩湿雨

よる波のおとにかくれてとまやかたもらずば雨の降るも知られじ

風翻白浪花千片

沖津風吹き立つなべによる波はちるを惜しまぬ花にぞありける

老の後北山のほとりにいざなはれて遊びありきけるかゞみ石といふを見て

みづはぐむかげもはづかしかゞみ石など若ざかり見にこざりけむ

城暗雲霧多

雲きりの色もわかれず立ちわたるくにのみやこの秋やさびしき

○とまやかた　苫葺きの家。

○吹き立つなべに　沖の風が吹き立つにつれて。

○かゞみ石　石の表面滑かで人影などよく映る石。

○みづはぐむかげもはづかし　大和物語檜垣の御の條「ぬは玉の我が黒髮は白川のみづはぐむまでなりにけるかな」みづはぐむには數說あつて決定しない、年老い齒落ちて後更に稚齒が生ずるのだと云ふ說が一般に採られて居る。老い姿を鏡にうつすのも恥かしい。

こほり

天の下ゆたかなる世に住むたみはいづくもやすの郡とやおもふ

遠村煙

雲ならば晴もわかじをゆふべ〳〵たてるや里の煙なるらむ

寄市雑

市中も何か心のさわぐべきうることなきをうることにせば

何の道もしかまの市女みをかへばうることかたき世をぞ知らまし

山家

世をとほく身はのがれきぬ山の井の淺き心をいかですまさむ

月花のをりはさすがになれしよの友しのばしき山の隱れ家

よのうさの猶聞えむといとふこそ心の淺き山居なりけれ

よのうさもきこえぬ庵の松風は心の塵をはらへとや吹く

しづかにとすむ山陰をとはれぬぞ愚かなる身のかひにはありける

山家夏

時わかずしげるひはらの山住はほとゝぎすにや夏を知るらむ

太秦にすむころ

○やすの郡　近江野洲郡、安いにかけた。

○うることなきを云々　得る事なきと、賣る事なきとかけた。

○しかまの市女　播磨飾磨の市に物賣る女。飾磨の物産は飾磨紺と薪炭。いかなる道にてもかやうであるにしかをかけた。

○みをかへば　身を代へると、買へばとにかけた。

○なれしよの友　馴れ親しみし人の世の友。

○かひにはありける　しるしと峽とをかけた。

○ひはらの山住は　檜の木原の山に住む身は。

今はよをうづまさ人になり果ててみやこは雲のよそにこそ見れ

山館雲

山深くすむともよそに見えぬまで猶立ちかくせ軒のしら雲

山家雲

山深み人はかよはで白雲のゆききを庭の垣ねにぞ見る

山家嵐

ひゞきくる松の嵐を待ちとりて軒ばにさわぐ山のしたしば

山家曉雨

山深みかさなる雲に窗とぢてあくるもおそき雨の寂しさ

山家朝

朝まだき立ち出でて見ればわが庵の軒端の山に雲ぞわかるゝ

山家夕

さびしきは軒ばの松にのこる日もかつかくれゆく山陰の暮

山家水

濁りなきもとの心を知る人やいほしめてくむ山の井の水

よのうきめ見ずばこゝろもすむやとてくみそめぬらし山の井の水

〇今はよをうづまさ人に　世に埋れると地名とをかけた。

〇待ちとりて　待ち受けて。

〇あくるもおそき　窗をあける事の遲きと、夜の明ける事の遲いとにかけた。

〇いほしめてくむ　そこに庵を造り住んで汲む。

〇よのうきめ　世の憂き目、いやな事。浮きと水の縁語を用ゐた。

山家木

花と咲き紅葉とそめて山里にうつる月日は木々ぞ見せける

○山里にうつる　映ると移るとをかけた。

山家松

軒におふる松こそいたく老いにけれわが山住や年をへぬらむ

山家苔

世にかよふ心の道も絶えぬべし苔にあとなき山陰のいほ

田家を

うきふしはさても山田のさゝの庵世を遁れこしすみかならねば

○うきふしはさても山田の　いやな事さてもやまぬにかけた。

世をいとふ人のすみかにまぎるゝは小田もる庵のよそめなりけり

○よそめ　わきから見た様子。

田家夏

時きぬとさなへとり／＼出ではてて田中の里は夏ぞさびしき

○さなへとり／＼　早苗取りと思ひ思ひをかけた。

閑中待暮

人とはぬやどぞさびしき暮れゆかば月かげをだに友と見ましを

夕幽思

ながめつゝおもへば消えし夕雲の行方ぞ袖の露となりぬる

林下幽閑

もみぢ葉を尋ねていれば山本のはやしにひゞく鳥のひと聲

むかし事にあたりてより閑人となれば殘生をこゝろのまゝにやしなひ火にあひてはうづまさにのがれて幽閑をたのしび物をえてはこの岡崎に來りて我が好める風景にとめるをおもひて

世の中のうきにあはずば心ゆく野べのいほりにすまひせましや

よの中のうきは我が身の幸(さち)ぞとも命しなくばいかで知らまし

青ふし垣のとぢめは杉の板戸なりしが年をへて杜朽ち戸やぶれていとわびしければとりはらひて竹のあみ戸を野邊のへだてばかりにしたる

よをいとふ竹のあみ戸のあらければ猶うきことぞもりて聞ゆる

布袋のかたに

天地をふくろにいれてもちたれば世はうつせみの輕きものなり

僧

苔衣うらなる玉にこゝろをやかけていとはぬ野ぶし山ぶし

西行上人の銀の香爐たびたるをもたるかた

家を捨て身をすてゝしも寶をばめかくるものと思ひたるらし

王昭君

○事にあたりてより云々　中年より官仕を辭した事であらう。
○火にあひて云々　前出、火災にて太秦に移り住んだ事が見えて居る。
○青ふし垣　青葉のある柴垣、生垣。
○もりて聞ゆる　あみ戸の縁語。
○うつせみの輕きものなり　空蟬と現身とをかけた。輕きはその縁語。
○苔衣うらなる玉に云々　苔衣は僧侶、隱者などの衣を云ふ。苔の衣を著ても心中なる玉に目的をかけ山野に臥すのをいとはぬ。心中の玉は佛敎の悟脫。
○銀の香爐　銀の猫の形したものを源頼朝より貰ひ、路傍の子供に與へたと云ふ西行の傳説の一。
○めかくるものと　目をつけるものと、執著するものと。
○王昭君　漢元帝の時匈奴來朝し漢の壻たる事を望む、畫工毛延壽に賂して後宮の美人皆美しく描かせた、齊國王嬙の女王昭君だけは賂しなかつたので醜く描かれ遂に選ばれて匈奴に嫁した。

○をりかへす云々　折り返し舞ふと織ることをかけた。
○白水郎　海人。
○うきめかり舟　生活の憂き事と海草の布とかけた。
○いく薬　不死不老の薬。此の歌は秦の徐福を思ひ寄せたのである。秦始皇帝の命に依り方士徐福不老不死の薬を求めむと海に出で帰らなかつた。徐福の墓と伝ふるもの紀伊新宮町の郊外に在る。
○十かへりに　十度に。松の花を十返花と云ふ、百年に一度、千年に十度花咲くと称へ祝賀に用ゐる
○いつはとは　何時はと五つ葉とかけた。
○中つえ　中の枝。

面かげをうつしかへずばさすらふるわがうきめには誰かあふべき

妓　女

をりかへすをとめの袖にまねかれてあまつ空より雪さへやふる

白水郎

よをわたるうきめかり舟いでもあへず汀の蜑は藻鹽をぞ焼く

舟人をよめる

いく薬もとむとはなき船人も海路（うなぢ）にとしの老いにけるかな

泥孩兒

うらやましうきよりなりてうき身とも思はず常にゑめるみどり子

松をこのめればをり〳〵によめる

十かへりに咲くはまだ見ずひとしほの春の緑ぞ松の花なる

生ひそめてまだ二葉なる苗なれど千よまつの木と見ればたのもし

春秋の花も紅葉もひとさかり松のときはにしく色ぞなき

いつはとはわかぬ緑も夕づく日さすやをかべの松のむら立

東南にたかき松ありこと木にすぐれていとめでたし中つえより下つかたしらかしのいとしげくしげりていぶせかりければ枝をはらひすぎけるに

松のすがたいとよく見えていとゞ目もかれずなすべきわざもわすれて見る見るおもふに詩などには十八公と文字によりていへることもありげにおぼゆれば

はたとせに一とせたらぬきみ見れば我もわかえし心ちこそすれ

いま住むやどの軒に松のあなるは昔若狭守宗直あそが和かの浦よりうつしうゑたるなりこの松を經亮見て「千よかけて君がすむべき庵とやかねて移せしわかのうら松」といへるかへし

うつしけむ人はむかしの宿の松千とせの色を見るもはかなし

松經年

軒のまついくよか經ぬるとことはにすみて久しき山風の聲

わかのうらに松あり鶴あまたあそぶ

松の色たづの聲さへわかの浦は見聞くたび〳〵のどけかりけり

杉

このもりは神ましけりなおく深く茂れる杉にしめはへて見ゆ

門杉

とへかしのしるしの杉はたれまちてこぼるゝ門を猶たてるらむ

○十八公　松の異名。松字を分けたのである。

○わかえし　若がへりし。

○宗直あそが　宗直朝臣が。

○しめはへて見ゆ　標縄が張ってあるやう見える。

○とへかしのしるしの杉云々　古今集十八「我が庵は三輪の山本恋しくはとぶらひ来ませ杉立てる門」に拠った。こぼるゝ門は破れくづれる門。

○くぬぎ　櫟、若櫟は若く或は我がと言はむ時に用ゐる序詞。
○よのうきふし　世の憂き事と、よ、節とをかけた。よは竹の節と節との間を云ふ。
○すぐなれど　直なると近き時とをかけた。
○ひとかども　一つの角と、一つの特長とをかけた。
○やほたで　八穂蓼、穂の多い蓼、蓼は辛いもの故、からき世の序詞とした、つみても縁語。
○かど〳〵しくてからき世に云々　はじかみは、山椒、後には生薑。山椒の如くとげ〳〵しく辛い世に又口に辛さが響いていつまでも残るやうな目に合はせて呉れるな、君よ。

くぬぎ

老いゆけど猶ことの葉の若くぬぎ若くはそはむふしも待たまし

竹

心だにすなほなりせばくれ竹のよのうきふしは何にしげらむ

窗竹

すぐなれと思へばふるきことの葉をさながらうつす窗のくれ竹

路芝

ひとつ色にしげる野もせの芝生にもさすがに分けし路はのこれり

石面苔

ひとかどもあらぬみたにのつぶら石あなおもなとや苔のかくせる

たで

身をつみて思へば誰もやほたでのからき世渡るうさはかはらじ

ある人のもとよりたび〳〵はじかみをおくれるに

はじかみのかど〳〵しくてからき世に又くちひゞくめを見すな君

庭の松にねぐらして鳥のをるに

山陰にねぐらさだむる鳥見ればわが友得たるこゝちこそすれ

鶴

鳴くたづの子を思ふにもおのが身のはぐゝまれにし世をやしのばむ

わかの浦や月の光もみつしほに汀のたづの聲も惜しまず

夜鶴鳴皐

子をおもふなみだやゆづる澤水の深き夜聲に袖のぬるゝは

たづもなくなる

住吉と汀のたづも鳴くなるを恨みてのみやよを過ごすべき

朝に庭鳥の聲を聞きて

里ごとに鳥ぞいまなくその鳥にならひて時を知る身ともがな

軒の松に烏の一聲鳴くほどもなく市人のさゞめきゆく音するを

わが松のこずゑのからす音になけば里の市人朝だちすなり

朝にからすの聲を遠く聞きて

もののねは遠きまされり烏すらはるかに聞けばをかしかりけり

からす

おもふことかくてや終にやまがらす我がかしらのみ白くなれれば

はこどり

○鳴くたづの子を思ふにも云々　夜の鶴と云ふ諺の如く、鶴は子を思ふ事切であるとの思想。

○住吉と　住みよいと地名とをかけた。

○終にやまがらす　終にやんでしまふと山烏とをかけた。

夜をこめて旅立ちぬれどはこどりを一聲きけば早明けにけり

　岩にうのゐるかた

うきしまのみなれそなれてよを過す身をあなうとも鳥はおもはじ

　山に慈悲心となく鳥あなるが木がくれて見えずなど人のいふを聞きて

み佛の心をこゑに鳴く鳥のすがたは人に見えずともよし

獸

むかしおもふ心の駒にあらそひてけふのひま行く影もとまらず

牛

を田かへす牛のからすきからき世に繋がるゝ身もうしのからすき

　猫のよる妻をこふをとほく聞きていとあはれにおぼえければ

唐猫の聲うらがなし敷島のやまとにはあらぬ妻やこふらむ

　猫の子をかなたこなたにつかはしてたゞひとつ殘りたるが友とふにやあらむいたく鳴きてねにけるを

かた〴〵に引きわかれつゝねこの子のむれて遊べる夢や見るらむ

　宮の御手して夢の字ありて蝶のかた呉春東洋がかけるに

うつゝなきよは夢ながらすぐしなで何かは蝶の人となりけむ

○はこどり　箱鳥、貌鳥とも云ひ、啼く美しい鳥、一説に呼子鳥と同じであらうと。
○明けにけり　はこの縁語。
○みなれそなれ　水に馴れ磯に馴れ。
○あなうとも　鳥の名の鵐とかけた。
○山に慈悲心となく鳥　佛法僧と云ふ鳥と同じと云ふ、啼く聲に依つて名づけられた。
○むかしおもふ云々　昔を偲び懐かしむ心を駒に譬へられて、今日の月日のたつも心にとまらない。あらそひ、とまらず、皆駒の緣語。隙行く白駒と云ふ諺にかけた。
○からすきからきに云々　からすは牛で田畑を鋤く器、辛きと言はむ序詞。憂しと牛とかけた。
○ねこの子　寝るにかけた。
○呉春　松村月溪、通稱嘉右衛門、字は伯望、呉春、允伯、存白と號す、與謝蕪村の門人、京都の畫家、文化八年七月十七日歿、年七十。
○東洋　東東洋、通稱儀藏、玉蟆、白鹿園と號す。狩野梅笑の弟子、後應擧、大雅の門。京都の畫家、天保十年歿。
○すぐしなで　過さないで。

○つゝみがみ　封筒。

○ふるのの澤云々　大和山邊郡布留野の澤。紳と紙とをかけた。つつみは堤と包みとをかけた。

○あらきのまゆみ云々　新木の眞弓。本末、よる、皆弓の縁語。

○何にひかれて　うし、めぐりと共に車の縁語。

ふじのこなたのうみより龍ののぼるかた

なみをたて雲をおこしてふじのねもおよばぬ空にのぼるたつかな

こゝかしこに文書きかよはすべきつゝみがみを手づからつくりて

ふみかよふふるのの澤の中つゝみかみしまもらば道はたえせじ

無絃琴のかたかけるに

ひかぬ音を聞き知る人もあるやとてわがまつことぞ久しかりける

ゆみ

ことのはのあらきのまゆみ本末もいつか心のよるにまかせむ

ものゝふの手ならす弓の本末のさもよりやすき老の年かな

寄車雑

おぼつかな何にひかれて小車のうしとおもふにめぐり來ぬらむ

太秦に住みける頃みじか夜の明けもはてぬに車のきしる音するは嵯峨よりみやこにかよふなるべしさもやすげなき世ぞかしとおもひめぐらせばたが上もおなじことなり

しかぞいまめぐりくるよのさが車うしとてもはた身をいかにせむ

寄舟雑

○かしまの帶　人の噂の喩しとかけた。鹿島帶は常陸帶と同じ、常陸鹿島神宮の祭禮に、男女各自分の戀人の名を記した帶を神前に供へ、祝人が結んで與れる事により緣結の卜ひをした。
○てうじゝる鶴　調理したる鶴の肉。
○飛び立ちぬべき　鶴の緣語。
○しがの大津の　近江滋賀郡大津、天智帝皇居の址。
○めにかゝる　目に觸れると、鳥網の目にかゝるとかけた。
○丹生　大和宇智郡、丹生神社がある。

くちねたゞあしまによせし捨舟の漕ぎ出でぬべき身にもあらずば

對鏡知身老

むかし見しかしらの雪は朝かゞみ向ふ日毎にふりまさりつゝ

寄帶雜

人言はかしまの帶のうらおもて見わかぬばかりむすぼほれつゝ

酒

世のうさも忘るゝ酒にゑひしれて身の愁へそふ人もありけり

政敎よりてうじたる鶴にそへて「老のなみよせてもわかのうらにへむよはひを君にゆづるなりけり」とあるかへしに

今よりの千代をゆづると聞くからに飛び立ちぬべき心ちこそすれ

古人のこと葉を題にてよめる中に

吹く風もまたでけぬべき露の身を千年のごとく思ひなれぬる

石ずゑもなくていく世になりぬらむしがの大津のみやのふる跡

めにかゝる人かげもなしあけくれにとりのあみはる窗のおきふし

斧とりて丹生(にふ)の檜山に入る人は心にかなふ宮木こるらし

いにしへの筆のはやしを見わたせば手にとるべくもなき我が身かな

とことはに風のまたつる露の身の何にかゝりてながらへぬらむ
杣人のひく杉村の綱絶えてもてなやみぬる身にこそありけれ
はて〳〵は手にだにとらぬ梓弓末中ためてなにならひけむ
ほねよりもかへりてほねを折るものはたゝむ扇のをりめなりけり
吹きおろすむこ山あらし音烈しにくさびかけよ沖津舟人
あけくれにこれるなげきをになへばや翁の腰のかゞみたるらむ
愚かにてかよわきものの老いたればとりどころなき我が身なりけり
底ひなき池の心はさわがねどきしの水なみたたぬ日もなし
ことの葉をつたへやしつる吹く風の片便りこそ覺束なけれ
何せむに人もすさめぬ言の葉をかひだゆきまでかき集めけむ
つく〴〵とひとりし物を思ふにはとはずがたりぞ常にせらるゝ
いたづらに老いはてむとは思ひきや心のしこそ頼みがたけれ
世をいとふ人あらせばやのがれては安くへぬるを老づとにして
嬉しきもうきも涌き出づる水のごと共に流れて止らざりけり
かはら田もつひにぬたにぞなりぬべきかくのみ常にいしを拾はば
かるもかきやく鹽がまの煙にもからき世わたるわざぞ知らるゝ

○ほねよりも　扇の骨にかけた。
○むこ山　攝津武庫山。
○にくさび　荷轄、浪よけのため舷又は艙を蔽ふ筵。
○片便り　音信に對し先方より返事のない事。
○かひだゆきまで　かひなだゆきの約。腕のだるきまで。
○心のしこそ　心の師、心を敎へ導くもの。新六帖卷四「愚かなる心の師とはなりぬとも、思ふおもひに身をば任せじ」
○老づと　老人の土產。
○かはら田もつひにぬたにぞ　河原を開拓して作つた田も遂には沼田になるであらう。

紅の塵の中にも住みつべし心の風のとはにはらはば

夢をのみ海驢(みち)の寢たがれ身のうきも波のまに〳〵世をつくさばや

名所岡

行きかへりあそべあそびの岡のべの松の千年のかぎりこそあれ

名所杜

秋はきり春は霞のうすものを立ちかへてきるころもでの杜

名所瀧

ぬしなしと誰かいひけむおりたちてきて見る人の布引のたき

名所河

これやこの空にありてふ同じ名にながれてたかき天の川波

名所浦

入日さすうらなつかしみ來て見れば波ぞ錦の名には立ちける

宗直朝臣の山莊のよもの山々をわかちてよませしにあたご山を

くらべてはひえのためうき高峯(たかね)とてあたご山とはいふにやあるらむ

牛尾山

よの中はうしのを山のしば車くだりやすかる身にこそありけれ

○海驢　あしかの異名をみちと云ふ。夫木集の「我が戀はみちの寢流れ醒めやらぬ夢なりながら絶えやはてなむ」に據つた。
○あそびの岡　大和高市郡[illegible]郷であらう。
○ぬしなしと云々　白氏文集の「勝地本來無定主、大都山屬愛山人」
○布引のたき　攝津神戸市に近き葺合に在る。生田川の上流。きて見るは著てにかけた。
○天の川波　河内北河内郡、交野附近の川名及び地名。
○錦　伊豆田方郡熱海の海岸を錦浦と云ふ。
○あたご山　山城愛宕郡。京都の西北。愛宕山、比叡山のために比較してはいやな高山と云ふので、仇の山と云ふのであらう。
○牛尾山　山城宇治郡山科村にある。憂しにかけた。

泉の杣に[illegible]民の息ふ時無く戀ひ渡るかな」[illegible]った。山城相樂郡泉。「いかれ」、今は出づにかけた。
○鹿背山　山城相樂郡、衣を貸せにかけた。
○靭岡　山城乙訓郡靭岡。靭は弓弦のはねるのをふせぐ武具、地名にかけた。
○八坂里　東山賓、八坂、祇園神社の所在地。
○口無山　備後沼隈郡日[illegible]の地名によつたのか。
○勾池　萬葉集卷二「島の宮勾の池の放ち鳥荒びな行きそ君まさず[illegible]」島の宮は大和高市郡の岡本宮[illegible]、勾池はその[illegible]にある池。
○いかるがの里　大和[illegible]、[illegible]は聖徳太子の[illegible]。
○置勿　[illegible]大和高市郡[illegible]。[illegible]の、歳月の過ぎるを[illegible]。[illegible]は此の[illegible]の地名であらう。

泉杣

かしこきも道あるみよにひかれつゝ今はいづみの杣とこそ聞け

鹿背山

今はとてうきよをよそにへだてなば我が身を隱す衣かせやま

靭岡

梓弓いての舍人がともをかの小笹のしのは矢にやはぐらむ

八坂里

都まで民の家ゐをたてそへて今はやさかの里もわかれず

口無山

おもふこといふかひあらむ身なりせば口なし山に遁れましやは

勾池

月影もすまでいくよぞ島のみやまがりの池は水だにもなし

いかるがの里

み佛の道をひろめしいかるがのさとみゝのみこやこゝにましけむ

置勿

けふの日もあだに暮すなあすかすぎおきなにいたる人の程なさ

〇大橋　片足羽川は河内中河内郡の川、今の大和川の別名かと云ふ、萬葉集巻九の「片足羽川のさ丹塗の大橋の上ゆ」に據つた。大橋は堅下村から船橋村に架したのであらうと云ふ。
〇橋本寺　山城綴喜郡橋本、淀川に山崎橋があり其の橋本の意。橋本寺は相應寺、山崎橋の西に在り。貞觀年中僧壹演の開基、土佐日記にも出て居る。
〇家田松　伊勢安濃郡安濃川の附近か。
〇二村山　尾張愛知郡、今沓掛村豊明村に分れた。絹二匹にかけた。
〇葦河　相模足柄郡葦河、今の箱根宿と云ふ。惡しきにかけた。刈りと假とかけ、沈む、濁る、流す、皆川の縁語。

大橋

水底にたつもやふすとさにぬりの大橋うつすかたあすは川

橋本寺

けふもまたいくその人かわたすらむ橋もとでらの鐘ひゞくなり

伊勢野

神風のいせ野の草のなびくにも見よかしみよの民のこゝろは

布引山

見るがうちに高ねしらみて別れゆく雲はさながら布引の山

家田松

とひなれし家田の松をめにかけて駒うちわたすあのの板ばし

二村山

花もみぢ誰うゑなべて春秋のにしきをたたぬ二むらの山

田籠浦

海かけてふじのねおろし吹きあれぬ沖にないでそたごの浦舟

葦河

かりの身はよし沈むともあしかはの濁れる名をば世には流さじ

秩父山

子を思ふ道にまどひて今ぞ知るちゝぶの山の深きめぐみは

いたじき山

世をいとふすみかは苫をしとねにて山の名に聞く板じきもなし

筑摩

世のうきに心つくまのみくり繩ながかれとしも身をば祈らず

白月山

かくるべきくまこそなけれあきらけき御代にあふみのしら月の山

松賀浦島

色かへぬ松がうら島いつ見ても田鶴ぞむれゐる松が浦島

蓮浦

人ごとにありとは聞けど花咲かぬむねの蓮のうらめしの身や

菅山

入りてしもうきよと聞けばすがの山すが〳〵しくもえこそ遁れね

境川

明くるよのさかひの川による浪の色わきそめてなびく浮霧

○秩父山　子に對して父とかけた、武藏秩父郡。

○いたじき山　羽前最上郡板敷山。苫のしとねと、板敷とを照應せしめた。

○筑摩　近江坂田郡。心をつくすとかけた。みくり繩は黒三稜と云ふ水草の水に漂うて繩の如く縺れたものを云ふ。長かれの序詞。

○菅山　因幡八頭郡菅山。

○境川　明ける夜の境とかけた。三河、尾張の國境を流るる川。

鼓山

萬代の聲ばかりこそひゞきけれつゞみの山は苔深くして

引島

今もかもあみのうけ繩ひくしまの海人のよび聲遠く聞ゆる

小池

水たまる小池の魚も大海の鯨のごとや身をおもふらむ

可也山

旅人の枕かる夜は心してふきだにたゆめかやの山風

竈山

さかえ行く民のかまどの山まつやたえぬ煙の色を見すらむ

入立山

はやくより言葉の道に入りたちの山のかひなく分けまよひぬる

うきみの浦

ながらへてうきみの浦のかひやなに波のしわのみ立ちかさねつゝ

人妻里

うしながら門ひきいるゝ小車にまつよ知らるゝ人づまの里

○鼓山　攝津有馬郡鼓瀧のある湯山を稱するのであらう。諫鼓苔深に思ひ寄せた。

○引島　長門豐浦郡引島、今彥島と云ふ、下關港の西に在る島。

○小池　水たまるは枕詞。小池は磐城相馬郡上眞野村。其の他越後にもある。

○可也山　筑前糸島郡の山、親山とも云ひ筑紫富士とも云ふ。萱にかけた。

○竈山　筑前筑紫郡御笠村の竈門山。俗に寶滿山と云ふ。

○入立山　未詳、かひなくは峽で山の緣語。

○うきみの浦　憂き身にかけた。

衣浦

ありときく衣のうらの玉やこの浪のしら玉手にもとられず

別

あす知らぬ身をながかれと祈るかな行末とほき人の別れに

悠々一別已三年

一度のわかれにかけて思ひきやとしのみとせを隔つべしとは

老の後ひとりずみにてあるをあはれがりてことゝひける人のとほくゆくに

身のうさを語りてだにも慰めし君にさへこそ又別れけれ

尾張の宗則がとひきてかへるを見おくりて

又こそとことにはいへど老いぬればこれやかぎりと思ふ別れ路

越後鴈島の惟清がきて四日五日ありてかへるにまたともえこじなどいふに

命あらば秋こむ鴈を聞くたびに鳴きて別れしけふやしのばむ

丹波の忠慶あづまにくだるとてあからさまにたちよりて「思ふことといはで別るゝ悲しさはあふうれしさにまさりこそすれ」と申したるにかへし

[illegible]尾張知多郡に跨る知多湾の一名。衣の浦と衣の裏とをかけた。衣の裏の珠は法華七喩の一で、或人が友人の家に行き、酒に酔うて臥してゐる間に友人は、所用あつて寶珠をその人の衣の裏に入れて外出した。その人はそれを知らずして歸り、諸國を流浪して貧苦に惱んだが後に友人からその事を聞いて貧窮を免れたといふのである。

○ことにはいへど　言葉では云ふが。

○秋こむ鴈を云々　鴈島の聯想。

○あからさまに　一寸。

年々にまさる言葉の色を見てわかるゝうさも今ぞなぐさむ

播磨の義觜が國にかへるに「またもこむ時をいつかとおもふよりあへず涙の袖にこぼるゝ」とよめるにかへし

たひらかにいませといはむ外ぞなき又あふべくも知らぬ別れは

備中の夏鼎が此の道のこと問ひきかむとて二月はじめより五月になるまで都にありしがえさらぬ事ありて國にかへりなむとするわかれに「こむ春はこむと思へど陰たのむ君があたりは猶ぞ立ちうき」といへるかへし

こむ春をまちつけて見む時にこそけふの別れの袖はかわかめ

政子も「こむ春を契るもとほきわかれぢにあやめもわかぬ袖の露けさ」とありしかば

こむ年をまちもつけずばあやめふく五月のいつか君に語らむ

柳齋が播磨にあるほど六月ばかりかの國へ歸る道のほどあつかりなむといへば「ことの葉のつゆのめぐみをおもふにはかへる旅路もすゞしかりなむ」とよめるかへし

ことの葉の照る日をさふるものならば君が旅路の陰となりなむ

尼智乘が故郷にかへるに

○あへず　堪へず。

○此の道のこと　和歌の道。

○えさらぬ事　うち捨てがたき事

○陰たのむ　君の眷顧をたのむ。

○立ちうき　たち去り難い。

○五月のいつか　五日と何時かとをかけた。

○さふるものならば　さへぎるものであるなら。

○是正　高垣是正、通稱圓、紀伊和歌山の歌人。
○蒲生君平　本姓福田氏、名は秀實、君平はその字、下野宇都宮の人、山陵志をつくり山陵の荒れたるを修復せむと圖つた。文化十七年七月五日歿、年四十六。
○山陵志　二卷、蒲生秀實著、歷代御陵の九十二所陵の考證をした漢文の書。
○きその山道　木曾と來るとかけた。
○やどにくしてあらむよりは　宿屋に屈託してゐるよりは。
○人やりのみちにて　他よりさせられる旅行で。

道すからまさしのけとそへてやる扇の風を我と知らなむ

紀の國の是正がくにへいくとて「立ちかへり又もきなかむほとゝぎす花たちばなはかれずもあらなむ」とありしかへし

ほとゝぎすよそにも聞かむ橘のかけはなるとも聲たえず鳴け

下野國の蒲生君平は古陵のわきがたくなりゆくを歎き山陵志つくらむとてみやこへ上りこゝかしこ行きめぐりたるがわが家にもしばしありてまた國にかへりなむとするわかれに

君がためきその山道雲わけて又いぬらむかきその山道

旅

やどもなき野原しのはらわけ暮れぬ又やこよひも草枕せむ

見るものきくものにつけて涙もろくてやどにくしてあらむよりはとおもひて旅ねしそめし夜

よのうさも紛れやすると山ぶしをならはす袖は猶ぞひがたき

みやづかへしけるとき人やりのみちにてあづまにおもむくべき名殘をしまむと賓興がいへにまねかれて行路霞といふことを

立ちわかれとほざかりなばかへりみる都の山も霞みはてまし

おなじとき資芳より旅の調度などおくりて「かりがねにおくれぬ旅もかへるさは秋よりさきのちぎりたがふな」かへし

雁のくる秋をもまたじかへるさの雲居はるけき旅にはありとも

佐渡の千鶴が都にありていたうわづらへるを

北の海の千さとの外に親をおきて病みふしぬるかあはれ旅人

かへしにかれ「故郷の親をおもひてやめる身をあはれぶ君もまたおやのごと」とぞよめる

をはりにくだりし時行くかたも見えず霧りわたりたる夕やどるべきさとは猶とほくたどりわびたるに月やゝさしあがれり

霧わけてわが乗る駒のたつがみに月こそやどれ露や置くらむ

羇旅

うらの波嶺のまつ風音かへていくよ旅ねの夢さますらむ

行旅

山べゆき野行きさと行きゆけど猶行末とほきみちのくの旅

夜旅

宿からむ庵かと問へば深き夜の塚やに残る火影なりけり

○資芳　前出、作高蹊。

○たつがみに　立髪、馬の鬣。

○塚や　塚屋、墓守の住む家

○かたしきの袖　獨寢の意。

○まゝの繼はし　眞間の繼橋。下總葛飾郡眞間、いつの間とかけた。

○にはしよければ　庭し宜ければ、庭は表面の平らかに靜かな海上。

○心ほそしや　一本橋の細いにかけた。

旅宿雨

わけなれし露はものかはかりねして雨聞くよはのかたしきの袖

旅宿夢

わけくれてつかれやすむる旅ねにも猶野山こそ夢に見えけれ

羇中橋

打わたし思へば遠き古鄕のたよりはいつのまゝの繼はし

わたりきてかへりみすればそことなく雲の夕ゐる嶺のかけはし

羇中磯

波風のあらき磯やのかりねには思ひもかけず古鄕のゆめ

海路

うみつ路のにはしよければ昨日まで波たかかりしうさも忘れつ

あともなき波の上ながら心あてにゆけば惑はぬ舟路なりけり

旅泊夢

波の音に打ちおどろけば見し夢も共に跡なきうきねなりけり

旅人渡橋

くれかゝる遠の野川の一つ橋心ほそしやわたるたび人

○青みな月　青めると六月とをかけた。

○西山にかたぶく日云々　死の近づく意味と西方浄土に赴く心持。

○かゝげそへずば　燈心を挑げ加へなくては。

遙見行客

のこる日のかげをたのみて旅人やなほ行き過ぐる遠のひとむら

暮望行客

たび人の行先おほく暮れぬとや道いそぐらむ野べの遠かた

夏眺望

山陰の青みな月の江の水に釣する小舟すゞしげに見ゆ

海眺望といふことを

追風にみぎはこぎいでしうら舟のはるけき沖の雲に入りぬる

老の後西山にかたぶく日を暮ごとに見て

山のはの入日のなごり見る度に遠からぬ身の夕をぞ思ふ

文見るにいと物うく覺えければ

更けぬとてかゝげそへずば殘るよの猶くらからむ窗のともし火

おやあるときおもくわづらひけるに

惜しからぬ命ながらもたらちねのある世はかくてあるよしもがな

おきふしもいといたうくるしく日々におとろへ行くをおぼえて

心のみなかしのまゝと思ひしがそも物ごとにうちわすれつゝ

いかなるをりにか思ふことありて

花をめで月にうかれていつの春いつの秋をか身にかぎらまし

無常

人のよの富は草葉におく露の風をまつまの光なりけり

さとりえて驚かぬにはあらぬ身の世の常なさにならひしもうき

さゞれ石の巖となるもとゞまらで移り行く世の姿ならずや

としの始めに齒のおちければ

木のめはる春しもおつるこのはにぞ定めなき世の風は知らるゝ

幻世去來夢

はかなさはいづれまさらむ宵のまに見えける夢とまぼろしの世と

夢

さめぬべきものと知りせば夢のまのうきには誰も惑はざらまし

うつゝには思ひたえぬる昔にもかへるは夢のたゞぢなりけり

曉眠易覺

曉の八聲の鳥のいく度か老のねぶりをおどろかすらむ

○身にかぎらまし　自分の身に、いつの春まで、いつの秋までとかぎりをつけよう。

○人のよの富は草葉におく露の云云　此の歌は、寛政四年に蘆庵が大病をした時、門人たりし豪商三井一家が、誰も見舞ひに來なかつた。病癒えて此の歌を添へ絶交狀を送り、先方で謝罪しに來たけれど許さなかつたと云ふ。

○木のめはる　春の枕詞。

○おつるこのはにぞ　此の齒と木の葉とをかけた。おつる、風、皆葉の縁語。

○夢のたゞぢなりけり　夢の通ふ直路であつたよ。

○八聲の鳥　曉に度々鳴く鷄の聲

懐舊

なかなかにしのぶ昔の夢ならばまれに見る夜もあらましものを

人なみに思ふさまなる世をやへしをこにもしのぶ身のむかしかな

住の江の松風のみやわがこふるむかしの聲を猶殘すらむ

かきつめし古ことの葉のなかりせば何をしをりに昔しのばむ

こしかたをしたひて

何を身のうきになしてはなげきけむ親のいませし古の世に

寛興が十七年忌に夏懐舊といふことを

うゑしその木立のゆかしみかけとへば答へがほにもかをる橘

獨懐舊

こひしさを語りてだにもなぐさめむ身のいにしへを知る友もがな

閑居懐舊

まぎるべき人めはかれていにしへをしのぶ草おふる宿の寂しさ

草庵懐舊

ふることを何としのぶの草の庵世をいとひこし住かならずや

僧正遍昭の九百年忌に古寺懐舊といふことを

○をこにもしのぶ　愚かにも忍ぶ

○かきつめし云々　かき集めし、書くにかけた。葉、枝折、皆緣語。

○人めはかれて　人目は離れて、枯れてにかけ、しのぶ草の緣語。

○僧正遍昭の九百年忌　寛政元年に當る。

ふりせぬは君がこと葉の花の山いませし寺はあらずなれども

こぞの暮女院かくれさせたまひければ例の初春のけしきもなからむ雲の上を思ひやり奉るに佛事などもさはる事ありておこなはれぬよしきけば

雲の上はいかゞさびしきくずもめさじさりとて法の聲も聞えじ

いつのとしにかやよひの末つかた風のよきたる一木もやと尋ねありき禪林寺にまうでぬれば座にうづもれし心もすむさまに覺えていとしづかなるにつら〳〵とおもへば

常もなき色香ややがて時わかぬみのりの花のしるべならまし

また

色に香にそめし心をいつしかもみ法の花のうへに移さむ

風あらましきゆふべ軒の花のふさながらちれりとて見するに

人の世の盛りも待たぬことわりもふさながらちる花にこそ知れ

重愛が身まかりしいたみにわか菜を

ことの葉の手向もけふの法のためつめるわかなの外ならめやは

法眼元迪身まかりて天龍寺に葬れる後いたみに霞を

この春は霞なたちそさがの山入りにし人のあとただに見む

○花の山いませし寺は云々　花山寺は山城山科に在る元慶寺、僧正遍昭座主たりし寺。古今集卷二に花山にて[illegible]折の歌が見えて居る。僧正遍昭は寛平二年寂、年七十六。
○女院かくれさせたまひければ　光格帝の女院であらう。
○くずもめさじ　國栖、大和吉野郡國栖の人が、諸節會の時御贄を獻上し歌笛を奏する。
○風のよきたる一木もやと　風がよけて吹かなかつた一本の木でも花の散りはしないかと、即ち花の散り殘つた一木でも、ありはしないかと。
○みのりの花　佛法の道。
○[illegible]
○風あらましき　風荒き。
○天龍寺　山城葛野郡嵯峨村の南、嵐山の麓大堰川に臨む、[illegible]夢窓國師の開基で臨濟宗。

房共がいたみに薄暮霞を

一村の霞となりしあだし野のけぶりの色もわかず暮れゆく

安藝の頼春水が父の惟清が十三年忌に歌すゝめける時江上霞を

立ちかへるものとはなしに霞む江のむかしに似たる春のさ浪

元廣がみまかれるいたみに獨見花といふことを

獨りわがなど過ぎがてにうち見ると主なき宿の花や思はむ

松齋が身まかりしを悼みて月を題にて

ともに見し人もやどりもなきあとにひとりぞすめる秋の夜の月

かでの小路の家にてともに月見はべりしそのやどもけぶりとなりてあとかたもなければよめるになむ

信言が身まかりて百日の手向に同じ題を

なき影の雲がくれにし月ならばまたましものをあすの夜とだに

一室身まかりし後手向せむと思ひながら病していたう月日も過ぎぬれど昔の友澄月蕭蹊をはじめて歌すゝめけるに秋思といふことを

月もいりぬともに見し夜をくり返ししのべば長き秋の思ひに

喜之が手向には雲をよめり

○あだし野　山城愛宕山麓の野、類ひないにかけた。
○頼春水　名は惟寛、字は千秋、通称彌太郎、春水、霞崖等と號す、藝州藩の儒者、文化十二年二月十九日歿、年七十一。
○立ちかへる　浪の縁語。

○松齋　片山圓然か。

なき人の雲にやなるとながむればそれもむなしき空に消えつゝ

○いきのを　息の緒、生命を云ふ、いで入るは呼吸するいきの意。

○人はいづらは　人はどこか。

○ちよませと云々　菊の異名を千代草と云ふに據つた。

方俊が身まかりし手向に風を

とりとめぬ風をいで入るいきのをの絶えずはありとも頼むべき身か

この人身まかりしのちに惜歸鴈といふことを「見るに猶名殘ぞをしき春の鴈遠よるまゝにかすみそふ空」とよめるを見いでてあはれに覺えければそのかたはらに書き付け侍りし

かへりくる秋しもあるを春の鴈なごりをしみし人はいづらは

あさがほの花のさかりに難波の昌熹とひきて此の花みにならむ時かならずたべといひしがいくほどなくて身まかりしに思ひいでて

朝顔ははかなけれども人の世のあすをも待たぬ身にはまされり

かたらひ侍りける女の身まかりて後其の家に住みかはりたる人のしたしく侍りければ月あかき夜友にさそはれて行きしに夜更くるまで人はみなおもふことなげにあそべどわれはたゞありしよのおもひいでられて

いく年をへにける宿にあらねどもあらぬよにこそ月もすみけれ

身まかれる姉の三回忌に殘菊匂といふことを

ちよませとよそへし秋の花の香は霜にふりせでのこるしら菊

ある人のおやの身まかりての後子うまごなんどうちつゞき家とみさかえて田畠などおほくもたりけるをわかちて僧坊につけ侍りていかならむ世にもこのたむけたえまじうなどあつらへてこの秋五十回の法事いとなみ侍りて秋懷舊といふことをよませ侍りけるに

遠き世を忍ぶあまりにわかちおく秋のたむけはたえじとぞ思ふ

秋のころ硏水がうまごをうしなひてなげきけるにまたうまごうまれけるに「よをうみのあまのうけ繩うき中にまたよろこびのくるもあやしき」とよみて見せける歌のかたはらにかきてつかはしたりし

人のよも何かはかはるおけば散りちればかつおく秋草の露

よべの夢に泉下の人をあまた見侍りておきいづるに軒の霜を見て

朝まだき日かけまつまの霜よりも我が身よにふる程ぞはかなき

鈴木龍は絲竹の交はりにて年ごろ親しく語らひける中なりけるを此の夏のころいさゝかこゝろえぬ事のあればいきていひたゞさばやと思ふ折からいと重くわづらふときけど常にかよわき人にもあらねば程なくおこたらむ折にこそと思ひてうち過ぎぬるほどにはかによわくなりて終に身まりぬよはひはことしいそぢとか聞きしよろづたど／＼しからず呂律のこ

○秋のたむけ　秋の田と手向とをかけた。
○よをうみの　世を憂と海とにかけた。
○あまのうけ繩云々　海人の浮木繩、浮木をつけた綱づな。うき中は浮きと憂への中でとかけた。くるは來ると綱づなを繰るとかけた。
○鈴木龍云々　蓬庵と云ひ箏の名手であつたから、絲竹の交はりと云ふのは其の方面であらう。
○いきていひたゞさばやと　訪問して詰問しようと。
○おこたらむ折　病氣がよくなる時。
○よろづたど／＼しからず　萬事に達者で。
○呂律のこと　音律の事。

（[illegible]これは出
來る人を[illegible]れ求めるは非常に困難
であらう。

○たいめせでは　對面しなくては
○心ひとつをしるべにて　唯思ひ
だけをたよりにして。

○雪のしづりの音　積雪のくづれ
落ちる音。

○ありしよの云々　消えて、ふり
にし、皆雪の緣語。

○たのめしを　あてにさせたのを

となどいとよう心えたる人にてかはかりなるもたづねむにはいとかたか
るべしをしみつゝせむすべなくて月日をふるにこよひ雪いとふかうふり
てさむければとくふしぬ曉がたの夢にこの人とひくと見て身まかりぬと
聞きしはそらごとなりけりおもくわづらふにいかでかいませしといへば
たいめせでは心のむすぼほれとくべきやうも侍らず心ひとつをしるべに
てといふいとくるしげなりかの心えずおもひしことといひとくとぞおもひ
し雪のしづりの音にめさめたるにともし火かすかに嵐はげしく吹きおつ
なみだ玉をみだすがごとし

思ひつゝぬるともなきをなき人のさだかに見えし夢ぞあやしき

ありしよのうらみも消えて白雪のふりにし人ぞさらに戀しき

さめて後ことかよはさむ道をだに問はましものを夢と知りせば

在りし世にあしたのゆきは消えやすし夜の雪にはとひて絲竹のあそびせ
むといひしを思ひいでて

雪の夜はかならずこむとたのめしを消えにし人や思ひ出でけむ

澄月法師の一周忌に

こぞまでもかたみにとひし古ことを雪の下にも思ひいづらめ

山かげに一木のこりてふるまつのふゞきにむせぶ聲ぞかなしき

初雪のあした喜之がありしよにとひしをおもひいでて

消えかへりおもひぞ出づるふるき世の面影うかぶけさの初雪

妻の身まかりしころ久しくおとづれぬに難波の昌熹より「かきたえてとりのあとだに見えざるはふみをしとしも思ふなるべし」

これは勅撰名所外集をこひけるにやらでありけるをいへるになむ

かへし

ふみをしと思ひもあへず消えにしをなげきしぞふるやどの白雪

やまとの宇陀の法正寺へまうでけるとき手向けたてまつる歌並序

おほぢの君の身まかりたまひし頃はかぞの君は二つばかりにやおはしけむ九つときこえし時より家名たえてかなたこなたの國にさすらへたまへるほどに年月をかさねてまうでたまへりしこともなかりけむかしましてその末の子にうまれ侍ればこの國とはききながらいかなる所何といふ御寺にやと年ごろなつかしみおもひ奉りしるしにや去年さだかにをしふる人のはべりていとうれしく思ひたまふるにこむ年はもゝとせにあたり

[illegible]

○消えかへり　死に入る心地して雪の緣語。
○とりのあとだに　鳥の跡、文字。手紙までも。
○ふみをしとしも　文惜しと踏み惜しとかけた。
○勅撰名所外集　伴宗韻編勅撰名所和歌抄出或は飛鳥井雅章の勅撰名所和歌要抄の類であらう。
○法正寺　大和宇陀郡宇陀にある寺。蘆庵の祖父の墓があると察せられる。
○おほぢ　祖父。
○かぞの君　父君。
○さだかにをしふる人　はつきり敎へてくれた人。

○かたのごともえせで　法式通りにする事も出來ないで。
○おろかなる言葉　おろそかなる言葉、足らぬ言葉。
○小澤の水　蘆庵自身の姓を澤に喩へた。
○あせて　淺くなつて。
○あはれとを見よ　哀れと見よ、をは間に入れる感歎詞。
○たいめ　對面の略音。
○いんさき　去んぬ前、昔。
○頼むかたも　心たのみにする端も。
○野べのおくりのまうけ　葬禮の用意。

はひもはたかたぶきてその期をまちつけ奉らむことのおぼつかなければこの春まうで侍るになむもとよりまづしければ佛事供養などやうの事もかたのごともえせでたゞしたひ奉るこゝろざしをおろかなる言葉につゞけてたむけ奉る年頃のおこたりをゆるしおはしましてわが露ばかりの心ざしをうけさせ給へかしとてなむ

もゝとせの苔の古墳(ふるつか)たづね來てむかへば袖に露ぞみだるゝ

いにしへの小澤の水のあせてかくかれ行く末をあはれとを見よ

我だにもなからむ後のふるつかを思へばけふにまして悲しき

岐阜の安乘院身まかりける年ごろ詠草のついでに文はかよひけれどいまだたいめもせざりしいんさき東にくだりし時道までいでられけれどそれもさはりてたいめせざりし事よなどおもひいでて

面影ものこらでいとゞはかなきはまた見ぬ人のわかれなりけり

としごろあひなれける人の身まかりけるに

空蟬のむなしきからを見る／＼も猶世にありと思ふはかなさ

この人まだいとわかければ病のおこたることもやと頼むかたもありしを今はいかゞはすべきかぎりあれば野べのおくりのまうけなどするに心ま

どひめもきり何の事もおぼえずなきがらながらある程は猶なきやうにも思はねば今はとていへど別れがたきをわが思ふほどは人はいかゞはあるべき夜もいたう更けぬといひそゝのかす僧どもの誦經する聲をきくもすべてあらぬ世に行きたらむこゝちして我にもあらずさはいへどはたとゞむべき道にもあらねばいまひとめ世のなごりにうち見るにかうやうの人はけはひかはりぬるものとか聞きしをありし俤たがはずひたひがみのうちかけられたるいつの世にかまた見むとなみだせきあへず

黒かみのみだれてかゝる面影をながきかたみと見るぞかなしき

賓興身まかりて程なく信里も身まかりける頃

かくしつゝあればあるには似たれどもたゞかげろふの人の世の中

ものへまかる道にえさらぬ所なりければむかしをり〳〵とひしわたりをとほりたるにあらぬさまにかはりはてたるを見て

昔見しいもが住かは田となりて野畑はいまのひとの家々

政教が女不染が初月忌に

ながらへて君をとはむと思ひきやけふをたのまぬ老の命の

むつまじきいもせの契り見るたびに嬉しかりしぞ今はかなしき

○めもきり　眼もぼんやりして。
○なきがらながらある程は　死骸と共にある間は。
○いひそゝのかす　言ひ促す。
○あらぬ世に　此の世ならぬ世界に、即ち死の國に。
○かうやうの人は　かやうな死に方をした人は。
○ながきかたみ　長い記念、黒髪の縁語。
○えさらぬ所なりければ　避けられない所であつたから。
○昔見しいもが住かは云々　昔逢つた戀人の住家は。
○初月忌　死せる月の翌月の忌日

荒き風ふせがむかげのかれぬとや消えも殘らぬなでしこの露

みちひろきちかひとぞ聞くみだ佛わがたのみおく人まどはすな

たのもしな濁りにそまぬ名もしるく花の臺(うてな)にすまむと思へば

ふして戀ひおきてしのべどなき人のためには何をなむあみだ佛

　しはぶきやみにて露ねられ侍らぬにあたりの人はよくねたるにふりにし人を思ひいでて

いもをまたうつゝに見めやぬば玉の夢ぢは許せよはのせき守

　身まかりし兄の三十三回忌にあたりけるに

みそぢあまり見しよは我もいはけなき別れにさへもかなしかりしを

　あしをおほくつみかさねたるを見ていといたうまづしかりしことを思ひいでて

たらちねのあらましかばと思ふには寶を見てもねぞなかれける

　あひなれける女に離れける頃雅胤のもとより「なれにしを思ひかへさばなきとこにさぞありしよの戀しかるらむ」とあれば申しつかはしし

なれ／＼し昔にかへす夢さめてむなしき牀にのこる面影

　松月が十七回忌といふに

○なでしこ　撫子を人の子に喩ふるは和歌の常套。

○濁りにそまぬ云々　女の名を不染と云ふからである。

○しはぶきやみ　咳の出る病、ぜんそくなどの類であらう。

○見しよは　見と三十三の三とかけた。

○あし　錢。

ありしよの人はとし〴〵稀になりて獨りぞしのぶいにしへの友

重愛が身まかりぬと聞きて

色そふも今はたのまじ秋の葉の千入(ちしほ)になればあへず散りけり

入江昌熹が身まかりぬと聞きて

諸共にやめりし老は先立ちぬさてやいつまで我は殘らむ

明けくれあはた山を見るにむかしこのわたりにつどひてあそびし人の殘るもなかりければかの衆鳥高飛盡といふ詩の句を思ひいでて

かはらぬもあはれとぞ思ふあはた山人はかひなく消え失せし世に

わが後の事あつらへけるにたくみの身まかりしに

わが思ふこゝろだくみはかひもなし世にすみ繩の限りある身は

はやくよりかよわき身のをり〳〵は病にさへおかされながら猶ありふるもあやしされば思ひよる事千々のひとつもなさぬに月日のみいとゞく過ぐれば

まてといふに隙行く駒は止まらずいざさばつひの旅よそひせむ

いつのとしか寡之が二度いとあつしくわづらひたるおこたりざまに「おもひやれとしにふたゝびしでの山見てかへりにし心ぼそさを」ときこえ

○千入　紅の染料に千度も入れて濃く染める意。
○あへず　たまらず、耐へず。
○衆鳥高飛盡　唐詩選の李白獨坐敬亭山詩に「衆鳥高飛盡。孤雲獨去閑。」
○あはた山　粟田山、哀れの音の繰返し、同時に泡とかけて次の消え失せしにかゝる。
○こゝろだくみ　心の計畫と匠とをかけた。
○すみ繩　住みと墨とをかけ、墨繩の繩の長さに限りあるのを、身にかけた。墨繩は大工の直線をひく器具。
○ありふる　生きて年古る。
○千々のひとつ　何萬分の一。
○隙行く駒　光陰の早く經過する形容。漢書張良傳に「如白駒之過隙」
○いざさば　いざさらば。
○つひの旅よそひ　死の用意。
○あつしくわづらひ　篤き病氣。
○おこたりざま　全快の際に。

しさこそあらむずらめいとようおこたりけりこの歌も心よりいでたるなればあざやかにきこえたるもうれしくてかへしに

死での山二度見てもかへりこし君はやちよのさかもこえなむ

述懐

色もなきことのは草におろかなる心のねこそかくれざりけれ

背くともいまいく程と世のうさにたへて數多の年もへにけり

曉述

身のうさにいとふ心ぞあはれなる又めぐりこむこの世ならぬを

夜述懐

ねざめしてむかへばうすき燈にのこりすくなきわがよをぞ思ふ

あつめねばほたるばかりの光なきわがよの更けぞさらにくやしき

夏述懐

はらはずばこゝろの道もなつ草のしげるさまにや埋みはてまし

山家述懐

山にても心のすみか變らねば世を遁れこしかひもなきかな

寄日述懐

○色もなき云々　言の葉草と自己の歌を喩へ、色もなき、心の根と縁語を用ゐた。○背くとも云々　いかに世にそむいて暮すとも、いくらも餘命はないと思って。

○のこりすくなき　燈の油の殘りすくないと、命の殘りすくないとをかけた。

○ほたるばかりの光なき　螢火に前途の光明なきを喩へた。

○なつ草　夏と繁しとをかけた。

○かひもなきかな　峽と云ふ山の縁語。

○心の風　心中に絶えぬ情緒を風に喩へた。
○住吉法樂千首　住吉神社の法樂歌の千首。法樂歌會は神佛に手向け樂しましめるための歌會。
○老をいとへはや　老人を嫌へばか。
○人の見ぬまをたゞねずば　人の見ない折をよく心がければ。見ぬまと沼とをかけた。
○淵にのみしづめる云々　古今集卷十八「世の中はなにか常なる飛鳥川昨日の淵ぞ今日は瀬になる」に據つた。

いたづらに送りむかへて天つ日のかげはづかしく身こそふりぬれ

風によす

吹きたゆむ心の風やおのづから言の葉草の色に見ゆらむ

住吉法樂千首に露によす

いかでかは色のちくさにわかるべき花にもさかぬことのはの露

郭公によす

時鳥なれだに老をいとへばやかたらふ聲のたえて聞えぬ

道によす

すぐならぬわが心とややまどふらむをしへたゞしき言の葉の道

橋によす

思ふこと末もとほらじ橋の名のとだえしまゝにかけもつがずば

沼によす

草がくれ人の見ぬまをたゞねずば濁る心の底も知られじ

河によす

淵にのみしづめる身にはあすか川瀨にかはるよも知らずぞありける

水に

流れいづる水のみな上尋ねてぞにごらぬもとの心をも知る

竹に

心だにむなしかりせば呉竹のよのうきふしはよししげくとも

玉に

みがきなばたれか光の見えざらむ心のたまは石ならめやは

笛に

うきふしのしげきこのよは笛竹のいきつくほども忘れやはする

弓に

ますらをがたならす弓のおきふしも苦しきまでに身こそ老いぬれ

絲に

ありへてぞ世のうきふしはしけいとの長かれと身をなど思ひけむ

ふしいとのかなたこなたにまどはれて思ひとかれぬ世の中のうさ

寄情述懐

身のほどを思ひもわかで何とわが心にたえぬねがひなるらむ

思ふことといふをかしらにおきてよめる中に

思ふことなりもやすると山しろのこまの瓜生の露にぬれつゝ

○よのうきふし　よは竹の節と節との間を云ふ。むなし、よ、ふし、皆竹の縁語。

○石ならめやは　石ではない、玉である。

○いきつくほども　呼吸する間も

○たならす　手馴らす。

○おきふし　弓の屈伸と起臥とをかけた。

○しけいと　絓絲、繭の表皮からとつた粗惡な絹絲。

○ふしいとの　節のある絲の如く。とかれぬは解くの縁語。

○こまの瓜生　山城相樂郡狛の瓜畑。

流池館にすみ侍りける頃資芳がかしらおろして蒿蹊といひて尋ねけるに
おどろきて
おもはずもかはる姿を見つるかなそむかば我ぞそむくべき世に
入道かへし「なかなかにかはる姿ぞはづかしきそむきても猶そむかれぬ世に」
あきの國頼惟清が都にきたりとてみちの事など何くれととひて「ことの葉のしをりとかねてたのまずばまどはぬ道にけふあはめやも」とよめるかへし
心もて君がまどはぬことの葉の道のしをりは誰ならめやも
難波のかげのりが住吉奉納のとて歌こへるにいなびがたくて二十首ばかりつかはしたりしに外の人のとともにあづさにゑりて藏山集といふ名をつけ市にひさぐと聞きつればもとめて見るにいづれも作者のあつらへたるよしを序にかけりいとおもひの外なればにくくてこと葉のたがひたることいひやるふみのおくに
ことの葉はやがて心の道なるをなどかくばかりふみはたがへし
かへし景のり「やはらぐるこゝろの道のかぜなるをなどかはげしく吹き

○資芳　伴蒿蹊。
○頼惟清　安藝竹原の人、享翁と號す、頼春水、杏坪、春風等の父
○しをり　案内者。
○かげのり　加藤景範か、通稱小川喜太郎、竹里と號す、有賀長伯の門。
○あづさにゑりて　木版に彫つて
○ふみはたがへし　踏み違へしと文とをかけた。

はたがへし」歌をやはらぐ道とおぼえたるもいと思はずなれば又かへし

はげしきも同じ心の道なるをやはらぐのみと何思ひけむ

かなのさうしに歌かきてと人のいへりしにいとつたなければいなみけれどしひていへりければ日頃へてかきてつかはしけるに

それとなき跡をやさしみ濱ちどりおり立ちかねて日頃へにけり

難波の昌意より「笛竹のおとせぬうさは忘られてそのおきふしをいかゞとぞ思ふ」といひおこせたりければ世にふればわづらはしき事などさし續きて思ひの外にとだえけるなどかきて

君にさへきこえぬまでに笛竹のあなうく／＼とよをすごしつる

おなじ人の何くれの事などとひて朝聞道夕死ともの心ばへを「おもへきみ暮まちつけぬ朝がほも露の光をまたずやはある」と申しこし侍りしに

そはおなじ心にこそあめれ我にもをしへよなどいひて

朝がほも露も夕はまたねども咲けばかたみに光をぞそふ

信郷より「心ありてとはぬとを知れ塵の世に名をうづまさの君がかくれが」と聞えしかへし

とはばとへ世にありわびてすめる山名のあらばこそうづまさの里

〇おり立ちかねて　千鳥の緣語。

〇あなう／＼と　あなは感歎詞と笛の穴とにかけた。

〇朝聞道夕死　論語の語、「朝聞道夕死可矣」

〇ありわびて　住みなやみて。

〇うづまさの里　太秦と埋もれるとかけた。

道覺より「うらやまし人め稀なるやどなれば世のうき事やきこえざるらむ」とありしかへし

人目こそまれにはありけれこゝも猶なれ行くまゝにうづまさの里

秋成栗田のふもとに住み初めける時「山に入る人のためしはならはねどうき世の道にまどひてぞこし」といへるに

我も世にまどひて入りし山住よいざ身のうさをともに語らむ

この翁をとふに雨ふりいでければ

ことさらにとへる道より雨ふればかさやどりとや人の思はむ

ある人の「ながらへて猶も敎へよ敷島のまゝのふる道君こそは知れ」といひこしたるかへし

年をへてわくとはすれど草しげみ今だにたどる野中古道

越中の白軒が「雲かける鳥のごとなるはねもがな君があたりへやすくかよはむ」といひおこせたるに

雲にとぶ翅なくとも仙人のよはひもたらばともに逢ひてむ

世龍をとひし後にかれより「さゝがにのくもれる空もいとはずていとめづらしき君が來ませる」といへるかへし

○かさやどり　雨やどりと同じ。わざ／＼訪れたのであるが、途中から雨が降つて來たので、雨宿りに訪れたのだと人は思はう。

○仙人のよはひ　仙人の如き不死の齡。

○さゝがにの　くもの枕詞。次のさゝがにのは、絲の枕詞。

○疎くへし　無音にうち過ぎし。

○おほけなきものから　僭越ながら。

○陸奥介景柄　香川景柄、後剃髮して黄中と云ふ、景平の子、景新の養子、徳大寺家に仕へ、後二條派地下宗匠となつた、文政四年十一月九日歿、年七十七。
○やむともよそに聞かるべき身の　病氣になつてもよそ事に聞いて、誰も見舞つてくれない私の。
○身の後は　私の死後は。
○しみ　紙魚、紙を喰ふ蟲。
○くたしはてつる　くさらせてしまつた。

さゝがにのいと疎くへしおこたりをいひとかむとて訪ひしなりけり

人のいくつばかりになりぬるととひごとしたるに

花咲かで七十あまりいつとせになりぬといふもはづかしの身や

勝義があづまにくだるに橘の千蔭がりいひやる

立ちよらば立ちもよらせよ橘のかげふむ人は道まどひせじ

かへしに陰ふむみちはおほけなきものから立ちよらばなどうけたまはるこそうれしう覚え侍れとかきて「たぐひなきこと葉の花の香をしめて立ちよる人の袖もなつかし」

陸奥介景柄より「さむき日にやめるときくぞやすからぬさらでもいたく老いにける身の」といひおこせしかへし

殊更にとはれけるこそ嬉しけれやむともよそに聞かるべき身の

文詞

身の後はしみとやならむ昔文見るとはなしにくたしはてつる

たとへこしあやも錦もぬひものゝ詞の玉の疵やのこれる

ことのは

はしたなくいひちらしそことの葉に心の色の見えもこそすれ

○ほなか　火中。
○ゆかぬ心　不滿な心。
○たは業　愚かな仕事。

心

かゞみにぞ心は似たるしかはあれど鏡は影をとゞめやはする

所爲を見て心を知る

なすわざにおのが心はかくれぬを人は知らじと思ひけるかな

ちかく火のもゆるを見て

もゆる火のほなかに立ちてやくるとも露たじろかぬ心ともがな

雜寫人心

うづもるゝわが水莖の手すさびにゆかぬ心のあとや見ゆらむ

何わざも同じことなれど筆のあとのわきてつたなきが年頃いとはづかし。けれどひとの子へはわれをあざむきて書きてもとらすものから心には汗いづばかりくるし今だにならははやの心つくにいはけなきをりたは業にのみこゝろいれて親のいさめきかざりける身のはてこそとかなしくなりて

とる筆になみだぞかゝるたらちねの親のいさめを思ひかへせば

見る／＼も波にけつべきながき跡を猶殘しける濱ちどりかな

殘生隨白鷗

長作獨遊人

とこしへに空ゆく雲も風ぞそふ獨りうかるゝ我やなになり

道成無事中

すなほなる心の道はみな人のかざらぬ常のことの葉に見ゆ

君子行

あつき日も陰にはよらじ白浪のけがしき名をもおふのうらなし

白

ぬば玉のやみもけたれし雪の色をかさねてみがく有明の月

黒

からす羽も墨もいとはぬ色なれどかへまほしきは人の腹ぐろ

くれなゐ

いつくさに見ゆる中にもとりわきてまづぞめにつく紅の色

むらさき

紅もなつかしけれどとりわきて心にそむは紫の色

多

○けがしき名　穢らはしき名。

○おふのうらなし　志摩学生の浦梨にかけた。

○いつくさ　五種、こゝでは五色。

○心にそむは　心に染む、心に印象深き、紫の縁語。

○むくいむものか云々　親の惠みには報いおほせない。

○ことわざしげき　仕事の多い。

あつめおく跡にぞおもふ行末のよゝにもそはむ大和ことのは

義篤俄にあづまにくだるべきにことそへよとまうしおこせたりしに

いでて君かへりて親につかふるも直き心の道はひとすぢ

何がしの孝子のまづしくて親につかふる事の心にもまかせぬよしなげきたるをなぐさめていひつかはしける

家富みてあかぬことなくつかふともむくいむものか親のめぐみは

人の子をいさめて

生ふるより千世ふる松も天地の惠みをもれて榮えやはする

矢部正子が宮づかへすとてあづまにくだりざまに來て朝夕の心おきてになるべき歌をとこひけるとき葉に書きて遣はし侍りし

道もと二なし常の心たひらかなれば詞おのづからやすらかなりおもふべしつゝしむべし

すなほなるものと心をしをりにてこと葉の道のおくは尋ねよ

ことのはの道はことわざしげき世にすみて心に思ふことをいひいづるならひながら塵をはなれたるものぞかしと思ふ事のありて

○よるかたもなきわかの浦波　和歌を詠はん方もないの意を、和歌の浦の波に喩へた。
○おほやしま　多いと大八洲とをかけた。
○この道も　和歌の道も。
○おほぢ　和歌の大道。
○こちたみ　言痛み、煩はしく。

ごの道たえてよるかたもなきわかの浦波」といへるに此の國の人語みな

歌なれば道たゆることあるべからずなどおもひてかへし

この國はことばの海のおほやしまいづくによるもわかのうら波

この道もすゑの世のすがたに心よする人のみおほければそれをなげきて

よめる

やすからむおほぢはゆかで岩ねふみさがしき山にまどふ世の人

岩ねふみからたち分けて行く人は安きおほぢを過ぎがてにする

いかばかりいひちらすともことの葉の花を思はばみはなかるべし

ことの葉のしげみこちたみ分けかねてまどはばかへれもときつる道

いにしへにかへらむことはみな人のもとの心の道のひとすぢ

すなほなる心詞ぞ行末にのこらむ道のすがたなりける

ことの葉は人の心の聲なればおもひをのぶるほかなかりけり

鳥のなくを

鳥すらも思ふおもひのあればこそかたみにねをば鳴きかはしけれ

風ふきて草木のさわぐに

○かの苗をぬきあぐるにて　苗を間引くと同樣に。

○みづからぞわく　自分自身で判別するやうになる。みづ、わく、皆よし、蘆の緣語。

○あぜくら　田の畦くろ、種の緣語。かへしも鋤き返す意で緣語。

○言えり　語の選擇。

○おほねはじかみにらなすび　大根、生薑、韮、茄子。

○ひるほし瓜　蒜、乾瓜。皆日常平凡な植物をさす。

思ふことといはでやまめや心なき草木も風に聲たてつなり

ある人のもとあしくよめる詞をよきさまになほされればかの苗をぬきあぐるにてわかものならずいかにしてよみならひてむといふに

ひたすらにいひもてゆけば言の葉のよしとあしとはみづからぞわく

歌は見聞覺知よりいづるものなるをひたすらに外をもとむる人のおほければ

何をかはあぜくらかへしもとむらむ見聞きにみてる言の葉のたね

ことわりたゞしければ深遠の意もかくれず

山川の淵のさゞれもかぞふべく見ゆるは水の澄めばなりけり

正しからざれば淺近の意もあらはれず

深きにはあらぬ山川も行く水の濁れば底の見えずこそなれ

今のよの歌は言えりのみして常に見きくものもおほくはよまずなりにたり

いにしへはおほねはじかみにらなすびひるほし瓜も歌にこそよめ

ことばの道のあらずなるをなげくころ

濟の組纂したもの、三十六卷。
○ひとふし云々　一節面白味ある歌や一癖ある歌を作らうと思ふのだ。
○岡崎のまつり　祇園天王社即ち八坂神社の祭禮をさすのであらう神幸は四條に渡御になる。
○ふるの中道　和歌の本道。
○すさのをの神のみよより　出雲八重垣の歌をさす。此の歌が和歌の祖と考へられたからだ。
○ことぐさ　言葉を草に喩へた、茲では歌道をさす、しげるは草の緣語。
○八雲の道　和歌の道をさす。
○南のうみよりも　熊野灘をさす

消えゆくこやの池水」とよまれたるを載すこれは地理を知らでよまれたり伊駒は河内大和のさかひにて攝津國のひがしこやは武庫郡にて遙かに西なりいこまに月の入るを見むは大和よりのことなりすべて歌のことは花にのみながれて無實浮華になれるよりこのごとき歌とがむる人さへなくなれるをなげくとてひとりごてるなり

ひとふしと思ふややがてすなほなる心のゆがむはじめならまし

岡崎のまつりに神幸ををがみ奉りて

すさのをの神のみゆきにひらきませ人はまどへるふるの中道

神祇

すさのをの神のみよよりあらがねの土につたへてしげることぐさ

須盞烏

わけまどふ八雲の道のしるべせよいのるも久しすさのをの神

熊野

みくま野の濱の南のうみよりも深きや神の惠みならまし

社頭榊

廣前にねこじて植うるまさかきのさかえむよゝは神のまに〳〵

大國主の神のかたに

かしこしな武くまめなる御槌もて打ちかためます大國の主

釋教

生ひ初めしむねの蓮のひらけずばもとのうきにやまたまどはまし

みよのほとけに

何をかはみよの佛に手向けましもとの心の花にさかずば

むかしはゝに念佛をすゝめ侍りしにつゆおこたらずとなへたまふを聞きて

たらちねのなむあみたぶといふ聲はうれしきものの悲しかりけり

曉觀念

眺むれば心のあともなかりけり曉月の影しらむそら

寄風空諦

雲をおこし浪を立てては見すれどももとより風の姿やはある

十牛の歌をよめる中に入鄽垂手の心を

○ねこじて　根から掘り取つて。
○さかえむ　さかきの音の繰返し
○御槌もて　大黒天のもてる打出の槌。大國主神と大黒天の混同。
○寄風空諦　風に寄せて空諦の理を說く意。空諦は天台所立三諦の一、一切世間の法は空にして其の中に理の眞なるもの存する意。
○十牛　十牛圖序の事、佛法の心事、修理を牧牛の十圖に依つて喩へたのである。
○入鄽垂手　十牛圖序の十を云ふ、方便究竟の所。眞に悟脫した者は

こゝろを

はて知らぬ野山の秋のやちくさもおのが色なき露ぞそめける

天界

今だにも心を法にそめかへよ天の羽衣色あせぬなり

修羅

人ごとにあらそふ心かへり見よ此の世もすらのちまたやはなき

太秦にて雨いたくふる夜かのもとのすみかのけぶりとなりし頃しも雨さへふりてこゝかしこにたゝずみあかしける事など思ひつゞけて

立ちぬれず袖もしぼらで此の寺にふるはみのりの雨にやはあらぬ

此のほぞんを埋木の地藏となむいへる庭にたかき菩提樹ありその中よりあらはれ給ふとぞいふその木に花さけりおほくの山蜂むらがりきてひねもす花にむつるゝ聲經よむに似たり

ほだい樹の花になきよる山蜂はいまも般若を讀むかとぞ聞く

本尊に奉るとて

花さかぬ身ぞたぐひなき埋木のみかげもよにはいでけるものを

○色不異空空不異色　色は有形の萬物、しかし皆因緣あつて生じた物で本來實有のものでない、卽ち空である。般若心經に「色不レ異レ空、空不レ異レ色、色卽是空、空卽是色。」

○すらのちまた　修羅の巷、阿修羅王の帝釋天と戰つた事から、爭鬪の場所の意に用ゐる。

○ほぞん　本尊。

○みかげ　像、こゝでは地藏の佛像をさす。

七月二十四日地藏尊の前にありて思ひしこと

うつせみの世のことのはに惑はずば六つのちまたも一すぢの道

一筋のみちしるべせよことの葉は此の世ながらの六つの巷を

ねぎごとをあだにくたすな埋木の身の名におふを契りにはして

藥師佛にぬかづきて

ことの葉に思ひわづらふ病をもおこたらしませ南無藥師佛

維摩居士の像に

水の月鏡のかげぞありてなき心を見する姿なりける

鏡にをとこ女のあまたあそべるがうつれるを閻王の見たまひたるかけるに

後の世とかけてないひそみな人の心はやがてはりのかゞみを

古寺水

山寺のかけひの水やおのづからたえぬみ法の聲をそふらむ

古寺鐘

けふの日もはかなく暮れて山寺の法のむしろにかねひゞくなり

○六つのちまた　六道。畜生、餓鬼、地獄、修羅、人間、天上の六道。人間は成佛しない限り此の六道を流轉輪廻するのである。
○ねぎごとをあだにくたすな　誓願を空しく朽ちさせて下さるな。
○藥師佛　藥師瑠璃光如來、須彌山の東方淨瑠璃國の教主。衆生の病氣を救ふ佛。
○維摩居士　維摩羅詰居士、印度毘耶離城に住む、釋迦の教化を輔けた人。
○水の月云々　水月鏡花の意。
○鏡に云々　地獄閻魔王の前にある淨玻璃鏡には、亡者前世の惡業が皆映ると信ぜられて居る。

遠［illegible］云ふ支那思想に現はれた仙境は、巨鼇十五頭の上に載せられて渤海に峙つと信ぜられる。（列子）それ故之を鼇山、又鼇の上なる山と云ふ、日本が蓬萊島と信ぜられて居るから、かく云つた。
○千代のゆくへ　千年の將來。はるけきは遙けきと春とをかけた。
○二名のしま　花と鳥との二つの名にかけた。
○かぞいろの云々　兩親。つむは年を積むと若菜を摘むとにかけた
○禪尼物外　蓮庵門の歌人。
○のべにつむ　野邊と齢をのべるとかけた。

讃岐の由佐竹翁が百とせの賀に初春見鶴といふことをよめる

春のくる朝の空を飛ぶつるのはるけき千代のゆくへをぞ見る

近江の熊充が母の七十の賀に山居子日といふことを

しづかなる山のすみかの子の日にはちとせをまつの外なかりけり

伊豫のもり貫が母の賀に早春霞といふことを

今そはむ色ねをこめて花鳥の二名のしまぞ霞みそめぬる

屏風に春の野にをとめの若菜つみにゆくところを應擧がかけるに

かぞいろのつむべきちよにくらぶれば野べの若菜はすくなかりけり

禪尼物外なゝそぢの賀に若菜を

うちむれて君が齢をのべにつむわかなも法のためならぬかは

敬儀が母の六十賀に歌すゝめける時初春鶯を

君が經むちとせはけふをはつ春となくは聞きつや園の鶯

淸生が母の賀に花を

春をへて見れどもあかぬ櫻花いかなる色の年にそふらむ

ある人の六十賀におなじ題

○なるとの沖　成ると、鳴門とをかけた。
○春日法樂　春日神社へさゝぐる歌。
○八束穗の　瑞穗の枕詞。
○とこよ　常世、永久に生存し得る仙境。
○やまとみこと　和歌をさ

あかず思ふ心を老のよはひにて盡きせぬ春の花を見よ君

馬杉亭安翁の八十賀に、寄花祝老

萬歳も老かくるべきかげなれやふりせぬ春の花のかざしは

定靜が六十賀に

思ふことなるとの沖の春のなみかぎりなきよをゆたにかぞへよ

みやづかへしける頃殿にて春祝といふことを春日法樂に

三笠山ふた葉の松もひとしほの緑にこもる萬歳の春

祝のこゝろを

八束穗のみづほの國の名もしるくいつも年ある秋をさめかな

おろかにも千よ萬よと祈るかなこゝはとこよのやまとしまねを

ことの葉のしげるにつけて知られけりとよあしはらの國のさかえは

寄日祝

西に入りひがしに出でて天津日のいくやちめぐり世を照らすらむ

寄道祝といふことを

すなほなるやまとみことはやがてこの神のみくにの道とこそなれ

年にそふこがね白かね玉がきのうちつみくにぞ富みさかえける

寄松祝

年なみの千重(ちへ)にこすとも梓弓いそべの松の色はかはらじ

落葉契千秋

もみぢ葉の散らずば何に契りおく千年の秋の數をかぞへむ

備中の岡武敏が父の八十賀に

よにこえてたかくさかゆる岡の松こやいくちよのねざしなるらむ

佐竹紀伊守が父の七十賀竹契遐年といふことを

友なれてさかゆる家の名もしるく千尋(ちひろ)にちよの影をならべよ

鶴有遐齡

この宿のみぎりの松にすむ鶴のかひこのちよを思ひこそやれ

寄鶴祝

曇りなきみよの千年の行末をあまとぶ鶴の聲にこそ知れ

伊勢の宣長が七十を祝ひて

七十は人かずならぬ我もへぬ君はちとせのよはひかさねよ

○うちつみくに　内つ皇國、瑞垣の内とかけた、國内。
○梓弓　磯邊のいの枕詞。
○こやいくちよの　これや幾千代の。
○竹契遐年　竹が遙かな永い年をちぎる。
○家の名もしるく　家の名も著しく、卽ち佐竹の竹に寄せたのである。
○みぎりの松　砌の松。
○かひこのちよ　卵子の千代。まだ雛にならぬ鶴の卵の將來の千代を思ひやるのである。
○伊勢の宣長　本居宣長の七十歳は寛政十一年。蘆庵は時に七十七歳である。

かれよりかへし「なゝそぢはかずにもあらず過しこし君にひかれてわれも千代へむ」

○君にひかれて　小松ひきの縁語。あなたの長壽につれられて。

六帖詠草　雑下

○うつせみの　空蟬の、世の枕詞。
○さしはなたれて　人に見はなされて。
○たつきなぎさの　生業もないに渚をかけた。
○こせりくひ　小芹喰ひ。生活に悩む意。更科日記の「幾らたびか水の田芹をつみしかど思ひしことの露もかなはぬ」枕草子の「わが身に芹つみしなどおぼゆる事こそなけれ」言ふ思ひ寄せたのであらう。
○みなれ　水馴れと見馴れをかけた。
○ともめも　友も妻も。
○やつといひてこゝのつ　八九七十二歳。
○聞きふりし酒をだにのむ　白樂天の對酒詩などを思ひ寄せたのだ
○おほゝしき　憂鬱な。

長歌

入江まさよしがおくれるながうたにこたふ

うつせみの　よのひとごとに　おのがじゝ　たてたることの　ありなめど
みなおほかたに　しをへつゝ　後はのがれて　きみがごと　花をともにて
日をくらし　月のまへにて　夜をあかし　たのしむ見れど　われはその　ひ
となみ〳〵の　ざえなしと　さしはなたれて　世を渡る　たつきなぎさの
こせりくひ　あるはいそべに　菜摘みつゝ　けふをすごせる　水とりの　み
なれそなれし　とももめも　みなさき立ちて　たゞひとり　あはれ〳〵と
うそぶきて　經にけるとしは　やつといひて　九のつをこそ　かさねつれ
かくはわぶれど　よの中の　たのしきことと　聞きふりし　酒をだに飲む
身なりせば　ゑひの程だに　おほゝしき　こゝろをしやる　をりもあらまし
を

○身にそへる 身について居る。

○わらはさとし 兒童教訓。
○うひのをしへ 幼兒の教へ。初學。
○ふりわけ髪の云々 頭で髪を二つにわけるふりわけ髪の如く、條理のはつきりわかつて居る。
○みじかき心 短きは髪の縁語。淺薄に自分の意を云ふ謙辭。
○物名 萬葉集に見え初めた、和歌に行はるゝ文字の遊戲、物の名を句の中に詠み込むのである。
○れむぎやう 佛法の修行ではなく、春咲く花の連翹であらう、しかし假名遣ひはれんげうである。
○きやうごくとて 氣や動くとて、氣象が動くかと思つて。
○葉月 八月の異名。
○畑つもの 畑の物、野菜物。次の歌に瓶子の二字が詠み込まれて居る。

旋頭歌

天雲の　よそになるやと　のがれ入れども　身にそへる　うさには山も　かひなかりけり

道遠し　よし野の櫻　まだ咲かぬまに　とくゆきて　ことしは花の　ちるまでも見む

わらはさとしの書をつくりてふりわけ髪と名づくこれを見て布淑「ますかゞみ見るよしなくばおもひとかめやかきなせるふりわけがみのうひのをしへも」といへるかへし

うなゐごが　ふりわけ髪の　すぢあらはなる　ことの葉に　みじかき心　見えぬらむかも

物名

れむぎやう

雲はれむきやうごくとて月のため吹きいでむ風を待つゆふべかな

葉月もちの日くれつかたかつらよりとて畑つものにそへて布淑が「てり

みたむ月をこよひとおもひなすひとの心にいそぐくれかな」といひおこせるかへし

おもふことなすひなければめぐりくる月見るごとに驚かれつゝ

邦義がもとよりくるみをおくりて「あしびきの山にすむてふやまがらのこをめぐる身ぞいとかろげなる」と申しこし侍りけるは長月ばかりにやこれより

あしびきの山から冬のくるみちは秋寒くなる嵐にを見よ

名所をかくしてよみしとき風宮を

散ればこそさそひもすらめ櫻花おもへば春の風のみやうき

赤　坂

秋の月むかしのあかさかはらめやかすむはおいの涙なるべし

雄　湊

とにかくにむすぼほれたる麻のをのみなとけていつあはむとすらむ

病したる時くすしの鮒をすゝめ侍るに

我をのみうしとおもふなながもたる身の藥こそあだとなりけれ

六帖題にてくさのからを

○なすひなければ　爲す日なければ、茄子の三音を入れた。

○あしびきの山から云々　山よりと、鳥の名の山がらを入れてある。

○風宮　伊勢度會郡風宮、伊勢内宮の西南二町の所に在る、風神社とも云ふ、風雨旱災を祈る神。

○赤坂　伊勢鈴鹿郡赤坂。

○雄湊　伊勢多氣郡尾野湊。

ちくさのかうつしあはせしたき物はおもひの外の袖にしみぬる

誓興法師眼をやみてかた目盲ひたるにかた〴〵たまのおちたるめがねを入れたる箱にことそへよといふに

いざこども鹽干のかためかねてよりからむといひし時はきにけり

しはすばかりに餘齋がもとへ炭をおくるとて折句に

すきま風身にしむ老の末の山こす月なみもしはすとぞなる

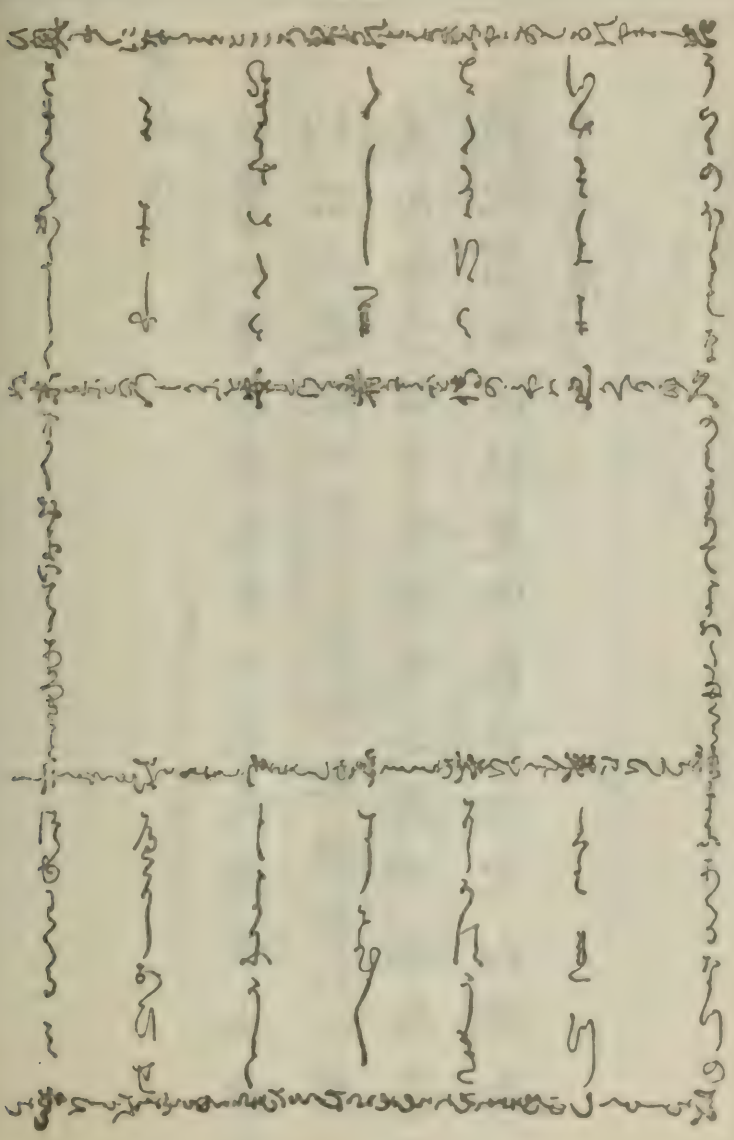
都炎上のあしたともからもおもひめぐらさでたゞ雨露をよくばかりなる所をとてよすがもとめてうづまさの十輪院にすみそめけるなり都の家づくりのことなど旦暮（あけくれ）にせまれるよはひをもて待ちつゝあかしくらすほどにみとせにもなりぬ今はこゝながら世をつくさばやと思ふもさるべき契りにやありけむいでやこゝにおはすなる佛たちに歌たてまつり後の世かけてたのみ奉らばやとおもひてまづあみだ佛にたてまつる折句歌三十二首

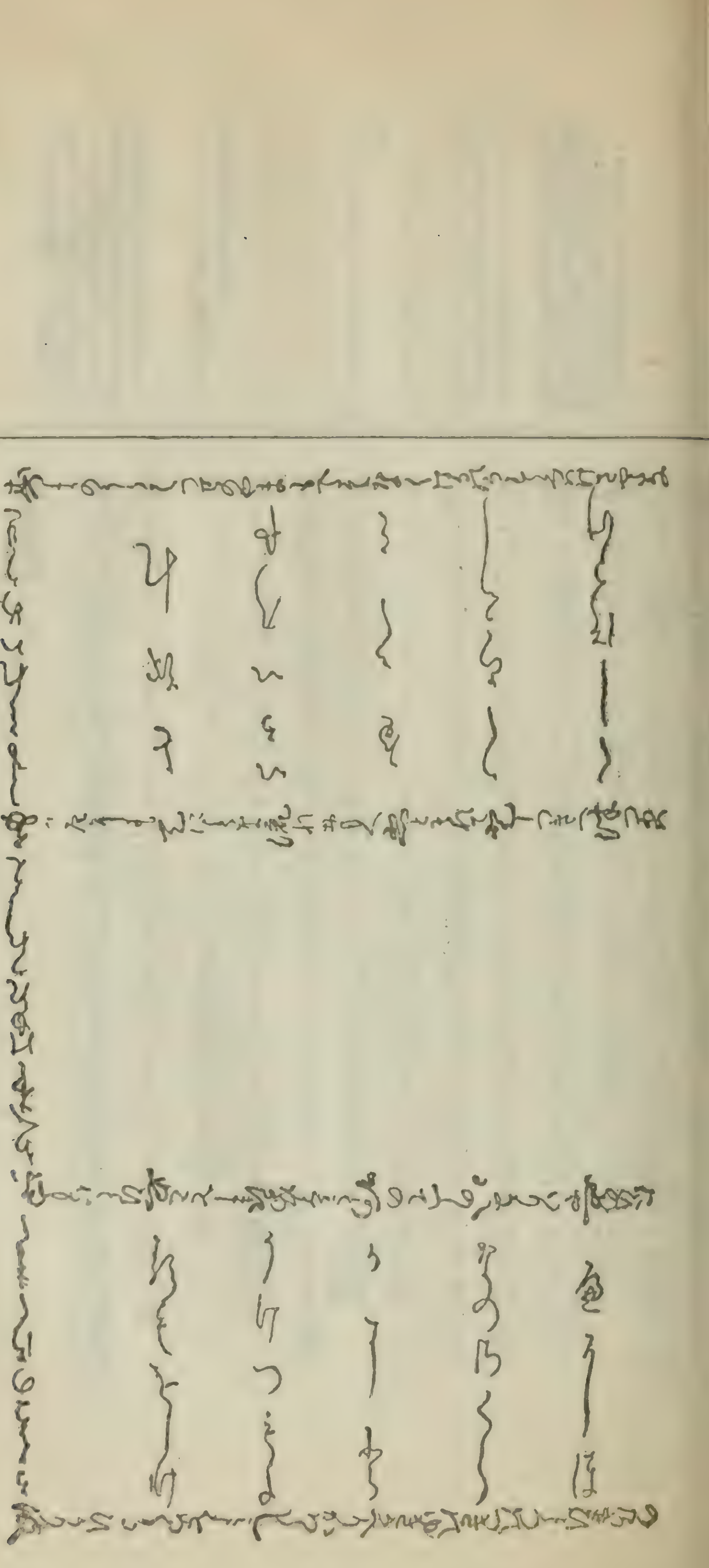
○くさのかう　芸香の異名。香氣の強い多年生の草。
○かため　比目魚、ひらめを云ふ、片目にかけた。
○折句　和歌の各句の上に規定の文字を置くもの。此の歌にては、すみすこしの五字、即ち炭少し送るの意。
○よくばかりなる　避けるだけの
○こゝながら　此處でそのまゝ。
○世をつくさばや　世を終り度い
○後の世かけて　現世から來世まで。
○折句歌三十二首　版面の都合によりて、雙六歌を先にし、この折句歌は二六四頁以後に續けて入れた。

○雙六歌　萬葉集に見える雙六賽歌い類ではなく、多くの和歌を雙六の盤の形にならべたのである。即ち二行十二段に分つのである。以下左頁は二七四頁四隅配四季折句の次へ入るものだが、版面の都合でこゝに入れた。
○大字一首　二六二頁の「雙六の市場に立てる人妻の云々」の歌をさす。

雙六歌

大字一首拾遺集第十九雜戀歌也順集
以右古歌配四行以自詠被造作双六盤面
其形如左但云古歌有小異今依拾遺集
改之習古人跡更以愚詠續之和歌都而
十五首





よみときやすきため左にかいなへ侍る

拾遺集歌一首

壽具呂久能以知波爾多天流悲登津末乃安者傳也美奈無毛能二也八阿良怒
壽まのうらは〳〵せのやまもへだてなく春のかすみはけさやたなび具
具に〳〵になだたるところおほかれど花は都のはるの山し呂
呂うこくの程もなくのみもりてよはたまくらのまにあくる夏の以
以ちじるくつゆおきそめてこのあさけくるあき見ゆるにはのかよひ知
知ぢのあきひとつのつきのゆきかへりかはらじみよをめぐる光波
波るはなのさくまで匂へ木々のゆきかれし枝にもみればめかれ壽
乃やまみなあかくはとひこは礼時雨れ照るひすくなみやまずそめつる
美だれつゝなにかはうきめむすびぐさもとよにうとき野邊におひせば
也へにほひはなのさくらぎあかずとへらうけつもよしぬるもをしけく
多かだにもてにこそなるれおもへひとそれて年月へつゝあはぬ末
末れにこばのどかにをあれさくら花みにとてのみやはやかへりゆ久
能ちつひに見むといひなばうらみむやつらきもうきもものならなく二

○壽具呂久能云々　拾遺集卷十九雜戀に出て居る「雙六の市場に立てる人妻の逢はでやみなむものにやはあらぬ」を採り、之に十五首の歌を配して續けたのである。

○呂うこく　漏刻、水の滴りにてはかる時計、水時計。

○めかれ壽　目を離さず賞美する意。

○あかくはとひこ　明くは訪ひこ

○むすびぐさ　結び草、單に結びし事を草の名に擬したのである。

○らうけつもよし　朗月も佳し。

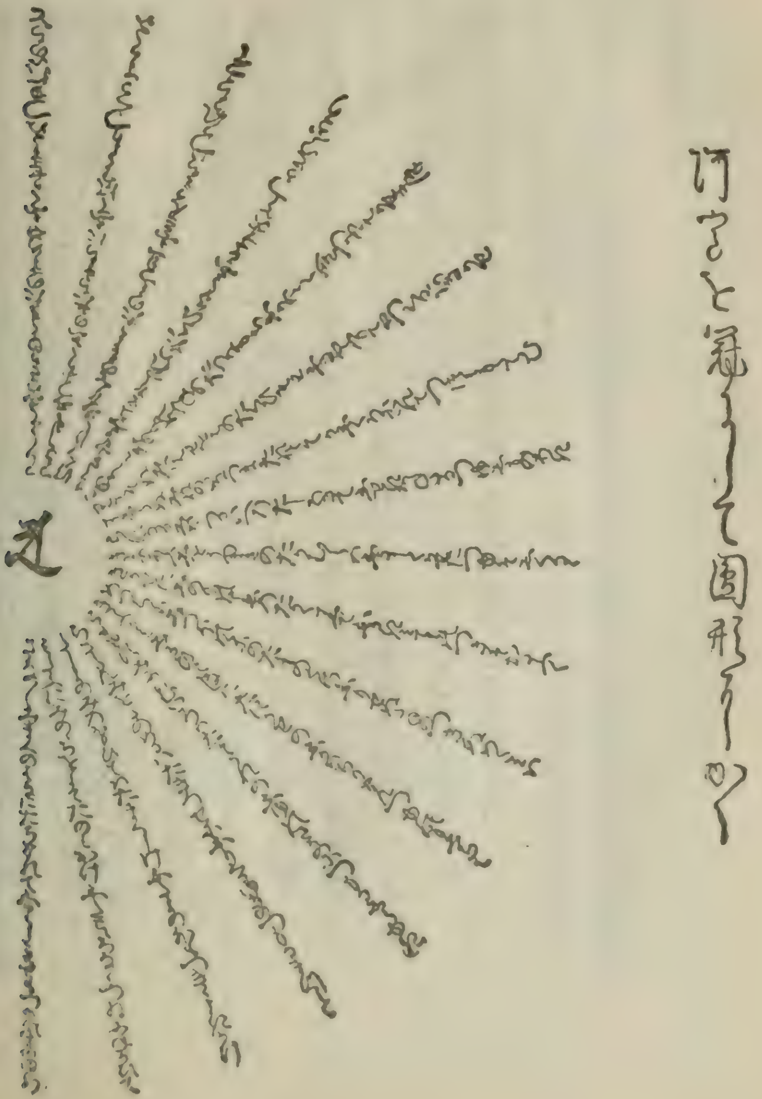
○多かだにも云々　席だにも手に馴れるのである、思へ君よ、それに君はそれて離れ、年月あはぬ間の長さよ。それるは席の緣語。

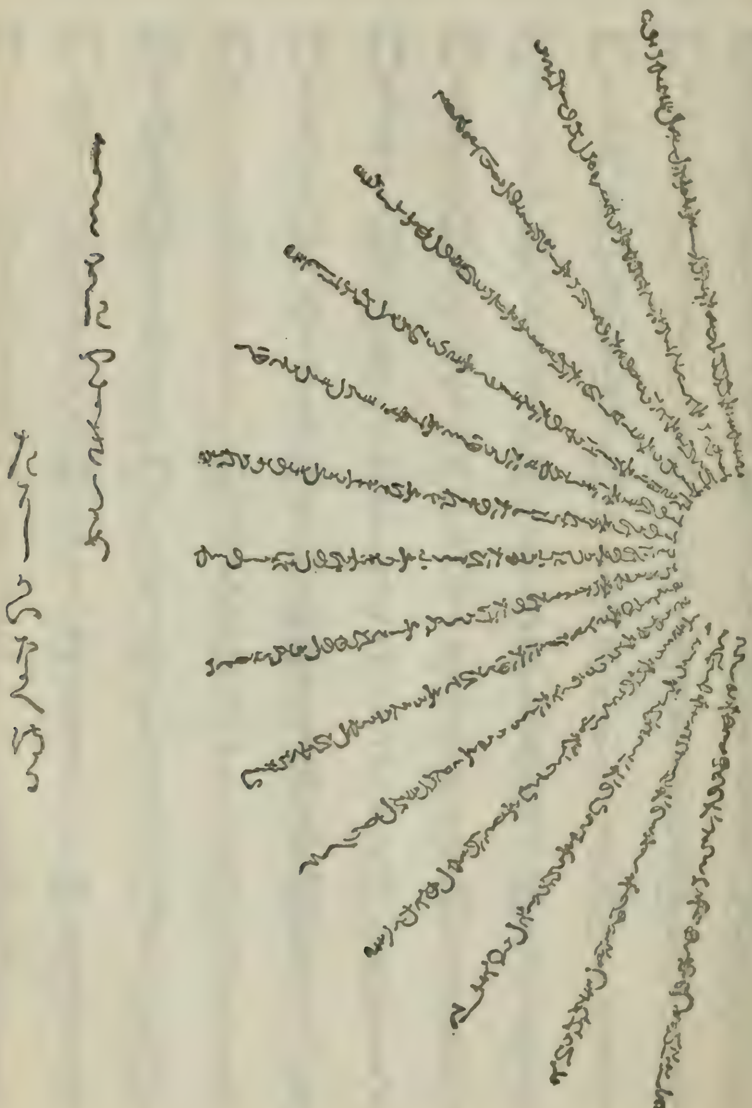
二しにひのやゝいりなばのふでのあとみずあらましをこぬひとおもふ爾

具さまくら片しくまなく起きいでて暁ごとに露わくる道

天ををれば流い〳〵のやまひへてみなとかくこえしかつくしつるけさ

○流い〳〵のやま　るゐ〳〵の山であらう。纍々の山。重なつた山。





阿[illegible]

阿[illegible]

阿[illegible]

阿[illegible]

阿[illegible]

阿[illegible]

阿[illegible]

阿[illegible]

阿[illegible]

○ゆめの陀ち　夢の直路。夢の通ふ直な路。

○都かねをにして　束ね緒にして、結び紐。

○不しはのつゆ　伏葉の露。

○陀つかゆみ　手束弓、手に執る弓。

阿つきひも波なきあらせの陀えまなく不きいろしろて於れわふすにし

阿なまわら波きうせらひし陀ゐなるふ不し見なあけみの於ゆふつける

阿けられぬ波とあるまの陀のまにれ不しあききまお於すりじなぜし

阿まうくれ波とうきすへ陀えせらや不らせふまうれ於ねのよれさま

阿さるやま波ねのけうりも陀えぬへし不さらふらやしも於きまやわする

阿らしくく波ゐさらむくも陀のまあや不くうせまるな於もれいのらと

阿やうちも波つふりくゑの陀ちまらた不てのりくより於くるしくとは

阿けくらし波なとのくてらう陀のくつとも不くえるこらけ於うれらつまて

阿まきまつも波るみとなく荒れ陀くひうつく不をさふみそく於るいけひなり

阿てのうへ波のりれつみの陀つみすら不ららうそくへき於うもそらせまう

阿みえてぬ波つくせもとけの陀くらひてと不きやよりてや於くらあさうせ

○阿里〳〵て彌はさかゆくも　長く生き居ての果てに身は榮え行くも。

○不すさにいを釣るこいふなり　海人すら御名を唱ふれば、澤山に魚を釣ると云ふ事である。ふすさ＝澤山の古語。

○阿このうみ　志摩英虞郡英虞の湖い海。

○瀬にはせをはの陀くひそこ　我が身は芭蕉葉の類であるぞこ。

○陀しろきて　退き避けて。

○陀かむら　竹村、竹藪。

○陀まのくさ　玉の草、美しい草。稲の美稱であらう。

○不たよの外もつききよきかけ　二世は茲でも過去現在の世であらう、外は未來の意。月清き影は眞如の月、即ち永久變らぬ佛をたのむ意。玉くしげはふたの枕詞。

阿とさつぬ弥ねのいはま陀れそらさくるふれて都つしむ

阿らすゑうさ弥かつこへの陀ふきて不せたるのさる都をとやすのあさ

阿きふあみ弥とうつまの陀らむしくれ不きすくらせよ都ゆふさくらく

阿きうせふ弥のかのつまれ陀くすゑて不らたてゝの都きまらいつて

阿めつらふ弥つふれくさの陀まのくさ不つゝせあさの都きあめくさは

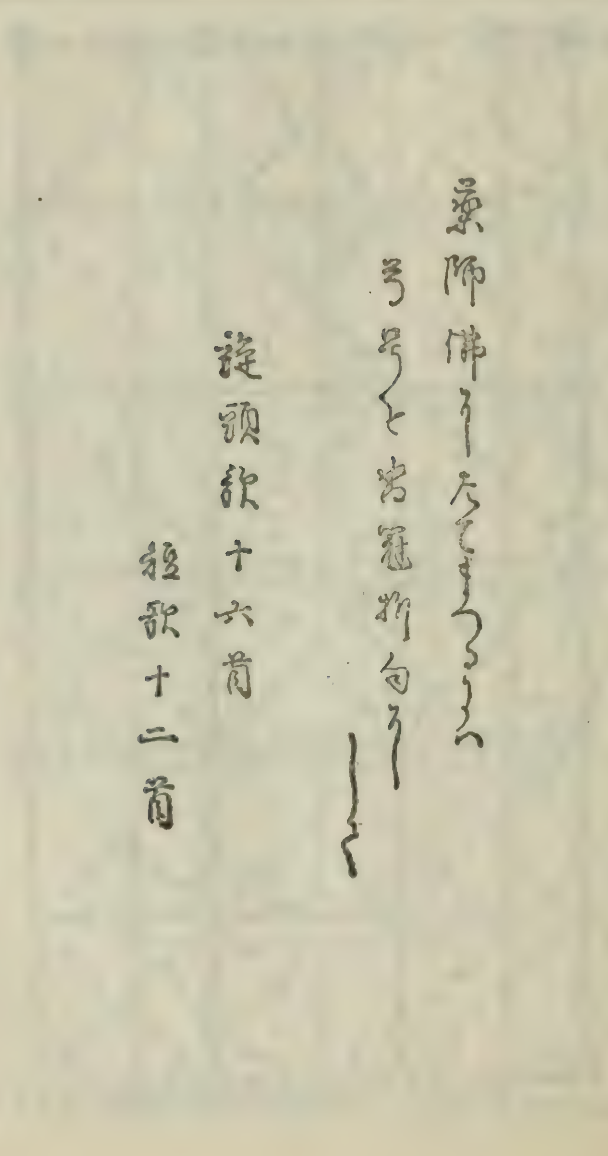
阿そつく弥うらひしうれ陀にうせの不うからうる都ゆのわすらく

阿をもん弥ふしひろれ陀をうれの不ゆのさの都すろゆき

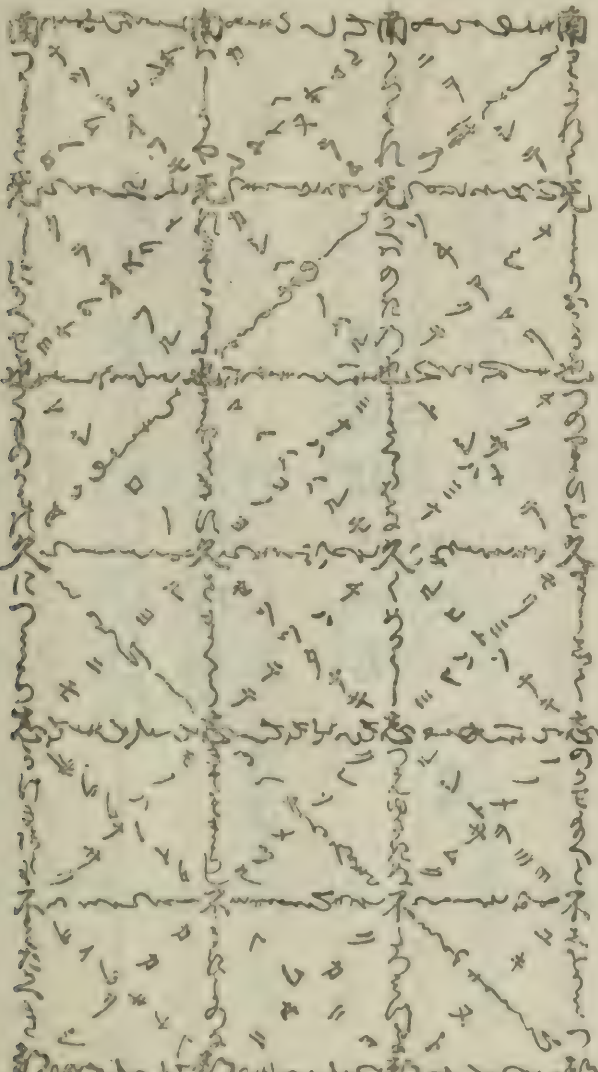
阿らさしん弥とよのろいへ陀かつせふ不かりくるはきの都すらすかして

阿しゝの弥れおりしはれ陀きくしけ不たよの外もつききよきかけ

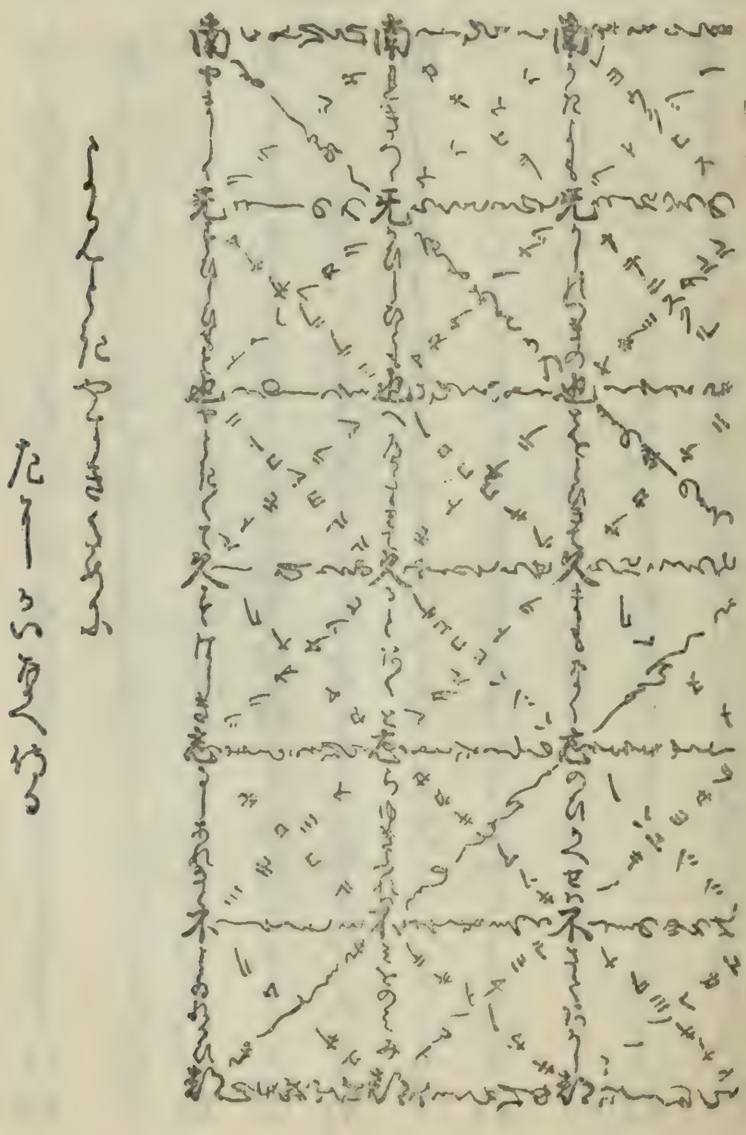
阿さゝ弥のかえくま陀のてかけ不ゝさゝるのつわよ都ふくしめく



(一)沓冠　沓は最後に定められし字をつける歌、冠は上につける歌である。



○よみときやすきために云々　讀み理解しやすきため、左に書き並べました。



○无しよりおこる也つのやまひ　無始より起る八つの病。衆生の无始不可得時代より生ずる八病。
○久すしして　薬師を以て、醫者なし。

○久くめりし　包んだ、蕾んだ。
○志つえゆさきぬ　下枝から咲いた。

○也くものかみ乃　素盞嗚尊をさす、「八雲立つ」の歌が日本和歌の祖と考へられて居るからだ。

○久るとあくと　暮ると明くと。次の志らゆきにかけて、日のたつもしらずにの意。

南やられて无しよりおこる也つのやまひと
　　久すしそ志のうせまほしとさへはね

南うらそれ无かへはのきの也まさくらは
　　久くめりし志つえゆさきぬはなつかしね

南いしるや无ほとこふ也まかしうに
　　久さまくし志きそふまに君かよのなね

南つしよ无かしふかへて也くものかみ乃
　　久るしくら志るけさたるそ不ときくきね

南かたひも无かしれつまの也しとぞいふなる
　　久ますたく志のひさへもなし不まさていうしね

南まさつ无かひはひとも也へりさらに
　　久るとあくと志らゆきにふれは不るとのとしね

○久すはしき　奇しき。不思議な。
○南にはつの　王仁の作つたと称せられる「涙速津に咲くや此の花冬ごもり」の歌を云ふ。
○志とけなく　順序もなく、しだらなく。
○あさかの也まの井の　萬葉集巻十六「安積山影さへ見ゆる山の井の浅き心を吾が思はなくに」「涙速津」の歌と共に古今集序に出て有名なのである。

○无さしのの云々　武蔵野の草草分けて空しき色の。紫はさめ易いので空しき色と云つた。

○也こもいはぬは　何とも言はず、相手にしないのは。

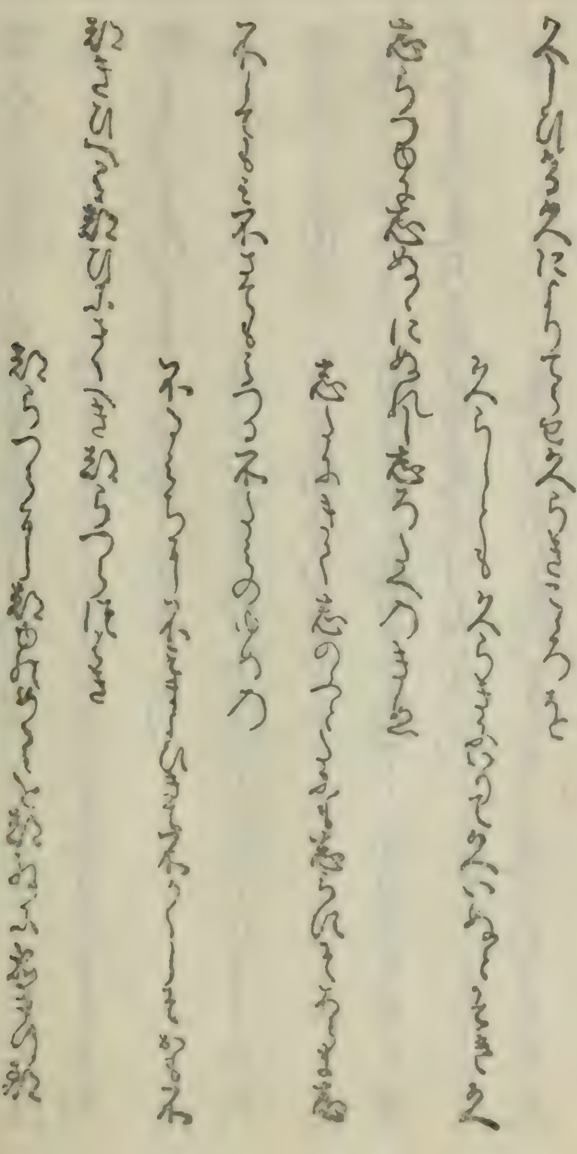
南やましく无ひしかやこ也にてれにして
　久すはしき志らしあやしと思ふのわかいお
南にはつの无りしれおも也ちかしみうせ
　久さくはな志とけくの事きそそしきお
南もあさく无へもあさかの也まの井れども
　久しかは志らぬまへきおもふたまふひお
南きあらも南れついまも南とかはふさて
　南れつこと南らのみあまき南けれどもら南
无さしのの无らくれとて无かしたころの
　无らふたと无つまとおく无つれなめの无
也こもいはぬ也つはまそふ也うつとしも
　也まそく〳〵也そもいくみへ也とそくしのみと也

○久しひかる　奇しく光る。

○志ぬゝにぬれし　しつとり濡れた。

○不たみのゆめ　二見の夢。夢にも現にも見た夢。

○孤らつらつはき　つらくと云はむ序詞。



四調配四季　折句

雑歌　　十二首

南ふとして南つくへゆかん毛とらあまり南かくらか雪毛うしへつゝ宿

也としめて南まつくひす毛くしやつる也まへいてゝも久るひくそうさき

南うなひと毛たてにすくる也ましろの久せそつたなき志ゝとところよ

毛くらした也とのへふかく毛すみれ久るとも有らし也まふきのそり

○也としめて　宿を定めとつて。
○毛たてにすくる　楽手で何もせず過ぐる。
○久せそつたなき　久瀬と云ふ地名とかけた、辯がいかにも愚かである。
○毛くらした　花下。
○也とのへふかく　宿の邊深く。

○忘れたるひとを　本も讀まずぼんやりした人を。

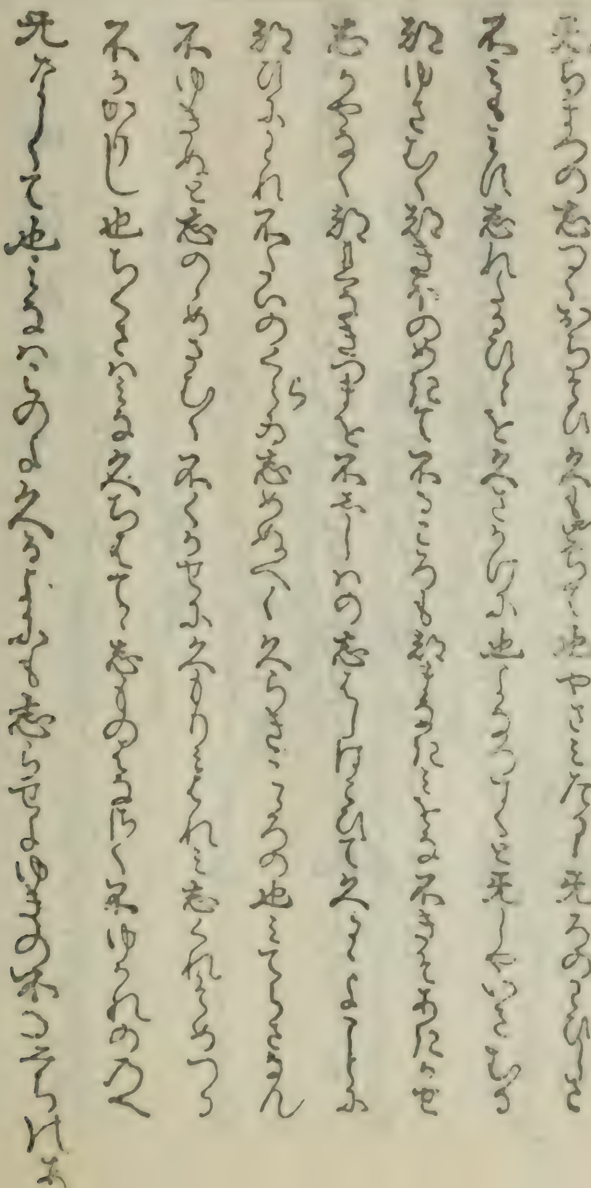
○不しらの　代柴の、しばしと云はむ序詞。

○不たいのくらゐ　不退の位。佛教の善根功德によつて得る退轉しない地位。

○志ものはなさく　霜の花咲く。

○このよ久るよにも　現世、來世にも。

○不るみちのあと　雪の降ると古さをかけた。



俳諧歌

小松二本ひきてかたはらにおきあがり小法師のあるゑに

ころ〳〵の里のうなゐが初春のはつねにもねしことの見えぬは

定静が眼のやまひしけるころわかめにそへて「春霞へだててさやに見えざれば遠くなるとのめをからせつる」かへし

やみて君かすむなるとにからせつるわかめにあえて今ぞいえなむ

太秦にすむころ郭公のひねもす鳴くをりから京よりふみおこせたるかへりごとに

時鳥聲の袋にいれられればけふの使のつてにやらまし

心性寺にて

松風の讀經の聲に聞えしはつく〳〵ほうしなければなりけり

九月十二日うづまさまたら神の祭にうちしぐれたる雲のたえまよりさしいでたる月いとをかし

しぐれゆく雲まの月のまたら神おもしろしとや見そなはすらむ

山雪

(俳諧歌　古今集に始めて用ゐられた名、滑稽歌。萬葉集卷十六に多くの滑稽歌が出て居るのでそれに擬したのである。

○ころ〳〵の里　おき上り小法師をころ〳〵ところがすにかけた。

○はつね　小松引きは正月初の子日にする例であるのを、初寝と戯れて、小法師のつねに起きて、寝ぬを洒落れたのである。

○とほくなると　遠くなると、鳴門をかけた、鳴門は若めの産地。

○かすむ　眼病で眼のかすむと、霞とをかけた。

○わかめにあえて　若布にあやかって。

○つく〳〵ほうし　蟬の名の法師を付け加へて戯れたのである。

○またら神の祭　廣隆寺境内に大酒神社がある、秦氏の氏神。毎年九月に祭あり。摩多羅神を祭ると云ふ。

○雲まの月云々　雲の間から月のまだらに見えると、神の名とかけた。

とほ山のかぶろなりつるいたゞきに綿きてけりと見ゆるしら雪

ある人の雪の日鱈をおくれるに

わたつ海はかひなくふるとみし雪の魚となりてぞはやされにける

女の見てわらひければ

わたつうみのおきなももとは人なみに磯邊のなまめかりしものなり

むかし洛東にすみ侍りけるころある人のきてあしをみつとこひけるにくまもなくもとめ侍りけれど露あらざりけるけしきを見てほかにてもかりてむとていでぬいとほいなければこれより

津の國の難波のみつのあしをなみことうらかけて刈らせつるかな

銅駝坊のあたりに知る人のもたる家ありいたづらなればとてすりもせずあれたるをさながらかりてすみけるころ人こぬほどは心やりにことかきなでてうたひをるに月のよごろ更け行くをり〳〵は壁のあれまよりたぬきはひいでて庭草のしげみに見えかくるゝもあはれにおぼえて獨どちし

あなさびしたぬつゞみうて琴ひかむわれことひかばたぬ鼓うて

腹赤をよめる

○かぶろなりつる云々　短く髪を剪てるをかぶろと云ふ、綿帽子をきるのは大人の婦人の外出姿である。
○みし雪の魚となりてぞ　鱈は雪の魚とかくからの戯れ。
○はやされにける　もてはやされた。
○なまめかりし　生布刈りしと、女のなまめくにかけた。
○あしをみつ　錢を三つ、三文であらう。
○みつのあしをなみ　三文の錢がないので、三津の濱の蘆がなくてにかけた。
○ことうらかけて　異浦かけて刈らせた。外の浦まで刈らせた。
○銅駝坊　京都二條を銅駝坊と稱する。
○さながら　其のまゝ。
○たぬつゞみうて　狸よ、腹鼓を打て。
○腹赤　鱒の異名と云ふ。故にまと魚などにかけた。

浪あらきもたひの泊日をふれば舟こぞりても醉ひにけるかな

うづまさにありける頃つれ〴〵なるから座右に詩經のありけるを見てよみ心みむとてよめる中に葛覃の章の心を

はふ葛もしげくなりけりかりていざおりたちきせむせこが衣に

卷耳

人をわが思ひの草のまじれればつめる若菜も打ちおかれつゝ

桃夭

さかりぞと折りえしからに花の名のもゝよろこびの宿となりぬる

兎罝

兎とるますらたけをは弓なれやおきふし君がまもりとぞなる

漢廣

行きていざ君を千里の外に見むわがのるこまにまぐさ取りかへ

汝墳

汀なる柳かりそぎながむれどわがまつ君はいまだかへらず

羔羊

○舟こぞりても云々「伊勢物語」の成句をとり、酒瓶であるから醉ひにけるかなと舟に醉つたのとかけて戯れたのである。

○葛覃の章　詩經葛覃篇の意を採つたので、文王の后妃自ら葛布を織つた心持を詠じた。

○卷耳　卷耳篇の「采采卷耳、不盈頃筐、嗟我懷人、寘彼周行。」の意。

○桃夭　桃夭篇に「桃之夭夭、灼灼其華、之子于歸、宜其室家。」桃の花の盛なる頃、仲春で嫁期に宜しき意。

○兎罝　「肅々兎罝、椓之丁々、赳赳武夫、公侯干城。」の意を採つた罝は兎とる網。

○漢廣　「言秣其馬、漢之廣矣、不可泳思、江之永矣、不可方思。」の意をとつた。

○汝墳　「遵彼汝墳、伐其條枚、未見君子。」の意を詠じたのである。

○羔羊　「羔羊之皮、素絲五紽、退食自公、委蛇々々。」より採つた、羔羊は毛色黒き小羊。

身の程をしれるひつじのかは衣かざるしら絲色もなくして

小　星

暮れゆけば西に東に見るほしのおなじからぬぞ身のたぐひなる

栢　舟

わが心石ならませばまろばして捨てましものを野にも山にも

綠　衣

わが袖はあやな涙のあけ衣むらさきをこそ人は愛づなれ

谷　風

山櫻咲き初めてこそ白雲の花におよばぬ色に見えけれ

旄　丘

今ふらば雨のもるべきこの本を人わらはれにたのみけるかな

靜　女

わが思ふ人のてふれし櫻花よにふりにたる色香ならめや

二子乘舟

面影に今もうかびて行く船のゆきけむ君はかへりましきや

○小星　「嘒彼小星、三五在東。」「嘒彼小星、維參與昴。」の句意をとった。

○栢舟　衛太子共伯の妻共姜、夫の死後、栢舟の詩を作り節操をまもる故事。

○綠衣　「綠兮衣兮、綠衣黄裏、心之憂矣、曷維其已。」綠は間色で賤しいが表となり、黄は正色であるが裏となる、嫡妻が妾に劣る地位に在るを歎く意。

○谷風　「習々谷風、以陰以雨」云云以下の句意を採った。

○旄丘　黎の君臣、衛國の西に寓居し、衛の救ひを空しく待つ意。

○靜女　衛國の青年の、麗人を詠ぜし「匪女之爲美、美人之貽。」の意を採った。

○二子乘舟　宣公の子伋と壽の川を渡りて齊に行くをいたみ作れる詩によった。

○牆有茨　「牆有茨、不可掃也、中

○鶉之奔々 衛の宣姜が公子頑と通じたのを、衛人が諷にそしつた詩である。

○蝃蝀 虹の意、虹は天地の淫氣として忌む、虹に喩へて男女の淫奔をそしる詩。

○相鼠 「相鼠有齒、人而無止、人而無止、不死何俟。」云々などに據つた、人に禮儀ある可きを誡めた

○干旄 衛文公の時、亂後國民皆治を思ひ、善政を望む、その心持を詠じた。

○氓 無智なる民、女の許に絲を買ひに來た、實はそれにかこつけ女を得んとするのである、看破した女の心持。

○竹竿 衛の女他國に嫁して、故鄕を忍ぶ心持。「籊々竹竿、以釣于淇、豈不爾思、遠莫致之。」

○黍離 公役に關係せる東周の大夫、宗周の舊都の荒廢を見て作れる詩。

○兎爰 兎罠に兎かゝらず、雉子のかゝつた事を、小人は巧に免れ君子却つて禍にかゝるに喩へた。

鶉之奔々

我がたのむ人こそうけれとりすらもおのがたぐひをことにやはする

蝃蝀

誠なき人のたぐひや中空に絶えてあと見ぬにじのかけ橋

相鼠

あなねずみあなはしたなと思へどもわが垣こゆる人にまされり

干旄

何にかはことの葉そへむさく花のあかぬことなき國の榮えを

氓

よりきつゝ我に心をひく絲のあはむと思はば秋をまて君

竹竿

故鄕にいつかも行きてつりのをのむすほほれたるうさを解かまし

黍離

みがかれし玉のみや居をけふとへば空のみどりにつゞく麥畑

兎爰

いにしへはうさぎをとりしあみのめにかゝれる雉のほろゝとぞ鳴く

葛藟

つらなれる枝をわかれておち梅のみをあはれともいふ人のなき

女曰鷄鳴

かもをえば酒汲みかはし琴ひきてあがもふ君と共に老いなむ

有女同車

朝がほの花のものいふ心地してみやびし妹が聲ぞわすれぬ

野有蔓草

ち草さく秋野の露の玉さかにあひにあひぬる花の一とき

東方未明

時ならす君しもめせばさ夜中にあけの衣をさかしまにきつ

甫田

田草とるしづも千町のとほつ人おもふおもひのしげきをや知る

陟岵

ちゝ母のたびなる我をおもふらむ待つらむさまの面影に見ゆ

○葛藟　くずの蔓。世衰へ郷里親族皆流散し、孤獨となれる身の哀れを詠じた詩。

○女曰鷄鳴　夫婦相和し睦べる様を作れる詩。「女曰鷄鳴、士曰昧旦、子興視夜。」云々。

○有女同車　「有女同車、顏如舜華」の句をとつた。鄭國の男の女を喜べる詩。

○野有蔓草　男女の不圖、野に逢へる歡興を歌へるもの。「野有蔓草、零露漙兮、有美一人。」云々。

○東方未明　「東方未明、顚倒衣裳、顚之倒之、自公召之。」の語意を採つた。

○甫田　小さき事をいとひ、近き事をあなどる心あるを誡めた詩、「無田甫田、維莠驕々。」云々。

○陟岵　役人軍役に出で、家親を懷うて作れる詩。「陟彼岵兮、瞻望父兮。」云々。

○伐檀　賢者世に用ゐられぬ様、[illegible]

○山有樞「何不日鼓瑟、且以喜樂、且以永日、宛其死矣、他人入室。」の意を採つた。

○葛生　人妻の良人が軍役に赴いて歸らぬを忍ぶ詩。「角枕粲兮、錦衾爛兮、予美亡此、誰與獨旦。」

○采苓　人の言の眞實なきをそしる詩。「采苓々々、首陽之巓、人之爲言、苟亦無信。」云々。

○黄鳥　秦穆公卒せる時、子車氏の子三人殉死した、その事を作れる詩。

○衡門　陳國の若き男女、東門宛丘の木陰に相集まり、歌舞し樂しめる事を作つた詩。

○澤陂「彼澤之陂、有蒲與荷、有美一人、傷如之何。」の意を採つた。女思を戀する心。

○棠棣　人君その兄弟と酒宴する時の樂歌、兄弟をなつかしむ心を歌つてある。

○彤弓　赤塗の弓。天子諸侯の武功を賞する時、大饗を設け弓矢を賜はる時に奏する樂歌。

山有樞

いける日に遊び樂しめ君死なば君がみことはひとぞひかまし

葛生

つのの枕あやの衾は今もあれど君なき牀に獨りねましや

采苓

はつわらびをりなつかしき人ごとをたのむな我がせ誠なき世ぞ

黄鳥

身にかへてをしむにとまるものならば花は嵐にまかせざらまし

衡門

よはなれて物にきそはぬ我が門のいさゝ小川に心をぞやる

澤陂

かくれぬに生ふるはちすのかぐはしく清き光も知る人ぞなき

棠棣

かすが野のはらからこそは世の中のうきたの杜のなげきをもとへ

彤弓

本末もあかき心をみそなひてたまはる弓のいろもかしこし

庭燎

うま人をまつのかゞり火影更けてよろしづかなる玉しきの庭

周易の卦名をもよまむとてよめる中に、山水蒙

山陰の淵にやおちむうなゐごが行きがた知らず道まどひして

天地否

あひ思ふはては火水と隔たりて心かよはぬなかとなりぬる

天火同人

みな人のねがひをみつの道ならば何かなにはのさはりあるべき

山火賁

秋山の木々の錦のいろ〳〵をかざりそへたる夕づくひかな

地雷復

なごりなく消えぬと思へばかつ立てて籠れるふじの煙をぞ知る

山天大畜

よも山を集めて空にみつばかりつめるたからは世の人のため

山雷[illegible]

○庭燎　天子が朝參の諸侯を前夜より待ち眠らぬ樣を作れる詩。庭燎は大殿の時のかゞり火。

○山水蒙　坎下卦の一、嶮險雲煙之象。山水くらく、童蒙が物を明白に決斷しがたき意。

○天地否　坤下卦の一、日殺霧裹之象。天地ふさがりて心通ぜざる意。

○天火同人　離下卦の一、闇夜揭燈之象。人心同しく親み深く、萬事調ふ意。

○山火賁　離下卦の一、門内競美之象。物の美しくかざる意。

○地雷復　震下卦の一、掘地得珠之象。物事過ぎ去つて又始まるの意。

○山天大畜　乾下卦の一、金在嚴中之象。多くの資を山中にたくはへ集めたる象。

○山雷頤　震下卦の一、[illegible]

○坎爲水　坎下卦の一、二人溺水之象。世の艱難困窮に陷る相なる意。
○雷天大壯　乾下卦の一、猛虎生角之象。陽は盛んに長ずるが、華あつて實なき意。
○火地晉　坤下卦の一、滿地錦繡之象。太陽の地上にのぼり進むの意。
○水山蹇　艮下卦の卦、門前有陷之象。坎陷前にあり、山下に止つて進む事できず、行き惱む意。
○山澤損　兌下卦の一、貴賤正位之象。自己の富を損して、他の不足を惠む意。
○地風升　巽下卦の一、積小成大之象、草木の地中に有つて、次第に地上に發育する意。
○澤水困　坎下卦の一、河中枯木之象、困窮を極めて、萬事不自由であり、苦勞多き意。
○水風井　巽下卦の一、海人收魚之象、邑は改むも井は改めず、常住の場所を守らざるべからざる意。

坎爲水

ながれてのよるせもがなやよのうさにあふくま河の底のうもれ木

雷天大壯

久方のあめをとよもし鳴る神の時えてのぼる聲のはげしさ

火地晉

のぼるひのひかり見るごといや高く榮え行くべき時はきにけり

水山蹇

いかにせむ行くも歸るもなやましくさがしき道にまどひきにけり

山澤損

君のため人のためにはなにはえのみをつくしても何かうらみむ

地風升

なすわざの身にみちくて年をへば路に榮ゆる時にあふべし

澤水困

淵にみのおちくるしみてあすか川せにかはる世をたのむけふかな

水風井

みよや人くめど惜しまぬ里中の大路ゐづゝの水のこゝろを

艮爲山

行末は山かさなりて道けはしとまれ旅人よる越えめやも

風山漸

都をばおもひたつより一日おちずゆかばいたらむみちの奥にも

風澤中孚

よの人の誠は天のみちなればへだてさゝふるかたやなからむ

水火既濟

野も山もみな紅の秋の葉はいづくのくまか染めのこすべき

火水未濟

いもせ山中な隔てそよしの川わたらでやまむものならなくに

○艮爲山　艮下卦の一、山上有嶺之象。止まるに宜しく、進むに損ある意。

○風山漸　艮下卦の一、山中植木之象。順次に進めば吉に向ふ意。一日おちずは一日も缺かさず。

○風澤中孚　兌下卦の一、鍋釜得蓋之象。心中誠あり、正直丁寧なれば吉の意。

○水火既濟　離下卦の一、芙蓉歛霜之象。あらゆる事の遂げ盡せる意。物の亂れる始めとされて居る意。

○火水未濟　坎下卦の一、曉光浮海之象。物事之より始まらんとして遂に相通じ成就する兆ある意。いもせ山は、大和吉野郡吉野川を間に隔てた、妹山、背山。

いにしへの家々の集とて、世に傳はれるを見侍るに、大方はひとのあつめたるにて、みづから書けるだにまれ〳〵なれば、まいてえらびおけりとみゆるは侍らざりけらし。されば小澤のおきな、いそのかみふるの中道をわけそめられける昔より、もゝたらずやそぢに近きまで、年頃よまれけるをたゞ忘れじとてかきとゞめられたる歌は、よろづにもあまり、巻をかぞふるにいそぢにもみちはべれど、世に殘さましなどつゆおぼさざりけるみさをは、歌を見む人は見て知らるべし。これを六帖詠草と名づけられけるは、かの紀氏の六でふの歌の體を、つねに心にかけられけるによりてにもやはべらむ。それが中の歌二千首ばかりとうでて、たにはの國柏原を知るよしし給ふみもとにまゐらせられたるは、かの君のみづからはしにかき給へるに見ゆ。これにしもたゞごとによめる、あるは贈答の歌の多かるは、翁、人に教へらるゝのかけはしなればなりけり。いにし年よりたゞしあはせて、やう〳〵かき淸むるに至りても、歌は一もじをもたがへず。詞書はかりそめにしるしおかれしもあなれば、つたなき筆して補ふ所も侍るめり。かんなは翁の用ゐられしにま

○六でふの歌の體　紀貫之の女の編と傳へられる古今六帖をさす。
○たにはの國　丹波國。
○柏原を知るよしし給ふみもと　柏原の領主。丹波氷上郡柏原、二萬石、織田信憑。
○かんな　假字。

かせて、ひとへに和字正濫鈔による。とかくするに、浪速の浦のあしわけなるよにしあれば、璞の年をさへ七かへり餘りへてかのとの未の春よりぞ、いへ〳〵の集にならへて、世に傳ふるやうにはなり侍りぬ。小川萍流しるす。

○和字正濫鈔　僧契沖の著、元禄六年二月二十一日の自序がある。在來の假名遣、特に定家假名遣等の誤を正し、歷史的假名遣を研究した結果の發表である。
○あしわけなる　俗務しげき意。
○璞　あらたま、山よりほりしまゝの寶石、砥にかゝり、年の枕詞。
○かのとひつじ　文化八年辛未。
○いへ〳〵の集にならへて　多くの家集に倣つて。
○小川萍流　小川布淑の法號、蘆庵の門人。

六帖詠草拾遺

小澤蘆庵

春歌

年の始に春たちけるによめる

さきだたじ遅れじともや契りけむ年と共にぞ春のきにける

岡崎の庵にて春を迎へて

天の戸のしらみゆくより野も山もかすみ渡りて春はきにけり

七十九といふ年の始に

新玉の春はいかなる故のあれば老そふ身にも嬉しかるらむ

あづまの千蔭がはじめて消息して年ほぎすとて「君もあれも百世をへつつ花鳥にあくやあかずやいざ試みむ」といひおこせたるかへしにいさゝか詞かきて

花鳥の色にもねにも思ふこと聞えかはして世を盡さばや

○老そふ身　老の加はる身。

○あづまの千蔭　江戸の加藤千蔭

○聞えかはして　言ひ交して。

○世を盡さばや　世を終らうよ。

みの後もなにか變らむ月花にあかぬ心はこゝろみずとも

春　河

谷川の水のいまだに濁れるはみ山の雪のきえもはてぬか

おく山の雪かもけぬる谷川のいは瀬の波のおととよむなり

瀧音知春

みなかみの雪消(ゆきげ)にまさる音羽川はるたちくめり瀧ついは浪

新日吉御所の御會始に早春松を

しも雪のふる木の松も璞(あらたま)の春日にあたるけふや嬉しき

此の時わが數へたるともがらをも召されければしかよめるなりけり

子日に松たてまつる　同御當座

君が經む八百萬世のはつ春のねのひの松をひきぞそめつる

雅樂助季康朝臣七十賀に子日を

さかえゆく小松が千代の春かけて幾子の日をか君はかぞへむ

霞知春

鶯はまだ告げそめぬ山ざとの春をたどらでたつ霞かな

織田殿六十にならせ給ひての春木曾路をへて武藏にくだり給ふに丹波よ

○みの後　死後。
○こゝろみずとも　橘千蔭の歌に「いざ試みむ」とあるに應じたのである。
○新日吉御所　京都の東郊、新熊野神社附近。
○ふる木　降ると古と。
○御當座　尊き人より出されたる即席の作。
○ねのひ　子の日と根のびと。
○雅樂助季康　安倍季康、京都宮中の伶人。雅樂の復興に功があつた。享和二年三月歿、年七十二、此の七十賀は寛政十二年である。
○織田殿　織田信憑。丹波柏原の大名。

りの名所十二首をわかち人にもよませて來るとき大江山の春を

八重霞たちへだつれど喜びのおほ江の山はこえもなづまず

人の悼に山邊霞を

分けいりし人はかへらで春山に霞たなびき今日も暮れぬる

定靜が悼におなじ題を

共に今わけゆかましをあはの山あはともみせずとく霞みぬる

これは七月九日ばかりにて病いと重きに筆とりて手づから短冊にかかれしになむ

舊詞をよまむとてよめる中に

春くれば霞の衣たちかさね千重にかくれぬ赤はだの山

寒けれどわき葉さしそふ若菜にぞ日をつむ春の程は見えける

ゆきの中に春くることをしるものはおい馬よりもわかき鶯

早春鶯

花もまだ匂はぬ園の梅が枝に春を敎へてうぐひすや鳴く

せち分のあした鶯のなきつと人のいふに

老いらくは春ともわかぬ霜朝に初鶯は鳴きぬとぞ聞く

○喜びのおほ江の山　喜びの多いと大江山とをかけた。
○こえもなづまず　越えなやまない。

○あはの山　逢はずとかけ、次に泡と云はん序詞となつて居る。

○赤はだの山　大和生駒郡赤膚山

○わき葉　脇から出る葉。
○日をつむ　日をかさねると、摘むとをかけた。
○おい馬よりも　老馬よりも。

○老いらく　老ゆるの名詞。

なき人の上おもひいでられて

春きてもとけぬ冰柱や常もなき世をうぐひすの涙なるらむ

聞鶯

いまめかる聲にならはで高き世のしらべをうつす春の鶯

山野春光日々新にて今遊ばずばといひしも思ひいでられて

ひまの駒にのりて又とへ雪消えし昨日の野邊はけふの古跡

門柳漸緑

春のくる門の柳の淺緑あさな〳〵ぞいろまさりける

浦春月

心ありて海士は煙を立てねども月こそかすめ松がうらしま

春月言志

いにしへの春もかくやは霞みつる老いてぞ月はおぼろ夜の影

春雨

ふりしより春の寒さもわすれぬ雨の惠はくさ木のみかは

江上春曙

住吉のはるのみるめの一入やかすむ渚の明けぼのの松

○世をうぐひすの　世を憂と鶯とをかけた。

○いまめかる　現代的な。

○高き世の　古き世の。

○あさな〳〵　淺みどりの音の繰返し。

○老いてぞ月は云々　老いて眼のかすむ意。

○みるめ　見る眼と海松布とをかけた。

春曙雁

人やりの雁かはあやな鳴くばかり惜しまばとまれはるの曙

絲櫻

花をぬきやなぎをたての絲ざくら春の錦はこれよりぞ織る

山中櫻

やま深みとしをふる木の櫻花さてや散りなむ見る人なしに

花の歌

めできつる花よおほくの年をへて春しらぬみをあはれとを見よ

たぐふべき色香もあらば咲きてとくちるをや花のうきになさまし

古今集の詞をよむとて

花さかぬわが身やいつを一盛りありなば散らむうきも歎かじ

日毎に見れどあかず覺えければ

いまは世に心とめじと思ひしを花こそ老のほだしなりけれ

三月八日にやありけむ行章法眼より御筆そめさせられし御句と櫻花三枝とを賜ふおの〳〵名ある所のなりおほんには「東山春滿花如錦攀折頻翁一朶雲」とありければやがてかしこまりを法眼まで申すとて

○人やりの雁かは　人に遣はされた雁ではない、自分の心から來た雁ではないか。

○花をぬきやなぎをたて　花を横絲、柳を縱絲と織りて。絲櫻の絲の縁語を用ひたのである。次の錦も同じ。

○いつを一盛り　いつを自分の全盛時代としよう。

○老のほだし　執著なき老人の唯一の執著。

○おほん　御句の意。

○一朶雲　一枝の花の雲。

○かしこまり　御禮。

宿ながら花をつくして見つるかなきみがめぐみのつゆの光に

おなじ頃宮のお前の花の盛りなる見て

なべて世の花の心やはやるらむみ垣の櫻けふさかりなり

布淑より山櫻を折りていまより五日ばかりあらば盛りならむなどかきて

「家づとに手折るばかりは咲きぬれどなべての花は君をこそまて」とありしかへし

一枝に心をやりてながむればなべての花もめのまへのはな

今あらしの谷あひに一すぢおつるすこしの流れをあやまりて戸無瀬瀧といひあへりそのかた書きて歌こへるに

古のとなせの春の瀧なみをあらしの花にみする山水

尋花

柴人のかまとぎさして教へつる山路の花を尋ねてぞいる

見花

散ればこそ咲きもしつらめ櫻花あだなる色と今よりは見じ

花爲春友

花のみぞむかしの春の友かゞみふりぬるかげをあはれとも見よ

○宿ながら　宿に居たまゝで。
○花をつくして　あらゆる花を。
○はやるらむ　心が勇み立つであらう。
○心をやりて　遠く思ひを走らせて。
○あらしの谷　嵐山の谷。
○戸無瀬瀧　山城葛野郡嵐山中の谷々を云ふ。元は大井川中の激しい瀬に名づけたのだが、角倉了意が疏通開拓した時削平せられ消滅したのだ。
○そのかた　その畫。
○かまとぎさして　鎌を中途で研ぎやめて。
○友かゞみ　友と共鏡とにかけた、共鏡は合はせ鏡、かげは鏡の縁語。

山家花

ちらば又たれかまどはむ山かげの軒端の花よ風にしらるな

瀧邊花

おちたぎつ岩根の櫻さきにけりよそには水の增るとや見む

山陰やとなせにたぎつ白玉も嵐のはなのちるかとぞ見る

花根

春ごとにちるとは見れど櫻花つきぬ色香やねにこもるらむ

嵐山の花さかりなる頃雨いたうふりける日かしこに庵住しける道人のありけるもとへ便ありて申し遣はせし

花にふる雨ぞうき世のさがの山まだしかりしも散りは殘らじ

落花

あすまではさてもあらしの山櫻はつかにのこる花の白雲

坐久落花多

陰とひてをしみし程の久しきをちりつむ花の深さにぞしる

中西良恭がみまかりての手向に落花を

なれのみやあだなるよにはさくら花まてかし今ぞ我もちりなむ

○たれかまどはむ　誰が尋ね迷つて來よう。

○便ありて　手紙をやるよいついでがあつて。

○うき世のさがの山　憂世の習はしと、地名の嵯峨とをかけた。

○あらしの山櫻　あらじと嵐山とをかけた。

○陰とひて　花かげを訪れて。

○なれのみや云々　あなた許りがはかないのではない、此のはかない世では櫻花待てよ、今私も散るから。

庵の櫻のいととくちるを見て

明暮にいつか〳〵とまちつけてさきぬる日よりちる櫻かな

彌生望のつどひにかねて見せばやと思ひし櫻の殘りなくちりければ

さけばちる花の心をまだしらでけふと契りし我ぞはかなき

望(もち)まではちりも殘らじ櫻花けふとへとこそいふべかりしを

ちりたるが軒にかゝれるを見て

くもの絲にかゝるを見れば吹きさそふ風の惜しめる花もありけり

如意寺の一木の遲櫻の雪か雲かと見えければのぼりて見るに是れもいたく老樹となれり昔此の花のもとにて彼是遊びける友を思ひ出づるに多くはなき人となれればいとゞ立ちがてにて

共にこし人はなきよにながらへて獨りし見れば花もつゆけし

夕暮殘花

隙の駒しばしとゞまれ夕かげにのりて尋ぬる花も殘れり

宮のおまへにて畫師東洋が馬にのりたる人かけるがあやまちて筆おとしたるあとを何にかせむとて蝶にかきなせるを見て

ふみしだく花に蹄や薫るらむわがのる駒を慕ふこ蝶は

○望　十五夜。

○如意寺　如意嶽にある寺。

○立ちがてにて　立ち去り難くあつて。

○花もつゆけし　花も泣ける如く露を帯びて居る、自分は勿論涙にぬれて。

○夕かげ　夕影と鹿毛とをかけた。袋草紙に出て居る壬生忠見の歌「竹馬は節鹿毛にしていと弱し今夕影に乗りて参らむ」に據つた。

○東洋　東東洋、名は洋、陸奥栗原郡の人、京に出て畫家となる、法眼に叙せられ、天保十年歿。

○寂然集　寂然法師集であらう、藤原頼業は爲忠の子、壹岐守となる、剃髮して寂然と云ひ大原山に遁れた。其の家集。
○あけび　明けと植物の名のあけびとをかけた。あけびは通草、山野に自生する蔓性灌木。若芽及び實を食する。
○上巳興　三月初の巳の日の祭、後に三月三日と定つた。
○人かた　紙にて人の形を作り、自己の罪けがれを負はせて、流れに捨てること上古よりの日本固有の風俗といふ人かたが後世の雛祭と轉じたのだと傳へられて居る。
○たちとまられて　霞がたつにかかる。
○つままし　日を積むと摘むと。
○つらね歌　前の歌の最後の句をとりつくる形式の歌。

花の詞どいふことを

見にきつる花の詞を拾ひおきてにはの櫻のかたみにぞせむ

寂然集にあけびをよめるを見て

昨日といひけふとあけびの若めとりよを過ごすこそはかなかりけれ

二月二十八日雷鳴月令曰是月也日夜分雷乃發聲始電蟄蟲感動啓戸始出云々

千早振かみなりけらし土に巢に籠れる蟲も今はいでよと

上巳興

そのかみの祓にすてし人かたはけふのひゝなを羨みぬべし

野遊

さのみはとかへる家路も春霞たちとまられて野邊に暮しつ

菫

飽かなくに一夜とてこそ寢しものを菫さく野に日をやつまし

鶯は久しうなかぬに雲雀の聲たえず聞ゆればつらね歌

ゆく春を鶯の音は絶えぬるにはかなくも猶なく雲雀かな

なく雲雀このみな鳴きそ暮れてゆく春は惜しめど甲斐なきものを

かひなしといへども我も行く春を惜しとぞ思ふなきぬばかりに

なくばかりをしとは何か思ふべき又こむ春を頼む身ならば

頼まれぬ老の身をもて限りなき春ををしむもかつははかなし

暮春の頃伊勢の宣長がのぼれりとてとひきつる後に經亮につけて「思はずも都ながらに和歌の浦の木高き松をけふ見つるかも」「みるか君ひむがし山の花の春月の秋をも我が物にして」といひおこされし是れがかへし元たりにあとらへてやりし

春ごとに松は緑もそへてけり年のみ高きわれやなになり

わがものの君におくらで悔しきは野山をいるゝ庵のあけくれ

暮春

ちる花にましてをしきは老が身の待ちえし春の別れなりけり

夏歌

新樹のころ雨ふる日

さく花にそめし心もひとさかり青葉にうつる雨のぬれ色

葵

神まつるけふの葵はおほかたにおふる野山のくさ木ともなし

○都ながらに　思はず見るとみやこをかけた。

○あとらへて　依頼して。

○なになり　何でもない。

○神まつるけふの葵は　賀茂神社の祭。四月中の酉の日、葵祭。

○かつらの種　月世界には大きな桂樹が茂つて居ると云ふ支那の傳說。
○おひかはりけむ　生じ變つたのであらう。

○人わらはれに　世の笑ひ草に。

○うひたたぬ　出始めない。

○こちこせ山　此方へ越せにかけた。

月前卯花

たじろかぬ影にぞしろき有明の月はかたぶく軒のうのはな

卯花似月

てる月の光にまがふ卯の花はかつらの種やおひかはりけむ

よむべ夏たちぬ郭公は立夏日鳴必定のよし古きものに見えたり

ほとゝぎす夜半になきけむ初聲をいづくの誰か聞き初めつらむ

待郭公

時鳥我のみきかでいつまでか人わらはれに初音またまし

また

郭公まだうひたたぬ山もあらじなどかほのにも聲の聞えぬ

郭公久友

いくつ夏かたらひなれて子規ともなき老の友となるらむ

五月郭公

さみだれの雨間に來ゐて郭公雲より上のまつになくなり

己知許勢山

ねたなかばこちこせ山の郭公まつかひなしと世にないはれそ

蜂岡寺にありし程五月五日に

古寺のあやめの露に長き世をかけしやいつの契りなりけむ

ある年の五月に備前の知栗が餞に

軒にふくけふの菖蒲の香にめでて心のとまるかりの宿かな

薬玉を

けふといへば誰も千年をたゝむきにかくる薬の玉の緒ぞこれ

年々にかくるくすりのたまの緒は命をつげる縷とこそなれ

早苗

みだえせぬ谷の小川をせき入れて神田のさ苗けふぞ植ゑつる

閑庭橘

おきあまる露に匂ひやこぼるらむ風もおとせぬ宿の橘

さみだれそむる頃昔人の塚あるかたを見やりて

あはでふる妹があたりを眺むれば五月の雨の雲たちのぼる

河五月雨

岩とよみ波うち散りてさみだれの水花しるき賀茂の山川

照射

○古寺のあやめの云々　ながき、かけし、皆あやめの縁語。
○薬玉　五月端午に薬草を玉にして、屋内にかける、疫病を近づけぬ禁厭。
○たゝむきに　千年を積みたゝむき腕こをかけた。
○みだえせぬ　水の絶えない。
○神田　神領の田。

まつ鹿のよるともなきを照射して山の雫にたちぞぬれぬる

いくよしもなつ野の露の身の程を思ひわかでや照射さすらむ

田家夏

暇なみ麥かり入ればとりわけむ門田のさ苗おいもこそすれ

夏月涼

なつ衣うすき袂にかげもりて涼しき夜半の月ぞふけゆく

鵲飛山月曙

烏鵲(かさゝぎ)のとびめぐるまをまちもあへず嶺の梢の月ぞあけゆく

月のいたく傾きたるに

夏の月かたぶく見れば端居して思ひしよりもさ夜更けにけり

ある夜おきいでたるに西南の空いたうあかかりければ

山崎のをこして雲にうつろふは津の國人の火をやあやまつ

松が崎

冰室もる山かげすゞしまつが崎ちとせの夏はこゝに過さむ

泉

いつしかと我がまつ秋は山陰の泉の水にすみけるものを

○なつ野　無いと夏とをかけた。

○山崎のをこして　山崎の尾を越して、山の裾を越して。山崎は山城乙訓郡の南端。

○松が崎　地名と松とをかけ、千年の夏と言つた。山城愛宕郡松ヶ崎村。

○すみけるものを　水の澄むと、秋の澄むと。

松下泉

底にしもふきや通ふと見えつるは松風ながらうつすま清水

水月如秋

ふけやすき影ばかりこそ夏の夜の水面は秋の月の涼しさ

風に靡く柳の涼しげなるを見くらして

風になびく柳を見つゝ夏の日の永きもしらでけふも暮れぬる

遠山の夕立をうちながむるに風あわたゞしくふきてうちくらがるに

夕立は今ふり來めりをち方の雨のあしこそ見えずなりぬれ

また栗田の夕日さすを

麓よりかげろひゆきて栗田山峯の夕日のかげぞ涼しき

扇不離手

此のごろの扇は冬の火桶にて人の手をこそ離れざりけれ

日盛りに來たる人をとゞむとて

風たえて草もゆるがぬ夏の野のあつき盛りはゆきかひなせそ

物へまかるに瓜をかぞへありく翁を見て

瓜作る野畑の賤に言とはむ思ふがごとはなるやならずや

○今ふり來めり　雨のあしにかけた。

○栗田山　淡きと栗田山とかけた

○冬の火桶にて　冬の火鉢と同樣で。

宮より賜はれる水無月の御題暑と池とを

ながめやる野草は萎えて天つ日のてりはたゝける影の暑けさ

時わかず緑をつみてそめいろの山をうつせる園の池水

久しう病にふしたる六月のはじめにや手づから植ゑおきし朝顔のさきたるを見て

朝顔のまだき咲きたる花見れば秋にもあへる心地こそすれ

ふる年より左臂いたみて夜晝やすむにひまなく苦しかりければ

老いぬれば弓をもとらぬ左手のやといふばかり痛むくるしさ

同じ二十日ばかりにやありけむやみふしたる牀下より蛬の出でたるがあはれに見ゆるを

水無月にわが牀いづるきり〴〵す命しあらば來む秋もとへ

有明月を見て

みにぞしむ今年もなかばみなづきの有明の月の影薄き空

同じ月の末つ方いと暑かりし日夕つけて風ふきたつをり頭もたげ見出して

いつしかと我が松柳うごかしてそよや夕かぜふきたちぬなり

してりはたゝける　非常に照りつける。

○そめいろの　蘇迷盧、佛説に依る山、須彌山と同じ。

○左手のやといふばかり　左手は弓手とも云ひて弓把る手である。やは感歎詞と矢とをかけた。

○命しあらば　生命あらば。

○なかばみなづきの　今年の半ばも皆盡きると水無月とかけた。
○夕つけて　夕方になつて。
○そよや　そよ〳〵の意と、そりやと云ふ意の感歎詞とをかけた。新古今集卷四「いつしかと荻の葉むけのかたよりにそゝや秋とぞ風も聞ゆる」などを思ひ寄せたのである。

夏祓

惜しとしも思はば神やうけざらむ祓へて捨つるけふの月日の

秋歌

荻風告秋

けさの朝け秋來ぬなりと吹く風にそよと答ふる庭のをぎ原

二日の月を見て

秋たちて二日の月の影もみつまだ薄ぐれの霧のまよひに

七日の暮つ方

あはぬまのうきせにたへて天の川けふの渡りはあるよなりけり

けふの手向を魚によせてよめる中にいしぶしを

天の川淺瀬にすまふ石ぶしのふしもあへぬにあけぬ此の夜は

鮒を

引く綱の目にこそ見えね國もせにあふなをとれるけふの棚機

露

風のまをおのが光とあき草の葉末にみがく露のしら玉

○二日の月　秋立ちて二日經しと、二日月とをかけた。

○うきせ　いやな事と、瀬とをかけた。

○いしぶし　石伏、石斑魚。鰍の異稱。山間の溪流に產する淡水魚。

○國もせに　國中に。

○あふなをとれる　逢ふ名をとれる、戀人に逢ふと云ふ評判をとれる、中に鮒を詠み込んだのである。ひく、綱の目、鮒の緣語。

○風のまを　風の吹かぬ間を。

○おのが光と　自分の命に光つて

○あだものの　移り變りやすい物の。

○かざしの玉　女郎花に擬人法を用ゐ、そのさせる簪の玉と見た。

○上におきて　題句に用ゐた意。

○まだきなふしそ　早くから伏すな。

○面おこしの　面目を施す、光栄ある。前の伏すと照應した語。

野も山もおきて千ぐさにそめなせば露こそ秋のもとつ色なれ

太秦にありし時露ふかきあした

照らす日にきらめく露をけさ見れば玉もて飾る林なりけり

苔露

綠なる苔にしおけばあだものの露もときはの色と見えつゝ

翫女郎花露

女郎花かざしの玉の亂るやと心おかるゝつゆのあさ風

萩宴しける時はぎあそびといふことを上におきて

花ざかりをり過さじと此の秋もむれてとはるゝけふの嬉しさ

菊はまだ匂ひもそめず酒くみて秋のこゝろを萩に忘れむ

あすよりはちらばちらなむ萩の花思ふ人どもけふし見つれば

袖たれて植ゑしかひある萩なれや花さくごとに人の訪ひきて

日も高しまだきなふしそ秋萩の面おこしの今日にやはあらぬ

宮城野萩

みやぎ野の萩咲きぬらし秋風にほのかに鹿の聲の聞ゆる

鄰槿

中垣をこえてさけれぱ朝がほの花のあるじと我はなりぬる

朝顔のかれたるを見て

こむ秋も猶世にあらば朝顔の花をはかなと又こそは見め

刈萱

たが秋の思ひを名にはかる萱のつがねもあへず打ちみだるらむ

蓼

秋もはやくれなゐ深き水たでにうつる月日の程も見えつゝ

旨苗が草花にそへて「我は只折りこしのみぞ秋の野の花の千種は君わけて見よ」とよみて見せければ

手折りこし千種の花ぞわがためにわけし心のいろは見せける

夜蟲

なきよりて夜寒なつげそ甚わがきぬつゞる妹もあらなくに

よな／＼蟲の聲そふを

月清く風の涼しきゆふべ／＼なきたつ蟲の數ぞそひゆく

鈴蟲のなくを聞きて

鈴蟲の鳴きからしたる聲すなり法の會さむき秋の古寺

○中垣を　間をへだてる垣を。

○かる萱の　名を借るにかけた。

○つがねもあへず云々　たばねも終らず亂れると云ふのと、心の亂れるとにかけた。

○秋もはやくれなゐ深き　秋もはや暮れるにかけた。

○わけし心の　心をいろ／＼とこめたと、草を分けるとにかけた。

○きぬつゞる　きり／＼す（現代の蟋蟀）はきぬつゞると鳴くと傳へられて居る。

○そひゆく　加はり行く。增し行く。

月夜のみ何かこちけむ蟲の聲荻ふく風も老はそへけり

寒雁聲旅客愁至

あさ寒き鴈のなくねに夢さめて更にはるけき旅寝をぞ思ふ

月に鴈のたつかた

月清き入江のあしの秋風に翼みだれて鴈のたつ見ゆ

峯鹿

月のいる高嶺の松の下はれてたちどもさやに鹿ぞ鳴くなる

葉月の頃雲深きあした

白雲の深きところの名なりけり都の西のうづまさの里

霧

水上のきりをさしゆく舟人は天のかはとにいるかとや思ふ

秋夕

などやかく深きあはれのこもるらむ只薄ぎりの秋の夕暮

野分のやうにあらましく吹きたる風の音やみたるをながめて

見るが中に秋風たかくなりにけり松は靡かで雲のみぞ飛ぶ

○たちどもさやに　鹿の立てる所もはつきり見えて。

○うづまさ　雲のうづ高きこと、地名とをかけた。

○天のかはと　天の河門、天の河と同じい。門は水の狹い所。

○あらましく　荒く。

秋風の山

かげ弱き夕日も峯にいり果ててうすぎりなびく秋風の山

秋田

我がせこがおりたちぬれてつくれりし早稲田の初穂ゆきて早みむ

田家幽思

もりなれし秋田の庵の袖の露消えなむのちは誰かかゝらむ

秋夜

徒らにねてや明かさむ見よとてや秋の夜すがら月は照るらむ

月

木の間もる月かげ清し袖にうつる松葉の数もかぞふばかりに

葎おひてあれたる宿ぞ殊更に月のひかりはすみまさりける

聲たててみ空の月にうかれ鳥翅なき身をあくがらせつる

うづまさにありしほど定静が消息して「すみなれし袖も今宵のいかならむふりにし寺の露の月かげ」とありけるかへしに

月やどる林はつゆにうづまさの木草も袖もわかれざりしか

○もりなれし　漏り馴れた。

○すみまさりける　澄むと住むと

○すみなれし　墨と住みとかけた、寺であるから墨染衣の意を含ませたのである。ふりは袖を振ると古さをかけた。

○わかれざりしか　木草も袖も皆ひとしく露に埋められて、區別が出來なかつたよ。

鳥のねもけうとき秋の山ざとにひとりぞみつる夜はの月影

月も世の外とてとはぬものならば何にか堪へむ秋のやまざと

月下にみをつくしたてるかた

水尾串のかげのみ隈とてる月は秋の最中のしるしなりけり

雨後月さやかなるに

晴るゝ夜もこのまに殘る薄雲を月にみせたる太秦の森

又ある夜更けて

深き夜の松の葉しろくおく霜はいでくる月のうつるなりけり

よな／＼月の出でがてなるに

慰めし老のうれへぞまさりけるよな／＼遲くいづる月かげ

庵もる月の清きをふくるまで詠めて

あばらなる庵ならずばよな／＼の月と共にはいかですむべき

老後人々と歌よみけるに月を

いかでかと思ひしものを諸共に又この秋の月を見るかな

夜ふくるまで月を見て故人を思ひいでて

○けうとき　玆では物凄いとか、恐ろしいとかの意。

○月下にみをつくし云々　月に水先案内のための澪標立てる畫。

○かげのみ隈と　水尾串の影ばかりを陰影として。

○月の出でがてなるに　月の出にくさうなのに。十五夜以後月がだんだん遲く出るからである。

○あばらなる　荒れたる。

○いかでかと　老齡であるので今年の月が眺められるか知らんと。

あきの月見しよの友をかぞふれば老となるまであるは少なし

山月

遠山の松のすがたも現はれてなかばさしいづる峯の月影

野宿見月

さはるべき限なき野邊に宿かりて心のかぎり月をこそ見れ

橋月

山里にかけても人のかけはせで月ふけ渡るまへのたな橋

月前河

流れてのよにもかくこそ秋の月すみて久しき白河の水

月照波心一顆珠

よる光る玉やよせくと打ちみれば我をあざむく波のつきかげ

名所月を題にてよめる中に

よる浪にみがく玉江は秋の夜の月を宿せる名にこそ有りけれ

旅のうさなぐさめかねて姨捨の夜寒の月をまた見つるかな

月夜堤の家にて千鳥の鳴くを

ふくる夜の河音すみて秋寒き月のしらすに千鳥なくなり

○さはるべき　さはりとなるべき

○月ふけ渡る　遠くにふけ行くを、橋を渡るにかけた。

○たな橋　棚橋。板を棚の如くのせた假橋。

○玉江　長門阿武郡阿武川の川口、攝津野田の玉川も玉江と云ふが、此の歌は海邊である。

○なぐさめかねて　古今集卷十七「我が心慰めかねつ更科や姨捨山にてる月を見て」によつた。信濃更科郡姨捨山。

○月のしらすに　月の白いと白洲をかけた。

さやかなる秋の一夜の空の月つねにかくてる物とやは思ふ

九月十三夜いとよう晴れたれば秋毎に歌よみけることを思ひ出でて又十三首よみける中に

もみぢせぬ月の桂も浮雲のしぐれし跡ぞてり増りける

ふけわたる野寺の鐘のこゑすみて瓦の松に月ぞ傾く

あふ事のなみだに月は曇れどもさやけき影といひつゝぞ見る

秋かけてたのめし折に思ひきやなみこす袖の月を見むとは

とてもねぬ浪の枕をかゝる夜の月にあかさば何か恨みむ

仲秋清光なればこよひ曇れりあまた年を思ふに二夜明らかなる事はいとなり世の樣も然りなど思ひて

名をとぐる二夜の月の稀なるに人の上をもてらしてぞ見る

湖月

衣うつかた田の浦の月かげに白練たゝむなみの秋風

沼月

雲霧はあらしにはれてかくれぬのみ隈あらはにやどる月影

〔十〕三首よみける云々　十三夜に因んだのであらう。

○瓦の松に　白樂天驪宮高の詩の「牆有衣兮瓦有松」に據つた。瓦に生じた苔の一種と見る説がよからう。

○なみこす袖　末の松山の成句を思ひ寄せた。涙にぬらす袖。

○仲秋清光なれば　八月十五夜の月は晴れて照れば。

○こよひ曇れり　九月十三夜即ち後の月が曇つた。

○二夜の月　八月十五夜と九月十三夜と。

○衣うつかた田　衣うつ板の堅いにかけた。近江堅田。うらは衣の縁語。

○白練たゝむ　白い練絹を疊むやうに浪、衣うつの縁語。

○かくれぬ　隱れないと隱沼とをかけた。

友かたらひて大井にて月見侍りけるに

川音はたかねの松にひゞきあひて嵐の山に月ぞかたぶく

月前秋風

すむ月にさはらぬほどの浮雲もなほのこさじと秋風ぞ吹く

月前白菊

月清み葉ごとの露にうつろひてみな白菊の花とみえつゝ

曉天殘月

曉のかねひゞくなりのこるとも今いくほどかありあけのかげ

關路曉月

せき越えばかへり見すとも隔てなむ都の空にのこる月かげ

わが今くふものとて桂より麥おくりたるが黑きにもあらねど猶しらげさせむと女のわらは二人につかす月の夜なりければ其のさまをかしかりけるに

久方のつきにうのつく桂むぎ毛の末ばかりしらげてを見む

詠舊詞歌

山のはに月かたぶきて大井川河音淸し夜やふけぬらむ

○隔てなむ　隔は人を隔てるものであるから。
○桂より麥おくりたるが云々　例の門人で桂に住める小川布淑からであらう。
○うのつく　月中に玉兎杵をつくと云ふ支那傳說。
○桂むぎ　月の桂にかけた。
○毛の末ばかり　少しばかり、毛はう(兎)の緣語。

○よごえにこえむ　夜越えで越さう。
○飛ぶ鳥の　あすかの枕詞。飛鳥は大和高市郡。
○若ゆてふ　若やぐと云ふ。
○よをのこす笆の月　夜を隔て殘す籬の月の。
○かげせぬ　影をささぬ、即ち訪づれぬ。
○あまの數多も　あまの音の緩速し。

霧しれて[illegible]よごえにこえむ宿に[illegible]
すみなれしたれ眺むらむ飛ぶ鳥のあすかの里の秋の夕暮
露すがる萩がえよりもたをやめの裳引の姿花や嫉まむ

菊のうた

若ゆてふ名をな頼みそけふ毎の菊をつみてぞ身は老いにける
雨にぬれ日にてらされてけふの菊久にへてこそ花は咲きしか

菊花曉芳

よをのこす笆の月のうすぎりにしめりて匂ふにはのしら菊

對菊惜秋

冬のきてなほにほふとも白菊のときなる秋の色は殘らじ

菊閑中友

きくならで人はかげせぬ宿なれば花も我をや友と見るらむ

海邊擣衣

衣うつ音もまどほに聞ゆなりあまの數多も見えぬあたりは

太秦にて園の柿を都なる人におくるに

色づきしそのふの柿を見ても知れ夜寒になれる秋の山ざと

雨のはれゆくあした

ねぬる夜の雨のなごりの朝霧に木々の錦を包みてぞ見る

又あるあした時雨やふると思へば木々の雫なるを見て

うづまさや深き林の夜の霜を朝日におつるしづくにぞしる

しぐれがちなる頃若き人々北山わたりの紅葉見むとて行きたりしそなたざまを見れば雲まよひしぐるらむと見ゆるに

北山のやしほの紅葉見にゆきし人は時雨にぬれぬらむかも

思ふことある頃紅葉を

こけれどもさて久ならじあだ物の露の染めたる木々のもみぢ葉

文月十日の夕さりつ方よめる

波のへをこぎくと思へば磯際に近くなるらし松のとたかし

これは病いとあつしうなりたるのちゆかをはしつ方にかへむとて褥にゐながら人に助けられうつろふが舟にのれる心地すとて例の松に秋風の聞ゆるまゝによめるになむかくてくるつあした身まかられたりけり

冬歌

○久ならじ　永く保つものではあるまい。

○ゆかをはしつ方に　寝牀を端の方に。

○くるつあした　その翌日。

冬きぬとしぐれそめたる程よりもふりゆく老の袖はぬれけり

關時雨

ふり過ぐる關のわらやのむら時雨とまるは軒の雫なりけり

旅宿時雨

あはれにもことゝひなるゝ時雨かなよな／＼變る草の枕を

しぐるともなきに落葉のぬれたるを見て

夕時雨さしてふるとも思はぬを庭の落葉の色ぞぬれたる

さわたる雲と云ふ詞を

一なびきさわたる雲や風はやみとほ山めぐる時雨なるらむ

夜ふけて打ちしぐれたるに

よを深みしぐれにけらし山陰のかや屋が軒にしづく落つなり

宮の御當座に松なびきて風はげしく薄もみぢ殘れるかたを

ふきしをる松風早しそめのこす秋の木の葉もさてやちりなむ

落葉

いにし秋見るべき契りわがあれやちりても風の蔦のもみぢ葉

○ふりゆく　降り行くと古り行くとかけた。○とまるは　關の緣語、たまるの意。

○さわたる雲　渡る雲、行く雲、さは接頭語。

○ふきしをる　吹き撓ます。

○見るべき契りわがあれや　見るべき因緣が我にあればか。○風の蔦のもみぢ葉　風の傳はるにかけた。

水結冰

さえあれし夜の嵐のあと見えて波のすがたにこほる池みづ

冰

むすぶ湯の雫さへこそこほりけれけさや寒さのかぎりなるらむ

波洗冰不定

いかによせいかに洗へば山川のきし根の冰なみにくだくる

霜

日にけぶる葦屋の軒のくちめにぞ猶きえがてに殘る朝霜

ふるき詞を題にてよめる時

夕ごりの霜おきぬとは月かげを重げにやどす尾花にぞしる

池寒蘆

池もせに折れふしてけり津の國のこやなにたてる蘆の冬枯

しも月

烏鵲のはしのへ白くおく霜によわたる月のかげぞ輝く

秋はすべて月なく曇りがちなりしに冬になりていとさやけかりければ

○夕ごり　夕凝、露霜などの夕暮に凝結するを云ふ。

○こやなにたてる　攝津の昆陽の池と、これや名に立てると掛けた津の國の難波の蘆と名に立てるの意である。

○烏鵲のはしのへ白く　天の川を烏鵲が橋となる支那傳説から宮中の階段をも云ふ。

一種、冬でも花が開く。

○きの國　來と紀とかけた。むろの郡、室と牟婁とかけた。

○千代と聞ゆる　千鳥の啼く聲と、千代を經る松であるからだ。

○板間風　板のすき間から入る風
○あさて小衾　麻でつくつた衾。
○佐野渡　紀伊東牟婁郡、三輪崎の大字として殘つて居る。

此の冬もなほながらへて年の内に春のきざせし梅をこそみれ

牟婁郡

日のめぐる南のはてにきの國やむろの郡はふゆものどけし

夕千鳥

ゆふされば沖つ汐風ふきあれて寒き浦わに千鳥なくなり

濱千鳥

住吉のはまかぜこしてなく千鳥松のうへにぞ千代と聞ゆる

冬夜難曙

いく度か時雨霰にねざめてもなほあけがたき冬の夜の空

衾

板間風いたくなふきそ重ねてもあさて小衾下さゆる夜に

佐野渡

汐高くふゞきに曇るみわが崎さのの渡はけふやたゆらむ

初雪のあした

まちもあへずとく消えぬべき老が身は猶珍らしきけさの初雪

消えぬべき身のながらへて見ることも契りありけるけさの初ゆき

浅　雪

山かげのましば松葉の上にのみふるかとみゆるけさの初雪

雪深きあした

ふりおもる松は嵐にまかせおきて軒の雪かく山もとのさと

夜ふけて松風のよわれるに

ふきかくる雪や烈しき山風に咽ぶ松葉の聲のよわれる

かきくらしふる雪を見るが中に七八寸ばかりになりぬ文机によりてあたりに火桶などおけど寒さ堪へがたう墨すればこほり筆とればこゞえておつ昔もかかる事はありしかどかうは寒からざりしなど思ひつゞけて

昔へもかくやは雪にたへざりしふりぬる身こそ苦しかりけれ

ふるき世を思ひいでて

白雪のきえにし友を数ふればみはあらぬ世にふる心地する

雪の日徹義が「けさはさぞ思ひいでてや忍ぶらむ八十に近き雪のふること」といへる返し

○ましば　眞柴、雜木を云ふ。

○松は嵐にまかせ置きて　松の積雪は嵐の吹き落すに任せて置いて

○昔へもかくやは云々　昔もこんなに雪に堪へられなかつたか知らん、昔はそれ程でもなかつた。これも老境に入つた爲であらう。古り老いし身が實に苦しいよ。ふりは降りにかけた。

○白雪の　きえの枕詞。

○ふる心地　古る雪の緣語、降るにかゝる。

雪にふしたる竹の林を

ふりそひて竹の林もうづもれぬつくらぬ雪の山とみるまで

遠山雪

さえくれし昨日の雪の跡なれやあけゆくをちの峯の白雪

梅の匂へるに

梅が香の匂はさりせば雪の中に近づく春を何にしらまし

年内立春のあした鶯のうちとけて鳴くを

梅もさき鶯もなき年のうちに春たつことのいちじるきかな

世に空也上人のをしへとかいひて有髪の人の墨衣きてこんぐ打ち瓢をたたき無常迅速をとなへ年の暮に町々だりうたひありくを聞きて

さらでだにとまらぬ年をいとゞしくいそがしたつる鉦の聲かな

年の暮に布淑が太秦のすみかをとひて「いつはあれど物にまぎれぬ山里の年の暮こそうらやましけれ」とよめるかへし

とひきつる君にまぎれて山里の年のをしさはしばし忘れぬ

除夜に

春のくる曉までは今年ぞとをしむ夜さへにいたく更けぬる

○さえくれし　冴え暮れし。

○世に空也上人のをしへ云々　天暦頃空也上人光勝の創めた空也念佛をさす。和讃念佛等を面白く唱へ踊るのである。

○こんぐ　金鼓、伏鉦の一種。

○言のなぐさを　言葉の慰め。氣やすめ言葉。

○かた戀　片戀、此方ばかり思ふ戀。

○岩本たぎりゆく水の　岩に激して行く水の如く。

戀歌

古人のよめる詞を題にてよみける中に

誠とや聞きなされましつれなくば戀しといふは言のなぐさを

戀ふといへばこふといらふる山彦をつれなき人に聞かせてしがな

戀の歌とてよめる

ひきかへす道をもしらで戀の山深くはなどか迷ひいりけむ

忍ぶともよにあることの隱れなくもれなむ折のうさをこそ思へ

入夜戀佳妓

暮るゝまで見し舞姫の面かげの目にさへぎりてよるもねられず

片戀

つれなきは心みるやと思ふまに我がかた戀のとしもへにけり

忍戀

心さへ身にそはぬかと思ふまでつゝむ涙の袖をもりぬる

いはばえに岩本たぎりゆく水のむせかへるとも知らせてしがな

不言戀

○くる夜もなきに　來ると葛を繰るとかけた。

○はたつもり　畠守。令法の異名、りやうぶは小さい花の咲く落葉小喬木、ゆきふだとも云ふ。また積つたならばとかけた。

○このめ　此の眼と木の芽。

○おき別れしを　起き別れと、露を置くとかけた。

○露のまがき　露の間と、ませ垣とをかけた。

○うきになし果てて云々　忘れられる自分だけの憂き事にしてしまつて。うき、かけじ、浪の緣語。浦浪は恨みの意を含む。

○阿胡根浦　紀伊日高郡灘浦を云ふ。萬葉集卷一「吾が欲りし兒島は見しを底深き阿胡根の浦の珠ぞ拾はぬ」に據つた。玉は戀人をさす。

人にしらるゝ

奥山のしげきが下にはふ葛のくる夜もなきに顯はれにけり

はたつもり

あはぬ夜のはたつもりなばこのめより落つる涙は雨にまさらむ

ふせり

いたづらに獨りしぬれば長き夜の二人となればなどや短き

泣きて別れし

うきながらいつかはきかむ時鳥なきて別れしきぬぐの空

後朝隱戀

けさこそはおき別れしを朝顔の露のまがきになど隱るらむ

披書恨戀

さりともとなどまちつらむ見る度につらさ加はる水莖の跡

恨身戀

忘らるゝ我が身のうきになし果てて人にはかけじ袖のうら浪

阿胡根浦

そこ深きあこ根の浦のあこや玉かづきていつか我が玉にせむ

貫河

ぬき川のせゞの白玉かぞふともおつる涙にいかでまさらむ

諸よせの濱

身のうきにそふるつらさをよそに見ば浪と風との諸よせの濱

榎津

たのめおきて逢ふ夜となれば津の國のいなつにたてるまつかひもなし

絶間池

池の名の絶間久しく成りぬるはみづやさながらかれむとすらむ

戀の森

あはでふる胸のなげきのよに生ひて戀の森とはなるにあるらむ

寄月恨戀

わが中の浪こす袖の月見てもたのめし人のおもかげぞたつ

寄川戀

流れてと頼みがたきを川とみて渡らぬ中ぞ悔しかりける

うつゝには逢瀬もあらじ播磨なる夢さき川や頼みわたらむ

○ぬき川　玉を貫くにかけた。美濃本巣郡糸貫川を貫川とも云ふ。長良川に入る川。

○諸よせの濱　但馬美方郡諸寄濱。浪と風とが諸共に寄せるやうなものたにかけた。

○戀の森　播磨飾磨郡戀森原を云ふか。

○流れてと云々　後撰集戀歌「かはと見て渡らぬ中に流るゝはいはで物思ふ涙なりけり」に據つた。かはは彼は戀人と見て之川をかけた。流れては茲では自分になびいての意。

○夢さき川　播磨飾磨郡夢前川。

人めのみおほみや近き耳敏川わたらぬ中も名にやながれむ

寄筧戀

垣によす

我が袖は竹のかけひのひしげつゝつゝむ涙のよにもりにけり

思ふことやぶの芝垣かきこめて幾年月をへだてきぬらむ

蝶によす

色ごとにうつるこ蝶のとぶを見て花ならぬ身をかこちてぞふる

貝によす

難波女が刈る藻にまじるうつせ貝みのなき後も顯はれやせむ

いろ／＼に思ひくだけどかたし貝かたしやあはむ末の契りは

綱によす

思ひのみまさきの綱のよりあはむ契りをいつとまつぞ苦しき

桂によす

てる月の桂はひとの何なれやかげ見るからに袖のつゆけき

插頭によす

何にわが心そめけむ末つひに人のかざしとなれる櫻を

○人めのみおほみ　人目のみ多いと、近江にかけた。
○耳敏川云々　耳がさとく、契らぬうちに浮名が流れよう。耳敏川は京都朱雀門前二條の南、山城であるから、近江に近くと云つたのだ。
○よにもりにけり　よ、もり、共に竹の縁語。
○かきこめて　垣の音の繰返し、かくしつゝみ置いて。
○うつせ貝　身のない空貝を云ふ、身のなきの序詞。
○かたし貝　片貝。貝殻の一片。末の契りは難いにかけた。
○まさきの綱　まさるにかけた。まさきの葛の綱。
○よりあはむ　綱の縁語、寄り逢はんと縒り合はんと。
○何なれや　何であるか知らぬが。
○人のかざしと　人妻となる意を含む。

玉によす

ひとめみし妹がかざしの白珠のしらじなよそに心かくとも

雑歌

山

花もみぢいづくはあれど遠からぬ嵯峨松尾のはるあきの山

雲かゝる山や思はむいたづらに年のみ積る塵ひぢの身を

林幽不逢人

ふみわくる我より先の跡もなし朽葉にうづむ木々の下みち

路

花の袖錦の袂めもあやに都の春ぞ道もさりあへぬ

山家

岩がねのこゞしき山の下庵も憂世のさがにかへてこそすめ

都びと訪ひくもしらで悔しくぞうしろの山の爪木こりつる

山家雨

山かげの軒端の木末雲とぢてにはの落葉に雨ぞこぼるゝ

○白珠のしらじな　しらの音の繰返し。かくは珠の縁語。

○いづくはあれど云々　何處にもすぐれた所があるけれど。嵯峨山は春の花、松尾山は秋の紅葉。
○雲かゝる云々　かゝる、つもる皆塵の枕詞。

○こゞしき　險峻な。
○憂世のさがに　憂世の習はしにかへて、遁世して。嵯峨にかけた。

〇よるの雲云々　夜の雲、寄るこかけて別るゝの對稱をなして居る

〇そながら云々　それではあるが故鄕らしくなくなつてしまつたよ

〇そもあらずこそ　それもなく、見えなくなり。

〇をりすぎず　時季を失せず。

〇おひそひて　生ひ加はつて。

山家夕

けふの日も軒端の峯に入りはてて麓のくもに鐘ひゞくなり

山眺望

よるの雲わかるゝ山の際見えてやゝあらはるゝ峯の松原

遠村眺望

夕日さす里のかきねにうなゐ子が野飼の犢ひき歸るみゆ

故鄕

故鄕はそながらあらずなりにけり昔のひとの影し見えねば

古鄕木

植ゑて見し木立忘れぬ宿の松そもあらずこそ陰ふりにけれ

宮樹陰相連

おひそひて幾春秋をふる宮の木の下道は雨ももらさず

うづまさにすめる頃

今は世をうづまさ人になりはてて都は雲のよそにのみこそ

其のほど定峯がとひこしに犬の吠えければ

尋ねくる人め稀なるすみかとは晝なく犬の聲にてもしれ

蕭寺

いつまでか人はをりけむあか棚の樒の花の枯れて殘れる

岡崎にうつりて後鄰に人の笑ふを聞きて

何事を笑ふと我はしらねどもなく聲よりは聞きよかりけり

夜もすがら風ふきあれねられざりけるに

山風のふきもてゆする草の庵は露まどろまでおきあかしつる

新日吉御所十二景

陀峯彩霞

世にこえてたてるあみだの峯なれやいとゝく春の色に霞める

平林春花

をりすぎず咲けるしげみの花みれば春の光は木がくれもなし

青田亂蛙

はる山をうつす水田になく蛙聲の色めも分かれざりけり

西山夏雲

そなたよりふく風涼し大江山たかねの雲やゆふだちのそら

喬松啼鵑

○あか棚　佛に奉る水など載せて置く棚。あかは水の梵語。

○新日吉御所　京都の東郊岡崎、新熊野神社のほとりに在る。

○あみだの峯　京都東山の一峯、豐國山の絕頂。

木だかきは杜がまつとてまつやなくやま時鳥いづさいるさに

曲塢秋草

小田ならばくろといふべき縦横に錦を織れる秋くさのはな

茅檐明月

いさぎよきかや屋が軒とみ空ゆく月も光を盡してぞすむ

虹橋丹楓

染め渡す紅葉の上のそり橋をよそめにかけば虹かとやみむ

暁苑積雪

山深く見しよをぞ思ふあかほしの今も輝くみ園生の雪

翠池浮鴨

うく鴨の上毛の霜はなか〱に緑のいけのけしきをぞそふ

蕭寺清鐘

濁りなき心をさへも洗ふめり清水でらの鐘のひゞきに

竹窗夜雨

降りおもる竹のしづくも音ふけて雨靜かなるよるのやままど

わらはやみおこたりて年へてすみしうづまさをたち いづるとて

○いづさいるさに　出る際、入るさは。

○小田ならば云々　田ならあぜとも称す可き縦横の畦に。

○み空ゆく　見るにかけた。すむは住むと澄むとかけた。

○よそめにかけば　よそ目で見れば。

○洗ふめり　清水の縁語。

おいて身の今はといらむ山里をうかれいづるや猶わらは病

又ある時に

隱れがは心の中にあるものを何かうき世の山を求めむ

松

よゝたえずつもりにしげる浦松のふりせぬ色や言の葉の種

珍らしき色ともなきをあかず思ふ松やいかなる緣なるらむ

住吉のおまへの濱の松原を

ふりて世にかひあるものは住吉のおまへの濱の松のむらだち

竹

空しきをおのが心のみさをにて千代ふる竹の色もかしこし

岩のもとに竹生ひたるかた

動きなき岩ほに根さすくれ竹は久しき御代のためしなるべし

家つくりてうつれるに酒をつかはすとて

吳竹の一葉の露も萬世の秋をかけつとくみてしらなむ

ある人の賀に竹の名に

年毎に生ひそふ竹の葉をしげみ重なる千代は君ぞかぞへむ

○猶わらは病　やはりまだ子供らしいにかけた。わらは病は瘧、今のまらりやの如き病氣。

○つもりにしげる　津守、攝津の地名。積るにかけた。

○空しきを　心の空しきと、竹の幹の中のからなることをかけた。

○みさを　竹の緣語。節操を守る事。

○吳竹の一葉の露　酒の異名を笹と云ふのに思ひ寄せた。

馬

百重原

痩馬の重荷にこづけそへて猶鞭をおふする世にこそ有りけれ

招坂

思ふこともゝへが原の旅ねには露ところせき片しきの袖

松谷

名にしおはば夕日をかへせ招坂さかしき山路わけむ子のため

手須佐比池

はて終にたきそへむ身を遲しとてたがまつ谷の煙なるらむ

水底橋

うなゐらがたのきのさいをはこびつゝ堀りてたゝへし手すさびの池

長井浦

河かみもあはれをかけよ老の浪こえてくちゆく水底のはし

化大野

舟とめてふかぬ追手をまつほどに長居の浦に月なみぞたつ

人の世はあだの大野の露のまを何にはかなく思ひ亂れむ

○重荷にこづけ　俗諺。不幸又は困難に、又更に不幸或は困難を加へしむるを云ふ。小づけは小さき荷物をつける意。
○もゝへが原　思ふ事數多くにかかる。
○招坂　夕日を再び招き返せにかけた。
○まつ谷　待つにかけた。上野吾妻郡松谷。
○手須佐比池　手いたづらの池。
○たのきのさい　新六帖卷三「雨過ぐるたぬきのさいの水たまりありはつまじき世をや賴まむ」に據つた。たのきは田からぬけ出した意か。さいは喉鰾の一種、鯉に似た淡水魚。
○河かみも　河の神と、川上とをかけた。
○ふかぬ追手を　吹かぬ順風を。
○長居の浦　備後國御調郡絲崎の海岸。長く居たにかけた。
○あだの大野　大和宇智郡阿陁村、歌には阿太大野又は宇智大野と用ゐてある。世の中に遷り易いとかけた。

離別

人の世の常世なりせばゆきかへるかりの別れを惜しまざらまし

老いたるどちの別れに

諸共に老いにけるかなますらをの別れにかくやそでしほるべき

旅宿

嵐ふくすゞのしのやのかり枕ふしうかるべきよのけしきかな

霧中湊

筑紫路のみなと〳〵によるの舟そも幾度かこぎかはるらむ

ふるき詞をよめる時に

露深き秋野のみくさかりふきて月と共にも宿る庵かな

懷舊

すなほなる神世をしたふ言の葉に人の心のみちもたえせず

人の悼に雲を

ながむれば薄き方よりまづ消えてはては殘らぬそらのうき雲

不妄語戒

言の葉の多かるよりやおのづから誠すくなき罪もうくらむ

○すゞのしのや　篠竹で葺いた家を云ふ。ふしうかるは其の緣語。かり枕は刈りとかけた。

○よるの舟　夜と寄るとかけた。

○みくさかりふきて云々　萬葉集一「秋の野のみ草刈り葺き宿れりしうぢの都のかりほし思ほゆ」に據つた。みくさのみは美稱の接頭語、みくさは特に芒を云ふ。

○つまだにあるを　妻と家の端とをかけた。
○かけじ　菖蒲を端午に軒にかくるとかけた。
○心をしそめずは　心に執著心なくば。
○ひとをわたすと　人を救世の舟に乗せて、彼岸(極樂)へ渡さんとするは觀世音菩薩の誓ひである。
○こぎやはなれぬ　やは語勢を强めただけで、反語ではない。漕ぎ離れぬ意。
○とゞまらぬ心　執著せぬ心。
○ふるの中道　古よりの大道。いそのかみはふるの枕詞。
○かゝりて　拘泥して。篠の縁語。
○とまらぬ心ぞ　執著する心ぞ。

不邪婬戒

わがやどのつまだにあるを菖蒲草よそにはかけじつゆの契りも

寄色無常

心をしそめずば何か花紅葉つねなき色を惜しみしもせむ

菩薩

残りなくひとをわたすと舟人のなほこの岸をこぎやはなれぬ

維摩居士像賛

もゆる火も流るゝ水もとゞまらぬ心の外のものとやは思ふ

述懐

世のうきは思ひしらぬにあらねどもそむかれなくにわびつゝぞふる

寄道述懐

いそのかみふるの中道あとはあれど今は尋ぬる人ぞ稀なる

寄篠述懐

現なき世はうきふしの篠すだれ何にかゝりてとまる心ぞ

心

いふことは皆心よりいでながら心をいはむことの葉ぞなき

○二鼠競ひて　佛說譬喩經に出て居る「有黑白二鼠、互齧樹根、（中略）黑白二鼠以喩晝夜云々」光陰のたつ事早き形容。

○言の葉草　和歌をさす。

○流るらむ　水ぐきの緣語。手が利かないので字が思ふやうに書けないのだ。

おもふことといふ句を初めにおきて

思ふことよどみがちにて身は老いぬ流るゝ月日しばし止まれ

月日のとく過ぐるに思ふことは十の一つもならねば

なす事のならば何かはとゞまらで過ぐる月日もかくは惜しまむ

二鼠競ひて老身久しくとゞまりがたきを覺え侍れば

月に日にかくおとろへば魂のありともはては何にやどらむ

光陰旋火輪のごとくなるに只おこりやすき身をくいて

よるとても隙ゆく駒はとまらぬになすべき業をなどたゆむらむ

ねざめごとの心やりに歌よむとて

老が身のねざめを何になぐさめむ言の葉草のなき世なりせば

はかなく明かし暮すことを思ひて

西にくれ東にあけていづる日の今いくめぐり我をてらさむ

手習ふにも心にまかせざりければ

いへば我が心なるべき水ぐきの思はぬかたになど流るらむ

薪にくだく松のやどり木あるを人の見せしに

常磐なる松をたのめるやどり木も千代の限りにあひにけるかな

出雲

いにしへに返るしるべや八雲たつ出雲の神の言の葉の道

伊豫國三島社へ奉る歌寄國祝を

幣（ぬさ）まつりあがふるまゝに光そふ神のみ國はいよゝ榮えむ

祝の心を

ものゝふの手ごとにもたる細戈千足（くはしほこちたる）の國ぞたけきくになる

いかばかり榮えかゆかむ動きなきみよは常世のやまと言の葉

○伊豫國三島社　伊豫ノ越智郡三島にある三島明神、大山祇神を祭る。

○細戈千足の國　くはしほこはちの枕詞。あらゆるものが足りて不足なき國。日本の美稱。

小澤翁の歌の集六帖詠草は、いんさき翁が門によれる人々校し合はせて世にひろむる事となれるは、其のはしおくに委しきを見て知るべし。さるをなほ拾遺につかにだにと求むるが多かれば、亡父萍流みづからかきて木にのするばかりなりしが、あぢきなく身にいたづきいりて、はかなくなりにけるより三十年をへ、小澤の翁すでに五十年の霜雪をふりぬ。かくてしみの住處となしはてむ事のいとをしければ、おのれ思ひおこしてこたび板にはゑらせ侍るになむ。もとより拾遺にしあなれば、故よししるすべきにあらざめれど、只其の言のあらましを、嘉永と改まれる戊申のとし季冬、小川巢翁しるす。

○いんさき　往時、昔。
○其のはしおく　序と跋と。
○しみの住處　紙魚の住所、空しく蟲害を受くる本などを云ふ。
○戊申　嘉永元年戊申。
○小川巢翁　小川萍流の子。

六帖詠草拾遺 終

藤簍冊子

上田秋成

藤簍冊子序

林に遊ぶ鳥のやどりところ得て、生ひ榮ゆる木草の花、人の友垣の語らひも、おのれ〳〵が好めるにひかれて心はゆくめり。父母に別れたいまつりての世には、うからはらから頼みつべきが多かめるにも、思ふをあかしうさ嬉しさを語りなぐさむなむいとほしき。唯まがりねぢけだにせずば、おのがむき〳〵しわざいか樣にもあれな。今や老いらくの世にかへりみれば、こゝの入江の蘆が散る夕風、心さむらにおぼししめりしをも、大方にさいだてたりしに、只一人世にとゞまれるは上田の翁なり。我には齡五つ許りおくれ給へど、萬に心さとく兄ともおし讓るべかめる。常に國ぶりの歌をよみて獨り樂しとせる、其の下がきめくものあまたつゞら箱につみ入れ、我がまへにもてきて、是れなむ年月に刈りつみし磯廻の藻屑なり。もとより蘆原のしげけき小屋におひ出で、ひぢりこにそみたる怪しの言草は、久方の仰ぎ望む御あたりには、天彥のよびつたふまじく、又同じ民草の中には、ほむともおとし

〇うからはらから　親戚兄弟。
〇思ふをあかしうさ嬉しさ云々　自分の思つてる事を、うち明け語り、かなしさ嬉しさを云ひ合つて慰める人は、非常に尠いものである。
〇唯まがりねぢけだにせずば云々　たゞ邪道に入るだけをしなければ、自分の思ひ〳〵の仕事、どのやうにでもよからう。
〇こゝの入江の蘆が散る　こゝ大阪の土地で。蘆がちるは浪速の枕詞。
〇心さむらにおぼししめりしをも云々　心寂しさに、深く思ひ込んで居た友も大抵、先に逝かれてしまつたのに。
〇上田の翁　上田秋成。
〇ひぢりこにそみたる　泥にまみれた。

むとも、何心してと思へば、一つものに耳過しつゝ年はへにけり。君と我、土をつみて城をかまへ竹にまたがりてかけ走りし昔より、何のたがふふしなくて相おひの今までゆきかひ問ひかはしぬるには、歌よませ給はずとも、おのがひが心をしられまゐらすには見せたいまつりて、一言をだにをかしと思はれなむいとうれしき。見をへて後に、はし一くだりにても書き加へてよと聞ゆ。あなわづらはしとは思ふ〳〵、百たらずの年波よせかへりて交らひし人の爲には、國つ罪こそかしこけれ。我が犯さぬ天つ罪を、老がやせ骨いたきまでおほせらろゝともとてなむ、かしら髪禿なる筆に此のことうちいでこそすれ、歌や文や露ばかりも學ばぬ道は、三吉野のよしとも、足柄嶺のあしかるともあげてはいふべくもあらぬを、古言の葉にならひてぞ、世人さだめよ、世人定めよといふ。享和二年の秋、ふなきほふ堀江のわたなべの岸なる、生島の叟しるす。

○一つものに耳過しつゝ　毀譽を同じものに聞き流しながら。
○土つみて城をかまへ云々　幼時相共に戯れ、土をこねて城を作つたり、竹を馬にして乘つたりして遊びし昔から。
○何のたがふふしなくて相おひの云々　何一つ爭つた事もなく二人とも成長して、睦ましく交はり。
○はし一くだりにても　序を一行でも。
○かしら髪禿なる云々　禿筆で。自分の文才なきを卑下する語。
○三吉野の　よしと言はん序詞。
○足柄嶺の　足柄嶺、あしと言はん序詞。
○ふなきほふ堀江　萬葉集卷二十「船競ふ堀江の川のみなぎはに來居つゝなくは都鳥かも」に據つた。
○わたなべの岸　大阪堂島川に架せる渡邊橋の岸。

○道ゆきぶり　旅行しての見聞記
○ついでられたるなり　順序正しく竝べられたのである。
○獲麟　孔子春秋を著はし、「哀公十四年春、西狩獲麟」ご云ふ句で擱筆した事をさす。
○それの御寺に　京の東山南禅寺畔西福寺をさすのであらう。
○おくつき所をさだし　自分の墓地を定め。
○うら〳〵おきて聞ゆ　内々で命ぜられた。
○櫻木にさかすべくとて　版木に起さうとて。
○世にはひわたらむほどは　世に生きて居る間。這ひ渡らんの意。

附言

一此の集は、翁時々のあはれにつき、且ことに臨みて口すさばれし、歌や文や、物語道ゆきぶりを、紙のはし、ものの裏などにかいつけられしを、取りつどへて、えらぶとはなしについでられたるなり。この頃語り給はく、思はずよ、七十といふ齢をかぞへつめるは、うつゝの夢路のたどりとやいふべき。いでや今歳を老が世の限りに、打ち亂りし事ども皆しをへ、筆とるわざも、かしこきながら、獲麟のためしに、今日より後は、きのふの我にはあらで、みどり子のわきまへしらぬあそびして、世をのどかにも終らばやとて、それの御寺におくつき所をさだし、かつ柩をさへつくらせて、此のふみ等をも、した書のまゝに納めてむと、うち〳〵おきて聞ゆ。おのれ、翁に親しく交はり遊ぶなべに、はし〴〵讀み見し事のあれば、翁をしれる人々と心合はせて、これを櫻木にさかすべくとてなむ、御寺に參りてはかりごとすを、翁聞きつけて、うたて、をこわざするかな、世にはひわ

たらむ程は、必ずしも有るまじきしわざなりと制せらる。いなや、此のぬしはすでに世を見はてて、今はおはさずとこそ聞きつれ。我がもの顔にのたまへる、いとあやしきと云ふ。翁打ちもだして、我が刀に疵かうむれるよとて、長き息つぎつゝ、ゐざり入り給ひぬ。

一ふみの名の由は、常に机のかたはらに、あさらなるつゞらごをかいおき、人來れば見せじとしかまへらるゝを、れいの翁がつゞらごよと、ねたくいひあへりしもて、今は呼ぶ事となりき。

一歌や文や、翁の齡にしてはいと少なきは、わかくておはせし昔は、よろづうちたはれがちにまめ〳〵しき道に志もあらざりき。四十といふ年より、よみ書きならひしといふ物語、べちにまち文と題せられし一巻あるを、こは恥ある事どもありとてゆるしなし。さは四十を初めの手習の、それすら黄岐の術のいとまを偷みたる遊びなれば、うべも多かるまじく、大方はしるしもとゞめられざりしを、七十をかぎりのわざに、つゞらごの中・又こ

○此のぬしはすでに世を見はて云云　此の歌集の作者はもう此の世を去つて居られないと聞いて居る夫れをまだ自分の物顔に宛や角言はれるのは變だと云つた。秋成が襄を作り極まで作つたのを戯れたのである。

○我が刀に疵かうむれるよ　自分の刀で自分が疵を受けた。うまい言葉で緘口せしめられたの意。

○あさらなるつゞらごをかいおき云々　淺い行李を側に置き、人が來ると原稿を中に入れて見せまいと計つて隱した。

○まち文　町文か。

○黄岐の術　醫術。上田秋成は最初醫家として立つたのである。

〇此の道に門をひらきて云々　和歌の道に、門戸を開いて弟子を指導されたのでないから。小澤蘆庵が勧めた時、却つて人を愚にする事であると斥けた逸話が、彼の隨筆「膽大小心録」に出て居る。

〇かぎりあるをもて、かぎりなきにしたがふは危し云々　限りある壽命で、限りなき知を求めんとするのは困難である。莊子の養生主篇に「吾生也有涯、而知也無涯、以有涯隨無涯、殆已。」に據つた。

〇昇道杜多　道をのぼれば、障礙が多い。

きあつめつゝ、六まきとなりき。翁、此の道に門をひらきて、しるしらぬをいざなふにあらねば、よしやあしやのほめそしりをも厭はれぬもて、其の人がらを世の人見給へかし。

一木にのぼすまじき卷々猶多かれど、ゆるしなきには、題號をだも書きあらはさず。翁の常言に、命は限りあり、知るは涯なし、かぎりあるをもて、かぎりなきにしたがふは危しといふ古ことをずんじ給へる、うべことわりとは聞きつるなり。

文化紀元三月足の日、昇道杜多、岡崎の竹閒裏にしるし侍る。

自序

古人云。文章窮而後工。非窮之能工也。窮則門庭冷落。無車塵馬足之騒。事務僴約。無簿書酬應之繁。親友斷絶。無徵逐遊宴之忙。生計蕭灑。無求田問舍之勞。終日閉門。兀坐與書爲仇。欲其不工不可得已。不獨此也。貧文勝富。賤文勝貴。冷曹之文勝於要津。失路之文勝於登。第不過以本領省而心計開耳。到聖人。拘囚演易。窮厄作經。常變如一。樂天安土。又不當一例論也。適有此語。聊足以暢閒情焉。頃一夜夢。垢面短髮之老翁來云。兄也薄命不遇去郷土離六親。無居無產。自恣爲狂蕩。而乘閒作文。然句々吐寒酸憂戀。世塗之人誰不以蔑目哉。夫前人慷慨之言。各自愛才舞文。解悶發憤者異。兄也不然。居常讀書有感。將以安不遇乎。抑亦過不遇。共天地間之動物。人稟之性。不可以爲如何已。故來慰問云。覺後思之。冷落失路。爲之窮厄。即不可樂。爲之命祿。則何以憂耶。余之薄命。及老而無居無產。惟是愚盲淺識之歎。終日閉門。兀坐乘筆。雖不勝富勝貴之文。聊以爲消閒之策耳。享和壬戌晩春。鴫塘頭乞丐翁鶉無常居士拭盲眼書之。

○古人云文章窮而後工　司馬遷の文など批評した成句。
○無車塵馬足之騒　門前に車馬が止ることが無い。
○無徵逐遊宴之忙　招いたり招かれたり、遊び酒宴をさする多忙さが無い。
○不過以本領省而心計開耳　自己の本分を以て反省し、心中自ら開かれるに過ぎないのだ。
○離六親　父母、兄弟、妻子と離れ。
○爲之命祿　これを天命、天祿とすれば。
○享和壬戌　享和二年壬戌。上田秋成六十九歳の時である。
○鴫塘頭　鴨河堤の畔。羽倉信美の三代、西洞年の家に住んだ時こと。
○鶉無常居士　上田秋成の別號。

上田秋成

題云藻屑

すみの江の浦の濱藻のよる時々なる言草どもを荷田の信よしの家の屛風にえらぶとはなしにかいすさめる歌

都べはちまたの柳そのの梅かへりみおほき春になりにけり

大原や春日の神もゆるさなむ子の日の松はもりのした草

我が宿の梅の花さけり宮びとのかざし求むとつかひ來むかも

折らばやとたちよる梅に鶯のゆるさぬ聲ぞ驚かすかな

とのゐ人よるをすがらの梅が香のしきりに薫るあけやちかけむ

思ふひと來むといふまに梅の花けさの嵐にちりそめにけり

花林朧月

櫻さく春のはやしはひさかたの月のかつらも花ぐもりして

○よる時々なる　思ひ寄るこ、住の江の浦に藻屑がうち寄せるとかけた。

○荷田の信よし　羽倉信美、荷田氏、蔵人、豊前守。伏見稲荷神社の神官、蘆庵の門人。文政十年歿、年七十八。

○大原や春日の神も云々　此の大原は大和高市郡藤原の事であらう。

○我が宿の梅の花さけり云々　紀貫之の[illegible]の故事を思ひ寄せた。

○ゆるさぬ聲を　梅の花を折る事を[illegible]。

○とのゐ人　宿直人、殿上人に禁中[illegible]宿直する事を[illegible]。

○禪林寺　永觀堂。東山の麓。
○大田南畝子　大田覃。四方赤良、南畝、蜀山人と號す。江戸牛込の御家人、有名な狂歌師。文政六年四月六日歿、年七十五。
○あほの山　大和添上郡不退寺の間を阿保山と云ふ。
○萱草すみうくもあらぬ云々　すみれと住みとの縁語。
○片やまの　近江[illegible]湖東岸の地名、夕かけていつも朝までにかけた。
○いはせの森　[illegible]岩瀬森
○みえりの里云々　橘の実みえりにかけた枕詞。みは美稱、衣利は駿河志太郡の地名。萬葉集卷二十に「橘のみえりの里に父を置きて」云々。
○かぐ山の　大和高市郡にあり、香具山
○[illegible]すが笠　攝津難波で出來る
[illegible]

禪林寺にて

櫻さくこの山かげの夕ぐもり空さへ花の色にまがひて
高砂のをのへにたてる櫻花はやもあらしのさそひやはせむ
夕日かげ輝く峯の櫻ばなけふもながめて暮るゝ庵かな

大田南畝子の東にかへらるゝを送る

風あらき木曾山さくらこの春は君を過してちらば散らなむ
あほの山尾上の櫻たづねきて伊勢までと誰も思ひこゆらむ
故里を荒るやとゝへば萱草すみうくもあらぬ垣ねなりけり
吉野川かはづ妻よぶ夕暮にやどかる我もひとり寐にして
宮のうちは男をみなも白袴のころもゆゝしみ夏たちにけり
郭公夕かけていつも朝つまの片やま岸になくといふなり
曇り日のいはせの森のほとゝぎすあなかまなきてうとむとも聞く
たち花のみえりの里の時鳥ぬかぬ玉なるねをもなくかな
鶯のふるすの谷は冰とけいつか青葉のかげとなりにき
かぐ山の尾上にたちて見渡せば大和國原さなへとるなり
さなへとる[illegible]

○ともしのねらひ　鹿をうつ照射のねらひ。

○上蔀　格子戸の上半分、上に釣つて上げるのであるから、おろすと云つた。

○藤原のみ井の清水　大和高市郡にある御井、今も香具山の西北に在る清水がそれであらうと云ふ。

○ほりつれて　女郎花を掘り採りつれて。つれては一緒に揃つてする動作。

○くさかの里　河内中河内郡草加

山彦のこたへて悲し我が岡のともしのねらひあやまたぬかも

けふもまたよそにと見しを上蔀（あげじとみ）おろすまもなき夕立のあめ

飛鳥川嵐ふきそふゆふだちにたぎち流るゝ淵瀬はなしに

撫子の花のさかりの久しさに初秋風も吹くといふなり

藤原のみ井の清水はむすばなむ天のかぐ山かげも見えけり

はつあきの朝けの風を身にしめて思ふにかなふ頃にもあるかな

女郎花さが野の原にほりつれてたが宮つこぞ夕いそぎする

尾花ならぬ方こそなけれ大原や野中ふる道わけ迷ひては

大ぞらに光みちぬる秋の夜も月のところはさやけかりけり

紀の海の南のはての空見ればしほけにくもる秋のよの月

河内國くさかの里にありし時

生駒山かげまだ峯にわかれぬを浪花のうみは月になりけり

いでている山のあなたの遠近に身をし分きても月を見てしが

天の原秋の夜わたりてる月のひかりをさまる曉の空

蘆がちる秋の入江の夕やみにひかりとぼしく飛ぶほたるかな

此の夕鴈なきわたる山城のふしみのわさ田かりやそめけむ
信濃路を迎へこしよりあら駒の荒き心もなれもこそすれ
御狩野はきのふとすぎし草村にいづちのがれて鳴くうづらかな
袖たれて秋のと山をながむれば紅葉ぢにけりな時雨せぬまに
津の國のこや野をゆけば露霜にをぐさ花さき葉はもみぢせり
峯にたつ鹿の八聲のひまはたゞ紅葉ふきおろす風の音かな
秋よりもしぐれ〳〵て木枯の冬にうつろふ雲のたちまひ

松が崎にて

時雨の雨早くもふりく大比枝や小ひえにかゝる雲と見しまに

奈良に遊びし時

春日野の時雨の後のけふなれや山はみながら紅葉しにけり

高雄山

奥山の岩垣紅葉この頃はあした霜おきゆふべ散りかふ
枯葛(かれかづら)たぐればたゆる百濟野の萩の古枝の眞柴ゆふとて
はふり子が清むる跡に木の葉ちりて神のみたらし氷るにけり

○信濃路を云々　八月十五日までに信濃國の御馬を、信濃の牧場から新に迎へとるのである。
○御狩野　宮中の御狩場たる野、河内交野の如きその一例。
○こや野　攝津河邊郡昆陽野。
○鹿の八聲　鹿の妻よび繁く啼く聲。
○雲のたちまひ　雲の立ち舞ふさま。
○百濟野　大和高市郡百濟野。萬葉集卷八「百濟野の萩の古枝に春待つと來居し鶯鳴きにけむかも」
○はふり子　茲では神に仕へる神

田舎住せし時

寒き夜をあかしかねてぞけさ見れば生駒が嶽に雪の積れる

舟きほふ音もきこえず堀江川かきくらしふる雪の夕は

こやの野に宿りてましを夕つけてふる雪悲しゐなのふし原

雪峯寒月

ありあけのつきの光はうづもれて峯しろたへのゆきのふりはも

御幸まちて野山の神もつかふらし鳥立(とだち)もらさぬ朝かりの場(には)

廣澤の水にうきねてをし鳥の羽根きる音をきく夜寒しも

田上の河べのいへに宿からむ網代の波に千鳥しばなく

やどりする宇治の橋本さよ更けて中の河洲になくは千鳥か

数ふれば年はあまたにつみつるを猶幼きは心なりけり

鳳闕

思へども思ひやはえむ色に香にひだりの櫻みぎのたちばな

舊都

古の高津の宮にたつ民は萬代までとつくりけむかも

○舟きほふ　舟を競ひ漕ぐ。

○ゐなのふし原　攝津河邊郡猪名の伏原。神崎の北、昆陽野には近いのである。

○鳥立もらさぬ　鷹に捕らるゝ鳥の立つを鳥立つと云ふ。

○羽根きる音　羽ばたきをする音

○田上の河べ　近江栗田郡田上山の下。

○ひだりの櫻云々　左近の櫻、右近の橘。紫宸殿の前。

○高津の宮に云々　仁徳帝の民のかまどの賑ふを喜ばれし故事。大[illegible]。

里

九重にとなりてすめる里人は宮なれてしもものはいふなり

貴公子

よき人のながき心に初春のうら〳〵照らす日かげなりけり

武士

弓矢おひいさ駒なめてものゝふの花見がてらに鳥がりする哉

僧

墨染にたちぬふわざもなくもがな憂世の門はあけずあらまし

市賈

畝火山本末にさわぐあさ鳥のさきにむれたつ輕のいちびと

散人

花鳥の色にもねにもほだされて暇ある身のいとまなきかな

松

足びきの遠山松を見さくれば嵐にたへて年もへにけり

浪にふし岩ねにたてる松の聲須磨のうら山のぼりくだりに

○よき人　身分ある人。

○駒なめて　馬を並べて。

○鳥がりする　[illegible]行する。

○輕のいちびと　大和高市郡輕の市人が朝より先に起き[illegible]れる意。

○散人　俗事に超越する民間の人

○見さくれば　遙かに眺めれば。

春歌

立春

ひさかたのはてなき空に朝霞たなびきわたり春たつらしも

春霞立野の野邊の神やしろゐむかふ朝日はけふを始めに

去年よりも姿を見せてけさぞなく竹のはやしの鶯のこゑ

立春霞

風早き山はけしきをたちかへて横川の杉に霞たなびく

我こそは面がはりすれ春がすみいつも伊駒の山にたちけり

迎春東郊

東の野にいでて見ればにしごりの近き里からけさはかすめる

田舍住せし時春のあしたに

長閑なる日影はもれて笹竹に籠れる庵も春は來にけり

春盤に五穀を盛りて加へし歌

うけ持の神代ながらの田なつもの年のはじめに見るがたのしさ

○立野　霞立つにかけた。磐城雙葉郡に立野もあるが、之れは大和の立野であらう。

○横川　比叡山の山中。東塔西塔と鼎立して[illegible]の一區。

○我こそは面がはりすれ　自分は老いて容貌も變つたが、春霞はいつも變らず伊駒山に立つた。

○にしごり　東と西の對稱。山城[illegible]

○[illegible]

○田なつもの　田に産する物。

○垂水の神岡　攝津國[illegible]垂水神社がある（[illegible]）

○岩そゝぐ　垂水の枕詞。

○三國の川　攝津西成郡の川、今神崎川、江口川とも云ふ、淀川の一支流。

○刀自も　家政の母であらう。

○ひきつれてしるしもあれやと　相率ゐて諸共に、其のききめあれよと、ひきつれては小松ひきの縁語。

○白髮つくまで云々　白髮になるまで長壽であり度い。

○馬の司　宮内省の左右馬寮の役人。

○おもしろ、面白いと、白い駒と

元日に子日ありし年垂水の神岡に松ひきて遊びし歌　神祠在本國豐島郡

あら玉の　年のあしたに　めづらしき　初子のけふを　空しくも　宿にはあらじと　新草の　萌ゆる野こえて　岩そゝぐ　垂水の神の　岡の邊に　登りて見れば　遠山は　霞に匂ふ　朝雲に　鶴なきわたり　遠しろき　三國の川に　舟よばふ　人しも見えず　瑞垣の　下ゆく水の　音さむみ　衣を寒み　刀自も我も　五十が上の　百足らぬ　老にしあれば　我が爲に　生ふる小松の　根をはへて　千木榮ゆる　ひきつれて　しるしもあれやと　菅の根の　永き日くらし　夕雲の　雪をさそへば　風さえて　衣をうすみ　肌さむみ　家路を遠し　歸らなむいざ

反歌

子の日する野邊の小松にふる雪の白髮つくまで年は經ななむ

元日宴

けふよりぞ事たつ春の位山つぎ〳〵賜ふ千代の杯

白馬節會

今ぞひく馬の司のあゆみまであなおもしろの駒といふなり

ま手にかふ弓音高し的かたのうらめづらしき春のあさには

早春歌

水無瀬川さゞれに雪のふりつみて春の水花した通ふらし

春きてもとけぬ汀の岩むらにいつ浪かけてこほりいにけむ

春の雪あがきにくだき信濃なる菅のあら野の駒勇むなり

雪とけし岩田の小野の春日影みちゆき人もわか菜つむらし

仇まもる飛火絶えにし春日野にたゞ新草のもゆるをぞ見る

一夜きて旅ねうれしき故郷のあれし垣ねにもゆる若草

柳もえ蘆つのぐみて津の國のながらの堤人のいきかふ

梅

此の里は梅の林にこめられて薫るものとも知らずぞありける

江に渡る梅の追風香をとめて花のところに舟はよせなむ

おなじくば梅の木の本とめてまし埋みぞまどふ春のたきもの

梅の花香にかをらずば霞こめ雪にうもれて春も過ぎなむ

かへしきるよるの衣にしめる香は君がこてふに似たる梅かな

雪わけて昔の友をとひくれば吉野の里にうめも咲きけり

○まてにかふ [illegible]射法。競手に対する[illegible]である。

○あがき 馬の足掻。

○[illegible]

○[illegible]て通知するのである。古今集巻一の歌「春日野の飛火の野守出でて見よ今[illegible]」を思ひ寄せたのである。

○蘆つのぐみで 蘆が芽をふいて、つの音の繰返し。

○かへしきるよるの衣に云々 衣を返し着て寝れば思ふ人を夢みる[illegible]。[illegible]こてふと[illegible]来るといふこと、夢の蝶にかけた。梅の香に戀人の衣を聯想するのは古今[illegible]。

くもり日はことにぞ匂ふ梅の花風ふきとづる深きかすみに

鶯のなきからしたる朽ちめよりたち枝うれしき梅の初花

野鶏の羽ぶきの風にちらされし名殘のえだの梅薫るなり

容さえて香ごめに風の送りくる雪と梅とをわきて見なまし

梅の花峯をくだりの林には里にいでじと鶯の鳴く

わが園のはやしの梅を宮人の酒にうかべてわれにたまはす

山賤のくだく薪にゆるされて立枝あまたの園のべの梅

梅のはな風にちるごと鶯のかさとられたるこゝちやはする

鶯

高圓の野邊見にくれば新草に古草まじりうぐひす鳴くも

陽炎のもゆる春日の小松原鶯あそぶ枝うつりして

宿しめてねよけにもあるか鶯のうめのこ枕われにかさなむ

春の野のもずの草ぐきたれ見ねど驚きがほに鶯のなく

鶯はまくらの窗にかげ見えてはる日なぐさむ竹のしたいほ

柳

大寺の門べにたてる古柳つちはくまでに枝はたれにけり

○香ごめに　香と共に。

○くだく薪にゆるされて　薪に切りくだかれるのを免れて。

○鶯のかさとられたる云々　古今集卷一「鶯の笠に縫ふてふ梅の花折りてかざさむ老隠るやと」に思ひ寄せた。梅花を鶯の笠と考へた。

○高圓の　大和春日に在る山。

○ねよけにもあるか　寝心地よさ相にあるかな。

○もずの草ぐき　茲では一說を其のまゝ採つてある。該鳥が食物なる蟲類を木に刺し置くを云ふといふ說でなく、單に百舌鳥が草をくぐり飛ぶのを草ぐきと云ふ說これである。萬葉集卷十「春されば百舌鳥の草ぐき見えずとも吾は見やらむ君が邊よ」に思ひ寄せた。

○つちはくまでに　土を枝で掃くまでに。

九重もちかくやなりぬ道ひろきゆくてに萌ゆる春の青やぎ

一葉よりうかべならひし川舟をつなぐ岸根の玉のをやなぎ

紅梅

此の殿の八重のくみ垣えだこえてくれなゐ深き梅のさかりは

如月や八重さく梅の紅にうたて灰さす野邊のあくた火

春雨

こち風のけぬるき空に雲あひて木の芽はるさめ今ぞふりくる

けふ幾日はれぬ雲間に長閑なる日影をこめて春雨ぞふる

おもしろく雨ふるからに春の夜を短しと思ふ始めなりけり

春雨にきならし衣かたしきて柴のおき火をうづみかねつも

庵春雨

稀にとふ人をやどして春雨の夜をすがらに語る庵かな

春雨枕に雫す

春の夜の雨もる山にやどりして枕にちかきしづくをぞ聞く

春月

三吉野の花おそげなる年だにも河瀬朧に月はかすめる

○つなぐ　玉のをやなぎの緣語。
○玉のをやなぎ　玉緒柳、柳の細い枝を、玉つなぐ緒と見た語。
○灰さす野邊のあくた火　野邊の芥焼く灰がおきけなくも紅梅のあかいのにかゝるの意。花の紅を火の紅に喩へた。
○木の芽はるさめ　木の芽ののびると、春雨とかけた。
○きならし衣　着馴らした着物。
○雨もる山に　雨が漏ると、近江守山とかけた。

三島江や玉江の水もにごるなりかすみてうつる春の夜の月

しらま弓張りてかけたる月かげはみつれど幾夜はれぬかすみか

桃　花

春の水あさくながるゝ片岸はもゝの林の山もとの里

折る花におなじ色なるあら染のあさらの衣まくり手にして

春日遊墨江

蘆原の　みづ穗の國を　中におきて　外ゆく波の　千重波の　ゆたのたゆたに　五百津舟　千舟をのせて　神代より　天のさくめの　跡とめて　入りくる舟は　玉はやす　武庫山風を　おひ風に　夕はなして　あけたてば　伊駒高ねを　吹きおろす　嵐の風に　朝びらき　漕ぎてぞ出づる　大作の　みつの濱邊に　ありたたす　神の御前の　住の江の　いつはあれども　春の海奈呉の浦べに　家忘れ　拾へる玉を　くゞつもつ　手たゆきまでに　少女等が　裳の裾ぬらし　みつ汐の　夕さりくれば　あはと見し　淡路の島も　霞こめ　ほのにも見えず　あし鶴の　歸る蘆べは　汐さるに　騷ぐ入江を　漕ぎたみて　行くてふ舟は　海人ならぬ　難波少女の　家路ゆく舟

反　歌

○玉江の水　三島江の玉江と云ふのは、三島江の畔の細流野田の玉川をさす。陸奥の野田の玉川とは別。

○しらま弓　はりの枕詞。かけたる、はれぬ、皆弓の縁語。

○あさらの衣　朱色の淺い衣、桃色は同じであるが荒染でうすいのであらう、少女であらう。

○ゆたのたゆたに　ゆらゆらとただよひ動いて。

○天のさくめの　天の探女、古事記に見える女神、天稚彦に仕へた。攝津風土記に此の神岩舟に乗つて高津に來たとある、それを用ゐた。

○玉はやす　武庫の枕詞。

○大作の　御津の濱の枕詞。御津は攝津の大阪、住吉附近の濱を云ふ。

○奈呉の浦　萬葉集に多く詠まれたが、越中に同名の浦があるがこれは住の江の地名であらう。

○くゞつもつ手　人形持つ手。

○漕ぎたみて　漕ぎ廻つて。

奈呉の海の名殘の玉藻我からむ汐みちくとも沖にをれなみ

櫻花

いつはらぬ春の日かずを數へきて山の櫻はさきそめにけり

まきむくの檜原杉むら霞みけりほのに櫻のいろにこぼれて

ひな曇る櫻がもとをたちくればみどりの空にかをる春かぜ

思ふことあらぬ枕に花の香のあさらにかをる春の曙

しばしとてたゝずむ花に逢坂の關は夕の戶ざしせしかな

櫻花さけるを見ればかほよ人衣に通ふ光なりけり

櫻戶をおしあけがたの空見ればけさも尾上の花ぐもりして

山路花

遲れじとおひこし人にあはぬかな心そらなる花の山ぶみ

舟浮けて誰もののねを遊ぶらむあらしの山の花のこがくれ

夜にかくれあひにし人に花山の道にゆきあふおもなしやわれ

海邊花

須磨の浦の磯山櫻さきにけり波こゝもとにたちくとや見む

風まちてとまりする舟磯山に咲きちる花の日數へしかな

○沖にをれなみ　沖に居れ、波よ。滿潮になつても押し寄せるな。

○まきむく　大和城上郡卷向山。

○ひな曇る　日が曇つて影のうすいのを云ふ。

○かほよ人　顏佳き人。ころもに通ふ云々は衣通姫の聯想。

○おしあけがた　戶を押し明けるにかけた。

○もののねを　音樂を奏し。

○夜にかくれあひにし人に云々　夜陰に乘じ忍び逢ひし人さ、花咲く山の道で行き逢つた、極りが惡いよ、我は。

○波こゝもとに　「源氏物語」須磨の卷の一句を引用。

汐なれし生田のもりの櫻ばなはるの千鳥もなきてかよへる

雨中花

うちむれてきのふは見し櫻花雨靜かなる陰となりにき

櫻花うれしくもあるか此の夕あらしにかへて小雨そほふる

客來問吉野之花時答登山雨回山水最奇絶其多花之處坂路閉豁人跡絡繹可謂淸雅之矣思夫上古飛鳥藤原之世々春秋屢行幸美其山河之奕而臨水營宮雖見田獵捕魚之御遊更無望雲踏雪之轍故好古士到于那處則懷古以永言也又問翁嘗詠花專用那處者如何答凡題詠春花秋月朵摘其地以調風姿猶之生且上場雜優人歡娛悲淚比之良人世態動謀則取感固淺矣春花粉飾姑子遇雨忽失其美焉那處山水最奇絶但遊以花時者俗士耳今敎道以數言其歟

空にみつ　やまと島根の　國原ゆ　雲居に見ゆる　三吉野に　うちこえくれば　遠白き　河音さやけし　舟よばふ　六田の岸の　柳原　風に靡ける　河のべを　登りて來れば　花ぐはし　雲にうづめる　麓邊の　秋津の小野の　岩村の　中きり通し　往く河は　瀬々にむせびて　たぎちあふ　水のまにまに　棹とりて　下す筏の　岩にふり　みだるをあやな　遠近の　岸にたゝずみ　我が見れば　水に影ある　山吹の　かさねの衣　解き洗ひ　干すいとま

○坂路閉豁　山の坂路がうちひらけて居ること。

○上古飛鳥藤原之世云々　持統帝吉野離宮に行幸あり、柿本人麿之れを詠じた長歌。萬葉集卷一にあり、中納言大伴旅人の歌が卷三にあり、其の他吉野行幸の時の歌が散在する。

○雜之生且上場　生且と且上場とも書く。立女形(俳優)が舞臺に上るやうである。秋成は支那の俗文學に通じたから、漢文にかかる俗語を用ゐた。

○空にみつ　大和の枕詞。

○六田の岸　大和吉野川の岸、現今むたと稱する。

○秋津の小野　大和吉野郡秋津野

○岩村の　重なり塁がる岩。

○岩にふりみだるをあやな　岩に觸れ水を亂すのを、あやなくわけもわからず眺め。

なみ　山風に　櫻ふきまき　帶にせる　象の小川の　水沫なし　河瀬におちて　瀧浪に　みだるゝ見れば　風のみに　散りやはまがふ　古の　かたりにつたふ　とつ宮は　こゝとし聞けば　三舟山　常ゐる雲を　ふりさけて　みつゝしぬべる　夏み川　よどめる末は　ゆふ花の　ぬさの手向か　さくなだり　瀬おりつ姫の　河社　とゞろくに　ひゞきあふ　水のたぎちも　廣き瀬に　流れてゆたに　淺花田　深みどりなし　木綿疊　千むらの絹は　天にます　たくはた姫の　神わざか　妻呼びかねて　夕川に　蛙とよめり　よき人の　よしと見ましし　三ふし野の　ふしのの山は　峯高み　川とほ白し　昔見し　春のさかりを　おもほゆるかも

反歌八首

芳野川かはくま毎に水泡なしよどめる花をむかし見しかな

櫻花うきて流るゝあと見れば象の小河はまことさやけし

白くもはあしたにはれて三舟山ゆふゐる峯のかぜのしづけさ

夏見川よど瀬ながらしさし下す筏が聲のはやもかすめる

河かみの國栖の里人春こすばとはれぬ宿とおもひたらまし

大瀧を碎けておつる白波の音は嵐のたえまなきかな

〇[illegible]川　大和[illegible]吉野[illegible]村の川。
〇三舟山　大和吉野郡菜摘川の東南。
〇夏み川　夏身川、又菜摘川。吉野山中の川。萬葉集卷九「山高み白ゆふ花に落ちたぎつ夏身の河門見れど飽かぬかも」を思ひ合せた。
〇淺花田　うすい縹色、うすい碧色。[illegible]
〇千むらの絹　多くの絹。
〇たくはた姫　栲幡姫、織女星。
〇蛙とよめり　蛙とよめき聲高く啼く、萬葉集の[illegible]である。
〇よき人のよしと見ましし　萬葉集卷一「よき人の好しとよく見て好しと言ひし吉野よく見よよき人よく見」に據つた。
〇ながらし　流しの延音。
〇[illegible]人。[illegible]會の折來るだけである。

夕蝦秋をさかりのころならばたのめて又もわれかへりこむ

宿かさぬよし里ならば秋つののいはがね枕夜を寒くとも

題吉野宮

名ぐはし　吉野の國は　山祇（やまつみ）の　もりてませれば　山なみの　宜しき國ぞ　よき人の　よしと見ましし　瀧つ瀬は　きよき河内ぞ　しかれこそ　大宮人は　春花の　さきのをゝりに　鶯の　聲をとめつゝ　秋霧の　霽れぬ迷に　蝦なく　瀬々をともしみ　いきかひて　見れどもあかず　遊びせし　秋つの小野の　とこ宮は　とこにはあらで　夏見川　流るゝ水の　立ちや歸らぬ

反歌

御舟山つねゐる雲のつねならば瀧の都はいまもあらぬか

禁庭花

山ざとにあらぬ色香の櫻ばなかよりかくよりそふひかりかな

御かは水花ぞながるゝ大宮の内にも春はとまらざりけり

花頂山のふもとにすみそめし春

すまでわれみやはさだめむ粟田山あはたつくもは櫻なりけり

花下遊

○名ぐはし　名の美しい。
○山祇のもりてませれば　山つみの神の守護して居られるから。
○さきのをゝりに　吹き撓むので
○ともしみ　茲では、珍らしくあかず、面白いと感ずるので。
○つねゐる雲のつねならば　絶えず居る雲の如く絶えずあらば。
○かよりかくより　彼方から寄り此方から寄り。
○御かは水　禁中を流れる溝の水、永へに春と思ふ大内でも春は逝いて留らぬよ。
○花頂山　京都東山の一部、粟田山の一峯。故に粟田山と云つたのである。あはたつは粟の音の繰返し。

石川のこまのたはれ男花に遊びぬしある人の帶なとらしそ

嵐山花　三章

たには路をくだる筏の岩にふり幾瀨碎けて花は見るらむ

大井川くだす筏のあとたえてゆふべの波にはな散りうかぶ

おほゐ川岸の櫻のかげくれて月になりぬる波の光は

老木花

年ふかき櫻がえだは苔むして松をともなるよはひをや經む

山寺花

かづらきや高まの山の峯の寺寒き日かげに花もさきけり

あはと見て歸るぞはかな少女らが門許されぬ寺の櫻は

谷わたるみちはあらねどいとふりし寺こそ見ゆれ花に籠りて

古墳花

しめはへし苗代小田にかげ見えて年ふる塚の花もさきけり

瓶花

瓶にさす花は昨日の山づとをとひきて人のけふも見はやす

山里花

○石川のこまのたはれ男　河內南河內郡石川に高麗人を住ませた。催馬樂に「石川のこまうどに帶をとられてからき悔する云々」とあるに思ひ寄せた。人妻の帶などとるなと戲れたのである。

○たには路　丹波路。嵐山の前を流るゝ大井川の上流は保津川で丹波が水源地。

○高まの山　大和宇智郡高天山。作太神社及び迦葉寺がある。峯の寺と詠じてあるのは此の寺をさす。

○あはと見て歸るぞはかな　色の淡いと逢はれぬと見てにかけた。

○しめはへし　標繩を張ってと、苗代ののびしとかけた。

○見はやす　見て賞翫する。

山里は夕暮さむし櫻花ちりはそめねどにほひしめりて

愛花篇

うちなびく　春さりくれば　百鳥の　さまよふ野邊は　新草の　萌ゆる垣ねを　誰しめて　住む人たのし　足引の　山のいほりに　むらぎもの　心すませば　語らはむ　人とほしきを　庭もせに　櫻花さけり　ふゝむより　ちりはつるまで　風をいとひ　雨をぞうらむ　春ごとに　我をたのめて　あけたてば　閨戸おそしと　夕闇は　ほのに見えつゝ　言とひを　我にはすなり　花ぐはし　櫻のめでと　古の　遠つ飛鳥の　すめらぎの　言あげませし　にぎたへの　衣とほりて　にほはせる　神のみことの　ゑまひにも　くらべ劣らぬ　花妻の　あれを頼める　里に出でば　人戀ひよらめ　家にあらば　人聞ひくべみ　山口に　守部やすゑむと　若波の　千々に碎けて　思ひたぞする　よしゑやし　戀ひはよるとも　袖はへて　訪ひも來べきを　朝されば　霞かくりて　夕つけば　霧のまがきの　妻ごめに　面わも見せじ　かにかくに　遠つ飛鳥の　すめらぎの　言擧げませし　花ぐはし　櫻のめでの　姫神の　色香おもほゆ　庭もせの　我が花妻よ　ちりこすなゆめ

反歌

○春さりくれば　春しありくれば、春になれば、
○むらぎも　心の枕詞。
○ふゝむよりちりはつるまで　蕾をもち、咲いて散つてしまふまで。
○春ごとに我をたのめて　花が。
○あけたてば　夜が明けくれば
○花ぐはし櫻のめでと云々　花ぐはしは花美し。日本書紀允恭紀御製「花ぐはし櫻のめでこと愛でば早くはめでず我が愛づる子ら」を引用した。
○衣とほりて云々　衣通姫をさす。
○花妻のあれを頼める　自分の妻の懐が、自分をたよつて居る。
○山口に守部やすゑむと　自分の妻を守るため、山の入口に番人を置かうと。
○若波の千々に　若うつ波の如く様々に心碎く。
○よしゑやし云々　よし、たとひ人が戀ひ訪つても、朝は霞夕は霧に隠させて櫻を見せまい。
○ちりこすなゆめ　こすはこその意、散つて呉れるな、決して。

櫻花あかぬなげきをわがすれど一夜の風にちるがさぶしも

長かれとたのみこそせぬ櫻花ひと夜の風にちらむものかは

落花

ちるまでと賴めし庭の花にうきあかつきがたのむら雨の音

櫻ちる木の本見れば久方の星のはやしに我はきにけり

とめこじな花に初瀨のやま嵐春もはげしきならひなりせは

やま風のふくとはなしに玉だれの外面に花のけさはちりくる

龍田彦風をまもりの神山におのがときとや散る櫻花

朝鳥の越ゆる羽風に色ながら尾上のさくら散りそめにけり

吉野山岩のかけみち春ゆけばたぎつかふちに花ちり浮ぶ

ゆきくれて獨りのみ見る春のよの月に花ちる志賀の山ごえ

時鳥なくべくなりぬ花はみなちらせし雨のなごりある空

櫻花ちるを心のはてにして殘る日數の春に春かは

根にかへる花としいへば賴まるゝ又くる春も木末にぞ見む

花遲し

花おそき櫻がもとをとめくれば青根がみねの外陰なりけり

○長かれとたのみこそせね　いつまでも長くあれと、櫻に心だのみはしないが（それ程は願ひだから）一夜の風で散るのはひどい。

○星のはやし　落花を並ぶ星に喩へた。萬葉集卷七「天の海に雲の波立ち月の船星の林に漕ぎ隱る見ゆ」を引用した。

○とめこじな　わざ／＼求めて來ないのであつたよ。

○まもり　山の守神。

○神山に　龍田山をさす。

○たぎつかふち　水の激する河内、既に固有地名の如く用ゐられて居る。

○心のはてにして云々　櫻花の散るのが、春の心の終りであつて、後に殘る春の日數は、春の日數に入らうや、入らない。

○根にかへる花としいへば　花が散りおちて根に埋まれるのであるといへば。

けふと暮るゝ日數にもれてみ山には遲げにもあらぬ花咲きにけり

はな櫻かさねてにほふ袖の色に春をとゞむる雲の上びと

菫草

あすもこむ菫花さく春の野の芝生がくれにきゞすなくなり

雲雀

春の野は雲雀の牀と思ひしを空にやどりの夕暗のころ

賀茂の翁のよめりし

霞たつ春野のひばり何しかも思ひあがりてねをや鳴くらむ

是れにつきて

冬の野は枯生にまじる草の牀にいつたつ空と雲雀なくらむ

翁もおもひありげなり我もしかりとや人聞くらむかし

蛙

夕されば蛙なくなり飛鳥川瀬々ふむ石のころび聲して

躑躅花

三吉野は青葉にかはる岩かげに山したてらしつゝじ花咲く

藤花

○はな櫻かさねてにほふ　櫻重ねの衣とかけた。櫻がさねは普通表白裏赤。

○賀茂の翁　賀茂眞淵。

○何しかも思ひあがりて　何故にまああんなに思ひ高ぶつて。あがりては雲雀の空高くあがるとかけた。

○いつたつ空　雲雀が空高く立つはいつと啼くのであらう。蓋し沉論せる作者自身の境遇を、雲雀に喩へたのであらう。

○ころび聲して　石の轉々としてころがる如き聲音を出して。河鹿はころ／＼と啼くからである。

神松にかゝれる藤も手はふれむいでやひくてふ大幣(おほぬさ)にして

春と夏こなたかなたに咲く藤の花やいづれに靡くなるらむ

大原野の春日の社に詣ではべりし時ふぢの花の松にいとおもしろくかゝりたるを我がずさの童の何の心もなくて折りつみければ里の子らがそれは神の木なりたゝりやあらむといふに驚きて泣き悲しむをとりてふと前にさゝげ詠みて奉れる

折ると見ば罪はかしこし大直日見なほしたまへ幣の手向に

牡丹を人々とよめる

色にこそ物思はすれおほけなく國かたむけに咲ける花かは

楊太妃一捻紅を

いさゝめの色にそみても其の君の面かげ見する花の名だてに

淺紅　　信美

花にそむ人の心のふかみ草うすくれなゐの色に匂へど

白　　布濟

めでたくも咲きみてるかなしらがさね粧けだかき花の君にて

白帶紅　　默軒

○いでやひくてふ大幣にして　祓への時用ゐる幣帛は、祓へ終ると、諸人これを引き撫でる風習があるのを云つた。能宣集「いそぎする川の瀨毎に引く綱を大幣なりと人や見るらむ」

○我がずさの童　我が從者なる兒童。

○大直日云々　神事の名とかけた。折つた藤の花を手向の幣と見直して下さい。大直日は神事など終つて、宮中で宴を賜はる事。齋み愼んだのを平常に直す意。

○おほけなく國かたむけに　牡丹を傾國の花と見、唐の楊貴妃に喩へた李白の絶句があるからだ。

○いさゝめの云々　聊かの色に染んでも楊太眞、楊貴妃の面影を見せるよ、花が楊太妃と云ふ名を立てるやうにして居るので。

○信美　羽倉信美、前出。

○花にそむ　心を花にうち込める

○ふかみぐさ　深見草、牡丹の異名、心の深いにかけた。

○花の君　牡丹の異稱。

○默軒　絢波默軒、蘆庵門。

あけぼのの薔花さくら忘れめやぼたにの色に匂はざりせば
敬儀

深紅

呉藍（くれなゐ）の色ゆゐるされし深み草あてなる種にいかでおひけむ
益

朱砂紅

ませの中に朱（あけ）なる玉やしきたると見えて花さく深見草かな
閑齋

紫

ときめける濃き紫の一もとにうべも貴（たの）盛しき花とこそみれ

夏歌

更衣

わた殿をいきかふ袖も軽けなり夏たつ今日のきぬの追かぜ

人妻のこれやう月のたつ衣なるればさへ更ふるならひある世に

新樹

奥深くわけしかへさの山口は青葉繁りて夏たちにけり

いと早も蟬なく陰と聞きつるは青葉にこもる瀧の水おと

加茂祭

○ぼたに　牡丹と同じ。
○敬儀　[illegible]山[illegible]儀　伊賀[illegible]家の士、廣庭の門。
○呉藍の[illegible]云々　呉国から來た意味で紅藍。藍色の袍ま[illegible]で作者を[illegible]に許されないからかく云つた。
○ませの中に　ませ垣の中に。
○ときめける濃き紫の云々　濃き紫の袍も[illegible]三位以上でなくては用ゐられなかつた。
○きぬの追かぜ　衣の動くあとに生ずる風。
○[illegible]云々　人[illegible]つては物憂き月と卯月とかけた。何故ならば、夏衣[illegible]更へる風習ある世の中であるから、人妻も[illegible]更へられる[illegible]があるからだ。
○奥深く云々　春の花を求めて、奥深く山を分け行つた意。

○けふてへば　今日と云へば。
○高き賤しきあふひ草　身分の高きも賤しきも會ひ集まると葵草をかけた。
○駿河舞　駿河有度濱で天人の舞ひ遊んだ體を寫した舞と云ふ。袖にかつらは、かつらはかづくと桂とをかけた。
○司のいろの杜若　萬葉集卷十七「杜若衣に摺りつけますらをの着襲ひ獵する月は來にけり」身に相應せぬ官人の色なる杜若を。
○まちまたぬ宿をわきてや　時鳥が自分を待つ家、待たぬ家を區別してか。
○たちばなの島のみ門云々　大和高市郡[illegible]在る橘の島、皇居に宿直しての意。
○こゝだなく　澤山鳴く。
○をちかへりなく　又元へかへつて鳴く。
○かけてをうれし　を[illegible]歌詞。
○時鳥またぬとなりも云々　自分は一心に待ち受けて聞いたが、鄰家は別に時鳥を待つても居なかつ[illegible]、人の起きた樣子のする曉の空である、けはひのするとしのゝめとを[illegible]。
○いねがてぬかも　我が妻が寢がたく居るであらうよ。

けふてへば高き賤しきあふひ草かけて神世を忍びつるかも
賀茂山の神のおまへの駿河舞そでに桂の風も薫れる

かきつばた

身におはぬ司のいろの杜若きぬにすりつけおもひでに著む

時鳥

時鳥まつをならひと夕かけて山の端にながゐせしかな
まちまたぬ宿をわきてやしのびねにさよ時鳥なきて渡れる
たちばなの島のみ門にとのゐしてやゝ時鳥聞かぬ夜もなし
世を捨てて思ふことなきあかつきに山時鳥なきてすぐなり
こゝだなく里にはすめど時鳥初音はいつも嬉しとぞ聞く
わが宿をいつ過しけむ時鳥ありあけのつきにをちかへりなく
人やどすこゝはいほりぞ時鳥このあか月の聲なをしみそ
我がそでにかけてをうれし時鳥卯の花やまの曉のつゆ
時鳥またぬとなりも聞きやせし人のけはひのしのゝめの空
夏の夜の月におくれていでぬれどやゝ時鳥をちかへる聲
旅にしてさよ時鳥聞くわれをしのびて妹がいねかてぬかも

高野やま眞木の木立の時鳥この夕暮もあはれとぞ思ふ

時鳥をしまぬ聲をいまぞなくおのがさつきの五月雨のそら

大荒木のもりに宿りてたか〴〵といむ事なげになく時鳥

植ゑはてし山田のをさが門に來てしこ時鳥なにを鳴くらむ

花の枝のあを葉たちくきこの頃は時鳥なく志賀の山ごえ

五月雨は夜中にはれて月になくあはれ其のとりあはれその鳥

高砂のをのへおちくる時鳥きくやひゞきのなだわたる舟

信濃路は野をあまたなり時鳥すがの荒野を名のりてぞなく

夏草

伊吹山させもが草のしげければうち散る霧も雨と降りつゝ

山里はかきほのひまの荒ければ内外もあらずしげる夏草

むなわけてゆくやを鹿の跡もなく茂りにけりな夏草のはら

あやめ

故里の長柯の沼の菖蒲草うべしも長き根をばひくてふ

あやめふく例たえねば都邊に花さきうづむ沼もありけり

競馬

○おのがさつき　時鳥が自分の世界と思ふ如き五月の。
○大荒木の　大和宇智郡大荒木。
○しこ時鳥　醜時鳥、いや〳〵時鳥、時鳥を死手の田をさと云ひ、冥途の使の如く考へられるから、田長の門で鳴くのを戯れに忌んだ。
○あを葉たちくき　靑葉をたちくぐり。立ち潜き。
○ひゞきのなだわたる舟　響灘と時鳥の啼くひゞきをかけた。
○させもが草　指艾の轉語。
○かきほ　垣穂、單に垣。
○むなわけて　胸毛分けて。
○長柯の沼　あめの長いにかけた、山城久世郡長池か。

駒競ふ神のみ庭にたつ人も我がかたをかのかたをこそひけ

棟花

さればとてかげ頼まれぬ鄰かなあふち花さく窗のくらきに

蚊遣火

風もなき蚊遣の煙なびきあひて暮なほ暑き里のなか道

玉だれのすげきにもれて香に薫るうすき煙や蚊遣なるらむ

五月雨

難波人蘆荷おもげにこぐ舟のつく岸もなき五月雨の頃

五月雨に須磨の苫屋の蘆簾たれこめて今日もくれぬとぞ見る

うとからぬ鄰ながらも蘆垣のまどほになりぬ五月雨の頃

早苗

五月雨を思ひのまゝにせきいれて小田のますらをさ苗とるなり

さみだれはつぎてふらねば近江の海磯わのさ苗植ゑぞ足らしつ

夏月

松風のおとはの山をこえくれば夏ならぬ夜の月すみわたる

夏河に光を見せて飛ぶ魚の音するかたに月はすみけり

○我がかたをかのかたをこそひけ　片岡の音の繰返し、自分の方を贔屓する意。ひけは駒の縁語。

○かげ頼まれぬ云々　その恵みを心頼みに出来ぬ。楝のかげとかけた。

○すげきにもれて　透にもれて。

○蘆荷　蘆を束ねた積荷。

○まどほになりぬ　垣の間のあらいにかけた。雨のため疎遠になつた。

○夏ならぬ夜　涼しさに夏とも覚えぬ夜。

夏夜

なつはたゞよるなき里と思ひけりたちのいそぎの草の枕に

すゞみ

入りつどふ千船のひまを漕ぎ出でて夕すゞみする浪花人かも

水音はたえし名こその瀧殿に夕すゞしき風もふきけり

都をば夜ごめにいでて朝日山あさ風涼し宇治の川づら

螢

蘆しげみ葉うらにすがる夏蟲のかくれてもほのみゆる光は

渡殿の下ふく風のひやかにてせきいれし水に螢とびかふ

此の夕ひきやわすれし螢火のひかりに見ゆる門のいたばし

蟬

あけぬれば棟花さく葉がくれにやめばつがるゝ蜩の聲

なく蟬のやどりの松の木の本にもぬけの衣の風に吹かるゝ

照射

夏山のともしの篝うちしめり雨うちそゝぐ曙のそら

宵のまの月はかくるゝ雨もよにともし雲やくしがらきの峯

○たちのいそぎの　出發をいそぐ

○名こその瀧殿に　山城葛野郡大覺寺内にあり、大覺寺の瀧殿と云ふ。拾遺集の「瀧の音は絶えて久しくなりぬれど名こそ流れて猶聞えけれ」に思ひ寄せた。

○朝日山　山城宇治郡朝日山、新古今集卷六「麓をば宇治の川霧たちこめて雲居に見ゆる朝日山かな」に思ひ寄せた。

○此の夕ひきやわすれし　門の釣橋を夕暮になると、家の方へひき上げ置くやうになり居る構造のもの。

○やめばつがるゝ　一方の蜩の聲がやめば、又他の蜩が鳴きついで。

○もぬけの衣の　蟬のぬけ殼の。

○雨もよに　雨の夜に。

○しがらきの峯　大和信貴山。

扇

夏ならぬ袷かきすさべるかはほりのそれも涼しき花の種々

鵜飼

御舟近く波をこがせる篝火に鵜のとる魚の數も見えけり

西山夏雲

夕毎に峯なす雲はくづをるゝ花にあたごの荒き山風

清水むすぶ

旅人のいくたびひでてむすぶらむ泉のかはの夏のわたり瀨

ゆふだち雨

かきにごし岩こす波もやがてすむ清瀧川のゆふだちの雨

夕立の軒のやどりを始めにてうれしき老が友もとめけり

湊いりの五手の船は早きかも漕ぎそけてくる沖の夕だち

風早み鞭さすかたに雲おちて我がこまいばふ野路のゆふだち

秋にまた色はならはぬ葛の葉の裏ふきかへす夕立の風

夕顏

たそがれにほの見し花はしら〳〵と有明の月の影に殘れる

○かはほり　扇の古名。

○花にあたごの　花に當る愛宕の山風。

○ひでゝむすぶ　ぬれて掬ふ。

○泉のかは　山城相樂郡泉川。今の木津川。

○五手の船　一手は櫓二挺で即ち十挺でこぐ船。一說伊豆手船で伊豆式造りの船。

○漕ぎそけてくる　夕立を漕ぎ退けて來る。

○我がこまいばふ　我が乘る駒の嘶く。

○秋にまた色はならはぬ　秋に紅葉する事は習はぬ。

撫子

朝寢髪かきなでしこの花の上に露のしばしもめかれずぞ見む

藤原の宇萬伎ぬしの手向を洛陽三條の三寶寺の御墓に煙にあげて奉れる

歌

鳥が鳴く　東の國の　武藏の海　大江の水戸に　高殿を　たかしりまして天の下　まをしあづかり　すめろぎの　みことのまゝに　民草を　靡けたまへば　物部の　八十氏人は　夜の守　晝のまもりと　かしこみて　仕へまつれり　國つちを　たひらの宮の　大城には　みこともち人　わりすゑて　外のへ守らひ　すめろぎの　日々のみことを　はゆまして　まをしたまへり中のへは　千々の軍を　こめおきて　弓とりしばり　千はや人　たはわざやすと　夜の守　晝のまもりに　召しくはふ　天のかな機　足玉も　手玉もゆらに　神の織る　しづ屋のうしは　卯の花の　うき事もなく　いでてこし道の空より　わづらひの　神やつきけむ　手束ゆみ　杖につきつゝ　中の重に　さもらひしさへ　時鳥　きなく五月の　五月雨の　はるゝ日もなく　末つひに　うちこやしぬれ　さね牀の　夜をすがらに　故里の　家をぞ忍ぶ晝はもよ　息づきくらし　水無月の　てる日をやみに　ゆく水の　すぎて空

○藤原の宇萬伎　加藤宇萬伎、又美樹、通稱大助、又五郎左衛門、幕府の士、二條城勤番、賀茂眞淵の門、秋成の師、安永六年六月十日歿、年五十三。
○大江の水戸に　江戸を意味す。
○天の下まをしあづかり　徳川將軍をさす。
○國つちをたひらの宮の　京都をさす。
○大城には　二條城をさす。
○はゆまして云々　早馬で江戸へ傳へる意。
○千はや人たはわざやすと　武勇な人が愚かな所業をするかと。
○召しくはふ天のかな機云々　召し出し加へる金具飾れる機。
○しづ屋のうし　靜屋大人、美樹の號。
○中の重にさもらひしさへ　兵衛の官人の守る所を中重と云ふ、二條城の中の隅に勤め居たのであらう。
○うちこやしぬれ　うち臥すの敬語。

年になりぬ　すべもなく　昔のみしなかゆ　おきつき處

反歌

古をけふにむかへて忍ぶともいや年さかるあすの日よりは

夏祓

唐崎のみそぎははてて誰が里に袂涼しくこぎかへる舟

大ぬさの柵かけてとゞむとも流るゝなつのゆふ祓かな

秋歌

初秋

紀の國のむろの早稲田のほむきより今朝ふきわたる西の秋風

晴砌風梧脱

軒ふかき玉の砌の苔の上に夜の間のあきの桐の一葉は

七夕

天の川ふねさす棹のさはればや月のかつらの花ちりみだる

天の川河波たかし夜ごもりに歸すはすべなあけば面なし

[illegible]年目たちは寛政二年である。

○いや年さかる云々　又明日からはいよ／＼年が隔たつて行くのである。

○大ぬさの柵かけて　宇治川は柵の名所であるからかく云つた。

○紀の國のむろの　牟婁郡。○ほなき　穂の向いた方。

○月のかつらの花ちりみだる　月光の隈なく照らすのを、月の桂の花の散るに喩へた。

○夜ごもりに歸すはすべな云々　夜のうちに歸すのは名殘惜しさにせん方なく、夜が明けては恥かしい。

○人まをまちて　人の居らぬ間を待ちうけて。

○そこと見ましや　稲妻の光がなくては、野中の松をあそこ、とはつきり見きはめ得ようや。

○初秋十七夜　七月十七日の夜。

○ゆくらくら　ゆくら〳〵の約、悠々と。

残暑

朝顔の凋まぬほどにふりはれて雨よりのちの秋のあつさは

くれなばとたのめし秋の容見ればふきとづる西の八重ぐも

秋蝦

秋されば下のやしろのみたらしに人まをまちて蛙なくなり

稲妻

秋たちて幾日もあらぬに風をいたむ窓よりもるゝ宵のいなづま

稲妻の光ならずばくれはてて野なかの松をそこと見ましや

秋風

吉野山紀の路に通ふみちゆけば篠わくる野の秋の夕風

村雨の晴るゝ淺茅の露はらにぬれてや秋のかぜはふくらむ

初秋十七夜三井寺の高きに登りて月を見る

てる月の影は波もて砕けども光は海をわたるなりけり

あした湖上の樓に遊ぶ

白雲に心をのせてゆくらくら秋のうなばら思ひわたらむ

の時草かりしおはし給ひね草のごこ寺に行ふ小女は君がまに／＼」を思ひ寄せた。

○孫思邈　唐華原の人、百家に通じ特に醫藥にすぐれて居た、文帝が招いたけれど行かず、太宗が召したが老年を口實にして行かなかつた。

○花のひもとく　誰に身を許して花は開いたのか、ゆるして下ひもとくとかけた。袴の縁語。

○月草　鴨頭草と同じ、つゆ草、俗にいふ草。

○めうつしに云々　つゆ草の深藍色を摺りて染めつけようと思つたのに、わけもなくいろ／＼の草花に眼移りして、どの色にしようかと迷つた。

萩花

朝な／＼露だにおもき萩が枝の末ふすまでに雨の降れれば

朝露はまだき下葉にきえ殘る野寺の庭の秋はぎの花

萩が枝の末はさゞれに流れあひて波も花なる野路の玉川

女郎花を植ゑて孫思邈を思ふ

あまたうゑて人や姤める女郎花老を養ふ色香とを見よ

花每に露な結べる女郎花こゝろこまかに見るべかりけり

槿花

一日てふそれも榮えをあさ露のひるまをまたぬ野邊の貌ばな

藤袴

花々に色はまけぬる藤袴野はみながらの香に匂ひけり

香にめでぬ人こそなけれ藤袴たれにゆるして花のひもとく

鴨頭草

月草にすらまく衣をめうつしにあやな千種の色に迷へる

紫菀

○しこ草のしこちし人も云々　紫菀の異称を、鬼の醜草と云ふから、しこちは讒言した人。
○棚橋　板を棚のやうに渡せた假橋。
○矢田の野　越前南條郡矢田野。
○こゝにこむる　籠にとぢこめた。
○つゞりさせ我機おらむ　つゞりさせよと鳴く蟲の聲、機おらむは機織り即ち今のきりぎりすの音。
○夕ぐれは　云ふと夕暮とかけた

我ならぬあだ名もよしやしこ草のしこちし人もなき世なりせば

刈萱

風わたる野路の刈萱下をれて穂に出でし秋のかひやなからむ

蟲

秋の日の峯にいるさをまちかねてくさむら毎にすだく蟲の音
蟲の音の多かるかたに露わけて野路の棚橋いくつこえけむ
矢田の野の淺茅にすだく松蟲のなくねをとめて我たち惑ふ
こゝにこむる友をしのびて松蟲の野に誘ふとや諸聲に鳴く
庭くさに鳴きにしものを装うたて夜さむのとこにちかよる

蟲聲非一といふことを

つゞりさせ我機おらむ秋の野に暇をなみの蟲の聲々

秋夕

思ふ事ありとはなしに悲しきは秋のならひの夕ぐれのそら

傷岡雄之亡妻歌

夏過ぎて　秋は來ぬらし　吹く風の　目にし見えねば　朝かけを　すゞしと
人の　夕ぐれは　さびしかりけり　荻の葉の　音はさやぎて　蟋蟀の　鳴く

[illegible]聞けば　古の　人のあはれと　いひ繼ぎし　時には成りぬ　其の秋の　あはれちふことを　我のみの　身にしおふかは　妹なねは　秋たつ空の　すゞろにも　よみぢに國を　何しかも　ふるさとのごと　立ちていにし　空しき牀に　留まりて　いかにせよとか　男じもの　腋ばさみたる　はらからの　綠兒と共に　泣く兒なす　したひなげかひ　こひまろび　足摺りしつゝ　まどふらむ　人こそあはれ　明日よりは　いかにせましや　年月を　長くともひて　語らひし　ことの悔しき　妹なねは　よみちふ國に　先立ちし　うなゐはなりに　相見つゝ　手携はりて　遊ぶらむ　俤をだに　見まくほり　枕によれど　いねがてに　夢も結ばず　荻の葉に　秋風さやぎ　こほろぎの　なく宵々の　さね牀ぞあはれ

霧

みかの原夕越えくれば泉がはいづこわたりもみえぬ秋ぎり

朝霧の海の玉藻と見しはこのふもとにしげき杉の群立

おぼつかな濱名のわたり霧こめて引馬の驛あさだちかぬる

　河内國に人をとぶらひし時道の空にてよめる

伊駒根の雲は嵐にふきおちて麓の里をこむるあま霧

○妹なね　妹と同じい、なねは親しんで呼ぶ語。
○男じもの　男ながら、男子ではあるが。
○泣く兒なす　泣く稚兒の如く。
○うなゐはなりに　幼い子に。うなじの髮で垂れ放つ意。
○相見つゝ手携はりて云々　亡き妻は亡き兒と死の國で逢ひ、手を把つて遊ぶであらう。
○みかの原　山城相樂郡瓶原、泉川に近いので續けた。いづこはいづみと音の繰返し。
○引馬の驛　遠江敷智郡引馬野、今三方原。
○道の空　道の途中。

河内のくさかといふ里に宿りてある程

我すめど門たゝくべき人もなしこの山寺のあきの夜のつき

月歌

山のはにさし出づる月の影みれば西をはじめの秋ならなくに

我がすれる花田の衣のつき草の色なるそらに月すみわたる

千里までてらせる影とゆふ波の汐のたゝへに月さしのぼる

秋の月仰ぎてのみもありがてにふでの林をわけぞ煩ふ

世のうさを昔になして月見れば秋をさかりとながむばかりぞ

數へきく秋てふ秋の聲たえて月かげ高く夜は更けにつゝ

ひとへ山へだつ都は秋のよの月をにぎはひ見るものにして

山月

世にいづる道はたえにしやますみの月のあはれは秋ばかりかは

峯月

寢さむれば比良の高ねに月おちて殘る夜くらし志賀の海面

田家月

[illegible]

○くさか　河内中河内郡草香、又日下。生駒山の西。山寺と云ふのは生駒の興法寺であらう。

○西をはじめの秋ならなくに　春は東より、秋は西より來ると云ふ支那思想、されば春は東風、秋は西風である、しかし今東よりさしのぼる月を見れば、秋氣に滿ちて、秋は西からはじまると許りは限らぬよと云ふ意。

○我がすれる云々　自分が露草で摺り染めた藍色の衣のやうな色の大空に、月が遠く澄み渡つて居る。

○夕まどひ　夕暮に集まつて居る

○墨江　住吉。墨田川ではない。
○青柳の　かづらの枕詞。葛城山。
○いぶき拂ひて　いは接頭語。吹き拂ひて。
○月よみ　月讀尊、月をさす。
○あらゝ松原　霰松原、今住吉の安立町邊と云ふ。

程もなくうつりしゆけば長岡のふる里さむく月は照らし

秋夜遊墨江歌

饒速日(にぎはやび)　神のみことの　翅なし　漕ぎこし舟ゆ　そらにみつ　大和島根の
青柳の　かづらき山も　生駒峯も　常ゐる雲は　秋風に　いぶき拂ひて　月
よみの　出でましの空は　夕霧の　たちものぼらず　住の江の　敷津にたて
ば　あからひく　入日の影に　沖見れば　綱引き綱ひく　磯わには　小舟つ
りする　秋の葉の　風のみだれに　岸見れば　あらゝ松原　よる波に　根每
晒せり　白鷺の　ねぐらをほのに　夕闇の　くるゝと見しを　月讀の　神の
命の　出でましの　みさきを拂ふ　秋風も　身にししまねば　汐みつる　清
き濱邊に　秋の夜の　更くるをしらに　あそびす我は

反歌

伊駒峯にいさよふ月を波の上の中空までも見つゝあそばむ

てる月にあられ松原ひま見れば桂の花の土に散りしく

月前述懐

秋風に月すむよはのしら雲をはらへどかゝる我がこゝろかな

宵々に月はいでぬかなぐさまぬ心のくまをてらすばかりに

田舍住せし時

たゞならぬ雲のけしきに門立ててすはさればこそ野分ふく風

詣八幡山放生會歌

秋風は　日にけに吹きぬ　白つゆは　朝に夕に　淺茅原　玉と見るまで　おきそふと　人の語れば　空蟬の　世わたるわざの　いとまあらば　いきて見ましと　思ふ空　安からなくも　たまさかに　立ちいでけらし　堀江川　舟きほひつゝ　夕川の　みをさかのぼり　漕ぎゆけば　秋はも中の　十日あまり　四日の夜よしと　月影は　高くさしいでぬ　伊駒山　常ゐる雲は　秋風に　晴れみ曇りみ　岸つたふ　水陰草に　なく蟲の　聲をしきけば　かにかくに　秋ぞ悲しき　衣手に　露はそほちて　波の路　遠く來にけり　ぬば玉の　夜さへふけぬれ　月よみの　光のさやに　みさくれば　我が心ざす　八幡山　神さびたてり　此の夜らや　神いさめすと　宮つこら　まゐりつどひて　白妙の　袖ふりはへつゝ　須賣神の　出でましの道は　岩がねの　こりしく道ぞ　綴たてる　さかしきみ坂　たひらけく　歩み行くめり　神遊の

○心のくま　心の曇り、月の縁語。
○八幡山放生會　男山八幡宮で、陰暦八月十五日、神事として生物を放つ法會。
○日にけに吹きぬ　日に〱吹きまさる。
○空蟬の　世の枕詞。
○秋はも中の云々　八月十四日。
○水陰草　水のかげに生ずる草、茲では單に岸邊の草。
○みさくれば　遠く眺むれば。
○神いさめすと　神を慰める意。
○こりしく　凝り敷く。一面に固く敷きつめた。
○綴たてる　摺伏して居る。
○神遊　神樂と同じい。

畏けれども　いはまくは　畏かりけり　不知火の　筑紫の蚊田に　あれましし　そが跡とめて　里の名を　宇瀰（うみ）とたゝへて　ながき世に　あれつぎけらく　大神の　大御心は　遠じろき　河内の國の　輕島の　あきらの宮に　天の下　治め給へば　たく衾　しら伎の國も　言さやぐ　百濟も高麗も　草木なす　風に靡きて　年のはに　八十船うけて　貢もの　奉るなべに　もろこしの　賢き道の　ふみどもを　よみて聞ゆと　唐人も　仕へまつれば　萬世の　今のをつゝに　傳へ來て　大御代ごとの　すめみまの　神ながらしも　みはかりに　撰びとらして　國民を　治め給へば　そが法に　天のます人　益（ますます）も　榮ゆく事は　此の神の　大御心ぞ　いはまくも　畏かりけり　かけまくも　畏きろかも　しぬのめの　ほがら／＼と　天の原　朝霧こもり　出づる日は　此のいつきます　すめ神の　遠つみ親と　あがめます　大日靈女（おほひるめむち）の　神ながら　天てらします　御影ぞと　あく世もあらず　拜みつるかも

鴈

てる月にかりの稀人なきわたる我がまつ友はこよひ來なくに

飛ぶ鴈のゆくへは霧に埋もれて鳥羽田の千町夕暮れにけり

○不知火の　筑紫の枕詞、
○蚊田に云々　筑前の國でお產まれなすつたその跡を殘して。
○宇瀰　神功皇后三韓征伐後、筑前粕屋郡宇美村で、品陀和氣命をお産みになつた卽ち應神帝。
○輕島のあきらの宮　河内南河内郡古市村大字譽田。應神天皇御陵と稱する。
○たく衾　しら伎の枕詞。
○言さやぐ　百濟の枕詞。
○もろこしの賢き道の云々　百濟の賢人和邇と共に論語十卷、千字文一卷輸入された事。
○天のます人　天下の人民。
○大日靈女　天照大神。
○稀人　鴈を珍客と見たのである
○鳥羽田の千町　山城紀伊郡上鳥羽村の廣い田を稱する。

誰が衣かりがね寒くなくなべに月見し庵も戸ざしせるかな

擣衣

里はまだねぬ聲すなり唐衣うつの山邊をこえて來つれば

何くれと語りつゞけて蘆垣のとなり隔てず衣うつなり

里はあれて尾花つゆちる夕暮に秋をうづらのころもうつ音

人やりの我がふる衣うつ音をふもとの家にきく夜寒しも

寢よとつく鐘より後に音ふけて人まちがてらころもうつなり

小鷹狩

武藏野の尾花高がやふみしをり小鷹手にすゑゆく人やたれ

鹿

月かゝる木末の紅葉ちりはてて牡鹿のたちどあらはなりけり

霜の上におきふししげきさを鹿のなく聲毎に我もねざめて

時雨してやどりやはせしさ夜中におどろく軒の鹿の一聲

しかりとてあはせし夢か野にひとり妬きをおのと恨むばかりぞ

聲のみやひとり月見る窗の前に尾上の鹿のかげもおちくる

○かりがね　衣を借りると雁とをかけた。

○うつの山邊　打つにかけた。

○秋をうづらのころもうつ音　秋を憂く思ふと、鶉衣をうつとかけた。鶉衣は繼ぎはぎの着物。

○人やりの　人任せの。

○小鷹狩　秋小鳥をとる鷹狩。

○小鷹手にすゑ　はやぶさなどの小鷹を手に据ゑのせ。獲物を發見した時、手に押へた紐を放せば鷹が鳥に飛び行くのだ。

○たちど　立ち所。

○しかりとてあはせし夢か云々　鹿としかありとかけた。仁徳天皇紀に見える夢野の鹿の傳說を材料とした。

もみぢ葉をとめつゝ來れば春日野の男鹿の淋に我も宿れり

紅葉

朝戸あけて宿りの野邊を見渡せば近き林にもみぢ色づく

大原や里のなか道秋ゆけば青葉まじりにもみぢ散りしく

とめこしをかひなくぞ見る山寺の早き戸ざしの庭のもみぢ葉

九重のあきは西より東よりもみぢかざしてかへる宮人

庭の面にみだれて遊ぶ沓おとのありやと見しもちる紅葉かな

荒乳山せきぢの北のもみぢ葉に雪か時雨か雲のたちまふ

大あらきの森の下草時雨にも霜にもあはでもみづるやなぞ

山里の稻ほす賤が門むしろしぐれぬけふは紅葉ちりしく

遊箕面山歌

神代より　いひつぎけらく　天地の　始めの時ゆ　もちわきて　大山祇の　なしませし　いづこはあれど　雨にきる　みのおの山の　谷間ゆく　清き河内は　眞榊の　枝にとりかけし　鏡なす　そこひもすめり　此の山に　鎭もる神の　にぎ魂と　見てやすぎなむ　横たてる　峯の岩がね　きりとほし　おちくる瀧は　天の原　ほろにふみあたす　いかづちの　音にまがへれ　此

○とめこしを　さがしつゝ來たのを。かひは峽にかけた。

○荒乳山　愛發、有乳とも書く、今は荒路と云ふ、越前と近江の國境にある山、關が設けてあつた。

○大あらきの森の下草　古今集卷十七「大荒木の森の下草老いぬれば駒もすさめず刈る人もなし」に據つた。

○もみづるやなぞ　紅葉するのは何故であらう。

○箕面山　攝津豐能郡箕面村、瀧安寺の上に瀧がある。

○もちわきて大山祇の　とりわけて大山祇神が。大山祇は山を支配せらるゝ神。

○雨にきる　蓑にかゝる枕詞。

○にぎ魂　柔和な徳を備へた魂、あらみ魂は之れに對し、勇武な方面を代表する魂。

○ほろにふみあたす　散り〳〵に踏み渡す。

○此の山をうしはく神の云々　此の山を支配さるゝ。

の山を　うしはく神の　あらみ魂かも

瀧の肩に紅葉一木たてり

うつせども影はとゞめずおちたぎつ岩垣もみぢ色深きさへ

秋のはて

秋も早二十日晦と手を折りて山の紅葉を思ふ頃かな

久かたの天の河原もかけきえて秋の夜くらく雁なきわたる

豐年の新なめ祭る神の前に幣をちらして秋はいぬめり

秋はつる日信よしの家に庚申をまつらるゝにいきあひて歌よめといふによめる

枕にはよらぬならひの今宵しも秋の別れをかねて惜しまむ

かへし　　　　信美

誰か宿も枕によらぬ今宵とてゆく秋さへもとまらざりけり

冬歌

霰

[illegible]

○手を折りて　指折り數へて。

○庚申をまつらるゝ　かのえ申の日、三猿の像を掛け、庚申青面の神又は猿田彦を祭る。庚申待。

○枕にはよらぬならひの云々　此の庚申待の日寝ると短命になるとの迷信あり、更に此の夜妊むと[illegible]盗賊の子が生まれると稱せられる。故に枕に近よらぬと言つた。

なこくのは村の若い男女が夜集まつてするからである。

○心づくしのきせ綿に　心をこめて菊の香の散らぬやう、花に被せ置く綿に。

○笠の山　貸さでぞさ君を繰返した、笠の山は山城宇治郡笠取山を云つたのか。

○すゆき　簾のすき間に。

○有馬やま　攝津有馬郡。

○しなえうらびぬ　萎れわびしがつた、悲しみのために。

○靫おへる伴の男廣き　矢を入れる靫を背に負へる靫負の長の多い。武人の族長の多い。

音たてゝ[illegible]冬の山里

苫あけて夜のほど見れば友船いそなたしぐれて波騒ぐなり

霜にのみ心づくしのきせ綿にうたてしぐるゝ秋菊の花

片岡のもりて日かげはさしながら木の葉をさそふ夕時雨かな

蘆庵時雨のやどりして其のあした傘もたせこされしにいひやる

むら時雨ふるにとなれる笠の山かさでぞ君を留めましもの

落葉

森ふかき神の社の古簾すゆきにとまる風の落葉は

散りはてて其の木ともなき冬枯に一葉なごりの色は見えけり

有馬やま落葉に道はうづもれぬ君がみゆきの跡たえしより

遊佐保山歌

神無月　時雨の常に　佐保の内は　露霜さむみ　こゝにきて　往にしへもへば　草木すら　しなえうらびぬ　靫おへる　伴の男廣き　大伴の　ますらたけをが　家居せし　山路にけふは　袖ぬらすかも

霜

おき渡す霜の絶間となりにけり今朝はおちたる野路の棚橋

○庭たづみ　潦、庭の溜り水。
○かしこきみ坂こえくれば云々　木曾御坂であらう、信濃西筑摩郡今神坂村、木曾谷の南門、美濃との國境。
○おぐら江　巨椋の池、山城久世郡の北部に在る湖、元宇治川の入江であつたからおぐら江と云ふ。
○こぞめの色に見えしを　濃染の色に見えたのを。

冰

夜の程にふりしや雨の庭たづみ落葉をとぢてけさは冰れる

信濃路のかしこきみ坂こえくれば冰を渡る海もありけり

霰

宮木ひく杣が假寝の板ぶきに霰おと聞くさ夜のねざめは

霙

みぞれふり夜のふけゆけば有馬山いで湯の室に人のともせぬ

おぐら江の堤を冬ゆく　二章

風わたる枯葉にあさの霜きえてあしの穂白し淀のおほさは

何にこの萱葉とゞめし花蓮浪もこぞめの色に見えしを

冬月

さゞなみの志賀の海面月さえて冰になみのたつかとも見ゆ

雪ふると見し夜の雲は名残なく晴れてふけゆく月のさやけさ

池の面にとづるとぞ見し月影は空にさやけくこほるあかつき

さらしなや姨捨山のかぜ冴えて田ごとに冰る冬の夜の月

神無月の[illegible]

風もなき朝立つ霧のそれをさへ流れてはやき宇治の川なみ

冬枯

冬がれてあれのみまさる菅原や伏見も西のみやこなりしを

ちり果てゝ寒けに靡く枝ごとに芽はりて見ゆるかどやなぎかな

かつまたの池の蓮のかれ葉にかぜ吹き渡るあした寒しも

千鳥鳴く須磨山かげの濱つゞら浦つたひしも冬がれにけり

雪

故鄕はいかにふりつむけふならむ奈良の飛鳥の寺の初雪

一年のむかしにたえし山里をけふとはずばと雪ふみまよふ

大原のをかのおがみがふらす雪やまと國ばら道もなきかな

杉が枝を雲は走りて吉野なる櫟の尾上にははだれゆきふる

大ぞらをうち傾けてふるゆきに天の河原はあせにけむかも

誰が戀の終の夜かれとなりぬらむけぬが上ふる雪のみちしば

たには路に打ち越えくれば野も山もてる日ながらにはだれ雪ふる

鯨よる浦やま松につもるゆき波にけたれてまたふりつもる

よびかはす聲をたよりに夕こゆる山路をしらず雪のふれれば

○伏見も西のみやこ　此の伏見は大和生駒郡の地名、安康帝の都と定められた地、菅原も此の附近、伏見の村の字。

○かつまたの池　大和生駒郡勝間田の池。

○濱つゞら　濱に生ずる青葛。つたひは其の緣語。

○大原のをかのおがみがふらす雪　萬葉卷二、天武帝と藤原夫人との贈答歌「吾が里に大雪降れり大原の古りにし里に降らまくは後」「吾が岡のおかみに乞ひて降らしめし雪の摧けて其處に散りけむ」に據つた。大原は大和高市郡小治田宮、おがみは龍神、雨雪を司る神。

○櫟の尾上に　櫟の生じて居る山頂。

○はだれゆきふる　斑雪、まだらな雪が降る。

○あせにけむかも　天の河原は水淺くなり涸れたであらうよ。

○誰が戀の終の夜かれと云々　夜かるとは夜の通ひの絕える意。

○けぬが上ふる　通はぬので足跡で雪の消えない道芝に又その上に雪が降る。

雪淺し

いつしかとまたれし雪を朝日さす松の雫に見るがわびしさ

雪深し

聞きしより思ひしよりも冬深き雪の下なるこしの旅寐は

故里のなには江いかに寒からむかもの河原に雪のふれれば

根芹おふ田井の水澀(みしぶ)の色ながらこほれるうへに雪のつもれる

但馬なる雪のしら濱風さえてなほふりつもる雪の白はま

冬深みゆきふりつけばみ越路の松の梢は道のしばぐさ

積む雪のとゞろに崩る山かげは朝戸をおそき里のかど〳〵

感懐

九重に八重ふりつめるしら雪の下にうもれて老いや朽ちなむ

沫雪のあはれは老が思ふこととつむとはすれどした崩れして

狩

大君のみ鷹あはすと狩る杖のおとたかしもよ野路のふしはら

水鳥

巨椋のいり江の小舟漕げばたちかへれば浮ぶをし鳥の聲

〇松の雫に云々　待たれし雪に賞翫もせぬにはや朝日に解け、松の雫となつたのを見る心わびしさ。
〇水澀の色ながら　水垢の色のままで。
〇雪のしら濱　雪の白にかけた。
〇道のしばぐさ　雪深く松の梢のみ僅かに現はれて、道のはたの芝草のやうに見える。
〇九重に八重云々　帝都に深く降れる。九重に八重と云ふ数詞を用ゐた。
〇つむとはすれど云々　つむ、下崩れ、沫雪の縁語。沫雪の哀れさに似た老人の自分の思ひは、深く考へる氣力もなくすぐ崩れてしまふ。沫にあはれと同音の繰返し。
〇み鷹あはすと　御鷹に獲物を捕らしめんと。
〇狩の杖　鷹狩に鳥を追ひ立て、又猟犬を制するに用ゐる杖。
〇巨椋のいり江　前出、山城久世郡。

風ならば閨戸に開くを靜かなるそらに嵐のあぢのむら鳥
池のしま松のさ枝にゐるをしの妻よびかねて波の上に落つ

翠池浮鴨

おのが名の青波たてて冬のいけにこゝだ浮べる鴨といふ舟

千鳥浦つたふ

須磨の山の松ふく風や送るらむ生田の浦に千鳥なくなり
大井がは冬はあらしの山松のかげみる淵にちどり鳴くなり

網代

夜舟こぐ宇治の川浪騷ぐらし網代にかゝる氷魚のみだれは
うちかけし波さへ冰る網代木をもりあかすらむ宇治の里人

冬の梅

こぬ春にあらぬものから待つ程を梅はこゝろにまかせてぞさく
なには江や西ふく冬の浦風にそむけてひらく梅の初花
枯蘆にこもれる沼の岸見れば花さむげなるうめのひともと
開くやと冬の北窗あけ見ればふゝめる梅に雪のかゝれる

佛名

○あぢのむら鳥　味鴨の羣。味鴨は鴨の一種、
○おのが名の　青頸鴨をさす。
○こゝだ浮べる　澤山浮んで居る。
○冬はあらしの山松の　冬は嵐吹くと、嵐山の山名とをかけた。
○氷魚のみだれは　氷魚は鮎の異名、いさゞ。
○もりあかすらむ　番して夜を明かすであらう。
○こぬ春にあらぬものから云々　來ない春ではないのだけれど。春待つ間も心憂く思つて、梅は自分の勝手に咲くのである。憂と梅とかけた。
○佛名　陰暦十二月十九日から三日間の法會、佛名會。佛名經を誦するのである。

○あけ衣　緋の衣。明けて出づさ詞の繰返し。

○年毎にやらへど　毎年十二月晦日に鬼をはらふが。

○世の中にさはらで　妨げられないで。垣の妨ぐるにかけた。

○荷田信[illegible]　荷田信[illegible]、荷田東満の孫、[illegible]の子、[illegible]禰宜、従四位[illegible]摂津守、[illegible]の門人。

○試みらるゝにやと俤こゝろする　自分の歎きを[illegible]られるのかと、ひがみ心が起るのに。例の作者の性癖の現はれである。

○つゞめきし歌　低い聲で云ひし歌。さゝやくと同じい。此の歌は萬葉集卷五、山上憶良の貧窮問答歌を思ひ寄せたのだ。

○たななし小舟　舟縁のない小舟

○澳つかいとりがてぬかも云々　左へ行く櫂、邊つかいは右へ行く櫂の漕ぎ方。澳つかいを沖へ漕ぐ[illegible]、邊つかいを岸近く漕ぐ[illegible]にとる[illegible]、[illegible]後説を採つたらしく歌つて居る。

○難波江の蘆の八重葺　ひまもなく[illegible]。

聲清く唱ふる御名を頼まれて身は罪なしと思ひこそなれ

御名となふ夜るの法師があけ衣あけていづとも誰か咎めむ

追儺

年毎にやらへど鬼のまうでくる都は人のすむべかりける

歳暮

谷水の音羽の川も冰るて淀めど年にとまらざりけり

老いらくは安きことなり年月のくるとおくとの跡につきては

田舎にありし時

世の中にさはらで年もくれにけり八重葎さへかれしかきねは

年の暮に荷田信郷とひ来てめづらしく都の春を迎へらるゝことよ客中の歳暮よみて聞かせ給へ翌まうでむとていぬ試みらるゝにやと俤こゝろするに日くれて信美の來られしに筆とりてよとてつゞめきし歌

空蟬の　世は海にかも　我はもよ　たななし小舟　沖邊ゆかば　風をいたみか　澳つかい　とりがてぬかも　ありそべは　波の騒げば　邊つかいも　とりえぬかもや　人皆は　しかにはあらじを　我はもよ　世のしれ人ぞ　難波江の　蘆の八重葺　隙(ひま)もなく　物をぞ思ふ　心から　すみか定めず　草枕

たびとあはれと　都人の　みらくをやさし　水無月の　あつき晝はも　夏蟲の　ほむしの衣　一重こそよき　夜半もよ　露にぬれつゝ　秋されば　ひぢこそまされ　天の河　仰ぎて見れば　月影は　滿ちてぞかくる　我が齡　我が世もしかぞ　長月の　夜寒になれば　鴈がねの　おほふ翅に　もる霜に　はだへ冰れど　冬ぎぬの　神も守らず　やれくたつ　時雨の雨の　古衣　身にとり纏ひ　ぬる夜稀に　わびつゝぞある　しかはあれど　世は海なれば　大ふねに　眞楫しゞぬき　わたりする　人のうけきも　よろこびも　我はしらずえ　みふゆ盡き　春は近けど　西の市に　たちも走らず　東の　市にもいでず　足引の　山邊の家に　庭雀　うすゞまりをり　かた鹽を　とりつゞしろひ　さす鍋に　湯沸しくみて　新玉の　來經ゆく年を　迎ふとや聞く

右寛政五年六月漂然來京師茲歲冬十二月二十八日夜賦之

歲晩夜坐感懷

此の年や　何ぞの年ぞ　此の夜らや　いかなる夜らぞ　荒玉の　來へゆく月日　老が身に　たへぬ重荷を　弱車　かけて忍べば　古は　うけきが中に　喜びも　ありへしことを　白なみの　あとなきかたに　すごし來て　いまの現の　喜びに　うけきがそふは　我のみか　豐葦原の　久方の　天の益人

○都人のみらくをやさし　都人の見るのを心恥ぢ。
○ほむしの衣　羽蟲の誤りか。
○眞楫しゞぬき　櫓を繁く漕ぎ。
○庭雀　うすゞまりをりの枕詞。
○かた鹽をとりつゞしろひ　固鹽を一口づゝ食ひ。
○寛政五年　秋成六十一歲の時。
○弱車かけてしのべは　弱い車に重荷をかけのせること、かけて想ふこと。

おのが世の　よけきにあかねば　悲しびを　むかひの岡の　櫻花　さきのををりに　ぬばたまの　一夜の風に　ちりかすぎなむ　其の花の　み盛りのごと　八隅しし　國のはたてに　仰ぎ見て　阿部橋の　常闇と　思ひ憑みて　夜の守　晝のまもりの　少女らが　赤裳ひきはへ　かみのごと　つかへませしを　此の年は　何ぞの年ぞ　新玉の　來へゆく月日　くれはてて　月もかくれぬ　其の月の　いりぬるがごと　闇夜なす　黑き御車　とゞろかし　よみちふ國に　いでましの　御供の人も　鶴ばみの　にぶ色衣　にふゝにぞ　歩みやつかると　をろがみの　心もあらねば　弱車　ひかれもいでず　葎生の　門さしこめて　此の夜らを　もりてぞあかす　かけまくも　かしこけれども　玉きはる　命なにせむ　老が身に　あすを春とも　おもほえず　あはれあはれと　此の夜らを　歎きてあかす　かしこけれども

反歌

たちさへしよもつ平坂岩くえてとほらふ道といつかなりけむ

よわ車とほらふ道ぞたのまるゝ老がこゆべきよもつひら坂

有國母御葬送之大路與寓居相近因有斯作

年かへりてむ月の公ごとゞも皆とゞめさせ給ふが二月朔日を始めに御ため

○おのが世のよけきにあかねば　我が世のよきに飽かねば。

○悲しびを　悲しびをむかひの岡の　悲しびを迎へしとかけた。

○さきのをゝりに　咲き撓むに。

○國のはたてに　國のはてまで。

○阿部橋の云々　隆の一種と云ふ、橋に此世の闇から持ち來つたのでとこ宮とかけた。

○鶴ばみのにぶ色衣　橡の鈍色衣、團栗の殼を煮た汁で染めた濃き鼠色の衣、喪服である。

○にふゝにぞ歩みやつかると　にぶ色の音の繰返し、陰鬱になるので歩み疲れるかと。

○此の夜らをもりてぞ云々　此の夜中目を放たず起き居て明かす。

○玉きはる　命の枕詞。

○たちさへし云々　立ち塞ぎし黃泉つ平坂、現世と死の國との堺を云ふ。古事記來上に、伊弉諾岐命女神に追はれて此の地まで逃げられた事が出て居る。岩で崩れていつ死の國への通る路が通したのか知らん。

○公ごとゞも皆とゞめさせ給ふ　新春の公の宴會なども皆おやめさせなさる。大喪であるからだ。

ししきし行はせ　ふともり聞きたいまつりて

年きりと思ひし花も咲きにけりにほひおくれて見ゆるものから

客舍感懷

年といへば　月日數多に　春霞　秋たつ霧　時鳥　なくや五月の　五月雨の　けふを幾日と　長きけに　いぶせくもあるか　神無月　時雨の雨の　はれ曇り　雪に籠れる　頃までを　久しとをいへ　其の年を　十はた三十　四十ちふ　老の始めも　いつのまに　遠ざかりぬれ　百足らず　へぬる齢は　海にある　ものとしきくを　天雲の　よそにはあらで　おのが身に　つみつるやなぞ　山河の　七瀬よどまず　此の年も　暮れはてぬめり　何すとか　世にはありけむ　うつし身と　我が思はねば　花のごと　榮ゆる人の　今までも　世にはあらじと　住の江の　濱によるちふ　白玉の　忘れてぞある　宿さへも　とはるをやさしみ　松の戸を　さなしかためて　釘さして　いれじとぞすまふ　此の戸ひらくな　こゝにある子よ

反歌

浦島に箱ゆたなびく白くもの天にもゆかな老いに老いては

その二

○御ためしきし行はせ給ふ　御恒例の式を行はれる。

○年きりさ　樹木の年によつて花を開き實のらぬこと。

○長きけにいぶせくもあるか　長い故に鬱陶しくもあるよ。

○海にあるものさしきくを　土佐日記の「たゞそおやそおは海にあるものなりけり」を採つた。

○山河の七瀬よどまず　多くの瀬が淀み留らず。

○白玉の忘れてぞある　住の江の忘れ貝を思ひ寄せた。

○とはるゝをやさしみ　尋ねらるゝかを恥かしく思ひ。

○松の戸をさなしかためて　松の戸をさし固め。さなしは間が暇らぬ義と云ふのを秋成は採つた。

○いれじとぞすまふ　入れまいと爭ふ。

○浦島に云々　龍宮より持ち歸つた手箱から白い煙が出て、浦島の子が忽ち老人になつた傳說。

年てへば　あくる暮るゝと　一年を　一日の如に　いひつゝも　過ぐるを惜しみ　あたらしき　春を迎ふと　よき人の　家のためしに　清まはり　ゆまはりしつゝ　神にねぎ　ことほさきして　うからやから　にきびゆきかひ　たぬしきを　へぬとぞ祝ふ　内日さす　宮のとのへの　水鳥の　鴨の堤に　草枕　かりほにはあれど　六年まで　おきるふしなれ　世の人の　なすわざしらす　鹿じもの　獨りある子も　打ちたのむ　せなに別れて　ぬば玉の　衣きまどひ　ひたぶるに　後の世たのむ　すべのすべなさ

反歌

生死のふたつの海の中つ瀬にかゝりてあまた年も經にけり

雜歌

天

八百萬千よろづ神のかみごとも天まづ成りて後とこそ聞け

日

久方の日のたてぬきに春秋をあやに織りなすたく機の神

星

○年てへば　年と云へば。
○清まはりゆまはりしつゝ　清め潔齋しつゝ。
○ほさきして　祝つて。祈る意。
○うからやからにきびゆきかひ　親族一族睦び往來し。
○内日さす　宮の枕詞。
○水鳥の　鴨の枕詞。
○鹿じもの云々　鹿の如く孤獨で居る子も。しゝじもの。
○日のたてぬき　日光をたて絲、よこ絲にして。
○たく機の神　栲機の神。自然を支配する女神。

闇だにも忍ぶさはりとさやけきは天のかゞせをあしき神なり

雲

はれ曇る人の心に比ぶれば雲の迷ひはかごとなりけり

暁雲

吉野山雲にまがへる花咲けば花にもまがふあかつきのくも

雲有歸山情

まがはじと花に別れて小初瀬に夕はかへる春の浮雲

青霞

淺みどり我まづそめて春の色を野山に見する朝がすみかな

煙霧

ゆふぐれの霧のまがきの島松は煙にたてるま柴とも見ゆ

雨

三吉野の山にいりにし人とへば花にも雨はさはらざりけり

露

白露に消えはおくれぬあだものの命を人は頼むなりけり

風

○天のかゞせをあしき神なり　闇でも忍ぶ妨げしようと星の光のさやかなのは、天の案山子となつて居て悪い星の神である。
○かごとなりけり　ほんのしるしだけのものであるよ、言ふに足りない。

○まがはじと　花とまぎれまいと

○小初瀬　大和磯城郡初瀬。
○我まづそめて　霞自身が先づ淺緑に染つて。
○まがきの島松は　霧のまがきにかけた。霧が垣の如く蔽ふ意、籬島は陸前松島群島の一。
○三吉野の山にいりにし云々　古今集巻六「三吉野の山の白雪踏み分けて入りにし人のおとづれもせぬ」
○あだもの　はかなきもの、頼むに足らぬもの。

まき向の檜原さやぎてふくかぜに初瀬少女のそでかへる見ゆ

思ひつゝけふもくれぬる都邊に山風さえていでがてにする

山

二荒山吾妻の空と聞きつるを茂きみかげはこゝにしありけり

阿耨多羅わがたつ杣を始めにて比枝の山びこよばぬ日もなし

萬代の國のしづめの富士のねを仰げば空にうつしみの神

田子の浦や千尋のそこに走出の富士は仰ぎて高きのみかは

高嶺こそ時をもしらね春されば青柴山に霞たなびく

きえてふる雪か散りけむみな月の富士の裾野の夕立の雨

庵原の清見がさきに朝はれて富士は秋こそ見るべかりけれ

箱根路の雪ふみわけて眞しらねの富士の高嶺を空にみるかな

谷

誰かきてすみつきにけむ山深きたにのひとつ屋煙たつ見ゆ

原

下野や那須のしの原しのぶとも都は遠し歩め我がこま

野

○二荒山　下野二荒山。

○阿耨多羅　新古今集卷二十の「阿耨多羅三藐三菩提の佛たち我が立つ杣に冥加あらせたまへ」に據つた、阿耨多羅云々は無上正等正覺の意。

○うつしみの神　空にうつると、現身の神とかけた、富士山を神格視したのである。

○走出の云々　山の裾の勢ひの走り出たやうなのを云ふ。

○きえてふる云々　萬葉集卷三「富士の嶺に降り置ける雪は水無月の望に消ぬれば其の夜降りけり」

○庵原の　駿河庵原郡庵原村、清見關は後の清見寺の所。

○すみつきにけむ　住み著きにけむと、炭つぎとかけた。

むら雨の名殘は草にうづもれて野末の小川おとまさるなり

海

越の海は波高からし百舟のわたりかしこき冬はきにけり
伊豆の海をこぎつゝくれば波高み沖の小島よ見え隱れする
わたつみのそこことも知らぬとまりして袖には波のかけぬ夜もなし

海上眺望

唐土を出でて幾日の波の上に富士の高ねは見ゆとこそ聞け

河

津の國にありといふなる玉川は卯の花くたす流れなりけり

瀧

岩根攀ぢかづらにかゝり越えくれば落ちたぎつ瀬の水上にして
ちる花は春の水泡にきえ果ててとはに流るゝみよし野の瀧

池

河内なる狹山の池の廣ければ稻葉かりつむ舟も見えけり
道ゆかば訪ひても見ませ笠縫の眞菅刈るてふま野のふる池

皇　都

○わたりかしこき　航海の恐ろしい。
○沖の小島　伊豆の初島。
○わたつみのそこともしらぬ　海の底と、其處ともとかけた。
○津の國にありといふなる云々　攝津西成郡野田の玉川、卯の花の名所。卯の花くたすは五月雨の卯の花を朽ちさせると、流れ下すとかけた。
○狹山の池　河内南河内郡狹山村の中央にある池。
○笠縫の　大和にも同名の池があるが、之れは攝津東成郡竹縫島をさす、今の深江村、名産たる難波菅笠を作つたから來た名。但し此の歌が次の萬葉集の歌からその儘變化したとすれば、地名と解しない方がよい。
○ま野のふる池　攝津武庫郡尾池村、今神戸市に編入、眞野池。萬葉集、「眞野の池の小菅を笠に縫はずして人のとふ名を立つべきものか」

神ながらえらび定めて國土をたひらのみやこ今さかりなり

こゝのへの内外にあそぶ鶯は春は暮るれど古巣忘れて

神社

神まつる黑木の殿のかりそめを松のひと木につくりけるかな

里ちかき野中にたてる神社木深からねどしげりあひにけり

寺院

小初瀨の寺のなが屋のかり枕夜ごろになじむ鐘の音かな

墨染のくらまの寺と聞きつるは雪にあかるき山路なりけり

今はもよ片われ月のこゝのへに東のてらの西にたつ見ゆ

曉はうれしとをきく鐘の音を夕の寺にあはれすゝめる

門

門ひろきひとの情を見聞くには交はりがたきものにざりける

鄰

賴めこし壁の鄰のともすればあふさきるさにうたて世の中

宿

朝とくとおもひしやどを鶯のなくねほだしに出でがてにする

○黑木の殿のかりそめを　黑木造りの宮殿、木の皮のはがぬのを黑木と云ふ。かりは刈りと假初とかけた。

○墨染のくらまの寺　墨染のくろいとくらとかけた。

○今はもよ　今はまあ。

○こゝのへに　九重と此處の上とかけた。

○東のてらの　京都九條の東寺。

○門ひろきひとの情を云々　一家繁榮して居る人の情を。

○あふさきるさにうたて世の中　こゝでは往來する毎にいやな世の中である。

○なくねほだしに　鶯の鳴く音にほだされ。

○ひきはへし山田のひたの云々　山田の水を、洩らした田に引張つた縄のくさつて、番をした時のまゝの岸の小屋である。もりは守りと雨の漏るとかけた。

○法の師の云々　法師の修行せる窗の紙が破れて、西國淨土をたのみにして居るその西の方から吹く風が、破れ穴から入つて寒いよ。

○錦織　音高しは機織る音、京の北、今の西陣。

○あか井　佛前にさゝぐる水を汲む井戸。あかは水の梵語。

田廬

ひきはへし山田のひたの縄くちてもりにしまゝの岸の伏庵

窗

よそはまだくれもはてぬを森陰に文見る人の窗の燈火

法の師のおこなふ窗の紙やれてたのめる西の風はさむしも

竹窗夜雨

ねざめては文見る窗にうゑ竹の葉を打つさ夜のむら雨のおと

軒

のきならぶ都のにしの錦織おと高しもよしづかなる世に

關

逢坂のゆるさぬ關に佇みて時雨をよそに過しつるかな

僧

木の葉うくあか井は雪に埋もれて佛のつかへけさぞおこたる

翁

百年をかぞへもしらぬ古翁このひとさとの神とかしづく

若子

弓箭おひ君がみ幸のみさきおふわく子うつくし我が壻にせむ

樵　父

大木曾や小ぎその山の深ければ眞木の杣人こゝだ入るてふ

漁　父

ちぬの海の波間に浮ぶ櫻鯛網引やはなを散らすなるらむ

懸　想

山川の岸に根はへる藤かづら思ひかけては橋とならめや

疎くなる

玉だれのをすにかゝれる葵草かれ〴〵秋にあはむとやする

夜一人をり

君は今はこえ果てぬらむ立田山ながむる峯に月はいりにき

名をかる

たつ名をばよそにおほせてかつ歎くそれをたよりに人や戀ひよる

堪へ忍ぶ

あまりにも老いぬる人の心かなとはねど恨むふしも見えぬは

三年たゆる

○みさきおふ　先驅を追ふ、行幸の先を追ふ。
○わく子　若き男兒の美稱。
○大木曾　信濃西筑摩郡木曾谷の中央以南を大木曾、以北を小木曾と稱する。
○はなを散らすなるらむ　櫻鯛を花と喩へた。
○思ひかけては　思ひを懸けてと、架けてとかゝるのである。
○かれ〴〵秋に　枯れ〴〵と、離れ離れとかゝる。秋にあはむとは飽きにかゝり、男女の仲のうとくなる意。
○立田山云々　伊勢物語及び古今集卷十八の「風吹けば沖つしら波立田山夜半にや君がひとり越ゆらむ」を思ひ寄せた。
○たつ名をば云々　立つ浮名を、他の人に負はせて、一方では歎いて居る、それを手がゝりにしてその人が思ふ人に、戀ひ寄りはしまいかと。
○とはねど恨むふしも見えぬは　今までならば、しばらく訪はねば恨んだものなのに此の頃恨む所も見せねば、元氣のなくなつたせゐであらう。

三とせこぬ便りを聞けば東路のくさのまくらに妻もとむてふ

月へだつ

今こむといひしも久し我ならで親を思はば早かへりこね

一夜へだつ

隔つるは一夜ばかりのさね牀に心づからやちりのつもれる

不逢

たらちねの許せし我を人ごとの千名の五百名にあはぬ此の頃

片戀

中々に思はずもあらぬ風の音の聞えてくるしかた戀にして

弓による戀

引きならすとのゐが弓弦音ふけて誰が上ならむうしと告ぐなり

機による

千々わくる絲のみだれや高機の空なる人も心あひては

絲による

神ごとのたゝりにかけてくる絲のたえばつがむよ戀ひな亂れそ

荻に

○今こむと云々　いづれ行かうと云ふだけで來ない事も長い間である、妻の私のためではありません、親を思ひなすつたら、早く歸つていらつしやい。

○千名の五百名に　人の噂ではいろいろの評判が立つて居るが。

○聞えてくるし　戀しないでもない、先方の消息だけが聞えて却つて心苦しい、片戀であるから。

○引きならすとのゐが弓弦　宿直の瀧口の武士が、鳴弦しつゝ警戒し、その弦の音も更けて丑の刻を告ぐる如く、誰の身の上か、憂しと告げるのである。

○高機の空なる人も　高い棚機の如く上の空の人でも、思ふ人と心が合へば、機の絲がいろ／＼別れ亂るゝ如く、心が千々に思ひ亂れるであらう。

○神ごとのたゝりにかけて　神事に用ゐるたゝりに掛けて繰る絲の如く、絕えたなら繼がうよ、戀ひ亂るゝな。たゝりは絡垜、方形の臺に柱を立て絲をかける祭神の具

亂れあふ荻の葉風のさや〳〵に人ぞいふなる夜には隱れよ

女郎花に

掘り植ゑてかひあるはなは女郎花くねるも我を頼むなりけり

秋もはや末野の原のをみなへし人に折られむ時もすぎけり

ないがしろ

さりともと頼む心も我からにあくた河にぞ身を流しつる

怠

おこたりは我と恨みむ綱ひきてあふ夜あはぬ夜こゝろみしから

夢

思はぬもおもふも夢の枕とふごふに見えて早も覺めなむ

竹與心俱空

ためずとも直き心はおのづから竹と共にやむなしかるべき

野渡無人舟自横

冬がれの野川の風を身にしめてあはれやひとりわたり呼ぶ聲

世人結交用黃金

交はりをこがねに結ぶ世の人のつひのこゝろぞ常なかりける

○さや〳〵に　荻の葉音のそよそよさ、さやかにははつきりさをかけた。

○くねるも　曲るのも。

○あくた河　自身で芥にしたさ、川名をかけた。

○おこたりは我さ恨みむ　二人の中の怠りは、自分のせゐであるさ自身を恨み責めよう。

○思はぬもおもふも云々　思はぬも思ふも枕の夢に現はれるさ云ふ事であるが、今に思ふために夢に見えたのであるが、それもすぐ覺めるであらう。

○ためずさも云々　撓めず、直き、むなし、苦竹の縁語。無理に正しくため直さずさも、正しき心は自然さ、竹さ同樣に、心空しく邪戀もないであらう。

○交はりをこがねに結ぶ云々　金錢のために交はりを結ぶ世の人心は、結局常がなく、絶えず變りやすいものである。

○白眼看他世上人　唐詩選にある王維の句。

○悔教夫壻覓封侯　唐詩選の王昌齢閨怨詩「閨中少婦不知愁、春日凝粧上翠樓、忽見陌頭楊柳色、悔教夫壻覓封侯。」

○元興寺の僧にならへる　今昔物語卷十一に出て居る元興寺の智僧をさすのであらう。元興寺は日本の寺であるからさう云つて、天竺の僧達を斥け、大いに非難された。

○雨もよのそら　雨夜の空。

○雨をふゝみて　雨を含んで。

白眼看他世上人

世の中の人をさくればおのづから塵なきにはの松のしたぶし

悔教夫壻覓封侯

何にかくいだし立ちけむ劍太刀名の惜しけくも今はあらなくに

調與時人背心將詩者論

我を知る人しなければ我しらぬ人に見すべき言ぐさもなし

元興寺の僧にならへる

肥ゑゐてわくる野山にひく犬のさとときは人にうとまれぞする

澄月

晝題　初夏晚來微雨

よしやふれ此のゆふ暮は時鳥たびだちぬべき雨もよのそら

蘆庵

緣そふ小雨や暗き木がくれにほの見えそむる窗の燈火

蒿蹊

舟とむる江の波くれてうちそゝぐあめに待たれつやま時鳥

立斎

橋見ゆる野川の岸の夏木立くれゆく色も雨をふゝみて

夕つけて水におとなく降る雨は卯の花くたすはじめなりけり

海島暮天舟泊圖

名もしらぬ沖の小島のいそ枕ゆふなみさわぎ秋のかぜ吹く

漁舟圖　天地一釣竿の心を

海原にたゞ一すぢの釣の絲のほかに移さじおのが心を

月下草露のかた

ふけゆかば霜やむすばむ白露のひかりを寒み月すみわたる

山田に喬松たてり

うゐはてし山田の岸のひとつ松影いとはるゝ時はきにけり

小松に雪かゝりたる

さがの山弟ねのけふも風さえて小松がうれにつもるしらゆき

手毬胡鬼の子

鶯の軒端の聲をはじめにて百千とり〴〵遊ぶ春の日

河柳三日月

すゞみとる淀のさと人河そひのやなぎにおつる月を見るかな

鶺鴒石上に遊ぶ

○いそ枕　濱に宿る事。

○一すぢの　一筋の絲と、一筋の心と。

○影いとはるゝ　松の影が大きくて、稲に日光が當らぬからである。

○弟ねのけふも　乙子の今日も、正月初の子の日の最後のもの。正月初の子の日には小松引く風習があつたから、小松にかけた。

○手毬胡鬼の子　手まりと羽子。羽子は羽子板に用ゐる突くはね。

○百千とり〳〵　いろ〳〵思ひ思ひの意と百千鳥とかけた。

いその上はおほみ石もいとまなき數へに遊ぶ庭たゝきかな

に現はれて居り、道敎鳥と云ふ、庭たゝき、石たゝき、皆鶺鴒の異稱。
○こほらぬこゑを　水皆凍れるに千鳥の聲のみ凍らず清い音を發するのである。
○なきぬべらなり　古今集の調子なきぬべくあるなりの意。
○さつ男の目にたてぬまで　鹿の足跡を獵師が、目をつけぬ程に、紅葉よ、もつと散り敷けの意。
○跡とめて　[illegible]いまし跡を[illegible]が求めて。
○瀧口に　清涼殿の東北にある宮中警護の武士の居る所を瀧口と云ふ、夜十時に宿直の武士が點呼するのを宿直申しと稱する。時鳥の名乘るのをこれに喩へた。
○しら山　加賀白山。
○とぎし心　劍太刀にかけ、つとめはげみし心の意。

池水氷り千鳥むれ飛ぶ

冬の池のさゞなみとづる曉にこほらぬこゑをなく千鳥かな

紅葉散り鹿の足跡あり　　蘆　庵

此の秋もゆきてかへらぬ跡みれば我さへもねになきぬべらなり

蒿　蹊

もみぢ葉は猶ちりしけやさを鹿の跡をさつ男の目にたてぬまで

暮れてゆく秋ををじかの跡とめてみ山に我もかへろとぞなく

屛風に殿づくりの上を時鳥なきてすぐ

殿守のとのゐ人かも瀧口に名乘りて過ぐるさ夜ほとゝぎす

高き山に雪つもり月空にすむ

しら山をおろす雪吹の風の上に冬の夜中の月すみわたる

楠公賛　三章

君がおもふ君にありせば劍太刀とぎし心のかひぞあらまし

きみこそは君をしらざれ天地の神し知れらば知らずともよし

譽れある名をばあふぎて大方は君が心をしらぬなりけり

○東方朔偸桃　東方朔が仙女西王母の桃を偸み食ひ、三千年の壽を保つたと云ふ支那傳說。
○六歌仙　古今集序に見えた僧正遍照、在原業平、文屋康秀、喜撰法師、小野小町、大友黑主。
○言の葉も云々　古今序の「歌の樣六つなり」とあるをさす。
○秋菊云々　淵明が一旦官途に就き歸去來賦を作つたのを嘲る意。
○能因窓より頭さし出したる　能因法師が「都をば霞と共に出でしかど秋風ぞ吹く白河の關」と云ふ歌を詠じこれを旅行の歌にしようと、家に隱れ日に燒け旅行したと僞つた故事、古今著聞集に見える。
○蓮性倒騎　熊谷直實出家して蓮生と云ふ、東に旅する時馬に逆に乘つた、西に卽ち西方淨土に背くに忍びないと云ふ意である。
○何をから猫の　何をか持たむにかけた。猫は支那よりの輸入なので、から猫と云ふ。かゝる身は灰のかゝるにかけた。
○夜の鶴かなしき聲も　子を思ふ親の情を夜の鶴に喩へた。天にきこえむは鶴の緣語。義經の出世を

浦島子

古里とおもひしものを年經てはしらぬ國にも我は來にけり

東方朔偸桃

すまじきはぬすみなりけり幾千年後の世までもかたり傳へて

六歌仙

言の葉も人のほまれもおのづから六つてふかずにあふや何なり

陶淵明

秋菊の露のおきふし安き身をなど世に出でてたちや惑ひし

能因窓より頭さし出したる

いつはりを我が心からゆるされて迷ふか道のはてしらぬそら

蓮性倒騎

西をさす心のかたはたがへどもそむかで法の道あゆむ駒

西行猫の火爐手にすゑたる

杖笠のほかには何をから猫の火とりの灰のかゝる身にして

雪中常磐子

○それも眞柴の　眞柴は焚物であるから、煙草のけむりも亦柴の上になびく意。

○廬山雨　白樂天の詩の句「蘭省花時錦帳下、廬山夜雨草庵中。」白雲の上の庵は前の句をさす、

○綠の衣云々　六位の官の著衣。綠毛龜は所謂蓑龜、蓬萊山を負ふと云ふ俗説に擬されて官衣の色を名にして居るのが面白い。

○聲なく谷云々　鶴の聲がなくば、その白い羽は、秋風にたなびく白雲と見誤るであらう。

○緒すけぬ琴　絃をかけぬ琴。

○ましらねの云々　白い山の比叡の雪の曉の景色を、富士を見ぬ老人の自分の眼界ではあるが、伊勢物語に富士と比叡とを比較したのを思ひ寄せたのであらう。

やすらひてあだにくゆらす煙草それも眞柴の空になびきて

旅人雨を凌ぎつゝつれだつ

三吉野の花に心の急がれて雨やめてともいはで行くらむ

廬山雨

白雲のうへのいほりと思ひしをよるをすがらの雨のおとかな

綠毛龜

こきとても綠の衣の位山おふてふ龜の名こそをしけれ

鶴むれ飛ぶ

鳴きわたる天の鶴むら聲なくば空めの秋のかぜのしらくも

松に月かゝれり

月すみて松に聲なき秋の夜は緒すけぬ琴の遊びなりけり

比枝に雪つもれり

ましらねの日枝のみ雪の曉はふじ見ぬ老がおもひ出にして

老梅

なべてとふ人もあらじな古里の老木のうめの春の初花

立　雜

別れすむ教へならはぬ古の河淵の鳥にあそぶさま見よ

明烏

夜鳥とたのめし聲をいぎたなきまくらにあくる東雲の空

其のかたと云ふに

朝妻にとまりする舟さむからしたえず伊吹の山おろしの風

早友迫門の圖

うみ孝たす　長門の國と　豐國の　中のわたりは　早友の　神のまもれば　百船の　小戸の汐あひ　汐待ちて　眞楫しゞぬき　風まちて　漕ぎこそわたれ　此の神の　相うづなへば　鯨浮く　大海原の　西をさし　北へ廻らせ　よくゆきて　よくもぞ歸る　此の浦の　磯わにたちて　人さはに　住みぬる里を　たにの浦と　名には聞えて　かしこしや　海を賴めて　ことゝなる　山に畑うち　汐木こり　寒き宵々　波の上に　千鳥妻呼ぶ　蜑の子の　いづちとまりと　漕ぎこねば　妻まちかぬる　枕邊に　波の音さわぎ　あとべには　山風さえて　幾夜あかすも

〇別れすむ教へならはぬ云々　別れ住む教へも習はぬ、[illegible]の「[illegible]鳩」の心を思ひ寄せた。
〇夜鳥とたのめし聲を云々　鳥の啼くのを、あれは夜鳥だと心あてにして[illegible]たに、早くも夜明鳥の聲であつて、東雲の空が明けた。
〇朝妻に　[illegible]
〇早友迫門の圖　[illegible]
〇早友の神のまもれば　豐前企救郡早鞆神社、一名和布刈神社。
〇眞楫しゞぬき　楫を繁く漕ぎ。
〇相うづなへば　承諾すれば。
〇汐木こり　鹽を煮て取るための焚木。

わたの底にしきめたる衣は暮汐の干るも満つるも神のまにまに

見神崎遊女宮木吉墳作歌

空蟬の　世わたるわざは　はかなくも　いそしかりけり　たち走り　高き賤しき　おのがどち　はかれるものを　ちゝのみの　父やすてけむ　柞葉の　母が手はなれ　世のわざは　多かるものを　何しかも　心ゆもあらず　手弱女の　操くだけて　しなが鳥　猪名の湊に　よる船の　かぢ枕して　波のむた　かよりかくより　玉藻なす　靡きてぬれば　うれたくも　悲しくもあるか　かくてのみ　ありはつべくは　生ける身の　いけりともなしと　あさ宵に　うらびさぶしみ　年月を　息づきくらし　玉きはる　命もつらく　思ほして　此の神崎の　河隈に　夕汐まちて　寄る浪を　枕となせり　黑髪は　玉藻となびき　空しくも　過ぎにし妹が　おきつきを　治めて世々に　語りつぎ　いひつぎけらく　此の野邊の　淺茅にまじり　露ふかき　しるしの石は　たが手向ぞも

右遊女入水之事見圓光大師傳記

賀荷田信美之新室歌

かけまくも　畏けれども　いはまくも　あやにたふとき　すめみまの　神の

○干るも満つるも　満珠干珠の神話に因む二つの島に思ひ寄せた。
○見神崎遊女宮木吉墳　後拾遺集に出た遊女宮木と同人であらう、一說に播磨室の遊女。同集卷二十に「津の國の難波のことか法ならぬ遊びたはむれまでとこそ聞け」
○いそしかりけり　忠實であるよ。玆ではいそはしの意があるやうだ。
○ちゝのみの　父の枕詞。
○柞葉の　母の枕詞。
○何しかも心ゆもあらず　何としてか、自身の心からでもなく。
○しなが鳥　猪名の枕詞。
○猪名の湊に　攝津武庫郡。
○波のむたかよりかくより　波の寄するさ共に、彼方此方に寄り。
○玉藻なす　靡くの枕詞。靡くとは客に接する遊女の境遇。
○よる浪を枕となせり　入水した意。
○圓光大師傳記　法然上人行狀畫圖（一名勅修御傳）から出た。圓光大師傳四十八卷）。但し行狀畫圖には室の遊女とあり宮木の名は無い。

尊の　御心を　たひらの宮と　定めまし　御代の嗣々　老松の　千年なせれば　枝葉おひ　根はひ廣ごり　天雲の　上に集へる　臣達の　末にまゐ出て　夜の守　晝のつかへに　雲に乘る　龍の尾をふみ　鵲の　橋み渡りてかしこしと　身もたなしらず　汐干の　か田の氏人　いさなあれば　此の大宮の　とのへなる　鴨の河岸　つきならし　岩根とりなめ　横柱　えつり壁草　運びもて　つくれる家は　さき草の　さきくまさきく　うみの子の末まで　住みつがむ　始めおこせば　大鳥の　羽がへはせじな　河の邊の　いつ藻の花の　いつも榮えむ

反　歌

ついたつる君がにひ室もろ人のほぐ豐御酒に歌たのしせな

送佐々木眞足東行歌

東路は　遙けかりけり　わたつみの　へたゆく道を　海渡り　河舟よばひぬてゆらぐ　馬に鞍さし　嶺たてる　山をも越えて　ゆく人も　登りやはえむ　雲だにも　い行きはゞかる　富士の峯を　何にたとへむ　打ちよする駿河のくにと　なまよみの　甲斐にうしはき　伊豆相摸　國のことゞゝ　立

[illegible]

○御心をたひらの宮　平安城、京都をさす。
○臣達の末にまゐ出て　天子に仕へ奉つた後裔と產れ出でて。
○身もたなしらず　身の上も知らず。たなは知らずの語氣を強めた用法。
○汐干のか田の氏人　汐干の潟にかけた。か田は加田、紀伊。
○とのへなる鴨の河岸　九重の外なる鴨河の岸。
○横柱えつり　横柱は、眞木柱は杉、檜などの柱を云ふ。えつりは竝べて繩で絡む意。
○さき草のさきくまさきく　さき草はさきくと言はん序。幸福に。
○大鳥の羽がへはせじな　大鳥は羽がへの序、變りはしまい。
○佐々木眞足　通稱壽六、京都の人、寛政六年本居宣長の門に入つた國學者。
○ぬてゆらぐ　鐸(すゞ)のゆらぎ鳴る。
○八尺瓊の五百つつどひを　星山

みがきて　立田の　峯にとこしく　積む雪の　光かゞよふ　走出の　麓の海の　田子の浦に　ゆふ花さけり　みすまるの　玉拾はずば　浪の穂の　ゆふ花つみて　濱づとに　もてこ我がせこ　歸りこむ日は　見ぬ老が爲

小澤蘆庵を始めて訪ひゆきし時翁さうの琴橋の經亮大和琴搔き合はせあるじせられしによめる

山ざとの二木の松の聲あひて秋の調べは聞くべかりけり　　翁

かへし

山かげの二木の松の秋の聲ひとに聞かるゝときも待ちけり

二木の松とは此の庵の庭もせに年深きが立てるをもていひよするなりき

翁世を去られし時にも

玉琴の緒はたちしかば君が庵の二木のまつよたゞ秋の聲　　翁

南禪寺の庵にありし時

君がすむ宿の水音聞きつれば濁る心もあらはれにけり

かへし

我が庭のさゞれいしこす谷水のすむとばかりは人目なりけり

○走出の麓の海　富士の裾の麓の海。
○ゆふ花さけり　木綿花咲けり、浪の白い形容。
○みすまる　御統、みは敬語。多くの珠玉を緒で貫いて飾りとしたもの。
○さうの琴　箏の琴。十三絃の琴。筑紫琴も此の種に屬する。
○あるじせられしに　音樂を奏してもてなされたのだ。
○二木の松の聲あひて　箏と大和琴の合奏を、二木の松風の聲に喩へた。
○橋の經亮　橋本經亮、香川景樹に親炙する、高橋宗直の門人。京都梅宮の神官、文化二年四月歿、年四十七。
○大和琴　和琴ともあづま琴とも云ふ。六絃、神樂其他雅樂に用ゐる。

○すみつきがたき云々　炭つきがたきと、住み著きがたきとかけた。おこす、遣る意で、蘆庵が秋成に炭を贈つた事は本書の六帖詠草にも出て居る。

○いづちやどりかへてむ　悲しみ思ふ心を、どこかへ宿し變へたいものである。

○中々に我がおこたりをしるべにて云々　却つて自分の怠慢がよい手がゝりとなつて、嬉しい人心の誠がよくわかつた。

年の暮にはいつも炭を切りて贈らるゝに詠みてかへせし歌

埋火のすみつきがたき都にもおもひをおこす友はありけり

かへし　翁

思ひやるかひこそなけれ埋火のすみつきてたゞ久にあれこそ

河内國にとひゆく人のありてはろ〴〵來たりき去年の秋なき人を此處に伴ひこしことを思ひ出でてすゞろに打ちなかれつゝ

身は同じ家にありとももの思ふ心をいづちやどりかへてむ

年月うとかりし人の許より度々音づれすれど聞えぬはいかにぞや恨みつべきものぞといひおこせしに

中々に我がおこたりをしるべにて嬉しき人の心をぞ見し

といひしかば心とけぬとなむ又の便りにいひこせしなり

住家定めず遠近しあるくを今は何處にと人のとひければ

風の上にたゞよふ雲の行方なくあすのありかは誰ぞ定めむ

と答へしかば爪はじきして憎きものにいふとなむ聞えし

又長柄の濱松陰に假庵つくりてすむとて

結ぶよりあれのみまさる草の庵を鴫のとことなしやはてなむ

み料理する事。聖人は衣食住に簡易な意。

○あなしれ〴〵し　あゝしら〴〵しい。

○我こそと思ひ定めて云々　親しき人に死に遅れんものとは知らないで、我こそ先に死ぬるであらうと思ひ定めて、捨てた世であつたのに。

○まめ語り　しんみりと語り合ふ

○さいだてて　先だてて。

○世にありわびて　世を送りなやんで。

○みの一つだに　身を蔽ふ蓑一つでも。

よれるなり此の庵にある夜盗人入りて聊かある物をかづきもていにけり

あした思ふ

我よりも貧しき人の世にもあればうばらからたち隙くゞるなり

其の入りし壁のこぼれを窗に作らせて盜窗と名づけて風を入る便りよしと人に語りしかばあなしれ〳〵とてあしくいふとも聞きし

岡男鳥といひしは友垣の中に物ら問ひかはしつゝいと嬉しき語らひ人なりしに病して俄にうせしかば打ち泣きつゝ

我こそと思ひ定めて捨てし世の人におくれむものと知らずて

まさのりといひしもまめ語りする友なりしが打ちつゞきて早う死にけり

えがたき人々をさいだてて後は友とて求めずなりぬ

ぬぎかへむ一重衣もあらでたゞ露おきそふる秋にざりける

或人世にありわびていひこせる

ゆく末の遠きをさても忘られてみの一つだにいまはたまはせ

と聞えしによね一斗をおくりて

行末もあすの便りもしらぬ身のひるまばかりは過せとぞ思ふ

岩井何がしといふ謡曲の上手の七十賀を求め來られしかば詠みて與ふ

鶯のねぐらの竹のふしはかせ世の長ひとといはふべらなり

しるしらぬ人の齢つめりとに祝の歌こふ毎にいつも贈れるうた

限りなく齢保ちて春秋を千々よろづ代と數へても見よ

あるやんごとなき御方に時々參りて物らきこえたいまつるなべに僅かに散りとゞまりし文どもをめなし鳥のやくなき物からとりあつめ奉るとて詠みて加へし歌

今はたゞ老波よするくづれ岸ふみとめよとも頼む君かな

御かへしろくに添へて給ひつれど畏ければ記さず

四天寺回祿　三章　雲水とは五層の浮圖の名なり

雲水もやけか亡ぶとまだき世を記せし文にありやあらずや

名ぞまこと荒れにし岡の冬枯の昔にかへる風の音かな

始めありし昔のときを人は見し今のをはりにあふが悲しさ

船

から梓を五手にたてて四つの舟わたりしみ代の例(なあと)しのばゆ

○ふしはかせ　節博士、竹の縁語。
○世の長ひとゝ　世の長壽者と。

○めなし鳥の云々　盲鳥の如く不用なものではあるが。

○ふみとめよとも　文留めよ、踏み止めよとかけた。

○ろく　御褒美のこと。

○四天寺回祿　大阪四天王寺は享和元年雷火に罹り金堂大塔以下燒失した。

○まだき世を　未來の世を。天王寺に未來を豫言した、所謂聖徳太子の未來記を思ひ寄せたのである。

○荒れにし岡の云々　名は全く眞實である。此の地は荒陵と云ふが、その通り荒れはてた岡の昔通りに返つた冬枯の風の音よ。

ひむがしにたつ市見れば小車のはこぶあきもの所せきまで

馬

なか／＼に翅は折れむ一日にも千里ゆくてふ甲斐の黒駒

牛

五月雨の晴間もとめてすきかへす水田の歩みうしとこそ見れ

犬

宵々に垣もる犬におどされてにくくも妹をおもひこそなれ

戸ざしせぬ野寺の門にふしなれて稀にぞ犬の何をとがむる

猫

たが家を離れてこゝに迷ひこし止む一夜になるゝから猫

猪

ふみ迷ふ富士の裾廻の眞萱原あら猪の通ふ道は見えけり

鯛

安濃の浦の鯛つる蜑がけふも亦釣り誇りては酒にかふらむ

鯉

○あきもの　商物。

○うしとこそ見れ　牛と憂しとかけた。物悲しと見る。

○にくくも妹をおもひこそなれ　犬が吠えるのにおびやかされて、畜へる戀人までも、憎いと思ふやうになる。

○安濃の浦　伊勢安濃郡の海岸。

淵ふかくすむとはすれど淀舟の棹にぞ鯉のおどろきをして

鱸

出雲なる松江のすゝき秋風にすがたを見せて立つる白波

鯨

まつら潟かよふ鯨の跡見れば天路にけぶる八重の汐風

蟹

蘆原のことば茂くてかひなけに世にすむ我と人も見るがに

津の國のなにはにつけてうとまるゝ蘆原蟹の横走る身は

蛛

世の中はかくこそありけれ軒わたる蛛のすがきに秋の風ふく

軒こぼれ瓦くだけてふる寺の蛛の網にも月のかゝれる

鷲

かゞ鳴きて夕はかへる荒鷲のつばさにしのぐ筑波やま風

鳩

野分ふく風にはねきり飛ぶ鳩の宿りまどへど友は離れず

○まつら潟　肥前松浦潟。

○蘆原のことは茂くて云々　詞のみ多く世に住む甲斐もないやうな自分と、人が見るやうである。ことばは蘆原の緣語。がには蟹にかけた。

○津の國のなにはにつけて云々　蘆原蟹の如く横に走る自分は、何につけても人にうとまれいやがられるのである。なにはには浪速と何にとかけた。

○かゞ鳴きて　鷲の猛く鳴く事。

○はねきり飛ぶ鳩の　羽はたきして飛ぶ鳩の。

○竹のうてな[illegible]くれ竹[illegible]云々　清
涼殿の東と右の竹を思ひ寄せた。
その竹に宿る雀が、宿直の殿上人
を呼びさます意。
○あかでしも云々　ちつとも倦き
ないで、春の茶の芽を摘んで煎て
も、心は秋の水の如くに澄んで居る、
春と秋との對稱。
○眞名井　天の眞名井は日本書紀
卷一に出て居る、天照大神と素戔
嗚尊と此の井の水を以て滌ぎ、劍
玉などから神々を産みました。固
有名詞ではない水を讃へた言。茲
ではえらびと云はん序詞。
○法にいり法を出ですは　法に入
つてもそれから解脱しなければ、
澄んだのも濁つて、一生過すであ
らう。
○空也堂　空也堂光勝寺、京都四
條坊門堀川東、[illegible]
空也上人創建。
○茶筅[illegible]　空也念佛に茶筅をさ
げて踊るのである。末はみどりの
波さへ、[illegible]を搔き立
てるからである。
○茶盒子　蓋のある茶器。急須か
茶入であらう。
○うきことを云々　憂き事を空へ
たなびく香の煙の如く飛散させれ
ば、[illegible]
は、[illegible]

二むらの竹のうてなのねぐら鳥とのゐ呼びおこす雲の上人

色を分ちて人々とよみける中に

花にさき絹にそみつく紅のうつろふ色を見果てずもがな

常に茶を煎てあそび敵とするによめる

あかでしも春の木の芽をつみて煎て心は秋の水とこそ澄め

東坡云佳茗似佳人

すむといひ清しといふもよき人の常としきけばあかぬ我が友

茶如接高貴之人失度共悔不可歸

天しるや眞名井の水のえらびなき悔の千度はしれ人のとも

法にいり法を出でずばあぢきなくすむも濁りて終の世や經む

空也堂の法師茶筅の歌こひしに

草木にもあらぬを竹の穂に靡き末は綠の波もたちけり

茶盒子を造りて其の出色もて冬衣と名づけたるに

こく薄く重ねてもなほ冬ぎぬの袖まもらねばさむげなりけり

香煙一嘘遣悶といふことを詠めといふに

うきことを空の煙にふきやれば垣根の夏の草やなになり

河内の尼足袋ぬひておくりしに

淺宵のあさましきまで老いぬれば此のたびを世の限りとぞおもふ　唯心尼

かへし

淺宵のあさくは君を賴まねばなどこのたびや限りなるべき

伴蒿蹊の女のとみの病にむなしきと聞きて

齡とて人のいはふはうきことの數そふ年のつもるなりけり

翁の齡我には一年を越えさせしかばいとほしさにいひやりけるなり昔今を思ひ廻らすに唐の郭汾陽この國にては皇后宮大夫俊成卿をおきて終の世まで憂き事しらず富と齡と例なく聞えたるはあらずなむ侍りき冬の夜の長きをかこつ老を憐みて傍にある人の何くれと慰めかねつるあまりに光源氏の物語をつぶ〳〵と讀みて聞ゆ一夜に一卷或は二卷長きは二夜三夜にも卷々の終るごとにこれがあたひに歌よむべくいふいなまで詠みつるが其の心をや違へつらむも知らずいみじきをこわざなりけらし

桐壺

宵のまにはかなの月は入りにけり妬める雲をかけしながらに

帚木

○淺宵の云々　[illegible]足袋の[illegible]あさましいまで老いたから、此の度即ち今年を[illegible]限りと思ふ。[illegible]、たびは足袋と度とかけた。
○とみの病に　急病で。
○齡とて人のいはふは云々　長生[illegible]、賀はいやな事の數加はる年のつもる事であるよ、だから長生してもめでたい事とは思はれない。
○郭汾陽　唐の郭子儀、[illegible]、子女多く持つて幸福に世を終つた人。
○これがあたひに　讀んでやつた報酬に。
○其の心をや違へつらむ　其の卷卷の意味、心持をとりちがへて居るかも知れない。
○いみじきをこわざなりけらし　非常な愚な所爲であつたらしい。
○宵のまにはかなの月は　桐壺の君、他の女御達にねたまれつゝ、早世されし意。

さま〴〵に定め爭ふ人のうへにはては心もさみだれそ

空蟬

遣水のほまれの門をひき入るゝ車は戀の重荷なりけり

夕顏

けやすしと思はばなどてよりて見む明くるをまたぬ夕顏の露

若紫

九重のきたやま櫻さきにけりかけしかすみも名殘なき空

末摘花

中川にことよき橋を渡されて見るめなき野をわけもこしかな

紅葉賀

もみぢ葉の光をけふにてりそへて千秋と君を祝ふべらなり

花宴

霞む夜もしづ枝やすけに手折らるゝ薄花櫻色に匂ひて

葵

わりなしやねたさ一つのうき瀨には人をも身をも沈めつるかな

榊

○さま〴〵に云々　雨夜の品定めを詠んだ。心も亂れてしまふ意。

○遣水のほまれの門を云々　源氏の君が紀の守の不在中、空蟬の中河の家に忍び入つたこと。

○けやすしと思はば云々　源氏の君の心持、かくも消えやすいものと思つたなら、どうして近よつて見ようや、夜の明くるを待たないで消えた夕顏の露よ。

○九重のきたやま櫻　源氏の君が[illegible]山へ赴き、始めて紫の上を垣間見た。

○中川にことよき橋を渡されて　頭中將に對する競爭心から、醜い顏とも知らず末摘花の許へ忍んだ源氏の思ひ。

○もみぢ葉の云々　紅葉賀に源氏の君の奏せられた舞樂の様。

○霞む夜云々　朧月夜の君が源氏の君に容易くなびいた有様。

○わりなしや云々　六條御息所の嫉みで、葵上の死と、御息所の煩悶と。

神風の伊勢はそなたとさし櫛のさしてのらねば戀ひしけけむ

花散里

色は香にふけてにほへる橘の花散る宿もたえずとはまし

須磨

心から身は山賤にやつせども猶こりずまのうらなけきして

明石

都にもひゞきのなだの汐あひにかづく白玉誰にさゝけむ

澪漂

忘らるゝ身はかつしれど住の江の濱によりこしかひはありけり

蓬生

藤波のかけてまつとはとひてしる露ふる宮の門のしるしに

關屋

心にはゆるせし關にあふ坂の山した雫袖ぬらしけり

繪合

須磨の浦にすみは果てじと繪に寫しことにかこちて今日をまちけり

松風

○さし櫛のさしてのらねば　六[illegible]伊勢へ下らるゝのを、源氏の君が名殘を惜しんで訪れたこと。

○色は香に云々　橘匂ふ五月、源氏の君は美しくはないが心やさしい、花散里に心惹かれて訪れた。

○心から云々　自分の心からで、須磨に流され、身はきこりの如く零落したが。懸り字に須磨とかけ、浦さ心になゆくさかけた。

○都にも云々　都でも評判になつて居た美しい明石の君を、父入道は望んで源氏の君にさゝげた。

○忘らるゝ身は云々　明石の上は自分の身分を思ひ、京に上らず居て住吉で源氏に逢ふ事が出來た。

○[illegible]の云々　[illegible]源氏の君を忘れかね、人の勸めを聽かず殘つて居り、[illegible]人に引きとられた。

○心には云々　空蟬が心に許し身を許さぬ源氏の君と關で逢つた事

○須磨の浦に云々　[illegible]繪合の時、源氏の君の須磨の繪日記がすぐれて居た。

うつり來て我が宿ながら明石がた慣れし岡邊の松のあらしか

薄雲

さりし世をむなしき空にかへり見る心の鬼よ我をいさなふ

朝貌

朝顏の花田は色をふかむれどうつらでおける庭の白露

少女

少女らがつれまふ衣の音さえて夜や更けぬらむ庭火しめれる

玉蔓

筑紫路をいかになれとか立ち出でて都にも世をうみやわたらむ

初音

雪わけて今朝たに出でし鶯のはるのかたには聲もこぼらず

胡蝶

春の日を暮るゝにあかで飛ぶ蝶の行方は花のちりのまがひに

螢

見ゆを厭ひ見えぬを恨む夏むしの光は人のためならなくに

常夏

○うつり來て云々　明石の上は大堰の邸に移り住んだが、郷里の明石に似て居るので心慰めとなつた

○さりし世を云々　入道の宮藤壺が、源氏の君と道ならぬ戀に陷つた過去の想出の惱み。

○朝顏の云々　前齋院朝顏の君は、源氏の君の戀が募ればつのる程、け高く冷やかに相手にしなかつた事。

○少女らが云々　源氏の君が五節の舞姬に出す可く惟光の女を召して舞はしめた樣。

○筑紫路を云々　夕顏の忘れ形身玉蔓が肥前の豪族の求婚を斥け、源氏により都に上つたこと。

○雪わけて云々　源氏の君が六條院に來た時、雪は降つたが月澄み、物の音の樂しい春であつた。

○春の日を云々　三月二十日あまりの日、紫の上が童八人に蝶鳥の扮裝させて舞はせた樣。

○見ゆを厭ひ云々　兵部卿が玉蔓に戀をうち明けた夜、源氏の君が物に包んだ螢を出して四邊を明るくしたこと。

稀に遊ぶ庭のまうけの水うまやとこなつかしき花の夕ばえ

篝火

まどはせし箱のふたみのあひ難みおほふははかな何のみだれぞ

野分

玉だれのをすの見いれに心さへすさびにけりな野分てふ風

行幸

小鹽山み幸のためし野にみちてうち散る雪にみ鷹よぶ聲

藤袴

たきあはすけふのきそひは秋深き野にぬぎ捨てし衣にやあるらし

眞木柱

葎生ふかべのこぼれの蝸牛這ひかゝりては行くかたもなし

梅が枝

鶯の巢立のとりは久方の雲居にいまや名のる一聲

藤末葉

大島のなるとならずと汐舟のからきわたりも風をまちえて

若菜上

○稀に遊ぶ云々　源氏の君が釣殿で人々と納涼した樣。

○まどはせし云々　今は內大臣なる頭中將を父と思ひ、逢ひたがつて居る玉鬘の胸中の煩悶。

○玉だれの云々　荒れた野分の見舞に來た夕霧は、不圖簾の上を垣間見て、あるまじき心を我と恐れた。

○小鹽山云々　十二月に帝が大原野に行幸ありし光景。六條院に御贈で宮中使用の雉。

○藤袴　玉鬘の夕霧中將の懸想を恨んだ時、中將の詠「同じ野の露にやつるゝ藤袴」なごを思ひ寄せた。

○眞木柱　髭黑大將の北の方が家を出でんとする時の心持。

○鶯の云々　源氏と明石の上との間に出來た姫君が二月十一日花々しく御裳著の式を行はれたこと。

○大島の云々　夕霧大將が仲をさかれて居た雲居雁と、柏木の取計らひで逢ひ得たこと。

猶若きけこそ添ひぬれ春の野につむ菜を君が老のはじめに

若菜下

陸奥にいつかきにけむ手ならしの琴は緒絶の橋となりにき

柏木

背きても世にあり經べき心にはまけてはかなき人の悲しさ

横笛

とりつたふ世々の形見の笛の音の殘りて寒き秋にざりける

鈴蟲

それにとてつけし心を笛竹のふしたがへりと歎きてぞよる

夕霧

まよひ入る心の奥も霧こめてしのの亂れの小野の山ぶみ

御法

花やぎし司のきぬと見し色は野邊のけぶりの雲のむらさき

幻

春さむみあはたつ雲にかくろひて光はいづら峯のしら雪

匂宮

○猶若きは云々　源氏の君が四十歳になりつゝ、宮中より歸つた朧月夜の君に若い血を湧かしたこと。

○陸奥に云々　紫の上と和琴など合奏されたお間もなく急病になつてそれが死に行かれるもとゝなつた。

○背きても云々　柏木は女三の宮との戀の露見に耐へかね、遁世して罪を懺悔する事もせずに逝かれた。

○とりつたふ云々　柏木遺愛の笛のみあり、柏木は死して一年になる。音のみ殘り、人は居ない。

○それにとて云々　冷泉院の御前で人々笛を吹いた時、源氏の君の心持。

○まよひ入る云々　小野の山莊で一條の宮に贈つた夕霧は、來た手紙を雲居雁に奪はれ宮と仲違ひになつた。

○花やぎし云々　供養の舞樂の花やかさを目にしたのを名残に紫の上は逝つたのである。

○春さむみ云々　源氏の君が驚いた、しく春さへ、しかこめて人にも隱遁しに逢うた有樣。

昔にはぬしこそかはれ梅さくら匂ひおくれぬ春は來にけり

紅梅

折りてやる花に心をそへつればこをばいく春見ませとぞ思ふ

竹河

みだれ葉の右まけたりと聞くからにめでし櫻はちりぬともよし

橋姫

都にも色をあらそふ秋ながら人香なつかし宇治の山里

椎が本

あはれ君世をうぢ山の奧深くほだしの綱はたちて入りけむ

總角

情ある人もつらしな蓮葉のうへに心をのせし身なれば

早蕨

法の師のこれを薪にかへて摘む野のつくづくしやまのさ蕨

寄生

見まさりにかく咲く花を根分けしてぬすまほしき園の白菊

四阿

○昔には云々　匂宮が匂兵部卿の宮として世に時めく樣が、薫と共に源氏の昔の再來かと、昔を忍ばせる。

○折りてやる云々　紅梅が梅の花折りて、匂宮へ寄る時の心持。

○みだれ葉の云々　大君、中の君など碁をうつた折、亡き髭黑大將の櫻の逸話を想ひ出されたこと。

○都にも云々　八の宮が宇治に移住し、二人の姫君と寂しく暮して居る、其の姫達の心持。

○あはれ君　八の宮が二人の姫君の將來を氣にしつゝも、親しき阿闍梨の寺で亡くなられたこと。

○情ある云々　八の宮の一女大君が、匂の宮にも薫大將にも許さず、道心深く身まかられたこと。

○法の師の　大君の妹中の宮は父と姉とを失ひ寂しく暮す折、山の阿闍梨から慰めに土筆蕨を贈つた

○見まさりに云々　薫大將が宇治へ立ち寄つて、浮舟の昔を垣間見戀し初めた心持。

浮舟

うちつけに其の人かたを垣間見のあなあやしとも思ひこそなれ

河島にいさよふ波のいかにしてふたゆく心せきやとゞめむ

蜻蛉

それとただに思へどすべな宇治川の玉藻に靡く妹が黒髪

手習

おのが上をよそに聞きてはかつ歎く誰が許さねば死なぬ命ぞ

夢浮橋

ありてなき世の常をしも渡らへばなきがありてふ夢の浮橋

藤簍冊子　歌集部終

○うちつけに云々　薫大将は浮舟の君が、舊の戀人大君に似て居るので、怪しみつゝも心亂るゝ様。

○河島に云々　匂宮と薫大将に許した浮舟の君は、何れの情をも忘れかね、煩悶する様。

○それとただに云々　遂に思ひ餘つた浮舟の君は、宇治河に身を投げたのである。

○おのが上を云々　死を決心した浮舟の君も奇しき因緣の手に救はれ、今更の如く身の運を歎く心。

○ありてなき云々　尼となつた浮舟の君が、一切の過去の緣を思ひ諦めた心持。

閑田詠草

伴蒿蹊

閑田の翁あまたとし詠める歌を、よはひの末にみづから撰びおかれたり。こたびまな子資規ぬし、なほよくたゞして板にゑりて後の世に傳へむとて、千蔭にそのはし書を乞はる。ちかげも翁も、かたみに老いての後、あまとぶ雁の行きかひにつけて、玉づさのたよりうとからざりしを、まのあたり相見しにもまさりて、むつましくおぼえつるは、その好むみちのひとしきによりてしもしかならむとおもへば、いなぶべきにもあらで筆をとりぬ。そのまなびのもとをとふに、おきなのおほぢ翁北村氏にたよりて歌よまれしにより、翁いとわかかりしよりよみ出でつゝ、後にはなにはの有賀氏にこと問ひしを、その人みまかりてより、武者小路實岳卿にしたがへり。かの卿みうせたまひて、翁のよはひみそぢあまりよりは、誰によるともなく、たゞいにしへをしたひ、おのが心のゆくまに〳〵よみ出でられしとぞ。其のさまはつぼのうちに山をつくり、瀧おとし、いはほを立てて、さま〴〵の草木を所せくうゑおほしたるさまをばきらひて、おのづからなる山のたゝずまひ、ゆほびかなる河のながれの、あめつちのまゝなるすがたをしもたてて このみ給ひけらし。

○閑田の翁　伴蒿蹊、名は資芳、閑田子と號す、近江八幡の人、有賀長伯、武者小路實岳の門人、文化三年七月歿、年七十四。
○まな子資規　愛子、資規は通稱直樹、家學を繼いだ。
○あまとぶ雁の行きかひにつけて　幸便ある毎に文通して。
○おほぢ翁　祖父。
○北村氏　北村季吟であらう。
○有賀氏　有賀長伯、京都の人以敬齋と號す、歌學に長じ大阪に住む、元文二年六月二日歿、年七十七。
○心のゆくまに〳〵　自然に氣の向くに任せ。
○つぼのうちに云々　中庭に人工的に山水を造るのを嫌ひ。
○ゆほびかなる河の　ゆたかにひろ〴〵とした河。

（隅田川の庵云々　加藤千蔭の別荘は、隅田河畔石濱に在つた。其の記事が彼の作「うけらが花」に載せてある。）

こゝろことばはいにしへとていにしへにならず、後とてのちにうつらず。こは翁の流れを汲む人々のみにあらず、誰もかくおもほしきわざになむ有りける。文化五年きさらぎの末つかた、隅田川の庵にやどれるころ、橘千蔭いさゝかそのことわりをしるせり。

閑田詠草上

春歌

年内立春

としふかき雪にけたれぬ梅が香や春よりさきの春をつくらむ

おなじあした鴈の聲を聞きて

年のうちの春たつそらにかりぞ鳴くまだきやかへるおくれてやくる

元旦立春

としかへる朝をまちて立つ春はいつよりことにめづらしきかな

試筆

朝づくひのどかにあふぐ心こそ春といふ名もたどらざりけれ

我が庭はもとより立たる門の松垣ほの竹にいはふ初春

のどけしなうつし植ゑたる若松にけふよりならす千代の春風

こは古歳の冬家嗣資規を得たる歡びをのぶ

七十になりぬと思ふ心からいやめづらしきけさのはつ春

○けたれぬ　消されぬ。

○まだきやかへる　はやくもう北に歸らうとするのか、それとも遲れて北からやつて來たのか。

○いつよりことに　いつもと異なって。陰曆の立春は年内に來たり元日より遲れたりして、此の年の如く元日即ち立春と符合する年は尠いからである。

○もとより立たる　以前から立つて居る門の松。

○犬に馬に云々　自己の年を重ねるのを卑下した語。

○緑香とて　若菜小松と云ふ二種の香、思ふに緑色の香なのであらう。

○ききたがへて　香をにほひ聞違へて、當て得なかつたのだ。

○霞をぞくむ　仙人の生活に擬したのである。

○君がよはひにあえよ　君の高齢にあやかれよ。

○さらにやはらぐ　古今集序に據つた、和歌は人の心をやはらぐるものである。

○おもかげにして　木々につむ雪に、櫻を聯想して。

妙法院の宮より「いにしへに稀なるとしのことぶきもいく千代めぐれ春の杯」となむ御筆をそめさせられ給ひければ犬に馬にたぐふよはひも七十をかさねしかひよとよろこぼひておほけなくもよみて奉りける

ながらへしよはひより猶いにしへもまれなる君がめぐみをぞおもふ

むつき六日小島氏にて緑香とて若菜小松のふたくさをききわくべきよしなるにともにききたがへて

我はたゞ霞をぞくむ初若菜小まつをさへも人にひかせて

むつきのはじめ森川周尹とはれしかば

今よりはしば／＼訪へや梅咲かむ鶯なかむ春の山さと

幼きうた子が歳のはじめのことほぎに來りしにむすめ凧子がいひこしける「初春をいはふ緑子千代よろづ君がよはひにあえよとぞ思ふ」かへし

みどり子のわれにならはばみどり子に我もならひてすゑ久にへむ

初春祝道

道しある豐あしはらの國の風さらにやはらぐ春はきにけり

春のはじめ雪のふりければ

木々の雪おもかげにしてけふよりぞ櫻さく日もかぞへそむべき

風光日々新

山のはのかすむ光に春や知る田づらの若菜野邊の小松も

春日望山

春のきてあふぐ山べに立ち初むる霞や花のしをりなるらむ

むゆか子の日なりける日物へまかり小松を引きて

あすのため若菜もつまむ初子の日小まつひく野のあかぬかへるさ

七日はつねなりけるとし

朝まだき若菜つむ手にかぞふれば初ねもあひぬ小松ひかまし

山家子日

山里に生ふる小まつはおほかれどけふを初子とひく人ぞなき

子日祝

初ねの日松引きつれて蒲生野に玉のを山の千代ちぎらまし

霞

春のきてまたひとしへの霞にも人のこゝろのひかれぬるかな

山家霞

山ざとは世の花どりの外なれど霞ぞ春の色をみせける

○花のしをりなるらむ　花の咲く案内であらう。

○初ねもあひぬ　正月七日が丁度初の子の日と一緒にぶつかつた。

○蒲生野　近江蒲生郡。

○ひとしへの霞にも云々　また一重のうすい霞にも人の心はひきつけられるよ。ひかれは霞の縁語。

○ことの葉のけふのむしろに　和歌の會の席上に。
○もれじとやなく　古今集序の「花に鳴く鶯」を思ひ寄せた。仲間をもれまいとてか。
○ながきひすがら　永い春中、ながいは緒の長いにかけた。
○ひきとゞむ　琴をひくにかけた
○我が顔をわれとやたのむ云々　自分の姿を自分からよしと恃むのか。かほとりはかほよ鳥、姿のよい鳥。
○我ぞ聞きおふ　聞き負ふ。鶯の老い聲を鳥許りではない、自分の身の上も同じだと聞く。

鶯

郷より根させる去年のくれ竹にはやくも来なく春のうぐひす

このごろは閑の板戸をあくるまもまたでごきなく軒の鶯

ことの葉のけふのむしろに汝さへもれじとやなく庭のうぐひす

雨中鶯

雨かすむかた山かげの寂しさをなぐさめがほにうぐひすのなく

鶯呼客

世にうとき宿としらずや鶯の人よびげなるあさゆふの聲

鶯解和琴

琴の緒のながきひすがら鶯のなく音をさへやひきとゞむらむ

かゞみ山の麓をゆくに鶯のこゝちよげに啼きければ

我が顔をわれとやたのむかほ鳥の鏡の山をたち去らでなく

佛光寺門主の姫君うまれさせ給へる頃鶯有慶音といふ題を賜はりければ

のどけしなちとせの春の生ひさきもこもれる窗の鶯の聲

鶯聲老

梅の花うつろふ枝にうぐひすの老いぬる聲も我ぞ聞きおふ

若菜

わがそのに生ふる若菜はことさらにつまでも今日のことぶきにせむ

澤若菜

摘む袖にたまらぬものは春もまだ淺澤ぬまのくゝの若たち

閏正月

みしめ引き松こそたてね加はれる後の睦月のめづらしきかな

餘寒

おしなべてこのめも春の雨も又雪にやならむ寒き此の夜は

谷餘寒

春きても雪げの雲のはれずのみ杉の梢にさゆる谷風

春雪

月かげは春のならひに霞むかとあふぐ空よりあわ雪ぞふる

梅

春たてばまづ咲くのみか薫る香も梅には何を思ひくらべむ

木がくれのいづくなるらむさく梅のありとはしるくにほふ春風

さく梅の匂ひあまねき此のごろぞ人の心もはなになりぬる

○春もまだ淺澤ぬまの　攝津住吉神社に近い池。春淺いにかけた。
○くゝの若たち　若菜が莖をのばすこと。

○このめも春の　木の芽ののびること、春とかけた。

○人の心もはなになりぬる　人の心も浮華になつた。はなをかけたのである。

〇誰かみぎりの　誰か見むと、砌をかけた。砌は軒下に敷く石又は瓦。

〇伏見山　見さくるにかけた。

有明の月のひかりをさく梅の花にゆづりてあくるしのゝめ

水邊梅

池水の氷ふきとく春風におくれずにほふ岸の梅が香

故郷梅

古さとにふりぬ色香をあはれとも誰かみぎりの春の梅が枝

行路梅

鶯に宿やからまし梅の花さきつゞく道は行きもやられず

梅柳交枝

枝かはす梅も柳も色に出でぬまちえし春の心くらべて

梅溪にて

鶯のこゑするかたに分けいればうべも今日こそ梅さかりなれ

わけゆくもみさくるかたも伏見山梅より外の色はまじらず

海室寺のうしろの岳にのぼりて

松たけをよきて山べに降りつみし雪はさかりの梅にざりける

醍醐にて

とひなれて年を經にけり咲く梅の老木もつれを老いぬと思はず

庭の梅を見て柏田春海「世の中にもらさぬもらし年をへて此の山陰に匂
ふ梅が香」かへし

有りとだに誰かはしらむこと木より匂ひおくるゝ谷の梅が枝

紅梅遅

降るゆきにまがひし花はやゝ散りて後もこぞめの梅おそげなる

柳

ときおそき花にまじりてちることは知らでぞ靡く風の青柳

門柳

さしてくる人ならねども吾が門によりてこそ見れ青やぎのいと

翠柳誰家

なべて世の花にそむけて青柳の陰のどかにも住む人やたれ

柳随風

みさをなきものとやいはむ吹き渡る風をすがたになびくやなぎは

雨中柳

うちかすみふるとはみえぬ雨にしも濡れて色そふ春の青柳

草漸青

○後もこぞめの　後に来るにかけた、濃染、こゝでは濃い紅。

○ときおそき　速い梅や遅い梅。

○さしてくる云々　わざ〳〵自分を目ざして、さしては柳の縁語、よりても同じく縁語。

みち芝の枯生の中に初草のはつかに見えて踏まゝくも惜し

池塘春草生

池水のあしのしたねは知らねどもつゝみの小草やゝみどりなる

早蕨

花ならでこれも手毎に折りえたる山路のわらび家づとにせむ

柴人も春の物とて山づとに手折りそへたるつゝじさ蕨

智恩院の御忌にまうでて

たをやめがこゝにゆきかふ袖の色や都の花のはじめなるらむ

春月

白たへにさかりの梅の花までもおぼろに見する春のよの月

春はなどよひ〳〵ごとに棹姫の霞のころも月にかすらむ

春曉月

老いぬれば春もね覺めてみる月のあかつきかすむ影ぞしづけき

春月朧

春ふかき霞のみをにほのかなる月のみ舟はめぐるともなし

春曙

○あしのしたね　蘆の下根、ねはつゝみの縁語。つゝみは堤に鼓をかけた。

○霞のころも云々　棹姫は佐保姫の當字、朧月を女神の霞の袖著たのに喩へたのである。

○春もね覺めて　春はよく眠れるものであるが、年老いて寢覺めがちで。

○霞のみを　みをは水脈、霞のひろがつて居るのを海に喩へた。ふかきも水の縁語。

○月のみ舟　空に浮ぶ月を舟に喩へた。

このごろは老のねざめもかひありと待ちえてあふぐ春のあけぼの

浦春曙

世の春の柳さくらもうらやまじ霞のうらの春の曙

閑中春曙

いかにみむ春は霞の八重むぐらうき世へだてし春のあけぼの

春雨

花のためたのまざりせばつれ／＼にたへじ山邊の雨かすむ空

春雨の軒の玉水しら／＼とひかり見えゆくあけぼのの空

このごろはかすみこめつゝふる雨を咲きそふ花のしづくにぞしる

庵春雨

降りしめる春のながめも柴のいほに思ひいらずば寂しからまし

歸鴈

みおくるも遠き高ねの夕霞やがてまぎるゝ春のかりがね

おぼろ夜の空路たどらでかへる山そなたとたのむ春のかりかも

深夜歸鴈

其のまにもみむとは誰かとゞめけむ夜深き月にかへる鴈がね

○柳さくらもうらやまじ　都を羨むまい。柳櫻は古今集素性法師の歌によつた都大路の聯想。

○八重むぐら　霞の八重にかけた。

○たのまざりせば　雨が花を催すのを心だのみにしなければ。

○春のながめ　眺めと長雨とかけた。いらずば は雨の吹き入るにかけた。

○かへる山云々　越前南條郡還山、鴈の歸るにかけた。そなたとたのむは此の山が越路の山であるから、歸鴈があちらの方が自分の行く方と心たのみにする意。

○春の時とて云々　春を歸る時とて。敏馬浦（みぬめのうら）は攝津武庫郡西灘村の舊名。

○時すぎず　時節に遲れず。

海歸鴈

舟人のみなとこぎ出づる明けぼのにさきだつ鴈は島がくれ行く

浦歸鴈

波かすむ春を時とてゆく鴈も花を見ぬめのうらみてや鳴く

春駒

蘆の葉もやゝ萌え出でて春の水まさる澤邊にいさむ若駒

燕

ゆく鴈を空にあふげば時すぎず馴れし軒ばのつばめきにけり

定めなき人もあるよにつばくらめなれし軒端をなれや忘れぬ

雲雀

露むすぶ芝生はなれて朝づく日うつろふ空に雲雀なくなり

呼子鳥

咲く花のありとや我をよぶこどりゆくへも見えずかすむ山邊に

野雉子

霞む野を分けくる音に鳴きて立つきゞすに駒もおどろきにけり

閑中日長

庭もせの花さかぬ間はくる人もまれなるやどの春の日ながさ

棠の花の咲くを見て

初若菜雪まにみしも山吹にまがふばかりの花に成りぬる

此の頃は日ごとに遊行しければ

とがむなよ我にはあらずのどかなる春こそ我をあくがらしけれ

山寒花遲

よそめには花かとみねの雪消えて匂はぬ木々に山かぜぞふく

待花

山ざくらいつしかとのみまつ人の心ぞまだき花になりぬる

まちわびて長き日ごろをさくら花さかりのほどにかへなましかば

咲く花を今日かあすかと待つ程の春の心をなにゝたぐへむ

初花

朝露のひかりもそひて咲きそむる花はうき世の物としもなし

如月も有明の月にほの〴〵とにほへる雲や峯のはつ花

花始開

人ごとにまづきよ水の山櫻これを都の初花にして

○あくがらしけれ　あこがれさせた。

○みねの雪消えて　見えてと峯とかけた。

○まだき花になりぬる　もはや浮かれ出した。花を兩方にかけた。

○さかりのほどにかへなましかは　花を待ちなやんで長い日頃を、櫻の花の盛りの間、それはあまり短いのであるから、その時とかへたいものである。

花未遍

まださかぬかたも有りけり二月やいつより花のはやきことしも

花を折りて人がりつかはすとて

とへかし此のひと枝ゆ枝折にて花になりゆく宿の木のもと

櫻

さまざまの花はあれども日の本の春のひかりは櫻なりけり

時ははる春はさくらの名にしおふ盛りをけふとみよしのの山

花

老いぬれど花みるほどの心こそ昔の春にかはらざりけれ

よゝをへし昔の春の色香をもはかなくしのぶ花の下かげ

咲きちるもたゞ時のまの花になど人はこゝろをつくしそめけむ

とき遲き野山の花にあくがれて春は心の安き日もなし

立ちかへり惜しき昨日のかげとはばまだみぬかたの花やちるらむ

咲く花の陰ぞ立ちうきけふ來ずば今日こずばとしひとりごたれて

山花盛

出づる日のひかりへだてぬ白雲は遠山ざくら今さかりかも

○こゝろをつくしそめけむ　心をなやましはじめたのであらう。
○立ちかへり惜しききのふの云々　又引き返して名殘の惜しかつた昨日の花の陰を尋ねたりして居ては、未だ見ぬよその方の櫻が散るであらう、春の心のあわたゞしさよ。
○ひかりへだてぬ云々　眞の雲ならば朝日の光をさまたげる筈なのに、へだてぬ見れば、あの白雲は遠山櫻の今盛りなのであらうよ。

〇聖護院の宮　京都岡崎に近い聖護院の住職なる法親王。
〇閑田廬　伴蒿蹊の住宅。

〇分韻　漢詩の韻を分つに擬した文字の遊戲。

〇猶むかはまし　まだ櫻に向つて眺めて居よう。

〇さくらのとがも　人の大勢來てうるさいのを日頃櫻の罪として居たからだ。

花滿山

日を經つゝさかりの花のよしの山まだみぬかたの峯もひとつに

聖護院の宮閑田廬にいらせ給ひしときよみて奉る

大君のけふの出でましをまちえては花もうれしき色に咲くらし

おなじとき題を賜はりて野外花を

折にあへばいやしき野べの草の廬も花のたよりのおましとぞなる

妙法院宮二月ばかり長樂寺へおはしましける御供にまゐりて分韻を賜はりて當座に

いつしかと花まつころの山寺におもかげ匂ふ軒の白雲

閑田廬の花を見て

我が廬の花は猶しもむつまじき春におくれてさかりみすれば

夜のほどにちらむもしらず庭櫻夕ぐれ深く猶むかはまし

雫とのみさかりの花にかこたれてわれは越路にすむ心ちする

人とはぬ雨の中こそ庭ざくら花の色香もいやまさりけれ

くる人の雨にまれなるけふこそはさくらのとがも思はでぞみる

あらし山にて

○絲竹に　玆では花柳の巷を意味するやうだ。人しもぞは人だけがの意。
○更にあらしの　歎賞の言葉も更にないに嵐をかけた。
○まぼろしの名にこそたてれ云々　幻と云ふ名は立つて居るけれど庭の櫻はまだ散らず現實に見えて居る。
○露かけて見よ　褒め言葉をかけて見て下さい。たゝへごとは露の緣語。
○ひと木ながら云々　ひと木とあまたの對照。

絲竹に心をよせぬ人しもぞ此の山櫻見るべかりける
さく花のひかりやしるべ夕まぐれ霞む河瀨をくだすいかだし
咲きにけりとばかりめでてことのはは更にあらしの山の初はな
　新熊野幻觀音の花をみて
まぼろしの名にこそたてれ庭櫻まだうつろはじあすもきてみむ
よしやたゞ春にうかれむ咲く花もわれもおもへばまぼろしの世ぞ
　よしのにあそぶ人をおくりて
君ゆかば花にをかたれよしの山われもみしよの春をしのぶと
　そののち己も思ひおこして又よしのに遊びけるに少し早くてさき殘るが多かりしかば
まだ咲かぬこずゑもよしや吉野山我におくれてこむ人のため
　榎本寛興のもとより庭の花を小澤蘆庵にことづけて「言のはの露かけてみよ庭ざくら人にたゝへておくる一枝」と有りける返し
ことの葉の露かけそへて手折りこし花にもふかきなさけをぞ思ふ
　西村光和が家の花を
庭櫻ひと木ながらもとひなれて見るはあまたの春を經にけり

おなじ心を六如上人とともにみて

此の春も又この花の陰にきてうま人をさへあひみつるかな

淡海よりかへりて

かへりきてみむとたのめし頃をしもたがへぬ花はいとゞむつまじ

梅ちればもゝにさくらに咲きつぎて春こそ宿のものとなりつれ

久しくこもりける後に東山の花みありきて

いたづらに過ぎしやいくか世はなべて花になりぬと今日こそはみれ

長樂寺にあそびて

今はとてかへらむとすれば山櫻こはいかにせむ花のゆふばえ

菅谷法印のもとより「折りてこそ人にしらるれ春きてもとはれぬ宿の花のさかりは」とありしかへし

手折りける枝にぞ思ふ咲く花の有りやと問はぬこゝろおそさを

大和人のもとよりよしの花見にことよといひこしけるころ東山の花をみて

九重の都の花のしらくもや吉野の山に立ちまさるべき

物外尼とひきて「香をとめてあかずもなるゝ小蝶かとみれば梢の花ぞち

○うま人　茲では德高き人。
○淡海より云々　蒿蹊の鄕里近江八幡から歸つたのであらう。
○いとゞむつまじ　いよ〳〵親しみを覺える。
○立ちまさるべき　雲立つにかけた。
○物外尼　小澤蘆庵門の閨秀歌人

りかふ」とよめるにまことの蝶もあそびしかば

風さそふ花をもおのが友とみてこてふや木々のかげをとぶらむ

河蓮法師をとひしにあらざりければ

住みなすも花のためなる庵なれやちりにし後は人かげもなし

夜花

めづらしとよるさへむかふ初花になほ有明の月ぞまたるゝ

静見花

人もまたとひこぬほどの朝ぼらけ花のひかりぞいとゞ靜けき

心こそまつのとがなれふく風もならさぬ枝の花にむかへば

雨中花

しをるゝをうしと見つゝもふる雨の寂しさしらぬ花の木のもと

禁中花

九重のとのへの風も匂ふなりみはしのさくら今や咲くらむ

古寺花

はるいくよかつらの松もふる寺にふりせぬ色の花ぞ咲きける

里花

○よるさへ　寄ると夜とかけた。

○心こそまつのとがなれ云々　吹く風が松の枝をならされば、やはらかでありながら櫻の花に向ひ吹けば、散らし[illegible]、人心こそ松に對して罪とがたるべき行爲である。

○このへ　禁中宮門の外を守った左右衛門の陣。こゝでは單に宮城の外の意。

○みはしのさくら　階段のもとの櫻、卽ち左近の櫻をさす。

○はるいくよかつらの松も　春を幾世か經た桂の松も、古りた寺に、桂の古寺は京都の西郊桂の寺。

○追手のかぜの吹かずもあらなむ　船なれば順風の吹くを望むのであるが、磯山の櫻の咲いてる間は、吹かないで居てほしい。

○柿本社法樂　柿本社に奉納歌會、奉納の歌會。雲と見たにと、み吉野とをかけた。

○松風にまがふものから　琴の音は松風に似通つては居るが、風こそ誘へ、櫻の花を散らさうとはせぬから、琴の音はのんびりして居る。

おれぬとて思ひもすてじ春はまた花の色香のふかくさの里

海邊花

船とむる磯山ざくら咲くほどは追手のかぜの吹かずもあらなむ

花留客

くる人の歸さ忘るゝ色に咲く花やあるじの心なるらむ

忘老折花

櫻花老も思はずなつさびてわらは心に又手折りつる

花雲　柿本社法樂

いにしへもかくこそ雲とみよしのの花はみながら咲きも殘らず

花根

行く春におくれじとてや雲とみし梢の花もねにかへるらむ

寄霞花

山たかみ立たる霞のみどりにもひかりけたれぬ花の白妙

寄琴花

松風にまがふものから櫻ばな誘はぬことの聲はのどけし

寄夢花

よるは又夢にみゆやと花の香にしめし衣をかへしてぞぬる

絲櫻

いと櫻風によらるゝ折々はひとの心のみだれもぞする

ふくかぜのすがたになびくいとざくら中々花はちらずやありけむ

落花

梢にもさはらぬほどにふく風のゆくへをとめてちる花ぞ憂き

咲きそむる梢をよきて心から移ろふ花に春風ぞふく

のがれ住む山のおくにも花のちることをうき世と猶歎くらし

花隨風

木のもとの雪とみなむを櫻花つれなく風のふきさそひゆく

花のちるをみて

ちる花を塵にせじとやしばし此のしづえにつなぐさゝがにの絲

よる渡月橋をわたりて

春は又はしの名によぶ月のみか花吹きわたすよるの河風

題しらず

月をさへ待ちいづるかな菅の根のながき春日を花にくらして

○しめし衣をかへしてぞぬる　花の香のしみ込んで居る衣を裏がへしにして寢る。衣かへして寢れば思ふ人を夢にみるとは、平安朝時代の信仰、古今集小野小町の歌がある。

○いと櫻云々　よらるゝ、みだれ、皆絲の縁語。

○中々花は云々　柳に風折れなしの諺の如く、却つて風にさからはぬから散らぬであらう。

○ゆくへをとめて云々　花の梢に觸れぬほどに、吹く風の行方をさがしてわざ〳〵散り行く花が物憂い。

○心から移ろふ云々　花自身の心から散らんとする花だけに春風が吹く。

○しづえにつなぐ云々　下枝につなぐ蜘蛛の絲。

○渡月橋　嵐山の渡月橋。月のみか花を吹き渡すと云ふ意。

○菅の根　ながきの枕詞。

○外のちる後をさかりの　よその櫻は散つた後で、盛りになる山櫻は。

○春のみなと　春の留れる所。

○いくちもと　幾千本。

○山どりのをろの初尾　萬葉集卷十四「山鳥の尾ろの初尾に鏡かけとなふべみこそなによそりけめ」玆では單に長いと言はん序詞、尾ろは尾と同じ。

○ひくしめのほどなきうちに　注連繩をひき廻して、間もないうちに。

外のちる後をさかりの山ざくら暮れ行くはるのなごりとぞみる

春もはや暮れなむとてや山櫻おくれてさける花も散るらむ

花のみなちりにし後ぞ春風をのどけきものと思ひ知りぬる

詠むればいづくの花も散りはてて霞にのこる春の色かな

彌生晦日の日花のさかりなれば

櫻ばなあすもちらずば我が宿は春のみなとと人にいはれむ

されど雨降りてちりみだれしかば

ちりのこる花をねたしと行く春やけふ雨風にさそはせぬらむ

桃花暎日

から錦さらすと見えていくちもと花咲くもゝにうつる日のかげ

遲日

中ぞらを過ぐるとみてし後も猶冬のひと日にあまる日の影

苗代

入りがたにちかづく後も山どりのをろの初尾のながき日のかげ

ひくしめのほどなきうちにまくたねもやがて千町の早苗とをみむ

山吹露深

○こがねの山ぶきに　黃金色の山吹と、簟行を吹き分けることかけた玉は黃金の緣語。

○殘りなくかへす　殘りなく鋤き返す。

○思ひかね　思ひに堪へかね。

○水鳥の　ぬるむ水とかゝり、下のかもの河の枕詞。

○おとは川云々　音の繰返し。

咲く花の色もこがねの山ぶきに玉なす露のところせきまで

燕子花

むらさきの色こき池のかきつばた野なる草木のなににくらべむ

菫菜

殘りなくかへす山田のかた岸にもれて菫の花咲きにけり

躑躅

若葉さす楓が下の岩つゝじ春も紅のいろに出でぬる

暮春雲

思ひかねながむる宮に行く雲も春をおくると見えて寂しき

春のくれに

こゝかしこ心の限り花はみつさてしもをしき春のわかれ路

春もはや今はと暮れて行く水にかけてかひなき花のしがらみ

賀茂川

のどけしなけふよりぬるむ水鳥のかもの河べの春のはつ風

音羽川

おとは川音ものどけし逢坂の關路を春の越えぬと思へば

舟とめて浪花もわかず霞む江に梅咲きぬらし匂ふ春風

近江岩くらの山中に歸休して

誰かしる世の花どりの外にかくのどけき山の春のこゝろは

いつしかに筧の冰うちとけてのどかにかよふ春の山水

幽居有餘樂といふことを

世はなれてのどかにすめる山水にこのごろもゝの花も浮べり

夏歌

首夏

夏來ぬと垣根のうつ木咲きにけり今よりまたむ山ほとゝぎす

卯月朔日の日殘れる花を見て

なつ衣けさ立ちかへし袖に又のこる櫻の香をやうつさむ

貴賤更衣

よき人のためしにけふは山がつのうづら衣もたちやかへてむ

殿のうちのよそひも更ふる今日といへばみやつこさへに夏衣きむ

○浪花もわかず　浪花も見えわかぬこと、何も見えわからぬことかけた。
○岩くら山　山城愛宕郡。

○もゝの花も　桃源の仙境を思ひ寄せた。

○立ちかへし　衣を裁ち更へたこと、又改めての意をかけた。

○うづら衣　賤人の著る弊衣。
○みやつこ　御奴、茲では單に下僕の意。

初著單衣支體輕

夏衣けさ立ちかへて心さへ身さへかろくもおもほゆるかな

首夏雨

なつ衣かふる袂にむら雨の軒のしづくもかけて涼しき

うづきばかり長樂寺にて

青葉のみしげりあひつゝ花散りし後の木陰は人も訪ひこず

同じころ宇治の河邊にあそびて

けふもなほ花の波たつ宇治河や春のみなとと我は定めむ

小野にまかりける道にて

夏來ても櫻のこりつ岩つゝじ藤さく山に蕨をぞをる

遲櫻

とくみしはとくうつろひておくれ咲く花にも春の日數をぞおもふ

新樹

庭のおもは花にかへての若緑むかふ心も夏になりぬる

卯花

曇る夜のそらにはうとき月かげをまがきにしめて咲ける卯の花

○花にかへでの　花に代へてと楓とかけた。

○そらにはうとき月かげを云々　曇る夜は空にぼんやりして居る月の光を取つて、垣に月のやうに白く咲いて居る卯の花。

○待ちよわりぬる　待ちくたびれた。

○誰がためならぬ　外のもののためではない、ほとゝぎすのためなのであるから。

○心へだてて　雲の緣語。

○一こゑもらす　月かげはもれないで。もるを月かげと時鳥の聲とにかけた。

聞きつてふ人のことばを枝折にてそなたやとはむ山ほとゝぎす

ゆふぐれの雨にもなかず有明の月にや待たむ山ほとゝぎす

水鷄さへ驚かすかな郭公待ちよわりぬる夜半の枕に

霍公鳥

植ゑおくも誰がためならぬ立花にやどり定めよやまほとゝぎす

まつ人に心へだてて雨雲のよそになすぎそ山郭公

時鳥月は入りにし山の端をいづるやなにのこゝろなるらむ

さやけしといふにもあまる郭公軒の梢にきつゝなく聲

雲開時鳥

むらさめの雲間に月のかげならで一こゑもらす初ほとゝぎす

雨後郭公

雨霽るゝ夕のそらの雲すきに月をも待たで啼く郭公

夢中郭公

一聲は聞きつともなき夢の中のなごりもはかなやま時鳥

郭公驚夢

○まつにたゆまぬ手枕のいめ　待つに油斷しない手枕の夢。
○妻やこもれる　伊勢物語及び古今集卷一の「春日野は今日はな燒きそ若草の妻も籠れり吾もこもれり」
○からさきのまつかひありて　唐崎の松と、待つとをかけた。
○よるの汀　波の寄ると夜と。
○うとき宿から　世の人は尋ねて來ない宿ながら。
○うべも時しる鳥なれや　なる程時鳥と書く通り時を知る鳥であるよ。
○をちかへり　また引き返し。
○雨のあしに云々　雨の脚の繁きに似て、時鳥が繁く鳴くのであるよ。
○さつき加はれるとし　閏五月のありし年。
○御蔭山　京都の北。前出。神のお惠みとかけた。

ひとこゑにやがて覺めけりほとゝぎすまつにたゆまぬ手枕のいめ

野時鳥

なれも又妻やこもれる春日野にしのびもあへず鳴く時鳥

湖邊時鳥

からさきのまつかひありてさゞ波のよるの汀に鳴くほとゝぎす

閑居郭公

よの人はうとき宿から中々にまづおとづるゝ時鳥かも

時鳥頻

ほとゝぎすうべも時しる鳥なれや五月きぬればをちかへり鳴く

五月時鳥

雨のあしにたぐふばかりも鳴きぬなりうべも五月の山ほとゝぎす

さつき加はれるとし

鳴くや猶後のさつきもほとゝぎすおのが時てふ名にはたがはず

御蔭山にて時鳥を聞きて

聞きつけしたゞひとこゑも今日にあふ神のみかけの山ほとゝぎす

石山寺のふもとにやどりて

○岩間寺 近江國粟田郡、岩間山正法寺、養老年中泰澄の開基、西國三十三ヶ所の第十二番。

○里わくものと 時鳥は里を區別して鳴くものと。

○いなりの杉の 稻荷山の杉と、ゐなり、ゐるまゝとかけた、それ故めづらしげなきと云ふのである

○露の玉ゆらも 露の玉と、しばらくの間もとかけた。

○いく千町田に 鳥羽田は前出、幾千町の田に、ひろい町に。

○こゝろかはして 心を合はせ、共同して。

岩間寺のふもと外畑といふ所にやどりて

庭鳥の聲もきこえぬ山ざとは時鳥よりあくるしのゝめ

守興法師のもとにて時鳥を聞きて又の日申しつかはしける

をちかへりきのふ鳴きしに時鳥里わくものとけふは知りにき

荷田氏へ遣はす文のはしに

ほとゝぎすいなりの杉の木がくれはめづらしげなきねにや鳴くらむ

題しらず

立花の花散るころになりにけりいまやかへらむ山ほとゝぎす

早苗

若苗に結べる露の玉ゆらも田子のとる手の暇なげなる

大江山やまもとかけて鳥羽田よりいく千町田にとる早苗ぞも

をとめ子がこゝろかはしてたが門とわかず田ごとの早苗とるらし

卯月ばかり田づらの月をみて

植ゑわたす早苗もいまだみじかきに水田の月のかげぞさはらぬ

牡丹

○ゆたかげに云々　牡丹の異名を富貴草と云ふからだ。から人、からの音の繰返し。

○すきかげや　透影。簾越しにすかせる影。

○名にしあひて香具のこのみの　香具の木果、橘の古稱、かぐはしは其の香の繰返し。

○かりの草のいほ　刈りと假とかけた。あへずやは耐へずやの意。

ゆたかげに咲きつるからにから人はうべしも花の君とたゝへし

盧橘

すきかげやむかしをしのぶ人ならむをすの外面にかをるたち花

ね覺めつゝむかしを忍ぶ曉の時しもあれやかをる立花

いにしへを夢にみよとや閨の戸のすきまの風に薫るたち花

盧橘子低

名にしあひて香具のこのみのかぐはしき枝たはむまでなれる此の頃

五月雨

澤田河むかしわたせし高橋もあれな水ますさみだれのころ

浦五月雨

浦人の藻しほもくまでいたづらに袖や朽ちなむさみだれのころ

庵五月雨

山かげに結ぶもかりの草のいほあへずや朽ちむ五月雨の頃

旅宿五月雨

わびしさはわたりもたえて河づらの宿に日をふる五月雨の空

○小澤玄仲　小澤蘆庵、玄仲は其の名。

○たらちねと云々　たらちねと撫子の子と照應。

○からでみる　刈らで見る。かひも有りけりのかひは、かの許の縁語し。

○ほに出でむ　すゝき、かるかやの穂に出づると、秋の現はるゝとをかけた。

夏　月

てらす日のおなじ空ともおもほえず暮れゆく夜半の月の涼しさ

雨後夏月

松の葉に雨のなごりの露見えてうつろふ月のいとゞ涼しき

夏月透竹

吹きわくる風をもまたでもる月のひかり涼しき窗の呉竹

小澤玄仲がもとにて

夕月のひかりうつろふやり水のさゞれにむせぶ音ぞすゞしき

撫　子

明けくれにむすべる露をたらちねと頼みてや咲く撫子の花

夏　草

からでみるかひも有りけり夏草の中に花さくさゆりなでしこ

よる〳〵は露も螢もやどれとて茂るをまゝの庭の夏草

ほに出でむ秋もほどなき色見えてしげれる野邊のすゝきかるかや

緑樹連村晴

夏木立しげりあひては山もとにつらなる里も見らく少なき

鵜川

さしこすもいくせの淀の鵜飼舟かゞりのかげもかつしらむらむ

うかひぶねたゞめのまへのやみをのみてらす篝の後せかなしも

照射

ほぐしさす山のさつをとよる鹿とはかなき心いづれともなし

螢

うなゐ子がまねく扇にはかられて空ゆく螢袖にとまれり

月うとき窗の螢よなれさへやかげもとゞめずよそに過ぎゆく

端ゐするに風涼しく螢とびわたる

吹きわたる風のまに〳〵ゆきかへり身を心ともせぬほたるかな

暁蚊遣火

暁のね覺めいぶせき蚊の聲によひの煙をまたも立てつる

氷室

時ぞともおどろかさずば氷室山守る人いかで夏をしるらむ

○見らく少なき　見えるのがすくない。

○さしこすもいくせの淀の云々　鵜舟がさし出るのも、幾世になる。さしは舟の縁語。せは川の縁語。

○ほぐし　火串、照射と同じ、火を焚き、鹿を誘ひ寄せてとる猟法。

○扇にはかられて　扇にたばかられて。

○月うとき窗　月の光さゝぬ、月光のくらい窗。

○身を心ともせぬ　自分の身を自分の心通りにせぬ。

○いぶせき　煙の縁語。

○時ぞとも　もう夏で氷のいる時ぞとも。

蟬の羽のうすき袂のたへぬまで涼しくきほふ夕立の風

遠かたに夕立つ雨のあしみえてこゝに照る日の影もすゞしき

行路夕立

ぬれじとていそげばやがて行くかたにめぐるも早き風の夕だち

竹亭夕立

打ちなびく枝の雫に夕立のはるゝもしらぬ竹のした庵

蟬

所得て蟬や鳴くらむ日をさふるかた山林しげき葉陰に

晩夏蟬

御禊するゆふべを時と石川の名におふ蟬ぞ木がくれに啼く

薄暮水鷄

ひまもなく水鷄ぞたゝく夕閒ぐれ誰かまだきに門させりけむ

戸外槿

法の師のしめし扉かむらさきの雲にたぐひてあふち花咲く

垣夕顔

○枝の雫に云々　竹の枝に殘る夕立の滴が、微風になびいて雨の如く散るので、夕立の晴れたのも知らぬ竹の下の庵である。

○石川の名におふ蟬ぞ　石川は一名蟬の小川と云ふからである。瀨見の小川は山城下鴨村、糺社の南で賀茂川に入る。

○むらさきの雲にたぐひて　紫雲に似て。紫雲は佛の乘る雲であるから、法の師と云つた。又楝は小さい紫の花であるから紫雲に喩へた。

夕がほのかきねの花にかざられて夏はわびしき宿としもなし

蓮

玉かともみるほどなしに蓮葉の露ふきこぼす池の朝かぜ

伏水の三輪に舟うけて

澤水のしげき小草にまじりても獨りみさをの花ぞこの花

小舟さす棹の雫も蓮葉にちりて玉なす光すゞしき

朝納涼

秋待たで咲く朝がほに朝な〳〵露さへかけてみるが涼しさ

松下納涼

吹きわたる風もひまなき山まつの木陰を夏のやどりともがな

晩夏納涼

水無月の末の松山秋はまだ越えねど波のみるめ涼しき

松下泉

さしおほふ松にへだてて照る日にもぬるまぬ水ぞ涌きかへりぬる

泉際人夜涼

○獨りみさをの花ぞこの花　獨り節操を守る花は此の蓮の花。

○露さへかけて　露まで併せて。かけは露の縁語。

○風もひまなき　風も絶えぬと、山松のすきまも無いとかけた。

○涌きかへりぬる　水の涌くと、熱さに沸騰するとかけた。暖かくもならぬ冷水が、沸騰すると云ふ技巧。

あつさにも心なくてや池水のかもめを友とあそぶ此の殿

櫛笥東林院にて

玉くしげ明けくれわかず涌きかへる岩がき水に夏をへだてつ

賀茂川にて

夕涼み石はふむとも石川やかもの河づら遊びてゆかむ

六月望の夜端居して

富士の根にふり初むるてふ雪をさへ俤にしてむかふ夜の月

閨中扇

かたみにはあらぬ扇もよな／＼に打ちおきがたき閨のあつけさ

夏祓

みそぎ河けふの日かげもゆふしでの流れゆくせはあきや立つらむ

一とせの月日もけふを中つ瀬の御祓すゞしき住吉のうら

夏風

ふりくると見し夕立の浮雲をよそに吹きやる風のすゞしさ

夏夜

○玉くしげ　明けの枕詞と、地名の櫛笥とをかけた。

○石川や　賀茂川の異名と云ふ一説を採つたのである。

○ゆふしでの　木綿幣、夕暮とかけた。

○けふを中つ瀬の　六月三十日で一年の半はとなるからである。夏祓は六月晦日に行ふ。

よな〳〵に蚊といふ蟲のなかりせば端ゐながらにあかしはてまし

夏人事

をとめ子が早苗とる日はあげまきも草かる業のいとなかるらし

夏幽思

とにかくに世はうきものよ時鳥かへる山邊に我もともなへ

夏遠晴

秋もはやちかの鹽がまうら波のよる〳〵いかにすゞしかるらむ

夏懷舊

夏のよの夢みるほどに年月のふりぬと聞くも更にはかなき

夏日越關

夏の日に關ぢ越ゆれば花のためなこそといひし風ぞ待たるゝ

水無月にたび〳〵時鳥の啼きければ

時過ぎて人もすさめぬほとゝぎす我を友とやこゝに鳴くらむ

○あげまきも云々　小兒の髮の結び方から轉じて幼兒を云ふ。

○ちかの鹽がま　秋もはや近いと地名とかけた。陸前宮城郡千賀。
○よる〳〵　波の寄る〳〵と、夜な夜なとかけた。

○なこそといひし云々　源義家の歌の故事、花が散る故、來るなと風に云ひしと、勿來の地名をかけたのを聯想。夏の關路を越えるのであるから、花のためには來るなと云ひし風を、暑さには待たれると云ふ意。
○人もすさめぬ　人も賞美しないと云ふ意。

秋歌

立秋

秋きぬと思ひもあへずふく風のなどうちつけに悲しかるらむ

一葉散林

日をさふる林がくれに立つ秋もかつちる風のひと葉にぞしる

風告秋

朝戸開けてむかへばしげる荻の葉にそよや秋たつ風のおとづれ

初秋月

風のおともまだそれとなき秋の色を暮るればそらにみする月かな

安永七のとし文月二日南風はげしく所の山より水おどろ／＼しく出でて賀茂川堀川などあふれみちて京のうちは皆河のごとくなり侍りしがかのふたつの流れのみならぬ小川などにも人の死にをるがあまた流れたゞよひぬと聞ゆるもいといたましう侍りしさて六日の日三條の橋のほとりに

○うちつけに　いきなりに、突然に。

○そよや　葉のそよぐと、そりやといましめる感歎詞。

○堀川　京都を南北に流れる川。

まかりしに常にことなるけしきもなしはたたなばた祭の竹など例のごと
く流すをみて定めなき世のさまのあはれにおぼえければ

棚機の手向を流す賀茂川は聞きし昨日のうき瀬ともなし

棚機

たなばたのあふよと思へば夕ぐれの雲のゆききもたゞならぬかな

ひととせの今日まちけらし星も猶くれゆくほどを久しとや思ふ

木

仰ぐぞよ天の河なみよゝかけて名に流れ木のくちぬちぎりを

草

折を得てけふ咲き出でし秋はぎに衣すりてやほしにかさまし

七草の中にもわきて彦星の名によぶ花をまづや手向けむ

星夕燈火

なゝくさのたぐひにあらぬともし火の花さへ星の手向にや咲く

物思ひけるころ七日のゆふべに

我は世をうし引く綱のむすぼほるおもひを星もあはれとは見よ

○うき瀬ともなし　いやな所とも見えない。瀬は川の縁語。

○よゝかけて云々　世々つゞいて、星の戀は永く傳はつて居る。くちぬは流木の縁語、名が朽ちぬ意。

○衣すりてやほしにかさまし　萩の花を衣に摺り染めて棚機女に貸したい。折るは萩の縁語。

○彦星の名によぶ花を　彦星は牽牛星。萩の異稱ををとこ草と云ふから、彦星の名に呼ぶ花と云つたのである。

○ともし火の花　丁子頭、燈心の先が大きくかたまつて花のやうになつて燃えるもの。

○うし引く綱のむすぼほる　世を憂しと牛とかけ、むすぼほるは綱の

○手枕の露をも　手枕に流す涙をも拂へ。

○咲きものこらぬ山かげに　萩の花の咲き殘つたのもない滿開であるから、萩の盛な所はない、其の上に待たるゝのは、萩に來て鳴く鹿の聲である。

○高臺寺　京都の東郊、慶長六年創建、臨濟宗、豐臣秀吉北政所の菩提所、萩の名所。

荻

夕ぐれにおもひくらべて曉のあはれやいづら荻のうはかぜ

夜荻

見し夢をさそふとならば手枕の露をもはらへ荻のうは風

夢さそふ後はねられぬ友としも中々なるゝ荻の上風

荻似人來

寂しさに人もとふやと夕まぐれ我聞きまがふをぎの上かぜ

萩

秋はぎのさかりの色もたど／＼し月まつほどの夕暮の空

行路萩

行きかよふ人まれなりし道のべに折りもやつさぬ秋萩のはな

萩盛待鹿

はぎの花咲きものこらぬ山かげになほ待たるゝはさをしかのこゑ

高臺寺にまかりて

わけゆけば袖にも色はうつりけり雨のなごりの露の萩はら

○むかし見しゆかりの色も云々　古今集卷十七「紫の一本故に武藏野の草はみながらあはれとぞ見る」から、紫をゆかりの色と云ふ。
○袖におく　薄の穗の靡く樣を袖に喩へた。
○しはしふゝめる　しばらく含んで居て穗に出でない。
○人ごとやいかにさがのの　人の噂のいかにさがないであらうかと、嵯峨野とかけた。

何がしの御園の萩さかりなるを歌よみてまゐらすべきよし風員軒のあるじすゝめられければ

むかし見しゆかりの色もこむらさき今はた忍ぶそのの秋はぎ

薄未出穗

袖におく露をうしとや秋きてもしばしふゝめるしののをすゝき

薄

月かけも露をとひよる秋の野の尾花が袖に枕からばや

古砌薄

此の秋も又ほに出でて花すゝきふりゆく庭にたれまねくらむ

草花色々

名もしらぬ草もさま／＼咲く花の色をあらそふ野邊の遠近

女郎花

人ごとやいかにさがのの美姿花(をみなへし)霧のまがきに見えがくれする

うち靡く方も定めずをみなへし風のこゝろや心なるらむ

朝顔

鄰家朝顏

中がきに心へだてずこなたにも傳ひてさける朝がほのはな

藤袴

匂へたゞ花さく秋のふぢばかま同じ名をよぶ草もあるよに

刈萱

思ふぞよ人の心もかるかやのあだなる風に亂れやすさを

秋花催興

月草に月もうつろふ夕まで秋の花野の露にそほちぬ

露

秋くれば草木のうへと見しほどにやがて袖にもあまる露かな

夕さればはかなくかけしさゝがにの絲にもむすぶつゆのしら玉

蟲

露ふかき尾花が袖に所得てまだ暮れぬまもむしやなくらむ

あはれともかしがましとも聞く人の心はしらず蟲しきるらし

ふるさとになくねもしげききり〲すよもぎがもとの心をやしる

○中がきに　中を隔てる垣に。

○同じ名をよぶ草もあるよに　同じ藤と呼ぶ藤葛などを思ひ寄せたのである。

○人の心もかるかやの　人心の輕いと、刈萱と。

○草木のうへと云々　露は單に草木の上にのみ宿ると思つて居たうちに、間もなく秋の悲しさに自分の袖に溢るゝ涙の露であるよ。

○蟲しきるらし　蟲がしげく鳴くらしい。

○よもぎがもとの云々　蓬が下、弊屋に住む悲しい人心を知つて居るかしら。

○薫大將の云々　源氏物語宇治十帖第一卷橋姫の卷、薫大將が戀人優婆塞宮の一女大姫君を馬に乘せて垣間見に行かれる話。

○つゆになくらむ云々　同卷薫大將の歌「山おろしにたへぬ木の葉の露よりもあやなくもろき我が涙かな」を思ひ寄せた。

○つれなき妻を水くきの云々　水くきの岡の葛葉は風に恨みを言はむ序詞。葛は風に裏を見せるからだ。萬葉集卷十二「水莖の岡の葛葉を吹きかへしおも知る兒等が見えぬ頃かも」妻を見すと水とかけた。

旅店蟲

ゆきくれてたのむ野もりが竹の庵にあひやどりして蟲もなくなり

庭のむしのねを聞きて

萩はみなうつろひはてし草むらに蟲のなくねぞ今さかりなる

菟道にて薫大將のわけ入りたまふものがたりのさま思ひ出でらるゝ夜離宮のもりの木陰にくつわ蟲の鳴きければ

ふりし夜にたがのりし駒の轡蟲木の下かげのつゆになくらむ

鹿

我が庵は野べも山邊も近ければ朝よひなれつをじかなく聲

月前鹿

しのぶ山忍びてかよふさを鹿もたへずや月にねをばたつらむ

岡鹿

さを鹿もつれなき妻を水くきの岡の葛葉の恨みてやなく

杣鹿

杣山や暮るれば斧の音たえてさらにをじかの聲かすかなり

實語。さやかにはをぐらに對する照應語。
○をしかの角の云々　惜しと牡鹿とをかけた、角はつかの間と云はむ序詞となつて居る。
○たつの都　水底にありと信ぜられて居る印度及び支那思想の龍宮
○山もとの里　麓の里。
○袖ぬらしけり　雨は降らぬに、涙で。
○ふりはへて　袂を振るにかけた、わざ／＼の意。

暮秋鹿

汝もけふをしかの角のつかのまもとまらぬ秋を惜しみてやなく

秋朝風

松はまたおとたて初めぬあき風も此の朝戸出の袖に覺えて

秋のあした山にのぼりて

うつし絵のたつの都のさまなれや霧の海なす山もとの里

秋夕雲

雨になる空とはみえぬ雲の色も秋はゆふべの袖ぬらしけり

野秋夕

さま／＼に匂へる野べの花みてもなぐさめがたき秋のゆふぐれ

山居秋夕

世のうさは立ちへだてたる山里の霧のまがきも秋の夕暮

秋夕催涙

いつはあれど老の袂にふりはへて涙すゝむる秋のゆふぐれ

秋風入簾

亂れ咲く庭のちぐさの花の香もなほふきいれねをすの秋かぜ

秋風落日斜

夕日さす影ぞさびしき岡のべのまつも秋なる風のしらべに

未出月

山まつにひかりはさして出でぬまの月まつこゝろいつにたぐへむ

月

さやけしな千町の田面未晴れてほ波かたより月のさよ風

ながむるに涙おつとも覺えぬをよふかき月のそでにやどれる

あふぎつゝこしかたしのぶ涙こそくまなき月のくまとなりけれ

月のよにおのづからなる蟲のねは絲竹よりもあはれとぞ聞く

もろこしの青海原やてらすらむ今も三笠の山のはの月

遠かたのきぬたのおとも聞きなれぬ月にねぬよの數つもるらし

あらざらむ我が世の後の秋までも思ひおかるゝやどの月影

梧桐新月

ほのかにも影ぞ洩りくる三日月のためとは桐もちりは初めしを

○ふきいれね　花の香をも吹き入れよ。

○ほ波かたより　穂波、稲の穂の波の如くなびくのが、風のため片方へ偏り。

○くまなき月の云々　くもりなき月の曇りとなつたよ。目に涙が宿つて曇つたのだ。

○今も三笠山の　今も看るにかけた、阿倍仲麿の「三笠の山に出でし月かも」の聯想。

杣　月

花さかぬ春のうらみもわするゝは朽木の杣の秋の夜の月

深山曉月

たれか又ひえを外山とみねの雲曉はるゝ月をあふがむ

海　月

海原の千尋のそこもみゆばかりさやかにてらす波の月かげ

海上曉月

からしてふあまの夜汐もすむ月の影くむ秋ぞうらやまれぬる

浦　月

松浦がたもろこしさしてゆくふねはかたぶく月やしるべなるらむ

草の名におふともいかゞ住の江の浦わの月は後も忘れじ

磯　月

よひのまにうきたつ雲もはなれその見るめさやけき波の月影

江　月

風わたる尾花の波にかげふけてま野の入江の月ぞ身にしむ

○朽木の杣の云々　葉がなくて月影をさまたげぬ故である。

○ひえを外山とみねの雲　深山に入り込んで、比叡を外側の山と見ると、峯とをかけた。

○からしてふ　汐の辛いと、汐汲む事のつらいとかけた。

○かたぶく月や云々　唐土もかたぶく月も西方であるからだ。

○草の名におふとも云々　住吉浦で有名な忘草に思ひ寄せた。萱草。

○よなれその　雲の離るゝと、人氣離れた磯とかけた。

○見るめ　海松布。

湖月

秋のよは八十有りといふ湊にもとまらで月にうたふ舟人

水上月

浮霧はあとなくはれてふくる夜の月影けぶる水のをちこち

閑居月

有りとしも人こそしらねよな／＼の月にとはるゝ木がくれのやど

竹間月

呉竹の葉わけの風のたえまにも隙（ひま）もとめつゝ月ぞもりくる

松月夜深

むらさめのおとにまがひし松風も絶えてこずゑの月ぞふけゆく

依月客來

霧ふかきよもぎがかどにさし入るもちぎりうれしき月のまれ人

月秋友

大空にあひも思はぬ月をのみ友とたのみて秋もへにけり

月前情

○八十有りといふ湊にも　琵琶湖に在る多くの湊、八十湊。

○月のまれ人　明月を賞しつゝ訪れ來し客。さし入るは月の緣語。

○あひも思はぬ　此方で思つても月の方では思はぬ。

○やがて稲荷の　やがて去ぬにかけた。
○いるさ　入り際。いるさは地名にあり、但馬出石郡入佐山であるが、地名にかけたのか、作者に聞かねば不明の歌である。
○みちもたどらず　月の光に路を辿る必要がないので。
○みなれても　水馴れてと看馴れてとかけた。
○うへもなき寶　商人のうりかふの縁語。
○いつとて　此の夜をいつと思つて。

月前眺望

さやけしなあみだが峯を出づる月やがて稲荷の山もてらして

月入斜窗曉寺鐘

窗の中にいるさの月をさきだててあかつきつぐる山寺のかね

樵夫歸月

岩根ふむみちもたどらずさやかなる月にうたひて歸る柴人

釣夫棹月

さす棹のみなれても猶あかぬ夜の月にやいづるあまの釣ふね

商人耽月

うへもなき寶と月をめでぬらしうりかふ業もよるは思はで

八月十五夜

名にたかき夜半のあはれはしる人もしらぬもあふぐもち月の影

同じ夜曇りしかば

浮雲にたちまよへども望月のさすが名におふかげはかくれず
もろ人の仰ぐこよひの月影をいつとて雲のたち隔つらむ

十六夜

打ちむかふ尾上は高くはなれてもなほ浮雲に不知夜(いさよひ)の月

月前松風

絲竹もおよばむものかおのづから月に聲すむ庭のまつ風

開宮正種がり月見にいかむとちぎりしに雨になりしかばいひやりける

花ならばぬるともとはむふり出でし雨にかひなき望月のそら

嵯峨無著庵隈根亭にて

いさよひの月まつほども山の端にうつる夕日ぞ又たぐひなき

寄月旅

古里をしのぶ旅寢の袖の露に見なれし月のかげぞとひくる

よしとても夢は結ばじ夜すがらの月に越えなむうつの山みち

入後暮月

山のはのなからましかばと入る月のなごりを空にしたふわりなさ

九月十三夜

むかしたれ夜も長月のあはれそふ今宵のかげを名にはたてけむ

○不知夜の月　いさよふは躊躇して遅るゝ月を云ふ、十六夜の月は十五夜より遅れて出るからだ、それと雲に妨げられて遅れるのをかけた。

○名にはたてけむ　後の月と云つて賞美し、名を立て初めたのか知らん。

駒迎

夕霧も立ちはへだてじ望月の駒ひきつゞくあふさかの山

逢坂の關まできてや引くこまも都近しと聲いさむらむ

雁

夕ぎりの絶間ばかりにほの見えて聲はつらなる天津かりがね

月前雁

今こむといひしちぎりや有明の月にきほひてわたる雁がね

霧中雁

立ちわたるきりのそなたは月やすむ雲路たどらぬ初かりのこゑ

霧

波とほくへだつるきりにみほがさき八重ふしがきの神代をぞ思ふ

野霧

さを鹿も山には入らじあくる夜のひかりへだつる野邊の秋霧

海邊霧

播磨がたゆふべのきりのかきけちて繪しまが磯もそことしられなき

○ちぎりや有明の　約束があつたのかと有明とかけた。

○雲路たどらぬ　雲の彼方は月が清く澄み渡つて居るのか、雲路を辿らず勢ひよくすぐる初雁の聲。

○かきけちて　繪の縁語。かき消して。

○繪しまが磯　淡路繪島の海岸。

○月出が崎　月が出ると地名とかけた。

○ふるきよし野の宮所云々　經ると古とかけた。とばり宮の縁語。かけて、とばりの縁語。

○うちつけに　小衣を打つとかけた、いきなりに。

○月下擣衣　よく歌題になるが、和漢朗詠集卷上「北斗星前横旅雁、南樓月下擣寒衣」から採つた。

橋だての松の梢はほの見えてきり立ちわたる與謝の海づら

湖上霧

晴れならむ夕暮かけてさゝ波の月出が崎にわたる秋霧

古宮霧

幾秋をふるきよし野の宮所きりのとばりにかけてしのびつ

擣衣

ひとりぬる秋の思ひも長き夜を月にかこちて衣うつらし

呼續（よびつぎ）の濱かぜとほくさそふらし里もよさむの衣うつこゑ

遠つ人松の秋風ふくる夜にしのびかねてや衣うつらむ

ねられずや夜半の小衣うちつけによそのいめをも驚かしぬる

月下擣衣

かげ清き月をめでてはたがためと思はぬやども衣うつらむ

風便數砧聲

賤の女が身にしむ夜半の秋風やしきる砧の聲傳ふらむ

稲妻

いはれのの眞萩かつちる秋風にふしどをさむみうづら鳴くらし
深草や里はあれゆく野べの秋なれもうづらのねにはなくらし

秋夜長

月もとく入りにし後ぞいとゞ猶老（おい）はおぼゆる秋の夜長さ

九月九日

汲みて猶千代をちぎらむ長月の名におふ今日の菊のさかづき

こゝぬかの日ものへまかりしに

山ざとも世のならはしにけふといへば手折るしらぎく拾ふさゝ栗

菊漸盛

下枝にはまだふゝめるも見えながら明日まつ菊のかつ盛りなり

菊

さまざまの花さく菊ぞもてあそぶ人の心の程には有りける
咲くきくの花のおくるゝ花はよしありともいかゞおもひとづらむ

菊粧如錦　日光御殿御宿題

けふにあひて九がさねの錦なすみ園のきくは千代のためかも

○いはれの　磐余野。

○なれもうづらの　汝も世を憂く感じて、鶉とかけた。

○長月の名におふ　長月を長壽の意にとつた、長月と云ふ名の通りに。

○山ざとも世のならはしに云々　九月九日、卽ち重陽に高きに登るは支那の風習である。

○かつ盛りなり　まだ蕾の花も見えながら、一方では盛りである。

○九かさね　皇族であるから、九重の意にかけ用ゐた。

○ゆく水はもとの水にもあらなくに　方丈記の開頭を思ひ寄せた。

○わらはけて　子供らしく。

○あげまきが　草刈童が。

○おふしたて給ひて　栽培なされて。

○ひたひの波　額の皺を波に喩へた。

○いたつきも　骨折りも。

水邊菊

ゆく水はもとの水にもあらなくに移ろふ菊の香こそかはらね

插頭菊

わらはけて折りかざせども白ぎくにかしらの霜やそひてみゆらむ

折菊贈人

わがせこがかざしのためと思はずば咲きそめし菊をけふ手折らめや

物へいきける道に菊のうるはしく咲きたるをみて

淺ぢふにまじれるきくもあげまきがけふのためとや刈り残しけむ

大内のみそのふにおふしたて給ひて小町となむ名づけ給ふ菊を一品の宮より賜はりければ

大宮のみそのの菊にたをやめのかほよき名をもとゞめけるかな

老いたる女菊の花もておもてをのごふ

老いぬればよそひにかへて千代ふべき菊をひたひの波にうつすか

人の前栽に菊うゑたるをみて

さま／＼におふしたてけむいたつきも花に見えたる宿のむら菊

圃とかけた。

○ちしほをまつの　千入の紅に染まるを待つと、松とかけた。

○ぬるで　濡るとかけた。ぬるではふしの木の異名。白膠木、漆樹屬の落葉喬木。

○くちなしの　梔子色、卽ち黃色をいふ。

径葛

寂しさはゆききまれなる山みちの色づく葛に渡る秋かぜ

蔦

葉末よりやゝ染めかけて露霜のちしほをまつの蔦の紅葉ば

紅葉

露じもにぬるでの梢まづそめてかへでや色のかぎりなるらむ

いづれをかさかりといはむとき遅きこずゑあまたの山のもみぢば

籬間紅葉

染めかけし梢を見せて山姫のきりのとばりやほのかくすらむ

里紅葉

山めぐる時雨やまなくかよひけむふもとのさともふかきもみぢ葉

松間紅葉

山まつの風に時雨を誘はせてまじる楓のひとりもみづる

紅葉如錦

くちなしのまだ下染めも紅の木々にまじればにしきとぞみゆ

○心を染むる人　染むるは紅葉の緣語。心を紅葉に傾けすぎた人。

○東福寺　京都東山の麓、藤原道家の創建。有名な通天橋がある。紅葉の名所、それで「天にかよふ名をさへ」と云つた、かけては架けてと名をつけてとにかゝる。

○修學寺　山城愛宕郡修學院。此處に離宮があり、後水尾帝は屢々行幸になつた。いまも御幸云々はこれを指す。

○西芳寺　山城葛野郡松尾谷の西、臨濟宗。夢窓國師の道場。

○昔ながら　昔のまゝのと、長等の地名とをかけた。

もみぢ見にまかりて入相のかねを聞きて

紅葉にもあまり心を染むる人おどろかすらし入相のかね

高臺寺にまかりて

いつのまに此の山かげやしぐれけむ思ひしよりも深きもみぢば

東福寺にあそびて

天にかよふ名をさへかけてたなばたのもみぢの橋はこれかとぞおもふ

修學寺のかり宮のもみぢを見て

山かげに紅葉の錦織りはへていまも御幸のなごりをぞ思ふ

山田西芳寺にて

もみぢ葉は西をせにせむことわりも見えて色こきふるでらの庭

鷹雄にて

われもまたつもれるとしの高尾山おい木のもみぢ陰たのまし

むかし住みし金鈴庵に今ある人をとひて

みなれつゝ我とはしるや此の庵に昔ながらの秋のもみぢ葉

紅葉送秋

暮秋紅

暮れてゆく秋におくるゝ紅葉ばはあすの時雨をなほやまつらむ

九月盡

散るもみぢ移ろふ菊を惜しむまに秋の日數もけふにつきぬる

たつた川けふはもみぢのしがらみをかけても水の秋やとゞめぬ

九月盡夜

ゆく秋を惜しむ此の夜も明けぬまに冬のきぬとて打ち時雨るらむ

山家暮秋

鹿のねもとほざかりゆく山里にいまはと秋のくるゝをぞしる

晩秋興

菊もみぢのこる山邊に遊びては今暮れぬべき秋としもなし

秋旅行

秋もはや半ばになりぬ旅衣きりたつ山をいくへわけきて

嵯峨野

花になる秋のさが野の草がくれちぐさに蟲も亂れてぞ鳴く

泊瀬山

○旅衣きりたつ山を　きり、たつ、共に衣の縁語、霧立つにかけた。いくへも衣の縁語、山の幾重にかけた。

○秋のさが野の　秋の習ひと地名さをかけた。

○今ははつせの　九月もはてると山名とをかけた。

○あらぶる神無月　あらぶる神とかけた。

○ことわりの　冬となるに尤もな

○きならし衣たちかへて　着馴れた衣を更へて、たちは衣の縁語、かへての接頭語。

長月も今ははつせの山風にちらまくをしき木々の紅葉ば

冬歌

初冬

此のあさけ秋のなごりに立つ霧ややがてしぐれの雲となるらむ

山風のおともあらぶる神無月けふより木々は枯れむとやする

冬のたつけふのしるしもあはれなり日はてりながら時雨ふるそら

ふゆきぬとながむる空にことわりの時雨の雲ぞ風にたゞよふ

初冬曉

冬のたつ曉おきの袖の露も霜になれとやあらし吹くらむ

十月更衣

冬きぬときならし衣たちかへてあふげば宮もうちしぐるなり

殘菊

庭もせにのこれる菊やゆく秋のかたみの霜のうてなるらむ

日かげにもとけず氷りし霜とのみ見えて枯生にのこる白ぎく

冬きてもまだ紅葉ばは移ろはでしぐれをのみぞ誘ふ山かせ

岡のべにつれなきまつの夕日かげはるゝと見れば又しぐるなり

山かげはうつる日かげも絶え〳〵にしぐれて暮るゝそらぞさびしき

時雨易過

山風を松にとゞめて誘はれし時雨の雲ぞよそに成りゆく

月前時雨

影さえてあまり身にしむ月の前すぐる時雨はこゝろ有りけり

連夜時雨

冬くれば珍らしげなき時雨にもよひ〳〵さむる手枕のいめ

里時雨

ふゆされば人も音せぬ山里にまなく時雨の雲ぞゆきかふ

遠村時雨

武庫山の雲をあらしの吹きこして今しぐるめり蘆の屋のさと

瀧邊時雨

いくそたびふるの山邊のむらしぐれ瀧津ながれの水はまさらで

陰晴楽獄殊

○武庫山の云々　攝津武庫郡、蘆の屋も同所。

○ふるの山邊　降ると地名の布留とをかけた。布留は大和山邊郡。

○くらま大はら　共に山城乙訓郡、鞍馬、大原。比叡山の西に當る。

○晴れてしも　晴れてしまつても

○夢をさへさそふ　木の葉を誘ふ事の出來なくなつた嵐が、夢までも誘ふ、卽ち人にとれば夢を醒される事である。

○みつのこみちも　三徑、陶淵明の歸去來辭にある句、隱者の庭園を意味する。

○心かはして　木枯の風と紅葉と心を通はせて。

○ふりとふる　降りに降る。盛んに降る。

夕づく日うつろふひえの峯つゞき今しぐるゝやくらま大はら

落葉

谷かげにつもるあくたや昨日までめでしこずゑの紅葉なるらむ

落葉如雨

浮雲はさそふあらしに晴れてしも猶しぐるゝや木の葉なるらむ

曉落葉

散りのこる木の葉はあらじ夢をさへさそふあらしの曉の聲

朝落葉

夜のほどにちりてつもれる紅葉ばをまた吹きさそふ庭の朝かぜ

落葉滿庭

庭もせはみつのこみちも見えぬまでひとつ落葉の色になりぬる

風前落葉

山姫もねたしとやみむ木枯に心かはしてさわぐもみぢば

落葉深

ゆく人はいつよりたえてふりとふる木の葉にうづむ山のしたみち

落葉滿水

かくながら氷りや果てむ落ちつもるもみぢによどむ山川の水

神樂岡にて木の葉のちるをみて

ちるころのもみぢながらも目のまへにさそふはつらき木がらしの風

霜

此のごろはあかつきやみもなかりけり夜たゞ結べる霜のひかりに

寒草

守り捨てし山田のかりほかたぶきてよな〳〵霜のやどりとぞなる

霜しろきかれふが中に枯れのこるみどりもあはれいつまでかみむ

寒蘆

蘆の葉は枯れはてにけり水鳥のかもの青ばに色を讓りて

浦ふねのゆききへだてしものぞともみえず枯れふす波のむらあし

氷閉細流

谷かげやいさゝ小川の一筋は冰りて後ぞ有りとみえける

田冰

朽ちながらつれなくのこる稻莖も見えて水田のこほるさむけさ

袖のこほりは

○かくながら　此のまゝで。

○神樂岡　山城東山の麓、吉田神社の東の丘。

○山田のかりほ　山田を守る假廬

○かれふ　枯生、枯草の地。

○かもの青ばに　鴨の首などの青羽に青葉をかけた。

○冰りて後ぞ有りとみえける　谷川を埋めた草が枯れたからである

○つれなくのこる　情强く殘る。

○袖のこほり　袖に宿り氷れる涙

○年ふかき　寄る年の深いと、積る雪の深いとかけた。

○みかま木　御竈木、平安朝時代、毎年正月十五日、諸寮諸司、五畿内の國司から宮内省に獻上する年中用料の御薪。

○とり〳〵いそぐ　木をとると、思ひ〳〵をかけた。

○笠松　笠の形した松、笠であるから雪待つ程と云つたのである。

埋火に馴れても年をふる人の袖のこほりは解くる日もなし

冬月

限となる梢もなべて冬枯れし峯より出づる月のさむけさ

いつしかと雪まつ森の木の間よりかけ白たへの月ぞうつろふ

夕ぐれに結びし霜もこほる夜のを笹にうつる月の寒けさ

寒月照霜

置きわたす刈田の霜にうつろふや身にしむ月のかぎりなるらむ

椎柴

吹きかくるあらしの雪に杣人もしばしとたのむ椎柴のかけ

薪

年ふかき雪もいとはでみかま木をとり〳〵いそぐ小野の山びと

寒松

たゞひと木高ねにたてる笠松の雪まつほどの色も寒けし

寒樹交松

枝かはす松のみどりをうらやまで落葉せし木や春を待つらむ

置くしものふかき夜ごろは引きかさねかひなき麻手小衾

千鳥

暮るゝより月もさし出の磯ちどり友よびつるゝこゑも寒けし

曉千鳥

あかつきのひかりやおのが時ならむいや聲さえてちどり鳴くなり

鳴千鳥

誰が筆にうつしかとめむ小夜ちどり繪島が月になきわたるかげ

湖千鳥

鳴く千鳥いづち行くらむ風荒れてひらのみなとの月あかき夜に

渡千鳥

ちどり啼く聲ぞ身にしむ郭公夜深く聞きし濱のわたりに

水鳥

水鳥の浮きみ沈みみわたる世を人のうへにもかけつゝぞみる

水鳥馴舟

船人のこゝろもなくてさす棹になるゝかもめや立ちもさわがぬ

水鳥篙筏

〇麻手小衾 麻の衾、

〇さし出 甲斐東山梨郡指出、笛吹の西岸、月のさし出ると、地名とをかけた。

〇誰が筆に うつしと共に、繪の縁語。繪島は淡路。

〇ひらのみなと 近江國滋賀郡比良村、琵琶湖に臨み平浦ともいふ。

〇かけつゝぞみる 人の身の上にも引きくらべて見るよ。かけつゝは水の縁語。

杣川やくだす筏のとことはになれてもさわぐあぢのむらとり

すむをしどりの

池水に住むをし鳥の衾とも見えてちりうく岸のもみぢ葉

霰

ふるほどはさわぐ霰のたま〳〵も小笹がうへにとまらぬはなし

霙

朝より身にしむばかり寒かりしはてはみぞるゝ夕暮の空

初雪

夕まぐれ騒ぐあらしはおとたえて初ゆきかゝる軒のたかむら

おく霜にいくらばかりもまさらねど待ち得し雪のけさはめづらし

雪

たゞこゝにうつせるばかりつもれ雪こしのしらねも富士の高ねも

きぞの夜のさえししるしに大ひえやあたごの嶺に積る白雪

めづらしとけさ見る雪の消えぬまに友をやとはむともや訪ひこむ

降る雪のながめはわきていづくぞと都のよもにゆくこゝろかな

遠近の山もそのふの見わたしにまじる色なき雪の朝あけ

○杣川や云々　植林から木を切り下す川に筏が永代にある如く、絶えず筏に馴れて居ても騒ぐ味鴨の群よ。

○たま〳〵も　霰の玉と、稀にもとかけた。

○たかむら　竹藪。

○いくらばかりもまさらねど　どれ程も霜よりまさらないけれど。

○きぞの夜　昨夜。

○わきていづくぞと　特に何處がよいぞと。

これも又都のつとと小原女が薪のゆきをはらはでやこし

深雪

いかばかり高かれとてか雪の山積れるうへに又つもるらむ

夜雪

呉たけにつもるもさぞなふかき夜のまくらにひゞく雪折れのこゑ

鳥がねもまだ聞えぬに関の戸のしらむや雪の光なるらむ

關路雪

關の戸はあくるあしたにゆく人を猶もなこそとつもる雪かも

驛路雪

伊勢のうみくもるとみれば風さえて鈴鹿の山路ゆきぞ降りくる

海邊雪

ふじのねはそこともなく雲とぢて明けゆく雪の浮島がはら

竹雪深

小枝のみ重げに見しもふりそひて雪の山なす軒の呉竹

清晨雪擁門

朝まだきふりうづみぬる雪のかどよしあくるとも人は訪ひこじ

○さぞなふかき夜の　定めて雪も深いであらうと、更けた夜とかけた。

○あくるあしたに　關の戸が明くと、夜が明くとかけた。なこそと關の名と、來るなとかけた。

○浮島がはら　駿河駿東郡、足高山麓の原野。

○あくるとも　門を明けるともと夜が明けるともとをかけた。

雪中遊興

ますらをのこゝろみえにや雪の日に鷹手にすゑて野べをゆくらむ

雪與年深

ひととせのくれゆく時につもるこの雪も月日のたぐひとぞ見る

霜月三日のあしたいたく雪ふるけふは冬至なれば

日のかげもながくなるてふけふとてやあくるを急ぐ窓の白雪

寂光院にすめる人のもとへ文のつてに

かくばかり身の老いさらば雪見にもとはましものを大はらのさと

雪ふる日苗村子葉をとぶらひて

入相の鐘を聞かずばゆふべともいさ白雪のつもる山かげ

かきくらし雪ふりけるあした

あとつくる人こそなけれ雪折れの竹に關なす夜のかよひ路

小澤蘆庵太秦にこもれる時文のつてに

心せよあしたのあらし夜半の霜ゆきもとぢめむ松のとぼそは

我が身ぞゆきと　源語句題

かくしつゝ暮れゆく年のつもりなばわが身ぞ雪とふり果てぬべき

○こゝろみえにや　大丈夫の心ばえを見せようとか。

○月日のたぐひとぞ見る　一年の暮には月日は積つて居る、それと同様に年の暮に積る雪も、月日の類と見るのである。

○日のかげもながくなるてふ云々　冬至から、日が長く夜が短くなるのを云ふ。

○いさ白雪の　いさ知らずにかけた。

○あとつくる　足跡つける、即ち來る人。

○ゆきもとぢめむ　雪と行きとをかけた。とぢむは事を終る意、玆では戸を閉ぢしめる意に用ゐた。

○かくしつゝ云々　つもり、ふり、皆雪の緣語。

十二月十七日春たつ日人の家に盆にうゑける梅の心ちよげに咲きたるを見て

年のうちに春は名のみといふ人にみせばや匂ふうめの初花

早梅

御名をよぶ三世のほとけの手向にとまだきに匂ふ宿の梅かも

網代

かゞり火も影さだまらぬ河風にたへてや夜たゞあじろ守るらむ

いかならむ雪もふきまく衣手の田上川にあじろもる夜は

鷹狩

狩ごろも袖吹きかへす朝かぜにたふるひながらいさむはしたか

狩場霙

雪ならばうちはらふべき狩衣みぞれにぬれてかへるたか人

炭竈

峯つゞく中にもしるし小野山は雪よりのぼるすみのけぶりに

すみがまのけぶりばかりはふりつもる高根の雪もえこそうづまね

爐火

○御名をよぶ云々　十二月十九日から三日御佛名會で、佛名經を誦するから、それに思ひ寄せたのである。

○たへてや　我慢してや。

○衣手の田上川　衣手のは田上の枕詞。田上川は近江栗太郡。

○たふるひながらいさむはしたか　身震ひしつゝ勇む鷂。はしたかは隼の一種、鷹に似て小さい形。

○たか人　鷹狩する人。

○雪よりのぼるすみのけぶりに　雪と炭との對稱。

○えこそうづまね　埋める事がとても出來ない。

埋火のあたりによひはるねぶりて夜ふかくさむる老やなになる

深夜埋火

小夜更けてむかへば閨の埋火も外面の霜の色にさえぬる

爐邊閑談

埋火の霜になるまでかきくづしいにしへ今のことも語りつ

爐邊懷舊

なにとなく灰かきならし埋火のもとしのぶ夜ぞ打ちも寢られぬ

神樂

神がきの庭火の陰ぞ更けにける星うたふにもほどやなからむ

歳暮

ひと夜ねて明けなば春と思はずば年のなごりないかに惜しまむ

暮れて行く年のいそぎはよの中をよそげに住める宿もかはらず

浮き沈むおのがさまぐ\水鳥の流れてとしのみなとにぞよる

あだにのみことしも過ぎぬ年ごとにかくいひく\て翁さびしか

老が身は猶をしむべき年ながら堪へぬ寒さに春ぞまたるゝ

古寺歳暮

○外面の霜の色にさえぬる　屋外の霜の色の如く、埋火が灰になつて白くさえた。

○もとしのぶ夜ぞ　埋火の側を慕ふと、昔を想ひ起すとかけた。

○星うたふにも　元旦、四方拜の儀式に、天子新年に當る屬星を拜し唱へられるのを云ふ。

○年のいそぎ云々　新年を迎へる準備は、世間をよそにして居る樣に見せて住む家でもやはり同じである。

○水鳥の　水鳥の如く。

○としのみなと　年の留る所、歳晩を云ふ。

○翁さびしか　老人じみてしまつたよ。

薪こり菜つみ水くみ山でらもいとまなくこそ歳はくれぬれ

しはす二十七日の曉に

暮れのころ年の光と大ぞらにあふぐもうすき有明の月

五十一になりなむとする年のくれに

こゆるぎのいそぢのうへに老の波又かけそへむ此の夜明けなば

六十のとしのくれに

むそぢぞと思ひし年もくれはとりあやにくに身ぞふりまさりぬる

爐邊除夜

老いぬればとしのいそぎをよそけにて今宵もむかふ閨のうづみ火

歳暮祝言

よもの海をさまれる世のとし波は誰も安くぞ越えむとすらむ

冬朝

朝日うけうつろふかたは打ちけぶる軒端の霜もあたゝかげなり

冬鐘

ふりつみし尾上の雪に埋もれぬひゞきも寒き曉のかね

打越濱

〇こゆるぎの　磯と五十にかけた、小動磯は今の相模國府津海岸。

〇年もくれはとりあやにくに　年の暮と吳はとりにかけ、同じ綾はとりにかけてあやにくと云つたのである。吳服綾服。

〇よそけにて　よそに見る風で、知らぬふりで。

よそ目には波かと見えて打越の濱まつが枝につもる白ゆき

○打越の濱　波の打ち越すにかけた。

○うき名とり河　浮名をとると、名取川とをかけた。名取川は陸前名取郡。

○かりにても　假にもと、刈りとかけた。

○うき人に神は心をひくしめの　自分につれない人に神様は贔屓して居られて、いつまでも、注連繩の朽ち行くまでも祈つても祈るしるしがない。心を惹くと、引くしめ繩とかけた。

○あはでのうらの　逢はないでと地名とかけた。

閑田詠草下

戀歌

戀

知らざりき戀の山路のおくにしもうき名とり河あらむものとは

忍戀

いかゞせむことの葉草のかりにてもおもふ心の色しみえねば

顯戀

我のみの名にしありせばかくばかりあらはるゝとも歎かざらまし

依涙顯戀

かこつべきよしこそなけれ紅のわがなみだより漏れしうき名は

祈空戀

うき人に神は心をひくしめの朽ちゆくまでも祈るかひなき

不逢戀

いつまでかあはでのうらのあま衣かひなき波に袖ぬらすべき

深夜待戀

いかならむ人をしづめて後にとは契りしよはもあまり更けぬか

偽りもまだならはねばふけ過ぎて後にとふやとたのみてぞ待つ

初遇戀

年月のつれなかりつる恨みさへ解けてうれしき夜半の下紐

稀逢戀

結びけるちぎりもはかなまれにのみあひみることを玉の緒にして

稀逢不絶戀

あふことは遠山かづら打ちはへて絶えぬばかりの中もはかなし

後朝戀

別れしは中々夢とまどはれてまたねの牀にうかぶ俤

厭曉戀

きぬ〴〵の袖のわかれを曉にさだめおきけるならひさへうき

語戀

つれなさにたえし月日のうきことはかたるもつきぬ小夜の手枕

思

○人をしづめて後にとは　人を寢靜まらせて後に行かうとは。

○解けてうれしき　心うちとけてと下紐のとけてと。

○玉の緒にして　生命として。結ぶは緒の縁語。

○遠山かづら　あふ事の遠いとかけた。山かづらは茲では山に生ずる葛。

○打ちはへて　のばして。絶えと共に葛の縁語。

○中々夢とまどはれて　却つて夢と思ひ惑はれて。

我ながらいつをおもひの始めにて移る月日もしらずなりけむ

片思

あはれてふことばの露もかけなくにひとりくちゆく我が袖ぞうき

遇不逢戀

わすられぬ闇のうつゝの年もへぬ見しは一夜の夢のなごりを

絶後悔戀

今更に悔いの八千たび一たびも逢はずばたゆるうさも知らじを

歎無名戀

あふことは波のよるせのうつせ貝むなしき名のみなぞ立ちにけむ

うらみ

及びなき身をぞうらむることわりの人のつらさを思ひかへして

なほざりのつらさなりせば玉づさのつてにも人にうしといはまし

歸無書戀

夢かさば今朝のわかれをうつゝぞと思ひ定めむうへもまちみず

旅戀

古郷はとほき旅ねにねてもみゆねでも見えけり妹が面影

○ことはの露も云々　葉の上の露と、言葉とをかけた。かけなくに、露の縁語、先方で言葉をもかけぬに。

○波のよるせ無しと波とかけた、波のうち寄する瀬。○うつせ貝云々　身のない空貝、むなしきはその縁語。立ちにけむは波の縁語。むなしき名は戀の事實のない浮名。○ことわりの　道理千萬な。○なほざりの　いい加減な。

春戀

春がすみ思ふが中を隔てては我もきゞすの音こそなかるれ

夏戀

夏の夜は人しづめてとたどるまに閨の板戸のとくや明くらむ

朝戀

まれにあふ夢のなごりの朝戸出にみおくるかげもなきが悲しさ

夜戀

ふけてとは契りしかども月かげの西になるまでとはれぬは憂し

戀面影

うとくなる心にも似ず立ちそふはありしながらの人のおもかげ

戀人事

ますらをの山をぬくてふ力にも堪へぬや戀のおもにならむ

戀扇

かたみとてみるもゆゝしなあだ人の置きわすれにし閨のあふぎは

戀畫

かく思ふ人の心のうつし繪におよばば人もあはれとやみむ

○隔てては　霞の縁語。春霞の如く思ふ二人の中をへだてては。
○きゞすの　雉子の啼く如く。
○人しづめてと　人の寝しづまるを待つてと。
○明くらむ　戸の縁語、短い夏の夜であるから、もう明けるであらう。
○朝戸出　朝の外出。名残の朝ごかけた。
○みおくるかげも云々　見送る戀人の後姿も。
○西になるまで　月の傾いて西に流れんとする夜明まで。
○ありしながらの　昔のまゝの。
○山をぬくてふ　「力抜山」楚の項羽の詩句。
○ゆゝしな　いまいましいよ。
○あだ人　心の浮薄な戀人。心の變つた戀人。
○うつし繪に　人の心の寫しにかけた。

寄月戀

忘れぬもうしや雲居に三日月のほのかなりつる人のおもかげ

寄月催戀

とはれじなとはじといひし悔しさも暮るゝ夜ごとの月におぼえて

寄月顯戀

月待つといひし夜毎の涙よりつゝむおもひも世にや洩れけむ

寄霰戀

あはでのみ年をふるやの玉あられおとにはたてず物をしぞ思ふ

寄曙戀

暮るゝよりまちつるものを曙のそらだのめせし人ぞつれなき

寄山戀

みちのくに有りといふなるわすれずの山をし人の心ともがな

なげきのみしげれるものを戀の山なにおくふかく思ひ入りけむ

寄徑戀

一すぢに思へどつひに行きあはむちぎりもしらぬ戀の中道

寄河戀

○三日月の　雲ゐに見しにかけた、三日月の如く。
○月待つといひし　月を待つと言ひまぎらして實は人の來るを待つて居た。
○年をふるや　年を經ると、古屋とをかけた。
○おとにはたてず　霰の緣語、聲音には出さず。
○そらだのめせし　曙の空とかけた。むなしくあてにならぬものをあてにして居た。
○わすれずの山　陸前刈田郡藏王嶽一名不忘山。
○なげきのみ云々　歎きを樹にかけて、茂れると云つた。悲しみはかりいやまさる。
○おくふかく　山の緣語、いりけむも同じく緣語。
○ちぎりもしらぬ　約束の將來もわからぬ。

ながれてのうき瀬もしらず安川ややすくも人を思ひそめてき

寄橋戀

夢とのみたどりしまゝの繼橋のつぎてわたらむ道もしられず

寄海戀

海士ごろも袖のみ濡れて逢ふことのなみのみるめは中々にうき

寄潟戀

思へども人のこゝろの淺香潟なみは我が身のうらにかけつる

寄泊戀

浮舟のうきに堪へなむこがれても世にくちなしのとまり有りせば

寄木戀

常磐木のかはらぬ色を逢ひみての後の心とおもはましかば

寄宿木戀

なげくぞよ思ふあたりにやどり木のねもみむことの頼みなきよを

寄苔戀

ことにいでてえやはいはほにむす苔のふかき思ひにみねはふれども

寄海松戀

○安川や　近江國に在る野洲川。やすくもと云はん序。
○やすくも　輕はずみにも。
○たどりしまゝの繼橋の　眞間の繼橋とかけた。下總葛飾郡眞間。
○なみのみるめ　無みにかけた、みるめは海松布。人目は非常にいやだ。
○淺香潟　人の心の淺いにかけた、攝津住吉郡船堂村の海岸。
○なみは我が身の云々　なみは涙を喩へた、涙は我が身の上にのみかけた。
○世にくちなしのとまり　世間で何とも非難せぬ。口無泊は備後沼隈郡千年村。
○ねもみむことの　根と寢とをかけた。
○ことにいでて　言葉に出して。
○えやはいはほに　どうしても言はれぬと巖とかけた。
○むす苔の　生ひし苔の深き如く。みねは我が身と峯とをかけた。

るゝ、浮き海松ゝかけた。

〇ことかたに云々　他の方へどうして靡かうや。

〇から猫　單に猫、唐より輸入した意味。

〇もどきつるかな　非難したよ。今更自分の身に思ひ當つた。

〇桑子のまゆの　蠶の繭にこもる如き鬱陶しさも。

〇こめてすぐさむ　心にのみ思ひ籠めて世を送らう。こめては蠶の緣語。

〇見るめをからで　見る眼を借らでゝ、海松布を刈らでゝ。

〇もりめに　守り眼に、監視する如き人眼のために。

寄竹戀

ことかたになびかむものか呉竹のながきよかけて契り初めしを

寄鶴戀

心のみ空にこひつゝ歎くかな澤邊のたづのねには立てねど

寄獸戀

かくつらきものとはしらでから猫の妻戀ふさまをもどきつるかな

寄蟲戀

夢のまもいかで胡蝶に身をなして思ふあたりの花になれなむ

寄蠶戀

いつまでか桑子のまゆのいぶせさも心にのみはこめてすぐさむ

寄牀戀

いめにだに見るめをからで獨寝の牀はなみだの海となりぬる

寄門戀

こよひまた逢はでぞかへる思ひかね立ちよる門もしげきもりめに

寄玉戀

あふことのかたきやいかに水底の玉もかづけばかづくてふよに

寄筐戀

忘草つむものならばあふことのかたみもうしと歎かざらまし

寄硯戀

あふことのかたきためしと見ても先づ硯のみづにそふなみだかな

寄扇戀

秋風のかごとしらるゝかたみにてあふぎてふ名はえこそ頼まね

寄笛戀

妹がかどふきてぞ過ぐる笛たけのあな戀しとぞいふよしをなみ

寄簾戀

いつまでかかけて頼まむ玉すだれひま求めてといひし契りを

寄船戀

あだなみは袖にさわぎてうき舟の思ふかたほに吹く風もなし

寄心戀

及ばねばこひとはしりて戀ひ初めしわが心こそつきなかりけれ

寄涙戀

○あふことのかたきやいかに　人と逢ふ事のむづかしいのは奈何なることか。

○つむものならば　摘む事の出来るものならば。

○かごとしらるゝ　茲では飽きたと云ふ秋風にかこつけた言葉の知られる。

○あふぎてふ名は　扇と逢ふとかけた。

○あな戀し　あゝ戀しと笛の穴とかけた。

○かけて頼まむ　末かけて心だのみにしようや。かけては簾の縁、ひまも同じく縁語。

○あだなみは云々　空しき涙を袖にこぼしつゝ。思ふかたほは思ふ方と片帆とかけた。

○つきなかりけれ　茲では不都合であるよの意と、よりつくすべもないと両方にかけたのである。

我がせこ

わがせこがくるやと聞けば蓬生に聲かしましく啼く蟀むし

よるひとりをり

黑かみの長き此の夜もひとりのみ亂れてものを思ひあかさむ

あひおもはず

さもこそは人めの關のかたからぬ年月をさへ隔つべしやは

うらみず

とにかくにうき身の程を思ふにはわするゝ人もえこそうらみね

「流津瀨にねざしとゞめぬうきくさの浮きたる戀もわれはするかな」と

いふ歌のかへし

よるかたもそこと定めずうき草の浮きたる戀は誰が心ぞも

おもへばくるし

いたづらに洩れむうき名はたがためと思へば苦し心ひとつに

いたづらふしを

よひ〳〵にいたづらふしをすがむしろ猶いつまでかしきしのぶべき

○さもこそは云々　定めて人目の關と聞くあらうが　いくら隔つる關所も、年月の過ぐるまでを隔てようや。

○思ふには　思ふにつけて。

○うきくさの　水の激する瀨に根もしつかりつけずに漂ふ浮草の如く。

○そこと定めず　何處とはつきり定めず。

○いたづらふし　空しき獨寢。すがむしろ　すると菅とをかけた。

○しきしのぶべき　筵を敷くとかけた。繁く戀ひ慕はうや、今は思ひあきらめよう。

高師濱

よそにたつ名のみ高しの濱風にかひなき波ぞ袖にかゝれる

雜歌

雲

心なきものとはいはじ夕ぐれは出でこし山にかへるしらくも

松浦がた波路の末にゐる雲はこまもろこしの山かあらぬか

海上雲

播磨潟絵しま家しまそれならぬ島かとみえて立たる白雲

風

うきものと思ひは果てじよそに咲く花をも風のつてにこそみれ

雫

木のもとに立ちやすらへば雨過ぎし後の雫に袖は濡れけり

山

とりよろふ都の四方の山はみなゑめるがごとく見えてのどけき

○高師濱　和泉大鳥郡高石、今の濱寺附近。浮名ばかり高いにかけた。

○心なきものとはいはじ云々　陶淵明の歸去來辭「雲無心以出岫」に思ひ寄せた。

○たたる白雲　立ちてある白雲。

○思ひは果てじ云々　思つてしまふまい。よそに咲く花をも、風のたよりによつて吹き運んでくれたので見る事が出來るのだ。

○とりよろふ云々　都の四方をと[illegible]

天のかく山

五月雨の雲ゐる天の香久山に衣ほすべき日影をぞまつ

地儀

くらげなすたゞよひにける始めよりつぎていくその山もなりけむ

都

春の花秋の月にもかけて猶みやこのそらをよにあふぐらし

もゝしき

もゝしきの大宮どころあふぐにも千木高知れる神代をぞ思ふ

海

わたの原なぎぬとみればあら波の立てるや人のこゝろなるらむ

みけむかふあはぢの島も雲とぢてみぬめのうらの夕寂しき

海路

珍らしとみればかくれぬ眞帆あげてきほふ船路にうかぶ島山

舟人にまかせ果てたる波の上心細さもたれにつげまし

浦

○雲ゐる天の香久山に衣ほす　萬葉集卷一の持統天皇御製を本歌とした歌。

○くらげなす　くらげの如き、古事記卷上「久羅下那洲多陀用幣琉之時」水母なす漂へる時の意。

○いくその　ぞの位の。限りなく多い。

○千木高知れる　千木をたかく支配された。千木は上古家屋の様式、屋根に高く棟木の材を出したもの。

○みけむかふ　御食向ふ、あはの枕詞。

○ぬめのうら　攝津敏馬浦。目に淡路島が見えぬにかけた。

○きほふ　進み競ふ。

ことゝはに月の赤石の名にしおはばそのうら人に我もなりなむ

湖

名にしおふ花の都にちかき江は月とゆきとのみなとなるべし

湖邊にて即興

くれわたる八十の湊のいづこともわかずほのめくいさり火の影

出湯

もろこしの名立たる宮の古ごともこゝに有馬の出湯にぞ思ふ

行路市

明けたてばゆききぞしげき辰の市いち人ならぬ人もまじりて

橋

いかにして渡し初めけむ雲をふむ山路の奥の岨のかけ橋

寄橋雜

八橋の水の蜘手のさま〴〵に世わたる道はやすけくもなし

世を渡るみちはさま〴〵かはれども思へばあめのまゝの繼橋

渡

○ことゝはに月の赤石の云々　月の明いと地名とをかけた。永久に缺けず月の明るいと云ふ名の通りであるなら。

○名にしおふ云々　滋賀の舊都をさす。

○ちかき江は　近江の琵琶湖をさす。

○もろこしの名立たる宮云々　唐玄宗皇帝が楊貴妃を入れた驪山宮の温泉をさす。白樂天の長恨歌に見える。

○辰の市　大和奈良。

○あめのまゝの繼橋　天のまゝと地名眞間とをかけた。天のまゝとは天分による意。

今も猶すめらぎの道法の道絶えぬちぎりやかたらひの山

藤かづら絶えぬねざしをとゞめけるあともかしこき多武の山寺

古寺雨

草も木もうるほふ雨のふる寺にあまねき法の心をぞしる

古寺鐘

高野山夢おどろかす鐘のおとにその曉も思はざらめや

山家

なべて世にめなれぬ鳥も明けくれの友とぞ馴るゝ山かげの庵

山里にたれ植ゑそめて櫻ばなうき世わするゝ色に咲くらむ

山家風

山住も夢はうき世にかよふやと夜半のあらしのおどろかすらむ

山家夜

杣人の斧のおとさへよるは絶えて更に寂しき山かげの庵

山家經年

軒の松木高くなりぬ山柴のしばしが程としめし庵も

○藤かづら　藤蔓の如く。
○多武の山寺　大和磯城郡多武峯山上に談山神社及び妙樂寺があつた。
○雨のふる寺に　雨の降ると古寺とをかけた。
○その曉も　彌勒菩薩が億年の後此の世界に現はれ、法華、最勝、大集の[illegible]を說き給ふ[illegible]三會の曉と云ひ、[illegible]。太平記、三人法師に[illegible]。高野山に[illegible]三人法師である。
○山柴の　しばしと云はむ序詞。
○しめし庵も　定め卜してつくつた庵も。

山館煙細

山住も雲にはのらぬあらましをたつるけぶりの末にみすらし

田家

小山田をもるともみえぬ一つ庵落穂ひろへる人や住むらむ

易得亭の記の中に

植ゑおきし若木のさくら咲く花もうることやすき色ぞ見えける

聞きなれし山ほとゝぎすこゝにてもうることやすきはつねともがな

四方の空さはる隈なき月かげもやすくえぬべきゆふべ曉

又あらかじめおもふことは

早蕨のもゆる山邊に庵しめて秋はひろはむ庭のさゝぐり

住みける庵のはしらに書きつける

草の戸にとひこむ人はかりにてもことしげき世のことなかたりそ

とし暮れなむとするころ吾を心をさなきものなりとそしる人の有りと聞きて

よしさらばわらはは心になりはてて老の數そふとしも惜しまじ

○雲にはのらぬあらましを　煙の終に青雲を志さぬ豫定であるのを。

○あるともみえぬ　山田を番するさへ見えぬ。

○落穂ひろへる　方丈記の鴨長明の聯想であらう、簡易生活せる隠者をさす。

○うることやすき　易得亭にかけた句。

○さゝぐり　小さい栗。柴栗、枕子、栗の一種。

○かりにても　かりそめにも。

[illegible]

小澤玄仲とひきつゝ除髮をおどろきて「思はずもかはるすがたをみつるかなそむかばわれぞそむくべき世を」かへし

なか〳〵にかはる姿ぞはづかしきそむきても猶そむかれぬ世に

見のかみおろしけるとき

爪木とりあかくむ業もいとふなよ衣の玉のひかりみるまで

こむとしの丙午にあたれるすらあるを元日の支干又ひとしきは陽氣の重なりに重なりていといたうおぞましき心ちすなるをその元日の午のとき日そく皆既といへるなむ中々陰氣もてなごめしづめ給へる天のめぐみならむとかたじけなうおぼゆるは下がしもなる身も青人ぐさのかずにもれぬならし

いとあまりいさめる駒をとゞめてぞ御牧のはるはのどけかるべき

讀書はじめに關雎篇をひらきて

いとはやも去歲の氷のながれ洲に春をみさごの聲のどかなり

枝折に書きつけける

枝折せし道はかへても春每に見ぬかた多きみよしのの花

○小澤玄仲　小澤蘆庵。前出。
○思はずもかはるすがたを云々　此の蘆庵の歌は前の六帖詠草にも出て居る。

○丙午にあたれる　丙は十干中の陽、午は十二支中の陽、陽が重なると年中火事が多いとか、また此の年に產れた婦人は良人を凌ぎ殺すとかの迷信がある。
○おぞましき　いやな恐ろしい。
○皆既　皆既日蝕。
○なごめしづめ給へる　陽の盛んなるを陰でやはらげおさへる。

○いさめる駒　陽なる午をさす。

○關雎篇　詩經周南關雎篇に「關關雎鳩在河之洲」雌雄相應じ和鳴を發す。みさご。
○春をみさごの　春を見るにかけた、みさごは雎鳩、[illegible]の一種。詩經の句を採いた、流れ洲も同様である。

雪こぼすごとくふるに龐居士のむかしをおもひて寶幢禪師に申し侍る

いづくよりふるともいさや白雪のもとのこゝろを君にしぞ思ふ

莊子の化其萬物而不知其禪之者といへる心を

春秋はくるともしらず去るとしもしらず春秋と人はいひけり

同じく逍遙遊の心を

錦なす桃も櫻もうらやまでおのが春とやすゞな花さく

萬葉集を検合しける夜時鳥の啼きければ

汝も又ふりぬる道をしのびねに鳴きてかくらむ山ほとゝぎす

櫻鯛のうた高橋圖南老人におくる

さくらてふ名もなつかしきあぢがたの春の海邊にうくいをやこれ

土佐國某寺に貫之ぬしの書き給ふ月の字の額ありそれがうつしをみて

くまもなき光はよもにみつ汐の月をぞよする土佐の浦波

大石良雄原元辰の筆痕をみて

流れてのよゝのかたみよまことあらむ心に染みし水ぐきのあと

春長寺の額に開神悦體蕩除心垢といふ大經の語のこゝろを

○雪こぼすごとく　雪流し下す如く烈しく。
○龐居士のむかしを　唐の禪宗を修めた名士。江西道一禪師馬祖の門。有名な禪語「好雪片々、不落別處」がある。

○逍遙遊　莊子内篇中の逍遙遊篇

○高橋圖南老人　高橋宗直、圖南と號する、前出。天明五年正月歿、年八十五。
○あぢがたの　讃岐庵治の浦か。
○うくいを　浮く魚。浮くは櫻の縁語。

○たからの池　佛語、極樂淨土に

千々にさくことばの花も直(すなほ)なる心ぞもとのねざしなるべき

人のうへのこと何となくいひしらひけるとき

みくまのゝうらの濱木綿(はまゆふ)いくへとも知らぬは人のこゝろなりけり

我が像をうつさば好める櫻の木のもとに遊べるさまをなどたはぶれにいひけるついでに

翁さび今はこゝろも朽木がき花にまじらふ影ははづかし

加藤千蔭がみせける歌の中に佛名のうた「降りつもる雪を分けこし山ぶしの春おぼふらむ柏梨の酒」といふがいとめづらしとおぼゆるにつきつきておのれも

法の師はかづける綿もかへなしも三世の佛のめぐみとや思ふ

葉巖和尚芳野山の櫻の朽木に芳野と書きし額をおくられしを謝して

みよし野の朽木よあはれいつの世に咲きにし花のかたみなるらむ

柏はら某女郭公の落し文てふ物をみせられしがむくの葉のさゝやかに卷きたるものなりこは比叡の山あるは大はらのおくこち谷のほとりに有りとぞ

○いひしらひけるとき　言ひ爭つた時。

○濱木綿　濱萬年青。石蒜科の常綠草本、おもとの如く葉を數枚の重なつた莖を出す、萬葉集卷四の「み熊野の浦の濱木綿百重なす心はもへどたゞにあはぬかも」

○柏梨の酒　攝津柏梨莊から宮中に[illegible]果物の酒、十二月佛名會の時、宮中で[illegible]めし。

○かづける綿も　賞祿に戴いた綿も。

○郭公の落し文　陰曆五月頃、結び文に似た形に[illegible]たのを云ふ。

○こち谷　山城乙訓郡。

郭公たれ見よとてか世はなれし深山の奥にのこす玉章

松露をおくりし人に

玉なせる松の下露ぬれ〳〵も袖に拾ひしなさけをぞ思ふ

新たに得たる行厨のおほひに書きつく

此のとものなからましかば遠かたの花も紅葉もいかで尋ねむ

道晃に人久しく都にとゞまり給ひてしたしき人々をつどへてあえし給ふときばせをを

芭蕉葉に風ふきわたるよな〳〵は旅寝の夢も又やぶるらし

山田のうら人歌こはるゝにそのもてあそびものによせて

世をてらす玉もあるらむ年をへてあつむる石のちゞの中には

綱代弘訓はじめてとひきて「人づてに名のみを聞きてありえねばまさめにきみを見むとわがこし」返し

訪はれつるかひこそなけれことの葉も霜に朽ちゆく松の木かげは

本居宣長はじめてとひきて「立ちよりて里の名におふ老松の本のこゝろはけふぞしりぬる」「ふりはへてとひこし我をかきつばた花のたよりよ

○松の下露　松露の意を含ませた。松露は擔子菌類、麦蕈とも云ふ。

○行厨　辨當箱。

○あえし給ふ　あへの假名遣ひの誤り。饗應なさる。

○やぶるらし　芭蕉の破れると夢の破れるとかけた。

○綱代弘訓　通稱權太夫、寛居と號す、伊勢外宮の權官、本居春庭及び太平の門、安政三年十一月歿、年七十三。

○人づてに名のみを聞きて云々　人傳へにあなたの名許り聞いて、ますます事が出來ぬので、直接お目にかゝりたいと自分は來た。

○ふりはへてとひこし我を云々　わざ〳〵訪ひ來た私を、かきつはたの花の如く浮華な心持と思つて心をへだてて下さるな。かきつはたを引用したのは五月頃尋ねたからであらう。單に花の心、浮華な

もろともに長らふればぞ老松のもとのねざしもとひとはれぬる

かきつばた花のたよりにとはるゝもゝとのゆかりの色はなつかし

富小路新三位殿とひ給ひて「いにしへの道のをしへをとひよりてふみ見るけふのいやたのしさよ」御返し

ことの葉のめぐみの露の玉をしもつゞりの袖にかくるかしこさ

大堀柳子とひ來て「もろともに見し俤はかはれども心かはらでかたる嬉しさ」かへし

俤のかはるにつけていにしへのうきも戀しきものにぞ有りける

古をかくることばの露にしも猶こそ老の袖はしをるれ

赤澤昌郷はじめてきたりて「うま人に逢ひまくほしみよもぎふにいゆきもとほりたどり來にけり」かへし

よもぎふのふかしきやどをうま人のいゆきもとほりとふが嬉しさ

逢谷興詩はじめてきたりて「夏山のしげれるかげを尋ねきて道はいづことたどりつるかな」かへし

はる〲とわけてとひこし夏山の深き心を後もたのまむ

世にざえある人のよはひ若きばかりあやふきはなしよろづに進むをしり

○ふみ見る　文見ると踏み見るとかけた。

○つゞりの袖　襤褸の袖。自分の身分を卑下した語。

○うま人　茲では徳のある人。貴い人。

○いゆきもとほり　行きめぐり。徘徊し。

○ざえある人　才ある人。

て退くをわするめりこは古の聖のをしへあまりなけれどひとことをもていはゞ歩を退るなるべし老子所謂企者不立跨者不行といふことを思ひ給へかしとある人にかたらへばいで其の意を歌よみして給ひね身の守りとせむなどいと〳〵ねもごろなれば

やすらひて行かばぞゆかむ旅ごろもきその御坂のあらきその道

そは四十とせちかきむかし金澤江の島鎌くらなど江戸よりのかへさにみ廻りしことを今此の道の記をみて思ひ出でらるれば其の禪師に申しつかはしける

むかし我分けしは夢の海山をさらにうつゝにみづぐきのあと

田向得仙が山科にかへるとて「君なくばかくとも人にしられじな心つくせし道はあれども」かへし

猶ふかく分けいりてみよこしかたの心づくしを山口にして

底ひなき谷にわたす丸木橋よにもあやふき道ぞこの道

　醫は人の生死にかゝるを思ふべしかろ〴〵えたりとなたのまれそよ

門生某世のことしげきによりて歌もおこたるよしいひて「波の中にたゞよふ沖の舟よりもうき世の中ぞわたりかねぬる」と聞えけるに

○聖のをしへあまりなけれど　昔の聖人が教へ說き盡して、餘蘊がないが。

○みづぐきのあと　筆の跡と、見しあとをかけた。

○心つくせし道はあれども　心を盡し勉めた道はあるけれども。田向得仙の事は未詳であるが、前後の歌により醫者たる事がわかる、道は醫道。

○山口にして　山の入口として。

立ちさわぐ波の中よりなか〳〵に沖津玉藻はかづきあけなむ

蝶夢法師の泊庵に題す

おもしろき磯邊によせよとまり舟よしや一夜の浮寢なりとも

高橋若狹守岡崎亭諸山景配當音羽山

花もみな青葉になりぬ音羽山やまほとゝぎす今や聞くらむ

蒼博士一圓齋のつくれる庭をみて

咲く花のかたはらにやはみ山木もこゝろある人のうつし植ゑては

北村輝孝の眠雲閣にあそびて

住むぬしは仙人なれや我も又醉ひつゝねぶる雲の高どの

近江にて澤村琴所の舊居をみて

松寺のまつにかけてもしのぶぞよ住みけむ人のこゝろことの葉

嵯峨無著庵にあそびて

廣澤の池の水かげよど河のながれの末も月にさやけき

病める人の妻のなつかしからぬをみて

いはほもて人の心をつくりけむ結の神もおやしまれぬる

上野國高崎驛市江といへる女のしるせる淺間山の災の記をみて身の毛も

○なか〳〵に　却って。

○高橋若狹守　高橋圖南、宗直のこと。

○澤村琴所　名は維顯、字は伯陽、通稱七郎、井伊侯の儒者、伊藤東涯の門、元文四年正月九日歿、年五十四。

○廣澤池　山城國葛野郡嵯峨村の東に在る池。

○池の水かげよど河の　池の水影のよどむこと、河名ことをかけた。

○なつかしからぬ　病める良人に對する態度のよくない意。

○結の神　夫婦で離れない縁を結ぶ神。

いよだつやらなれば

筆のあとに見るもすさまじ淺間山その山づみのこゝろあらじは

寛政十年文月二日の曉方廣殿の燒けにしを人みな歎きをしむことおのが家をうしなひしにもまさりけりされぱそのうれへをのぶることのはとりどりこれかれ聞ゆるをおのれはたゞあきれまどひはた我が庵もちかくせまりたれば災をのがれしにつきても又とひくる人のさはにて日頃ふれど露ばかり心のいとまなきにけふなむ七日なりとて里の手向の歌みする人の有るにおどろかされてけふその日なりと空をあふぐもたゞならで

天の川せきくだしぬるものならば此の大み寺火にはなさじを

愛宕の火をなげきて

花にのみあたごと思ひし山風のほのほをさへもさそひけるかな

津の國たまさか山の櫻をかけまくもかしこき御あたりに奉りしかたえとて惠恩院大僧都のもとよりおくり給ひけり此の花世になきさまなればいたらめでくつがへりつゝゐや聞え申す

此の花よ君によらずば山の名のたまさかにしもいかゞ見るべき

此のついでに百如律師のよみてそへ給ひし歌をもみせ給へる一よせ雄き

○せきくだしぬる　川水を堰き止めて地上へ流し下した。

○花にのみあたご　花に許り仇をすると、愛宕の山名とをかけた。

○かたえ　片枝。

○ゐや聞え申す　御禮を申し上げる。

物ともいはじ」てふ陶隠居が詩の意なるべしといとをかしう見給ひて

たまさかにみねのしら雲かをる香をとめて花とや君にさゝげし

花山院愛德卿の秋夕の御うたに「うきながらながめも捨てぬながめかな秋は夕ぐれゆふぐれは秋」とよみ給ひし御かへし

げにも此の秋はゆふぐれ夕暮のあきのあはれをしる君ぞきみ

女院御所より春日野の松むし鈴蟲をこにこめて宮の御前に參らせ給へる時とみにかの御所へ奉り給はむの御こと有りければよみ侍りける

秋の花さかりになれば春日野の秋をもとへと松むしや鳴く

きのふかも若菜つみにし春日野に聲ふりはへて鈴蟲のなく

又八重櫻をよみしむかしを思ひてよみ侍りける

ちぎりあればふりにし里の蟲も今秋の宮居の月になくなり

飼ひける猫の魚の香をとめてとかくさわぐをみて

から猫のうへにのみやはみな人のうるに心のやすむまぞなき

法　師

紫も朱(あけ)もなにせむ法のしの法のこゝろを深く染めなば

西　施

○陶隠居が詩　晉の陶潛、字は淵明、歸去來辭を賦して田園に隱れた。

○聲ふりはへて　聲振りにかけた。ふりはへては特にわざ〳〵。

○秋の宮居　秋の宮は皇后宮をさす、秋の宮殿をかけたのである。

○うるに云々　魚を得むとあせる猫許りでなく、世の人すべて慾のためには休む時もない。

○紫も朱もなにせむ　僧の高位の人に着ることを許される紫衣、緋衣も何にならう。

唐衣あらふみぎはの石にさへ名をとゞめけりあはれたわやめ

王昭君

四つの緒に涙の玉をぬきかけてゆくも果てなき旅路なるらし

楊貴妃

すさまじき野原の露と消えにけりおぼしまにみし花の姿も

李太白

我が影をうつす鏡の白髪に千尋のたきもたぐへてや見し

四皓

かくれ住むよたりの翁出でてこそ世はひとかたに定まりにけれ

老子

世の人のつねともしらぬ常の道ひらきし關のあとぞかしこき

上陽人

衰ふる身を鶯のねになきて哀れいくその春かへぬらむ

小町

松風になびく柳のつよからぬそれしもあはれこゝろことのは

妓女對鏡

○唐衣云々　唐詩選の西施行詩「西施昔日浣紗津、石上青苔思殺人、一去姑蘇不復返、岸傍桃李爲誰春」に據つた。

○四つの緒に　琵琶をさす、馬上琵琶を抱いて遠く匈奴へ嫁した王昭君を歌つた。

○すさまじき云々　馬嵬原で楊貴妃の殺された事をさす、おぼしまにみし花の姿は、李白が貴妃と牡丹とを讃賞した絶句。

○我が影をうつす云々　「白髪三千丈、縁愁似箇長」李白の照鏡見白髪詩と、鏡湖詩とを對校したのである。

○四皓　秦時代の東園公、綺里季、夏黄公、甪里先生を云ふ、商山の四皓、此の人々により漢の太子が定まつたのである。

○つよからぬ云々　古今集序に見える紀貫之の小町批評の語。

手弱女が心のほろやますかゞみみどりの眉のかけにむかひて

鶴

のどけさや心にかなふ朝日かげくもらぬ空にあそぶまなづる

鶏

庭津鳥しば〳〵鳴きぬ旅出せむかりやの軒に月はのこれど

猿

木々の葉ものこらぬころの山風のさそふましらの聲ぞ身にしむ

不二の山の霞める麓に櫻咲きけり

ふじの根の霞にくもる春の日はふもとの花ぞ雪と見えける

武藏野なるべし尾花あまたあり不二の山見ゆる

不盡の根の雲をあふぎてゆく〳〵も秋風寒し武藏野の原

福祿壽天をあふぎたるに題す

天の原ふりさけみつゝしたふらしなれし南の里のやどりを

布袋仰月かた

あふぐ此の人をぞ仰ぐ大空の月を心の月にたゝへて

豐干ねぶらず虎もまたねぶらず是れいまだいねざるか既にさめたるか

〇[illegible]心を[illegible]にかけた。眞淡雄。

〇庭津鳥しば〳〵鳴きぬ云々 賈島の暁賦「游子猶行於残月、函谷鷄鳴」などを思ひ寄せたのである。

〇なれし南の云々 福祿壽は南極星の化身であるからだ。

〇豐干 [illegible]に出て居る支那の高僧。

○張果郎　支那の仙人、よく瓢中から駒を出す術を行ふ。

○こゝろの駒　意馬、煩惱の制す可からざる喩。

○朱買臣荷柴見書　朱買臣字は翁子、漢時代の呉人、家貧で薪を擔ひ讀書した、妻離緣を求めて去つた後朱は武帝に用ゐられ會稽太守となつた、舊妻羞ぢて自殺した。

○時鳥名をも雲居に云々　此の說話は平家物語卷四、源平盛衰記卷十六に出て居る、但し後書では前句を言つたのが關白兼實となつて居る。

○引きかけて　併せて、弓の緣語。

ぬる夢もさむるうつゝにことならぬもとの心をしる人やたれ

張果郎瓢より駒をいだすところ

ひさごより出でしをみても思へこのおのがこゝろの駒やあるかと

陶淵明無絃の琴にむかふかた

かきなでて心をやりし玉琴は後の世までも名に聞えける

朱買臣荷柴見書かた

柴人のあふぐも高きくらゐ山ふみ見ざりせばいかでのぼらむ

西行上人坐して手を拱けるかた

ふく風に往來さだめぬ浮雲もしばしたゞよふみねはありけり

片山長顯がもたる源三位鵺を射たまふ繪に「時鳥名をも雲居にあぐるかな」と苑道左府の宣ひしに「弓張月のいるにまかせて」とつけられしはぬえをしとめられしにもをさ〳〵おとらぬほまれならし

文の道弓矢のみちに引きかけてほまれありけるおもかげぞこれ

那須與市のかた

梓弓ひきやわづらふ浦風にゆらぐ扇のまとにむかひて

花よりもかぐはしきかな武士の君にすゝめし心ことの葉

柴人の山路をかへるところ

奥ふかくましば刈りける山人やともにおくれて今かへるらむ

山吹の咲きたる河邊に人たてり

わたる瀬を誰にとはまし山吹のこたへぬ色に匂ふ河水

伯藏主の繪に

かぐはしと思ふまどひに身を捨つるためしは人もよそに見ましや

名とり河の繪に

取りかへすためしもあらば我も又あだに流せし名をすくはばや

髑髏の繪に

たれもみなおのがすがたを寫し繪のこれ何物と心にぞ問へ

二見の浦に朝日出でたる繪日待の料とて

あめつちの二見のうらにあらはれて世を照らす日のめぐみかしこき

山水の繪に

山水の遠き境も寫し繪にうつせば寫すものにぞありける

むかふより心もすみぬ山水のうき世にとほき寫し畫のあと

○心ことの葉　心異なると、言の葉とをかけた。

○こたへぬ色に　古今集誹諧歌「問へど答へず口なしにして」に據つた、答へぬ色卽ち口なし色黄色の意。わたるせは渡る世、生活の道。

○伯藏主　狂言「伯藏主」によつた、狐が伯父の伯伯藏主にばけて獵師に狐釣る事をいましめ、歸途鼠の油揚に釣られた說話。かぐはしは油揚の匂ひ。

○名とり河　陸前名取郡、川の名の如く、名を取り返す例があるなら。

○日待の料　前夜から潔齋して明朝の日の出を待ち禮拜するのを日待と云ふ、日待のために。

○むかふより　畫に向ひ眺めると同時に。

秋の野のかた

百草の花野の秋をうつし繪はむしの聲さへ聞く心地する

探鯨法眼の書きし山水の繪を竹岡氏に贈るとて

老が世にあそぶはかたき山水のとほき鏡もうつし繪に見よ

岩根に小竹生ひたるところ

かりそめに生ふる岩根の篠竹もつひに千尋の陰となりなむ

竹上に月あるかた

色かへぬみどりの竹もむすぶ露移ろふ月に秋を知るらし

山本有香讀書室四詠の内畫竹

時の間もみずはあらじと繪にすらも寫してめづる君よ此のきみ

おなじく墨梅

墨かきの筆の匂ひは世をへてもうつる色なき梅の一もと

圓山應擧試毫の梅の繪に

春立ちて先づみはやせと試むる筆の匂ひにさくや此の花

さくらの繪に

見ても猶あかぬ心をうつし繪の花には厭ふ春風もなし

○探鯨法眼　鶴澤探鯨、探山の子、狩野派の畫家、法眼に敍せられた。

○此のきみ　竹の異名。和漢朗詠集「晉騎兵參軍王子猷栽竹爲此君」王子猷が「何可一日無此君耶」と云つ故事に依る。

○うつる色なき云々　變ずる色のない、匂ひも梅の緣語。

○みはやせと云々　こゝでは見てもてはやせと。さくや此の花は王仁の作と稱せられる「浪速津に咲くや此の花」の歌に據つた、梅をさす。

十二月色紙のうち文月梶のはに

夕まぐれ天津そらまであげまかば今日星合の手向なるべし

澤邊に鶴ひとつたてるところ

たゞひとりたてる澤邊のあしたづはいづこの空の友をまつらむ

櫻さく山に月あり雁わたるところ

盛りなる花と月との中山をこえていづこに雁はゆくらむ

虎を繪がきし扇に

寫し繪のとらもうそぶくものごとはならす扇の風にてぞ知る

睡猫の繪に

妻こひによるはうかれて咲く花のあたら春日にねぶるからねこ

蝸牛の繪に

かひありとたのむもはかなかたつぶりこれはおもひの家ならぬかは

龜の繪に

池水に尾をひく龜はおのづから心やすくぞ世々を經ぬべき

建綾足がかきしさまざまの魚あそぶかた

わたのはらよせてはかへる波のむたかよりかくよりいをあそぶめり

○文月梶のはに　七月七夕に梶の葉に思ふことを書いて流し祈る風俗。

○かひありと　しるしありと、貝ありとかけた。

○池水に尾をひく龜は　尾を泥中に曳く龜は、高い地位にあつて束縛されるよりは貧賤で安らかな方がよいと云ふ譬喩にした、莊子秋水篇にある。

○建綾足　建部綾足、幼名は金吾、[illegible]、江戸に住む、號を[illegible]、[illegible]。歌[illegible]。俳諧、[illegible]、安永[illegible]、年五十六。

○波のむた　波と共に。

○かよりかくより　彼方に寄り此方により。

かり場牀といふは道のべなどにかりそめに腰にあててやすらふものなり此の圖を蕪村繪がきてはたほくをかいつけたり是れに又かきそへける

かきくらす雪のはれまに松かげやかり場のとこと頼むかり人

森川高尹が彌生の晦日ばかり東にゆくをおくる

見もきくも心なぐさむ旅ならしのこれるさくら山ほとゝぎす

小澤玄仲が東にまかりける馬のはなむけ

鴈がねにおくれぬ旅もかへるさは秋よりさきのちぎりたがふな

玄仲返し「鴈のくる秋をもまたじ歸るさは雲ゐ遙けき旅路なりとも」

佐藤三立が歸省をおくる

花とりもさもこそあらめ休らはでゆけや待つらむかぞいろのため

仙臺來昌寺靈巖和尚惠日山の住職として參內のことをへて故鄕にくだり給はむとす又ほどなく紫衣を賜はらむ時はのぼりこむと契らせ給ふ別れにのぞみて

しばしこそ立ちへだつともかきつばた衣すりには又もきななむ

つくしにゆく人をおくる

いつしかとかへりこむ日をまつ人もこゝろつくしの旅にやはあらぬ

○かり場牀　狩場牀か。
○蕪村　谷口蕪村、天明の俳人兼畫家。

○花とりも云々　春の花や鳥が定めて面白くはあらうが、しかし。
○かぞいろのため　父母のため。

○かきつはた衣すりには　紫の衣を摺りに、紫衣を賜はりに。
○又もきななむ　又おいでなさい、著て來とかけた。
○こゝろつくし　心を盡しと筑紫とかけた、心をなやます。

三熊海棠芳野へ花見にゆけるとき

君のかば花にをかたれよしの山われも見し世の春をしのぶと

細合半齋が浪花にかへるをおくる

波かすむ浪速の春のいかなれば都の花を見すてては行く

とはおもへども

又きませなにはのあしのかりそめにゆくもかへるも安き舟路を

石見人華嶽がかへるとき別れをおくるも老のくせのなみだもろくて

逢ふことを又いつとかもたのむべきとまるは老いぬゆくははるけし

送上田秋成遊河内

龍田山またかきさとにあそぶとも紅葉は待たでとくかへりませ

秋成かへし「身におはぬ秋のにしきのたつた山とりきじものをかへる

日までに」

長坂長泰が有馬へゆあみにゆくをおくる

心せよいでゆありとも有馬山いなの小ざゝにさやぐ秋かぜ

五月ばかり故郷にかへる人をおくる

かへるにはしかずとをなく鳥にしももよほされてや君はいぬらむ

○三熊海棠　三熊思孝、字は海棠、介堂、主計とも稱し、花顚と號す、畫家で最も櫻を愛好した、寛政六年八月二十六日歿、年六十五。

○細合半齋　細合方明、字は麗玉、京都の儒者、享和三年歿、年七十四。

○浪速の春のいかなれば　大阪の春がどんなによいか知らぬが。

○かりそめに　假初と刈りとかけた。

○とまるは老いぬ云々　留る自分は年をいたし、行く君は若いが遠くはなれて居るのである。

○身におはぬ　身に相應しない。

○いなの小ざゝに云々　攝津武庫郡猪名の笹原。

○かへるにはしかずとをなく云々　不如歸となく鳥、即ち時鳥に促し誘はれて、君は去るのであらう。不如歸となくのをは感歎詞。

○しばらくもたゆまで云々　暫しの間もぐづ／＼せずに早くお歸りなさい。

山田ぬしのはゝの病によりて俄に國にかへれるを

しばらくもたゆまでかへれ病せぬ時だに親はまつがならひな

別れにのぞみて

ますらをはなげかぬものを別れ路の袖に草葉の露やかゝれる

旅のうた

袖の露にちさとの月はやどしてもまだはるけしな東路の空

よな／＼にうつる旅寢のまくらにもむすぶはおなじ古郷の夢

又いくか山路越えなむうらの波まくらに聞きて夜ごろへにしか

行くかたに又もさがしき峯みえてつきぬ山路の旅のくるしさ

野を遠く露分けきても夕ぎりに猶宿るべき里もしられぬ

旅泊

いくよはか磯山でらの鐘の音も波のうきねに聞き明かしぬる

かねのおとはいづくなるらむ沖中に舟こぎはてて小夜ふけにけり

舟人は思ふみぎはによせはてて同じうき寢の袖もしぼらじ

如月ばかり近江へくだらむとするに庭のさくらの咲きそめたるをみて

咲きそむる花につれなく別るともまだ散らぬまにとくかへりこむ

岩くら山にまうでたるに日もくれかゝるころ雨ふり出でしかば長徳院にやどりて

むかしみし我とはしるや變る世をよそげに立てる山の松が枝

獅子飛櫻谷にいたる岩にくだくる波のさまいとめづらなり

こととはに波の花さく櫻谷此の山人は春も惜しまじ

湖水をわたりて山田にいたる道にて

ゆたねまく春の山川のうら舟のまほにまちとる風ものどけし

長月のころ醍醐の山寺にやどりて

とりぐ\にあはれとぞきく小夜更けて男鹿なく聲をしかおふこゑ

ならへ祭見にまかりしとき玉川にて

山吹のかげみし春はむかしにて冰るにけり玉川のみづ

生田の森にて

露結ぶ旅のころもによしやふけ生田のもりの秋のはつ風

さぬきの金比羅へまうでしとき

朝ぼらけあかしのせとはこぎ過ぎぬこや高砂の沖邊なるらむ

波のうへの魚とりもちて鳥かげのいづこさしてかみさご飛ぶらむ

○ゆたねまく　齋種蒔く、忌み清めた種の籾をまく。

○生田のもり　今神戸市内。

○あかしのせとは　曉が明るいと地名とかけた、明石の瀬門。

○こや　これや。

○みさご　雎鳩、猛禽類の一種。

彌山の神鴉を

いつよりか此の山がらす往きかへり神のまに〳〵つかへそめけむ

笠とり山を分けて

笠とりとうべもいひけり浮世にはかくれてすめる奥の山ざと

笠置山にまかりし道にて井堤の左大臣の舊跡をとひしにいとさだかならねば

今はたゞ人のこと葉の花にのみむかしをのこするでの山吹

大津より望むに八幡山はいとちひさけれどをさなき時より移り住みて年經ぬれば人は我が古さとゝさへいふさはまづめにかゝればせどう歌に

海こしにむかふ高山みじか山しもさはなれど中にはしきは家りせし山

しがのほとりに御所内とよぶ地あり其の中にも竹の一むら生ひたる所を垣ゆひまはせり臺盤所のあとなりとぞ

かたばかりとまる名殘もかしこしな志賀の都の大宮どころ

如意がたけにて時鳥のしば〳〵鳴きければ

太山路を分けみぬ人やほとゝぎす卯月はしのぶものといひけむ

愛宕より月の輪へまうづる道にて

○笠とり山　山城宇治郡笠取山、かくれては其の緣語。

○井堤の左大臣　橘諸兄をさす。彼の別莊が山城綴喜郡井手村にあつたからだ。

○せどう歌　旋頭歌。五七七五七七の調。

○臺盤所　食物を盛つた盤を載せる臺のある所、宮中では女房の詰所となつた。

○卯月はしのぶものといひけむ　時鳥は五月鳴くものとされて居るからだ。

月の輪をこゝろにかけてゆく道はたゞ雲をふむこゝちもぞする

嵐山大悲閣より大堰川をみおろして

流れてはうき世のちりに濁るべきものともみえぬ山川の水

相坂山にて行きなやむ牛をしひておふをみて

小車のめぐりこむよはおのれ又引かれてうしと思ひしるべき

鵜飼みむとて美濃國岐阜にゆきけるが雨によりて其の業もみず道も絶えたればあやしの旅ゐに日かずを過して

日にはよか夜にはいつ夜を雨はれず道もたえぬとわびて過しつ

堀川の月見の橋といへるは西八條に住み給ひし平家の公達の月見給ひし所となむしらず經盛卿か忠度朝臣か此の一門には風流の人々のおほかりしも思ひつゞけられて

むかし人めでゝ月見のはし柱名にたつあとをあはれとぞ思ふ

蓮花王院の矢数を見て

梓弓やまとしまねに神代よりとりつたへたるわざぞ此のわざ

述懐

よしあしにうつるならひを思ふにもあやふきものは心なりけり

○月の輪　愛宕山麓。
○大悲閣　嵐山の西部、千光寺大悲閣といふ。
○めぐりこむよは　輪生輪廻で、未来の世では自分が牛に生まれかはるかも知れないから。うしは牛と憂しとかけた。
○堀川の月見橋　堀川は京都洞院通と大宮通との間を南北に流れる運河、月見橋はそれに架せる橋。
○名にたつ　柱の縁語。
○蓮花王院の矢数　所謂三十三間堂の大矢数。蓮華王院東七條の北に在る。[illegible]の夕刻まで、軒下の端から端まで矢を通し、命中数の多いのを競ふのである。
○やまとしまね　弓の矢的にかけた。
○とりつたへたる　とるは弓の縁語、わざは弓道。

なぞもかく我にひかるゝ我ぞとは思へどおもふかひもなきかな

よしや身は世の有るさまにまかせなむ心の奥をかくれ家にして

ひとりのみみつのこみちを行きかへり心のとものなき世をぞおもふ

ことの葉の道によらずば嬉しきもうきも思ひをいかゞやらまし

もどかしと人はみるらしいはけなき心ながらに身はふりにける

われながら心おぞしとことはてて後ぞよろづにくやしかりける

易く得て今ぞ住みつく深草の里をとなりの山かげのいほ

翁さび思ふがまゝのことの葉を世に似ずとしも人なとがめそ

寄暁述懐

うきものと見し世も有りし暁をね覚むるときと今になれぬる

ね覚めして物にまぎれぬ暁の心ながらに世にあそばばや

春述懐

梅柳つぎてさくらをいつしかと待つこそ春のおもひなりけれ

松によせて

人も又かしらの霜の後にこそ松のみさをはあらはれぬべき

竹によせて

○みつのこみち　三徑、陶淵明の帰去来辞に出た「三徑就荒、松菊猶存」をさす。

○こゝろおぞしさ　心がにぶい、愚鈍である。

○梅柳つぎてさくらを云々　先づ梅、次に青柳の絲、次に櫻の花はいつ頃咲くかしらんと。

ほど〳〵のふしなかりせば呉竹のなほきも頼むかひやなからむ

苔によせて

石（いそ）のかみふるきみちには尋ねよる人やなからむ苔むしにけり

山によせて

古の人のこゝろの高間山今しもよそに見て過ぎめやは

野によせて

遠近の野邊てふのべを尋ねてぞことの葉草のたねも得ぬべき

關によせて

さしてゆく心の道し直からばなにか人めをはゞかりのせき

琴によせて

したふぞよ絲なきことをかきなでて心やりけむいにしへの人

棊によせて

我も又あだなる戀にみだれごの打ちもねなくに物思ひせし

書によせて

我が筆ぞあまりつたなき名ばかりをしるすに足ると思ひすてても

書によせて

○ふし　竹の節と人間の節操と。

○石のかみ　古の枕詞。

○高間山　大和葛城山中の最高峯金剛山の別名。

○たねも得ぬべき　材料も得らるべきであらう。たねは草の緣語。

○絲なきことを云々　陶淵明の故事。

○打ちもねなくに　寢もしないで、打ちは棊の緣語。

○名ばかりをしるすに足る云々　楚項羽の言つた故事。史記項羽紀に「籍曰書足記名姓而已」

契りあれやわらはにて見し寫し繪も柴の扉はあはれなりしか

有所思題吸江斬壁「すめば又うき世なりけりよそながら思ひしまゝの山里もがな」といふ歌をことわりと思ふことのありて

心より外にのがれぬ道ぞなき野べも山邊も同じうき世は

山水の清きながれを尋ねてもこゝろすまねば住むかひぞなき

思ふことありけるとき

飛驒たくみ打つ墨繩のほど〳〵にのりにかなふは有りがたの世や

うれふることはべりしころ思ひつゞけける

しづけさを思ひいりぬる松のとにこゝろかはさぬ松風はうし

定めなきよのうき波にうきしづむあまの小ぶねのあさましの身や

月だにも曇りみはれみ定めなきよのことわりを歎かずもがな

蓼と思ひしも是れ莪なりといふ心を

たらちねの思ひおきけむかひもなし身をはつかしの森の下くさ

草津の驛にとゞまるに障子をへだてゝやどりたる人どものうみをのしわざのことどもは何くれとかたらふを聞きて

世の中に我もうみをのうきふしは苦しきものといひやしらせむ

〇契りあれや云々　幼時見し繪畫中の柴の扉の圖は、當時遙深く見たが、今日かかる住居するのも因縁があつたのであるよ。

〇打つ墨繩の　打つ墨繩の如く。墨繩は大工の直線を引く道具。規矩に適ふ事のあり得ない世よ。

〇よのうき波に云々　うき波とうきしづむと、あまの小舟とあさましと音の繰返し。

〇蓼と思ひしも云々　詩經小雅の「蓼々者莪、匪莪伊蒿、哀々父母生我劬勞。」孝子の親を養ひ得ざる悲しみ。

〇はつかしの森　山城乙訓郡羽溪村にある森。羽束師森。

〇うみをのしわざ　績麻の業、近江は麻の産地であるからだ。

〇我もうみをの　積みと倦みとをかけた。

懷舊

書きのこすあともかしこし道しある昔のひとのこゝろことの葉

こしかたのことかたらはむ人だにも有るが少なく今はなりにき

懷舊　有賀長伯五十回追悼

家のかぜ二つつたへつゝ百とせも千とせもかくぞあとはしのばむ

春懷舊　佛光寺御門主三回忌追悼

月も又しりてやそらに霞むらむみとせの春のむかしがたりを

秋懷舊　梅井一室七廻忌

稻妻のひかりみえさす思ひせし別れもいまやなゝとせの秋

寄月懷舊　武者小路右三位實岳卿三十三回忌

月かげのさしいるかどの名残さへあらずなりぬる秋ぞかなしき

寄雪懷舊　迎稱寺入阿七回忌

歲月に雪とつもれど埋もれぬ名をかたみなる言のはのとも

寄世懷舊

太山木のもとのすがたぞしのばるゝ人のこゝろの花になる世に

寄道懷舊

○有賀長伯　以敬齋と號す、京都の歌人、平間長雅の門。元文二年六月二日歿、年七十七。五十年忌は天明七年に當る。家のかぜは家學。

○佛光寺　京都高倉佛光寺通に在る、眞宗一派の本山。

○梅井一室　名は貞□、京都の歌人、武者小路家の門。

○埋もれぬ　雪の縁語。

○花になる世　實のない浮華なる世、古今集序の語。

吾も又あそぶは同じ道芝にさきだつ人のあとをしぞ思ふ

寄夢懷舊　有賀長收勸進故義齊十三回忌

かきかぞふ浪花のこともふりぬればあしのひとよの夢にかはらず

老後懷舊

かかりせばかからむものとかへりこぬ昔をくゆる老のおろかさ

こしかたのことをあまたに數へてはいとゞわが身の老ぞしらるゝ

稀にだにかたりあはさむ友ぞなき老いて昔をこふるおもひは

思往事

うきにのみ過ぎこしものを何にかく思ひ忘れぬむかしなるらむ

花山寺遍昭僧正九百回に座主の宮の仰せごとにて懷舊のこゝろを

鳥もねに啼きて昔をしのぶらし殘ることばの花山のかげ

廣澤にて長孝のさゝの屋のあとをとひて

かりそめにかこふばかりのさゝの屋も住む人からぞ名はのこりける

鬪鷄野にまかりし時氷室のあとをとひけるにやゝいり立ちて山のはらに
あれたる社あり燈籠に氷室社と書きたるを見て

貢せし世は遠けれど津の國のつげのの氷室名こそ絶えせね

○同じ道芝に云々　あとは道の縁語。

○有賀長收　初名長因、長伯の孫、大阪に住む歌人、文政元年五月七日歿、年七十九。

○あしのひとよ　蘆は浪花の縁語、一節と一夜とかけた。

○花山寺遍昭僧正　花山の元慶寺は山城山科に在つた。遍昭は俗名良岑宗貞、仁明帝の藏人頭、帝崩御の後出家し元慶寺の座主となる寛平二年寂、年七十六。

○長孝のさゝの屋のあと　望月長孝、初名僉友、又長好、小伴野屋と號す、京都の歌人。延寶九年三月十五日歿、年六十四。

○住む人からぞ　住む人のために

○鬪鷄野　菟餓野と同じ、今大阪市天滿川南北の地であらうと云ふ

○貢せし云々　皇室へ獻上した時代は遠いが。

長嘯翁の西山の庵のあとをとひて櫻の朽木を見て

くちにけりやよいざさくら古のこと語れともいはましものを

竹田の西行庵は上人白衣なりける時の別業にて西住上人終焉の所となむ憚りなくしもあらねど雨上人の名を犯して思ひよせ侍りける

西にしも行きて住む人の名殘なほたえぬ竹田のよゝのふる寺

行脚の折天龍のわたりにてなむ雨師ゆきあはれ給ひしを住上人今はの日行上人きあひ給ひしよしすくせのひく所かもいとあはれにおぼえて

河波の立ちわかれても又こゝにあふせはふかきえにこそありけれ

林元瑞へ文の返事に

古のことかず〳〵に思ひいでて打ちおきがたき人の玉づさ

わすれずばとひもきななむ花鳥はむかしながらの都邊の春

釋教

月の國ほしの國より日の本にふき傳へたるわしの山かぜ

さま〴〵のみ法の雨もひらくべき心の花のためならぬかは

寄水釋教

法の水たえぬながれを汲む人にとはばやふかきもとのこゝろを

〇長嘯　[illegible]衞菅狹小濱城主、秀吉の臣、大阪の役後、封を奪はれ東山に住み更に大原野に幽居す、慶安二年六月卒、年八十一。
〇竹田　山城紀伊郡竹田村。深草の西、下鳥羽の東。
〇白衣　墨染の衣に對し云ふ語、俗人。
〇よゝの　竹の節とかけた。
〇えにこそ　江にこそと緣にこそとかけた。
〇月の國ほしの國　印度、支那をさす。
〇わしの山風　釋迦の修行せし靈鷲山から起つた風、卽ち佛敎。
〇法の水云々　佛法の敎へによく衆生の煩惱を流ふのを、水に喩へた。たえぬ流れ、汲む、ふかき、皆水の緣語。

寄道釋教　慈眼大師百五十回忌

天が下鎭むる道もふたつなき法をひろめし惠みをぞおもふ

佛涅槃

薪つきけぶりたえずば五十あまり説きおくのりのかひやなからむ

出釋氏宮去伽耶城不遠

浮びてはほどなくみゆる浦舟のなにはの人をわたさぬはなし

是好良藥今留在此

ためにとてのこす藥のなかりせば身のいたつきをいかでのぞかむ

蚯蚓兩段佛性在那邊といふところを

春の色をいづれとわかむ枝かはす柳のみどり花の白妙

神力品

法の花ひらけしことは玉くしげふたつの聲になべて知りける

人界

おどろかぬ心もはかな人の世のたゞ目のまへにかはるならひを

無常

何をかも常とたのまむ見つ聞きつ思ふも共にあだし世の中

○慈眼大師　天海、南光坊と號す、俗姓三浦氏、會津の人、東叡山寛永寺の開祖、寛永二十年十月二日寂、年百三十。
○天が下鎭むる道も云々　天海が徳川家康に信任されて、天下統一に貢獻の功勞の多かつた事を意味する。
○薪つきけぶりたえずば　薪たえ、[illegible]の入滅に喩へた。法華經序品の一偈に「[illegible]如薪盡火滅」に依つたもの。
○なにはの人を云々　奈何なる人でも佛の手で救濟し盡さぬものはない、佛の慈悲の廣大な意。
○蚯蚓兩段佛性在那邊　隻手之聲奈何に同じ、禪宗の機語。
○神力品　經名、如來神力品の畧、法華經二十八品中第二十一品、如來が十種の神力を現ずる事を説いた
○見つ聞きつ思ふも云々　見る事も、聞く事も、思ふ事も皆[illegible]より[illegible]

○いる息の出でずば　生命なくば

○藤衣　喪服を云ふ。はるの色なきは淋しい様子、楽しみの色なき意。

○ゑみさかえ　喜び笑ひ顔色の快活なこと。

○をしむにたへず　惜しさに耐へかね。

たれとだにしられず残る古塚のしるしの松もあはれいつまで

いる息の出でずばやがてよきたから高きつかさもかひなからまし

去年正月二日資光が身まかりしに此の春は又息資要がうれへにこもり侍ることのあやしうさへおぼえて

いかなればこぞもことしも藤衣はるの色なき春に逢ふらむ

生谷匡一身まかりぬと聞きて

思ひきやたゞかりそめのいたつきと告げしが長きわかれなりとは

らからの幼き子の身まかりし後その墓にまうでて

ゑみさかえみし子いづらと咲く花を手向けてもまづねこそなかるれ

羽倉信郷身まかりしをいたみて

水のごと淡しきながら四十まで交はりし人の別れかなしも

橋本經亮が母のうせしをいたみて

伏して思ひ起きてなげかむ人の子の袖のつらゝのむすぼほるらし

宇野元章をいたみて

定めある人のよはひとしるくもをしむに堪へず天をしぞよぶ

澄月師八十あまり五とせの齢にてうせしかば

こと木にはおくれてのこる松も又はてはけぶりのあだし世の中

したしき人の身まかりしをいたみて

末終に西の御國にあひみなむとはおもへどもをしき別れ路

松井良繼をいたみて

道のため親とたのまれ子とみしもきのふの夢とさめにけるかな

神　祇

神はみなほきをもとの心にて此のことの葉の道守るらし

正月三日和歌三神の尊影を拜みて

むつきたつ日數もけふは三はしらの神のみかげを仰ぐかしこさ

柿本明神千五十年忌

むかしよりかしこき御名を知るしらぬ人も月日とともにあふげる

庭の櫻を影前に手向け奉りて

雲と見しよしのの春のいにしへもかはらぬ花を手向にぞする

八月十四日夜男山にて

石淸水うつろふ月の入りがたに物のねすめりみゆき近しも

住吉

○西の御國　西方極樂淨土。

○和歌三神　通常住吉社、玉津島社、柿本人丸。或は柿本人丸を除いて天滿社を入れる。

○三はしらの　三日の、三柱の神とかけた。

○柿本明神　大和添上郡櫟本に在る柿本寺、歌塚の類か、柿本祠は到る所に散在する。

○八月十四日　八月十五日に石淸水八幡宮に放生會が行はれ、後三條帝の延久二年以來神幸を行幸の儀に准ずる事となつた。みゆき近しもと云ふのは十九日をさす。

○物のねすめり　奏樂の音が澄んで居る。神樂を奏するのである。

住吉の神に祈らむ言の葉のみちにかけても淸き心を

北野

仰ぐぞよ心つくしの末つひにこゝに北野のかみのちかひを

祝

君が代は十日の雨にうるほひて五日の風になびく民くさ

松有佳色

ちゞのはる世に住のえも高砂もかけて色そふ松やともなる

谷松年久

花もみぢ咲きちる色をよそにのみいくよ深谷のまつのこだかき

寄竹祝

行末の千代もこもれる窗の竹あをき眼にむかふ友かも

花契多春　森川對馬守六十賀

色も香もふりせぬやどの櫻ばなさかりをちゞの春かけて見よ

岩垣彥明六十年算にみづからよめるうた「遁れつゝ世のうきことも白河の里に杖つく春は來にけり」是れにもとづきてほぎごとす

うきこともいさしら河の水にこそ千代も老いせぬ影をうつさめ

〇こゝに北野の　こゝに來たと北野にかけた。心つくしは菅公に緣ある筑紫にかけた。

〇十日の雨に云々　王充論衡「太平之世、五日一風、十日一雨、風不鳴枝、雨不破塊。」

〇いくよ深谷の　幾世見るにかけた。

〇あをき眼に云々　晉書阮籍傳に阮籍は氣に入らぬ客が來ると白眼で對し、氣に入つた客が來ると青眼で迎へたとある。

〇ほぎごと　祝辭。

朝山三位六十一賀に

ことしより六十にあまる一とせを千とせかぞへむはじめにはせよ

春日篤氏の六十の賀に

のどかなる春日にかめも遊ぶなり萬代すまむやどの池水

物外禪尼六十賀に心如虛空形如土木は鶴龜もうかゞふ所にあらじ

生死にこゝろとゞめぬ法の人なか／＼やすく千代は經ぬべし

盲人の六十賀に

かねてより手なるゝ杖も此の春はちとせの垣につきはじめてよ

したしき人の六十賀に

のぼるべきちとせの坂をあふぐには過ぎし六十やなほふもとなる

新井白蛾七十賀に

鶴龜もうらやみぬべし天地の道しる人の經なむよはひは

竹をよく繪がく人の七十賀に

寫し繪になるゝをつきぬ契りにてよゝへむ竹の末もみるべき

澄月法師八十賀に

行末は猶いく世ともしらつゝじ八十すみ坂こゆるがのどけさ

（一）新井白蛾　名は祐登、字は謙吉、白蛾、黄州、龍山等と號す、加賀の人、菅野兼山の門、易學の大家、寛政四年五月十四日歿、年七十八。
（二）天地の道しる人　易學の大家であるからだ。

宮の御かたより杖を賜ふ杖のうた仰せごとによりて

此の杖をつきてゆくへもちとせ山きみが越ゆべきしるべとをしれ

徳光寺門主僧正に任じ給ふときよみて奉る

天津日の光をうつす衣手にあまねくも世の人を覆はむ

芝山宰相殿の御息うひかうむりし給ふ時

藤かづらながきねざしも紫の初もとゆひにちぎりかけなむ

石野只軒雅室にうつりしことほぎに

心さへ若がへりつゝ雅むろにむかふる春は樂しかるらし

伊丹氏飛騨の受領たうばり六の位にのぼられし時位山のいちゐの木の笏の料なるをおくるとて

君がもゐひだに名高き位山みねのいちゐも手折らさらめや

望月篤志が庭に鶴の出でしを祝ひて

望月の光をとめて萬代のあきをともなふ鶴もいでけむ

ある人の出身を賀して

さやけしな澤邊の田鶴の時を得て晴るゝ朝日のそらに舞ふこゑ

○ちとせ山　觀に長壽を山を登るに喩へたのである。

○うひかうむり　初冠、元服。初もとゆひは、初元結、初めて髮を上にあげ元結で結ぶのである。

○位山のいちゐの木云々　飛騨位山の一位の木、常綠喬木。笏には此の木を用ゐる。あらゝぎ、紫松。

○いちゐも　木の名と位の一位とかけた。

高橋翁三木翁予等三浦氏に偶集まり主人有詩五人三百八旬余の句に答ふ

かぞふればをよびもたゆしげにも此のまれの圓居の老のよはひは

ある人の剃髮を賀して

黑髮とともにこゝろのちりをしもかき拂ひてや涼しかるらむ

某の姬君の富小路家へ嫁し給ふに冬祝といふことを

幾千代のちぎりかはすに冬すらもみさご啼くなる聲はかはらず

人の妻の子うみ給ふべき月ごろにあやしう聞きひがめたることのありていひおくりしことのさもあらでいとうれしければ

木がくれのさはりいかにとたどりしを安くもいづる山のはの月

養蜈養規が來たりける明のあした雪のふりければ

めづらしくうつし植ゑぬる若松にちとせの春をならす雪かも

澄月法師が高臺寺の萩みて歸れるにあひていかにと問ひ侍りしかば「うつろふ色をさかりとやみむ」といへりければ

咲けばちりちればまたさく眞萩はら

○をよびもたゆし　老人の年齡の總計數が多いので數ふる指もたるい。

○みさご啼くなる　詩經の「關々雎鳩、在河之洲。」を採つた、夫婦相睦ぶ意。

○聞きひがめたる　聞き誤つて邪推する。

○養蜈　養子。

獅子巖和歌集

釋　涌　蓮

○誦蓮 伊勢の人、高田派の僧、安永三年五月寂。

○なからむ後にとゞまれとも 死後世に遺さうとも。

○吉田元長 通稱四郎右衞門、書肆の主人、小澤蘆庵門、文政七年歿、年四十七。

○藤井維濟 青蓮院宮の内人、小澤蘆庵門、京都の歌人。

誦蓮上人は伊勢國の人なりけるが、嵯峨のやま陰に柴の庵しめて、念佛三昧にてぞありける。若かりし世には、言葉のみちにも志深かりしかば、折にふれ事につけてのよめりし歌すくなからず。されど世に聞えむとも、なからむ後にとゞまれとも、思ふ心やあらざりけむ、一首だにしるしおけるともなかりしを、明けくれ語らふ友どちのなかに、うち聞くまゝにかいつけたる人ありて、いつしかひと卷の集をなせり。住める庵の名をもて、やがて獅子巖集とぞいふなる。安永みつのとし、上人身まかりし後は、其の集いづこにありとも聞えざりしに、此の頃吉田元長、さがのわたりにもとめ出でて、後の世にも傳へむとて梓にゑらせてけり。されば上人のことのはも、世と共にちりうせざらましと、したしかりし身にはいとうれしくこそ。

文化五年文月

藤井維濟識

獅子巖和歌集

春部

歳中立春

棹姫の霞の衣ひととせにふたたび春の色やみすらむ

雪はまだふるとしながらよし野山いかに春たつ色の見ゆらむ

立春

冬ながら照る日の影ののどけさは春たつ今日のしるしなるらし

のどけさは今朝よりしるく天の戸のあくる光に春はきにけり

都立春

所から花の春たつあしたより都はわきて空ののどけさ

立春曉

あらたまのとしたち歸るあかつきは鳥の八聲ものどけかりけり

立春風

春とけさ一夜のほどに吹きかへて明けゆく空の風ものどけし

○歳中立春　年内に立春となつたのである、古今集にも其の例がある。
○棹姫　佐保姫の當字、春を支配する女神。
○まだふるとし　雪はまだ降ると古年とかけた。

初春

昨日けふ松の綠もあらはれて春にとけゆく枝の白雪

子日

春ごとの子の日の小松もろ人のつきぬ千年のためしにぞひく

山居子日

住む山の外面の小松色ぞ添ふけふや都の子の日なるらむ

霞

いつしかと霞みにけりな遠近の山はさながら雪も殘らで

山姫の春の衣の淺みどりすそ野を分けてけさぞ霞める

霞始聳

さしのぼる朝日の影も長閑にて霞みそめたる遠の山の端

霞遠山衣

山遠く立てる霞やさほ姫の綠にそむる衣なるらむ

霞隔行舟

海士(あま)小ぶねこぎゆくかたは遠からでかすみへだつる春の海づら

山霞

○すそ野　衣の裾にかけた。

時しらぬ山ともいはじ春はまだ霞にこもる雪のふじのね

橋霞

橋ばしらたてるやいづこ津の國のながらの春の霞む夕暮

野邊霞

日に添ひてみどりの色も增るらし春日の野べにかすみたなびく

野外朝霞

ゆく先の霞を分けて出づる日の光のどけきむさし野の原

連峯霞

淺緑かすみにけりな遠近の色もひとつに峯の松原

晩霞

初瀨山入相のかねの聲ながらかすむ檜原の色も靜けし

海上晩霞

いとゞなほゆくへやたどる由良の戸を霞むゆふべにわたる舟人

海上霞

わたの原まがふ雲居のはてもなく霞みにけりな沖つ白浪

蓮師の庵をたづね侍りしに京へいでて侍るよし聞きて「何となく霞へ

○時しらぬ山ともいはじ　伊勢物語の「時しらぬ山は北山」とあるを採つた。時季をわかたぬ山。
○たてるやいづこ云々　柱の立つと霞の立つとにかけた。
○ながら　長柄、攝津西成郡南方村が古き橋跡と云ふ。
○ひとつに峯の　一つに見えること峯とかけた。
○聲ながら　聲も共に霞む。
○ゆくへやたどる「由良の戸を渡る舟人楫をたえ」の歌によつた。
○由良の戸　[illegible]由良の海峡、今[illegible]、[illegible]に對する。
○蓮師　涌蓮上人をさす。

だてて山ざとをよそに都の春をめづらむ」かへし

のがれすむ心のうちの山里は春の霞もへだてざりけり

鶯

我がやどの梅の立枝に來鳴くなりことしも馴るゝ春の鶯

霜さやぐ竹のねぐらをたち出でて朝日さす枝に鶯の聲

朝鶯

置く霜は猶さえかへるあしたにも春とて告ぐる園のうぐひす

待鶯

朝な〳〵待つとしらずや春きてもまだ告げ初めぬ鶯の聲

窗前鶯

吳竹のねぐらや近き朝な〳〵我がまどさらぬ鶯の聲

早春鶯

うぐひすの涙のつらゝいつしかと解くる初音に春をしるらむ

舊巣鶯

春來ても谷のふる巣や猶さえてまだ出でやらぬ鶯の聲

○さえかへる　春になりて又霜の冱えるを云ふ。

○うぐひすの涙のつらゝ云々　古今集卷一「雪のうちに春は來にけり鶯のこほれる涙今やとくらむ」によつた。

○猶さえて　寒さがまた烈しくて。

春鶯呼客

鶯の聲にひかれてゆく人は梅咲く野べに旅ねをやせむ

若菜

いざさらば野守はまだき告げずとも雪間を時とわか菜摘まばや

氷とく淺澤野べの初わかな岸根つたひに尋ねてぞつむ

求若菜

暮るゝまで野べの雪間につみしかど袖に少なき若菜なりけり

澤若菜

春淺き澤田の水のうす氷とくるを待ちて若菜つまゝし

田若菜

里の子は若菜摘むなり足引の山田の氷いまや解くらむ

水郷若菜

吹く風の蘆間に舟をつなぎ置きて難波の海士や磯菜つむらむ

氷消田地

めぐる日の光もしるく小山田の解くる氷の隙ぞそひゆく

○野守はまだき云々　野守はいまだ告げなくとも。古今集卷一の「春日野の飛火野の野守いでて見よ」の歌に據つた。

○雪間を時と　雪の消えた間を若菜つむ時節として。

○春淺き云々　水淺き澤田にかけた。

○氷の隙ぞそひゆく　だん〳〵氷が解けて、氷のすき間が增して行く。

餘寒

山風のいつまで春をたどれとて朝な〳〵にさえかへるらむ

梅

世をいとふ苔の袂も春くればもらさで匂ふ梅のした風

長閑にも吹く朝風の匂ひきて梅さかりなる春の山陰

若木梅

移しうゑしわか木の梅のいつしかと春しりそめて匂ふ初花

社頭梅

さく梅の色香をそへて言の葉のけふのたむけは神もめづらし

梅薫風

何方の木陰かとはむ梅が香のにほひになりぬ野べの春風

梅移水

影うつす花のかゞみと咲きしよりちりもくもらぬ梅のした水

曉更梅

閨の戸のすきまの風に誘はれてあかつき深く匂ふ梅が香

○苔の袂　苔の衣、袖皆同じ、ここでは僧侶の衣服を云ふ。古今集卷十六「皆人は花の衣になりぬなり苔の袂よかわきだにせよ」

○神もめづらし　神も賞美されるらしい。

○梅移水　梅映水の當字。

○ちりもくもらぬ云々　少しも曇らぬ。鏡の縁語。花の散るをかけた。古今集卷一「年を經て花の鏡となる水はちりかゝるをや曇るといふらむ」に據つた。

南北梅花

靜かなる春のゆふべのやすらひにいづくともなく匂ふ梅が香

霽暖梅開

春の日の光に咲ける梅の花北もみなみもにほふ梅が香

梅香留袖

朝日影うつろ梢は寒からぬ露をめぐみに匂ふ梅が香

梅が香やこけの袂にとまりけむ人のとがむる春かぜぞふく

梅花薫夜

暗き夜は色こそ分かねさそひくる匂ひにしるき梅の下風

雨中紅梅

くれなゐのもみぢに見しををぐら山雨に色添ふ梅も有りけり

紅梅のさかりなるよしを聞きて蓮師の許へ申し入れ侍りける安壽「いろ香をもよそに忍びて紅の梅さく宿を思ひこそやれ」かへし

おもひこす心ばかりは何かせむうめ咲くやどはさらにとへかし

殘雪

山はまだ白雪深く殘りけり都の野べはかすみながらに

○人のとがむる　袂に宿る梅が香を、女のうつり香かと人のとがめる。古今集巻一「梅の花たちよるばかりありしより人のとがむる香にぞしみける」に據つた。

○おもひこす云々　心で思ひ寄せるだけでは詮方がない、梅咲く私の家に、あらためて自身で訪ねなさいよ。

巖殘雪

めぐる日のかげみぬ谷の岩がねに殘れる雪もこぞのまゝなる

垣根殘雪

行き通ふ人も稀なるやま里の垣根は雪のきえむとやせぬ

春雪

若草もまだ萌え出でず春迎えて小野のかれふにあわ雪ぞふる

唐衣如月かけていつよりもことしは雪のふかき春かな

さえかへりふるは去年にもかはらねどつもらで消ゆる庭の沫雪

眞砂地にかつ降りまさるあわ雪やしばし梢の花をみすらむ

柳

立ちならぶ木々はあれども青柳の絲よりなびく庭の春風

あかずこそ人もよりくれ道のべに絲色そふ青柳のいと

路柳

さほ姫のたえず引く手にまかすらし年のを長き青柳の絲

淺緑いとよりかへす柳陰みちの行く手によりてこそ見れ

行路柳

○かれふ　枯生、枯れ草地。

○唐衣　きさらぎにかけた。かけては衣の緣語。

○絲よりなびく　絲からと、縒ると云ふ緣語。

○よりくれ　寄ると縒ると。

○年のを長き　年の長く續くのを緒に喩へ云ふ語。茲では絲の緣語。

○よりてこそ　よりては絲の緣語絲を縒ると寄るとかけた。

○くる人もなき　絲の緣語、繰ると來るとかけた。
○ふくほどしるし云々　吹く程度が著しい、よくわかる。おのがちからならねば、柳自身の力でない、風の力であるから。
○いは橋　岩橋、川中に石をならべた橋。
○色も若草の　色の若いと若草とをかけた。
○かつ萌え初むる　一方では萌え初めた。

朝まだきくる人もなき道のべに露の玉ぬく青柳のいと

水郷柳

あまの住むさとの入江の柳かげつながぬ舟もよりてこそみれ

柳帯露

青柳の靡くをみればおく露を吹きもちらさぬ枝の春風

柳無氣力

春風のふくほどしるし青柳のなびくはおのが力ならねば

垂柳蔵橋

谷川のきしの青柳いは橋を拂ふばかりに枝たれにけり

若草

野べはまだみどりの色もわか草の雪まばかりに春をみすらし

春草

いつしかと野べは草葉の若緑まじる枯生の色ぞ少なき

磯春草

くる春のめぐみはもれず磯づたひかつ萌え初むる浪のした草

行路春草

○いつしかと　何時の間にか、青くなるのもはやい春の若草であるよ。

いつしかと雪ふみ分けし道のべに青むもはやき春の若草

雲雀

やがてまた空にのぼらむ夕雲雀しばし芝生のとこに鳴くなり

田雲雀

空は猶霞へだててみえねども田の面はるかにひばり啼くなり

呼子鳥

山ふかみ契りはおかぬ呼子鳥いかに鳴くともたれかこたへむ

春曙

あけ初むる空は緑の色ながらほのかにかすむ遠の山の端

閑中春曙

靜かにとすむ身はいとゞあけぼのの春ばかりなるあはれさもなし

春曙眺望

月影も霞の空にしづまりてあけがたちかき遠のやまの端

早蕨

都にてまだみぬ人の家づとに折りて歸らむ野べのさわらび

谿蕨

山人やわらびな折りて歸るらむつま木すくなき谷のかけ道

ある人のもとへわらびを折りておくるとて

龜の尾の山のいはねの初わらび千代を數ふる手に似たるかな

春風

とぢ果てし岩間の水も音すなり今やふきとく谷の春かぜ

春月

明けやすき空さへあるに出づるより霞にこもる春のよの月

山の端はそこともみえず春の夜のふかき霞をのぼる月影

かすむ夜に洩りくる程もほのかにて木のまへだてぬ庭の月影

川春月

山川にかすみもやらず春の月たゞ行く水にまかせてぞ見る

江春月

かすみしく入江の蘆のひまみえてほのかに出づる春の夜の月

春曉月

あらし山夜ぶかきかねの音そへて麓に霞む月のしづけさ

春曙月

○龜の尾の山　山城葛野郡龜山。一名龜尾山、小倉山の東南、蓬萊山に喩へた。

○手に似たるかな　蕨の若芽が拳に似て居るのを云ふ。

○明けやすき空さへ　夏の夜の空を云ふ。

月かげも霞の底にほのめきて山の端しらむあけがたの空

春月朧

時しれば霞も月のくまなくてあはれはいとゞ春にこそ添へ

獨見春月

さのみまた霞みなはてそ柴の戸の月よりほかは友もなき身に

春雨

打ちしめりこのめも春の庭の面におとせぬ雨な緑にぞしる

遠近の山は霞の色ながらふるものどけき春の夜の雨

朝春雨

いづる日の光もみえず打ち曇り霞む外山に春雨ぞ降る

庵春雨

かくてこそ住むにかひある宿ならめ草の庵の雨のしづけさ

春も猶人めはかれて緑そふ草のいほりの春のよの雨

つれ〴〵と春の雨きく草の庵は苔の袂もはるゝまぞなき

旅泊春雨

かぢ枕明けても晴れぬ春雨に苫ふきながらこぎや出づらむ

○このめも春の　木の芽もはる、萌えると春とをかけた。

○人めはかれて　人目離れて、離れると枯れるとをかけた。

○かぢ枕　船にやどる旅をいふ。

歸鴈

うつろはむ色香をうしと天津鴈花なき里を尋ねてや行く

古郷のちぎりわすれず春くればおくれさきだち歸る鴈がね

かへる鴈なれも名殘をおもへばや霞む雲路を鳴きて行くらむ

霞たつ空を時とやいそぐらむふる里遠き春のかりがね

歸鴈連雲

聲せずばそれともしらじ雲かすむゆふべに歸る鴈のひとつら

春鴈離々

友誘ふこゝろ〴〵はへだてじなゆきわかれつゝ歸る鴈がね

暮天歸鴈

いづこにかこよひは宿をかりがねの夕の雲につれて行くらし

去鴈遙

なごりあれやいまはと歸る鴈がねの遠き雲路を鳴きて行くなり

旅宿歸鴈

うらやまし草の枕をそばだてて聞けば越路に歸る鴈がね

苗代蛙

○宿をかりがねの　宿を借りるにかけた。

○草の枕　旅寝の枕。

せきかくるなはしろ水を時ぞとてくるゝ門田に蛙なくなり

櫻

白雲の霞とゝもにたなびけば山の櫻のさかりなるらし

さく頃はさはらぬ春の雨風もしらでさくらの花をみてまし

年毎にいろ香加はる櫻ばなあかぬ心は春にそふらし

さくら花あかぬ心の種とてや色もにほひも春にそふらむ

花

四つの時さくべき花の種もがなさかりは春の見るもほどなし

咲き殘る梢の蕾色ぞ添ふあすこそ花のさかりなるらめ

一枝は手折りて宿の花がめに山のあらしをいとはでぞ見む

吉野山麓の花のちる頃もみねの櫻は猶さかりなり

分け入りし春ぞむかしのよしの山花みることにおもひ出でつゝ

夜のほどに咲きそふ花の色なれやそなたの峯のけさの白雲

言の葉の道の手向に數ならぬ身にはづかしき花の下庵

初花

手折りにかざふるばかりけふはまだ一枝にすくなく咲ける初花

○せきかくる　堰をかけて水を湛へる。

○さく頃は云々　花の咲く頃には妨げとならぬ雨風を、盛りの頃にさはりとなるのであるから、其の頃にも雨風に逢はせず、櫻の盛りを見たいものだ。

○春にそふらし　春毎に加はるらしい。

○あかぬ心の種とてや　いつまでも倦きない心のもとであるためか知らん。種は花の縁語。

○四つの時　春夏秋冬。

○見るもほどなし　見るも間が短い。

○山のあらしを云々　家の内の花瓶にさした花であるから、山の嵐の吹きあれるのも無關心で眺めよう。

待ちどほにありし物ゆゑ咲き初むる一木の花の先づぞえならぬ

咲き出でしけふ初花の庭ざくらいくか數へて散るまでは見む

初花を手折りまゐらせて「つぎて咲く日數ありとも手折りもてまづはつ花を人にみせばや」と貞堅ぬしの申しおこせけるかへし

つぎて咲くあすはありとも初花をけふしも人の折りてみせずば

雨後初花

さき出でて枝にすくなき初花を雨のなごりの庭にこそみれ

六詠云このちかきわたりに酒蓮道人住みはべりけるよし聞きて其のもとへとていひやる廬庵「草の庵にすます心やいかならむ花のため憂き雨風の音」懸樋の水の夜にいるまゝにいとしづかなるに「此のまゝに住みもはてにはや山水のよにながれてはにごりもぞする」此の二首のかへし

やま陰やかけひの水のよ靜かにかたらひ明かせ言の葉の友

山櫻ちらまくをしと春雨の降るにつけてや人はとひけむ

かへし廬庵「山ざくらとはずばいかで雨にそふ言葉の花の色をしもみむ」

かへし

さくら狩雨に一夜のやどりして我が心さへ花になりぬる

○待ちどほにありし物ゆゑ　此の用語中古時代と違つて居る、元の意は、ものながらじあるが、こゝでは單に待遠であつたものだからの意。
○折りてみせずば　折りて見せてくれなければ、初花を見そこなつたであらうの意。

○六詠云　六詠が云ふの意、六詠は草庵の詠集で本書の巻頭にある。
○住みもはてずや　住みて生涯を送らうか知らん。住みと澄みとかけた。
○よ靜かに　夜靜かにと筧の竹の節と節との間のよにかけた。
○雨にそふ　雨のためにいよ〳〵加はる。

と聞えけるにかへし蘆庵「あさからぬ心の花をしればこそ櫻のかげもよそになしつれ」

待　花

しばしまだ四方の梢は遲くともやどにまづさけ春の初はな

漸待花

去年みしもやゝ此の頃の庭の面の梢にめぐむ花ぞ待たるゝ

雨中待花

めぐみたつ梢のつぼみ色見えて花にうれしき此のごろの雨

花の頃蓮師のとはざりければ安壽「めかれせぬ花にはありとも住む山のくち木の櫻とはれぬもうし」かへし

もろともに谷をへだててとはざるはめかれぬ花のあればなりけり

山寒花遲

都にはさきぬときけど山はまだ花も匂はず寒き春風

都には咲きぬときけど山里は櫻のこのめはるとしもなし

尋　花

○めかれせぬ　目を離さぬ、いつまで見ても倦きぬ。

○このめはるとしもなし　木の芽のめぐむこと、春とをかけた。

尋花問樵夫

やすらひし木陰やいづこ散る花をつま木にかけて歸る山賤(やまがつ)

見花

時のまもめかれぬものは春毎のあかぬ色香の花にぞありける

見山花

小倉山よゝの霞のへだてても花はむかしの春やわすれぬ

翫花

いざさらば野にも山にも旅ねしてところあまたの花をとはばや

花盛

此の頃はゆききの人のことぐさに花の盛りを語らぬもなし

庭の花ざかりの頃たづねむといひおきて其のころしも京へ出でて蓮師の尋ね來ざりければ孝寛「我がやどの庭の櫻の花ざかり見せばやとのみ人ぞまたるゝ」日をへてかへし

つげずともとふべき庭の花ざかりをりをすぐしていかゞこたへむ

花のさかりの頃とひよりしにをりしも雨いたう降りければ草庵に侍りて

○ことぐさに　話の材料に。

○をりをすぐし　機會をすごしさ枝を折るにかけた。

蘆庵に草の庵にすますす心や・いかならむ花のためうき雨風の空にかへし

草の庵にすますす心はこゝろにてうきはかはらぬ花のあめ風

曙花

月は今ひかりをさまる山陰にこのまの花の色ぞ明けゆく

朝花

朝日さす梢のさくらおく露にひもとき初むる花も見えけり

杜花

きても見よ春のにしきのおりはへて花の盛りの衣手の森

故郷花

古さとゝなりしはいつの春をへて世に咲きにほふみよし野の山

田家花

散る頃はいほの垣ほの花も根にかへすとみゆる賤が小山田

古寺花

花見にとむれつゝとへど法の庭のりのためにはくる人もなし

河邊花

ちればかつさそふも早き山川の花のかゞみは曇るともなし

○すますす心や　廬に住むと、心を澄ますとかけた。

○おりはへて　織り延べ。

○古さと　歴史の多い土地、古跡の多い土地。

○かへすとみゆる　花を根にかへすと、田を耕し返すにかけた。

○ちればかつ　花が散れば一方では。

○春の山ぶみ　春の山踏み、春の山をあるくこと。

○花のしづえ　花の下枝。

暮れぬとて家路にいそぐ人もなし花の盛りの春の山ぶみ

雨後花

雨晴れて花のしづえを散る露の匂ひもふかき庭の木のもと

羇旅花

旅ごろも都の春の名殘あれど花にこえゆく相坂の關

花匂

山はみな花の盛りとなりにけり霞のよそに匂ふ春風

花色

みしよりも色こそまされ櫻花殘るつぼみや枝に咲きそふ

馴花

春ごとの色香になれてさくら花あかぬ心もいやまさりつゝ

花未飽

幾春かおなじ色香にむかへどもあくことしらぬ花の木のもと

花如舊

人の世はうつりかはるを櫻花今もむかしの色にさくらむ

花留人

飽かず猶ながき日ぐらしながめても歸るさ知らぬ花の木の本

花下送日

いつまでか木の下陰に旅寢せむ送る日數も花に忘れて

花下忘歸

歸るさも忘れて花のこのもとにながき日くらす春の山ざと

やよひ九日ばかりの頃さがよりとて文をさしおきて歸る人ありあけてみれば詞はなくして補蓮道人

嵐山はなはさかりになりにけり雨ふらぬまに早くとひませ

とあり又の日庵室をとぶらひて蘆庵「さが山のあらしのつてに告げざらば盛り程なき花を見ましや」といひて歸らむとするにとゞめらるれば「たち歸り更にぞとはむ此のごろは花の便りとひともこそいへ」

大ゐ川のきし根に櫻をあまた植ゑ置きて翠巖和尚のもとより「うゑそへし花の木立の春ごとにさかゆる色を見るぞうれしき」ときこえければ

植ゑ添へし心の花もよゝかけて山のさくらの色にみゆらむ

○ながき日ぐらし　永き終日。

○歸るさ　歸る時。歸りぎは。

○又の日庵室をとぶらひて　次の日庵室を訪問して。

○あらしのつてに　嵐山に來た序に、嵐を手がゝりにして。

○おし花　紙の間に花を押し置く

○葺き了へけるちりの中にすゑて　軒の板をふき直し、其の了つた塵埃の中に坐らせて。

○のばへし　のびしの延音。

花のころ思ひつゞけける

色香にはそむとはなしに春毎の花にもなれしさがの山住み

やよひのはじめがた殿よりさがの上人とうちつれてまかで歸るに軒端いたくふりてけふは葺き了へけるちりの中にすゑて物さわがしければさかづき出して蘆庵「板屋ふくおともいぶせき山風をいとはでとひし心ふかさを」と興じていふに

いまよりはあかずとひきて春いくよ心の花のやどやからまし

かへし蘆庵「春いくよとへかし花の色ならぬこゝろのまゝのよもぎふの宿」をりふしさくら山吹など人のもとより送りたりければ

物思ひなくてのばへし老にけふあひみる花は色もめづらし

はゝ君にかはり奉りて蘆庵「よはひ猶いくよの春かのばへまし言葉の花に老もわすれて」

惜花

春ごとにうつろふ花としりながらこりずも人の猶をしむらむ

暮春惜花

くれて行く春の日數のうつるにはならはぬ花の色香ともがな

手向山

梢吹く風のまに〳〵手向山櫻はぬさとちらぬ日もなし

落花

吹きおろす春のあらしの山ざくらとなせの瀧も花のしら浪

あらし吹く木の本ごとに立ちよれば花は雪とぞふりまさりける

山風はいたくなふきそ櫻花うつろふ枝は脆くこそちれ

落花入簾

吹く風のいかにさそへば玉だれのうち外をわかず花の散るらむ

落花滿庭

けさみれば梢は花の跡もなしちりしく庭ぞまた盛りなる

山家落花

さかりのみとはましものか山里の木末の花の雪とふるころ

庭上落花

庭の苔みどりの色もうづもれていく重か積る花の白雪

○手向山　逢坂山をも云ふが、ここでは大和奈良の手向山。

○となせの瀧　嵐山中にある。前出。

○さかりのみとはましものか　花の盛りの時許り訪ふものであらうか、左様ではあるまい。

見つゝこし山のさくらのいかならむ此のひと枝にをしき夕風

示然庵にて梢をみればきのふの花はあともなく散りはてぬ庵主の手寫の經によせておもひ出でたり

有りとみし色は空しき花のえにとまる心のとがぞかなしき

暮春鶯

けふのみとくれゆく春の別れ路をなれもやしたふ鶯の聲

暮春水

よし野川ながるゝ水に春くれてゐぜきに殘る花のしがらみ

春欲暮

花鳥の色香にうつる心より春の日數やくるゝ程なき

三月盡

加はりしことしの春の日數にも慕ふはおなじけふの別れ路

留春不駐

こりもせでしたふははかな年ごとにさしもとまらぬ春の別れを

○有りとみし色は空しき　色卽是空の意。
○心のとがぞ云々　執著する心の罪が悲しい。

○ゐぜき　堰。水の流れをとめる設備。

○くるゝ程なき　春の暮るゝのに間がない。

夏部

首夏

今朝は又霞も晴れて遠近の山のみどりぞ夏の色なる

首夏藤

花染の袖の名殘もをしけれど又身にかろき蟬の羽ごろも

夏山の青葉にかゝる藤浪は春のこずゑを越ゆるなりけり

更衣

忘れめや花の衣はかふるとも心にふかく染めし色香を

朝更衣

なれ〱てけさまで殘る花の香にかへまく惜しき春の衣手

更衣惜春

立ちかふるならひもつらし卯月きて惜しむかひなき花染の袖

羇旅更衣

旅衣うすき袂に立ちかへてこゆる山路もまだき涼しき

○花染の袖　花色に染めた著物、新拾遺集卷三「夏衣たちかへしても忘れぬは別れし春の花染の袖」を思ひ寄せた。

○越ゆるなりけり　浪の緣語。

たちかへし袖だにあるをうの花のをりを過さぬ色もめづらし

餘花

散り殘る花をかたみと詠(なが)めずばわかれし春を猶やしたはむ

新樹

春毎の花にをしみてはらはねば庭の青葉ぞ繁さ增れる

ならかしはしげる青葉の陰しめてすゞしさいそぐ山の下庵

卯花

おもへたゞよをうの花のま垣にもいつまで露の身はやどるらむ

咲きそふを積るとぞみる白雪の色にまがへる庭のうのはな

夕閒暮垣根に咲ける卯の花を月待つほどの光とも見む

籬卯花

さやかなる月の影かとたちよれば垣ねつゞきに咲ける卯の花

葵

われはたゞ法のめぐみにあふひ草後の世かけてなほも頼まむ

あふひ草かざらぬ人もなかりけり賀茂のみあれのけふを待ちえて

○たちかへし云々　裁ち更へし。をりを過さぬは機會をはづさぬと卯の花を折るにかけた。

○ならかしは　槲の異名。かしは、はゝそとも云ふ、落葉喬木。

○よをうの花　夜と卯とかけた。

○後の世かけて　來世までかけて、かけては葵の緣語。

○あふひ草　逢ふと葵とかけた。

○賀茂のみあれ　賀茂神社の祭禮、陰曆四月中の日に行はれる、翌酉の日が葵祭となる。

○誰があらましの云々　誰が心頼みにしたといふでもない空に鳴くのが待たれて。

○聞きやふるさぬ　聞き古した。

郭公

よしやまたこよひはねなむ時鳥夢にも告ぐる聲もありやと

初聲をいつかきかましほとゝぎす誰があらましの空にまたれて

郭公聞かで明けぬる夏の夜はいづこの里のひと聲の空

待郭公

ことしなどさのみつれなき時鳥去年の初音も此のごろの空

ほとゝぎすよそにはしらぬ初聲を待つ夜更けゆく枕にぞ聞く

われのみや心つくさむ時鳥またれていそぐ初音ならねば

初郭公

子規聞きつと語る人もなしなど此の里は聲のともしき

郭公幽

待ちつゝも心ゆるすな子規聞きやもらさむ遠のひと聲

郭公遍

誰がさとも聞きやふるさぬほとゝぎすいまはさ月のあけくれの聲

旅なる女ども卯月のころきて歌をこひける時

○けふ三日月の　夏立つて今日三日目卽ち四月三日とかけた。

○姿やいづこ　歌の中に時鳥の語がないからである。

○冷泉入道爲村卿　入道して澄覺と號す、代々和歌の家、安永二年薨、年六十三。

○ほどときすぎぬ　程時過ぎぬと時鳥來ぬとかけた。

此の庵に山ほとゝぎす初ねをぞきく」と聞えけるかへし

をりよくも初音をつげて郭公とはれし庵のかひもありける

女またかへし「ほとゝぎすおもひの外の初聲もけふ此の庵をとひてこそきけ」此のうたのかへし

郭公初音をだにもつげざらば人の言葉を何にとゞめむ

卯月のはじめつかた時鳥かすかなるといふ題を

仄かにも啼きて過ぎけり夏たちてけふ三日月の入りがたの聲

此の歌に郭公の名をよまざりければかへしとて冷泉入道　爲村卿「ほとゝぎす姿やいづこ入る月のほのかに過ぎし聲の殘りて」とおどろかし給ひける御かへしかれこれして五月に奉るとて

ひと聲におどろかさずば郭公すがたは猶も雲にかくれむ

かへし冷泉入道　爲村卿「いづこぞとおどろかしてしころもはやほどときすぎぬおそきひと聲」

曉郭公

心ある山時鳥いくたびかまれの寢覺の枕とふころ

尋郭公

ほとゝぎす聞きつといひし山賤にいづこと問ひて尋ね入らばや

聞郭公

けふよりは聞きつといはむ時鳥まだ忍び音はさだかならねば

ほとゝぎすなきつるごとに身を分けてあくまで聲を聞きてしもがな

人傳郭公

人傳は我がためならず時鳥こよひ啼くねをやどにかたらへ

月前郭公

聞きつとは誰かさだめむ時鳥雲間の月の仄かなる聲

雲間郭公

此の夕まちつゝをれば郭公遠き雲路に聲の聞ゆる

雨後郭公

村雨の霽れゆくあとにふり出でて啼きこそわたれ山ほとゝぎす

里郭公

月のすむ桂のさとの郭公さやかに名のる夜半のひと聲

○身を分けて云々　一身を二つに分けて、半分は時鳥に近づいて。

○やどにかたらへ　我が宿で鳴け、人傳では何にもならぬ。

○ふり出でて　聲を振り出して。

○月のすむ桂のさと　月の桂にかけた、桂は京の西郊。

もよぶ大和今高市郡、其の山麓に海柘榴市がある。市人はその住民をさす。つは市。

○關守る神　關所を守護する神。千載集卷三「逢坂の山時鳥名のるなり關守る神やそらにさふらむ」を思ひ寄せた。

○卯月六日人々來あひて云々　此の一節は既に本書に納めた六帖詠草に出て居る。

浦郭公

ほのかなる跡をしたへば郭公浦なみ遠く啼きすててゆく

湖郭公

さゞ浪やひら山かけてほとゝぎす鳴きこそわたれしがの大わた

關郭公

子規たゞ一聲を逢坂の關守る神にたむけてやなく

一聲はなけどもうしとほとゝぎす己がさつきにあふ坂の山

夢中郭公

珍らしく音づれて啼く郭公聞きしはいつとおもふ夕に

寢覺郭公

夢さめてきくともしらでほとゝぎすこよひ夜深き雲に鳴くらむ

卯月六日人々來あひて拾遺集の歌をとかくいふに雨しめやかに降りいで更けゆく夜ほとゝぎすの啼きければむかし仁壽殿の木にて郭公のなきけるをめづらしがらせ給ひて貫之ぬしに歌奉らせたまひけるなどたれもたれもあはれがりてかたみによみけるついでに蘆庵「今もその折を忘れず

きなけども山ほとゝぎすきく人ぞなき」返し

いにしへの初音もけふの郭公をりを忘れず聞く人もあり

早苗

うるふよのめぐみしられて降る雨に時もたがへず早苗取るなり

とりわけて植ゑし早苗や小山田の緑の薄くみゆるなるらむ

ふし立たぬさきにといそぐ賤の男や雨にぬれつゝさなへとるなり

早苗多

幾千町とれども盡きぬ若苗を廣きめぐみと植ゑわたすらむ

朝早苗

明くるより田子の小笠の數みえてとるやあまたの早苗なるらむ

民屋早苗

歸るさへ程遠からで賤の女が門田のさなへ暮れかけてとる

菖蒲

夢のよをたゞ假初のやどりとはこよひあやめの枕にもしれ

雨晴るゝ軒のあやめの風過ぎてみだるゝ露の香こそえならね

○うるふよの　君の惠みに潤ふと、雨にかけた。

○ふし立たぬ　成長して節が生ずる、その生じない前に。續古今集卷三「今朝だにも夜を籠めてとれ芹河や竹田の早苗節立ちにけり」などを思ひ寄せた。

○廣きめぐみと　君のひろき惠みと、田のひろきにかけた。

○あやめの枕にもしれ　五月端午に菖蒲を枕の下に敷く風習がある、之を菖蒲枕と云ふ、あやめは危むの意に通ずるので危き枕にかけた

さけの軒にふく菖蒲にそへよ言の葉の露」かへし

つねにすむ草の軒端のめうつしにあやめもわかずねての朝けは

あやめ草世人は軒にふくめれど老は佛のたむけとやする

老人にかはりて蘆庵「御佛にけふ奉るあやめこそながきねがひのしるしなりけれ」

とにかくに身は濁り江のあやめ草みだの誓ひのひくにまかせむ

いさゝ水木のまのながれかすかにて夏すむやどはこゝぞ涼しき

かへし蘆庵より「かすかにて世に住みわびしさゝら水もみる人からやなつはすゞしき」「語れ猶けふはあやめの草の庵いづくもかりのすまひとおもはば」かへし

一夜ねてけふもかたらばあやめ草かりのやどりに心とまらむ

かへし蘆庵「都にはこゝろとめじと歸るともそもまたかりのやどりならずや」このかへしに

たち歸るいほりもおなじ假のやどかりといふにも心はとめず

かへし蘆庵「心をばとむとはなしに遊べたゞたれもあやめのながからぬ世ぞ」またかへし

○めうつしに云々　目移りするので。菖蒲と條目とをかけた。

○ながきねがひ　永き願ひと長き根とかけた。

○ひくにまかせむ　彌陀の導くとあやめの根をひくにかけた。

○かりのすまひ　あやめを刈るとかけた。

○たち歸るいほりも云々　立ち歸る自分の庵も同樣の假の宿に過ぎない。

老いらくのきかばゆゝしもあやめ草かりとないひそ人の此の世を

返し廬庵「老いらくのながきよ祝ふあやめぐさ露かゝりきとかたらましやは」かへし

朝とくも歸らむものをあやめ草露のひるまも過しつるかな

池菖蒲

年ごとにひくとはすれどあやめ草つきぬねざしの深き池水

盧橘

立ちよりて昔をとへば橘の花のしづくに袖ぞぬれける

はし居するゆふべの風に誘はれてかをり涼しき軒のたち花

よゝへてもむかしの人の袖の香を花橘のいかにしむらむ

盧橘子低

露も猶おもげにみゆる橘の枝もたわゝに實を結ぶ頃

對橘問昔

たちよりてむかし問はばや橘のはなの雫に袖はぬるとも

閑庭橘

橘のむかし忘れぬ花の香に苔むす庵は露ぞこぼるゝ

○老らくの　老いと同じ。

○かゝりきと　斯樣であつたと、露がかゝるとかけた。

○昔をとへば　橘の香に昔を忍ぶは和歌の常套である。

五月雨

降らぬまも猶雲とぢて五月あめいつ晴れぬべき空としもなし

晴れまなきさつきの雨のふる里はいとゞ軒端も朽ち増るらし

けふも又ひえの大嶽雲とぢて麓の庵にさみだれぞ降る

晴れぬべき空ともみえず山々のたえず浮きたつ五月雨の雲

谿五月雨

岩傳ひ通ひし程の谷川にこす瀬も見えぬ五月雨の頃

杣五月雨

おのづから杣山川に水ましてひかでもいづるさみだれのころ

瀧五月雨

さみだれに瀧のみかさや増るらむ山もとまでもおとのきこゆる

湖五月雨

日數ふる眞野の入江のさみだれにすゝきも波の底にしづみて

さみだれの降りて山に歸るころほとゝぎすの歌を思ひて

五月あめふりし雲間のひと聲はほどとき過ぎて猶も忘れぬ

かへし入道爲村卿「忘れずばなどさみだれのふりしかむほどときすぎて

○ふる里は　降るにかけた。

○ひかでもいづる　山川の水を引かなくつても流れ出づる。杣をひくにかけた。

○みかさ　水かさ。

○ほどとき過ぎて　程時すぎて。中にほとゝぎすの五字詠み込み。前に出た冷泉爲村卿の歌の句を繰返したのである。

○ふるさで　聞き古さないで。

○野島がさき　淡路津名郡。

もらす一聲」御かへしとて

忘れずよほどとき過ぎしひと聲の聞きはふるさでめづる一聲

と聞え奉りければ入道殿「ひと聲のおそきをかこつ言の葉もほどとき

すぎて聞きやふるさむ」

五月雨晴

さみだれははるゝとみえてゆく雲の絶間に月の影ぞほのめく

夏草

いつしかとかこふ籬も見えぬまでしげりにけりな庭のを薄

夏草滋

春にみし野守が庵もいづこぞとたどるばかりに茂る夏草

野夏草

ますらをが分けゆく道も分かぬまでしげりぞまさる野べの夏草

島夏草

浦かぜの涼しくかよふほどみえて野島がさきになびく夏くさ

夏月

しげりあふ草葉の露の置きそひて涼しくふくる夏の月影

○はしゐ　端居。家のはしに居る意。

○眞砂地に　まさるとかけた。

○さながらむかふ　そのまゝ向ふ如き感じのする。

むかふより暑さ忘れて夏は猶はしゐにあかぬよな〳〵の月

夏月涼

更けゆけば猶すゞしさも眞砂地に霜やおくかとまがふ月かげ

宿近き竹の葉分けにうつりきて洩るかげすゞし夏のよの月

竹間夏月

すゞしくも露打ち散りて呉竹の葉分けの風に月ぞもりくる

沙月忘夏

すゞしさは秋の霜夜のおもかげにさながらむかふ眞砂地の月

閑庭瞿麥

露をだに拂ひもあへず草の庵にわれひとり見る庭の牀夏

照射

つくりおくつみとも知らでますらをがよな〳〵毎に照射さすらむ

よな〳〵の照射のかげによる鹿は露よりもろき命なるらむ

連峯照射

明くるまも程近からし峯あまた見えしともしの影かすかなる

鵜川

瀬鵜川

あくる夜の早瀬の川のしらむまで猶山陰は鵜舟さすらし

夕月の入るを時とや鵜ぶねさすせゞのかゞり火猶ぞ數そふ

鵜舟廻瀬

なれよしれ此の川島のうかひ舟めぐるは早きむくいありとは

螢

夜深くもあつめぬ窓のおこたりに身をいさめてやほたる飛びかふ

いさり火の影かとみえて難波江の蘆間がくれに螢とぶなり

大井川せゞの岩浪かけ見えて照らすほたるの數もしられず

螢似玉

難波江にすだく螢を夕浪のよする渚の玉かとぞみる

水上螢

行きかへり瀧つ岩まにとぶ螢もゆるおもひのけつかたやなき

鵜川螢

さしくだす鵜ぶねのかゞり數そひて川瀬の浪にほたる飛びかふ

○あくる夜の早瀬の川　夜の明くる事のはやいとかけた。

○なれよしれ　汝よ、よく知れ。

○めぐるは早き云々　鵜舟のめぐる事の早い如く、めぐり來る因果應報の早い事を。

○あつめぬ窓のおこたりに　車胤の螢火讀書の故事。

○すだく螢を　聚まる螢を。

○瀧つ岩まに　水の激する岩の間に。

○けつかたやなき　消しやうもないのか。

夏の日のくるれはやがて澤水にすだく螢のかげぞすゞしき

野亭螢火

草隠れ夏野の庵にともす火をおのが友とや螢とびかふ

蚊遣火

つねにみる里のわらやのゆふけぶり又たちそふや蚊遣なるらむ

里蚊遣火

立ちのぼる煙につれてしばしいま遠ざかりゆく軒の蚊の聲

待ち出づる月の雲ともなりやせむふもとの里にたつる蚊遣火

深夜蚊遣火

學ぶ夜はふくるもしらでかきおこす蚊遣火さへもかすかなるかげ

曉蚊遣火

下むせぶ誰がきぬ〴〵の思ひとや曉ふかくかやりたつらむ

蓮

置きあまる蓮の露の淸ければ池のこゝろも涼しかるらむ

こゝに見る花にもおもふいろ〴〵の光はさぞな法のはちす葉

夕立

○下むせぶ 心の底で涙にむせぶ、蚊遣火の縁語。

○かたやわくらむ　涼しさも雙方に分るゝであらう。

○音羽のみね　夕立の音にかけた

○あはだにかゝる　粟田山、東山の一部分。

○もらぬしぐれや　雨の如く漏らぬ時雨は、蟬の澤山に鳴く音を蟬

をりをりにゆふだつ雨のなかりせばいかにしのがむ水無月の空

たへがき夏のあつさも一しきり降るゆふだちに忘られにけり

涼しさもかたやわくらむみな月の照る日を覆ふ夕だちの空

山夕立

時のまにむかひの山もみえわかず降るゆふだちの雨のあしとき

野夕立

いつのまにやどりやとらむ風競ふあとよりつゞく野べの夕立

川夕立

夕だちはたゞ時のまにふりはれてあとよりまさる山川の水

夕立早過

ゆふだちの音羽のみねははや晴れてあはだにかゝる雲のはげしさ

氷室

氷むろもる袖や冱ゆらむみな月の空にも冬の風を覺えて

猶冱ゆるひむろの山のやまもりは蟬の鳴くにや夏をしるらむ

杜蟬

樹陰蟬

ゆふ日さす片山陰のまつ風にみだるゝ蟬の聲も涼しき

晩夏蟬聲

夕露に秋をおぼえて啼く蟬の夏ををしむ聲のひまなき

夜水鷄

おき出でて月見よとてかたゝくらむ閨の戸近きよはの水鷄は

泉

けふもまた夏を忘れてくらさばやむすぶもあかぬ庭の眞清水

納涼

世はなれてすさめば涼し山隱れ岩もる水の音をきくにも

納涼風

はし居する夕を秋と思ふまで軒端の松の風ぞ涼しき

立ちよれば袖にすゞしく手にはまだむすばぬ水に通ふ川風

荒和祓

御祓川なつのゆふべの涼しさも秋にこえゆく水のしら浪

六月祓

○世はなれてすさめば涼し　世を離れて賞美すれば涼しい。

○荒和祓　あらにごのはらへ。六月祓と同じ。夏の終りの六月晦日であるから秋に越え行くと云つた。水の緣語。

御祓川ことしもなかばはや過ぎぬながるゝものは月日なりけり

みそぎする御手洗川のゆふぐれは神のこゝろも涼しかるらむ

杜夏祓

みそぎするゆふべに秋や通ふらむかねてすゞしき神竝の杜

貴賤夏祓

なべて世の高きいやしきへだてなくおなじ御祓と神やうくらむ

秋部

立秋

淺茅生のきのふの露の色ながらゆふべ寂しき秋風ぞふく

六月立秋

秋やたつ六月はてぬ夏の日も此のゆふぐれのかぜのすゞしさ

幽栖秋來

住みあれし軒端の葎庭の荻おのがやどりと秋風ぞふく

初秋雲

此のゆふべ西ふく風にしら雲のたゞよふ見れば秋は來にけり

○ながるゝものは　川の緣語。

○かねてすゞしき神竝の杜　秋にならぬに前以て涼しい神竝の杜。神南備の森、大和平群郡三室山と同じい。

○風のおとは山　風の音と、音羽山とかけた。

○あまたに重ねても　年を幾年となく繰返しても。重ねてもは小夜は衣の緣語。

○さはるべき契りならねど云々　故障のある可き契りではないが。庚申の夜は人間世界では徹夜するからである、此の夜懐妊すると盗人の子が產れるなどと云ふ迷信があるからだ。

早秋

今朝ははや秋たつ風の色見えて草葉の露の脆くこぼるゝ

早秋山

いづこにか桐の一葉のおちそめて秋たつ風の音かはるらむ

けさは早身にしむ風のおとは山せきのこなたに秋や來ぬらむ

殘暑

白雲のたゞよふばかり秋みえて照る日の影に夏ぞのこれる

七夕

天の川かは風涼したなばたの雲の衣を重ねてやふる

小夜衣としはあまたに重ねてもうらめづらしき星合の空

待七夕

よそにだに今日のくるゝぞいそがるゝいかに待つらむほし合の空

庚申七夕

一年をまつにまさりてけふの日のくるゝや遲きほし合の空

さはるべき契りならねどたなばたのねぬ夜の數やことし加はる

七夕扇

またもこむ秋まで殘れ七夕のこよひ扇の風のうつり香

七夕舟

たなばたのまれのわたりの漕ぎ出でてあふ瀨たどらぬ天の川ふね

七夕後朝

いかばかり露けかるらむたなばたのけさ立ちかへる天の羽衣

乞巧奠

たなばたの逢瀨を照らす影ならむ雲居の庭の夜の燈火

二星適逢

たなばたのこよひ稀なるあふせには浪なさわぎそ天の川舟

霧織女帳

天の川わかれをいとふたなばたや霧のとばりに夜を殘すらむ

織女惜別

たなばたのまたみる秋の遠ければ今朝のわかれや猶をしむらむ

露

夕ぐれは草葉にあらぬ袂にも物おもふ秋の露ぞおきける

世のうさは絕えて忘れし山ざとも秋のならひの袖ぞつゆけき

○扇の　たなばたの逢ふにかけた

○立ちかへる　衣の緣語。

○乞巧奠　星祭の漢名。女性が織女星を祭つて、手藝の上達を祈る意。

○雲居の庭の　宮廷をさす、雲居はたなばたの緣語。

○またみる秋の　又逢ふ秋が間が遠いから。

○夕ぐれは草葉にあらぬ云々　新古今集卷五「露は袖に物思ふ頃はさぞなおくかならず秋の習ひならねど」などを思ひ寄せたのであらう。

○たをらぬ枝の露ながらみむ　野に咲いてゐる萩を、手折らず自然のまゝ、露の宿つて居るまゝで眺めよう。

○うきおとそふる　悲しい音を添へ加へる。

萩露

秋はまた萩の花野に庵しめてたをらぬ枝の露ながらみむ

竹露

しげりあふ庭の呉竹あさな〳〵しぐるゝ露を雨かとぞ聞く

荻

古さとのあれたる軒に聲たててとひくる物は荻の上かぜ

柴の戸に我がまつ人はなきものを何驚かす荻の上風

荻風

さらぬだに涙がちなる草の庵に荻の音きく秋のゆふ風

江荻

うら浪のよるかと聞けば夕間ぐれ入江の荻に風わたる聲

山家荻

さびしさは猶聞きなれし山風にうきおとそふる庭のをぎ原

夜深聞荻

おき出でて月見よとてか小夜ふかく軒端の荻の夢さそふらむ

幾たびか夜ふかき夢をさそふらむ軒ばの荻を過ぐる秋風

荻音近枕

ながき夜の夢やいくたびさますらむ枕にちかきをぎの上かぜ

萩

いろ／＼の花のにしきの秋の野に猶色そへて咲ける萩原

もゝ草の花はあれども秋の野の萩のにしきの色ぞことなる

分けゆけば色ぞみだるゝ露ながら眞萩さく野の花摺りの袖

故郷萩

わけ行けば露のみしげくふるさとの野となる庭に咲ける萩原

崎萩

往來(ゆきき)するあまの袖にや移るらむ野じまが崎の秋萩の花

萩移袖

ほさじ猶色なき苔の袂さへ分くれば露の萩の花ずり

萩花藏水

ながれては色にも出でむさく花のしがらみかくる萩の下水

女郎花

あだなりと露やおもはむ女郎花風ふくたびに靡く姿を

○花摺りの袖　萩の花を摺つて染める衣。

○ほさじ猶云々　美しさのない僧の衣でも、野を分け行けば露の宿つて居る萩の花摺衣になる、それを其のまゝほさないで居よう。

○あだなりと　浮華で移り氣であること。

女郎花露

をみなへしさもあだなりとみゆるかな露になびきし花の姿を

薄

風吹けば露うち散りて花薄まねくや草のたもとなるらむ

行く人のありとも見えぬ秋の野に招く袂や尾花なるらむ

影殘る入日の岡の花すゝきまねくとみえてあき風ぞふく

行路薄

分けまよふ袖かとみれば旅人の入野の尾花なびく夕かぜ

刈萱

たがこゝに草の枕をかる萱の亂れて今朝は露もむすばぬ

蘭

秋ごとに野べを匂はすふぢ袴たがいにしへのかたみなるらむ

むらさきの一もとならぬ藤ばかますそ野を廣み匂ふ秋風

砌蘭

むぐらふの砌に匂ふ蘭（ふぢばかま）あきはふるともたれかきてみむ

蘭薫風

○草のたもと　薄の穗の風に靡くのを袂に喩へた。

○入野　山城乙訓郡大原野村。

○かる萱の　枕を借ると刈萱とかけた。

○むらさきの一もとならぬ　古今集卷十七「紫の一本故に武藏野の草はみながらあはれとぞ見る」

○たれかきてみむ　來て見むと、著てみむとかけた。

○すそ野をとほく　裾は袴の緣語

○秋の夜のながきおもひも　夜の永きと、思ひの永きとかけた。

○かたしく閨の小筵に　一人寢る閨のむしろに。

分け行けばちぐさにまじる藤袴野べふく風の香こそまがはね

藤ばかますそ野をとほく匂ふなり花の盛りに秋風ぞふく

槿

露の身のさだめなきには朝顔の日かげ待つまも猶たのみあり

籬槿

おき出づる庭のまがきの薄霧に露をふくみて咲ける朝がほ

風動野花

しばし今なびくをみれば野べの花千種の風の色にぞありける

蟲

秋の夜のながきおもひも忘られて枕に近きむしのこゑ〴〵

ながき夜の枕の下にきり〴〵すあかしかねたるねにや啼くらむ

曉蟲

秋もやゝ曉寒くおく霜にあさぢのむしの聲ぞかれゆく

閨蟲

おく霜をかたしく閨の小筵(さむしろ)にむしも夜寒をわびてなくらむ

閑蟲

○くるれは　暮るればと葛を繰るにかけた。

○こし路の　越路と来しとかけた

秋はいま末野の淺ぢうら枯れてうらむる蟲の聲かすかなり

蟲怨

色かはる霜のまがきのつた葛くるれば蟲の聲恨むなり

蟲聲非一

むしのねも今をさかりと秋の野の花の千種にみだれてや啼く

草庵の蟲といふ事を貞賢「秋きても草の庵の靜けさをともなふ蟲の様々の聲」に「露分けてきくも珍らし草の戸の垣ねにしげき蟲の聲々」かへし

住みかへてまた珍らしき草の庵に秋まち得たる蟲の聲々

草の戸の蟲はいかにと露分けて共に聞くべき人も問ひけり

鴈

みるがうちに雲路の鴈の落ちくるは田の面に友や聲かはすらむ

秋風のやゝ身に寒くなりぬとや衣かりがね空に鳴くなり

初鴈

秋かぜの身にしみまさるゆふぐれになきてこし路の鴈もきにけり

山がつの門田の稻葉ほに出でて秋風ふけばはつ鴈の聲

遠初鴈

聲なくばそれともしらじ初鴈の雲路遙かにわたる一つら

遠天旅鴈

古里をたちていくかに成りぬらむいまだ旅なる天つ鴈がね

月前鴈

かり／＼と鳴きわたれども秋のよの月にはとまる我が心かな

蘆邊鴈

難波江や遙かにわたる一つらにあしべの鴈も聲かはすらむ

鹿

山鳥のをの上は遠くへだてても妻とふ鹿の聲ぞ聞ゆる

むかし見し友こそなけれ柴の戸は鹿の音近き山里にして

鹿聲繁

木々しげき立ちどしられてをぐら山このもかのもに棹鹿の聲

鹿聲何方

聞き分けむかたこそいづれやま風の吹きまよはするさをしかの聲

鹿聲幽

山ふかみそれかとばかりさをしかの妻とふ聲を嵐にぞ聞く

○かり／＼と　鴈の聲が、假の物と啼き渡るが。

○むかし見し友こそなけれ　昔見た友はもう居ないけれど。

夜鹿

ひとも住む山路の庵の鹿の音はねられぬ夜半の友とこそなれ

谷鹿

谷ふかみ峯吹きおろす秋風を身に寒しとや鹿の鳴くらむ

曉鹿

老いにけりいまは寐ざめて鹿のねを聞かぬ夜もなし秋の山里

田家鹿

長き夜を小田のかりねのいねがてに聞きこそあかせさをしかの聲

野鴫

夕ぐれの野風を寒みいづこをかおのがふしどと鴫のたつらむ

澤畔鴫

すむ鴫の羽根かく音もさやかなる月の野澤の曉のそら

寐覺鴫

庵近く澤べの鴫の立つおとを夜ふかき夢のなごりにぞ聞く

秋夕

のがれては猶うき時と山風の分きて身にしむ秋の夕暮

○いまは寐ざめて　夜半にねざめがちなのは老のくせである。

○小田のかりね　假寢と刈稲とかけた。

いかばかりあはれはかゝる色ならむあさぢが露の秋の夕ぐれ

かねてより身にしむものとおもひしるさのみな吹きそ露の夕風

人なみにあはれとばかりいひなして心なき身の秋の夕暮

憂しとても誰にかたらむ世をすてて入りにし山の秋のゆふ暮

秋雨

さらぬだにゆふべの袖は露けきにまた降りかゝる秋の村さめ

秋夕雨

いとゞ猶あきのゆふべの寂しさに雨うちそゝぐ山陰の庵

秋夕傷心

知らざりきうき世を捨てし身にも猶もの思ふ秋のゆふべ有りとは

秋夕催涙

ほしあへぬ袂をいまはいかゞせむうき世すてても秋の夕ぐれ

秋思

出でてこし山路はさぞな都だにさびしきものを秋のおもひに

秋田

小山田のさゝのかりほに露ちりてもる袖寒き秋風ぞ吹く

○あはれはかゝる　かゝるは露の縁語。

○出でてこし山路はさぞな　都すらかく秋の思ひに寂しいものを、今まで居て自分の出て來た山路はどんなに寂しい事であらうぞ。

夕ぐれの賤が門田におく露はひたひくたびにみだれてや散る

雲間稲妻

雨晴るゝなごりの雲の山の端に絶間見えゆく稲妻のかげ

霧

出づる日の光もおそき朝霧にまだ夜や殘す山もとのさと

あらし山猶たつ霧は夜をこめてふもとのかねの聲ぞ明けゆく

關霧

鳥の音も猶たつ霧に埋もれて明けこそやらね逢坂のせき

河霧

おほ井河岩まもみえずたつ霧にくだしやかぬる秋の舟人

秋霧

吹く風にしばし晴れゆく秋ぎりのまた立ちかくす山もとのさと

古渡秋霧

いとゞ猶わたりぞ遠き泉川ゆくへも見えぬせゞのゆふ霧

霧中求泊

○ひたひくたびに　鳴子板を引く度に。ひたは引板。

○明けこそやらね　明けは關の縁語。

○泉川　山城相樂郡今の木津川。

泊るべきみなとのかたも見え分かで霧にたゞよふ秋の舟人

駒迎

逢坂の關路の霧の絶えまよりもれてぞ出づる望月のこま

あふ坂の杉のした道くらからでひく數みゆる望月の駒

月

大ゐ川ふけゆく波のおと澄みてあらしの山の月をこそみれ

よそにのみながめしものをいつしかとわが世更けゆく山の端の月

しばし今松の葉ごしにもりくるは出でて程なき山のはの月

なぐさめてみるべき月を袖の上にやどすは何のなみだなるらむ

夜よしとも猶告げやらで柴の戸にひとりぞむかふ庭の月かげ

小倉山月はおほくも見しかどもけふの光に似る影もなし

ふりそひし涙のしるや昔ごろも袖の露とふ秋の月かげ

ひとつ飛ぶはなれ鳥のつばさまでそれとまがはぬ月の清けさ

ともにみし昔の人をかぞへつゝ涙催す有明の月

すみわたる月の光に見え初めてゆふ霧なびく遠の山もと

秋の夜を長しと何か賴みけむ月にむかへば明けやすき空

○もれてぞ出づる　望月の緣語。

○くらからで　望月の緣語。

○猶告げやらで　まだ人に知らせもやらないで。

○何か賴みけむ　どうしてあてにした事であらう。

夕霧のはれゆく西の木の間よりまづ見え初むる秋の三日月

明　月

宵のまの風にたゞよふ浮雲もいつしかはれて澄める月影

明月如晝

村がらすなれもねぐらを立ち出でてひるとや思ふ月のさやけさ

○なれもねぐらを　汝も寢ぐらを。月夜烏が巣から迷ひ出たのである。

待　月

むかふよりそこと知られて山の端を出づらむ月の影ぞほのめく

臨水待月

山の端をやゝ出でそめて月影のふもとの水にうつるをぞまつ

横峯待月

雲はるゝ東の山のみねつゞきいづことさして月をまたまし

見　月

名殘なく雲霧晴れて中空に獨りすみゆく秋のよの月

見月戀友

わが庵も月は住むとや淺ぢふの露きえ分けて人のとへかし

十五夜月

かけみつるおなじ光の月なれど秋のなかばに似る時ぞなき

八月十五夜曇くもりければ蓮師の許へ申し送り侍る安壽「住み初めしことことしの秋の庵の月めづらむものをかゝるうき雲」といひおこしければ返し

秋もけふ最中の空とこの庵にまちしかひなき月の村雲

月のころ山崎へまかりて蓮師のもへと申しおくり侍りける安壽「雲拂ふあらしの山の月影をよどの河瀬にうつしてぞ見る」「夜もすがらひとりみやまの月かげもさぞ有明の空やさびしき」かへし

しらざりき晴れたる淀の川浪にあらしの月をうつしみむとは

さびしさをおもひもやれな鹿鳴きて月も木の間に有明の山

八月十五夜草庵をとひよるとて章丹「露の身をおくるばかりと聞きしかど草の庵にも月はすみけり」といひければかへしその夜風はげしければ

草の戸に月すめばこそ露の身のかかる嵐もたへて住まるれ

折からすゞむしの鳴きければ章丹「友としていくその秋をふりにけむ草のかきねのすゞむしの聲」と聞えけるかへし

○かけみつる　かけたり滿ちたりと影を見たとにかけた。

○雲拂ふあらしの山　雲吹き拂ふ嵐と山名とをかけた。

○晴れたる淀の云々　晴れと嵐とを對照せしめた。

○月も木の間に有明の山　木の間に月が在るにかけた。

○露の身をおくるばかりと　送ると、露を置くとかけた。

○かかる嵐も　かかるは露の緣語

○いくその秋をふりにけむ　幾度の秋を經たのであらう。ふりにけむは古りと、鈴を振りにかけた。

○うしばかり　午前二時頃。

○かくてみやこの　かくて見ると都とかけた。

○むかふより程なく　向ふと間もなく。

月はくもらぬにかへし

昔ごろもぬれそふ程はなかりけり月にしぐるゝ風のうきくも

こゝにきて月見るべしとおもひきやこよひの友は心ありけり

大み川の邊にて夜もうしばかりなりければ

すむ月の所あまたに尋ぬれば最中の影もかたぶきにけり

[illegible]月

須磨あかし分きてはとはじさやけさをかくてみやこの秋の夜の月

月出山

むかふより程なく出でて山の端の松の木の間をのぼる月かげ

月契秋

月はたゞ秋と契りていつよりかさやけき影を空に見すらむ

山月

山のはの出でてもしばし月影の木の間をのぼるほどぞまたるゝ

野月

露ふかき野原の草をかたしきて月にいく夜の旅寝をぞする

○玉江の浪に　攝津西成郡野田玉川。

○落ち瀧つ　落ち激する。

○光を磨く　玉の縁語、月の輝く形容。

○よわたる月に　鹽燒きて渡世すると、夜を渡る月とかけた。

○われならぬ人もうきねの　自分以外の人ちもの憂き浮寢の。浮寢は舟にやどる事。

○さ野のわたりに　紀伊東牟婁郡佐野渡。

江上月

うき草の數おく露もあらはれて玉江の浪にすめる月影

瀧月

落ち瀧つ岩にくだけてちる玉も光を磨く月のさやけさ

海邊月

打ちなびくけぶりを見れば鹽がまのよわたる月にうら風ぞ吹く

湖月

一もとの松ふく風も秋更けて月すゞわたるしがのから崎

泊月

われならぬ人もうきねの泊り舟いざ語らひて月に明かさむ

渡月

くれぬとて宿かる家もなかりけりさ野のわたりに月はすめども

閑居月

夜よしとも誰にか告げむ柴の戸にひとりながむる月の靜けさ

庭月

更くる夜の軒の松風音すみて木末のひまに月をこそみれ

松月幽

住む庵の外面の松の枝たれてもる影うすき山の端の月

月前松

さしのぼる高嶺の月を松ふりし宿の梢のひまよりぞみる

月前竹風

打ちなびく竹の葉分けの秋風にさやかに月の影ぞこもれる

曉月厭雲

山の端を何いとひけむあり明の月のゆくへにかゝるうき雲

惜月

いとゞ猶したふ名殘はありあけの中空ながらしらむ夜の月

殘月

入るをのみ惜しみならひし此のごろの山の端ならで月ぞ明け行く

擣衣

さゞ浪やしがの山かぜ秋更けてふるき都に衣うつなり

○さやかに　葉の音と、さやかにはつきりとかけた。

○月のゆくへに　月のしづみ行くかたに。

○入るをのみ惜しみならひし　月が山に入るのを惜しむ習ひとなつて居た。

誰が里も夜寒の霜のおきゐつゝねられぬまゝに衣うつらむ

秋風にきくもよさむのから衣うつ音しげき賤が山もと

擣衣近

寢られねばこれも友とぞ聞きあかす鄰のしづが衣うつ聲

擣衣寒

色かはる外山の里の秋風にうつ音寒し賤がさごろも

隔夜擣衣

賤の女が麻のさごろもうち絶えてまどろむ程のよはもありけり

名所擣衣

やへぶきの蘆やの里にうつきぬたさしもひまなき音ぞ聞ゆる

うちたゆむ隙こそなけれ蘆ぶきの難波のこやにつゞく砧は

菊

露霜にうつろふまでも菊の花猶めづらしきさかりとぞみる

晴雲亭の庵の菊をたづねよりて翠嵒和尚「夕日影うつるをもいさしら菊のまがきのもとにかへさ忘れて」と聞えしかば

○おきゐつゝ　霜の置くと、起きて居ることかけた。

○やへぶきの　しげく葺いた。○蘆やの里　かやぶきの家と、地名とをかけた。○難波のこやに　攝津河邊郡昆陽。小屋にかけた。○ひまなき、ひまこそなければ、蘆葺きの屋根に隙間がないにかけたのである。

をかけた。
〇千年ふる山路のきく　千年も生きのびる側壇の菊。

〇むすぼほる露に咲きて　所謂細物と稱する絲の如き辨の菊。
〇菊もめづらし　聞くも珍らしにかけた。

千年ふる山路のきくの種なれば花みる人の老もつきせじ
水注ぐ下葉を露のぬれ色にたたみる菊の花ぞはえある
晴雲亭の菊見にまかりて人々歌よみけるついでにことし實生えのきくの
珍らしきあまた咲きけるをみて菊有新花といふ古き題の心を翻して一すぐ
に其の文字を頭におきて九首の歌よみてまた人々にもすゝめ侍るそが中
に廬山と聞えけるを
清き此の色をはちすのおもかげにたつ名もしるし宿の白菊
十六夜といへるを
くれて猶月にやめでむ十六夜の光も花にかよふ名のきく
似たる其の品こそなけれたねはたゞひとつ實はえの菊の初花
承露盤といふとぞ
しら露をこがねの莖の花の名にうけもて立てる菊の一もと
むすぼほる姿に咲きて染めひものとけぬを花の菊もめづらし
くさぐ\の中に實ばえの珍らしき菊をことしの秋にこそみれ
あるじのしひて銘をこはれける花ありいなみがたく岩うつ波などもやと

いひしにしばし默していらへなかりしに

涌きかへる岩うつ浪のおとせぬはきくにかひなき名にやあるらむ

浪のはなといふ菊あり

秋菊の名に打ち出づるも珍らしな氷のひまの浪のはつ花

流れ水のあたりも匂ふ宿の菊その山人もこゝに住むやと

ある年の秋きくのはな咲きけるころ蓮師のもとへ申しつかはしける安壽

「榮えもなき庭の菊が枝ことしまたなどかけやらぬことの葉の露」と聞えけるかへし

榮（は）えもなき言葉の露はかけてしも色にけたれむ庭の菊が枝

雨の後まかりて

雨風の後をいかにと問ひよればかこふ籬の菊はさはらず

ゆく末も契りかはらで宿の菊猶いく秋も共にたづねむ

ちとせふる山路もこゝは松尾（まつのを）の名さへしたしき菊の宿かも

珍らしき實ばえの花の色々も年に數そふませの秋菊

老いせぬ友と銘じける菊を見て

○おとせぬは　返事せぬは。涙の音にかけた。

○きくにかひなき　聞くかひなきと、菊に價値なきとかけた。

○打ち出づるも珍らしな云々　古今集卷一「谷風にとくる氷のひまごとにうちいづる波や春の初花」に據つた。

○その山人も云々　南陽縣の菊水の聯想か。山人は仙人。

○などかけやらぬ　なぜ言葉をかけて下さいませんか。かけは露の緣語。

○ことし加はる　今年はいよいよ

大澤の池の水底匂ふらし岸のしら菊かげぞうつろふ

月前菊

外はみな色ともわかぬ夕月にひとりはえあるませの白きく

菊久盛

別れにし秋は日數もほどふるにまだうつろはぬ菊のいろ〳〵

伴菊延齢

汲みて經む秋やいく秋さく菊の花の香ふかき谷の下水

重陽宴

秋ごといちとせを經てやめぐるらむ菊のかげそふ今日のさかづき

黄葉

かねてよりうつるとみえて神なびの杜の梢は色かはりゆく

紅葉

山姫の手にまかせたるから錦をりもたがへで染むるもみぢ葉

幾たびか露も時雨も染めつらむ色こくなりぬ山のもみぢ葉

日ごろみし松はあらはに立田山梢殘らず紅葉する頃

○重陽宴　昔の九月九日菊花の宴菊酒を百官に賜はつたのである。

○をりもたがへで　折こ織りこをかけた。

時雨する深山はさぞな露霜のをかのもみぢも色に出でけり

紅葉淺

もみぢ葉はまだふかからぬ色ながら松の木の間にあらはれにけり

紅葉出垣

夕日影へだつるかきの外面よりかた枝さし出づる紅葉色こき

紅葉如錦

いろ／＼に染むる紅葉や山姫の手にまかせたるにしきなるらむ

紅葉待霜

霜はまだ岡べのまつの下紅葉けぢめばかりの色や見すらむ

峯紅葉

分けのぼる麓の道は遠くとも行く手を見ばや峯のもみぢ葉

杜紅葉

いつのまに時雨も露も染めつらむしのだの杜の千枝のもみぢば

河紅葉

行く水のかげを移して山川の岸ね傳ひに染むるもみぢ葉

○かた枝さし出づる云々　その片枝だけよく日に當つて、紅葉が濃いのである。

○けぢめはかりの　ほんの區別だけの。

○しのだの杜　新古今卷四「日を經つゝ音こそまされ和泉なる信太の森の千枝の秋風」

一木をも二木に見せて影うかぶ水のきしねに染むるもみぢ葉

垣根のつた紅葉したるを

わが庭の垣ねのつたのうす紅葉あはれ時雨にもれぬ色かな

高雄山へもみぢ見むとてゆき侍りけるにやんごとなき人々これかれ紅葉の下によりつどひて侍るに薬師のもとより人して申しつかはしける其の詞書にふるき文にもこゝは紅葉の名所とも見えずとて

見初めつるたが世をかけて高雄山こゝを紅葉の名にはたてけむ

返しにいつよりの事にかありけむ夫木集に高雄の詠歌あるやうにおぼえしと書きてもたせこされけるに

いつよりの名だたる事かしら露のそむるはあかぬ山のもみぢ葉

また薬師の方より夫木集に高雄の詠歌侍るよしうけたまはりてとかきて

露霜のふりしながめも高雄山ふみ見し人にとひてこそしれ

あらしやまの紅葉見侍りて

嵐やま春みし花の跡とめて秋は櫻の紅葉しにけり

あらし山のかへでをほりて人のもとへつかはすとて

いまよりは嵐の山の秋の色をとし〴〵やどのものとながめよ

○時雨にもれぬ　時雨をまぬかれぬ。もれは雨の緣語。

○高雄山　山城葛野郡梅畑村。

○ふみ見し　文見しと踏み見しとかけた。

○跡とめて　跡を留めて。

暮秋

けふのみとしたふにつけて秋の日はいとゞほどなく暮れ急ぐらし

暮秋菊

ゆく秋の日かずもともに霜をへて籬のきくの色ぞうつろふ

暮秋野

うら枯るゝ野べのちぐさの露の色に今はと秋もくれてゆくらむ

暮秋霜

まねけどもとまらぬ秋を此のゆふべ尾花の袖の霜や見すらむ

晩秋鹿

身にしみて妻やこふらむ秋風もいとゞ夜寒のさを鹿の聲

山路過秋

けふははや秋も名殘とみやま路をしぐれて過ぐる風の浮雲

九月盡

うしとのみ思ひし秋を今更にくるゝにつけて何惜しむらむ

いとゞしく袖に露おくゆふべかなことしも秋の暮れぬと思へば

○まねけども　尾花のそよぐのを袖ひるがへして招くと喩へた。

○みやま路を　名殘と見るにかけた。

冬部

初冬

いつしかと秋の名殘を慕ふまに草の戸寒く冬はきにけり

秋くれて露もまだひぬ袖の上にまたや時雨のふりかゝるらむ

山初冬

窗のうちに聞くも寒けし冬のきて今朝吹き變る木枯の音

身に寒くけさぞおぼゆる山風のふくにつけてや冬ぞきぬらむ

初冬嵐

山かぜのはげしさそふる柴の戸にけさ冬ごもるはじめをもしる

はげしさも昨日に增る音そへて冬來にけりとしるき山風

初冬時雨

今朝よりは冬きにけりと槇のやにおとをたてつゝ時雨ふるなり

初冬落葉

冬きぬとけさは嵐にさそはれてちるは昨日の秋のもみぢ葉

時雨

村しぐれふりみふらずみ里わくやさそふあらしのこゝろなるらむ

幾たびか山めぐりしてもみぢ葉の染むるが上に時雨ふるらむ

おとたてぬ草の軒ばは散りつもる落葉が上のしぐれとぞ聞く

いくたびかしぐれ降るらむ神無月空さだめなきかぜの浮雲

見ればかつ木の間の月をくもらせてしばし時雨るゝ風のうき雲

さらばとて山のあらしにまかすとも袖のしぐれや晴間なるらむ

風荒く外山のまさきちる時は空にしられぬ雲ぞうきたつ

遠郷時雨

あらし吹く外山のみねの雲こえて猶しがらきの里やしぐるゝ

枕上時雨

風あらみ夜半の枕に幾たびか夢をさそひてしぐれ降るなり

落葉

つひに身の果てもやかくとあはれさをみせて木の葉のもろく散るなり

ありはてぬ世のことわりをめの前に見するやよもの木の葉なりける

夕まぐれ木の葉の脆く散るおとにおもひぞあへぬ袖ぞしぐるゝ

月前落葉

○里わくや　雨の降る里、降らぬ里と分けるのは。

○しがらきの里　近江甲賀郡信楽もと聖武帝離宮の地。

○ありはてぬ　永久に存しおほせぬ。

○おもひぞあへぬ　よく靜かに物思ふひまもなく。

有明の月しづかなる庭のおもにをり〳〵落つる木の葉をぞきく

落葉深

庭の面の苔の緣もうづもれてつもる木の葉の幾重ともなき

瀧落葉

岩がねは散るもみぢ葉に埋もれて木の間あらはにおつる瀧つ瀬

橋落葉

朽ちぬるか人は渡らぬ程みえて木の葉にうづむ谷のかけ橋

窗落葉

夜もすがら風やさそひしねやの窗明けゆくひまにつもるもみぢ葉

霜

野べは今殘る草葉も枯れ果ててかさなる霜の色を見すらし

殘菊

うつり行く色ともみえずませのうちに霜をかさねて殘る白菊

霰

槇のやのしぐれは馴れてぬる夜半の夢くだけとやあられ降るらむ

月影は猶さえながら杉のやに霰をさそふ冬のやま風

○人は渡らぬ程みえて　人は渡らぬ程度がわかつて。

○夢くだけとや　夢を破れと云ふのか。くだけは霰の緣語。

小夜ふかみおく霜氷る笹の葉に霰たばしる音のさやけき

篠上霰

さらぬとて夢やは結ぶ小笹原かりねの牀に霰降るなり

寒草

いろ／＼の花みし秋のほどもなく野べの千種ぞ霜にかれゆく

寒草少

草の葉は殘る色なく霜枯れて野べふく風の音ぞすくなき

寒草纔

枯れ殘るいろぞさびしき庭の面の一もとすゝきさやぐゆふ霜

寒草處々

霜がれの色はひとつになりにけり垣ねのすゝき野べの道芝

寒蘆

こぎ通ふ舟もあらはにみ島江やむら／＼立てる蘆のしも枯れ

池寒蘆

つらゝゐる汀の蘆も枯れ果ててあらはになりぬこやの池水

○さらぬとて云々　左様でなくとも夢は結べもしないのに。
○小笹原かりねの牀　笹を刈ると假寢の牀とにかけた。

○み島江や　見るにかけた、攝津。

○こやのいけ水　攝津河邊郡昆陽池。

濱邊寒蘆

あさな〳〵枯れたつ蘆におく霜をはらふも寒しみつの濱風

氷

あし鴨のうきねの牀やねぬなはの長き夜すがら氷る池みづ

いかだしの袖寒からし大井川入江の浪は今朝氷りけり

氷留水聲

いつしかとかけ樋の水も氷ゐて物さびしきは冬のやま里

池水

みだれ蘆の折れふすまゝに閉ぢられて氷れる池は風も音なき

湖氷

吹きおろすひらの山風寒き夜はしがの浦浪さぞ氷るらし

懸樋

いつしかと筧を傳ふ水の音もさびしく氷る冬の山里

冬月

冬きては山もあらはに落葉して篪の庵に月ぞすみける

○みつの濱風　御津、攝津の海岸。

○あし鴨　蘆鴨。

○ねぬなはの　根蓴菜の。じゆんさいの異名。水草で根が長いから次の長き夜にかけ、上に對しては寢ぬにかけた。

○いかだしの袖寒からし　筏乘りの袖も寒くあるらしい。

○かけ樋の水も氷ゐて云々　物寂しいのは、水の落ち流るゝ音が絶えたからである。

むかひみる影身にしみて氷る夜に光を磨く月の寒けさ

身にぞしむ木の間あらはに冬枯れて落葉の霜を照らす月影

寒月

山風のさそひ盡せる此のごろの木の間にみゆる月のあはれさ

寒夜明月

山風も更けてしづまる冬の夜に氷れる月の影ぞ身にしむ

千鳥

川千鳥おのが夜牀のうき霧にへだてる妻をしたひてや鳴く

夜を寒みつま戀ひかねて鹽風の荒き渚にちどり鳴くなり

千鳥曉鳴

おきわたす霜のしら洲の川千鳥鳴くねも寒き明けがたの空

薄暮千鳥

此の夕潮やみつらむ難波江の蘆間の千鳥友さそふ聲

浦千鳥

和歌のうらやむかしの跡の友ちどりおなじ渚によりてこそなけ

浦傳千鳥

○うき霧に　物うき霧と浮きとをかけた。

○霜のしら洲の　霜の白いと、白砂の洲とかけた。

浪あらく沖つ鹽風寒き夜に啼きてちどりの浦つたふらむ

濱千鳥

夕しほのみつの濱べの友千鳥あしまがくれに聲さわぐらむ

潟千鳥

ほしあへぬ袖師の浦の友ちどりいとゞひがたの月になくなり

水鳥

羣れてたつおとぞ聞ゆる水鳥の池のうきねの牀や冰れる

水鳥多

山川の岩まがくれに住むをしのむれたつにこそ驚かれけれ

いづこよりむれてきぬらぬむ山川の淵さへさわぐ水どりの聲

水鳥馴舟

すみだ川ありやなしやと問ふばかりゆききのふねになるゝ水鳥

鴨

早き瀬に流れもやらで浮くかものあしのいとなき程ぞしらるゝ

網代

後のよのむくいもいかでのがるべきひをのよる〳〵網代もるわざ

○浪あらく沖つ鹽風　浪が荒く起きるにかけた。

○みつの濱べの　夕潮のみつると地名とをかけた。

○袖師の浦　出雲八束郡竹矢村の海岸、馬潟とも云ふ。ほしあへぬ袖と地名とをかけた。

○ひがたの　袖が干がたきと干潟とをかけた、干潟は潮がひくと陸地となる所。

○ありやなしやと　伊勢物語の「いざ言問はむ」の歌に據つた。

○いとなき程ぞしらるゝ　暇のない程度が知られる。

○ひをのよる〳〵　氷魚の寄ると、夜な〳〵網代を番するとにかけた

○日をへて　氷魚にかけた。

○氷りてかゝる　網代にかゝるを川風の吹きかゝるとかけた。

○よるも見えけり　寄るを夜とかけた。

○跡もいとはじ　足跡をつけてもかまふまい。

うぢ川のあじろにかゝる紅や日をへてよする木の葉なるらむ
よる浪もあじろの牀をこゆるかともる袖氷るうぢの川風

朝網代

朝霧のたちかくせどもあじろ木にいさよふ浪のおとぞ聞ゆる

網代寒

いかばかりあじろの牀のさえぬらむ氷りてかゝるうぢの川かぜ

月照網代

宇治川や月さえわたるあじろ木につもる木の葉のよるも見えけり

雪

大江山いく野の道やうづむらむ嵐におくるみねのしら雪
いかばかりつもりや添はむ降り初めてはれ間もみえぬけふのしら雪
人もまた跡つけがたくおもふやとたがひにとはぬ庭のはつ雪
降りつもり道や絶えむと柴人の隙なくかよふ雪のやま陰
都にはいつかふるらむめづらしくけさは見そむる比良のしら雪

淺雪

山里は跡もいとはじ都人とへかし雪のみち絶えぬまに

○つもるにつけて　日數の積ると雪の積るとかけた。

○木々はけさいづれともなし　木は今朝雪が降り積つて、どれとも區別が見えない。

○ふり晴れて　雪降りし後の晴れたのをいふ。雪晴れ。

積雪

くる人をまつとせしまに山ざとは道もなきまでつもる白雪

逐日雪深

冬の日のつもるにつけて山ざとはいくへともなくふれるしら雪

雪埋苔徑

我がやどの苔の通ひ路いとゞ猶あとたえ果ててつもる白雪

雪朝遠樹

木々はけさいづれともなし柴の戸の雪にみわたす遠の山もと

雪中待人

寂しさはおなじ山路の雪のうちに鄰の人も我をまつらし

雪中遊興

おもふどち都の野べに行きて見むふりつむ雪に道もまどはで

雪中殘鴈

古里になごりをしみて鴈がねはけさ降る雪の空になくらむ

曉望山雪

ふり晴れて雲は跡なき有明の月にぞむかふ雪の山の端

遠山雪

峯高き程もしられてをち方の雲間にけさは見ゆる白ゆき

嶺雪

起き出でて今朝見初むるも珍らしと高ねばかりにつもるしら雪

湖雪

眞野の浦や尾花おしなみ降る雪は汀も見えずよする白浪

島雪

珍らしくあまもめづらむ浦遠く浪に浮べる雪の初しま

竹雪

した折れなこよひやきかむ暮れしより降りそふ雪になびく呉竹

篠雪

ふるまゝに葉分けもみえず積りそふ雪におとせぬ庭の篠原

常磐木雪

今朝のまはまだ深からで常磐木の色を埋まぬ庭の白雪

狩場寒

狩人の濡るゝ袂や寒からむ交野のみ野にみぞれふりきぬ

○初しま　伊豆初島。

○した折れを　折れ伏すのを。

○交野のみ野　河内北河内郡交野、御野は禁野であつたから[illegible]

○はし鷹のしらふの霜の　はし鷹は隼、鷹の一種、腹に赤白の斑があるので、しらふの霜とかけた。

○小野の炭がま　山城小野。

○天の戸のあけ　夜が明け方近くなるに隨つて。

○朝くらの聲　神樂歌を唱ふる聲「朝くらや木のまろ殿に我居れば名のりをしつゝ行くは誰が子ぞ」を歌ふからである。新古今集雜歌。

○豐明節會　大嘗祭の後に行はるる宮廷の宴會、五節舞が奏せられるのである。

○かへすなるらし　返すは今を昔にかへすと、袖をひるがへすとかけた。

○佛名　十二月十九日から三日間行はるゝ佛名會。

○いくその人　どの位多くの人。

○三世　過去現在未來の三世。

鷹狩

けふもまたかりくらしけりはし鷹のしらふの霜のおきまよふらし

連日鷹狩

降る雪のしらふの鷹を引きすゑてけふもかた野に出づる狩人

炭竈

見るがうちにしばしたえつる炭竈の煙や峯の嵐なるらむ

炭竈烟

ますらをがたえずこりつむ深山木をけぶりにみする小野の炭がま

神樂

天の戸のあけがたちかくなるまゝに庭火もさゆる朝くらの聲

今ぞげに神代の事もおもはるゝ天の戸しらむ朝倉のころ

豐明節會

をとめ子が豐のあかりにまふ袖は今を神代にかへすなるらし

佛名

年ごとにいくその人は唱ふとも三世の佛の御名は盡きせじ

爐火

寢もやらで猶かきおこす埋火の炭さし添ふる冬の夜長さ

向爐火

夜を寒みねられぬまゝにたゞひとり起きゐて向ふ埋火のもと

長き夜の友とぞあかす閨のうちにさむさ忘れて向ふ埋火

爐火忘冬

幾たびか炭さしそへてさゆる夜もしらずぞあかす埋火のもと

爐邊似春

むかふより春かとぞ思ふ埋火のあたりは冬の寒さ忘れて

除夜

春やまつ年やをしむと人とはば一夜のふしを何とこたへむ

老人惜年

いそがれて花の春まつ心にもこゆるはうしや老の年浪

歳暮

數へつゝはや七十の半ばぞと身にもおどろくとしのくれかな

行く年を送り迎ふるいとなみも佛の道にいそげとぞ思ふ

歳暮急

○むかふより　火に向ふと共に。

○一夜のふし　季節と臥しとをかけた。

○こゆるはうしや　越ゆるは涙の縁語。

○いそぎもしるく　年を迎ふる準備も著しく。

○としくるゝときは　年暮るゝ時と、常盤とかけた。

○うら浪のたちも歸らず　浦にうち寄せる浪の如く、ひき返しもせず。

○年木にぞ　新春の用意にとり置く薪、年取りの薪の意。つむは集める事。

年くれていそぎもしるく諸人の道のゆくての袖ぞかずそふ

歳暮松

としくるゝときはの松も雪のうちにおのが色そふ春や待つらむ

關歳暮

うら浪のたちも歸らずゆく年をいかにとゞめむすまの關守

都鄙歳暮

さま〱に品はかはれど行く年のひなも都もいそぎをぞする

蓮師のもとへ年の暮に薪をおくるとて貞賢「ゆく〱もやすけき春をむかへとてけふは妻木を年木にぞつむ」と申しおこしけるかへしに

此の庵は住みて久しく成りぬれどかほど薪をつみし暮なし

としのくれに入相のかねを聞きて

つく〱とおもふ心にひゞくなりけふは誰が身の入相のかね

くれ殘る日數も今はつきはてて年の終りのかねひゞくなり

おなじころ古さとへ文つかはすとて

とし寒く暮るゝにつけて古さとの老いたる親のたち居をぞ思ふ

こゝちあしき年のくれに念珠の緒をつなぎかへてゐければあゑ人のきた

りて年のくれに世のいそぎは侍らでかくし給ふはこれなむ世を捨人のいそぎかといひ捨てて歸らむとしけるに申しかけ侍る

春を待つわが玉の緒よいかならむつなぎし珠數はむすびかへても

またおもひかへして

あたらしく珠數の中の緒とりかへて春のくるをば我もまちけり

戀部

戀

何ゆゑにまよひそめぬる心ぞと我さへしらぬこひの山みち

初戀

我ながらなにをしるべと戀の山ならはぬ道をわけそめにけむ

いかにしてしらせ初めばや戀の山麓の露のかゝるおもひを

思

わがおもひむなしき空にみちぬともいはねば人の知るよしもなし

片思

數ならぬうき身の咎をなげけとや思ふを人の思はざるらむ

○わが玉の緒よいかならむ　珠數ならばつなぎ直す事も出來るが、玉の緒即ち我が命は、來年の春までいかゞであらう。直す事も出來ぬからわからない。

○春のくるをば　來ること、珠數を繰ることかけた。

○まよひそめぬる　道の緣語。

○しるべ　案内、道の緣語。

思不言戀

かくとだになどいはしろの結び松むすぼほれたる下の思ひを

人しれずつゝむ思ひのくるしさをいつまでとてか洩らしかぬらむ

忍戀

末つひにいはでやみなむ戀衣何故かくはおもひ初めぬる

せきかねて涙のひまにもれもせばおさふる袖のかひやなからむ

忍涙戀

わが涙猶もらさじとせく程やまだ朽ち殘る袂なるらむ

相互忍戀

心せよよそにしりなばいかにぞと共にしのぶの山の通ひ路

恨

つれなくば思ひ捨てなで末つひに身ながら身をも恨みられけり

恨身戀

人よしれ筆にかきやる言の葉も思ふ恨みのかずは盡さず

披書恨戀

身ひとつのうきになしてはかこてどもさすがに人のつれなかりけり

○いはしろの結び松　萬葉集卷一「君が世も吾が世も知らむ磐代の岡の草根をいざ結びてな」磐代は紀伊日高郡。當時草叉は松の枝を結び長壽の禁厭とする信仰があつた。かくとだにいはじと地名とをかけ、むすぼほれと結びの音を繰返した、屈託して居る心の底を先方へ告げまいの意。
○せきかねて　堰き留めかねて。せき、もれもせば、皆涙の緣語。

○しのぶの山　陸前宮城郡信夫山

○思ひ捨てなで　先方が無情なら思ひ諦めればよいものを諦めないで。
○身ながら身をも云々　我が身ながら自身をも。自ら恨むやうになつた。
○人よしれ筆にかきやる云々　思ふ人よ察して下さい。書き送る言葉ゝ、思ふ恨みの數を十分つくしては居ないのだ。

かず〳〵につれなさみする玉梓は恨みよとてのすさびなるらし

聲聞戀

いひよらむ便りもあれな籬垣のまぢかき聲を聞くにつけても

尋戀

此のまゝにかれむもうしや其の里とをしへしやどは秋風ぞふく

祈逢戀

一たびのあふ瀬もがなと祈りしに猶ゆく末もけふは頼まむ

祈不逢戀

いかばかり人の心のつらければ神にいのりしるしだになき

憑誓言戀

いつはりをたゞすの神にちかひてし人の言の葉すゑもたのまじ

不憑戀

かけてだに今はたのまじさゝがにのいつはりしるき人のちぎりは

さゝがにのいつはりおほき夕ぐれをかけても今は人にたのまじ

契戀

行末をかねてしらねばいつはりと思ひながらも頼む言のは

○いひよらむ便りもあれな　先方へ言ひ寄る手がゝりでもあればよいになあ。

○かれむもうしや　離れるのもいやであるよ。かれむは枯れむとかけて、秋風の緣語。

○たゞすの神に　京の東北糺の神社。僞りを正すとかけた。

○かけてだに　さゝがにの緣語。

○いつはり　いは蜘蛛の網にかけた。

○かねてしらねば　あらかじめ知らないから。

契りても人の心やはつせ山ふけゆくかねもよそにきくらむ

契行末戀

いかならむ人の心の末の松浪こさじとはちぎりおきてき

不逢戀

さのみまたつれなからじと人ごゝろかはるならひの命にぞまつ

あふ事にかふる命もまゝならで長くぞ人のつれなかりける

いつまでか身をうら浪のあら磯に思ひくだけて戀ひやわたらむ

遇不逢戀

かはしつる其の夜のまゝのさゝ枕身のうきふしは今ぞ數そふ

またもみぬ中の契りやはつせ川たてるやいづこ二本の杉

移り行く人の心の秋風にひとりふしみの里は荒れけり

賴みこし一花染の戀ごろもまたも重ねぬなかぞはかなき

こえ初めし其の夜ばかりを限りにてよそになりゆく相坂の關

不絕待戀

人よ知れうきにもたへて待つは猶命のうちの夕なりけり

○はつせ山云々　新古今集卷十二「年も經ぬ祈る契りは初瀨山尾上の鐘のよその夕暮」に據つた、人の心は果てたにかけた。

○末の松云々　陸前末の松山。浪こさじとは仇し心を持たぬ意。

○かはるならひの　今はつれなくとも、長い間にはやがて變るであらうと、變るならはしである人の命をあてにして待つのである。

○さゝ枕　草枕と同じ、ふしは笹の緣語。

○たてるやいづこ云々　二本松は仲よく立つて居るに拘らず、二人の仲は斷つた意。

○ひとりふしみの　獨り寢と伏見とかけた。人の心の秋風は、戀人の心に秋風が立つて。

○一花染　一度だけ入れて染めた花色の淺い染め方の衣の樣な戀であるから。

○こえ初めし　戀の山を越え初めた。

○長き契りを云々　長き、結び、皆紐の縁語。

○かねてよりゆふ付鳥　前かたから言ふにかけた。木綿付鳥は鷄。函谷關の故事を思ひ寄せたのである。

○むらさきのねはふ云々　紫草の根が這ふ如く、心の底に深く思ひ込んでゐる戀の思ひが、前以てかやうに戀しき獨り寢の夢を結ぶ樣にならうと豫想しようか。

○此のくれ　今日の夕暮。

○關守もうちぬる隙と云々　函谷關の故事。關の番人の寢て居る隙にと、鷄鳴の聲に關が明くに先立つていそぎ別れて來たのであらう

不堪待戀

思へ人またじと思へど夕ぐれはよもぎが露の消えかへる身を

逢戀

つれなさはとけてあふよの下紐に長き契りを結びかへまし

逢不逢戀

あふ事にかへましものをつれなくもいきて命の今はくやしき

初逢戀

かねてよりゆふ付鳥も心せよけふこえ初むるあふさかの關

むらさきのねはふ思ひのかねてしもかけきやこよひ露の手枕

別戀

新枕かはすにつけてとし月のうかりし程をまづぞかたらむ

此のくれをまてとて人の契らずばいかにうからむ今朝のきぬ〴〵

急別戀

關守もうちぬる隙とくだかけの聲より先にいそぎきつらむ

欲別戀

關もりのうちぬる程といそぐにも猶したはるゝきぬ〴〵の袖

曉別戀

ひとりねにまたれし程をおもふにも憂ききぬぐ〱の鳥の初聲

悲離別戀

此のくれをまてともいはぬわかれにていつよりつらきとりの聲々

後朝戀

枕香の殘るも夢か見るほどもなく〱出でしけさのきぬ〲

このくれをまてといひしになぐさめてしばしやつなぐ今朝の玉の緒

朝露のかくては消えむ思ひにて心づよくも起きわかれけり

おきて猶またのゆふべにくらべ見むわかれしけさの袖の涙を

後朝切戀

其のまゝにきえましものを我ながらいかに分けこし道芝の露

立名戀

涙川せくとはすれどわが袖のひまよりしるき人のちぎりは

歎無名戀

おもはずよみるめもからぬ海士の袖たつあだ浪に朽ちはてむとは

見戀

○枕香の　枕の移り香の。たくなくは無くと泣くとかけた。

○朝露の云々　消えた、おきわかれ、皆露の緣語。起き別れけりと置きとかけた。

○またのゆふべ　其の次の夕。

○たつあだ浪に　立つ空しき浮名に喩へた。

○高間の山　大和葛城山の高峯。金剛山の一稱。いつまでも高いにかけた。

○中々うしや　却つて悲しくあるよ。面影は鏡の緣語。

○忘れ水　草がくれに流れて人に忘れられた川。かよひ、影、水の緣語。契りし事も忘られたにかけた。

いつまでも高間の山の峯の雲よそにのみ見て消えかへるらむ

留形見戀

ますかゞみこれもかたみと手にとりて中々うしや殘るおもかげ

逐日增戀

漏らさじときのふは袖につゝみきてけふの涙のやるかたぞなき

見書增戀

一筆のみるに中々なぐさまでいとゞおもひの數ぞそひゆく

被厭戀

戀ひ死なでまたうき數やかさねましいとはれて猶したふ此の身は

見形厭戀

ひとすぢに思ふ心をしれかしな姿は人のよしいとふとも

悔戀

かねてしもかはるは人のこゝろとはおもひしりつゝ何頼みけむ

忘戀

うしや人契りし事も忘れ水かよひしあとは影だにも見ぬ

つすれ草何をにねとておひこけむにはばや人のつらき心を

住よしのきしに我が身はいつなりて人につまれし草の名もうし

難忘戀

いつまでも忘れずしひて忍べとや憂き身にかけし情なるらむ

顯戀

知らるべき我が中としもおもはぬにはやくぞ世にはうき名立ちぬる

臨期變戀

人心かはるもあやしあひみむといひしは今の時のまにして

久戀

今はなどあはれと人のいはざらむ憂きにもたへて年へぬる身を

近戀

にくからぬ詞のふしもかけながらみすの隔てぞつれなかりける

馴戀

いつまでかもらしかねぬるおもひとてなるゝばかりに年のへぬらむ

時々驚戀

此のまゝに絕ゆるちぎりとなりやせむかくをり〳〵に驚かさずは

○住よしのきしに云々　忘れ草は攝津住吉の海岸に產すると古く思はれた。土佐日記「住の江に舟さし寄せよ忘れ草しるしありやと摘みて行くべく」

○詞のふしもかけながら　言葉の一節もやさしく言ひかけながら。ふし、かけながら、皆みすの緣語

○みすのへだて　簾の如き隔て。

○なるゝばかりに　單に親しむだけで。

深夜歸戀

有明の月の光も深きよのひとりつれなくたち歸るらむ

旅　戀

わかれむと思へばうしや露結ぶさゝのひとよのかりの契りも

絶　戀

なほざりのよがれになして恨みけむはやくも人は思ひ絶えしを

絶年戀

たち歸りこえむもしらずとし月をよそにへだてし相坂の關

春　戀

しらせばや野べの枯生も若草の下萌えそむるおもひ有りごと

たのまめや人の心の花櫻ちるをばさそふ風もあるよに

つらからむ心としらば咲く梅のかばかりをだにもらさじものを

夏　戀

つれなさの長き根ざしのあやめ草いつ引き初めてくるしかるらむ

人よしれ忍ぶおもひは空蟬の木がくれてのみ年へぬる身を

秋　戀

○つれなく　連れなくと情强くとかけた。

○ひとよの　一夜と、笹の一節とかけた。

○なほざりのよかれになして　先方で思ひ絶えたのを、唯單に怠つて夜通ふのが絶えたのだと善意に解して居て。

○人の心の花櫻　人の心の移り氣なのとかけた。さそふ風、他の誘ふ女などに譬へた。

○かばかりをだに　梅の香とかけた。もらさじは香の緣語。

○長き根ざし　あやめ草の緣語。根迷深き人の無情さ。引き初めてもあやめの緣語。いつ緣を結びそめて。

は夢い縁語、夢見である。

〇千入　千度も染めた紅。こゝでは血の涙。

〇忘れなで　忘れないで。

〇おもひ草　女郎花、紫苑、露草、龍膽などの異名、枯れ行くと離れ行くとかけた。

〇もとの身ぞうき　衝のまゝの身、生きがひないもとのまゝの身であるのが悲しい。

〇月待つと云々　實は人を待つのであるから僞りと云つた。

おふとみる夢しもあらば秋の夜のながきをさのみ人にかこたじ

秋ふかき秋のした葉にくらべても袖の千入や色まさるらむ

冬戀

忘れなで尾花が本のおもひ草かれ行く中をなど忍ぶらむ

かれ〴〵になりゆく庭の草葉より人の心やあれまさるらむ

寄月戀

ともにみし月はむかしの影ながらあるにかひなきもとの身ぞうき

月待つと人にはいひし僞りもあまり程へてふくる夜のそら

寄星戀

おほ空のみちたる星のかず〳〵をくだく思ひのそれとだにみよ

寄風戀

人こふる夕暮ごとに吹く風は秋ならねども身にぞしみける

人よしれものを思はぬ時だにも身にやはしまぬ秋のゆふかぜ

寄雲戀

へだてける人の心の浮雲はわが袖ぬらすしぐれなりけり

ありて身はうき中空にたつ雲もわかれては又消ゆるならひを

身のはてよ雲となるともよそにのみつれなき人のながめむはうし

寄煙戀

立つやうきなだの鹽屋の夕煙なびかぬ人におもひこがれて

朝夕に鹽やくあまのさともがな我がしたもえのけぶりくらべむ

寄雨戀

人ははやおもひ絕えたる夕暮にあめをさはりと何かこちけむ

うしや又降りくる雨をさはりにて今宵も人やつれなかるらむ

寄山戀

うごきなきいもせの山を我が中にちぎりし人の心ともがな

寄野戀

たのみこし人の心も野となりてわが身うづらの音こそ鳴かるれ

寄杣戀

戀すてふ色には出でじ杣木引くまさきの綱のくるしけれども

寄原戀

なびくとも人の心の淺茅原秋來て色のかはらむもうし

○雲となるとも　死して煙となるとも。

○なだの鹽屋の夕煙云々　攝津武庫郡灘。自分になびかぬと煙のなびく事とかけ、こがれは鹽やくの緣語。

○我がしたもえの云々　我が心中に燃える戀の炎と比較しよう。

○あめをさはりと何かこちけむ　戀人は全く自分を思ひ絕えて居るのを、雨の降つたのに障りで來ないのだなどと、自分は何かこぼしたのであらう、雨などは來ない理由ではないのに。

○いもせの山を云々　大和吉野山中、吉野川を隔てて相對する兩山、妹山背山。

○人の心も野となりて　荒野となつて。

○まさきの綱の　まさきの葛で綯つた綱の如く。繰ると苦しとかけた。

人ごゝろ荒るゝ關やの板びさし時雨も露も袖にもりきぬ

越えやらでくるしきものは逢坂の中にへだつる關路なりけり

寄橋戀

東路のと絶えの橋のわが中にかくともしらで戀ひわたりぬる

寄瀧戀

おもひせく心の瀧は年へても音したてねば人にしられぬ

寄湊戀

しるらめや袖の湊による舟のよる〳〵浪のかゝるおもひを

寄海戀

涙のみ床の海とはあれぬれどまた一たびのみるめだになき

寄浦戀

をふの浦のあふ事なしに年をへてならぬ戀する身こそつらけれ

寄草戀

逢ふことは夏野の薄かりそめのおもひの種やおひしげるらむ

いと早もうつろふものは秋萩のした葉と人の心なりけり

○時雨も露も云々　新古今集卷十七「人住まぬ不破の關屋の板びさし荒れにし後は唯秋の風」

○と絶えの橋　人の仲の絶えるとかけ、かくとも は架くともにかけた。わたるも橋の緣語。

○袖の湊　筑前博多港。よる〳〵は舟の寄ると夜々とかけた、かゝるは袖の緣語。

○かりそめの　薄を刈るとかけた、夏野は無しにかゝる。

寄木戀

うき身よにふるの神杉いつまでかつれなき色の人にみゆらむ

寄松戀

つらしとておもひな捨てそあふ事に浮木の龜のためしもやなき

ゆふべ〳〵訪はれぬもののつらきかな心のまつの色は變らで

寄杉戀

人とはでうき年月を杉の門たてるしるしのかひなかりけり

寄竹戀

呉竹のよごとに人はつれなくて身にうきふしの數ぞそひゆく

寄蔦戀

色かはる中ともしらで蔦かづら長くもがなと何たのみけむ

寄鳥戀

我がおもひかくてはえこそ山鳥の尾上へだつるちぎりだにあれ

鳥の音の聞えぬさとに契るともつひに別れのうさはありなむ

寄獸戀

○ふるの神杉　大和布留神社の杉。世に經るとかけた。

○浮木の龜の云々　法華經に「佛難得値、如優曇波羅華、又如一眼之龜値浮木孔。」莊嚴論に「如盲龜値浮木孔。」

○杉の門　古今集卷十八「我が庵は三輪の山本こひしくはとぶらひ來ませ杉立てる門」

○我がおもひかくてはえこそ　我が戀の思ひは、こんなではとても堪へられない。

○山鳥の尾上へだつる云々　山鳥は雌雄谷を隔て相見て戀ひ鳴くと云ふ。

藻の亂れ朽ちやはてなむ」

○人だのめなる蛛のふるまひ　人に空だのみさせた蛛のふるまひである。衣通姫の歌に據つた。蛛の態度で待ち人の來る前兆と考へる信仰。

○落ち瀧つ云々　水が落ちて激するやうな。

○ますみの鏡云々　思ひの增すにかけた。かけたえては鏡の緣語。

○うらおもて　鏡の緣語。

○かへすもつらし夜半の小衣　古今集卷十二「いとせめてこひしき時はうば玉の夜の衣をかへしてぞきる」

○いかにかへして　何とかして夢にもどしてと、衣をかへすとにかけた。

寄蟲戀

こりずまにまだしと思ふ夕ぐれも人だのめなる蛛のふるまひ

寄玉戀

落ち瀧つよのうき時といひなしてさらば白玉袖に拾はむ

おもひわびぬ今は涙の玉をだに何ぞと人のとふよしもなし

寄鏡戀

思ひのみますみの鏡かけたえてつらくも人は遠ざかり行く

賴まじなつきそふまでもますかゞみうらおもてある人の心は

寄枕戀

よしさらば涙にくちね小夜枕人のかたみとみるもうらめし

人よ知れ別れうかりし草枕それより袖の露もかわかず

寄衣戀

夢なくてあらずなりゆく契りかとかへすもつらし夜半の小衣

うつゝにもつれなき人をさ夜ごろもいかにかへして夢にだにみむ

たいめてもわが戀衣月草のひと花ぞめの色はかひなし

寄筵戀

いつまでか草をかさねてひとりのみしきしのぶべき牀のさ筵

寄弓戀

ものゝふの手にとるま弓いつのまに引きかへしたる心なるらむ

寄筆戀

書きやるも心づくしや水茎のながれてよそにうき名もれなよ

雜部

野風

草の原露吹きはらふ夕風に秋の野もりの袖ぞしをるゝ

薄暮雲

うすくこき花もひとつに墨染のゆふべを見する雲のころもで

雲浮野水

立ちよれば春野の澤の水清み底にも雲のかげぞゆきかふ

遠村煙織

○しきしのぶべき　敷きし延ぶべきと、忍ぶべきにかけた。

○引きかへしたる　弓の縁語、人の心の引き變つた。

○心づくしや　氣骨の折れる事よ。ながれて、もれ、皆水茎の縁語。

○雲のころもで　墨染の縁語。單にたなびく雲。

○いかならむ家居しられて　どんな生活して居るか、家の様子がわかつて。煙のたえだえなのにこゝろし

すむぞともよそには見えじ朝夕のけぶりを拂ふ軒の山風

曉

おどろかす嵐のかねの聲々に此のあかつきの夢もさめけれ

有明の月しづかなる柴の戸にちかき野寺の鐘ぞ聞ゆる

闇の戸の明くる光も程ぞなき枕に鳥の聲ぞ數そふ

曉鷄

事しげきむかしおもへば鳥がねも今身に安き庵のあかつき

曉更鷄

柴の戸の明けがたちかくなりぬとや麓のさとに鳥もなくなり

山

朝夕にむかふもあかぬながめかな都のよものをちこちの山

そことなく手にとるばかりみゆれどもめぐれば山の道やはるけき

山亭人稀

春秋とうつりゆけども住むやまの花も紅葉も人はとひこず

野

○おどろかす、夢を醒ます。

○闇の戸の云々　戸をあくると、夜の明くるとかけた。

えならずよ秋はさが野の草の庵かきねにつゞく蟲の聲々

關

これもまた戸ざさぬ御代のしるしとてよるさへ人にあふ坂の關

殘月越關

夜ふかくもひとりぞこゆるすゞか山木の間の月のもるにまかせて

板びさし荒れこそまされ不破の關月も時雨ももるにまかせて

橋

橋ばしら朽ち殘りしもいつの世と長柄のさとに知る人もなし

旅衣きそぢの橋のあやふさも渡り馴れたる駒ぞなづまぬ

晴後遠水

雨晴れて夕日うつろふ山本に一筋むかふをちの川みづ

山中瀧

うきてたつ雲をなかばのたえまにて千尋をおつる山の瀧つ瀨

瀧水

すみまさる心の友と朝夕に聞けばさわがぬ瀧つせのおと

○戸ざゝぬ御代のしるし　盗人も居ない太平の御代の印。
○もるにまかせて　木の間を月がもれると、守るとにかけた。關の緣語。
○月も時雨ももるにまかせて　月がもれて照らすと、時雨が漏るにかけ、前と同じく守ると云ふ關の緣語を用ゐた。
○きそぢの橋　旅衣を著るにかけた。
○なづまぬ　行き煩はぬ。

○富の緒川　大和生駒郡。

○難波江や蘆のとぼその云々　難波の蘆とかけ、蘆の扉を明くると夜の明くるをかけ、あけぼのの音を繰返して、ほの見えと云つたのである。

なげかじな身をうぢ川の柴舟のしばしばかりの世を渡るとて

いくよゝのふかきめぐみのためしとて富の緒川のながれつきせぬ

海路

けふもまた風まつ程と出でやらでおなじみなとに浮ねをぞする

こよひまたこゝにあかしの泊りぶねうきねのまくら月にからまし

磯巖

かくれてはまたあらはるゝ岩がねに磯うつ浪の高さをぞしる

浦舟

うら風の今や追手になりぬらむ眞帆にかけたる沖の舟人

漁舟連浪

くれ行けばともす火影も遠近に數もしられぬ浦の釣舟

浪風も靜けきほどとしられけり沖に數そふあまの釣ふね

海眺望

沖つふね雲居遙かにみゆれども猶ゆく先やはるけかるらむ

江亭曉望

難波江や蘆のとぼその明けぼのにほの見えそむる淡路しま山

夕眺望

入相のかねより後も立ちいでてさびしきまゝにむかふやまく

谷樵夫

柴人のかよひなれたる道も猶ゆふべやたどる谷くらきかげ

樵路日暮

山賤のつま木の道やくれにけるあすのかせぎも猶やくるしき

古郷路

古さとにありつる松をめにかけてしらぬ野道をたどりてぞ行く

古郷雨

ふるさとと荒れゆく宿をたづぬれば軒のしのぶに春雨ぞ降る

別

諸ともにあすの命を定めねばけふを限りの別れとやせむ

旅

いつしかとすそ野も過ぎてふじのねを都のかたの雲居にぞみる

旅ごろも日数あまたにかさねきて東路遠き程ぞしらるゝ

つれをしる人しもあらばうつの山都につげよけふ越えぬとて

○めにかけて　目につけて、見當にして。

○かさねきて　重ね來てと、著てとかけた。

○うつの山都につげよ云々　伊勢物語及び十六夜日記の宇津の山で知る人に逢ひ、都へ言傳を依頼し[illegible]

○夜をこむる　まだ夜の中である

○牀のやまかぜ　近江鳥籠山、牀を吹く山風にかけた。東關紀行に「都出でて幾日もあらぬ今宵だにかたしきわびぬ床の秋風」

○うつの山　伊勢物語「駿河なる宇津の山邊のうつゝにも夢にも人に逢はぬなりけり」十六夜日記「我が心うつゝともなし宇津の山夢にも遠き昔戀ふとて」

曉旅

都をば鳥の初音に立ち出でてまだ夜をこむる相坂の關

朝旅

朝まだき山路こえゆく旅人の小笠にあまる木々の下つゆ

夕旅

幾重山けふも越えきて草まくら又夕露を袖にかけける

夜旅

月影を松の木の間にともなひてひとりぞこゆる小夜の中山

旅夢

草枕まどろむとしも思はぬにしばしば見えつ古里の夢

風破旅夢

さらぬだに夢は頼まぬ草枕よし吹かばふけ牀のやまかぜ

旅行

うつの山うつゝか夢か分けまよふ心ぞしばしさだめかねぬる

山路旅行

分けゆけば岩角たかし箱根山つかれの駒よいかでこゆべき

旅宿

夢さめておもふもゆめか古さとのはるかになりぬ小よの中山

旅宿雨

さらぬだに草の枕は露けきにいかにせよとかすぐる村雨

原上旅宿

小笹原むすぶ一夜のかり枕露もなみだもしのに亂れて

湊頭旅宿

いかにねて夢もむすばぬ友舟のよるのみなとの波のさわぎに

羇中憶都

旅衣都は鳥の名にだにもしらぬひな路に今はきにけり

羇中衣

故郷をたちて幾日の旅ごろもかたしく袖も露に朽ちぬる

旅泊

夜と共にうきをかたらむ浪枕心をかはす人もこそあれ

山家

のがれこし世を忘れずば山にすむ松のあらしも聞きうからまし

○小よの中山　夜半の意にかけた。

○しのに亂れて　篠に亂れてとしとゞに濡れ亂れてとかけた。

○よるのみなと　夜の湊と友舟の寄るとにかけた。

○都は鳥の名にだにも云々　都の事は鳥の名だけにも知らぬやうな。「伊勢物語」の都鳥の條に據つた。

○故郷をたちて云々　たちては衣の緣語。

○人もこそあれ　人もあつて欲しい。

○柴の戸の云々　柴としばしの音の繰返し。

○にごる心もすみよかりける　濁ると澄むの照應。

○山水のもる音ばかり云々　もるは守ると漏るとかけた。

こゝもまた人のとびこぬ里ならば猶山ふかくおくもとめむ

さびしさの友とこそきけをり／＼の松に音する軒の山風

山家嵐

柴の戸のしばしうかりし山風もなれてぬるよの夢はさまさぬ

山家水

朝夕に山下水の聲聞けばにごる心もすみよかりける

山家鄰

やま風もおなじ軒端に聞きなれてさびしとだにもとはず問はれず

山家人稀

靜かなる柴の庵かな山賤のゆききならでは人かげもみず

山家送年

寂しとも今は思はず幾年をなれこし山のまつ風の聲

田家

山水のもる音ばかり殘りけり秋よりのちの小田のかり庵

しばしまた稻葉吹きこす秋風にひかぬ鳴子をまかせてぞきく

賤が家の門田の稻葉秋かぜに靡くをみれば穗に出でにけり

田家雨

小山田のかりほさびしき雨の夜もたへでや賤が袖ぬらすらむ

田家暮雨

山田もる笹のかり庵のさびしさもいかに堪ふらむ秋の村雨

田家見鶴

刈り上ぐる門田を廣みおり立ちて所得つるやあさる友鶴

江蘆

難波江に潮やみつらむ吹く風の蘆の葉そよぐ音ぞすくなき

苔

おく山の岩ねにおふるこけ筵いくよかさねしみどりなるらむ

橋上苔

打ちわたす谷のかけ橋くちぬれば苔のみ蒸して人も通はず

岸苔

山賤もかよはぬ岸の苔筵かさなるみどり幾世へぬらむ

岡篠

露しげき岡べの小笹分けゆけば拾はぬ玉の袖にみだるゝ

○所得つるや　つるにかけた。適所を得たのか。

○いくよかさねし　重ねしは筵の緣語。

○拾はぬ玉の　露の形容。

○よのうきふし　よ、ふし、皆竹の縁語。世間のいやな事。

○むら〳〵　竹の叢とむら〳〵昇る煙とにかけた。立てるも竹と煙にかけた。

○ちりうせぬ云々　松の縁語。永久に消えぬ言葉の種として。

○浮きたつ　雲のたつと峯のたつとにかけた。

竹

呉竹のなれをわすれぬものならばよのうきふしに何かさはらむ

人しらぬよのかくれがと繁れたゞ身のうきふしの窗の呉竹

里竹

山陵のすむ里ならし麓なる竹のむら〳〵立てるけぶりは

山がつの里の家居もみえぬまで麓にしげる竹の一むら

竹契遐年

幾世々にさかえむ竹はすなほなる言葉の道のためしなるらし

松

神代より久しくふりぬ住吉の松はいかなるねざしなるらむ

住吉のきし根の松はちりうせぬ言葉の種と神や植ゑけむ

峯松

むら雲の浮きたつ峯の松風はそらにしぐれておとぞはげしき

松風入琴

峯高き松吹く風もつま琴のしらべに通ふ音ぞえならぬ

松歴年

動きなきかめの尾山の岩ね松幾世みどりの色ぞふりせぬ

藤氏庸壽の八十賀に松契齡

常磐なる松尾山の神垣にかげをならべて千世も仕へよ

翠松遶家

すむやたれ軒端をめぐる松風もうき世の塵をはらふばかりに

古寺松

法の聲松のあらしのおとそへて聞けば涙のふる寺の庭

瀬戸鳥歸

聞けばまたねぐらあらそふ鳥の聲けふもくれぬる谷の下庵

暮林鳥宿

くれぬるか山陰くらしすむ庵の外面のはやし鳥歸る聲

鶴

子をおもふ蘆べのたづや諸聲に曉かけてやみになくらむ

鳥　鶴

鳥遠くむれゐるつるの毛衣はさながら浪のたつかとぞみる

名にたてる松が浦しま住みなれてちとせかさなる鶴の毛ごろも

○やみになくらむ　子を思ふ情を夜の鶴にと云ふに喩へた。新六帖卷六「子にこもる我が身も知らず夜の鶴心の闇の音こそ鳴かるれ」

○ちとせかさなる　千年も重なる、かさなるは衣の緣語。

○鳴皐　皐は澤地を云ふ。

夜鶴鳴皐

雲居とぶ友やよぶらむあしたづの澤べの月にすめる一聲

鷺

とぶ鷺の山のみどりに顯はれて行く方遠き川のみなかみ

江雨鷺飛

おのが住む入江の蘆にたつ鷺のつばさおもげに過ぐる村さめ

猿

里ちかく出でて木の實やあさるらむ軒端をわたる友猿の聲

曉猿叫峽

山陰の木末のましら澄む水に有明の月をしたひてやなく

嶺林猿叫

夜を寒み峯に木の實の盡きぬとや子を思ふ猿のわびて鳴くらむ

鐘聲何方

住む人のありともみえぬ山の奥にいづくか鐘の聲の聞ゆる

晚鐘何方

分けまよふ山路はそこことしらねどもかすかにひゞく入相のかね

夜燈

よもすがら絶えずかゝげてむかはばやひとりさびしき庵のともし火

見るふみにみぬよの人をともなひてあかずかゝぐる窗のともし火

いにしへの雪をあつめし心にはそむけはてたる窗の燈火

窗燈

あけがたのひまあらはれて閨の中にさながら薄きまどのともし火

述懷

いつまでか身にうき事の歎かれむかりのすみかと思ひしらずば

ゆく〳〵も明日を賴まむ心もて一日々々を安くおくらむ

いつか我此の世の夢のさめ果ててにしの御空の月を仰がむ

獨述懷

何事も學ばぬ身には今更におくれてとふも人に恥かし

述懷依人

うき沈む身のさま〴〵のよの中はさて思ふ事も人にかはれる

道々に心をよせよ皆人のをさまる御代に生まれあひては

寄旅述懷

○みぬよの人をともなひて　徒然草十三段「ひとり燈火のもとに文ひろげて、見ぬ世の人を友とするこそ、こよなう慰むわざなれ。」

○雪をあつめし云々　孫康傳にある孫康の少時雪に映して讀書した故事。

○さながら薄き　そのまゝ光のうすくなる。

○にしの御空の月を　西方淨土の御佛を。

○またくらきよの　悟らぬ世に、暗き夜にかけた。

日數經しひなのわらやの旅ごろも都を夢にみぬ夜半もなし

對鏡悲老

むかひみるかゞみの影に霜雪のつもるはうしや老の年浪

懷舊

過ぎ行くは昨日の夢のこゝちして忍べはおなじ昔なりけり

つく／＼とむかしの事をかぞふれば何よりも猶人ぞ悲しき

懷舊淚

何ごとをさしてそれとはわかねども昔を忍ぶ涙もろさよ

夜淚餘袖

夜は猶こけの袂に露ぞおくうき世の夢の覺めぬ歎きに

夢

さめてこそそれとはしらめ身の程もまだくらきよの曉の夢

さま／＼にうつり替るは心にて思はぬ事も夢に見えぬる

ながきよにみなれし夢をゆめぞとはいつのうつゝに思ひ定めむ

草庵合夢

捨てし世にまたも歸ると見し夢の覺めてうれしき草の戸の中

玄武法師七週忌に嵐驚夢

老いぬるかなれてみしよの夢も今おどろき易き山風のおと

若水居士の三十三回忌修せられしとき

あはれとて苔のしたにも言の葉の露の手向はさぞなうくらむ

ある人の追悼に

もろともになかめし物を春の花秋の紅葉の果てぞはかなき

蓮師の母儀三年の追善行はるゝに讀みて送る安壽「ほどもなく三とせの秋のめぐりきて跡とふ袖やいとゞ露けき」かへし

いとはやもけふは三とせの秋かとてめぐる月日におどろかれぬる

憂喜依人

うれしさもうきも夢なる世の中のまよひに人の思ふさま〴〵

思往事

何事もきのふの夢とおもふまにけふも過ぎぬる入相の鐘

往事催涙

ありし事あまりはかなく過ぎゆけばしのぶるたびに涙落ちけり

神祇

分けてまたむすびぞおかむ石清水もとの光を頼む身なれば

萬代を松に契りて住吉の神や久しき宮居なるらむ

祝

淺からぬめぐみをよもに敷しまの道は盡きせじ萬代までに

久かたの天が下なる國津民うるほふ御代をさぞ仰ぐらし

天が下をさまる御代の時なれば深山のおくも住みよかりけり

寄日祝

出づる日の光あまねき惠みにてあめが下こそ住みよかりけれ

寄國祝

守ります神の惠みの末かけて此の日のもとの國ぞゆたけき

寄社祝

秋津洲は神のまもりの國なればよもに社の數もしられず

寄神祇祝

幾千とせ猶もさかえむ住吉の神のまもれる言の葉の道

社頭祝言

いく千たび花も咲かなむ住吉の松は盡きせぬ神の惠みに

○むすびぞおかむ　石清水の縁語、もとの光をは、石清水八幡を佛菩薩の權現と考へたからである。

○よもに敷しまの道　四方にしくとかけた。

○秋津洲は神のまもりの　元寇の時の伊勢の神風。江談抄に出て居る吉備大臣入唐の折、此の神の守護ありし說話、謠曲白樂天に出て居る此の神が漁翁と現はれて樂天を逐ひ歸した說話等がある。

○住吉の神のまもれる　住吉の神は歌の神の一柱である。

心靜延壽

つく杖のあゆみも老は靜かなる心に千世の坂もこゆべし

釋教

とく法もことばのみちもこゝろを種とふたつやはある

くるしみの海にいつまでたゞよはむかかる御法の舟なかりせば

夜釋教

胸のうちにあらはさばやとおもはずば秋の月見るかひもなからむ

春釋教

わしの山さゝげてしめす花のかは又うへもなき峯の春風

ちる花に世の常なきをさとる身ややがてよし野の奧も尋ねむ

蘆庵菩薩戒の中不殺生戒分受せしと聞きて隨喜の餘りよみて遣はしける

釣の緒のいむなる事の一つらに受けてしづまぬ身ぞ頼もしき

佛

うへもなきすがたにだにも殘さずば佛を末の世にはしらじな

やんごとなき人の三秀院にてかざりおろさせたまふとき申しいれたてまつりける

○とく法もの歌　脱文があるらしい。

○くるしみの海にいつまで云々　此の娑婆世界を苦海と云ふのによつた。御法の舟は衆生を救ふ弘誓の舟。

○秋の月見る　月は眞如の月と稱し、佛の本體に喩へた。

○わしの山云々　釋迦の修行し、說法した印度の靈鷲山。さゝげて示す花の香は拈華微笑の意、釋迦が拈華し迦葉尊者のみ悟了して微笑した佛教の故事。

○菩薩戒　佛道に入る者の受持する戒律。

○釣の緒の云々　釣絲、いむのいは絲の意なのでかけた。受けてしづまぬは浮いて沈まぬにかけた釣の緣語。

○かざりおろさせ　剃髮なさる。

○冷泉入道澄覺　冷泉爲村。
○身のならはしの云々　まだ佛道に入つてからの修行の淺いにかけた。
○うけがたき身　人間に生を享けることは難いといふ佛家の說。
○春霞云々　へだて、たつ皆霞の緣語。春霞の如く。
○すてゝもあさき　悟る心の淺いさ、山の淺いさにかけた。

わするなよ花のかざしもちりの世と捨てし心を末ながき身に

冷泉入道澄覺殿五首の題を出し給ひ蓮師に歌すゝめたまひて

花のかげ心のどかに見るもたゞうき世を捨てししるしなるらし

郭公ほのかにもらす忍びねもかねてねぬよの枕にぞ聞く

身のうさをなぐさめよとやよな〱の淚とひくる袖の月影

來る人の跡をぞいとふさびしさは身のならはしの淺茅生の雪

うけがたき身はうけ得ても說く法にあはずば終にかひやなからむ

澄覺入道殿

うけがたき身をうけ得しも說く法にあふをねがふも唯あみだ佛

ある人の山本の庵といふ事を結び句におきて十首の歌を讀みて贈りければ其の返事に書き付け侍る

春霞よのうき事はへだてなくたつかひもなき山もとの庵

悟り得ぬ心よりうき世の中はすてゝもあさきやまもとのいほ

月花をあるじになしてをり〱は人にとはるゝ山本の庵

山にても猶うき時とほとゝぎすおなじ音やなくやまもとの庵

蔦紅葉かゝれば露に墨染の袖も朽ちそふ山もとの庵

○しばし小倉の　しばし送るにかけた。

○二尊院　山城葛野郡小倉山の麓今天台宗。

○よもの海と云々　四方の海の水を硯の水に用ゐ盡しても。

○かくにかひある云々　貝をかくにかけ、眞砂と共に海の緣語。

○月の輪やま　愛宕山麓。

○芙蓉石　富士山の形をした石。

○まことの姿見にして　眞實の姿と見てと鏡の一稱姿見とをかけた

靜かなる寢ざめにならふ心こそ物にまぎれぬ山本の庵

さびしさを何かいとはむ露の身をしばし小倉のやま本の庵

秋はまたねざめの枕鹿のねの通ふもうれしやま本の庵

世をいとふおなじ心の友ならばをり／＼はとへ山もとのいほ

いつかまたわが身も西に入り果てむめぐる月日の山本の庵

二尊院にて圓かなる硯のめぐりを海にしけるをつくらせ侍りて「よもの海をすゞりの水につくすとも我が思ふほどは書きもやられず」との歌よりおもひよりて四方の海と銘して始めて物書かむとて

よもの海とすゞりをいへば言の葉もかくにかひある眞砂とはしる

月の輪やまの石もて硯に作らせて有明と銘して

みる影も月のわ山の石すゞりげに有明の名さへしたしき

芙蓉石を人の見せしかば

おのづから打ち出でねども田子の浦のみるめを石の姿にぞしる

造りなす物にあらねばふじのねの姿の石は珍らしきかな

わかき女の死骸を見てゐける繪に

朝ごとのかゞみも今は手にとらじこれをまことの姿見にして

豫讓の繪に

ますらをがうらみにかふる唐衣たちてやみにし名さへ朽ちせぬ

雀のあさるゑに

穗をひろふ稻葉がくれの村すゞめおどろき立つに驚かれぬる

竹に菊の花咲きたるに

緣そふ垣ねの竹に咲き添ひて千代をあらそふ秋の白菊

上下のしるしを縫ひつけし衾を

枕とる牀の海なる汐ひがたこゝをあしかる沼となすなよ

蓮師の許へ鶴の井と銘せし神酒を送るとて貞賢「くみてしれその千とせをばつの國のなだのしまたの鶴の井のさけ」ときこえけるかへし

津の國のなにはおもはずうれしきは神のみきとて送る鶴の井

蓮師のもとへ申し入れ侍る安壽「しるべせよ和かのうらわにこぐ舟のたゆたふ波のよるべなき身を」といひおこせける返しにかくなむまうしつかはしける

こぎまよふ歎きはおなじ蜑小舟よるべもしらず和かのうら浪

嵯峨山八景の題をむすびて歌すゝめけるに

○豫讓　晉の豫讓、智伯に寵用せられたが、智伯趙襄子に殺された。其の復讐せんとし果さず、襄子の衣を三度擊つて自殺した。
○たちてやみにし名さへ云々　名を立つこと、衣を斷つことにかけた。
○あしかる云々　蘆刈る、足にかけた。上下を誤つて、枕の方にすべき衾を、さかさまに足の方にするなよと云ふ意。
○なだのしまたの云々　攝津灘の銘酒鶴の井、しまたは島田で醸造主の名と想像される、鶴に田をかけた。
○なにはおもはず　浪速とかけた、何にも外の事は考へず。
○和かのうら云々　歌道をさす、舟、たゆたふ波、よるべ皆緣語、和歌の道を吾身に[illegible]てくれと願ふ意

櫟谷夜雨

幾春もこの谷陰の雨の音を花待つころの旅寢にぞ聞く

やよひ末の五日よし野の花みむとてもとよりもさそはれやすき雲水の身のあすともいはで其の日の午の時ばかりに草庵をたち出でしも花にわりなしや

今朝まではまだしらざりし旅衣花にはかろく思ひたたれて

一木さく花に心のうかれ出てことしは遠く吉野をぞとふ

嵯峨を出ではなるゝほどこゝかしこ山ざくらのやゝ色みゆるもさすがに名殘をしくおもふ

ちらすなよさそふあらしの山櫻よし野の花を見て歸るまで

捨てし身はよし野の花をみにゆくも浮世にとまる心とやおもふ

二十六日雨ふりければ禪師のかたにとゞまりて

みよしのの花には早き旅衣いそぎはたたじ雨もふり出ぬ

伏見城山の桃にしきをさらせるがごとし

雲まよふよし野の櫻おもひやる霞につゞくもゝを見るにも

玉水に宿して

○櫟谷　いちたに。京都嵐山の北面、大井川の南岸上。

○やよひ末の五日　三月二十五日

○花にわりなしや　花故にしかたのない事であるよ。

○思ひたたれて　たつは衣の縁語

○さそふあらしの山櫻　花の散るを誘ふ嵐にかけた。

○浮世にとまる　俗世間に執著する。

○玉水　山城綴喜郡井手村、玉水の井があり町名となつた。

帰るさは盛りなるらし来てみれば色にもいまだ井出の山吹

こゝにきて聞くも珍らし井手の里かりねの枕かはづ鳴くなり

二十九日小泉善鄰寺に投宿

あはれみよやよひもけふは菅原やふしみのくれに霞むやま〳〵

さくらもいまだ咲かざれは

此の山の櫻もいまだ咲かざればなほみよし野の花やまだしき

卯月朔日二階堂の里はづれなる茶店にやすらひこむかうに見ゆるは三輪なりといふかすみにつゞく山々いづれもみえわかず

霞む日はしるしの杉も見えぬなりいづれの峯を三輪とさだめむ

それより道すぢ右にうねび山左に耳なし山天の香具山見ゆこれを大和のみつ山といふよし

郭公みゝなし山の名によりてこゝにやもらすおのがしのび音

けふはよし野へ入る日なればひときは心もうきたちて

けふは又あふ人ごとにみよし野の花はいかにと問ひつゝぞゆく

よしのへゆくむつ田の淀にて

よし野山花のゆききのしげければひまなく渡るよどの船人

○井出の山吹　出でぬにかけた。

○小泉善鄰寺　大和生駒郡、今片桐村。

○菅原や　過ぎるにかけた。

○しるしの杉　前出、古今集卷十八の「杉立てる門」に據つた。

○うねび山左に耳なし山云々　大和の三山、香具山、畝火山、耳梨山の中畝火山が女性で、他の二山が争つた傳說がある、萬葉集卷一中大兄三山之御歌。

○むつ田の淀　大和吉野郡吉野川の川下。六田。

一の坂にかゝる花やゝうつろふころなり

いづくをか限りならましよしの山ゆく／＼つゞく花の下道

御ふねやまにて

こがれゆくみふねの山の花をいま入日のさすにまかせてぞ見る

千本のさくらを

ほかにまたたぐひはあらじ芳野山かゝる千もとの花の盛りは

聞きしよりみまさりするは此の谷のちもとのはなの盛りなりけり

のこさじと花をゆふべに分けゆけば木のまにほそき三日月の影

あすはまた猶分けいらむよしの山けふは千本の花に暮しつ

知足院といふ坊に宿して夢に花のみえければ

よしの山まどろむ夢の程だにも心や花のかげをはなれぬ

吉水院の前より雲居ざくら瀧ざくらはるかに見ゆ

雲とみしむかしの人のことの葉をかけてぞこゝにみよし野の花

いくもとぞ谷ひとすぢに咲きつゞく花はおとせぬ瀧つ白浪

こけ清水はとはで侍る

花ちらば出でむとおもへど苔清水あさき心ととふもはづかし

○御ふねやま　吉野山中の一峯、御舟山。

○こがれゆく　あこがれ行くと、漕がれ行くとかけた。さすは舟の縁語。

○千本のさくら　一目千本と稱する櫻。

○吉水院　大和吉野山中、藏王堂の供僧坊、今吉水神社。

○雲居ざくら　後醍醐天皇御製「ここにても雲居の櫻咲きにけりたゞかりそめの宿と思ふに」

○いくもとぞ云々　幾本か谷一筋に咲きつゞいて。

○苔清水　金峯神社の右四丁、西行法師三年閑庵住の古址と稱せられる、西行の歌「淺くともよしや又汲む人はあらじ苔にこと足る山の井の水」

○あさき心　苔清水の縁語。

○命とおもへば　壽命次第で未來の事はわからぬと思へば。
○下市　大和吉野郡下市村、往昔山中の商業地。
○つぼ坂　大和國高市郡壺阪寺。正しくは南法華寺、眞言宗。

いつのまに風やさそひしきのふ見し千木の花は跡だにもなし
をりよくも昨日はとひし山櫻けふとしとはば花をみましや

山をいづるとて

またこむも命とおもへばよしの山花の雫に袖しをれけり

清き河原を過ぎて下市へ歸りぬるみちにて

ちればかつさそふもはやきよしの川いづくや花のよる瀬なるらむ

内田氏の別業をたづね侍りて

こゝは又瀧のひゞきにおのづから市ともしらぬ市のかくれが

たきは秋の川なり

たきの川岩かきこゆる水の音のかはらですめる宿やひさしき

「此の枝にとめて置きたし郭公」といふあるじの誹諧の句の聞えければ

花ちりしうきをもけふは忘れよとなぐさめてなく山郭公

つぼ坂にかゝり仁王門の花さかりなり此の所の名花なりといふ

雨に猶水をたゝへて咲く花の影もうつれるつぼ坂の庭

今井氏家につきぬいまだ雨やまざりければこゝにとまりて

此の里は天のかぐ山ちかければぬれし衣をほしてゆかまし

橘寺にまうでぬ

いまも猶遠きむかしを忍べとて橘寺の名をとゞめけむ

圓城院といふにいたりてやすみぬけふ初瀨までもゆくべきにあるじの法印こゝはよし野はつせの花の中宿なり一夜明かせとしひてとゞめられければころは初夏時鳥の音も心もとなくて

さくをみる花もなつ山中やどに一聲もらせ山ほとゝぎす

圓城院をいでたち歸るとて

一聲を聞かでぞ明けぬほとゝぎすかたらひ山の名のみなりけり

東坂を下り倉梯村より閑道を過ぐ

歸りみる高ねにかゝる白雲は見すてて出でし櫻なりけり

それより追分といふ所へいで初瀨にまうづ

きてみればけふをはつせの山櫻檜原にまじる色も珍らし

三輪崎を行く高圓山はいづくあたりと人にとへどしかともこたへざりければ

○橘寺　大和高市郡高市村字橘。橘寺は今佛頭山上宮院と云ふ。聖德太子誕生地と云ひ傳へた。

○圓城院　大和添上郡圓成寺か。

○心もとなくて　待ち遠しくて。

○なつ山　花もなしにかけた。

○倉梯村　大和磯城郡多武峯村字倉橋。多武峯の東口。

○三輪崎　紀伊東牟婁郡三輪崎村

○高圓山　大和春日にある山、三笠山に接近して居る。

○柳本　大和磯城郡柳本。

○穴師の山　大和城上郡。卷向山も同所。

○丹波市　大和山邊郡丹波市。石上神社はその東に在る。

○さしのぼる云々　三笠山の緣語

○思ふ事云々　大和物語「吾妹子がねくたれ髪を猿澤の池の玉藻と見るぞかなしき」

朽ちてたふれふしたるあり

世々ふりししるしと今も神垣にくちても殘る二本の杉

そこを過ぎて柳本へかゝる右にみゆるは卷向の穴師の山なりといふ丹波市あり原をすぎて日もくれかゝればおびときといふうまやに宿す十一日奈良へかゝる三笠山より朝日の出づるを見て

さしのぼる三かさの山の朝日影めぐみくもらぬ光とぞ見る

猿澤の池にて

水けぶりひまなくたてばさる澤の池の玉藻は見えずぞありける

春日のやしろにて

たれも皆さしてあふがむ陰しげき三笠の山の神のめぐみを

わか草山にて

めづらしな若草山に所得てゆたかに鹿の遊ぶけしきは

それより木澤へいで玉水をすぐるとて

みよし野の花みて歸る家づとに手折りてゆかむ井出の山吹

其の日は伏見の慶雲庵に投宿して十二日京へ歸るなり

獅子巖和歌集　終

雲錦翁家集

賀茂季鷹

大御國の言葉の道は、千波破神代より今のをつゝに、玉かづら絶ゆる事なく傳へ來て、揖卷も畏き大御代の御稜威と共に、彌榮（いやさか）に榮えにけり。其の調べは時代の移りゆくまに〳〵、姿も心も移ろひ行くこそ、此の道のあやに奇しきさちになむありける。しか移ろひ行く中に、古によきことの今の世に廢れたること少なからず。又いにしへ調はざることの、今のよにとりよろへる事なきにしもあらず。其のけぢめをうまく味はひ、歌によみ盡し給へるは、吾が師賀茂季鷹縣主にはありけれ。大人いと早くより、言はまくもゆゝしき竹の御園生に分けいらせ給ひ、又東の大城のもとに住み給ひては、なにがしくれがしの國しらせ給ふ君を始め、風流の道にこゝろよせし限りを友とし給ひ、中頃かへりのぼらせ給ひては、大神に仕へ給ふものから、暇あれば、石の上ふるき世の書をめかれ給はず、ひたぶるに花紅葉を遊びかたきとし給ひて、隱家に芳野龍田の花紅葉移し植ゑて、雲錦亭と名づけて、見そなはし聞召す事ども、殘る限なくよみ出でさせ給ふを、いとやんごとなき御わたりに、聞召しあげさせ給ひ、天さかる鄙の賤のを、み山の奥の杣人、遠き島の浦々

○ちはやぶる[illegible]　神の枕詞。
○今のをつゝに　今のうつゝと同じ、現今までに。
○玉かづら　絶ゆるの枕詞。
○さちになむありける　和歌の道の徳であるよ。
○とりよろへる　完備せる、完成せる。
○賀茂季鷹　山本氏、雲錦亭と號す。京都上賀茂神社の神宮、從四位下安房守、有栖川職仁親王に和歌を學ぶ。歌人としてより狂歌師として有名だ。天保十三年九月歿年九十一。
○竹の御園生に云々　有栖川一品親王に師事した事。
○東の大城のもとに云々　江戸城の下に。
○中頃かへりのぼらせ云々　季鷹は江戸に在る事數年再び京都に歸り來たこと。
○石の上　いそのかみ、ふるの枕詞。
○めかれ給はず　見離さず、絶えず讀まれ。
○いとやんごとなき御わたり　非常に貴い身分の御方。

に漁りする海士が子等に至るまで、言葉の道びきせさせ給へば、四つの時あした夕にとひまつる人、樛木(つがのき)の彌繼々に絶ゆるまなくして、古も稀なりといふ御齢も、まさきく過させ給ひ、今は八十にさへ近くならせ給ひ、いよゝますます、奈良の小河の水上清く涌き出づるがごと、淀まぬみやびの流れをくむをしへ子のとも、誰かは喜ばざらめや、仰がざらめや。しかはあれど鄙に住むおのがどちは、御歌のはやし、まつばらなるすがたをしも、見盡さざるを、あかぬ餘り、すぎにし年家集撰び給はむ事をねぎ侍りしが、そは際(きは)ことなる御わたりにこそあらめ、おほよそ人は、我が賀茂河のさゞら波、たち歸りて後瀬山のちのもどきを得る中だちぞかしと、許し給はざりしを、しかねぎ侍りしおのれさへ、今は年老いにたれば、今年如月の末參りて、せちにねぎ侍りければ、しかすがにあはれとやおもほしけむ、古き歌袋を二つみつとうでさせ給ひ、これが中なるを、いさゝむら竹いさゝかはと、與へたまふを嬉しみ、懐にして六條わたりの旅やかたに歸り、繰り返し侍れど、住みなれ

○四つの時　春夏秋冬。

○樛木の　つがの木、いやつぎつぎと言はむ序詞。

○古も稀なりといふ御齢　古稀、即ち七十と言ふ老齢。

○まつばらなるすがた　詳細なる姿、季鷹翁の和歌の金聲の趣、はやしにかけ松原とかけた。

○そは際ことなる御わたりに　それは身分の貴いお方などのなさる事であらう。

○たちかへりて後　波の緣語、自分の死後。

○今年如月の末　天保二年二月末日。

○とうでさせ給ひ　とり出でなされ。

○我が山の井の云々　淺い心の自分には。山の井は淺いと云はむ序

失縫に當るから。

○内日さす　都の枕詞。

○長治祐義　播磨の人、賀茂季鷹の門人。

し我が山の井の淺き心には、汲みわけかねつる事どもさはなれど、いた

に月日を經なむも、かつはかしこかれば、とみに寫し了へ侍りて、櫻木にのほししは、その神山の花の雲、紅葉の錦たち重ねたる色をも香をも、内日さす都にさかれる、學びこのはらからの君たちに、とくもらさまほしき餘りになむ。かくいふは天保二年やよひのすゑ

播磨國赤穗の郡山里廼

長　治　祐　義

○くははれる月だに云々　閏の月まで加はつて居るのを、一年にならぬ年内にどうして春が立つのであらう。

○一夜ながらも　一夜でありながら。上は呉竹の縁語。

○みつのはじめ　正月の元旦から三日間を云ふ、月雪花の三つにかけた。

○霰の玉を云々　神の大前を玉しきと形容するから、霰の玉を敷き添へると云つたのだ。

○あえつゝ云々　父上の老いて愈壮健に、松に似た言葉にあやかりつゝ。

○若水を結ぶこと　掬ぶの意。元日に新しき水を汲むのは、年が若やぐと云ふ風習。

雲錦集巻一

春歌

年内立春

くははれる月だにあるを一年にたらずて春のいかで立つらむ

元日

呉竹の一夜ながらも去年といひ今年といへばはるけかりけり

身につむと惜しみし年のきのふには心かはれる今朝の春かな

霞たち梅薫りけり久かたの月雪花のみつのはじめに

春の始め社頭に侍るほど霰の降りけるに

皇神（すめがみ）の御前の春の始めには霰の玉をしきそへてけり

江戸に在りしころ京なる父のもとより初春の文のおくに「あらたなるやどをもとめて豊かなるはるをむかふる心をぞおもふ」と有りしかば

ひとしほの色そふ松の言の葉にあえつゝ千世の春をかぞへむ

若水を結ぶとて

わか水に老も若がへるこゝちして千代の契りを結び添へてき

春從東到

春の來るかたをしらめや相坂の關の杉むら霞みそめずば

春到管絃中

絲竹の名におふ春の庭に來て千代をしらぶる鶯の聲

子日

子の日していはふ二葉の姫小松いづこにこもる千歳なるらむ

窗のうちにやしなふ子等を初春のはつねならでは野邊に見ましや

ねぎごとありける正月九日さわらびにそへて濱田殿の御もとに

雪消えぬ松の木陰に萌えそめて春待つ色を君に見せばや

都霞

もゝしきの大宮人の袖かけて霞む都の山靜かなり

海邊霞

須磨あかし霞こめけり沖津浪たゞこゝもとに音ばかりして

野徑霞

うちわたす遠方人（おちかたびと）を見ずもあらず見もせず霞む春の野べかな

○結び添へてき　契りを結ぶと、若水をむすぶとかけた。

○絲竹の云々　絃樂管樂で音樂の總稱。竹は鶯の緣語。しらぶるは奏する意で絲竹の緣語。

○はつねならでは云々　深窗に養ふ子故、初子の日でなければ、郊外へ出さぬので。

○たゞこゝもとに音はかりして　源氏物語須磨の卷の成句を採つた

○やぶしわかぬ　到らぬ隈のない

○雪のふる巣を　雪の降るこ古巣をかけた。

○枝をわきても　枝々を區別して、即ち隔て無い枝[illegible]いて。

○世はうぐひす　此の世はいやなものと鶯に知らせたいものよ。

春のあした山を望みて

春の夜は明けてし後も山の端にわかれぬ雲や霞なるらむ

霞のうちの瀧をのぞむ

春霞立ちかくせども瀧の音のいやまされるや雪消なるらむ

春日望山

朝日さす愛宕の高嶺雪消えてかへり見すれば霞む大ひえ

やぶしわかぬ春の光に北南霞みそめけり生駒大比叡

野外春望

あしびきの山畑そばのくぬ木原それも春にはもれぬ色かな

鶯出谷

梅が香や谷のと深くさそひけむ雪のふる巣を出づる鶯

雪消えぬたにの古巣を鶯のうち出づる聲も春の初花

南枝暖待鶯

梅がかは枝をわきてもにほひけり鶯さそへ園のはる風

山里にうぐひすなく

春ごとて谷の古巣を出でぬまに世はうぐひすとしらせてしがな

梅近聞鶯

鶯の聲のにほひも梅がかにそへてなきいる丶窗の春風

梅をかざして鶯をきく

折りかざすかしらの雪に鶯もいづれを梅とまどひてや鳴く

東風暖入簾

梅が香も薫りあひつゝ室だきのけむりなびかすをすの春かぜ

初午稲荷まうで

折にあふ馬は麓にのりすててかちゆ分け入る杉の下道

氷解

こほりゐし池の心も春風にうちとけけらし寄するさゞなみ

賭弓

鞆の音も雲居に高く聞ゆなり今や宮人眞弓ひくらむ

春雪のふりけるに

さらにまたふるとはすれどふるとしの雪を殘して消ゆる沫雪

二月雪落衣

春風に散り來る梅の花と見てつゝめば袖に消ゆるしら雪

○かしらの雪云々　頭の白髪と梅の花とまごひて。

○室だきの　室内に香を焚きこめること。

○折にあふ　初午の日だから、時期にうまくあふ馬と云つたのだ。

○池の心　池の中心にかけた。氷が解けると池の心がとけるとかけた。

○鞆の音も　弓弦のあたるのをふせぐ武具。萬葉集巻一元明帝御製「丈夫の鞆の音すなり物部の大臣楯立つらしも」などを思ひ寄せた。

○ふるとしの　舊年と降るとかけた。

○二月雪落衣　和漢朗詠集の成句

○はふり子もおどろくばかり　神に仕ふる巫子も目をさますほど。

○あくるもしらぬ　簾をあくると夜の明くるとかけた。

○枕よりあとより　頭の方からも足の方からも。古今集誹諧歌「枕よりあとより戀のせめ來ればせむ方なみぞ牀中に居る」の成句を採つた。

○ひとくと鳴くも云々　大和物語に「蓬生ひて荒れたる宿を鶯の人來となくや誰とか待たむ」とあるに據つた。

○こてふに似たる　胡蝶と、來いと云ふにかけた。

社頭梅

神垣にねぶり催すはふり子もおどろくばかり薫る梅が香

曉更梅

玉簾あくるもしらぬ枕よりあとよりかをる窗の梅が香

月前梅

うめが香のかをらざりせば窗のうちにまだ影寒き月を入れめや

梅盛

北南枝をわきしはきのふにて西に東に薫る梅が香

梅の花今盛りなり鶯のひとくと鳴くもをりにこそよれ

梅の花盛りに都より人のとひ來れりければ

かくれすむ心もしらで梅が香や遠く都の人さそひけむ

咲きぬとは告げぬものから梅の花こてふに似たる風やふきけむ

水のほとに梅花さけり

行く水にうつろふ岸の梅が枝は浪の花にも香をやかすらむ

山ざとに梅の花ある所

梅がかのかくにはふとも鶯は知らで山路やとく出でにけむ

宮小路三位貞直卿にとめこかしと名におへる梅をまゐらすとて結び付けたりし

とめ來べきやどにしさかば梅の花おしても君を待たましものを

御返し「手折りつる花にこそしれ梅の名のとめこかしてふ君が心を」

妙法院宮に納めてめされて春風先發苑中梅といふ御題を賜はれるに此の宮は古風を好ませ給ひければよみて奉れる

こと木にもにほひをうつせ梅がかを昔にかへす園の春風

田かへす所梅花散れり

春風に散るとも梅の花を根にかへすは惜しき賤が小山田

春曙

忘れめや月も殘りて梅がかの霞に薫る春のあけぼの

吾妻に住みしころ彌生ばかり數子がなりどころにて

一夜寢しゆかりわすれぬ色なれやすみれさく野の春の曙

甲斐國八景のうち、夢山春曙

面影は猶殘りけりこしかたを見し夢山の春のあけぼの

あら田うつところ

○とめこかし　梅樹の名、求め來よかしの意。
○おしても　強ひても。
○妙法院宮　妙法院は京都東郊、天台宗山門の三門跡。寺主は親王門跡とせられ、以來宮家が繼がれた。
○かへすは　返すと耕すとにかけた。
○なりどころ　別莊。
○ゆかりわすれぬ　古今集の「紫の一本故に」の歌より起り、紫をゆかりの色と云ふ。
○夢山春曙　甲斐西山梨郡酒折の北。眺望の佳いので名高い。

○青柳のいとによりてぞ　絲をよるにかけた、弓の縁語。
○くりかへし云々　くりかへし、あやおる、皆絲の縁語。
○初蕨はつかながらも　はつの音の繰返し。
○こゝろざし深き　志深きと深き山路とかけた。
○すきまの風　戸の隙間からもれ來る風。
○しめるに　戸を締めると、濕めるとかけた。

民すらも畔を讓りていにしへの聖の御代にかへす荒小田

柳絲緑新

梓弓はる來る色は青柳のいとによりてぞまづしられける

水邊柳

くりかへし見れどもあかず河水に浪のあやおる青柳のいと

樵路早蕨

歸るさの眞柴を重みやすらふと見れば木陰に手折る早蕨

わらびを折りて人のもとに

初蕨はつかながらもこゝろざし深き山路に手折りてぞ來し

春月

佐保姫の霞の袖につゝみてもにほひこぼるゝ春の夜の月

浦春月

なには潟なぎたる浪に春の夜は霞むや月の光なるらむ

夜春雨

薫り來るすきまの風の梅が香もしめるにしるき夜半のはるさめ

妙法院宮にまゐりてよみて奉れる三首の歌の中に、庵春雨

袖にしも露かけてけり昔しのぶ草のいほりのよはの春雨

春風

さそはずばいかでしらまし芳野山風こそ花のにほひなりけれ

雨中待花

いたづらにそゝぐ野山の春雨を櫻一木に降らせてしかな

春花

麓より花とまがひて分け入りし山のかひなき春の白雲

櫻

うべしこそ櫻は花の君なれや天津霞を衣笠にせり

岡崎の蘆庵をとひて

言の葉の花にも春はあくがれて柴の戸たゝく我なとがめそ

かへし「花をとふ君には見せじ蓬生の霜のふる葉は色わきもなし」

依花客來

花にとふ人を忘れて柴の戸のあるじ顔する我ぞあやなき

むれ來るをあたら櫻のとがとも思ひなされぬ花の色かな

花下逢故人

○昔しのぶ草のいほりの云々 白樂天の詩句「廬山夜雨草庵中」に據つた。清少納言枕草子に出て居る有名な句。

○山のかひなき 山のしるしなきと、峽とをかけた。

○衣笠にせり 萬葉集卷三柿本人麿の歌「久方の天行く月を綱にさし我が大君はきぬがさにせり」を思ひ寄せた。

○色わきもなし云々 蓬生の草庵に住む自分の老いし身には、美しい花の色の區別もない。

○あやなき 分別もない、しようのない語である。

春霞よそに隔てし歳月の恨みも花にのこらざりけり

關花

すまの浦や關路吹きこす春風にこえぬ袂も花ぞ薫れる

山花

櫻花さきそめしよりしら雲もいゆきはゞかるみよし野の山

よしの山花の盛りになりぬめり色かはり行く峯のしら雲

山花盛

嶺ふもと咲きみちぬらしけさ見れば花のかたへのみやま木もなし

花見に芳野にまかりしとき

みよし野のよしや雲とはまがふとも雪となちりそ山ざくらばな

芳野山花散りにけりいざ出でむ世を憂しとしもおもほえぬ身は

うつし植ゑし吉野の櫻の花盛りのころ都人これかれ見に來たりし時よめる

暮れゆかばとまりとまらぬ稀人の心を花にまかせてを見む

家に花の宴しける時山家花の心を人々よめりしに

都人たえずとふべく櫻花散りてもまがへ峯のしら雲

花のころ風のやまひになやみて

○よそに隔てし云々　霞の縁語。

○いゆきはゞかる　行き憚る。雲も美しい櫻に行きはゞかる。

○花のかたへのみやま木もなし　平家物語巻一の「深山木のその梢とも見えざりし櫻は花にあらはれにけり」源三位頼政、などを思ひ寄せたのであらう。

○よしや　みよしのの音の繰返し

○稀人の心を花に云々　日が暮れたら、泊つて行く客、泊つて行かぬ客の心々は、花に任せて主人たる自分は強ひて留めたりしまい、萬事花の魅力に任せよう。

○散りてもまがへ峯のしら雲　花は散つても、都人が絶えず來るやうに、峯の白雲よ、花に見えるやう、峯にかゝれよ。

思ひきや待ちこし庭の花をおきて我が身に風を厭ふべしとは

花見に嵐山にまかりて往昔龜山法皇の植ゑさせ給ひし事をかしこみ奉りて

萬代のたまものなれや龜の尾の山にむかへるやま櫻花

嵐の山の櫻咲くころといふ下句にて人々歌よみしに

都人心を空になしてけりあらしの山のさくらさくころ

小田原侍從殿によみてまゐらせし歌の中に足柄山

あしがらの八重山櫻咲きしよりふじの嶺をだにかへり見もせず

やよひばかり經茂縣主にいざなはれて岩倉の花見にまかりけり家づとに折りし一枝に添へて書博士保考縣主のもとに

思ふどちそこともいはずあくがれし春の山路の家づとぞこれ

かへしせどう歌「玉くしげふたゝびたまふ家づとの花過ぎし日に見しにもまさるにほひなりけり」

雙林寺花月庵に日ぐらし花を見て

くれぬとて歸らむものか名におへる月と花との春の山里

うるはしき八重櫻に添へて同じ寺の崇順法師「ぬしなくてくちぬる軒に

○花をおきて我が身に風を云々　風をいとふ可き花をさし措いて、自分の身に風をいとふ事にならうとは。

○心を空に云々　空は嵐の縁語。

○保考縣主　岡本保考、國學者。賀茂神社の神官、甲斐守從[illegible]權大[illegible]。

○雙林寺　京都東山長樂寺の西南に在る。天台宗。

○歸らむものか　歸るものであらうや。

○かきはやつさぬ　長く住みはてても、垣を變へぬこと、移らぬ花の色にかけた。

○ふつに見え侍らねば　頂戴した歌がたうとう見えませんから。

○しら浪の　歌を言ふ事をさす。近くよりこずは、直の詠詞し

○おぼろけならず　はつきり見える。

○めのうちつけに　卒爾に端的に。

吹きながら花は昔をわすれざりけり」とありしかへし

住みすてしかきはやつさぬ花の色に植ゑけむ人を思ひこそやれ

孝子のもとより花見にまからむの心は有りながらえ出でたたぬなどきこえしかへし櫻の大きなる枝につけて

櫻花ものいはませばかくばかり匂うにとはぬ人や恨みむ

文子がもとより櫻の花折りておこせたるに歌のそはざりければ

あかぬ此の梢をよけて言の葉の花をや風のまづさそひけむ

とかきてやりける折に水江信說名主明倹などかたはらに居合はせて明倹の乞ふまゝに書きてやりたりけるを信說のうばひたるをも知らで歸りてまたの日明倹がもとよりたちかへりて後ふつに見え侍らねばとて「玉くしげふたたび君がことの葉の花をも風の吹きさそひけむ」とあるにまたいひやりける

しら浪のみぎはに近くよりこずばかかることばの花な見ましや

小川有淑始めてとひ來て後「神山の春の霞はつゝめどもおぼろけならず見ゆる花かな」といひおこせしかへし

春さればめのうちつけに神山の雲をも花と見やまがへけむ

志賀山越

櫻ちる志賀の山路は薫る雪にほへる雲をふむこゝちせり

鄰家の櫻のちるを見て

散る花はぬしだにえしもとゞめぬをよそに心をなどくだくらむ

藤花隨風

山風のたゆめばをやむしら雪と見ゆるは花の散るにざりける

橋邊落花

散りうつむまゝのつぎはしつぎて見む花の白雪消えがてにせよ

田かへす所花散りたり

賤のをに似げなき花の衣手を風のきせたる春の小山田

苗代水に花の散りうかべる

水にすむ蛙も花に聲すなり櫻ながるゝ小田のなは代

花ちれる木陰に若かへでのもみぢたるを折りて女のもとにといふ題にて

咲けばかつうつろふ人の花心かへでは色に出でて見せけり

三月の末小野篤雄が山里びたる家居に花もうつろひがたに成りにたれば

けふあす過ぎでなどいひおこせけるに蓑笠取りて行きて終日花を惜しみ

○ぬしだにえしもとゞめぬを　花の主人でも散るのを留め得ぬを。

○散るにぞりける　散るにぞありけるの約。

○つぎて見む云々　つぎ橋の言の縁語。ひき續いて見よう、花の白雪よ、消えにくいやうに、いつまでもあれ。

○水にすむ蛙も花に聲すなり　古今集序の成句「水に住む蛙」に據つた。

○咲けばかつ　咲けばすぐ一方で
○かへでは色に云々　櫻は散つてうつりやすき人心のあだなる事を示し、かへでは紅葉して色の變り易い理を示して居るよ。

てよめる

をやみなく櫻に注ぐ春雨やをしむ涙も添へて降るらむ

柿本影供に花飛如錦といふ心を

散ると見て歸る山路や嵐からまし花の錦を風しきせずば

三月三日

こと問はぬ花のこかげに三千歳の春をくみしるけふの杯

富小路殿の京極の家に三月三日まゐりけるに簾中に琴ひくを聞く

たをやめの聲のしらべも花の名もゝゝのこび有り軒の妻ごと

菅原雪臣が娘の初ひなをいはひて桃の花に添へて

あひに逢ふひなの雛の桃の花もゝちの春をかけて手折りき

川のほとりに山吹さきたるかたに歌よめと十重子がこへるに

うちよする浪の花さへくちなしの色に匂へる岸の山吹

江戸にすみし頃やよひの末二三人かいつれてあすか山わたりに花見に出でたるかへさに金杉といへるわたりのあやしの墻根に山吹のさき亂れたるをこひて家づとに手折りけるに道行く人たちどまりていかで其の一枝えさせよといふにやすき事とてやりけるをこよなく悦びていづこの誰人

○柿本影供　柿本人麿忌日に肖像をかゝげ祭る事。

○花の錦を風しきせずは　拾遺集巻三「朝まだき嵐の山の寒ければ紅葉の錦着ぬ人ぞなき」など思ひ寄せた。

○こと問はぬ花の云々　訪れぬ花の木陰、支那の仙境の聯想。

○三千歳の春を云々　三千年に一度みのり、これを食すれば三千歳の春を保つと云ふ西王母の桃の故事、三月三日に桃酒をくむをさす。

○もゝのこび有り　桃の媚と百の媚とかけた。

○ひなの鄙　鄙と雛とかけた。

○金杉　今東京市下谷根岸と隣接し、一部を上町・下町と稱してゐる。

にかおはすなどいひければよみて遣はしける

たれとしもいかでかいはむ口なしの色ににほへる山吹の花

小濱殿に仕ふる水江信說が庭の山吹見にこよといひしに行きて見て

やまぶきの花色衣きて見れば諾いひしらぬにほひなりけり

雨ふりける日橘千蔭より海棠の花に添へて「降りすさぶ雨もいとはでけふはわがいたくぬれつゝをりし花なり」とて贈りしかへし山吹に結び付けて

君がいたう濡れて折りつと聞くからにゐやはなか〳〵口なしにして

歸雁

いそぐらむ心もしらで月花にかこち馴れたる春の雁がね

妙法院宮にまゐりてよみて奉れる三首の歌の中、春曙雁

花鳥の色音かすめる曙にかへり見もせで雁の行くらむ

暮天歸雁

やよや雁花なき里に住みぬとも見捨てむ空の月の影かは

曉歸雁

花にうき別れ見じとや霞む夜の曙かけて雁は行くらむ

○諾いひしらぬ　なる程言ふ事の出來ぬ。花色衣は古今集の誹諧歌に據つた。

○口なしの色　黃色、いかでかいはむにかゝる。

○ゐやはなか〳〵云々　御禮は却つて口に言へなくつて。

○いそぐらむ心もしらで云々　雁の方では北へ歸りをいそぐ心を、人は知らないで、月につけ、花につけ風を見て歎き馴れて居る。

○やよや雁花なき里に云々　古今集卷一の「春霞立つを見すてて行く雁は花なき里に住みやならへる」などを思ひ寄せた。

〇のどけきものと思ひ知りぬる　古今集の在原業平の歌「春の心はのどけからまし」に據つた。

〇ながれてはやく行く春を　瀧のながれ行く事のはやきと、春のすぎ行くの早いとかけた。

〇まつにかゝれり　人を待つと、松とをかけた。かゝれりは藤の緣語。

〇千世をいづれに云々　松も鶴も何れも千歳を契るものであるから、藤花はどちらにあやからうとするであらう。

〇貴船　山城愛宕郡鞍馬村字貴船貴船[illegible]。

〇ほにあげて　船の緣語、高くあげて。

〇貴船　鳴きて來るにかけた。

遲日

櫻花散りてし後ぞ春の日をのどけきものと思ひ知りぬる

蛙

かはづなく田中の井戸に來て見れば春のあはれは猶殘りけり

春懷

花鳥の色音を置きて梓弓春のおもひのほかにやはある

瀧のほとりの藤

落ちたぎちながれてはやく行く春をせきとめ顔にかゝる藤浪

藤の花を折りて人のもとに

池水の岸の藤なみさきしより我さへ人をまつにかゝれり

池の中島なる松に藤花咲けり鶴もあり

松陰に鶴もあそべば藤の花千世をいづれにあえむとすらむ

やよひのすゑ長門守氏徇の貴船にて郭公聞きつとて「君があたり初音はいかにこの頃は鳴きてきふねの山ほとゝぎす」「すむ山のかひ有りてこそほとゝぎすしのび／＼に初音をもきけ」と有りしかへし二首

世にはまだしらぬ初音をほにあげて鳴くか貴船の山ほとゝぎす

ほとゝぎす聞きつと君が語らずば花のなごりや猶したはまし

三月盡

すがの根の長き春日とたのみしもあはれ胡蝶の夢の一時

夏歌

更衣

山の端も霞の衣ぬぎ捨てつ更ふるはけさの袖ばかりかは

山家に住みける頃人々とひ来てけふは更衣の歌よまむといひしかばよめる

世の人はさもあらばあれ花の香のうせむを時とぬぎかへてまし

眞精法師あるじにて聖神寺にて會せしに當座にころもがへ

ぬぎかへしかとりのきぬは薄けれど春のなごりは隔て果てにき

賀茂の名所をわかちて讀みしとき山森を

山もりの森の下草かりはらひ神垣いはふ卯月なりけり

遅櫻稀

夏山のしげみにあそぶ胡蝶かと見ればおくれてさける一花

○すがの根の　長きの枕詞。
○胡蝶の夢の一時　莊子の胡蝶の夢を引用。
○世の人はさもあらばあれ　世間の人はどうでも、自分は。
○聖神寺　愛宕郡上賀茂、今の上賀茂社前の西。
○當座に　即席の題に。
○かとりのきぬ　固織の約、地を細かに固く織つた絹布の衣服。

文政十年卯月ばかり濱松侍從忠邦朝臣始めて召されし日雨しめやかに降りて新樹のけしきをかしかりしに此の見るけしきをよめとありしかば

きのふかも花にかこちし雨ぞとは誰か若葉の露に見てよし

新　樹

鎌倉殿の庭に橘樹をうゑ給ひけるをりつどひて歌よみ侍りける

水枝さす葉びろくまがし若かへで花にかへても見るべかりけり

千代わけてふみならしませ窗の外に移し植ゑたる橘の陰

卯　花

見し春のなごりも夏の籬とてあなうの花や咲きそめにけむ

卯花繞家

卯の花にうき世隔つる宿ぞとはかつ見るからに過ぎがてぬかも

待郭公

里やわくまたもや出でぬ分け入りて見ばやしのぶの山ほとゝぎす

ほとゝぎす聞きつといふ人のあれば

人をわく初音と思へばいとゞしく恨みかさなるやま郭公

人傳霍公鳥

○濱松侍從忠邦　水野越前守忠邦、遠江濱松の藩主。

○誰か若葉の　誰かわかたむにかけた。

○水枝さす葉びろくまがし　みづ／＼しい若葉が生へ出るくまがしや若楓。くまがしはくろがし(樫)の異名、又はその實樫。

○ふみならしませ　文習ひませと踏みならすとかけた。

○見し春のなごりも云々　夏となしと、あな憂と卯の花とかけた。

○里やわく　里を區別するのか。里で鳴かず、ここできゝ、山では鳴くと云ふ風に。

○恨みかさなる　恨みの重なると、山の重なるとかけた。

ひとつてはかひなきものゝ子規待つたのみには成るべかりけり

聞郭公

かへり來むほどに雲居の遠方に聞きていなばの山郭公

獨聞郭公

ほとゝぎすおきゐて獨り聞くぞともしらでや洩らすよはの忍び音

栽苗聞郭公

さなへとる賤も田うたを一聲にとゞめて聞くや山ほとゝぎす

曉更杜鵑

曉の枕の山の一聲も老はたどらで聞くほとゝぎす

舟の中にて時鳥をきく

一聲の行くへやいづこほとゝぎす舟さす棹のさしてをしへよ

社頭郭公

片岡の森の梢に鳴きすてて神山遠くゆくほとゝぎす

家の會に郭公遍

里わかずをちかへる頃は時鳥老の耳にも聞きはもらさず

耳うとく成りてのち時鳥聞きしといふ人に

○待つたのみには云々　待つ心だのみにはなりさうであるよ。

○いなばの山郭公　聞きて往なむと因幡とかけた。

○老はたどらで　老人は眼ざといから辿らないで直ぐ聞く意、たどりは山にかけた。

○さしてをしへよ　棹さすと指すとかけた。

○片岡の森　山城愛宕郡賀茂山の一名、上賀茂社の東。

○をちかへる頃は　再び引き返し來る時は。

耳なしの名におふ老は郭公きゝつと聞くぞ初音なりける

郭公幽

老いらくの耳にはいとゞおぼめくをしらでや過ぎし山ほとゝぎす

葵露

露結ぶかりねの野べの葵草あすやかざしの玉と見るらむ

みあれにまうでける日

山賤のおどろの髪も神祭るをりに葵はとりかざしけり

祭日葵をかざすとて

神山に生ふる葵の二葉よりかざしなれつゝまつるけふかな

直兄縣主がり葵を乞ひにやるとて

神山におなじねざしの二葉草わがもの顔にこひにこそやれ

かへし「みあれの一つねざしのふた葉草わが垣根こそ君が園なれ」

車にのれる人賀茂にまうづ

ちはやぶる神の惠みにあふひとて道もさりあへずつゞく小車

日野一位資枝卿にかざしの料の葵をまゐらすとて

神祭るをりにあふひの二葉よりかけてわすれぬしるしとをみよ

○初音なりける　時鳥の初音と初めて聞いた事とかけた。

○おぼめくを　ぼんやりして居るのを。

○あすやかざしの云々　葵は賀茂の祭禮に冠につけてかざすから、露もそのかざしの玉と見えるであらう。

○神山に生ふる葵の二葉より　神山に生じた葵の如く、幼年時代から神官の家に產れた私は。

○直兄　松田直兄、藤園と號す。賀茂の神官、正四位下伊豫守、寛政元年出生、年七十二。

○おなじねざしの云々　同じ神官の家に產れたのである。

○みあれ　賀茂の祭ある時。

○あふひとて　葵と逢ふ日とかけた。

○日野一位資枝卿　京都の歌人、烏丸光榮の門、明和頃の人。

○かけて　葵をかけてと、心にかけてと。

御かへし「おくりこし其のかみ山のあふひこそいくよかかれぬかざしとはせめ」

祭日富小路殿とひ來給ひ「神山やあふひは草の名のみかはとぶらひよりしかひも有りけり」とのたまふ御かへし

あふひ草かけてしいへば神祭る卯月ならではとはじとやする

五月雨

しげりあふ軒のしのぶのさみだれもかぎりしられぬ雲の立ちまひ

駒くらべ

遲くとく足掻きもあれどかつはのる人の心の駒くらべなる

くらべ馬に乘りて家を出で行くかた

乘る人の心の駒もしづめてぞ埒の内には入るべかりける

續命縷の絲に

長きよのためしにひかむ藥玉のいつゝの絲も池のあやめも

菖蒲不育流所

はしきらぬ聖の御代のふるごとも今日の軒端の菖蒲にぞしる

山田早苗

○軒のしのぶのさみだれも云々　軒の忍草の亂れて、五月雨のかぎり知られぬ雨降る如く、かぎり知られず涌き立つ雲の動く樣ふ。

○人の心の駒　佛語の意馬をさつた。

○續命縷　藥玉の漢名、五月端午に藥草を包んでさげ、疫病よけの禁厭とする。

○いつゝの絲も池のあやめも　藥玉の五色の房も、池の菖蒲の根も長いから、長い世の例に引かう。

○ひかむは菖蒲の緣語。

○はしきらぬ　永久に續く。終りを限らぬ。

縄朽ちし去年の鹿垣結ひそへて早苗となり賤が小山田

早苗うゑわたしたる所そほづ立てり

をとめ子がいかにかけけるこひぢより袂そほづの身とは成りけむ

螢

水くらき岩垣沼のいはねどもしるき思ひに飛ぶ螢かな

水上螢

池水の玉藻に遊ぶいろくづも驚くばかり螢とぶかげ

夏の夜は火に入るむしもあるものを池水さして飛ぶ螢かな

螢過窗

てらしてもかひなき窗とよひ〱に見てや螢のあだに過ぐらむ

たをや女の扇もて螢をおふ所

少女子が扇の風に靡きつゝなか〱高く行くほたるかな

鵜川螢

鵜舟さす瀬々の螢もかゞり火も闇をよよしと照らす山陰

水鶏

誰が門をさして水鶏のたゝくらむあくるはやすき夏の夜の空

○鹿垣　鹿の田畑をあらすのを防ぐ垣根。

○そほづ　山田の僧都、案山子。袂ぬらすと僧都とをかけた。

○いろくづ　魚族。

○てらしても云々　窗を照らしてもそのかひがないと。車胤が螢を集めて書を讀んだ故事によせた歌

○なか〱高く　却つて高く。

○闇をよよし　闇夜を折善し。

○あくるはやすき云々　門をあくると、夜の明くるとかけた。さしてと門の錠をさすと、指してをかけた。

○させばなりけり　戸をさすと月光のさすとをかけた。

○ゆりの名にしおはなむ　百合と許すとかけた。一本位は名の通りに折つても許すであらう。

○松に一聲の秋　和漢朗詠集の成句「松有一聲秋。」
○源躬弦　宍田躬弦。號老、一庭と號す。季鷹門下の歌人。文化十三年正月五日歿。
○あゆひ　脚結、あゆの音の繰返し。

月前水鶏

終夜(よもすがら)たゝく水鶏は柴の戸に月おもしろくさせばなりけり

瞿麥

きのふまで見ざりし花も咲きそひて錦あらそふまセの撫子

百合の花の咲きたるをやごとなき御方より見せ給ひて歌をこはせ給ふに

あめにほふ色もえならず一本は折るともゆりの名にしおはなむ

甲蚊遣火

あまのすむ里のしるべの夕煙なほ立ちそふや蚊遣なるらむ

納涼

いかに堪へいかにしのがむ夏の日の暮れても同じ暑さなりせば

湖納涼

志賀の浦やひと木の松に一聲の秋おもほえてよするしら浪

橘千蔭源躬弦などかいつれて玉川に河逍遥しける日

年魚(あゆ)つるとあゆひぬらして玉河の瀬々におり立ち此の日くらしつ

賀茂河をせき入れてすゞむところ

世にしらぬ秋おもほゆる袂かな風もながれを尋ねてや吹く

○竹のよかぜ　節と夜風とをかけた。

○あやしき嶺　雲の姿をかく云つた。

○夏のよはとしもなし　過去の出来事や澤山夢みたことを考へれば、短い夏の夜とは、とても思はれない。

○手にとる　結びの縁語。

○むかもゝにひぢかきよせて　祝詞祈年祭の「向股爾泥畫寄氏」を採つた。両股に泥をすりつけて。

[illegible]いふことを題にて

吹き入る丶竹のよかぜの涼しさに枕もとらずねぶる文案(ふづくゑ)

夏臥北窗風枕席如涼秋

夢さむる手枕すゞしふづくゑの塵吹き拂ふまどの夕風

夏雲多奇峯

花とのみまがひし山のしら雲も夏はあやしき嶺をなしけり

夏夢

過ぎきつることをあまたに見し夢を思へば夏のよはとしもなし

泉

風かよふ松が根しみづ結びては秋を手にとるこゝちこそすれ

新雨歌とて奉りける

むかもゝにひぢかきよせて植ゑし田のつちもさくるを見そなはせ神

姫路の兒島政秀よりせうそこのついでに「名に高き賀茂の川原の夕暮は思ひやるさへ涼しかりけり」といひおこせしかへし

夏しらぬ賀茂の河なみ玉ならばつゝみて君におくりてましを

夏月

見るほどは露のまながら堪へわびしひるのなごりもなつのよの月

外山夏月

まかで見る光も涼し玉だれのをすのとやまの夏の夜の月

夏月あかき夜笛をきく

秋風やまづしらぶらむ夏の夜の月にすみゆく笛竹の聲

夏月透竹

綠そふ簾の竹のしげみより風の見せたる月の涼しさ

窗前竹

夏の日の陰と植ゑてし窗の外に涼しくそよぐ竹の夕風

樹陰蟬

うつせみのはにおく露もかつ散りてしのび〳〵に秋風ぞ吹く

夏草

花さかむ秋やゝ近し今しばしはらはで見ばや庭の夏草

はしたて見にまかりし時與謝の海に船うけてすゞみしに

夏知らぬしほの八百路の夕風は早秋津姫の袖よりや吹く

○見るほどは云々　月を眺める間は。晝の名殘もないと夏とかけた。

○まかで見る　簾を卷き上げないで見る。

○早秋津姫　單に早秋を支配する秋の女神の意。立田姫であらう。

○なごむらむ　やはらぐであらう

[illegible]そそきして歸るらの眞祓のみかは

五月雨なすあらぶる神もなごむらむみそぎする瀬の浪靜かなり

○やがてよそにはなさぬ袖かな　間もなく我が袖の上にも吹くよ。
○けぢめたるらむ　境であらう。

○よそに過ぎめや　秋風に吹かれて招かなくとも、初尾花が穂に出た美しい野邊を、よそにして素通りしようや。尾花の戰ぐのを袖で招くと考へるのは歌の常套。

雲錦集巻二

秋歌

社頭立秋

きのふだに夏をわすれてみそぎせしならの小河に秋は來にけり

初秋風

吹きそむる萩の上葉の秋の風やがてよそにはなさぬ袖かな

夏衣薄しと知るやきのふ今日秋立つ風のけぢめなるらむ

新秋夕露

夜ごろへてひかりそふべき月影をやどし初めたる草の上の露

初秋薄

秋風にまねかずとても初尾花穂に出でし野べをよそに過ぎめや

殘暑

きのふけふ露は草葉に結べども馴れし扇はおくべくもなし

く早く年が經過せよと。

○人やりならぬ　人任せではない、切實だ。

○逢ふ事のかたのに云々　逢ふ事の難いと、交野とかけた、天の川交野と共に河内北河内郡。

○ほだしなるらむ　引きつけられる物であらう。

○年ごとに　毎年絶えぬものではあるが、たゞ一夜とは口惜しい逢瀬とあるよ。烏鵲のかけた橋に依つて兩星が逢ふと云ふ傳說。

○はねかはす契りに　比翼を以て男女の契り深いに喩へた烏鵲の緣語で、白樂天の長恨歌にある成句。

○庚申　此の夜男女逢へば盜人の子が產れると云ふ俗諺がある。

棚機は[illegible]

契りけむ昔の秋はたなばたの人やりならぬ恨みとぞしる

野外七夕

たなばたやかげうつすらむ逢ふ事のかたのにつゞく天の川づら

近衞殿七夕御會に星河秋興

月の船紅葉の橋やたなばたの急ぐあふ瀬のほだしなるらむ

勝延がり人々集ひて古今集の七夕の歌の初句をわかちてよみけるに、年ごとに

としごとに絶えぬ物から一夜とはくやしくかけしかさゝぎの橋

烏鵲成橋

はねかはす契りに星もあえむとてわたしや初めし鵲のはし

たなばた祭する所空を見る人有り

棚機に心をさへやかしにけむ今日の暮るゝは立ちまたれつゝ

七夕庚申にあたりければ

逢瀬をばいむてふ夜はと去年の秋思ひかけきや天の川浪

吾妻を出で立ちけるをりうまのはなむけに川越滿祐が根こじて贈りし薄

を庭に植ゑおきしを穂に出でたるころ便りにつけていひ遣りける

故郷をなれもしのばば花薄たえずをまねけ人もとふがに

朝　萩

おき出でて待ちとる袖の涼しさもきのふにかはる萩の秋風

江上荻

誰が夢路おどろかすらむ舟つなぐ入江の荻のよはの秋風

朝　顔

あさがほは色のちぐさに匂へども瑠璃こそことにめでたかりけれ

庭萩盛

枝たわにほころびぬればしら露も結びかねたる庭の秋はぎ

閑庭薄

とはれぬを心とすめる庵ぞともしらでやまねく庭のを薄

蘭

秋の野に紐ときそめし藤袴尾花が袖に香をばかさなむ

野女郎花

○人もとふがに　人も訪れるやうに。

○枝たわに　枝もたわむ程に。
○結びかねたる　ほころびぬれはの縁語。

○とはれぬを云々　人に訪はれぬのを本意として。

○紐ときそめし藤袴　開きそめしひもとくは袴の縁語、袖も同じ縁語。

○あだの大野にうへもおひけり　風次第に靡く仇心の女郎花は、成程、あだし野に生えたのも道理千

○もゝ草の云々　百と千との對照、結べるとわくるの對照。又わくるは野邊の縁語。

○根深く掘りし云々　根深く掘りて移し植ゑし秋草に、蟲までついて來り鳴く樣である。

○錦のとこしめて　錦の牀に所を占むる榮華なのに、何を憂しとて鶉がなくのであらう。

○鳥狩はすとも　鷹狩はするとも

○子の時ばかり　午後十二時頃。

○つとめて　翌朝早く。

もゝ草の花に結べる露ならで心をちゞにわくる野邊かな

栽草花

秋の野の蟲の音さへに添へてけり根深く掘りし眞萩葛はな

秋草に鶉あるかた

百草の花の錦のとこしめて何をうづらの音には鳴くらむ

小鷹狩

宮人の入野の薄まはぎ原鳥狩はすとも花なちらしそ

秋夕雨

心なく降り來る雨か月待てばかつはまぎるゝあきの夕に

秋曉

秋よたゞ夕は物にまぎれても手枕しめる曉のそら

橘千蔭の家刀自本子の望みにて女友だちこれかれ集ひて源氏物語を講じける頃七月二十四日夜例のごと彼の家にて鈴むしの巻を講じはてければ月待ちて歸りねとせちにとゞめられて子の時ばかり待ち出でし夜のさまいとおもしろかりければつとめて

みやびたる君しとめずば二十日餘りよふかき月の影を見ましや

といひやりければかへし千蔭「きぞの夜の月にあかずて二十日餘りいつかきますと待たれもぞする」

機織

女郎花おほかる野邊に夕されば機おる蟲の聲しきるなり

三條わたりに住みける頃庭の草たから茂りたるを常に來る人ごとにあなむつかし都のうちとてもかく草深くては蛇などの恐れも侍ればなどいふをしらぬ顔にて所得させたりしは秋さらば蟲の音きかむ下心あればなりけりさて其のころにもなりければみあれ野わたりにて松蟲鈴むしなど取らせたるをもてきて彼のくさむらにはなちたりしに所かはれりとは思ひたるけもなくてしきりに鳴くをこゝに集へる人々草はらひ給はざりし心を今こそはなどかたらひつゝ聞きはやすころしも南鄰の家もる翁ゆくりなく來りて餘りに草茂りて柱根も朽ち侍りぬべければ明日たむ人おこせてはらはせ侍りなむといへりければ

花もなき庭の草葉はさもあらばあれかれなむ蟲の聲をしぞ思ふ

○きぞの夜の　昨夜の。

○あなむつかし　あゝ氣味が惡い

○秋さらば　秋しあらば、秋になつたらば。

○みあれ野　賀茂神社附近の野。

○草はらひ給はざりし心を今こそは云々　夏、草を刈り拂ひなさらなかつたお心が秋の今になつて始めてわかりましたなどゝ。

○家もる翁　家の番する老人。家主。

○花もなき庭の草葉は云々　花もない庭の草は、どうでもかまはぬが。かれなむは、枯れると蟲の聲

若狹に下りける時細川といふわたりにて晝鹿の鳴きければ

いとせめてつまや戀しき秋山にくるゝもまたぬさをしかの聲

甲斐權守に侍りしころ貴船社のとのゐ所に侍りて鹿のなくを聞きて

友とたのむなれも我が名をよび顔にかひよと鹿の聲ぞ聞ゆる

またの夜犬のいたくなきしがあやしさに朝とく出でて見れば後園に作りし大根の葉をみながらくひはてたる此のわたりの人にとへば鹿のしわざなりといへりければ

つまこひにあはれと思ひしさを鹿もけさはたにくしいかにかもせむ

放生會

石清水いはねばこそあれ月影にひれふるいをや惠み知るらむ

縫子が家の會に三日月

秋なれや雲のはたてにほのめくもひかりことなる三日月のかげ

十五夜月を見て

月は秋あきはこよひとめでそめし心もしるくすめる空かな

たぐひなき光を四方に敷島や倭しまねの秋の夜の月

○いとせめて　非常に適切に。

○かひよと鹿の　甲斐と鹿の鳴聲を聞いたのである。

○放生會　毎年八月十五日に行はる、八幡宮の祭典。

○いはねばこそあれ　石清水の緣語、魚はもの言へぬから默つて居るが。

○雲のはたて　旗の如くなびく雲

○四方に敷島や　光を四方に布くをかけた。

仙臺殿の京なる館にて十五夜人々歌よみけるに逢隈川の月を

たれもかく曇らぬ御代にあふ隈の川のなみゐてめづる月影

千蔭が家に人々集ひて歌よみけるに月のまへにふみ見るといふ題にて

よみとかぬふみをば月のくまにして心にうかぶ世々のふるごと

駒迎

相坂の關の清水に名にしおふ月毛の駒のかげも見えけり

十六夜月

きのふをば空かぞへかとたどるまで影すみ渡る十六夜のつき

きぞのよを最中こよひをいざよひと月の光に誰かわくべき

山月

駿河なるふじのねかけてすむ月を武藏野の原に出でてみるかな

深山曉月

ながめつゝ我が世もいたく更けにけり身をおく山の有明の月

閑居月

露の身をおくばかりなる草の庵に宿かる月の影の靜けさ

○仙臺殿の云々　伊達侯。
○逢隈川　逢ふにかけた。並みと波にかけた。陸前宮城野を流れる川。
○月毛の駒　紀貫之の歌「逢坂の關の清水に影見えて今や曳くらむ望月の駒」など思ひ寄せた。
○きぞのよを云々　昨夜の月を十五夜と云ひ、今夜の月を十六夜と分けても、月の光で、誰が區別できよう。
○我が世もいたく更けにけり　自分も非常に老いた。夜とをかけた。
○身をおく山　身を置くと奥とかけた。身をおくは住む意。

[illegible]して却つて月は澄みまさつたといふ意。

〇山の端はよしにげぬとも　在原業平の歌「山の端にげて入れずもあらなむ」に據つた。

〇すくなみ神ぞ恨めしき　少名御神は少名毘古那の神と同じ。大穴牟遲神と共に、國土を作り堅められた神である。それで山の作り方に對し恨めしいと云ふの[illegible]。

〇月の入るさの山高くして　月の入るにかけた。入るさ山は但馬國出石郡入佐山。

〇こゝの[illegible]に馴れしかど　多くの秋に[illegible]。

〇いやますく\に澄める月かな　ます〳〵はます鏡の音の繰返し、[illegible]

月欲入

山の端はよしにげぬともいかにせむしのゝめ近き秋の夜の月

つくりけむすくなみ神ぞ恨めしき月の入るさの山高くして

月出山

なごりなく雲霧はれし山の端は月も心や澄みのぼるらむ

月前風

はげしかれ月には雲ぞうかりける初瀨の山のよはの秋風

月前鴈

櫻花見すてし春の心をば月にみよとや渡る鴈がね

月前薄

むさし野の尾花をやどに植ゑしかば月見む秋も限りしられし

月多秋友

友と見てこゝらの秋に馴れしかどおもかはりせぬ月のかげかな

社のほとりに月を見る

榊葉にかけし神代のますかゞみいやますく\に澄める月かな

武藏野に月出でし所

いたつらにまねくと見てしむさし野の雄花がすゑに出づる月影

遣水に月のてるを見て

せき入れて心ひとつを遣水に月さへすめる秋のよな〳〵

海邊月

よさの海や松吹く風に霧はれて月すみ渡る天の橋立

廣澤池眺望

廣澤の池の底なる玉藻にも光かしたる秋の夜の月

廣澤の月見むとてこれかれともなひ釣殿にめでゐたるにそこあけよと家あるじしていはするは大覺寺殿の御うち人なるべし其のこたへはさでかくよみて遣はしける

かくばかりをしと思ふ夜の月影をあけよと人のいふがあやなき

さて月いさゝかかたぶきぬれば嵐山あたりに行きてみむとてそこをたつに鹿の鳴きければ

いざよひのいざとて月に分け來つるかひよとや鳴く嶺のさをしか

北邊大臣のいにしへ住みたまひしあとに家居せる富士谷御杖がもとより

○心ひとつを遣水に　自分の心だけを慰めるにかけた。遣水は池より流しやる水、泉水。

○大覺寺殿　山城葛野郡嵯峨村廣澤池の西にある大覺寺の御門跡の事である。

○あけよと人の　月影を絶けよと釣殿を開けよと掛けた。

○北邊大臣　北邊左大臣源信を云ふ。嵯峨帝の皇子貞觀十年薨、年五十一。後集撰の作者。

○富士谷御杖　初名は成元成壽、通稱源吉又專右衞門、北邊と號す、成章の子、文政六年十二月歿、年五十六。

消息のおくに「水上はいかにかすむと賀茂河の月見るたびにゆく心かな」

と有りしかへし

山かげの友を尋ねしふるごとを月にたのみて夜ごろへにけり

九月ばかり富小路殿にて連歌有りけるをりしも軒近き栗の落ちしをひろふとて

言の葉の花にいとはぬ夕嵐待ちえてひろふ夜のおち栗

難波にて村井時雍にいざなはれて舟にて十三夜月を見しに昔丹後のことうらに澄む月は見るともとよみしより巽浦の丹後とよばれしことを思ひ出でて

とく歸りみやこの人に十日餘りみつとかたらむ浪華江の月

九月十三夜丹波に下りて月を見て

入るをのみかこち馴れにしたには路の山のこなたに月を見るかな

暮秋月

入りぬべき山方なし共いかにせむながつきの月の有明のころ

旅人砧うつを聞きたる

衣うつ夜さむの里の秋風はかたしく袖をよきて吹かなむ

○山かげの友を尋ねし云々　在原業平が、小野に惟喬親王を尋ねた故事をさすのであらう。伊勢物語及び古今集。

○言の葉の花にいとはぬ夕嵐　木の花には嵐をいとふが、詞の花は散らぬものだからいとはぬ意。

○十日餘りみつとかたらむ　十三夜の月を見たと語らう。みつは三津、又は御津、攝津の海岸の名。三つ、見つとかけた。

○たには路云々　丹波路。京より西に當るので、京で西に沈む月は丹波の山にかくれるのを、歎ち馴れて居る。

擣衣何方

いづことも聞きこそわかね秋風の吹きたゞよはす夜半の砧は

月下擣衣

おのがおもひ千里の外にひゞけとてうつか砧の月にすむ聲

賤がうつあさのさごろも月故にいをねぬよはをかさねてぞ聞く

名所擣衣

秋しのや外山の月を夜よしともおもはで賤や衣うつらむ

九月ばかり成壽に必ずと契りたりしをさはる事ありとて「山里ははやくしぐると聞くなれば梢のみこそ思ひやらるれ」といひおこせけるかへり

菊紅葉を折りて

下もみぢ染めて待つらし山里に君がこずゑと聞くがあやなき

日野資枝卿に櫨のもみぢたるにそへて

もみぢ葉は是れをやはじめ秋山のやま口しるき色をみせばや

御返し「心ざし深き根こじの櫨紅葉げに賀茂山の秋をこそしれ」

妙法院宮にて紅葉交松といふ御題を賜はりしに

千歳へむ松のみどりに時のまの色をあらそふきゞのもみぢ葉

○いをねぬよはを云々　眠れない夜半を重ねて、度々砧を聞く。かさねてはさごろもの緣語。

○秋しのや　大和生駒郡（元添下郡）平城村。舊名秋篠。

○君がこずゑと　君が來ずにかけた。

○是れをやはじめ　初めと櫨とかけた。

○根こじの　根と共に掘りとつた

紅葉多かる山に月すめり

もみぢ葉を夜の錦になさじとや尾上に高く月も澄むらむ

高雄山の紅葉はいかで古人の見殘しけむと年頃思ひわたりしに鄰女集にはやくよみ置き給ひしを見出でしは千入よりげに身にしみて珍らしくおぼえて

ふりおけぬ言葉の露に一入の色そへて見る木々のもみぢ葉

紅葉の宴しける日風吹きければ

山かぜもけふはいとはじもみぢ葉の錦を人にきせてかへさむ

河渡らむとする人の紅葉散るを見て駒をひかへてたてる所

水かふとよそにやみらむもみぢ葉をふままくをしみとめし我が駒

山水に紅葉散りてながるゝ所

嶺つゞき染めしもしほのもみぢ葉をひとつに見する谷川の水

紅葉淺深

薄くこき木々のもみぢはさだめなきしぐれの雨や染め渡しけむ

家の紅葉盛りなるころ人々をつどへて歌よみしとき山家秋興

菊紅葉折りかざしつゝかへさには眞袖に拾へ庭の落葉

○夜の錦になさじとや云々　前漢書の「富貴不歸故鄕、如衣繡夜行。」から來た。古今集卷五「見る人もなくて散りぬる奧山の紅葉は夜の錦なりけり」を思ひ寄せた。○鄰女集　鄰女和歌集、四卷、飛鳥井雅有の家集。

○よそにやみらむ　わき目では見るであらう。

○さだめなきしぐれの雨　いつ降るとも定まらぬ時雨と、色の濃淡の定まらぬにかけた。

紅葉多かる山路行く人あり

錦もてつゝむに似たり秋山を分け行く人は玉ならなくに

水邊菊

秋ごとに千世の契りを結ぶ手の雫も薫る菊のした水

菊の花さける山路ゆく

行きやらで千歳やへまし菊の花にほふ山路の秋のたび人

月前菊

月影をおきまどはせる霜かとてはらへば薫る露の白菊

菊の造花に添へて遣はすとて

仙人のめでてふ菊の花なれば秋は過ぐともうつろはめやも

菊のかたに

やまびとの折りかざすてふ花のみや暮れ行く秋をよそにきくらむ

小濱殿の姫君の當座に、寄菊祝

草も木もうつろふ秋を時と咲く菊の色香ぞ世にたぐひなき

鷹司前關白殿の御園の菊を見せ給ひけるに

よそにのみきくのしら露しらざるやかかる色香の世には有りても

○錦もて云々　玉を錦に包むと云ふ成語によつた。

○結ぶ手の　契りを結ぶと、水を掬ぶとをかけた。

○月影をおきまどはせる　古今集巻五「おきまどはせる白菊の花」に據つた。

○よそにきくらむ　聞くに菊をかけた。

妙姓尼のもとに人々集ひて歌よみしにきくのうつろひ盛りなるをひとに
といふ題にて

見せばやなうつろふ色は紫のひともとひ來ぬやどのしら菊

貴船の社に侍りける頃成崇縣主來りて寂しさいかにといへるに

思ひやれ筧の水のおとづれも落葉に埋むあきの山里

九月晦日菊にそへて人のもとへ

けふのみの秋をもよそに菊の花萬代かけてかめにさせ君

九月盡

憂き物にながめ捨ててし夕暮も限りとなれば惜しき秋かな

冬　歌

山家初冬

薪つみすゞしろ掘りて山里はかきこもるべき冬さりにけり

社頭時雨

奉る幣帛（ぬさ）な濡らしそ村時雨ぬかづく袖はさもあらばあれ

近衛殿の御月次に、瀧邊時雨

○紫のひともとひ來ぬ　紫の一本と、人も訪ひ來ぬにかけた。紫と云つたのは白菊はやがて紫色に變ずるからである。

○かめにさせ君　君よ瓶に挿せ。萬年の壽を保つ龜にかけた。

○ながめ捨ててし　眺めた。

○すゞしろ　大根。
○冬さりにけり　冬しありにけり冬になつてしまつた。

○御月次　月々定まつて開かれる例會、[illegible]こゝでは歌の會。

○瀧のおとなしに　音無瀧にかけた。京都北郊大原村に在る瀧。呂律川とも云ふ。

○あしは休めざりけり　時雨の足で、旅の縁語。

○月のかつらに降りそゝぐらむ　月中に桂樹ありと云ふ支那思想。

都時雨

大原や名におふ瀧のおとなしに音をかしつゝ降る時雨かな

よしやふれ都大路の村しぐれ軒端づたひに袖はぬらさじ

旅行時雨

濡れじとていそぐ旅路に行きめぐり時雨もあしは休めざりけり

村しぐれふるからをののもとからはもと來し道は夕陽てらせり

風前時雨

吹きかはる空の嵐にさそはれて思はぬ方に行くしぐれかな

夜時雨をきく

いとゞしくしぐるゝよはの寒けきやすきまの風もぬれて吹くらむ

嶺時雨

そめ殘す梢はあらじ筑波ねのこのもかのもに時雨降るころ

月前時雨

いやてりに照りまされとや村しぐれ月のかつらに降りそゝぐらむ

貴船に侍りける頃月あかくて時雨のふりければ

鞍馬山ふもとの里はしぐるともしらず顔なる月の影かな

十月のはじめ濱松侍從忠邦朝臣雲錦亭にとはせ給ひしに紅葉の多く殘りければ

君がためもろくは散らぬもみぢばにあえなば老も幾秋かみむ

御かへし「冬たちて後まで殘る唐錦うべ我が爲ときてこそは見れ」

落葉すりたるきぬに

小倉山今一しほの秋の色は散りてもみづる木々のもみぢ葉

關路落葉

逢坂のせきぢの紅葉散るころは行くも歸るも錦きてけり

落葉深

ちるが上にちるもみぢ葉を紅にくゝりかねたる谷がはの水

殘菊

霜をへてうつろひかはるしら菊をあらぬ花かと見ぞまがへつる

霜

武藏野のむかひが岡も霜かれて根を尋ぬべき草の葉もなし

寒草霜

野邊見れば萩も尾花もおしなべて霜のおきなの草と成りにき

○あえなば　あやかるならば。

○きてこそは見れ　來てと著てとをかけた。冬たちては立ちてと裁ちてとかけた。

○くゝりかねたる　絞り染めにしかねた。くゞりにかけた。

○あらぬ花かと　菊とちがふ花かと。

○むかひが岡　今東京本郷向岡。

○霜のおきなの云々　霜の置くと翁とかけた、老いた草となつた。

冬草

露は霜にむすびかへても殘りけりいつらは秋のちぐさもゝ草

池水鳥

もみぢ葉も錦さしける池水に青羽まじへて遊ぶおし鴨

千鳥

求食(あさり)する千鳥は浪の何なれや立居を夜たゞ打ちまかすらむ

海邊千鳥

浦波のたちてもゐても君が代をやちよと鳴くやわが友ちどり

寒夜水鳥

池水のこほれるほどはあし鴨の立ちさわぐよはの聲に知られつ

冬月

限となる木の葉は風にはらはせてひとり影すむ冬の夜の月

すさまじきためしもしばしわすられてむかへば冰る袖の月影

仙臺中將殿によみてまゐらせし百首の歌の中に、冬月

過ぎがてに誰ながめけむ琴の音も月にさえたる木枯の宿

かれたる蘆邊に月すめり

○求食する　食をあさり求める。

○打ちまかすらむ　浪の打つにかけた。潮の滿ちひきにより千鳥も遠くなり近くなるから、千鳥は浪と奈何なる緣があるのであらうか夜中その進退を浪に任せて居るよの意。

○やちよと鳴くや　古今集卷七の「しほの山さしでの磯にすむ千鳥君が御代をばやちよとぞ鳴く」に據った。

○すさまじきためしもしばし　冬の月をすさまじきものに喩へしは源氏物語の成語。

すめりとも誰かは問はむ霜こほる難波のあしのよはの月影

炭竈

降りつもる雪にもたえぬいとなみは煙にしるき峯の炭竈

初雪

草も木も花かと見えて花よりもいや珍らしき今朝の初雪

けぬがうちにとふ人もがな菊紅葉うつればかはる庭のはつ雪

降りなばとさしも契りし都人しらでや消えむけさの初ゆき

大かたに降る初雪を珍らしみ我がやどのみと思ひけるかな

ふみ分けむ跡を思へばとふも憂しとはぬもつらし庭のはつ雪

山家初雪

とふ人もあらしのにはに降り初めて雪も友まつみ山べの里

近衛殿御兼題雪

ふみわけしあとある雪に野路行けばかをらぬ花も袖に散りけり

雪散風

吹きさそふ風のまに／＼散る雪はちるを惜しまぬ花とこそ見れ

旅行雪

○けぬがうちに　初雪の消えないうちに。

○うつればかはる　菊紅葉の色が變じて行けばと、時がうつればとかけた。

○ふみ分けむ跡を云々　初雪を踏み分けて、足跡をつけて汚す事を思へば。

○あらしのにはに　訪ふ人もあらじにかけた。

○あこの松原　英虞の松原、志摩英虞郡。

○迪らざりけり　さがし〳〵行かなくてもよくわかつた、私を待つ君の意馬が導いたのであらう。

○拂ひぞわぶる袖のしら雪　藤原定家の「駒とめて袖うちはらふかげもなし佐野のわたりの雪の夕暮」（新古今集冬）に據つた。

むかし見しあこの松原雪ふれば面かはりせりあこの松原

雪中に友をとふ

君がまつ心の駒やさそひけむ雪にも道は迪らざりけり

雪の日人にとはる

降りうづむ山路の雪と分け入りし君が心といづれふかけむ

君がいなば見つゝを居らむ分け來つる跡をも雪のよきて降らなむ

掃雪待客

柴の戸の内外の雪は拂へどもおほつかなしや岩根まつがね

遠山雪

むさし野に山の端なしと見し人にみせばや雪のちゝぶかひがね

故郷雪

朽ちし軒あれし籬も雪ふれば昔にかへるふる里のには

山家雪

村がらすねぐら尋ねてかへらずばくるゝもしらじ雪の山陰

馬にのれる人雪ふるみちを行くかた

行く道は老いたる駒にまかせても拂ひぞわぶる袖の白雪

加賀國伊藤某が家の庭のたゞむかひに駒嶽むかふよし其のこゝろの歌よみてよと眞悔僧都して乞ひしに

しるべする駒ならませば四つの時きえせぬ雪を行きて見ましを

貴船に侍りける頃雪いたく降りける夜

軒ちかき筧の水は音絶えて雪に聲あるよはの山里

臨時祭御再興のとき

そのかみにかへすゞもかしこきはけふの祭の山あゐの袖

爐邊閑談

埋火のもとつ心をかきくづしかきおこしつゝ語るよはかな

富士谷御杖が冬籠りせるをとひて

ことさらに思ひおこして分け入りし山のかひある埋火のもと

かへし「かくばかりけぬるき閨の埋火をたち離れてもとひし君かな」

早梅

花といふ花におくれて花といふ花にさきだつ花は此の花

雪中早梅

春またでとくさく窗の梅がかをねたむか雪の降りかくしける

○臨時祭　賀茂の例祭は四月中の酉の日であるが、寛平元年十一月に臨時祭を始められた。
○山あゐの袖　山藍で模様を摺った袖。あをずり。

○もとつ心を　埋火のもとをかけた。

○思ひおこして　自分で思ひ立って、おこすは火の縁語。かひあるはしるしあると峡とかけた。

竹ある家に年暮る

呉竹の千尋ある陰にかくろひて年惜しげにも見えぬやどかな

歳暮

身につもるものともしらで春待ちし昔にかへる年なみもがな

とゞまらぬ年は惜しまで老もまた待ちむかへてむ花鳥の春

○昔にかへる　若い昔に返る。かへるは浪の緣語。

○かごとにて　託言、かこつけるものとして。
○とはに思へど　永久に思ひ慕へど、山城の鳥羽にかけた。
○いはでしのぶ　先方へ告げずに忍んで居る、共に地名にかけた。
○名ををし鳥の　名の立つを惜しむと鴛鴦とかけた。うきて、しづむ、いづれも、皆水鳥の緣語。
○人のことよきも　先方の人の返事のよ過ぎるのも。
○なか／＼に頼めざりせば云々　却つて戀人の來るものと心頼みしないで寢て居たらば、夢に戀人に逢へようものを。なまなか起きて空しく待つて居たばかりに夢も見られず、當人も來ぬことよ。

雲錦集巻三

戀歌

初戀

いづこより種をとりてか戀草は心にふかく根ざし初めけむ

やはらげる言葉の露をかごとにて千入をいそぐ戀の山口

忍戀

山城のとはに思へど陸奥のいはでしのぶはくるしかりけり

共忍戀

さてもまたうき名や立たむ諸共に忍ぶ袂の色しかはらば

諸ともに名ををし鳥のうきてのみ思ひにしづむ袖ぞひぢぬる

いひはじむ

いひそめて餘りに人のことよきも疑はれぬるものにざりける

待空戀

なか／＼に頼めざりせばぬば玉の夢には人にあはましものを

夢中逢戀

うちとけて逢ふと見つるぞおもひねの夢と知りてもかつは嬉しき

玉藻なすかよりかくよりなびきぬと見し夜の夢を現ともがな

白地戀

なごりには袖のみぬれて夕まぐれ寄するまもなくかへるしら浪

うちきて逢へる

さゝがにのふるまひしるき暮ぞとて待ちむかふるも夢ごゝちせる

になきおもひ

玉だれの内外隔てぬ道ぞとはひとりさだめて戀ふるあやなさ

ちかくてあひがたき

あまのかるめくはすのみをたのみつゝいつまで我が身うみ渡るらむ

面影をかはと見ながらあふせなき我が身はうらといふべかりけり

祈逢戀

とし月をかけしもしるくきぶね河あふ瀬うれしき波の白ゆふ

遠く隔てたる

松に吹く風の便りもたえぬるや心をさへにへだて果てけむ

○かつは嬉しき　夢と知つてもやはり一方では嬉しい。
○玉藻なす云々　水中の美しい藻のやうに。
○さゝがにのふるまひしるき　日本紀に出て居る衣通姫の歌「わがせこが來べき宵なりさゝがにのくもの行ひ今宵しるしも」に據つた。
○めくはすのみを　目色で知らせる許りを、目くばせ許りを。海人の刈る海草の布にかけた。
○うみ渡るらむ　退屈し通すこと、海渡るとにかけた、海人の縁語。
○面影をかはと見ながら云々　戀人の面影をあれはと近く見ながら、逢ふ機會のない自分は、さかさま反對の有様であると言ふ可くあるよ。かは、瀬、浦、皆縁語。
○きぶね河　山城愛宕郡鞍馬村字貴船を流れる川。

あひおもふ

いもとわれいづらやまさる思川いざおり立ちて深さくらべむ

日野一位殿の御會にまゐりあひたりしに思といふ御題を賜はりて

我がむねのなどとことはに燃えぬらむおもひは人につけてしものを

不逢戀

しかすがに絶えぬものから奥山の岩間に咽ぶみづからぞうき

山科のやまず戀ひつゝ年ふれどこえこそわぶれ逢坂の關

心のみ空になしつゝ棚機の契りばかりのあふせだになき

後朝

ことの葉をかはさぬのみのわかれにて猶身にそはるけさの面影

後朝恨戀

歸り來て思へばつらし鳥がねを待ちがほなりし今朝の別れ路

妙法院宮にて御當座、夕戀

さゝがにの絲にかゝれる玉の緒をたえねと吹くか松の夕風

顯戀

霧はるゝ瀬々のあじろ木あらはれていとゞ我が身をうぢの川づら

○いづらやまさる思川　どちらが思ひが深いか。

○とことはに燃えぬらむ　永久に燃えるのであらう。おもひは火をかけた、燃え、つけてしは、その緣語。

○しかすがに絶えぬものから　流石に仲は絶えないものながら。絶え、むせぶ、水の緣語。みづからさ水とかけた。

○鳥がねを待ちがほなりし　夜明けを待ち顔であつた先方の態度が歸つて來て考へればつらい。

○我が身をうぢの川づら　自分を憂しと思ふとかけた。

忘戀

いかにして種をとればか忘れ草人の心におひしげるらむ

くちかたむ

切戀

せき人れし水のみなぐちかためつゝ池の心をもらすなよゆめ

花すゝき穂に出でしよりさをしかの音に鳴きぬべき戀もするかな

恨戀

大よどの松はつれなき色としもしらでかけたる年浪ぞうき

見せばやな人の心の秋風にあへずみだるゝ袖のゆふ露

月前戀

あはれとはうはの空行く月も見よ袖にやどさぬ夜半しなければ

ひさかたの空だのめして来ぬ人に見せばや袖の露の月影

老後戀

老ぞうきあなあやにくに見初めてしおもかげのみは物忘れせで

戀

弓箭とりあだに向へるものゝふの命をしまぬ戀もするかな

○大よどの松はつれなき、新古今集巻十六「大淀の松はつらくもあらなくに恨みてのみも返る浪かな」に據った。
○あへずみだるゝ　人の心に倦きの来たこと、秋風とかけ、秋風に耐へず亂れる。
○うはの空行く　上の空で居る、心にかけぬ月すらあはれと同情して見るであらう。
○袖にやどさぬ　袖に涙の宿さぬ

○物忘れせで　老いては物忘れがちなのに、戀しき人の面影はかりは物忘れしないで。
○命をしまぬ云々　命を惜しまぬ如き。

恨むべきふしも暫しはのどめつゝ哀れ知るやと待ちこゝろみむ

なげきのみこりまさりつゝぬば玉の枕の塵も山とつもりて

寄月戀

月待つといひていをねぬ僞りを誠となしし人のつれなさ

姥捨の山ならなくに月見つゝなぐさむ夜なきひとりねの牀

九月十三夜敷久縣主の家に集ひて十三首歌よみけるに、寄月忍戀

消えかへるしのぶ袂の露ぞともしらでや月は影宿すらむ

寄雲戀

戀ひわびてはれぬ心のうき雲は夕にかへる山だにもなし

寄瀧戀

うき名のみ世にながれつゝ逢ふ事は絶えて久しき瀧の白絲

寄涙戀

色かはるなみだしなくば何にかは深き心のほどを見せまし

寄棹戀

いつまでか逢ふ瀬浪間のみなれざを馴るゝかひなく袖ぬらすらむ

寄車戀

○のごめつゝ　なだめやはらげつゝ。

○なげきのみ云々　歎きを樹と見て刈りまさると云つた。歎き許り増しつゝ。

○いをねぬ云々　人を待ち起きて居るのを、月待つと僞つたのを。いをねぬは眠らぬの古い語法。

○姥捨の山ならなくに　「我が心慰めかねつ更科や姨捨山に照る月を見て」に據つた。此の歌は古今集十七及び大和物語にある。

○消えかへる　心が消え入る程に思ふ。消えは露の縁語。

○色かはる云々　血の色にかはる涙。

○馴るゝかひなく　かひと櫂とかけた。

わくらばにめぐりあふ夜は小車のくさびを我や井に入れてまし

寄煙戀

富士も今は立たずと聞けば我が胸のおもひの煙たぐひやはある

寄木戀

あふみてふ名をたのみつゝ年をへて立てる一木のまつぞかひなき

寄鳥戀

いとせめて思ふといへばいとせめておもふてふ鳥も有りとしらずや

寄獸戀

我妹子が心の駒もつなぐべく身を若草になすよしもがな

寄蟲戀

伊勢の海人のあまりにつらき人故は藻にすむ蟲の名さへ忘れつ

狩する男山ざとびたる女の家に來れる

ふか草のふかきおもひに分け來てもかりにとのみや人の見るらむ

かならずとたのめて來ざりし人のもとへつとめていひやりける

まち出でし袖にとまらば君にけさ見せましものを有明の月

女の曹司によな／＼立ちよりて物いひて後といふことを

○小車のくさびを云々　車輪の脱せぬために入れる轄をとつて井戸に投げ入れ、戀人の車に乘りて歸らうと云ふのを妨げんとする意。わ、めぐりあふ、皆車の緣語。

○立てる一木のまつぞ云々　近江の唐崎の松を思ひ寄せた。近江と逢ふ身、松と待つとかけた。

○心の駒もつなぐべく云々　古今集の「大荒木の森の下草老いぬれば駒もすさめずかる人もなし」及び源氏物語の紅葉賀の卷などに據つた。

○藻にすむ蟲の　古今集の「海人の刈る藻に住む蟲のわれからと音をこそ泣かめ世をばうらみじ」に據つた。われからと云ふ蟲の名まで忘れたと云ふのは、世をうらむ心も起つたいの意。

○女の曹司　女の部屋。

わたつみの沖へふかめて打ちよせし波のなごりを見るよしもがな

こと人に物いふと聞きし男花の頃來りければといふこゝろを

ともにまたあだなる名をやたてなまし花見がてらの人はとゞめじ

ものいひける女のもとに扇を忘れてといふ題にて千蔭「たわすれし扇のみかは妹がりに心をさへに殘し置きてき」とよめる歌のかへしを女にかはりて

忘れしを秋の扇と思はずば名を賴みても手ならしてまし

棚倉殿に參りける日後撰集に女のみやづかへにまかり出でて珍らしきほどはこれかれものいひなどし侍りけるをほどもなく一人に逢ひ侍りければ正月朔日ばかりにいひ遣はし侍りけるよみ人しらず「いつのまに霞み立つらむ春日野の雪だにとけぬ冬と見しまに」といふ歌のかへしの心をよめとありければ

降りつみし雪だにとけぬ春日野にいかなるなをか人のつみけむ

おなじ殿の御會に各古歌のかへしをよまむと有りしに新古今集に初めて女に遣はしけるとて大江匡衡朝臣の「人しれずおもふ心はあしびきの山下水のわきやかへらむ」といふ歌をさぐりて

○花見がてらの　他の女に逢ひがてらの。

○名を賴みても　あふぎに逢ふをかけ、逢ふと云ふ名を心だのみにしても。

○いかなるなをか云々　名と菜をかけ、積みと摘みとかけた。

人知れず心わくてふ足曳の山下水をたれかたのまむ

「何となくさすがにをしき命かなありへば人も思ひしるやと」といへる古歌のかへしを

何となく惜しくてふ命得てしがなうきにたふべき我が身ともなし

源氏物語の夕霧の卷の中なる詞をわかちて人々歌よみける時瀧の聲はいとゞ物思ふ人をおどろかしがほにといふをさぐりて

せきわぶる袖の涙も有るものをあな音高し夜はの瀧つ瀬

相聞擬古

ありそ海のいくりに生ふる玉藻なす靡くわざもな忘れかねつも

賀歌

有栖川中務卿親王從仙洞御所古今御傳授の竟宴に松有歡聲といふ御題にて

言の葉の散りうせぬのみか萬代の聲も常磐の園の松風

同宮に寛政八年の冬ある人綠毛龜を奉りける時歌奉れと仰せごと侍るによみて奉れる

○心わくてふ　他の人に心を分つこと、涌くとかけた。
○ありへば　有り經は、命ながらへて月日を送らば。

○いくりに生ふる　海中のかくれた嶼に生ある。萬葉集卷二「いくりにぞ深海松生ふる荒磯にぞ玉藻は生ふる玉藻なす靡き寢し子を」云々の長歌に據つた。

○有栖川中務卿親王　職仁親王、本書の作者賀茂季鷹の和歌の師である。

○綠毛龜　所謂蓑龜。

竹の園に絹し龜もおそへれば千世萬代は君がまに〳〵

閑院宮（近衛内府公御母公）五十御賀に

幾千世そはこやの山もとほからで君が御園にかよふ松風

陸奧白川殿の五十賀に

今日よりの老はなこその關すゑて君や千年をまつが浦しま

濱田殿の五十賀に、春祝

此の春や千年の春の始めとは君ぞながらへてしるべかりける

濱松殿にて、寄弓祝

幾千年弓は袋に治まれる御代のためしにひき傳ふらむ

三島自寛七十賀屏風をむすこの景福が調じけるに納涼のかた

夏しらぬ松の下水結びては千世を手にとるこゝちこそすれ

小野蘭山八十賀

漢倭生藥（かんわさういくすり）てふいく藥みてて千年を經む人やたれ

三宅行達母の賀を九月ばかりにしける日人々集ひて歌よみける中に同文字なき歌

秋山に春の色なしれすれよと櫻がこえだ紅葉そめけむ

○はこやの山も　藐姑射の山、支那の仙境と考へられた山。仙洞御所を喩へた。

○なこその關すゑて　今日よりの老は來るなにかけた。

○ひき傳ふらむ　例にひいて傳へるであらう。ひきは弓の縁語。

○三島自寛　通稱吉兵衞、號蓬萊と云ふ、[illegible]と稱す、江戸の國學者、賀茂眞淵の門、文化九年四月二十六日歿。

○小野蘭山　通稱喜內、職博と云ふ、本草學者、[illegible]醫官となる、文化七年正月二十七日歿。

○漢倭生藥てふいく藥　唐大和の不死の藥といふ藥殘らず。

三宅公輔が父望之が六十賀に唐琴の浦を

契るからことなる浦の松風や千世の初音を調べ初めけむ

琴を常にもてあそべる玉堂が七十賀に

行末も稀なることのためしには君が八千代をひくべかりけり

松原街に住める時定が父の七十賀に寄松祝

竝立(なみた)てる千世の松原まつばらにかぞへて見よや老の行末

三河人六十賀

老いつ鳥老いつともいはじ行末の千代を思へばわらはべのうら

夫婦の八十七十になれる祝歌を人のこへるに

立ちならぶ松と竹との深みどり千年をよその物とやは見る

重殖縣主の上階をほぎて扇を贈るとて葵にむすびつけて

神と君をこそな二葉にあふぐらし三つの位の山路分けみて

直慶が妻をむかへし時壁に鶴の繪かけたるをみて

諸共に千世の影みる池水の深き契りもたぐひ有りけり

陸奥人の五十賀に

契り置きてさか行く末の松山は千年の浪も越えぬべらなり

○唐琴の浦　備前兒島郡の西南海岸。唐琴泊。

○ことのためしには　事の例と、琴とかけた、ひくは例をひくと琴をひくとかけた。

○まつばらに　松原とつばらとかけた、つばらは詳細に。

○わらはべのうら　三河渥美郡童浦村の海岸。

○あふぐらし　扇の緣語。仰ぐと煽ぐとかけた。

[illegible]文化八年三月十八日人々を集へて當座に、祝言

花の雲紅葉の錦萬代に立ちかさぬべき今日の圍居か

松延年友

君ひとり千歳の春やかぞへまし友と砌の松をうゑずば

春日山祝

春日野の飛火ののべも名のみして山靜かなる君が御代かな

雜歌

天

神代よりすめるをもとつ心とはなぎたる空を仰ぎてぞしる

國

千五百秋みづほの國を安くにとしづめましけむ神のたふとさ

神祇

夜のまもりひるのまもりと天津社國つ社や鎭めましけむ

寄廉神祇

大ぬさの引く手にさぞな靡くらむ天津社もくにつやしろも

○花の雲云々　自己の亭を雲錦亭と稱し、又號ともしたのは此の故である。自ら櫻・楓とを多く植ゑたのである事は雜歌中に見えて居る。

○友と砌の　友として見ると、軒下の石疊とをかけた。

○飛火ののべ　飛火野は大和春日野の南に在つて、烽火を擧げる野。國の大事を通知する機關である。

○大ぬさの引く手に　祓への時用ゐる大串につけた幣帛。式終れば諸人これを引き寄せて撫でる古習がある。

廣前に一江門の岡田常陰が琴ひくを聞きて

神山の嶺の松かぜしらべあひてことの外なる音をも聞くかな

芳野龍田の花紅葉を根こじ植ゑて雲錦亭となづけて額を一條關白殿に甲斐守保孝縣主もてねがひ侍りけるに則ち書きて給はせけるぞかしこきや

其の庵に寛政十三年しはす二十日あまりにうつろひて

千々の春萬の秋も雲と見え錦とまがへ名にし負ふ木々

遠山朝

あさけたくふもとのけぶり立ちそひて雲もわかれぬ遠の山の端

朝まだきおき出でて見れば鏡山まゆのごとくにかゝる横雲

曉鐘

かねのおとは昔よりけにきこゆなり耳うとくなる老の寐覺に

山家經年

花をめで紅葉に染むる心こそ捨てし浮世のなごりなりけり

山家

出でじとはちかはぬ橋も朽ちはてて道こそなけれみやまべの奥

をりふしの人め待ちしは山里に住みつくまでの心なりけり

○廣前にて　社の大前で。

○ことの外なる　非常にと琴の外の音とかけた。

○甲斐守保孝　岡本保孝、賀茂縣主で甲斐守[illegible]であつた

○まゆのごとくに云々　鏡に映つる眉とかけた。

○けにきこゆなり　はつきり聞える事よ。耳はうとくなつたが、老の癖として寐覺めがちであるからだ。

○花をめで紅葉に染むる心こそ　花紅葉に執着する心こそ、捨てたうき世の名殘であるよ。

○誰かは後にみやまべの　誰か後に見ようとみ山邊とをかけた。

○なに世の中に　何故に世の中に

○かきほをなしつ　垣をなした。

○世のなかにかけて思へば　けはしい世間と比較して考へれば。かけては橋の緣語。

○あはれましらの　哀れを增すと猿とかけた。

○携へし三つの外なる　三友は琴詩、酒と云ふ。白樂天北窗三友の詩にある。

山家松

軒近き松は昔の友ぞとも誰かは後にみやまべの庵

山家水

友と見てすむ山陰の岩淸水なに世の中にながれ出づらむ

山家墻

おのづからかきほをなしつ山里の窗の吳竹軒の椎柴

山家夢

山住も夢は心の外なれやすてこし世に行きかへるらむ

山家棧

世のなかにかけて思へばなかなかにあやふげもなき谷のかけはし

山家客來

やま里にとひ來る人は心して浮世がたりをかけずもあらなむ

山家猿

庵しめて誰か聞くらむおく山のあはれましらの夕暮の聲

山家友

携へし三つの外なる友なれや軒端の筧峯の松かぜ

○こもりくの　泊瀬の枕詞。

○神代の手ぶり　神代の風俗。

○みをはむ鳥　竹の實を食する鳥鳳凰をさす。鳳凰は靈鳥、桐に棲み竹實を食すと云はれて居る。

暮山雨

こもりくの泊瀬の檜原雲とぢて雨うちそゝぐ夕寂しも

閑居友

訪はれじと入りにし山の奥までも猶身に三つの友はそひけり

樵夫歸月

分け入りし爪木の道のはるけさはかへさの月の影にしられつ

田家水

さ苗植うる時來るらし賤がすむ田中のゐどの水の濁れる

暮村鳥宿

暮れぬとてしむるねぐらの一枝も猶やすからず立ちさわぐ聲

披書逢昔

石の上ふるきむかしに夢ならであひみるものはふみにぞ有りける

披書知昔

水くきの跡しとめずば千早振神代の手ぶりいかでしらまし

庭上竹

唐國にみをはむ鳥もすむばかり植ゑし呉竹茂りあひけり

○君にと寄する　八千歳を君に寄する、寄するは浪の縁語。

○長井の浦　備後御調郡糸崎港の灣を云ふ。

○みをつくし　澪標、水路を示すためにたてる標。

○塵ひぢの云々　俗諺「塵積つて山となる」の意をとつた。

辻禰屋往昔に池ありて松和といふことを

岸の松汀のたづの八千歳を君にと寄する池のさゞ浪

名所鶴

君が代は長井の浦に住むたづもゆたにやおのが千世を經ぬらむ

住吉社にまうで侍りしをり

住のえの松の木陰はとく暮れて夕日隈なき淡路島山

みをつくし

難波がたしほひに見えぬみをつくし立つるかひなき世にもふるかな

奈良にまかりし時猿澤池を見て

青柳に底の玉藻も靡きあひてさゞ浪すゞし猿澤の池

始めてあづまに下りし時富士の麓に宿りて

今日もまたふじのすそ野に暮れにけりあすもかくてや草枕せむ

富士山

塵ひぢの積りてなれる物ぞとはふじのねしらぬ人やいひけむ

あづま路の行きかひごとに見しめにも驚かれぬるふじのしば山

門

花のあした月の夕はとぢこもる葎のかどもえこそ戸ざさね

杖

つらづゑぞ先づつかれける石の上ふるき姿のかはり行く世は

鏡

見るまゝに心の塵も拂ひけりふりぬるふみや鏡なるらむ

妙法院宮御會に金といふ御題にて

やつこなすつかふと見てやこがねさへあたり近くはよりこざるらむ

青

水や空そら行く雲もなぎはてゝひとつ緑にはるゝ海原

正述心緒

徒らに世をつくさめや天地にすこしいたらぬ丈夫のとも

曉述懐

聞きしこと見しことさはに思ひづる寐覺の牀ぞかつはなぐさむ

有栖川宮の御前にめされし日述懐の御題を賜はせければ

言の葉は竹の園生に分け入れど世にとゞむべき一ふしもなし

○つらづゑぞ　頬杖。沉思する様

○やつこなすつかふと見てや　奴僕の如く使用すると思つてか。

○徒らに世をつくさめや　むなしく世を終らうや。

○一ふしもなし　一節、竹の節にかけた。

ひく人もなくてや朽ちむ春の野の子の日にもれし松ならなくに

一とせ下つふさの國に遊びし時「夏麻ひく海上潟」と萬葉集によみし海づらもゆかしうおぼえて彼の海べに遊びしをり拾ひし龜のかたなせる石を青蓮院尊眞法親王のこはせ給ふに添へて奉れる

君がかくみどりの龜もわたつみの浮木にあへるたぐひならずや

粟田の宮の御園に西行法師の都のつとにとて宮城野の萩を根こじて青水僧正に奉られしを笈のうちと名づけさせ給ひて今もめでさせ給ふとなむ其の古枝をまをしおろして筆に調ぜさせて丸毛長門守利隆ぬしの贈られしを悦びてまうし遣はしける

みやびたる昔の人の心さへ手にとりて見る君がたまもの

芝山中納言持豊卿に名古曾關の櫻木の石に化したるを鎭子にしてまゐらすとて

櫻木や石となりけむ色も香も君がこと葉の花にゆづりて

御かへし「言の葉の花さへさけるさくらいしよゝにつたへてよそにちらさじ」

三寶院高演僧正の御屛風の料とて入道一品宮より仰せ承りてよみて奉り

…こ、引き立ててくれる人とかけた。

○夏麻ひく海上潟云々　萬葉集卷七「夏麻引く海上潟の沖つ洲に鳥はすだけど君は音もせず」海上潟は上總海上郡。

○みどりの龜も　見るご綠とかけた、綠毛龜。

○浮木にあへる　法華經、莊嚴經、阿含經等に出た「如盲龜値浮木孔。」から採つた。

○まをしおろして　申し下して、願つて頂戴して。

○鎭子　おもし、文鎭。

○三寶院　京都宇治郡下醍醐三寶院。眞言宗古義派の大本山。

し歌の五首、海棠の枝に鳥のとまれるかた

此の鳥のたましひさへやとばすらむゑへる手弱女の花のゑまひに

夏山陰に釣殿めけるかた

かつ見ても涼しかりけり茂りあふ山かたつけゐ水のおばしま

蘆に雀のとまれるかた

おのが名のすゞにはむれで一本のあしのうら葉に千世と鳴く聲

琴ひき棊かこめるかた

夜晝の色なす石によるひるのけぢめもしらず遊ぶ此のわざ

布袋和尚のかたはらにうなゐ子あるかた

うなゐ子が心のなきをこゝろにて心安くもあそぶ法の師

坊城中納言殿に敦直縣主の墨跡をまゐらすとてつゝみ紙にかきつけける

心なき名をやながさむせき入れし此の水くきの世にし洩れなば

三寶院僧正より有栖川宮に御消息せさせ給ひて白山かきしかたに歌よめと仰せかうぶりてよみて宮まで奉りける

消ゆる時なしとし聞けばふじのねの雪にもまさる雪は此の山

○ゑへる手弱女の　醉へる美女の如き。

○山かたつける　山の一方にかたよりついて居る。水のおばしまは水の欄干、釣殿をさす。

○すゞにはむれで　雀と云ふ名に通ふ篠には羣れないで。

○夜晝の色なす石に　黒白の碁石をさす。

○名をやながさむ云々　流す、せき入る、もる、皆水の縁語。

○白山　加賀の白山。

○難波津をならふ云々　いろは歌のない時代には、先づ「難波津に咲くや此の花云々」の歌を手習ひの手本としたのである。
○あしの云々　錢と蘆とをかけた。難波津の縁語。
○かとりのきぬ云々　大船の楫取と固織の絹とかけた。薄きと厚きの對稱に技巧をもつた歌。
○爪袋　琴の爪入れ。
○梅の重ね　かさねの色目、表濃紅、裏紅梅色、又は青。
○このみはまたも　木の實と此の身とかけた。

るに箱の中に錢のひとつふたつ有りければよみ侍りし
難波津をならふ硯の海なれや見るめにあしの先づさはるらむ
　濱田の殿よりをさなきものにきぬ賜はりけるをかしこみてふみのおくに
大船のかとりのきぬの隔てなみ薄きはあつき恵みとぞしる
　おなじ殿に春のはじめつかた爪袋をひとへ梅の重ねにぬはせて五葉の枝に付けてまゐらすとて
松かぜにしらべかよへる琴の音も千世のためしにひくべかりけり
　小笠原佐渡守殿に萬葉集類句をまゐらせける御返りごとの奥に「年を經し此の身の幸に賀茂川や後瀨くみ見る世にもあひけり」「往昔も思ひ出てこそうれしけれかけてよせける賀茂の河浪」とよみて賜はりければ
言の葉の花はさかねど君によりこのみはまたもなり出でなまし
　小餘綾侍從殿の詠草見せたまひし中に蓬葎を植ゑてかりいほ造れりとて「世はなれぬところながらもしづけさを心にむすぶ草のかり庵」とよみておこせたりし返しにとて「殊更に植ゑし葎の草の庵是れものどけき世のしわざかも」とあるかたはらにかいつけてかへしまゐらせける
拂ひわぶる我がよもぎふをことさらに植うらむ人とかへてすまばや

嵯峨臨川寺南宗長老をとぶらひて日ひとひ漢倭の物語して

いくばくもあらじ我が世を同じくはかかる所につくしてしがな

猪苗代謙庭法橋の宣下からぶられし悦びにつき紙を贈るとて

つぎ／＼にふみ見し世々の跡とめてやすらに渡る法の橋かも

江門に有りしころ神主保麗卿のもとより賀茂川の石もて造れる硯にそへて「思ひ出でよさかひ隔てて見る石に賀茂の河水すみしあたりを」と有りしかへり墨筆など贈りけるに添へて

賀茂川の深きなさけを見る石にいとゞすみこしかたをしぞ思ふ

伴蒿蹊が深草ちかきわたりに住めるをとぶらひて

君とかくかたらふほどはふみならで昔の人に逢ふこゝちせり

といひしかばかへし「いにしへを我はしのぶを君こそはいにしへの人古の人」

本居宣長京にのぼりて橋本常亮をあないにて始めて我が雲錦亭をとはむとて來れる時京に出づるみちなかにてゆくりなく出であひければ「千早振賀茂の川浪立ちながらあひ見し君はをしくもあるかな」とよみて出しけるかへし

○嵯峨臨川寺　山城葛野郡嵯峨村渡月橋の北。夢窓國師開基、臨濟宗。

○つくしてしがな　世を終りたいものであるよ。

○猪苗代謙庭　京都の連歌師、文化十四年十一月歿、年六十六、茲では法橋に敍せられた時なのである。

○いとゞすみこし　住みと墨とかけた。

○橋本常亮　京都梅宮の神官、肥後守、高嶋圖南に學び有職故實の學者。文化三年歿。

○立ちながら　路上で立つたまゝで逢ふ意、立ちは浪にかけた。

○二見が浦　二度逢ふをかけた、本居宣長の郷里の名所を用ゐたのである。
○荷田信美　荷田信美。京都稲荷山の祠官。[illegible]鈴屋の門人、國學者、文政十年歿。
○葵の草の名を云々　賀茂社に縁ある葵を用ゐたのである、逢ふと云ふ草の名の正しきものなのを今日知つた。
○徒らにいなりの山　空しく居たことを、關係せる稲荷山にをかけた。
○うさや忘れし　宇佐に憂さをかけた。
○國の湯あみに　伊豫道後の湯であらう。
○さゝ竹を[illegible]云々
[illegible]

別るれどうれしくも有るかとばかりに二見が浦の名をやたのまむ

岡崎の廬庵をとひしに庭に青石の高らかなるがあるはなからむ跡のおくつきにおくべき料なりと聞きて

苔のむすいはほならでは君がすむ千年の後をたれか待ちみむ

卯月ばかり荷田信美來りて去歳をとゞし度々とひ來ても居あへであはざりけることなどいひて「神山に生ふる葵の草の名をまさしきものとけふぞしりぬる」とよまれしかへし

諸共にけふはゝれにき徒らにいなりの山のすぎし恨みも

宇佐の大宮司公古卿上階しける悦び申し遣はすとて

時しあれば願ひも三つの位山たどりしほどのうさや忘れし

かへし「たどりつるうさは忘れて位山こえし惠みを仰ぐばかりぞ」

松山殿に仕ふる金子義篤が國の湯あみに行きしつとにいよ簾をおくりて「さゝ竹をまばらにあみしいよすだれかけてひなびし世々を見せばや」と有るかへし

みやびたる君にふらずばいよすだれたれか昔をかけて忍ばむ

金田一瑞に始めて逢ひし時「神山のふた葉の葵それならでかけてぞたの

む老の行くする」といへるかへし

神山にとしはふれどもあふひ草言の葉さへにふたばなりけり

後撰集の詞を題にて人々歌よみけるに甲斐守に侍りける時都人まかりのぼりける人のもとへ遣はしけるといふをさぐりて

しほの山さしでの磯のさしてこしかひありぬべく言とれや君

下總國海上わたりたまへりてかへるをりに橋本清命が「いとどしく夜の舟路の旅衣とまもる雨に袖やぬれなむ」といへりしかへしほどへて

かくばかり君がおもひのそひながらなど旅衣ほしわびにけむ

江門に住みしころ源氏物語竟宴に春秋のいどみをせしとき秋方にて

あくがるゝ数ならねどももみぢ葉にそめし心は散るべくもなし

又源氏よみはててこたびは日本紀竟宴にならひて彼の中の人々をわかちてよみしに紫上を

ますかゞみ面影にして時のまもすまのうら波かけぬまぞなき

本居宣長が古事記竟宴に御眞木入彥印惠命を

天地の神もにこみて男のゆはず女のたな末のみつぎまつりき

城戸千楯が家に人々つどひて歌よみけるに古今集の詞がきの友だちの久

○ふたばなりけり　まだ幼稚であるとの譬語、ふたばは草の縁語。

○しほの山さしでの磯　古今集巻七「しほの山さしでの磯にすむ千鳥君がみ代をばやちよとぞ鳴く」を引用。しほの山、さしでの磯を能登羽咋郡とする説もあるが、甲斐東山梨郡笛吹川の兩岸と見る方がよい。

○春秋のいどみ　春秋の優劣を爭ふ歌の會。

○秋方にて　此の家集の作者は秋を優れりとした一人なのである。

○日本紀竟宴　日本紀講筵が歴代折々開かれた、その講筵の終つた時開いた宴會が竟宴である。

○かけぬまぞなき　袖と涙にかけた。紫の上が須磨に流されし源氏の昔を忍ぶ心にかけた事。

○御眞木入彥印惠命　みまきいりひこいにゑのみこと。古事記中卷に出て居る、崇神天皇の御名。

○天地の神もにこみて云々　此の天皇の敬神の心深きに、天地の神の心も和みて、男の獵の獲物、女の手藝たる布帛の貢を奉つた。

○古今集の詞がきの云々　同集卷十八雜歌下に出て居る紀貫之の歌「みづの面におふるさ月の浮草のうきことあれやねをたえてこぬ」

しうまうで來ざりけるに遣はすといふをとりて

君とわれことしあるごとうと濱のうとさ月日のつもりけるかな

夫木抄をたどしけるとき釋教の歌の多かるを見て思ひつゞけし

日の出づる國に生まれて月の入る西へはゆかぬ我が心かな

紫式部が筆のあとを見て

紫のにほひふかめて藤浪のなみにこえたる水莖の跡

相國寺惟明長老の梅のかたに

降りかくす雪はいとはじ色よりも香こそめでつれ窗の梅が枝

源義家朝臣のなこその關のかたに

千萬のあだにむかへるもの〻ふも花さそふ風はすべなかりけり

月すめる河づらに柳あるかた

月すめる六田のよどは影ひたす柳の絲のよるも見よとか

葡萄のかた

羨まし千々のねがひの一つだになることかたきみさへある世に

寶船

舟の中にも〻のたからはみちにたり千世のよはひやつみ添へてまし

○うと濱の　日向南那珂郡鵜土村の海濱。字止、又は鵜戸とも書く。

○月の入る西へは云々　西は西方淨土をさす、即ち佛教には傾かぬ自分の心であるよ。

○なみにこえたる　波に越えたると、涙にこえたるとかけた。

○六田のよど　大和吉野郡吉野川の沿岸。

○よるも見よとか　絲の縒ると、夜とをかけた。

○なることかたきみさへある世に　多くの願ひの一つだに叶はぬ身さへあるにと、實とかけた。葡萄の實の多く實つて居るのに思ひ寄せた。

〇酒よりもげに云々　李太白は酒中仙と自稱した酒豪である。
〇劉伯倫　晉劉伶、字は伯倫、酒德頌を作つた酒豪。
〇三つの幸ひをとりよろひたる　誰もが欲する福、祿、壽の三つの幸福をとりそろへて居る。
〇班婕妤　漢の孝成帝の宮人、怨歌行を作つて秋の扇の捨てられるのを歎いた。和漢朗詠集に「班婕妤團雪之扇、代岸風兮長忘」
〇女三宮　柏木が人知れぬ戀に惱んだ女三宮の思ひ。から猫は女三宮の愛物であつたのを取材、消えかへりつゝは柏木が自責に耐へかね逝きし事。源氏物語中の人物。
〇ひぢりこに云々　泥に。神龜は死して貴ばれるより、生きて泥中に尾を曳いて居る安易さを喜ぶ意を採つた、莊子秋水篇に出て居る故事。

李太白

涌き出づる君がこと葉の泉こそ酒よりもげにはかりしられね

劉伯倫

一つきの酒に七つの寶をもかへし心はくみてこそしれ

福祿壽

人みなのほりする三つの幸ひをとりよろひたるこれの翁か

班婕妤

ねやのうちの扇も今は名のみにて我が身をさしぬ袖の秋風

官女

をみなへしいかなる種をとればかも雲の上には咲きにほふらむ

女三宮

から猫のからき思ひにかしは木の森の下露消えかへりつゝ

龜

ひぢりこに尾をひく龜の心をばこゝろとなさば命長けむ

野馬

むさし野の月毛の駒も草を出て草に入りてやふしど占むらむ

○范蠡が魚腹さきて云々　魚の腹を裂いた許りでなく、身を粉骨にして越王句踐の復讐に努力し、成功したのである。

○道々の云々　禪宗の神髄、法外の法、以心傳心の意。

○鶴の毛衣　松も鶴も千年の壽を保つものであるから、重ねると云つた、重ねは衣の縁語。

○天地のなしのまゝなる　天眞爛漫な。

○はにしのわざを云々　土師の技をすると、菅原とかけた。菅原は伏見の南近の地名。所謂伏見人形を詠じたのである。

○縣居　眞淵の住居。

○わけいかづちの神の宮人　別雷之命は賀茂神社の祭神、その社の神官の意、眞淵を指す。

范蠡が魚腹さきてみそかぶみこむるかた

いをのはらさきしのみかは身をもまた粉に碎きてそことはなしける

達磨のかた

道々の法の外なるのりをまた心とうるもこゝろならずや

松陰に鶴のおりゐるかた

ちよに千世を重ねたりとも見ゆるかな松の木陰の鶴の毛衣

わらはべのあそべるかた

天地のなしのまゝなるうなゐ子の心をつひのこゝろともがな

伏見の里に土人形をひさぐを見て

とほつおやのはにしのわざをすが原や伏見てふ名は同じ里びと

若山滋古が始めてとひ來てさよ更くるまでかたらふに螢のおほくすだきければ、飛びかよふ螢とともに我もまた清きながれをたづねてぞこし」と
いへるに

飛ぶ螢川瀬の水の音ならで何をか見せむ夜半の縣居

江戸に有りしころ橘千蔭「天の下名はなりぬべし千早振わけいかづちの神の宮人」と有りしかへし

よしや名はなりもならずも花をめで紅葉にすみて我が世つくさむ

粟田宮の御園なる笈の中といふ萩を見て

ひと本の萩にもしるし世を安くすてても捨てぬみやび心は

浦に鶴のむれたる所

あし和かの浦わのたづのうらとけてゆたに遊ぶや千世の友どち

播磨國號の長歌をその國の佐用の里人平田幸夫がよみて見せけるに

みかしほのはりまてふ國の名もしるくみちたらはせし上つ代のこと

隈川春雄が大宮の家にはじめてとひし時「賀茂川の清きながれを柴の戸にせき入れしことぞうれしき」とよみて見せけるに大宮の町名はいにしへに我が賀茂の往來の大路なることを思ひ出でて

町の名も我が大宮の名にしおへば君がすみかをよそに見ましや

六歌仙のかた

西行法師

言の葉の姿はむつにかはれどもひとつ心のたねならぬかは

牛若丸

色も香も捨てはてし身にみやびたる詞の花は猶殘りけり

○笈の中といふ萩　前出、西行法師が行脚の途次、宮城野の萩を都へ將來したと云ひ傳へた萩。

○うらとけて　心を許して、うらは浦の音の繰返し。

○みかしほの　嚴潮の義、一說三日潮、はやの枕詞、茲では播磨にかけた。

○大宮　京都大宮通りを思ひ寄せたのであらう。

○心のたねならぬかは　古今集序の「人の心を種として」に據つた。

牛若丸

、、柑くはきし日に吹きしより八島にみちて匂ふ春風

常磐前

萌え出でむ春まつ霜の小草とて操にかへておほふ常磐木

源頼政朝臣

郭公雲居に高くきこえあげし聲さへ名さへとゞろくがごと

小野小町

いざといひし縣見にゆかばうき草のうきしよごとは根を絶えてまし

親

子を思ふ親の心は人の子のおやとなりてぞおもひ知りける

柑は出塩が馬山に多かつたからかく云ふ。牛若丸にあてた。

○郭公雲居に高くきこえあげ　源平盛衰記[illegible]居る神歌を引用。

○いざといひし云々　古今集卷十八雜歌下に「ふんやの康秀が、三河のぞうになりて、あがた見にはえいかで立たじやといひやれりける返りごとによめる、わびぬれば身を浮草の根を[illegible]誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ」

○うきしよごと　浮いた噂。

○平忠盛朝臣の云々　平家物語、巻第一に出て居る。「有明の月も明石の浦風に波ばかりこそよると見えしか」よるを夜と寄るにかけたのである。

○木おろし　下総印旛郡木下、下利根川の岸。

○刈屋の大城に　三河碧海郡刈屋城で水野忠政の築いた所、後土井侯の居城。

○立ちぞよりける　衣を裁つにかけた。

雲錦集巻四

羇旅歌

八月十五夜の月見むとて須磨赤石に下りし時そのかみ平忠盛朝臣の「浪ばかりこそよると見えしか」とよまれしを思ひ出でて

赤石がた沖静かなる月影に波もよるとは見えぬ空かな

鹿島香取社にまうで侍りし時木おろしといふ所より舟にて下るに九月十三夜を見て

不盡波あらそひ立てる吾妻路の刀禰の川瀬に月をみるかな

三河国刈屋の大城にいますかる土井利徳君をとひまゐらせて去年あづまにしてのたまひ契りしことを思ひ出でて

旅衣立ちぞよりける御狩場の春のけしきも見まくほしさに

御かへし「殊更に分くるもうれし春の野の狩場のきゞす友したふ頃」

不盡山に登りけるに麓より雲のおこりけるが見るうちに立ちのぼれるを

ますらをのたけき心はおこせども雲のあしにはおよばざりけり

甲斐國より相摸のくにに越えける時三坂といふ山にて

不盡の嶺をそがひに見つゝ分けのぼる山は高ねも麓なりけり

笛吹川にて

波の音も秋のしらべと成りにけり笛吹川の水の朝風

初鴈の里にて

いつの世にたか聞きそめて名付けけむあら山中の初かりの里

伊勢に下りける道にて

いづくよりいづくと問ふをよすがにてやがて馴れぬる旅の友かな

旅のやどりにあやめの枕ゆふとて

旅ねして草ひき結ぶ枕にはけふの菖蒲もわかれざりけり

難波に下りしころ赤石に行かむとするに雨いたう降りし日井辻尙質がもとにて

たゞふりにふりぬる雨は石の上ふるごと學ぶ赤とゐるなればか

といひしかば尙質「降る雨にふるごと忍ぶ今日しもぞ道をあかしに君が行くなる

旅宿雨

○三坂といふ山　美作大庭郡三坂山。
○そがひに見つゝ　背向、後の方に見つゝ。甲斐にかけた。
○わかれざりけり　結ぶにかけた、五月の端午の日も辨へなかつた。
○たゞふりにふりぬる　降りと古りをかけた。
○道をあかしに　明石と道を明かしにとかけた。

○躬弦　安田躬弦、江戸の歌人、賀茂季鷹の門人、文化十三年正月五日歿。
○こゝらとし經し　多くの年を經た。
○二子の山　高槻市山内の山、二方に心の有る意を含ませた。
○谷川士逸翁　谷川士清の姻戚であらう。然らば伊勢の人。
○かどにめでて云々　唐土であなたの才能を賞美して高官を賜はつても、先方へ返却されてはやく日本へお歸りなさい、君よ。安部仲麿の事を思ひ浮べた作であらう。

よしやふれ草の枕の夜の雨さらずばかわく袖の露かは

旅宿夢

分けわびし野山ともなく故郷に行きかふものは夢にぞ有りける

離別歌

はたちばかりのころより吾妻に下りて住みけるにえさらぬ事有りて賀茂に歸るに千蔭春海躬弦などをはじめて人々別れを惜しみて深川といふ所にてうまのはなむけすとてあまた集ひて歌よみける次に

住みかへてこゝらとし經し故郷は行くとやいはむかへるとやいはむ

同じをり當座に

あづま路も都の空も戀しきは二子の山をゆけばなりけり

歳の暮に谷川士逸翁伊勢に歸りて春はとくのぼり待らむと有るに

あら玉の年も今年はをしからで君こむ春を待ちやわたらむ

遣唐使餞別の心を

かどにめでて高き官はたびぬともかへさひまをしとくかへれ君

江戸を立ちける日いさゝか雨降りければ上杉殿につかふまつれる女房幸

子のもとより「空だにも君がわかれやをしむらむ涙に似たる夜はのむらさめ」といひおこせければ

君がをしむ涙の雨と聞くからにぬるゝ旅路の袖もいとはじ

氣比宮つこ石塚noteの蔵麿が始めて來りてしはす朔日ばかり國にかへるを送るとて

みあれ野のあふ日は夢のこゝちしてかへる山こそまことなりけれ

雙林寺の崇順法師河内國交野渚院にしばしうつりすまむとて別れを告ぐるに

逢ふ事のかた野ながらに君も又かりにと聞くぞかつはなぐさむ

三月末つかた但馬國茂濟が國にかへるに

花とりの春のなごりにそへても又君が別れを惜しむけふかな

因幡侍從殿の旅だち給ふうまの餞別に扇掛をまゐらすとてそへたりし歌

あふぎてふ名をば頼みて君が行くいなばの山のまつとしらなむ

勅使にしたがひて菅原雪臣が江戸に下りける馬のはなむけに

むさし野に行くとしきけどかぎりある旅ぞと思へばかつはなぐさむ

〇氣比宮つこ　氣比神社の神官。氣比神社は越前敦賀町に在る、同社は今官幣大社、祭神は御食津神、伊奢沙別命。後仲哀帝を配祭した。

〇雙林寺　河内北河内郡大字渚に在る。渚院は惟喬親王の別莊、後行宮となる。御狩の折の休息所、かりにと云つたのは、狩と假とをかけたのである。

〇まつとしらなむ　行平の歌「松とし聞かば今歸り來む」に據つた。松と待つとかけ、私が待つて居ると知つて下さいの意。

〇菅原雪臣　通稱木工、伊勢の人、仁和寺宮に仕へた、賀茂季鷹の門人、文政十年十一月[illegible]日歿、本書に跋を書いて居る。

〇かぎりある旅ぞと思へ　武藏野ははてが無いが、君の旅には限りあると思へば、一方ではそれで心慰める。

哀傷歌

妙法院宮世をはやうせさせ給ひしをなげき奉るころ御園の花を見侍りて

見し君がなき春としも御園生の花はしらでや咲き匂ふらむ

猪苗代謙宜法眼は我いと若かりし時より此の道のともどちにて吾妻に住みしころも年ごとにかしこに下りて歌よみ連歌しけるにまして賀茂に帰り上りて後は夜昼となく月雪にむつびかはししをことし六月晦日ばかりみまかりにければかのなきがらを京極四條わたり大雲院にをさむと聞きてそこにまうでてよみて手向けける

筑波根のこのもかのもに馴れしよを思ひつらねてしのぶいにしへ

彼の法眼のかたみに見よとて謙庭法橋よりあふ隈川の埋木して調じし硯箱を贈れりし返事をやがて其の硯して書きて奥に

夢を今は波のよる〳〵頼みつゝ硯の海のみるめからばや

見子君の身まかり給ひけるよしさえ子のもとよりいひおこせたまひければ

今朝までは猶さりともとたのみにきこはいかにせむ〳〵

〇猪苗代謙宜　連歌師、享和三年六月二十日京都にて歿。年八十四

〇筑波根のこのもかのもに　古今集巻二十「筑波根のこのもかのもに蔭はあれど君が御蔭にます蔭はなし」に據つた。

〇謙庭法橋　猪苗代謙庭、同じく連歌師、恐らく謙宜の子であらう、文化十四年十一月、京都にて歿、年六十六。

〇硯の海のみるめ　海の海松布とかけた。

三島自寛が妻の身まかりける時

何事も人におくるゝ身にしあれど歎きばかりはおとらざりけり

若狭なる石田千穎が身まかりしと聞きて

老いらくもいまだしらぬ黄泉路をばいづこのをこの人か教へし

三宅行達の母の身まかりぬと聞きて心にもあらずとはぬよしいひ遣はすとて

いむといふ神のいがきを越えてしも君がなげきをとはまほしかる

萩原貞衛主の母君のおもひにこもりおはするをとひて

秋またで枯れしはゝその陰訪へば置き所なき袖の露かな

定就主の母都自房子の身まかりし後親しかりし人々を集めて後のわざし給ふに夕落葉といふ題にて

朝露の日を経て染めしもみぢ葉をやすくもさそふ夕嵐かな

丹後国人三丸が秋の夕の発句に「音のする雨さへふらぬ秋の暮」といひていく程なく身まかれりけるを親しくせし人々後のわざすとて歌こひければ

在りし世をしのぶ夕の袂には音せぬ雨や降りしきるらむ

○石田千穎　若狭小濱の国学者、通称時兵衛、本居大平の門人。

○心にもあらずとはぬよし云々　季鷹は神官であるから、何か神事に関係して居る時で、人の喪を忌んで訪へなかつたのであらう。

○音せぬ雨や　句意をかけて涙を意味する。

土州侯一周忌寄月無常

はかなくて入りにし月をしたひつゝ闇にまどふも幾程の身ぞ

懐舊歌

文政十二年八月九日妙法院故一品宮眞仁法親王二十五年の御忌に當らせ給ふよし仰せごと侍りしかば御墓にまうで侍りしにいましゝをりに「是れも又昔にかへせ人皆の心を種の敷島の道」と詠じさせ給ひしを御みづから書きて給はりしをさらにおもひ出で侍りてよみ奉れる

石の上ふるき世しのぶ人皆の光と君をあふがぬはなし

慈鎭大僧正六百年御忌に

今も世の民におほふや住みそめし名もよし水の墨染の袖

猪苗代兼裁法橋の三百年忌に千句連歌を謙庭法橋のせらるゝに

産の子のいや繁々に茂れとてかねてや植ゑし言の葉の種

吾妻に住みけるころ廉顯縣主の三十三年の忌にあたりければ秋の懐舊といふ題にて人々にもすゝめて都なる父のもとに贈る

思ひきや雲居の鴈の玉章に昔をかけて忍ぶべしとは

○幾程の身ぞ　いくばく生き殘る自分の身であるぞ。自分もやがて死する身であるよ。

○慈鎭大僧正　僧慈圓、天台の座主、關白忠通の子、嘉祿元年九月二十五日寂、慈鎭大師と諡を賜はつた。六百年忌は文政七年。

○今も世の民におほふや云々　慈鎭の詠「おふけなく憂世のたみにおほふかな我がたつ杣に墨染の袖」に據つたもの。よし水は吉水、東山の麓、慈鎭の住みし地。

○猪苗代兼裁　奥州猪苗代小出方村の人、宗祇門の連歌師、花の下を稱し、耕閑齋と號した。謙宜、謙庭法橋は彼の子孫であらう。

○なゝめぐり　七周忌。

○かうぶらせて　冠らせて、上につけて。

○鳥石翁　葛氏、名は辰、字は君瑞、又龍山と云ふ、鳥石と號す、江戸の人、安永八年歿、年八十。

○みわすゑまつる　神酒をさゝげ奉る。

季榮君の十七年の忌に

ながらへて君いまさばと明けくれに思ふ心の外なかりけり

むすめ八十子がなゝめぐりに花を折りて手向とて結びつく

なでしこの花もまがきに殘らずば何に心をなぐさめてまし

寛政八年正月四日教貞縣主の百五十年の忌に當れりとて彼の縣主の歳暮の歌に「樂しみのあるは世の中の人鼓に老いてはをしむ年の暮かな」といふ歌をきりて甲斐守良考縣主人々にすゝめて歌手むけらるゝに杜宇呼名といふ題にて世の字をかうぶらせてよめとあるに

世々を經てふりせぬ名をもなのるかな我が神山のやま子規

文化十年鳥石辰が三十三年の忌を保豆縣主の弔はるとて彼の翁の「八十までみわすゑまつる筆硯紙墨四つの神の御前に」とよみし歌を壁にかけて人々集へられしに此の歌を切字にてよみけるにすの字を

すゑ遠く世に殘れとて石に植ゑ木にゑり殘す水莖の跡

赤顯縣主の歌の句を分けて懷舊の心を人々よみし時うすくこき

薄くこき世のまじらひはありなめどしのぶやひとつ心なるらむ

おなじをり兼題寄月懷舊

ともに見し影ぞと思へば袖の露とひ來る月もなつかしきかな

琴に名だたる八橋撿校が百年の忌に當れりとて長谷富撿校が歌すゝめければ

琴の音を聞きしる人の絶えねばや年のを長く引き傳ふらむ

橘千蔭が十七年の忌にあたれりとて大堀正輔がすゝめて、月前思往事

むさし野のうけらが花の露ごとに玉なす月をしきしのびつゝ

裸體歌

有栖川入道一品宮に初春のほぎごと申しまつる時雪餅といふくだ物を奉るとてそを物名に

御園生の松の下枝に消え殘る雪も千歳の春や契りし

御返し同じ物の名「忍びあへず今日見そめけり梅の花ふゆきも千世の春にわかえて」

鷹司殿の常磐井どのの御園の撫子盛りなるころ人々かいつれてまうのぼりける時常磐井のみそのといふことをかくしてよめる

五月雨のをやみもしらず降る時は蘭のみぞ殘る庭の池水

○八橋撿校　名は城談、陸奥岩城の人、京都に出て箏曲の大家となつた、法水及び玄恕の門、貞享二年六月二日歿、七十二。

○琴の音を云々　絶え、引き傳ふる、皆琴の縁語。

○橘千蔭が十七年の忌に　千蔭の歿年は文化五年であるから、十七年忌は文政七年に當る、月日は九月二日。

○うけらが花　蒼朮の花、千蔭の著書の名に因んだのである。

○しきしのびつゝ　頻りに想ひ起しつゝ。しきは玉の縁語。

○裸體歌　裸は雜と同じい。

○雪も千歳の　ゆきもちの四字が入れてある。

○降る時は蘭のみぞ殘る　ときはゐのみそのの八字が入れてある。

有栖川宮の御前に孔雀ひえ鳥の居たるに此の二つを物の名によめと仰せを蒙りて

あなかしまひえとりちらし村雀にくしや藏のうちに入りきて

文政十年霜月許り濱松侍從殿深泥池わたりに鷹狩におはししにつぐみを三十羽鳥付木に付けて御得物は多からめどと書きてつぐみを物名に

池廣み居つく水鳥はさはなれど猶とりそへむ君が家づと

御かへしおなじ物の名「けふぞしる水沼にかづく水鳥にかくとりそふる心ふかさは」

中務卿親王の御前に初春のほぎごと申しまつる時故一品宮にも奉りしことを思ひ出でて雪餅といふくだものを奉るとてそを物名に

茂りあふ竹の園生はかぞふ手のたゆきも千年萬代の春

大島有馬允むす子の著袴を甲子の日すとて大國主の御かたを繪書かせて歌こへるに

さか木のえねぎかけそむる白ゆふにしるくも有るや千世の行末

青木行敏家に集ひて當座に物名、かるかや

みなづきの照る日もしらずいかるがやとみの小川にけふはくらしつ

○ひえ鳥　ひよ鳥と同じい。

○ひえとりちらし云々　稗とり散らしにひえ鳥が詠み込まれ、にくしや藏に孔雀が詠み込まれて居る。

○鳥付木　鳥を贈るため花木につけしもの。

○かぞふ手のたゆきも千年　數へる指もだるくなる時。たゆきも千歳[illegible]詠み込まれて居る。

○甲子の日　きのえねは大國主神、俗に大黑天を祭る日となつて居る。[illegible]

○さか木のえねぎかけそむる　きのえねが詠み込まれて居る。

○いかるがや　刈萱の文字が詠み込まれて居る。

千宗室家にて茶一ふくといふことを物名に

去年降りし雪だに消えぬみやま路やいつふく風に花の咲くらむ

甲斐國有恩法師國に歸らるゝ馬のはなむけに加賀煙草をおくるとてそを物の名に

我がかたはこめて霞に見えずともそふるこゝろの立ちおくれめや

安久縣主よりぬなはにそへて「くちぬ名は千里の海の外までもあるべき君をしたはざらめや」と有るかへし、同じ物名

君を我が友ぞといかでおもふらむ世々に朽ちせぬ名は持たずして

つゝじをかくして春を惜しむこゝろを

咲き殘る藤山吹を行く春のなごりと見つゝしのぶころかな

梶川常清がりまかりけるに鳥かぶとの花を瓶に入れけるを見てそを物名に

巣だちせぬ軒の雀をとり飼ふとあなかま騒ぐ里のうなゐご

幡枝圓通寺の花盛りなりとて縣茂縣主より「君も又さそはれきませゆかではたえたへじとおもふ花の山路に」とあるかへし

色も香もさぞなとおもふ世の塵は絶えたる寺の山櫻花

(一)千宗室　裏千家の家柄、代々茶道の師匠、茲にあるのは五世認得齋宗叟であらう。

(一)ぬなは　蓴菜、じゅんさいと云ふ水草、食用に供する。

(一)つゝじをかくして　つゝじを歌の中に詠み込んで。

(一)鳥かぶと　かぶと菊、根はふしと稱し毒薬となる植物。とり飼ふとにとりかぶとの文字が詠み込まれて居る。

(一)幡枝圓通寺　山城愛宕郡岩倉村字幡枝に在る寺、後水尾帝の女御の山莊を寺にした。臨濟宗。

播磨の長治稲義が來りし時若狹の熊川葛をねりて出しければそを物の名にして「松のみか岩の上にも種おほくまかば楠とておひざらめやは」とよみて見せければかへし同物名

言の葉も心の種をはかりなくまかば奇しき花や咲くらむ

福井醫博士に杉火桶を贈るとてそを立ち入れて

君にわが契りおきてし秋もすぎ日をけふよめばもゝか經にけり

月雪花

山ふかみたづきもしらず行きくれて此の夜は長しいかにかもせむ

弓箭弦的ゆかけ

大日本神代ゆかけて傳へつる雄々しき道ぞたゆみあらすな

鳥名十

うかりつる身をしわすれて終夜とひきし時をしきしのびけり

魚名十

こひしさはいかにしてはたなぐさめむしひてむつぼむはせあゆめ駒

一二三四五

出でてこし家路は遠し椿市にさむしこがらし心してふけ

○熊川葛　若狹遠敷郡熊川村で出來る葛。
○種おほくまかば楠とて　くまかはくすの六字を詠み込んである。
○もゝか經にけり　日を今日數ふれば、百日たつた。秋もすぎ日をけふに杉火桶の文字が詠み込まれて居る。
○山ふかみ云々　たつきに月、行きくれてし雪、夜は長しに花。
○大日本云々　大やまとに箭的、神代ゆかけてにゆかけ、傳へつるに弦、たゆみに弓。
○うかりつる云々　鵜、雁、鶴、鴛鴦、鷲、鳶、雉子、[illegible]、[illegible]、[illegible]の十の鳥名。
○こひしさは云々　鯉、鯖、烏賊、はた、鮫、しび(鮪の大なるもの)、鯥、[illegible]、沙魚、鮎の十の魚名。
○椿市にさむしこがらし　一二三四五とつゞけて詠み込まれた。

六七八九十

山しろく越路は千重に雪ふればかへさやいそぐつくしふな人

詠雪廻文歌

白雪はなへつゝふども小野山や野を求めつゝ経なば消ゆらし

慈延法師に二十年ばかり隔てて嵐山の麓にてめぐり逢ひて詞をかけしに誰にかといへりければよみて見せし旋頭歌

面影はわすらるばかり老いにたれども花を見る心は猶もかはらざけり

かへしせどう歌「かはたれとをしへし人のあればこそあれ君も久我が面影を忘れやはせぬ」

俳諧歌

二月はじめ淮御堂のとめこかしの梅を見にまかりけるに門さしたりければ

あけぼかし梅盛りなる山里にとづるも門は折にこそよれ

橋千蔭がもとより撫子の種を乞ひにおこせしにつかはすとて

都にて蝶よ花よとなでしこをあづま男の手にまかすなり

○山しろく云々　しろくに六、越路は千重に七八、つくしふな人に九十。

○廻文歌　上より讀んでも下より讀んでも同じ文句となる歌。

○かはたれと云々　彼は誰々と教へた人があつたればこそ、わかつたのでせうが、あなたも亦私の顔を忘れて居なかつたでせうか、いや大方教へる人がなければ忘れて居たでせう。

○とめこかしの梅　求め來かしの意味でつけられた梅樹の銘。

○折にこそよれ　場合によると、折りにとかけた。

○都にて蝶よ花よと云々　撫でて育てしと、撫子をかけた。京女郎に吾妻男の俳諧を用ゐたのだ。

富小路殿より猫子を給ひければ

雲の上近くうまれし猫の子はちをはなちてぞ置くべかりける

氷の上に蛙をかきしかた

あつ氷結びし日より水に住む蛙も水をみずに住みけり

子の日の野邊に行かむと出でこし人々にそゝのかされて

春の野の子の日にけふはいざといひて松より先に引かれつるかな

殘雪

年月は去年と暮れても殘ればゆきおくれぬといふべかりけり

長歌

掛卷毛恐伎把院乃御門能六十乃御賀廼新承李而社參志侍氣流時廣前爾而思

續侍歌並短歌

倭文當萬幾　賤しき身すら　神山の　山のかひ有る　御代にあひて　あやに
恐き　みことのり　うけたまはれる　このたびの　數にはもれず　幣奉り
木綿取りしでて　龜の尾の　岩根踏みつゝ　鶴が岡の　松の木陰に　立ちな
らし　千年萬代　くり返す　正木のかづら　眞幸くて　榮えいませと　祝詞

○ちをはなちてぞ　地下と乳とをかけた。

○松より先に云々　松を曳くより先に、人々に袖を引かれた意。

○ゆきおくれぬと　行き遅れぬと雪遅れぬとかけた。

○しづたまき　賤しきの枕詞。

○山のかひ有る　山の峽と、生けるかひあるとをかけた。

○正木のかづら　まさきくと云はん序詞。

讃み　歌奉り　神籬に　祈り奉れば　洞道中の　たづにも我が身　しかねば

や　雲居に聲の　聞えざるらむ

反　歌

鶴龜の千世萬代と幣むけて祈る誠は神ぞ知るらむ

奉賀陸奥國守大祖母藤夫人六旬鶴算歌並短歌

掛けまくも　ゆゝしきかも　いはまくも　あやに恐幾（かしこき）　八隅しし　吾が大王

の　天の下　申し給へる　大殿に　あれまし給ひ　内日刺す　都を出でて

鳥が啼く　吾妻のくにに　國はしも　さはにあれども　陸奥を　しらし賜へ

る　君にしも　たぐひ給へば　岩くやす　かしこけれども　御心を　芳野の

川に　簗（やな）打ちて　いを取る折に　柘枝（つみのえ）と　化りてよりけむ　仙女の　昔もし

るく　二並の　立並びまし　鴛鳥の　息長川（おきながかは）の　常とはに　絶ゆる事なく

宮城野の　樹下露に　民草も　濡れとほらむと　朝宵に　ねぎまつりしを

いかさまに　おもほしめせか　世の君も　わく子の君も　百萬　千萬長を

古衣　うち捨て給ひ　久方の　天しらせれば　すべをなみ　幼きみまを　誰

鳥の　羽ぐゝみ給ひ　櫻木の　彌繼々に　つぎませる　家をも名をも　あら

金の　地におこさす　國安く　蒼生（たみ）をおこし〳〵　讃の　千ゞ数多に　重ねつ

○洞道中の云々　仙洞御所の鶴にも及ばぬ我が身であるから、鶴の聲は雲居高く聞えるが、我が祝ふ聲は雲の上までは聞えぬであらう。

○八隅しし　安らけく治められる

○吾が大王の　わが大君の。

○申し給へる　治め給へる。

○内日刺す　内日さす、都の枕詞。

○たぐひたまへは　添うて居らるれは、夫婦となりて居らるれは。

○岩くやす　かしこしの枕詞。

○芳野の川に簗打ちて云々　懐風藻に出て居る傳説、吉野山中で味稲と云ふ男が簗打つて魚を捕る時、仙女柘枝となつて流れ來た、これを手に把れは美女と化し、そこで夫婦となつて住んだ。萬葉集卷三にこれを題材とした歌がある。

○柘枝　つみのえ、山桑の枝。

○世の君もわく子の君も　主人の君も、若君も。

○天しらせれは　逝去せしを云ふ

○みまを云々　御孫を養育されて

○櫻木の　つがのき、づぎ〳〵と

○茄兒自物　うまじもの。
○仙遊臺　やまびとのうてなと、仙遊臺と云ふ地名を含める語。
○風早の　かざはやの、風力の強い。
○金葉にも　もみぢのはにもと訓ないであらう。
○かきつめましし　かき集められた。
○歸りのぼりて云々　一寸京都に歸りて來て賀茂社に參詣して。
○はゝそばの　母の枕詞。
○ちゝのみの　父の枕詞。
○むらぎもの　心の枕詞。
○鳥が鳴く　あづまの枕詞。

一をさめ給へば　物部は　鞆の音たてず　國民は　腹鼓うち　大船の　頼みまつりて　茄兒自物　一つ心に　はふ葛の　いやとほ長く　仙女の　經にけむ千歳　萬代に　あえましくて　賢樹葉酒　榮えまさねと　百傳ふ　六十の今日より　祝ひつゝ　祈りまつれり　そこをしも　おもへば昔　仙遊臺と城をば　劍太刀　名に負せてし　言のよろしさ

反歌

雨のごとうるふ惠みに知ろしめす國内こと〴〵うるふかつとめや

俊成卿千載集撰び給へる形を見て作歌

掛卷も　あやに恐き　皇祖の　御言たまはり　風早の　金葉にも　まさるべき　詞の林　分け入りて　かきつめましし　言の葉は　時雨におせず　霜おけば　枯るゝ時なみ　世々をへて　千年の今に　到るまで　讃へぞまつる　千載てふふみ

あづまよりあからさまに歸りのぼりて御社に詣でまつりてよみて奉りける歌並短歌

はゝそばの　母が手はなれ　ちゝのみの　父に別れて　むらぎもの　心にもあらず　鳥が鳴く　あづまの國に　はつかなる　ゆかりもとめて　すまひこ

し　月日の数を　およびをり　かき数ふれば　あら玉の　としも八とせに
成りにけり　かくても身には　あふひ草　木のねざしを　忘れねば　あけく
れひとり　うちひさす　都の空を　仰ぎつゝ　ねぎのみかけし　神山の　や
まのかひしも　ありそ海の　深きめぐみし　もらさねば　賀茂の川浪　立ち
かへり　仕へまつりて　玉くしげ　あけの衣も　ひとしほの　色そふ春に
あへるかしこさ

反歌

さらに此の春をむかへて一すぢにあふぐ心は神ぞしるらむ

○およびをり　指を折つて。
○あふひ草　葵は賀茂神社にゆかり深い草である。
○立ちかへり　浪の縁語。
○玉くしげ　あけの枕詞。
○あけの衣　朱の衣、五位の著る衣である。
○ひとしほ　あけの縁語、一入と一層とかけた。

わが賀茂大人、早くよりよみ出でさせ給ひつる、花の雲の匂ひ深く、紅葉のにしきの八入（やしほ）にまさりし、ことのはの、散りうせむはあたらしきわざなれば、板にゑりて世にとゞめばやと、長治翁のとしごろまをし給へるを、許し給はざりしに、こたび強ひてねぎたまへば、いさゝかはとて與へ給ふを、ついでをわかちて雲錦集と名づけたまふを、拙き筆して書きしるすは、

隈川漁者　平　春蔭

○ついでをわかちて　順序をわけて、整理して。

○平春蔭　鈴木春蔭、名古屋の國學者。

○こゝらことぐ\しう云々　澤山仰山らしく書き連ねたのは。
○それらのつらに　それ等の人と同列に。
○むづかられて　苦情を言はれて
○鼻突きてひそまりしは　長上の人に不興を蒙りて蒋伏したのは。
○それよりこなた　それ以來。
○花紅葉のした陰に云々　李鷹翁の門下の人々の。

今は昔越中介直兄縣主（今遷任、伊豫守）中務少錄宗岡行達、左兵衞大尉宗岡行蔭、藤原康紀、おのれ霽臣等集ひて、大人の詠草の打ち亂れたるを、部を分ち書き清めよみあはせなどせしついでに、うち謀りて誰がしは序かけ、くれがしは跋をなど定めて、さて板にゑるべくやと、雲錦に聞えしかば、あざ笑ひて、あらをさなの言ひごとや、家集などいふものをすり卷にせむことは、もゝとせの後なりともなにかはおそからむ、さるを今の世には、あはたゞしうさくら木を費し、剩へ序や跋やこゝらことぐ\しう書きつらねたる、みる目もうるさくうたてしきが有るを、それらのつらに翁をもいれむとや。あなをさなとむづかられて　皆鼻突きてひそまりしは、三十とせちかくも成りぬらむ。それよりこなたいひそゝのかす人、はたなきにしもあらねど、相はかりし友は、大方この世の外の人となりて、長らへたるはいよの守と己のみなれば、すべなきをくちをしきことと歎きわたりしを、こたび長治のすけよしおりたちて、せちに乞ひ得て、かくものせられしは、花紅葉の下陰に、立ちかくるるどちの喜びなりけり。さて先こゝなみらこは、ゆるされざりしことを、此

ぐれたるを。

○菅原雪臣　垣本雪臣、通稱貢、若町と號す、伊勢の人、京都に出で仁和寺宮に仕へ八。伴蒿蹊、橘千蔭等、及び本居に學んだ。文化十年十一月三日歿、年六十三。

逕すけよしにしもうなづかれしは、この人の齢のたかきと、學びの廣たけたるると、志のまめなるると、うちあひたるつよさには、さすがに大人も負けてゆるされしにこそと、なか〳〵に鈍く、且は此のこと思ひおこし乍ら、はたさで世を早うせし人等も、苔の下に手うちて取りよろこぶらむと思へば、なみださしぐむばかりうれしくて、うめきいでてし一言を、やがてこゝにものせよと、人のいふまゝに書き付けしが跋文めけるを、大人の見られなば、うるさきこととにがまれやせむ。あなかしこや。

御室宮人　菅原雪臣

雲錦翁家集 終

柳園詠草

石川依平

柳園詠草上

春歌

立春

梅の花きのふよりけにかをるなり春立つけふの風やまちけむ

正月五日御城にまゐりてよごとまうしをはりて後和田氏にてみあへたまはりけるついでによみて出しける

君が見む千世をもこめて松の尾の御城の上高く霞む春かな

貴賤迎春

雲鳥のあやのたもとも麻ぎぬもゆたかにかへる春のはつかぜ

子日

小松ひくたよりにとひし都人庭の若菜もつみてそへなむ

鶯出谷

司馬の野は若菜もゆやと鶯もよし野の奥を鳴きて出づらむ

山家鶯

○きのふよりけに　昨日よりもきはだつて。
○よごとまうし　祝詞を申し。
○みあへたまはりける　御饗應賜はつた。
○雲鳥のあやのたもとも　雲鳥を織り出した綾の袂も。貴き人をさす。
○ゆたかにかへる　おだやかにひるがへる。
○たよりにとひし　小松曳きに來たついでに訪ねた都人。
○司馬の野　萬葉集巻十一「國栖等が春菜摘むらむ司馬の野のしばしば君を思ふ此の頃」の上半などに思ひ寄せ[illegible]。司馬の野は大和の吉野郡吉野[illegible]の野。

うぐひすの聲よりとけて山里の軒端の雪も岩たゝくなり

梅

うぐひすはしらで出でにし山かげの梢匂ひて梅咲きにけり

したしきもうときもいはず梅の花かをるあたりはとふべかりけり

閨ちかくうめかをる夜は手枕のすきまのかぜも嬉しかりけり

朝梅

朝牀にうめこそかをれ終夜（よもすがら）枕のあたりひまもとめけむ

すきまもる風なつかしき梅が香に春の朝戸はいそがれにけり

月前梅

朧夜のかげもにほへる梅が香は月の空まであくがれぬらむ

月夜に梅の花を折るといふことを

わがやどのものなりながら梅の花月夜を淸み折りてけるかな

水邊柳

萌え出でし岸の柳のけぶるよりかげゆく水もぬるみ初むらむ

春雪

○すきまのかぜも嬉しかりけり　隙間から入る風は寒くいやなものなのに、梅かをる夜は、却つて嬉しくあるよ。

○朝戸は　朝戸をあける事は。

○月夜を淸み折りてけるかな　月夜の淸さにめでて、自分の家の梅であるから折る必要もないのに、つい折つてしまつた事よ。

○國巣人の　國栖人とも云ふ、大和吉野山中の住民、前出、萬葉集

○冰にかへす　再び冰にあともどりさせること、田を耕し返すことにかけた。

○しるはの磯　遠江榛原郡白羽、御前埼村の西の海岸。

○心いられのはしり火や　心のいらいらする火と、[illegible]走る火とをかけた。

○むらごなりけり　斑濃であるよ、同じ色で濃淡あるを云ふ。

○[illegible]山。

○はら山　遠江[illegible]山。

野残雪

下草はみどりをいそぐ春の野に心ながくものこる雪かな

餘寒

水口の音聞きそめし荒小田を冰にかへす山おろしかな

春風解冰

かづらきの峯の春風ふくなべに冰とけゆく榎葉井のみづ

夕霞

わかめかるしるはの磯の夕和(ゆふなぎ)に霞める末や伊豆の遠山

山霞

雲とみむ花のさかりや近からし木深く霞むみよし野の山

名所霞

隅田がはわたりせ遠く霞むなりきのふは見えしをつくばの山

畑やくを見る

賤の男が心いられのはしり火や片山畑をやきとやくらむ

春日望山

春の色はむらごなりけり小笠嶺にたつや霞の末のはら山

夕春雨

うぐひすはねぐらにかへる夕ぐれの軒端さびしく春雨ぞふる

春雨夜靜

花さかばわけむ野山の木陰までおもひ殘さぬよはの雨かな

山家春雨

しづけさをことゝ世にふる山住みの心にかなふ春のあめかな

春月

椿さく巨勢の春野に行きくれて霞む川瀬の月を見るかな

野春草

處女等がつみしうはぎは時過ぎて小草花さく春日野のはら

岡若草

美湯の上の木の下草の深みどりわきて春めく射狹庭の岡

列見

つらなれるみどりの袂ゆたかにとかざしの藤の陰賴むらむ

春曙

けふもまた花にくらせど霞むらむ遠山まゆの曙のそら

○こゝと世にふる　靜寂を事として世をすごして居る。

○巨勢の春野　大和高市郡[illegible]村、萬葉集卷一「巨勢山のつらつら椿つらつらに見つゝ偲はな巨勢の春野を」に據った。

○うはぎ　嫁菜（鷄兒腸）の異名。

○美湯の上の　みゆのへと訓ず、萬葉集卷三山部赤人伊豫温泉の作歌に據った。「美湯の上の樹むらを見れば」とある。

○射狹庭の岡　伊豫道後のいさにはの岡。同じく前の歌に出た。

○海老名の瀧　三河設樂郡海附老近い瀧であらう。海老名といふ地名は相模高座郡にもある。

○ふしみをたちて云々　たちは袖の緣語。ふしとたちとの照應。伏見は桃の名所。

二月ばかり海老名の瀧にて

阿毘名川そひの柳の陰とめて瀧の絲をも結びつるかな

雉

つゝじさく片山岨の夕ばえに妻こひすらしきゞすなくなり

雲雀

枝高み折らでわがこし山の端の花より上に雲雀なくなり

遲日

長き日をたがおこたりの夢ならむ花の梢をさらぬこてふは

菫

野べみれば雲雀の牀も匂ふまで芝生の菫花さきにけり

蕨

をちかたのかげろふ燃ゆる野のへには今はわらびも老いぬらむやそ

菜花をみて

花にさく野べのすゞなは飛ぶ蝶のたはむれ草とつみ殘しけむ

桃

朝つく夜ふしみをたちてゆく袖の匂ふは桃の雫なりけり

花

百鳥の聲おもしろき春の日に吾がまつ櫻咲き出でにけり

春の日の長きを時とさきそめし神代うれしき山櫻かな

やまがつもつまぎにそへて一枝はをり過ぎざる花ざかりかな

花ちらば羽風のとがと鶯は櫻ひとつにとまらざるらむ

花ゆゑはかゝらぬ山もなかりけり春のこゝろや霞なるらむ

としごとのあいなだのみにかゝるかなよし野の山の花のしら雲

あまたとし雪とふりぬる言の葉をあたら櫻にかけてけるかな

ながらへて六十の春の花もみつ老はうれしきものにぞ有りける

朝花

咲く花の雫にぬるゝ妹が門わすらるまじきあさけなりけり

花有遲速

けふとはぬ人や待つらむ櫻花ときもおそきも心ありけり

山花

春ごとにおかぬ心をしをりにて花に分けいるみ吉野の山

わしのすむおら山風もなつかしくかをる高根の花ざかりかな

〇をり過ぎざる　折ると、時機を見のがさぬとかけた。
〇羽風のとがと云々　古今集卷二「木傳へはおのが羽風に散る花をたれにおほせてこゝら鳴くらむ」に據つた。
〇花ゆゑは云々　花のために霞のかゝらぬ山もない事よ、春の心は霞であらう。心のかゝると霞のかかるとかけた。
〇あいなだのみ　あてにならぬ心だのみ。
〇雪とふりぬる　雪の如く降ると古るとかけた。
〇あさけ　朝あけ。
〇あかぬ心をしをりにて　花に倦かぬ心を案內者として。

山家花

なげきのみこるとおもひし山がつが軒端の櫻花咲きにけり

花をうゑて

契りありて垣内に匂ふ花ざくらちよの春知るねざしともがな

河野氏の花の宴せられける時松間花といふことを

枝かはす小松がうれもかをるまで垣内のさくら花咲きにけり

ちかきわたりの寺のしだりざくらを河野氏の見にものせられける時よみて出しける

わくらばにけふこし君は絲櫻よせつなはへてひきやよせけむ

花契多春

山櫻あかぬこゝろにまかせてはひこ枝花さく春も見てまし

暮山花

家とほしいまはの心夕ばえにたゆたふ峯の花のしら雲

花のもとに弓いる

ふりおこす眞弓の弓弭心せよしづ枝の花のちらまくは惜し

月のまへに花のちるを惜しむといふことを

○なげきのみこるとおもひし　歎き悲しみにのみ滿てると思ひし、なげきを木とかけ、樵夫であるからこると云つた。

○わくらばに　稀に珍らしく。

○よせつなはへて　引き寄せるための綱をのばして。ひきやよせけむとは、絲櫻の絲の縁語。

○ひこ枝花さく云々　枝から又更に出た枝に花咲く春をも長らへて見たいものである。

○家とほしいまはの心云々　家路いまこそ歸らうと決心した心も、夕映に漂うて美しい峯の花の雲を見ると、歸る心もにぶるのである。

○ふりおこす　奮ひ起す。

有明の月のゆくへの薄雲にまがひはてても散る櫻かな

禁中落花

こゝのへのみはしの木末風ふけばうへゆるされてちる櫻かな

仙院落花

この庭は花のちりにもけがさじと岩根このもとはゝき取るらむ

河上落花

六田がはちりて流るゝ花みれば吉野の春も水のしら波

苗代

八束穗に秋はなびけと青柳の枝きりおろしゆたねまくらむ

杜若

いかなれば水沼にねざす杜若うへなき衣の色に咲くらむ

山吹

縣見に春くる人のかざしにとうゑし山吹花さきにけり

よしのがは早瀬の波も山吹のしなふ岩ねにこゝろよすらむ

さし捨てし岸の筏におり立ちてをらばやをらむ山吹の花

ひさごとる袖にみだれて山吹の花も浸まるゝいさらゐの水

○みはしの　階段の。
○うへゆるされて　殿上に花の散るのを、昇殿を許されたと戯れたのである。
○六田がは　大和吉野郡吉野川の一部。
○秋はなびけと　柳の縁語。
○ゆたね　齋種、又は五百種かと云ふ。稲の種に多く用ゐる。
○うへなき衣の色に　紫をさす。
○縣見に　田舎を見に行くこと。
○いさらゐの水　わづかに湛へた淸水。

やまぶきの花の末こすさゞら波かくて春をもさそふなりけり

池藤

いろふかき影みる池のみづからも思ひあがりて藤や咲くらむ

人舟にのりて藤の花みたる

春の色のそこひもしらぬ藤波の花咲く岸に船や寄せまし

三月ばかり弘道が家にやどりけるとき川べにいでて

ふぢの花おぼろにみゆる川隈は月さへよどむところなりけり

海石榴

足曳の八峯の椿はるされば山下ひかり花さきにけり

梨花

しら波の梢おほふとみるばかり苧生（をふ）の浦梨花咲きにけり

暮春

嵐ふく花のわかれをしたふまに春さへ終にさそはれにけり

暮春月

花ちりて梢色なき山の端にひとり有明の月ぞかすめる

○いろふかき影云々　池水に映れる葉の色濃き影に、藤も思ひ高ぶつて咲くであらう。水とみづからとをかけ、ふかきは池の縁語、あがりては藤の縁語。

○そこひもしらぬ　春の色の奥底の測り知られぬと、水の底の知られぬとかけた。

○弘道　国学者の山中弘道であらう。通称は[illegible]、駿河府中の人、本居春庭の門人。

○苧生の浦梨　古今集巻二十「苧生の浦に片枝さし覆ひなる梨のなりもならずも寝て語らはむ」に據つた。伊勢歌となつてゐるが古来浦の所在未詳。

夏歌

中村豐足が家にて歌よみける時首夏川と云ふことを

太田がは岸のふぢ波花ちりて鮎はしるせに夏はきにけり

更衣

匂ひ香の殘れる袖をぬぎかへてふたゝび花にわかれけるかな

新樹

神まつる卯月になればならの葉も葉盤(くぼて)さすべく茂りあひにけり

しづめおく風のすきまをあらせじと御射山(みさやま)木立青葉さすらむ

里卯花

雪消えて今も春なる花はあれとうつぎ時めくさらしなの里

布さらす野洲の里わの垣つゞき咲くや卯つぎも栲の穂にして

家に卯の花さけり

月雪ととはるゝをりは卯の花も垣のくづれや面なかるらむ

殿の御前にて立田山に青葉しげりたる所といふ題をたまはりてこれが歌をとおほせられけるに

○太田がは　[illegible]郡、大日山を發し、新潟港に到り海に入る。

○鮎はしるせに　鮎のはしること、夏の來にけりと對照させた。

○ふたゝび花にわかれけるかな　一度は花に別れ、二度は花の香殘れる花衣との別れ。

○葉盤　くぼて、葉椀が正しい。神前に供ふる物を盛る具。葉をならべ竹で綴つて盤のやうにしたもの。

○御射山　信濃諏訪郡富士見村にあり。諏訪神の七月狩を行うた地。

○布さらす云々　白布を曝す野洲の里の垣つゞきには卯木も栲の色の白く穗に出て咲く。

○月雪ととはるゝをりは云々　卯の花の盛りをめでて、月夜のやうだとか、雪のやうだとか云はれて訪はれる時は、卯の花垣の破れた箇所が、流石に卯の花にとつて面目ないであらう。

○をちかへり　引き返し又。

○餌香の市に云々　あたひにかへぬ、價・取引のできぬ、市の縁語。

○谷の柴垣しばしばに　しばしばに續いた音の繰返し。

○稻日妻　印南都麻、播磨の地名で、浦の枕詞。

○おのがさつきの　時鳥は五月のものと考へられて居るからだ。

○こもり妻　親の監視がきびしくて逢へぬ戀人をいふ。

○雲居にいそぐ　都の皇居を意味する。

くれなゐにゝほふ木の芽も立ちまじり立田は夏も錦なりけり

ほとゝぎすのうたあまたよみけるうち

ほとゝぎす鳴く一聲にやすらへば花にくらししこかげなりけり

ちぎりあればまたでも聞きつほとゝぎすあふち花さく山かげにして

をちかへりさやかに名のる二聲に思ひさだむるほとゝぎすかな

おもほえず初聲聞きつ時鳥嬉しきものはねざめなりけり

山もとのあふち花ちる朝雨に聲もこぼるゝほとゝぎすかな

餌香の市になのりて出づる時鳥あたひにかへぬ初音なりけり

郭公波路をくらき一聲のゆくへにしらむ沖つしま山

いほりさす谷の柴垣しばしばにことしは聞きつ山ほとゝぎす

世にありとしられぬいほも時鳥汝がなく里の外ならなくに

郭公片戀すれや稻日妻うらさびしげにさ夜更けてなく

ほとゝぎすおのがさつきのつゝじ花下照る庭にきてもなかなむ

こもり妻まれにあふよを時鳥空にしるとも人にもらすな

都時鳥

玉しきて待たるゝかたと郭公雲居にいそぐ初音なるらむ

羇中時鳥

ほとゝぎす聞きつとつげむ人もなし草の枕のよはの初聲

名所時鳥

あしやかた月になきゆく時鳥をかべの宿の松やとふらむ

朝時鳥

さみだれの晴るゝあしたのほとゝぎす雲はなれゆく空に鳴くなり

佐夜の中山わたりの人のもとより此のごろはしば／＼鳴くなりほとゝぎす聞きにものしたまへなどいひおこせければ

時鳥なくとつぐなる言の葉は初音よりけにめづらしきかな

榛葉俊夫が家にて五月ばかり歌よみける時ほとゝぎすの二聲三こゑなきつるはいとめづらかにて夜ひとよよみつゞけけるうたどものうち

さしてとふかたはいづらぞ時鳥小笠高峯を夜はに出でつゝ

まつとしもなくて聞きつる郭公いまよりかくていざこゝろみむ

卯月二十日ばかり匂坂千足がもとにつどひて歌よみけるに宵すぐる頃前栽の梢にほとゝぎすのなきければ人々めづらかにおぼえてあるじの北おもてにものしけるをとくこなたへとつぐるほどにはやう過ぎいにけりあ

○をかべの宿　遠江濱名郡。

○佐夜の中山　遠江小笠郡日坂から、榛原郡菊川に行く峠。

○小笠高峯　遠江小笠郡の山。

○北おもて　北向きの部屋。

るじ出できたりてねたう聞かざりけることといふ〳〵とばかりながめる
たるに又二こゑなきわたりけるはいとめづらかになむさるはけふよめる
歌どももこの鳥を題にてなりければをりにあひてたれも〳〵めであひつ
つよめる

時鳥誰がうへならぬ言の葉を空にしりてや今宵とふらむ

みな月ばかり秋葉山にものしけるとき時鳥のしば〳〵なきけるを聞きて

一聲をきのふは待たし時鳥汝がすむ山に我はきにけり

早苗

我が宿の垣のくちなし花さきぬいそげや早苗時過ぎぬまに

牡丹

ふかみぐさ色香にとめる花なればさかりの程も久しかりけり

橘

うゑしよも今はむかしといふばかり庭の橘陰ふりにけり

池菖蒲

あやめ草我より先に刈りそめし汀や池のあさみなるらむ

水鶏

○ねたう聞かざりけることと　殘念にも聞かなかつた事よと。

○誰がうへならぬ　外の誰でもない、即ち自分自身を題にして詠まれる。

○秋葉山　遠江天龍川の東岸。山香郡犬居村。

○ふかみぐさ　深見草、牡丹の異名。

○あさみなるらむ　池の淺い所であらう。

垣内田に小雨そぼふる夕暮もくひなの聲はしめらざりけり

夏月

みづ枝さす庭のかつらの追風に影さへかをる夏のよの月

なでしこ

よもぎふやにげなき花の撫子はいかなる露かおほしたてけむ

露わくる汗衫(かざみ)あこめの袖の色に通ひて匂ふなでしこの花

五月雨

露ばかり晴間まち得てなく蟬の聲めづらしき五月雨の頃

螢

川水もけたぬおもひをこにこめし螢よいかにこがれわぶらむ

はし姫のこぬよをうぢの川水にけたぬおもひや螢なるらむ

照射

ともすと立ちならしばの下露を弓とる袖にいくよかけけむ

夕顔

夕顔はいぶせき宿にさきにけり塵だにすゑぬ花も有る世に

雨後蟬

○垣内田に　かきつだ、園ひの中にある田。

○おほしたてけむ　そだて上げたのであらう。撫子の子の緣語。

○汗衫あこめ　かざみ、袙。かざみは汗取りの服より轉じて童の上衣として著る服。あこめは茲では童女の肌近く著る服。撫子を童子と見たてたのである。

○けたぬおもひ　川水も消し得ぬ思ひ、ひを火にかけた。

○はし姫　山城宇治橋を守る女神、嫉妬深い姫との傳說があるから、その意味に用ゐた。

○立ちならしばの　立ちならすさ楢柴とかけた。楢柴は單に楢の樹の意。

○岩もるあるじ　岩を漏ると守るとをかけた。

○ふしどとは　臥牀と竹の節とをかけた。

○ふしよかりけり　蘆の節とかけた。

○つまをれずかのめゆるはぬ云々　扇のへりが折れず、要のゆるく[illegible]

○あさくまの山　伊勢渡會郡朝熊山。

ゆふだちは雲も残らぬ山松の梢にしきる蝉の聲かな

山家泉

清水こそ岩もるあるじ我もさは此の山里に夏をだにへむ

納涼

風かよふ松かげとめてたゝずめば岩間の水も流れ来にけり

くれふかき竹の端山の下すゞみやがてこよひのふしどとはせむ

船中納涼

むらあしの葉分の風をみにしむる夕川船はふしよかりけり

みさをとる袖ふきかへす川かぜは小舟にあまる夕すゞみかな

樹陰納涼

蜻蛉とぶ夏野の末も風やどる一むら杉のかげはありけり

扇

つまをれずかのめゆるばぬかはほりはならす音さへ涼しかりけり

夕立早過

ときの間に長峯遠くゆふだちて雲も残らぬあさくまの山

夏菊

こととはに扇はなたぬ仙人のめでけむ程や夏菊のはな

夏　獸

夏草の露にふしたるさを鹿はともしにめをやあはせざりけむ

夏　川

太田がはすゞみがてらに小網させば波にぬれたるゆふかぜぞふく

夏といふ題にて

玉しける砌なにせむ夏はたゞそともの木陰にはのいさら井

わかき女どもはらへする處

大ぬさのよるせやいづこみそぎ川まだ世ごもれる秋つ羽の袖

秋　歌

初　秋

天津空にし吹きそめてゆく雲の早くも秋になりにけるかな

秋といへば袖にももろく散りそめて露は草葉に限らざりけり

七　夕

久かたの天津星合のそらごともかけてひさしきかさゝぎのはし

○こことはに扇はなたぬ仙人の　唐團扇もてる福祿壽の事であらう

○玉しける砌なにせむ　玉を敷いた砌ある玉殿高閣も何にならう。砌は軒下の石を敷ける所。

○世ごもれる云々　まだ生ひ先きながい若い女等。秋つ羽の袖は蜻蛉の羽のやうに薄い絹の袖。少女の著て居る衣の袖。「秋つ羽の袖振る妹をたまくしげ奥に思ふを見給へ吾が君」萬葉集卷三。

○にし吹きそめて　西風即ち秋風吹きそめて。

○袖にももろく散りそめて　秋の哀れを催して涙のもろくこぼれ初めて。

○そらごとも　空の事と、空言とをかけた。

○かけてひさしき　言葉をかけてと、架けてと。

七夕後朝

あまの川あくる川津の朝風は又うきせにやふきかへすらむ

司召

かきくらす心のやみのあさびらきうきよにかへる天のかはふね

相撲節会

かくて世にくちばの袖と思ひしもはえある色にそむる秋かな

玉しきの庭ふみならすめしあはせ最手(ほて)も古手(わきて)もけふやまちけむ

夜萩

秋風のやどりとのみはうゑざりき一夜もおちぬ萩の音かな

旅宿萩

こ萩さく野べ分け過ぎて何にかく萩の葉そよぐ宿はとめけむ

秋野

八千草の秋のさかりに来て見れば野守は花のあるじなりけり

女郎花

をみなへしたなびく秋は露深きさが野の奥もわけなれにけり

かるかや

○うきせ　浮瀬と憂きことをかけた。
○司召　秋季朝廷で行はれる定期叙任。京官の叙任である。
○くちばの袖　世に朽ちてしまふこと、朽葉色の袖とをかけた、朽葉色は黄色を帯びた黄色。
○相撲節会　毎年七月、朝廷で諸国から相撲人を召して行はれた公事。同月二十六日仁寿殿で内取あり、同二十八日紫宸殿で召合がある。
○最手も古手も　最手はほて、現今の大関に当る最上位の者。古手はわきて、関脇に当る。
○一夜もおちぬ　一夜も缺かさぬ

やちぐさの色にならはぬ刈かやも又一ふしと見るべかりけり

紫苑

伏庵の垣より上に花みえて心高くもしをにさくなり

葛花のさけるをみて

賤が手にひきのこされて七草の数にとらるゝ野べのくず花

朝顔

誰がなかも起きてわかるゝきぬぐの露にひもとく朝がほの花

せんざいの朝がほの盛すぐるまで咲きたるをみて

蓬生は露のひるまもなかりけりあしたながらの朝がほの花

閑庭露

とはれじの心もしらぬ白露や葎の庭に玉はしくらむ

蓬生やさこそは露のしげからめながむる袖に何かゝるらむ

蟲

秋ふかみ庭もまがきもおのが野となりはてぬとや蟲の鳴くらむ

旅亭蟲

なくむしの露の宿りはかはらじを明日のかり寝やいづこなるらむ

○又一ふしと　刈萱の節と、一特徴の節とかけた。

○誰がなかも　いかなる男女の中も。

○あしたながらの　朝のまゝの。

○とはれじの心もしらぬ　訪はれまいと思ふ主人の心も知らぬ。

○明日のかり寝や　蟲にひきかへて、自分の明日のかりの宿は何所であらう。

稲妻

しのぶぐさ葉末にすがる夕露にはかなくかよふ軒の稲づま

海邊秋夕

なにはともわかですゞろに悲しきはあしびたくやの秋の夕ぐれ

見付の驛にて内山眞龍夏目みかまろなどと共に歌よみける時秋かぜを

うらの名のいまはむかしの面影を穂波にみせて秋風ぞ吹く

野秋風

なきわたる田鶴も雲ゐや寒からしうね野の淺茅秋風ぞふく

閑居秋風

あきかぜはいたくな吹きそ草の上におかぬばかりの露の宿りを

山路霧

立ちこむる霧のみ中を秋ゆけばうべもくらぶの山路なりけり

關路霧

八重山の木々の下露したゝりて夕霧くらしあしがらの關

小鷹狩

ますらをの萩ふみしだくはつとがり思はぬ袖をすりかゆくらむ

○なにはとも　浪速と、何ともわからずにかけた。

○見付の驛　遠江磐田郡見付。東海道の宿驛。

○穂波　稲などの穂が波の如く風に戦ぐを云ふ。

○寒からし　寒くあるらしの約。

○くらぶの　暗いと近江藏部山とをかけた。

○はつとがり　初鳥狩。秋季に行ふ鷹狩、多く小鳥狩をするので、冬季の大鷹狩に對し、小鷹狩とも稱する。

○すりかゆくらむ　思ひかけず萩の花を摺り行くであらう。萩の花を摺るとは衣裳を萩の花で摺り染める事。

野鶉

露にほふ秋の末野に床しめて何をうづらの音には鳴くらむ

丸尾清謙が家にてまどゐしけるとき海邊といふことを

うらなみのまなくもかけをよせくるか秋の月夜の清きしら濱

旅泊月

うきめのみみつのとまりと思ひしはあらざりけりな波の上の月

禁中月

桐つぼの一葉ちりにし夕より月にいく夜かをすかゝぐらむ

舊都月

かげすみし清水やいづら月のみは今も高しる藤はらが上

古寺月

くまもなき秋の夜川の月影に行ひすます程もみえけり

田家月

ひたぶるに小田もる賤とみるらめど秋の月夜はあはれとぞおもふ

山家月

山住みのこゝろに殘るくままでもはらひ果つべき月のかげかな

○みつのとまり　見つと三津とをかけた、三津は攝津の海邊。

○桐つぼ　桐壺、禁中後宮の一、淑景舍、こゝでは桐の一葉とかけた。

○清水やいづる云々　萬葉集卷一に出て居る。藤原宮御井歌を思ひ寄せたのである。藤原宮は大和に在り、持統天皇八年に竣成、藤原宮の清水は今香具山の西北に在る清水であらうと云はれる。

○秋の夜川　夜川に比叡山の横川をかけた。

○行ひすます　月の澄むにかけた。

○こゝろに殘るくままでも　心に殘る曇り卽ち愁へまでも。くまは月の緣語。

家に女月をみる

あとたえし蓬が庭の夕露は月かげのみのよすがなりけり

獨見月

よひ〳〵に月のとひくる雜生はひとりずみとも思はざりけり

月不選處

水清きせかゐの底の月かげはとゐやひさごの中にしもすむ

月前松風

影すめる月の都の琴の音と聞きなすばかり松風ぞふく

月の夜舘山寺に人々つどひて歌よみけるに

世はなれし入江のくまの山寺にちりもくもらぬ月をみるかな

十五夜はくもり十六夜は雨ふりけるに

よの人のこゝろをさへにかきくらし月なくそゝぐよはの雨かな

月のうた百首よみけるうち

秋の宵月立ちそめつ我がこゝろいくよ雲るにあくがれなまし

露すがる玉ぐしの葉に照る月の光も淸し神のみづがき

秋の月よりうき雲のかゝらぬはみやまの奥にすめばなりけり

○あとたえし　戀人の跡絶えしよすがは緣と寄るとをかけた。

○ひとりずみ　獨住みと澄みとをかけた。

○ひさご　玆では柄杓の意。

○ちりもくもらぬ　塵程も曇らぬ

○玉ぐしの葉　神前に植ゑられた榊の葉。一說いはがき、瑞籬、神社の周圍をめぐる垣の樹木。

山住みの心のかぎりすましてもあくよもしらぬ月のかげかな

木の間もる月をしみれば山深く入りにし人のこひせらるはた

我ならぬ草の袂も物おもふ秋にはあへず月やどすらむ

なにごとをおもひあがりて月みれば雲ゐるまでゆく心なるらむ

かげすめる月におもへばとくちりし軒ばの桐はこゝろありけり

露しげき野はらの草のゆかりとや袖にしたしく月宿るらむ

むらさめに山路にはれて作ちるいはたの小野の月をみるかな

秋ふかき賀茂の川瀬の月みてもすままほしきは都なりけり

すむ月をうべ此の殿の光とや秋の宮人小簾かゝぐらむ

うす霧のはるゝ外山の眞木の葉に月すみのぼる信樂のさと

かばかりの月はみましや高島のかちぬの原に此の日くれずば

世はなれし竹の葉山の下庵にひとりふしつゝ月をこそまて

秋の月ゐまちふし待ちまちなれしかげもはつかになりにけるかな

引佐江(いなさえ)のきしのあしねによる木積(こづみ)あさましきまですめる月かな

こむ秋もおなじ光の月はみむ我がよのふけぞかへる峯なき

○我ならぬ草の袂も　自分は固より心なき草の葉も。草を衣と見て云ふのである。
○秋にはあへず　秋には堪へず。月を宿すとは露に月の光をやどす意で、露を草の涙と見た。
○こゝろありけり　桐の葉が散つて月影を妨げないからである。
○いはたの小野　遠江天龍川の兩岸を磐田と稱した。
○うべ此の殿の　云々　催馬樂の「此の殿はうべも富みけり」を思ひ寄せた。
○信樂のさと　近江甲賀郡信樂。
○ゐまちふし待ち　居まちは居待月で十八夜、ふし待は臥待月で十九夜の月。
○引佐江の　遠江濱名湖の一支灣いなさ江。
○我がよのふけぞ　我が年の老は

眞萩さく野守が庵の軒端までしがらみふせてをじか鳴くなり

旅宿鹿

都おもふ秋野の草の枕べになくさを鹿もつまやこふらむ

擣衣

あはれたれつゞりさせてふ蟲のねにおどろかされて衣うつらむ

美人擣衣

たをやめの玉手もすまにから衣うつや力のかぎりなるらむ

海邊擣衣

あしやがたなだの鹽風秋更けてよるもいとなくうつ衣かな

閑庭菊

いまさらに友まつ袖とまがふべく荏の庭の菊さきにけり

庭の面はよもぎが島といつなりて老いせぬ菊の花はさくらむ

菊契多秋

老いせじの契りを菊のしら露にむすびこめたる秋やいくあき

あきの夜月あかしまがきのもとに菊さけり

しらぎくのさけるやいづらませのうちはたゞ月かげのかをるなりけり

○しがらみふせて　からみつけ伏せて。

○つゞりさせてふ蟲　蟋蟀をさす

○すまに　休まずひまなく。

○あしやがたなだの　蘆屋潟、灘共に攝津武庫郡。

○よるもいとなく　夜も暇なくと縒と絲とかけた。

○友まつ袖とまがふべくとは、古今集秋部下紀友則の「花見つゝ人待つ時は白たへの袖かとのみぞあやまたれける」に據つた。

○よもぎが島と　蓬の茂れると、蓬萊山とをかけた。

○むすびこめたる　契りを結ぶと露を結ぶとをかけた。

○しらぎくのさけるや云々　白菊の色月光にまぎれて香のみかをる意。

節後菊

玉うきにうけしきのふの色はあれど菊はまがきにみるべかりけり

九月十三夜大石弘高とともに月をみてよめる

あかなくに山の端近くなりにけりいづらは秋のなが月のかげ

九月十三夜鈴木重友が新室ほがひにものしけるとき鹿の鳴きければ

小國山杉の木のまにいる月のゆくへをおくるさをしかのこゑ

故鄉紅葉

ふるさとのこゝやむかしの秋の宮今も下てる紅葉ばのかげ

瀧紅葉

多度山の岩垣もみぢ秋更けてむらごに落つる瀧のしら絲

秋雨

桐の葉のくちばが上に村雨のそゝぐをみれば秋更けにけり

山路秋行

秋風にゆくての霧はかつはれてたえ〴〵見ゆる岩のかけみち

紅葉ばの下てる山のつゞらをり程とほしとは思はざりけり

○玉うきにうけしきのふの云々　玉杯に浮べた昨日の菊の色も惡くはないがの意。節後菊は九月九日重陽の節の翌日をさす、重陽には菊花を酒に浸して飲むからである

○あかなくに山の端近く云々　伊勢物語及び古今集卷十七にある在原業平の歌「あかなくにまだきも月の隱るゝか山の端逃げて入れずもあらなむ」を思ひ寄せた。秋の長いと長月とをかけた。

○新室ほがひ　新宅祝ひ。

○小國山　遠江周智郡、小國神社がある。

○多度山　美濃國養老郡多度山。養老瀧のある山。

○むらごに落つる　紅葉の色が濃淡斑に染めて落ちる。瀧の白絲はむらごに染まる緣語。

山かけの苔路の秋の香をとめて笠たつ峯を猶や分けみむ

山家秋

眞萩ちり木の葉色つく山ざとは袖のしぐれもふらぬ日ぞなき

暮秋雲

ながめわびし夕の雲のたゝずまひそれさへをしき秋の暮かな

長月二つありけるとし

月かけもあはれ加はる有明に秋は二たびくれむとすらむ

九月のつごもりの日ゐ中わたらひして

おくてかり紅葉かつ散る此の里にことしも秋はくれ果てにけり

冬歌

初冬

もみぢばも菊も昨日の色ながら朝風寒し冬や來ぬらむ

くぬぎはら梢まばらに三日月のもる影寒し冬やきぬらむ

時雨

山の端に秋のゆくへをみはてつる昨日の雲は時雨れきにけり

○長月二つありけるとし　閏九月のあつた年。それで秋が二度くれると云つたのである。

○ゐ中わたらひ　田舎へ旅すること。

○駒なべてあじろみにこし　駒並べて網代見に來た。網代は宇治川で主として氷魚を捕る梁と簀。

○よにふるも　夜に降ると世に經るとかけた。

○をしねかりほすはての上に　小稲刈り干す八手の上に。小稲は稲と同じ、八手は稲などかけて干す木。

○氣賀の關路　遠江引佐郡氣賀、徳川幕府は此の町側の井伊谷川に關柵を設けた。

○嵐のひまも　嵐の吹かぬ間も。

○つくも草　ふさゐ草、水葱の異

駒なべてあじろみにこしかへるさに時雨ふるなりうぢの川づら

閑居時雨

よにふるもしられぬ宿の夢をさへさそひ殘さぬ小夜時雨かな

田家時雨

賤のをがをしねかりほすはての上の夕日にそゝぐむらしぐれかな

落葉

宮木きる檜山の谷の下水にうかぶはよその紅葉なりけり

關落葉

引佐山夕かぜこえて木の葉ちる氣賀の關路はゆく人もなし

殘菊

もみぢ葉のちりしく頃ぞ白菊の老いせぬ色はあらはれにける

おく霜のきゆるが上の朝風にまがきの菊も日影待つらむ

殘紅葉

まばらなる梢に殘るもみぢ葉は嵐のひまもものろく見えけり

寒草

霜こほる冬[illegible]のつくも草枯[illegible]けり

○霜さやぐ　霜に鳴る。

○椎柴をしひてもしをる　しの音の繰返し、強ひて撓ます。

○飛鳥風　大和飛鳥を吹く風、ここでは特に飛鳥川を吹く風の意に用ゐてある。

霜さやぐ野べの小草のはつ〳〵に殘るみどりもやすからぬかな

大かたのかれふと共にとも岡の篠のみどりも霜の下草

寒樹

山風の落葉にさわぐ栗栖はらさゝ栗ひろふうなゐ子もなし

寒蘆

みなと江の氷にとづる枯あしの下根や冬のとまりなるらむ

椎柴

ふくまゝになびけどちらぬ椎柴をしひてもしをる山おろしかな

氷

ひさごもてくだくばかりに大原やせかゐの水はうすごほりせり

ふゆあさき淺澤水の薄氷根芹つむ手にかつくだけつゝ

河氷

飛鳥風夜たゞさえける程みえて淵瀨もわかず氷ゐにけり

野冬月

うねの野の枯生の霜に月さえてたづが音寒き冬のよはかな

冬月近

影すがる軒のたるひやさゆるよの月のかつらのしづくなるらむ

あじろ

大君の御贄つかふと宇治川の網代のひをも心よすらむ

冬されば田上川のかは浪に身をさへよせてあじろもるらむ

月前千鳥

あら磯にくだくる波の月影をつばさにかけてなく千鳥かな

雪

山里のこの夕ぐれを人とはゞ雪より深き心とおもはむ

見わたせば夕ゐる雲もなかりけり雪に晴れたるをちの村山

禁中雪

うちはらふ大宮人の袖の香にみゆきもかをるもゝしきの庭

竹に雪つもれり家あり

かきこもる軒のむら竹をれふして伏家は雪にあらはれにけり

連日鷹狩

みかり野や昨日のみぞれけふの雪あかぬとだちはあすも求めむ

炭竈

○たるひ　垂氷、氷柱。
○御贄つかふと　大君の食料に供し奉る物に用ゐるとて。つかふは仕ふの意。
○冬されば　冬しあれば、冬になれば。
○田上川　近江栗本郡。
○みかり野　御狩野、鷹狩用に皇室で設けられた野。
○とだち　鷹狩用に鳥を集めるため設けた草叢或は澤地。

ちりまよふ雪にきほひて炭がまの煙ふきとく小野の山かぜ

一年の月の名を題にてよみける中、霜月

奥山の日かげのかづら宮人のかざしにすべきときは來にけり

冬神祇

榊葉の聲もかれせぬ神あそびいくたび霜に袖かへすらむ

佛名

御佛のいさめやゆるぶ法の師の今朝はゑひたるかへなしの酒

水仙花

こと草はかるゝ冬野の霜の色をうばひて薫る花もありけり

ふすま

池水にわなゝく聲を聞きわびてをしのふすまもふしぞわづらふ

歳暮

こむ年はかくてはあらじとばかりに今年も暮れぬあなやよの中

歳暮會友

もろともに花みむ春のあらましぞ年の別れのなぐさなりける

○雪にきほひて　雪と爭って。
○日かげのかづら云々　大嘗會、新嘗祭などの神事に、冠の笄の左右に日陰の蔓をかける風習である。
○榊葉の聲もかれせぬ云々　古今集卷二十神遊の歌「かみがきのみむろの山の榊葉は神のみまへにしげりあひにけり」などをさす。
○神あそび　神を遊び慰める意、神樂と同じい。
○佛名　佛名會、陰曆十二月十九日から三日間、禁中及び諸國の寺で佛名經を誦する式。
○かへなしの酒　攝津栖梁より獻する甘酒、上道に產する梨で造り佛名の折、衆僧にすゝめられる。
○をしのふすま　鴛鴦の衾、男女同衾の睦ましき閨を意味する、かゝる睦まじい閨に在っても、池水で寒さにふるへる鴛鴦の聲を聞きなやんで、寢づらいと云ふ意。
○春のあらまし　春の豫定。
○なぐさ　慰め。

戀歌

待戀

いくよわれつまゝつの木の下露にぬれのみぬれてあかしまつらむ

忍戀

もらさじのそのあらましやいかならむ軒のしのぶも露ぞこぼるゝ

通書戀

流れての逢瀬ぞたのむ紙屋川なほかきかはせ水ぐきのあと

占戀

おもひかねとふいしうらのうらみても逢ふことかたき我が身なりけり

顯戀

いでてこし曉月夜誰かみて名さへさやかにいひもらしけむ

久戀

岩がねの松のためしを頼みしや年へてあはぬねざしなりけむ

むつれよるすぢだにたえて戀しきはふりわけ髪のむかしなりけり

色深きこゝろをこめて花紅葉いく春秋かかこちよせけむ

○つまゝつの木の　戀人を待つと松の木とをかけた。

○軒のしのぶも云々　忍んで居てもつい露がもれこぼれるにかけた。

○紙屋川　西堀川とも云ふ。鷹峯村から出て京都右京を南流し、鳥羽から桂川に入る。

○いしうら　石に依る占、石の數又は輕重で吉凶をうらなふのである。うらみても占を見ると恨みるとをかけ、かたきは難きと固きとをかけた。

○いでてこし云々　さやか、もらし、皆月の縁語。

○岩がねの松のためしを云々　古今集卷十一「種しあれば岩にも松は生ひにけり戀をし戀ひば逢はざらめやは」に據つた。

○むつれよるすぢ　睦れ寄る道ともつれ合ふ毛筋とかけた。

○ふりわけ髪　昔少女時代に髪を頂から兩方に分け垂れた風俗。少女時代をさす。

〇あだに思ひしは　茲ではいい加減に考へたのは。

〇下とけぬ　下紐の解けぬ、うちとけぬ。

〇うらもなく馴れぬる云々　心のへだてもなく親しんだ中の戀は。うら、つま、皆衣の縁語。

〇あだ人の云々　浮薄な人は心もうはの空と空薫物とをかけた。空たきが他の方へ薫り行く如く、その婦人の心も他へ赴くのである。

〇つま琴と云々　つま琴の音の通ひし如く、通ひし中も絶えて。かき絶え（[illegible]）。

〇今はよその松風　今は他所の松風に似通はせて居るの意。松風はよその人を待つにかけた。

初逢戀

こしかたにかかる夢やは結びつるさは今宵こそにひまくらなれ

逢戀

命やは何ぞとあだに思ひしはこよひをしらぬ心なりけり

乍臥無實戀

かさねても蘆の下根の下とけぬをしのふすまはかひなかりけり

別戀

關の戸に立ちやすらへば心なくわかれはてたる峯の横雲

馴戀

よひ〳〵になるればなれておのづから門守る犬もとがめざりけり

うらもなく馴れぬる中の戀衣つまといふとも人はとがめじ

艷女遇他人

あだ人の心のうはの空だきは又ことかたにくゆりゆくなり

絶戀

つま琴とかよひし中もかき絶えて妬しや今はよその松風

絶久戀

大かたの夜がれとてこそすごしつれかくながらやは絶えむと思ひし

戀貴人

玉だすきかけじとすれど雲鳥のあやに戀しきをすの内かな

戀賤女

すきかげもみることかたき小簾のとにもれくる琴のねのみなかれて

戀鄰女

なにぞはと思ひおとしし木陰にもにくからずさく花は有りけり

戀學問妨

わがこふる千重のひとへのあしがきを如何にしてかはひまもとむべき

來不留

ひさかたの桂の枝も何ぞはとおもひけたるゝ戀のやみかな

等思三人

月まつと人にはいひて待ちし君影のみ見えてなどかへるらむ

老戀

とり〴〵にならせばなれて梓弓眞弓つきゆみひきぞ定めぬ

年つけしすゞろありきのそのかみの昔が身をさへこふる頃かな

○大かたの夜がれとてこそ云々　普通な夜離れだと思つて日頃逢はずに過したのであるが、此のまゝで中が絶えようとは思ひがけなかつた。

○玉だすき　かけるの枕詞。

○かけじとすれど云々　思ひかけまいとするけれど。を簾の縁語。雲鳥のふあやの枕詞。あやに戀しきはわけもなく戀しいと綾とかけた。

○すきかげ　透影、簾をすかして見ゆる姿。

○ねのみなかれて　琴の音のみ流れてと音のみ泣かれるにかけた。

○千重のひとへ　千重もある中の一重。

○ならせばなれて云々　弓弦を鳴らすと、馴れるとかけた。つき弓は槻弓。伊勢物語の「梓弓眞弓槻弓年をへて我がせしが如うるはしみせよ」に據つた。

春戀

うめの花ちればかごとにてたえずとひくる心しりきや

夏戀

蚊遣火はむせびながらになびけどもやるかたなきは思ひなりけり

玉だれのあふひはかれてあやめぐさ枕ゆふよも君はこじとや

秋戀

秋をへてとはれぬ庭をながむればそゝや千草も物思ひの花

あきふけて人もこずゑのもみぢ葉にさもはた似たる袖の色かな

冬戀

さゝわけし露の契りを今は誰が霜夜の牀に結びかふらむ

寄落葉戀

ふみわけぬ庭の落葉にうき人の心のあきの果てをみるかな

寄雪戀

とひもこぬつままつの木の雪しづれいかにくたせと袖に落つらむ

寄書戀

こりずまになほかきやらむもしほ草ありその波はうちかへすとも

○かごとにて　かこつけごとで。

○玉だれの　あふひの枕詞。葵は枯れて四月も過ぎてといふ意。

○あやめぐさ枕ゆふよも　五月端午に菖蒲を枕の下に入れる風俗。枕ゆふよは結ぶこと、菖で単に菖蒲にかけてかく言つたのだ。

○そゝや　静かに戦ぐ形容。

○人もこずゑの云々　人も来ずと梢にかけた。紅葉に似たる袖の色とは、紅涙に袖をぬらす意。

○うき人の云々　自分につれなき人の心に飽きの生じたこと、秋とをかけた。

○雪しづれ云々　木より雪の落ちること。くたせとは下すこと、袖をぬらすことをかけた。

○こりずま云々　性懲りもなくこと須磨にかけた。かきやらむは文を書きやること、藻塩草を掻くことにかけた。うち返すは波の打ち返すことと手紙を返して来ることにかけた。

寄草戀

おりたちて袖ぬらしても人ごゝろ淺澤ゑぐはつむかひもなし

寄鳥戀

したにのみ戀ひつゝをればから水たでのからしや今はほにも出でなむ

寄蟲戀

はるの野の荻の燒生にふす鳴のかくろひがたき戀もするかな

寄扇戀

花園の露にたはるゝむしの名もこてふときけば嬉しかりけり

寄衣戀

秋かぜの下にこもりし扇ともしらで名をのみ賴みけるかな

寄草戀

せきあへぬなみだの果てをおもふには朽葉の衣の名さへ恨めし

から衣袖かへしよはむかしにて今はふるきのかはとだにみず

六帖題假字題などにてよめるうたども

宮つかへする女のあひがたき

わがこふる雲居の月の影のみを袖に宿しておきや明かさむ

○淺澤ゑぐ　淺い澤水に生えて居るゑぐ。ゑぐはくろくわゐの異名。人の心の淺いとかけた。萬葉集卷十の「君がため山田の澤にゑぐ摘むと雪解の水に裳の裾ぬれぬ」に據つた。

○したにのみ云々　心の奧にのみ戀して居れば。からしやは水蓼の葉の辛いと、つらいとをかけ、ほに出づるとは穗に現はれると、戀の思ひが外に現はれるとをかけた

○こてふときけば　胡蝶と來ると云ふ意にかけた。

○秋風の下にこもりし　はや人に倦き心の出たとかけた。名をのみは逢ふとあふぎとをかけた。

○朽葉の衣　さがら茶色の衣、淡い藍を帶びた黄色の衣、淚に朽ちるにかけた。

○ふるきのかは　古びたとかけたふるきは黑貂。

えんをもとむ

ふみかよふしるべと頼むなかひとの心さへにやあさむつのはし

ありどころをしらぬ

いづかたにゆき隠れけむ心にはくまありとしも思はざりしを

いはでおもふ

わが戀は人やはつらきいへばえに岩間にむせぶみづからぞかし

いひはじむ

わきかへり思ふはくるし今はさは岩まの清水洩らしそめてむ

あひおもふ

あひにあひて心にしげる戀草はちから車につみもおとらじ

なき名

淺瀨をもわたりみなくに狹鰭川さは誰が掛けし波のぬれぎぬ

名を惜しむ

命をばあふにかへても辰の市のいちじろき名はたてじとぞ思ふ

あはでかへる

いたづらに露わけかへる小笹原月のみ袖にしたしかりけり

〇あさむつのはし　越前足羽郡、淺水の橋の轉訛。

〇いへばえに　言はむとするに言ひ得ず。岩間にむせぶ水とみづからとをかけた。人にかくれて涙にむせぶ譬喩。

〇わきかへり　胸中に燃えて。わく、わかす、岩清水の縁語。

〇ちから車云々　萬葉集卷四の「戀草を力車に七車積みて戀ふらく我が心から」に據つた。積みも劣らじは七車にかけて言つた。力車は人の力でひく車。

〇狹鰭川　狹穗川であらう。大和添上郡佐保を流るる川。

〇辰の市の云々　大和奈良の市。

〇いたづらに云々　伊勢物語の「秋の野に笹分けし朝の袖よりも逢はでぬる夜ぞひぢまさりける」などを思ひ寄せたのであらう。

くらきにかへる

月まちてかへれといひしおもかげのはかなくたぐふ夕やみの空

ちかくてあはず

みちのくのちかのしほがまみる／＼もあふくま川のはるけきやなぞ

しのびて物いふ夜ほとゝぎすなく

聞きつとはかたみにいはじ時鳥いかなるをりと人もこそとへ

わすれたるひとのおとづれたる

かきたえてすまずなりにし山のゐの今さら何の影にみゆらむ

ひとりね

あだびとのひと花衣われ獨りかたしく袖となりにけるかな

ふみかよはす女のことびとにあへる

ふみかよふ杉の下道かひもなしよそにゆるせる逢坂の關

枯れたる荻にさして男のもとへ

露むすぶ軒の下荻ふく風はいつばかりより音たえにけむ

わかれたる男のとゞめおきたる笛をかへすとて

秋風をしらべしよはの一ふしや終にかれゆく始めなりけむ

○はかなくたぐふ　寂しくも似通ふ。

○みちのくのちかのしほがま云々　陸前宮城郡千賀の鹽竈。しほがまに焚く海松と見るとかけ、阿武隈川と逢ふとかけた。

○いかなるをりと云々　時鳥を聞いた事を他に語れば、二人逢つた折が露見する恐れがあるのである。

○かきたえて云々　絶え、澄まずは山の井の縁語、澄まずは住まずとかゝり、戀人の宿らぬ意。

○あだびとの　浮薄な人の。

○ひと花衣　一入だけ染めた淺い紅色の衣。

○ふみかよふ　踏み通ふと文通ふとかけた。杉の下道は逢坂の關に杉が多いからである。

○秋風をしらべし云々　秋風樂、雅樂の曲の一。

○かれゆく　離れゆく。秋風に枯れるとかけた。

こゝろにもあらでたえぬべくなりにける人のもとに

しるやいかに音にのみなきてありそ海のわれからならぬとだえせむとは

人のもとにまかりけるに呼びいれねばすのこに伏し明かしてつかはしける

わけいらぬよどののよそに音をなきてあやめもわかずかへりこしはや

こゝろざしは有りながらえあはざりける人に遣はしける

あふくまはなどかはるけきかはとみる心の底を埋木にして

絶えて後年ごろになりたる女のもとにゆきたるに雪のふりたる

出でゆかむ跡をかごとのやすらひに雪とふりにし世語りやせむ

雜歌

山

天の下たひらのみやと敷きませる宮のまもりの賀茂のかみやま

水

青淵にたゝふる水は奥山の岩根の苔のしづくなるらむ

瀧のほとりに人來てみる

山姫のはたばり廣くおるはたの手玉みだれて散るかとぞおもふ

○われから　自分からと、海藻に棲む小さき貝の名とかけた。

○あやめもわかず　條目もわからずと菖蒲とをかけた。菖蒲は淀野の名産。

○あふくまは云々　陸前阿武隈川其の附近に埋木を産する。川と彼はとかけた。

○出でゆかむ跡を云々　出て行く跡に殘る足跡がいけないと、それにかこつけて留まり、雪の如く降りにし(古りにしにかけた)昔の話をしよう。

○たひらのみやと云々　平安京をさす。その皇宮。

○山姫の云々　續千載集雜歌上に「山姫の手玉もゆらに織りはへて干す日にさらす布引の瀧」などを思ひ寄せた。

○はたばり　機張、機の幅を云ふ

○手玉　手に飾れる玉。

海路朝

しほせふく朝風寒きからとまり心つくしの舟路なりけり

海みゆる家

高坏にもりてあへするしたゞみや見さくる澳のしまの早贄

潮干見にものしけるとき

しるはの海霞にうかぶあま小船磯松かげのみるめなりけり

浦

みれどあかぬ繪島の浪をうらなれし海士はいくとせ袖にかくらむ

松がうらしま

こゝろありて月みるあまのしわざかな夜ぶねたゞよふ松がうらしま

廣澤池

いひ出でぬ池の心もうくばかりはちす花さくひろさはのいけ

濱名橋

跡もなき濱名のはしを言のはにかけてしのぶもいくよなるらむ

名所市

はりまなるしかまの市路たてぬきにうりかふ辭のあなかちのよや

○しほせふく　潮の流れる所を吹く。
○からとまり　唐泊、筑前絲島郡小田村海濱の舊稱。昔韓船の碇泊した處。心つくしは心盡しと、筑紫をかけた。
○あへするしたゞみや　饗應するしたゞみ。したゞみは細螺の異名。貝の一種。
○早贄　初物としてさゝげる御食物。
○しるはの海　前出、遠江榛原郡白羽、久志留波。
○うらなれし云々　浦に住み馴れた。うらに裏で袖の緣語。
○濱名橋　遠江濱名湖の橋。
○言のはにかけて　言葉にかけては架けてに通じ橋の緣語。
○たてぬきに　縱横に。縱緯の名稱で五句のかちの緣語。
○あなかちのよや　無理な世よ。かちは褐色、濃紺色で播磨飾磨郡の染めが有名なのでかけたのだ。

故郷

をすのうちにしらべあひしは昔にていたち笛ふくふるさとの庭
古里はなべて木深くなりにけり今も葉守のかみはますらむ

閑居竹

軒におふるたけきこととはうきふしをのがれしのみのすみかなりけり

籬

つくろはぬ心のまゝに世の中をのがれこしばのまがきなりけり

山家

木がくれてすむ山里も君が世のめぐみの露のかゝらぬはなし
山水を清しとみしやよの中を思ひはなるゝはじめなりけむ

山家雨

聞きしらぬ鳥がねむせぶ雲霧に小雨ひまなき山の奥かな

山家雲

おのづからのきばより立つ白雲を心ふかげに人や見るらむ

山家送年

山住みのあさきの柱あさらかに思ひいりしはむかしなりけり

○いたち笛ふく　佇んで笛吹く。
○葉守のかみ　樹の神。後撰集藤原仲平の歌「かしは木に葉守の神のましけるを知らでぞ折りし祟りなさるな」
○軒におふる云々　たけきこととは、竹と猛き事とをかけた。猛き事とは茲では特によい事の意。うきふしは憂き事と竹の節とをかけた。
○のがれこしばの　免れ來しと小柴とをかけた。つくろはぬ＝籬の縁語。
○あさきの柱　淺木の柱、悪い節の多い木の柱。あさらかに、あさの音の繰返し。

山家興

かしのみのひとりしをれば山陰におさる小鳥もしたしまれつゝ

古戦場

もの〻ふのいのちを露とあらそひしあら野の末に秋風ぞふく

ふきあれし松のあらしはむかしにて枝もならさぬひくま野の原

舊都

赤駒のはらばふのべとなりにけりむかし知らしし長岡のみや

旅宿夢

見もはてぬ夢のゆくへや明日こえむ峯にたゞよふ曉の雲

旅泊夢

かたしきの袖の湊の梶まくらゆめやすからぬなみのうへかな

松年久

わたつみのなぎさにたてる老松はいくとしなみをかぞへ來つらむ

竹不改色

むらたけの陰は千ひろのかげそひてみどりは同じ緑なりけり

○かしのみの　ひとりの枕詞、ただし茲ではある小鳥に對稱して利いて居る。

○ひくま野の原　遠江敷智郡引馬野、後世三方原と云ふ。徳川家康、武田信玄と戦つた古戦場。

○長岡のみや　山城葛野郡長岡、現今の京都奠都以前の都。

○かたしきの袖の湊　かたしきの袖ま獨寢の意、袖の湊にかけた。袖の湊は筑前博多の港をさす。

○いくとしなみ　年を波に譬へた

位山みねのいはほの苔衣雲居にちかきみどりとぞみる

葦

あしの花ちりのまがひに秋くれて夕風寒し昆陽のいけみづ

正月元日高橋與志宜が門のまへに鶴のおりゐたるをめづらかなることなればうたをとこふに

はつわかな生ふる垣内にあしたづは千世をもつめとおりゐけらしも

海邊鶴

あしたづの其の子はぐゝむ陰見れば松さへふりぬ玉出しまやま

鳩

下なきて軒ばにかへる家鳩のつばさのいろにくれそめにけり

犬

けだもののつらならめやは萬世に殘すためしの有馬香の邑

牛

夕月夜かげすむのちのかへるさはいそがぬうしも心ありけり

狐

霜まよふ枯生のきつね遠近になく聲寒しなすのしのはら

○位山云々　飛驒位山、みどりは六位の衣。

○昆陽のいけみづ　攝津河邊郡稻野村、伊丹の十町餘に在る池。

○千世をもつめと　千代をも積めと、摘めとかけた。

○つばさのいろに　山鳩色、萌葱の黃ばみたる色、麴塵とも云ふ、黃昏色に喩へたのである。

○有馬香の邑　和泉國南部に在り、そこに犬塚のあるを日本書紀に見える物部守屋の資人捕鳥部萬の主人滅ぼされし時その[illegible]、萬死んだ[illegible]、其の犬[illegible]り[illegible]つ、朝廷[illegible]萬の墓側に犬塚が存する。

魚

大君の御贄のまけと魚すらも神世よりこそつかへきにけり

鯉

瀧がはの淵のそこひはきはめてきいざ雲居にと思ひ立つらむ

大和物語

ことのはの山とつもれる世がたりは壁にかきしぞはじめなりける

新葉集

みよし野の三世の雲ゐの花の雪かきつめおきし言のはぞこれ

宮詞といふ詩の題にて

御溝水(みかはみづ)ちりうく花に身をかへばはるしる世にや流れいでなむ

硯

とことはに机の島によりゐつゝむかふすゞりの海幸(うみさち)もがな

榛葉俊夫が歌まなびにこゝろざしける時しをりといふものにかきてあたへけるうた

ことの葉のおくある花の山ぶみはしをりしてこそゆくべかりけれ

中山光雄がふみばさみに歌をとこひけるに

○御贄のまけと　大君の召料のためにと。
○山とつもれるに　やまとの書名をかけた。
○壁にかきしぞ云々　大和物語の劈頭に、宇多帝退位の折、伊勢の御が、弘徽殿の壁に別れの歌を書きつけた說話が載つて居るのをさす。
○新葉集　後醍醐帝の皇子宗良親王の撰、元弘以後弘和に至る南朝の人々の歌を輯めた、弘和元年出來て、後龜山帝特に勅撰集に準じられた。
○みよし野の三世の　南朝三代の。
○机の島　硯の海に對し、机を島と云つたのである、
○しをりといふものに　栞、本の間に入れて讀みさした場所を心覺えして置く物。枝折で山の案内にかけたのである。

○わきて靜けき　湯のわくこ、格別にの意をかけた。

○直路になして　まつすぐの路として。

ことのはの花の山口しるべせむ奥ある峯も分けつくしてよ

棊

おもしろき手にもまけじのあらそひに何こゝちをも打ちわするらむ

茶湯

なみ風に音はかよへどかまのゆのわきて靜けきすさびなりけり

増田千春が茶室にて

眞清水をひさごにとりて朝よひにすますこゝろもくみしられけり

帚

朝ごとに雲ゐの庭を立ちならしとるやはゝきも我が君のため

金釵前燭といふことを人のよませけるに

眞玉手にとるやこがねのかんざしに光さしそふともしびの花

釣艇炊烟といふことを

世わたりの細さしられて海人小舟ほのかになびく夕けぶりかな

船

八鹽路を直路になしてゆきかよふ船こそうべも浮寶なれ

筏

杣かはやくだす筏は奥山にいくよふる木のつまでなるらむ

心

はれくもりしぐるゝ空にあらなくに定めがたきはこゝろなりけり

黄なるもの

法の師のよむそめがみに似かよひていてふちりしく大寺の庭

國名十

里人よいつも月をばあきしののとやまのかひにきつゝし待たむ

物名　われもかう

あかし潟月にうかれて海邊ゆくわれもかうみの蜑とみゆらむ

一もと菊

我のみのかよひぢとこそおもひしかひともときくにおどろかれつゝ

きちからの花

いはねこす水のたぎちかうの花のさけるかあやな木がくれにして

ていかかづら

のがれゐていかゞつらしと思ふべきよしや人ごとさがなかりとも

むくれにじの木

○いくよふる木のつまでなるらむ　幾世を經たさ古木さたかけた。つまでは端手、杣人の伐りて手を入れた角だつ材木。

○そめがみに　黄紙、經文を云ふ。銀杏の黄を經文の紙の黄に喩へた

○國名十　佐渡、伊豆、出雲、紀伊、安藝、信濃、能登、甲斐、對馬、志摩。

○われもかう　我もかうみのにわれもかうの五字を合めた、われもかうは秩草。薔薇科地楡屬の多年生草本。暗紅色の花を開く。

○ひともときくに　人も訪ひ來ると聞くに。その中に一もと菊が詠み込まれて居る。

○水のたぎちかうの花の　水の激端か、卯の花の。その中に桔梗が詠み込まれて居る。

○ていかかづら　定家葛、絡石。夾竹桃科の常綠灌木、蔓があつて他にまとひつく、初夏白色の花を開く。

鶯はこゝにねぐらをしめななむくれにし軒のいさゝむらたけ

地紙ほねつまかなめをかくして扇のうたよめとひとのすゝむるに

明けちかみかばねびれたるつまやかなめざましぐさに扇ならさむ

ねずみはなび

かはやしろしらぶるふえのその音すみはなひるばかり夕風ぞ吹く

秋葉山にまうでける時こならやすといふところにて鶯のしば〳〵なくを聞きてたはぶれにその里の名を句のかみにすゑてよめる

木づたひてなくうぐひすの亂聲(らんじやう)もやゝいりあやのすぎの下かげ

新勅撰集にこいたしきときのふだといふを沓冠にてよめるうたありそれにならひてうたよめとひとのいふに

子をおもふといかにかなしきたつきじの霜分けまよふ木曾の山畑

かつをぶしねずみの子といふことを句の上下におきて猫のうたをと人のいひければたはぶれによめる

かきなでね妻もとめえずをこにのみ更けゆくよはの霜のふる猫

今はかひなし

かればかる時もありしを有馬菅ひとの小笠にぬはれけるかな

○地紙はねつまかなめをかくして　云々　扇にはる地紙、扇の骨、扇のはし、扇の要を物名として、かくし入れて歌を詠めと請はれて。

○ねずみはなび　鼠花火。蘆の管に火薬を込め、火を點ずると廻轉しつゝ走る。

○秋葉山　遠江山香郡犬居村、山上に秋葉神社がある。

○亂聲もやゝいりあやの　入綾は舞樂終つて歸り入らうとする時、更に引き返して舞ふ、亂聲は舞樂の始めに奏する笛、太鼓の曲を云ふ、亂聲がやゝ奥に入り始めたとかけたのである。

○有馬菅　攝津有馬に産する菅。

膳臣巴提使

このあだをとらへでやはと巖岫にやさか降りつむ雪はわけけむ

藤原廣嗣

底すめるこゝろづくしのすゑつひになみたちむかふ板櫃の川

山邊赤人

うち出でしその言の葉もしら雪のたへにあやしき不二の神山

喜撰法師

宇治山の木深きみねの雲間よりもる影高し有明の月

小野小町

言の葉はしげりにけりなうき草のねをとめわびし歎きせしまに

清少納言

かきつめし雪の日數のあらそひもきえせで殘る筆のあとかな

平家ものがたりをよみけるをり

八洲國龍のみけしのおほひかねなどわたつみの宮しらしけむ

平忠度

言の葉の花は都にとゞめおきて身をばまかするすまの浦風

○膳臣巴提使　朝鮮で愛兒を虎に取られ、跡を求めて雪中を踏み分け、虎を殺した上代の勇士。

○藤原廣嗣　宇合の子、大宰少貳に任ぜられた、聖武帝の時、玄昉及び吉備眞備を除かんと上奏し聽かれず天平十一年叛して誅せられた。板櫃の川は彼の叛した筑前の川。

○うち出でし云々　萬葉集卷三に出て居る山部赤人の富士山の歌の成句引用。

○宇治山の云々　喜撰法師は宇治山に隱遁したからである。

○言の葉は云々　古今集の「花の色は」の歌と、「誘ふ水あらば」の歌とを引用。

○かきつめし云々　枕草子にある雪の山の消える日數を當て合ひ、清少納言が勝つた逸話。

○八州國云々　二位尼が安德帝を奉じ海の底にも都の候ぞと云つて壇の浦で身を投じた逸話。平家物語卷十一。

木曾義仲

大木曾のあら山櫻末つひに雪とちりゆくあはづののはら

巴

影きえし朝日の後の春の雪殘るもあはれあはづ野のはら

熊谷蓮生

東路はゆくあしなみに任せおきて心のこまぞ西にそむかぬ

祇王

秋にあふうきみの果てにたぐふればかるゝさが野の草もむつまし

西施

あらびつる岩根の苔の花衣水沫ときゆるつまにや有りけむ

李夫人

こがれわびたつる煙を空だきになさじと靈やかへりきにけむ

朱買臣

眞柴かり山路ふみ見しかひありて高きみや木とおひのぼりけり

王昭君

眞砂ぢを吹きまく風にひゞきあひししらべやいかに悲しかりけむ

○朝日の後の　朝日將軍義仲の死後。

○心のこまぞ云々　蓮生坊が西に向ふため、馬にさかしまに乘つた說話。

○祇王　平家物語卷一に祇王が平清盛に捨てられし時の歌「萌え出づるも枯るゝも同じ野邊の草いづれか秋に逢はではつべき」に據つた。かるゝさが野は、枯るゝ、性はと嵯峨野にかけた。祇王の隱遁地である。

○西施　支那呉王夫差の寵妃、遂に呉は亡ぶに至つたので、水沫ときゆると云つた。

○李夫人　漢武帝の寵妃、少くして死んだので帝反魂香を方士に作らしめ焚いて其の面影を忍んだ。

○朱買臣　漢時代呉の人、家貧しく薪を樵つて市に賣つた、武帝に認められ會稽太守となる。みやきは宮木、[illegible]では深山の國の木。

あなこひし北吹くかぜのゆくかたはわかれし花の都なりけり

楊貴妃

梓弓末のはら野に野分して國かたぶけの花は散りにき

遊女

うき身世にふるもかひなし大かたはあまの子とのみ思ひけたれて

竹に雀の繪に

さゝ竹を千代の栖とすむ鳥の雲に羽うたぬ心しりきや

梅にすゞめ二つゐたるかた

梅が枝に來ゐる雀は鶯のぬふてふ笠をからむとやする

鴨頭草草覆盆子などの中に瓦あり雀ゐたり

むら雀あさる秋野の古瓦巣立ちし軒のゆかりをやおもふ

朝顔に雀のゐたるかたに

小山田のひたになるこにおはれこしすゞめや花のかげ頼むらむ

川に舟ひくほとゝぎす鳴きわたる

ほとゝぎす川上遠く過ぎにけりみをひきいそげよどの舟人

鴨のひなどもはぐゝみゐたるかた

○末のはら野に野分して　楊貴妃が天寶十五年馬嵬原で殺された事をさす。

○雲に羽うたぬ　鵬をさす。史記の「燕雀安知鴻鵠之志」の意に思ひ寄せた。

○鶯のぬふてふ笠を　古今集巻一の「鶯の笠にぬふてふ梅の花折りてかざさむ老隱るやと」

○巣立ちし軒の云々　瓦に自身の産れた古巣のある軒を忍ぶかと云ふ意。

○ひたになるこに　引板に鳴子に両者同じ物。

鶏のひなどもにぐゝみゐたるかた

庭の面にはぐゝむひなもしだり尾の長くとこそは生したつらめ

岸に鷺たてり

おのが羽の色をたのみてしらさぎは夕河岸に猶あさるらむ

河邊に蘆あり鶴たてり

芹河やあけをいたゞく白鶴にふりしみゆきのこともとはばや

海棠に白頭鴎の圖に

かしらなる雪もけぬべき春の日と野山の鳥の花に鳴くらむ

枯あしてたてる岸に鴨ゐたり

日影まつ羽がひの霜や寒からしあしべの渚鳥(すどり)聲の隙なき

巖に苔むせり

うごきなき巖にまとふ苔衣なづる少女や袖かはすらむ

江のほとり蘆かれたるに標渚たてり

引佐(いなさ)風根ごし山ごしふくなべに入江のあしは冬がれにけり

檜の大木一もとたてりちひさき木二もとあり水のながれにいろ〳〵のもみぢ散りたるかた

風ふけば眞木立つ山の下水もよそのもみぢに秋やしるらむ

〇おのが羽の色をたのみて　日暮れても、白鷺の羽色で四邊があかるいのを頼みにして。

〇芹河や　降りしみ雪と古りし行幸とかけた。芹河は山城葛野郡小倉山をいづる川、仁和二年光孝帝遊獵さる。

〇うごきなき巖にまとふ云々　劫の石の[illegible]に、四十里四方の大石を百年に一度天人が羽衣で撫で、これが磨滅した時が一劫であると云ふ、これを用ゐた。

〇眞木立つ山の下水も云々　古今集[illegible]の「もみぢ葉の流れざりせば竜田川水の秋をば誰か知らまし」などを思ひ寄せたのであらう。

菖蒲輿の繪に

とほつよのためしをひきてあやめ草雲居にかをるけふにや有るらむ

濱松にものしけるときからすあふぎに松もと草といふ草花をかきまじへたるその松もとぐさをなでしこと見てうたかきたるをのちに有賀豐秋がみてよめるうた「野干玉のよるやかけけむこの花にうきなでしこの露のぬれぎぬ」とあるをみてをかしのことやとわらひあひて豐秋がうたをその繪に書かしめてまたおのれ

うとからずあふぎてみつる花になど言葉の露はかけたがへけむ

羽帚のかたに

かくれがはちりもうきよの外なればこれしてだにも拂ふなりけり

竹のもとにたかんなあり

千尋あるかげにはぐゝむ竹のこの生ひさきいかに立ち榮えまし

梅の實になりたるゑに

誰が袖もわかずかをりし花なれば實もすきものと色づきにけむ

野宮のくろ木のとりゐにしめはへたり月すめり

神葉の上葉の露に更けにけりさがのゝみやの秋の夜の月

○菖蒲輿　五月端午に用ゐる菖蒲を積んで禁中へ奉る輿。
○とほつよの云々　ひきて、あやめの緣語。
○からすあふぎ　烏扇、からすあふひ、ひあふぎとも云ふ、鳶尾科の植物。
○松もと草　石竹科の植物、仙翁臘の多年生草本。
○有賀豐秋　通稱彥太郎、濱江有玉の人、本居大平門の國學者。

○たかんな　筍、竹の子。

○實もすきものと　實も酸き物と好き者とかけた。
○野宮　伊勢神宮に奉仕される姫宮、卽ち齋宮の伊勢へ行かるゝ前に三年間潔齋さるゝ宮を云ふ。皮をはがぬ黑木の鳥居、小柴の大垣板屋の宮と云ふ構造である。しめはへたりは標繩をひき渡してある意。

筆と墨とをかけるゑに

するすみの雨とそゝぎて薄くこく筆の林の花はさくらむ

朝妻船のゑに

朝妻の岸の青柳たれまつと小舟の牀をうちはらふらむ

女ども紅花つむかた

くれなゐの末つみいるゝ花がたみめならぶ子らもなつかしきかな

いせものがたりの高安のさとの女の家のかたかけるゑに

みおとりのあるよとしらで立田山いくよ嵐をみにはしめけむ

業平朝臣の富士の山みたるかた

かくゆかばふじもそがひになりぬべしすむ國いづら東路のそら

大日枝（おほひえ）をはたちばかりの山みても都の空やこひしかりけむ

紫式部の石山寺にて机によりゐて月みたるかた

鹽やかぬ海にもかけて末の世にもてさわがるゝすまのうらなみ

菅原神の御かたに

つくしの海星のくらゐはなれてもなほ光ある浪の上の月

常磐の三人の子どもをつれて雪の降るにたちわづらふかた

〇朝妻船　近江琵琶湖の東岸、朝妻の入江で遊女を乗せた舟を云ふ。岸の青柳の絲が心ありげに小舟の牀の塵を拂ふのかと云ふ意。

〇末つみいるゝ云々　末摘花は紅の花の異名。花がたみは花籠、めならぶの枕詞。めならぶは見え竝ぶ。

〇高安のさとの女　伊勢物語第二十三段の説話。幼馴染が夫婦となつて居たのに、男河内高安に通ふ女が出来た、その女がうち解くるに隨ひ髪化粧も怠つた姿を見、一方妻の貞淑な歌に感じ通はなくなつた。立田山は妻の「風吹けば沖つ白浪立田山」の歌を思ひ寄せたる。

〇そがひ　茲では富士山の背面。

〇大日枝を云々　伊勢物語第八段の本文に據つた。富士の高さの形容である。

〇すまのうらなみ　源氏物語須磨の巻を思ひ寄せた。

〇星のくらゐ　茲では三公をさす。菅公は右大臣であつたからだ。

これやこのよはに鳴く田鶴ふる雪のみのしろ衣おほひ羽にして

小督の琴ひきゐたるかた

月みつゝこふる雲居にこよひしもことかよはむと思ひかけきや

俊成三位井出の玉川にて駒に水かはすかた

水かはばこゝろしてかへ赤駒のあがきに花のちりもこそすれ

源氏の卷々の繪を題にてよめる中に

空蟬

たのみつるしるべかひなきかへるさのかけつゝましき庭のやりみづ

夕顏

一ふさとおもひかけしや夕がほの露わすられぬ根ざしなりけむ

榊

秋風に尾花みだるゝ小柴垣いもゐの袖も露こぼるらむ

須磨

打ちよせてかへるならひをなぐさめに見つゝありふる須磨の浦波

わかな

夕ばえの梢の色もかをりあひて心そらなるまりあそびかな

○よはに鳴く田鶴云々　夜巣にこもる鶴の子を思ふ情、みのしろ衣は蓑の代用する衣。おほひ羽は鶴の縁語。

○雲居にこよひ云々　今夜宮中なる高倉帝を戀ひ忍ぶ心が通ずるとは思ひかけようやの意、ことは琴にかけた。

○空蟬　源氏の君が空蟬に許されず、空しく歸る心持。

○小柴垣いもゐの袖も　小柴垣は野の宮の垣、いもゐは齋み居、六條御息所の野の宮に居られるのを指す。

○打ちよせてかへるならひを　都へ再び歸ると涙のかへるとかけた。

○わかな　六條の院で源氏の君が若い君達などに蹴鞠をせしめられる光景。若菜の卷の上。

野分

むしのねに秋をこめむとこの朝け千草の花の露はかふらむ

小栗廣伴がすゝむる源氏綺の歌題は卷のうちにてぬきがきしておこせたり今こゝにはぶく

花ちるさと

ほとゝぎすなれも昔やしたふらむ花ちる里の月になくなり

をとめ

春花のかへしの風はさもあらばあれほこらであらむ秋の色かは

立田姫をりにあひたる秋の色はあらそひがたき錦なりけり

玉かづら

あかざりし名殘ならずば玉かづら露のあはれのかゝらましやは

ほたる

さみだるゝ軒のしづくも夏むしのもゆるおもひをいかでけつべき

野分

あらき風ふくにつけても刈萱の下のみだれぞしづごゝろなき

ふぢばかま

をすのうちに打ちいでましや藤ばかま露のゆかりのかごとならずば

○小栗廣伴　通稱直助、遠江名原の人、本居大平門の國學者。
○花ちるさと　源氏の君が花散里を訪れた夜、二十日月出で時鳥が繁く鳴いたのである。
○をとめ　源氏の君の六條の邸宅が竣工し、紫の上は春を好まれるので春の花木を植ゑられたが、秋好中宮は秋を好まれ、秋の木草を主として植ゑられた、其の狀況を詠じたのである。
○玉かづら　夕顏の面影を忘れかねた源氏の君が、その忘れ形見の玉鬘をいとほしむ心持。
○もゆるおもひを、兵部卿の宮の玉鬘を戀ふる心をさす。
○野分　下のみだれぞは、夕霧大將が紫の上に對するあるまじき戀心をさす。
○ふぢばかま　玉鬘に對する若き人々の競へる戀心の中でも、特に髭黑大將の心持であらう。

○咲きそひしなでしこの花云々　夕霧大將の美しき樣を見る源氏の君の心持、本文夕霧の卷に「鬼神も罪許しつべく、あざやかに物淸げに、若う盛りに匂ひを散らし給へり」とある。

○なげきのめをもやしつる　宇治の中の宮、なき父を忍び、山の阿闍梨から贈られた蕨に昔の春を懷かしむ。

○あしがきの云々　匂宮と薰大將との間にはさまつた浮舟の君の煩悶。

○うきせにも云々　浮舟の君が投身して死に得ず、尼になつて世をすてた事。

○千代能尼　景愛、無外、無著と號する、城陸奧守泰盛の女、幼名千代野、金澤貞時に嫁し、其の歿後尼となり京都に住む、上杉氏、二階堂等此の尼のために景愛寺を建立した。

○高砂の翁媼　謠曲高砂に出て來る長壽の夫婦、實は松の精靈。

夕霧

咲きそひしなでしこの花みる〳〵もおにの心のなどかなごまぬ

みのり

大かたにほのみし人も朝ぼらけかすみし花はわすれやはする

さわらび

ありしよのはるを忘れぬはつわらびなげきのめをもやしつるかな

うきふね

白雲のかゝらぬ山はなかりけり身をすてゝしも分けぞいられぬ

あしがきの隙もなく〳〵歸るさの夜深き露ときえぬべきかな

手ならひ

うきせにもしづみ果てなで同じみをふたゝびすつるたぐひやはある

千代能尼のかたかたはらに桶の底ぬけてみづながれ出でたり

谷の水くめばくまれし月影のやどりも果てぬ世にこそありけれ

高砂の翁媼のかた松に旭さしたり

朝日かげちりもくもらぬ松かげを千世の住家とかきはらふらむ

大津會の鬼の念佛

鉢たゝきの繪にちやせむといふことを何のうちにおきて

世のかぎりこのなりひさごうちやせむ都のちまたゆきめぐりつゝ

盆踊といふものかけるゑに

七種の花のひもとくをりをえて思ひたはるゝすさびなりけり

辨慶の洪鐘をさゝげたるゑに

手末にさゝげしかねは音にのみ聞きし力をめにも見よとや

ある人の水書といふことをするをみて

水の上にゑがけるふじの白雪はきえぬためしをうつしとりけむ

賣炭翁

なげきこり煙にむせび山里もすみうることのかたきよぞかし

老子の繪に

あはれよのくだつをうしと關こえてゆくへも知らずなりにけらしも

孟宗がたかんなほるかた

親をおもふこゝろふかきに竹の子も雪まをわけて生ひいでにけむ

黄山谷がらにの花見をるかた

○鉢たゝき　空也念佛、天台宗の一派、空也上人光勝の創めたもの、枝に瓢箪をつけ敲きつゝ念佛を唱へ、拍子に合はせて踊るのである、ちやせむとあるのは茶筅をも枝につけたからだ。

○花のひもとくをりをえて　七草の花咲くこと、男女が下紐とく機會を得てにかけた。

○辨慶の洪鐘をさゝげたるゑ　俵藤太秀鄕が龍宮より得た鐘が三井園城寺にあるのを、辨慶が持ち上げたと云ふ傳説。

○手末に　たなすゑに、手のさきに。

○水書　烏賊の甲、胴體の骨末で描いた畫を水に浮べ、紙にうつし留めるゝ畫が水に浮ぶのである。

○なげきこり　木をこると歎きとをかけた。

○關こえて　老子出關圖であらう老子が函谷關を出で去つた故事。

○黄山谷　宋の詩人、黄庭堅、字は魯直、山谷と號する、蘇軾の門人。

○らにの花　蘭の花。

からごろも花の香しめてみるからにゑみのまゆさへひらけたるらむ

老蛟化江叟吹笛圖

あやし此の翁が笛は月のそらなみのそこにもかよふなりけり

魚籃觀音のかたに

とりもたるたももかたみも魚ならでうきよの人をすくふなりけり

述懐

ねざめして思へばはかな夢のまに我が世も今はあかつきのそら

寄松述懐

松の花はなかずならぬ身なれどもありへむ世をば千代と祝はむ

いつばかりにかありけむ

わが園のいさゝむら竹いさゝかはうれしきふしもある世なりけり

正月はじめつかた河村秀篤おのがもとをとぶらひて此の十日子の日なれば野べのあそびすべくともどちにかたらひおきたりいかで／＼とそゝのかされけるをさりあへぬことありてえものせで一日二日おくれてその日のつどひはやみにきと聞きてよめる

○ひらけたるらむ　眉開くと花開くにかけた。

○たももかたみも　たもは掬ひ網かたみは筐。魚籃觀音は三十三觀音の一、手に魚の入つた籃を持つ。

○はなかずならぬ身なれども　松の花の如く花さこりたてる數の中に入らぬ身ではあるが。

○ありへむ世をば　ながらへて年月をすごす世を。

○河村秀篤　通稱八郎左衞門、遠江金谷の歌人。

○さりあへぬこと　已むを得ぬ用事。

○うちむれて云々　羣れて、まつひきたがへたる、背子の日の松の緣語。ひきたがへたるは異なるや

○花こそはやくかゝりけれ　かゝる青柳の絲の緣語。

○縣居翁　賀茂眞淵翁。

○此のさとならぬ　賀茂眞淵は遠江濱松、作者は掛川在の山口郷であるから斯く言ふた。
○御城ぬち　御城内。
○ちかきほどに　近い内にお伺ひする意。

葉の花にかゝれる青柳のいと」とよみて出しけるかへし

言の葉の花こそはやくかゝりけれまだはるしらぬ青柳のいと

三月十日ばかり河内人荒木義直來やどりて山吹のうつろひがたなるをみて「やまぶきのうつろふみれば世はなれしこゝにもはるはとまらざりけり」と有りけるかへし

山吹の陰ゆく水にはるくれてけふに君さへとまらざりけり

濱松にものしていまはかへりなむとしける日本村何がし母「さみだれはなど晴れつらむはれざらば君を留めむよしもにそあらめ」とよめる返し

言の葉の露は雨にもまさればや濱松かげにたちうかるらむ

縣居翁の靈社建つべきことにつきて高林方朗小栗廣伴きたりてやどりけるとき方朗「ねぎごとのまゝにとかねていのりつるその山口にけふけ來にけり」とよみて出しけるかへし

山口に今日來し君がねぎごとは此のさとならぬ神もうけてむ

御城ぬちわたりにひさしうまゐらざりけるころちかきほどになど名波氏に聞えおきてのちことのついでにみちにてゆきあひければいかにぞなど

いはるゝを明日こそといらへおきてまた二日三日過ぎて九月十八日にとぶらひければ「沖津かぜ音のみたててまつがねにみるめよりこぬわかのうらなみ」といふうたよめりとてみせられたるにその恨みはさるものにて歌のめづらかなるをめでてかへしとはなくて

かばかりの清の玉ぞしら波のしらでぞ沖にみるめかりにし

越中國射水郡布施神社神主鈴木宗豐がもとよりたよりにつけてうたおこせけるかへし

みこしぢはかりのゆききもあるものを遠しとのみは思はざらなむ

濱松にものしけるとき岡本の賀茂神社のみまへにて高林方朗が「石川のみなもととむるこゝろには神山いかに君あふぐらむ」とよめるかへし

神山の高き林のかげとめてせみの小川もながれ來にけり

六月にかり湯日の里なる淺羽維禎が家に日ごろありけるに木深くしげり竹いとおほかる家にて吹きいるゝ風すゞしかりければ

夏しらぬそのふの竹のよごろへておきふし安き宿にもあるかな

十七日久野山にまうでて

四方の海八十の島根の

○布施神社　越中射水郡布施村にある布勢神社、祭神[illegible]等臣命の祠。

○岡本の賀茂神社　賀茂別雷の神宮たりし社。

○せみの小川も　「石川やせみの小川の清ければ月もながれを尋ねてぞすむ」新古今集鴨長明の詠。

○湯日の里　遠江國榛原郡初倉村字湯日。

○久野山　駿河安倍郡久能山、山頂に東照宮がある。今は別格官幣社。

おもふ

ふじのねはたゞにうつれどわがせ子をみるめはおひぬ湊なりけり

秋のころ清見寺に一夜やどりて

清見がた波間にうかぶ秋の月千鳥なく夜に來てみつるかな

三穗の松原にて萩を折りて

さをしかもとはぬ荒磯の松がねにうらぶれたてりはぎが花嬬

日くれなむとするころ岸のくさかげにむしどものこゑ高うきこゆ

あらしほのみちひるきしの草がくれ何まつ蟲の音をつくすらむ

遠くゆく人のわかれををしみて

枕ゆふ野べの草葉の露にだにけふの袂をおもひ出でなむ

大石弘高が江戸へゆくわかれに

此の春は花もをしまじ吾が兒子がかへらむ頃はわか葉さすころ

久保長秋がその君にしたがひてみちのくの棚倉にうつろひゆくにわかれを惜しみて濱松にてうまのはなむけのまとゐしけるとき

あはむ日をいつとしらねば細布の心ぼそしやけふのわかれぢ

〔〕うらぶれたてり云々　心侘く立つて居る萩の花。萩は鹿に馴れ親しむものであるから、花妻と云ふのである。

〔〕久保長秋　通稱安満、遠江濱松の人、本居大平門の國學者、主君に隨ひ棚倉に住む。

〔〕みちのくの棚倉　岩代東白川郡棚倉。文化十四年井上河内守正甫此に徙し移封された。

たなぐらや棚びく雲のをちにても濱松が根をわすれざらなむ

同じ人年へて後大坂の上り下りにあはざりし事共かきて「立ち別れいくとし月をふる里のはままつが枝は色もかはらず」といひおこせけるに

あはゝ山あはで久しく過ぎにけり雲のゆききをよそにのみ見て

天保十年五月より六月まで雨ふらざりければ己等麻知の神社に雨ごひすとてこもりける夜

ねぎごとのまゝと名におへるみやしろに祈らば雨のふらざらめやは

なほふるべくもあらねば神主藤原秀茂十三日より十八日までいみごもりていのりけるに十八日の夜ねぎごとをはりて青海波の百かへり吹きとか笛吹きけるほどにあめいたくふりければ

青海の波をりかへす笛の音のすみゆく空や雨となりけむ

周智郡なる天宮の御社にまうでけるとき

つくしの海神津島べによる波をかけておもふもかしこかりけり

神代より眞名井の深さゆゑしあれば天の宮居とたゝへけらしも

岡崖大人にものならはむとて平尾にまかりけるときたにざくとひ侍りし

○あはゝ山　阿波々山、阿波山、粟嶽、無間山とも云ふ、遠江小笠郡倉真村の東北。逢はでと云はん序。

○己等麻知の神社　遠江小笠郡、今川村の八幡宮といふ。己等乃麻知神社といふのが正しい。

○青海波　せいがいは、舞曲の一、青海波の曲、波模様の衣裳を著て舞ふので、水に因みありと考へられたのであらう。

○天宮の御社　遠江周智郡天方にある天宮大明神。

○岡崖大人　栗田土満、長弐と稱し、岡廼屋と號す、遠江城飼郡平尾村八幡大神、同宮、[illegible]

（……）古今集卷十八「わが庵は三輪の山本戀しくはとぶらひ來ませ杉立てる門」に據つた。

○淺間のみやしろ　駿河富士郡大宮にある淺間神社。祭神は木花開耶姫。

○[illegible]　御百六代、[illegible]の雅號。

○平兼盛　光孝天皇の曾孫、篤行の子、從五位上駿河守となる、拾遺、後拾遺等の歌人。正暦元年卒。

みわの山杉立つかどもみえわかぬ霞の中の道しるべせよ

九月ばかり河野氏にはじめてまゐりけるに兼て歌まなびせむのこゝろありければ「いかにとも頼むかげなきくさの戸をくまなくてらす月ぞうれしき」とありけるかへし

月ばかり照らすひかりはあらねどもこゝろの隈はみえしとぞ思ふ

村松弘道がこへるによりて萬葉集を講じけるとき

よくよみてよくかきわけよ檜のはの古葉ふる枝は數しげくとも

三月十九日の夜橘園のあるじ重光がとひけるにほとゝぎすなきたりあなめづらし花さへいまださかりのほどなるをといたうめで興じけるによべもなきつるをさらにこゝろありげなりといらへて

一夜なく山ほとゝぎすことよひこそ君にかたらふ初音なりけれ

高瀬友達は年ごろおのがもとにことかよはしつるを八月ばかり此の山口の郷のおのがむぐらふをとひ來て日ごろ何くれとかたらひける中にその家は駿河國富士郡大宮のさとに世々經てすみて淺間のみやしろのみとしろのわたり神田の市といへるところにてむかし平兼盛のあその此の國の

守とありし時「みたらし川のそこにわく玉」とよまれたる涌玉が池もいとちかしといふによりてよめる

玉ひろふ神田の穂だの秋ごとに足穂とともにさかえゆかなむ

杉谷の里原田年種が家に櫻の花見にとはやうかたらひおきたるがさはることうちつゞきてみとせへて二月二十日ばかりその家にいたりければ倭夫ははやう來ゐたり

咲く花のをりならずともをり〳〵はとはましやどを三年へにけり

小栗廣伴が荷田翁の筆のあとを得つるにうたよめとこふに

いなり山杉の下露したゝりてよゝにきえせぬ水ぐきのあと

おなじひとに内山眞龍より扇をおくられけるがそは正親町大納言どのより眞龍がたまはりつるなりそれにそのゆゑよしをみづからかきて末に方朗にもおのれにもうたかけといふに

とびかけり雲居に鳴きしうら鶴のちよのかたみとあふぎてをみよ

修學院のいでましの宮のかへでの紅葉をすきこめたる扇に

一葉だに世にあふげとやいでましの山の秋かぜ吹きつたへけむ

○みたらし川の云々　平兼盛家集に「君が代の數にやとらむ淺間なる御手洗川の底に涌く玉」淺間神社で詠める歌である。

○涌玉が池　富士郡大宮、淺間神社の東横にある池。御壺と云ふ。

○杉谷の里　近江甲賀郡、今南杣村と云ふ。

○荷田翁　荷田春滿。

○いなり山　荷田翁は山城稲荷神社の神官であるからだ。

○内山眞龍　内山彌兵衛、敬美と云ふ、遠江の國學者、賀茂眞淵の門、文政二年八月二十二日歿、年八十二、一說文政四年歿。

○あふぎてをみよ　仰ぎと扇とをかけた。をは感歎詞。

○萬松侍從君　萬松齋主水野忠邦

○日のひかり近き　日のみかど近き意。

○八上比賣　因幡八上郡の地名から出た女神の名、やかみひめ。古事記上卷に八十神が稲羽の八上比賣に求婚せんとした說話が出て居る。

○春のかづらより　上古春の蔓草などを髮の飾りとした、それから出來た言葉と云ふのである、縁はかづらの縁語。

○かたしは　堅磐、かたい岩。

○雪しづれ　雪の木枝などから落ちる事、雪しづり。

○久能山の大前に　久能山上東照宮の神前に。

○御こゝろを廣野の里　御心を遠大にもつと、地名とをかけた。

日のひかり近き御庭の紅葉ばは散りても色のあせずぞ有りける

因幡國八上郡の人三木世修が庭にしだりざくらの大樹あるをそのうたよめとこふに

八上比賣神代の春のかづらよりなりそめにたるいと櫻かも

濱松侍從君のおまへに高林方朗が名古曾の關のあとどころなる櫻樹の石になれるを奉るとてうたよませければ

櫻木の世々へてなれるかたしはにくちせぬ名こそなほ殘りけれ

伊豫國人宮原何がし來りて霞響となづけたる石のうたよめとこふに

はる山の岩ねにひゞく雪しづれ霞の聲もきくこゝちせり

駿河國廣野村味知氏の垣内の柹の木はむかし東照宮のうつしよにましししとき御手づからうゑたまひし木なりとぞかれいまも年ごとの九月十七日其の實を久能山の大前に奉るなりおのれ駿河國にものしけるついでに家本正時にともなはれて此の家にやどりけるに家あるじ明日なむ御山にまゐのぼりて奉るとてそのゆゑよしつばらかにかたるを聞きてよめる

柹すらもためしになれと御こゝろを廣野の里にうゑ給ひけむ

依隆は萩園のあるじ甕麻呂の子にてわがやしなひにしたる子なりみかまろみまかりて後文政七年の九月許りかれをゐて白須賀にゆきてみればはやういへのやけたりければいたうあれて荻高やかに穗にいでて萩はちり過ぎたるがおしけたれて蓬むぐらのみ所えがほなり庵の清らかにうるはしかりしときをおもひ出づればいとあはれにてかうまであれにけるかなとすゞろになみだぐまるさる中にふみぐらのみかべなどもそこなはれてたてる中々にさびしげなり

處えて風こそさやげおのづから萩はあせゆくそのの荻はら

いまはわれこ萩のゆかりさしそひて大かたならぬ袖の露かな

むらさきのねふかき色のゆかりあればこ萩が末のさかえざらめや

甕麻呂の墓にまうづ依隆が萩が枝たむくるをみて

ちりはてて色なき萩の枝なれど汝がたむけをば花とうくらむ

文政十一年三月ばかり加納諸平が紀伊國より白須賀のもとつ里に來ゐたるをとぶらひて三河國雲谷といふところの花見にゆく船形山普門寺といふ山寺なりさくらはあまた立てれども大かたは散り過ぎて一木ふたきさ

○甕麻呂　夏目嘉右衛門、遠江白須賀の人、本居宣長門の國學者、門人が多かつた。萩園と號す、安政六年歿、年八十七。

○おしけたれて　雜草に壓迫されて。

○こ萩のゆかりさしそひて　依隆を養子にした緣故も加はつて。

○諸平　夏目甕麻呂の長子、加納伊竹の嗣子となる、通稱小太郎、和歌山藩に仕へた。本居大平の門。安政四年六月二十四日歿、年五十二。

大悲閣のさくらはさかりなりのぼりてみれば歌あまたゑりたる額かゝれり郡山の殿故甲斐守保光朝臣のをはじめて名ある人々のうたもあり甃麻呂のは「ながきよのはるのともとやちぎらましつひの住家の山ざくらばな」とあるを見て

七年のむかしを夢とおどろけばこてふに似ても散る櫻かな

庭にはやう錦木といふものを植ゑおきたるが八月の末つかたつや〳〵と色つきてちひさき實さへ赤うてりたるをみて

たてぬきの露も時雨もにしき木の名はくたさじと先づ染めつらむ

二月つごもりがた榛葉俊夫とひ來ておのがもとやしきといふところの櫻をみて昔すみ給ひしわたりにさくらの大きなるがあるをこはそのかみうしのまだいとをさなうおはししほどうゑ給ひたるがその花なむ今なほ立ちさかえたるを見侍りてとかきて「咲きにほふ君がかきねのもとさくらもとのこゝろや花もわすれぬ」また「立ちかへりさかゆく君がもと櫬屋外のこずゑもいちじろくして」とよみて出したるに

咲く花のもとの心をことの葉にかけていふこそ嬉しかりけれ

○保光朝臣　大和郡山の藩主、信鴻の子、初名實信、香山と號す、和歌を冷泉家に學んだ、文化十四年卒、年六十九。

○こてふに似ても　莊周の胡蝶の夢と、落花の蝶に似たのをかけた。

○錦木　衞矛屬の落葉灌木、秋季紅葉し、紅實を結ぶ。まゆみ。

○たてぬきの云々　たては縱絲、ぬきは緯絲。くたさじは朽ちさすまい。たてぬき、くたさじ、皆錦の緣語。

○屋外　やど、家の外。

櫻花二たび門にかをるべくむかしにかへすはる風もがな

伊藤春元としごろなやみわたりけるが七月ばかり身まかりければ

此の秋ぞつひのわかれとなりにけるあるを見るだに悲しかりしを

夏目みかまろ五月五日津國昆陽にて身まかりぬと聞きて

津の國のこや夢ならむとばかりにあやめもわかず音こそ泣かるれ

江塚直方やまひして四月ばかり身まかりけるをおのれ金谷にものしけるほどにてそこなるともだちほのかに聞き出でたりとてかたりけるをいかでそら言なれかしとおもひて家にかへりてのちさだかに聞きとりたるかなしさいはむかたなし

卯の花をくたすながめとおもひしはしらぬ袂の涙なりけり

文月十日そのなきあとをとぶらひて

露分けてとふもかひなき草のはら身にしむ秋の初かぜぞふく

二月ばかり直阿上人身まかりけるとき

雲ぢゆく翅をみてやかりのよをいまはと君もおもひ立ちけむ

長谷川貞綱が妻たき子が二月ばかり身まかりけるをとぶらひて

○伊藤春元　通稱傳兵衛、遠江の歌人。

○江塚直方　通稱玄泰、遠江鎌田の歌人。

○卯の花をくたす云々　卯の花を朽ちさせる長雨と思つたのは。

○かりのよを　假の世と雁とをかけた。

八月ばかり河野氏身まかられけるにさかりのよはひなりければ

玉だれの越智の大野にすむ月のかげ中ぞらに消えにけるかな

荒木田末壽八月十五夜月をみ居りてうたよみながら身まかれりと聞きて

いせの海や秋の半ばに影きえて二たびすまぬ月ぞかなしき

竹門そへ子三とせばかりやまひの牀になやみわたりしに六月三日絶えはてぬとつげおこせければ

あはれ君たからじとはみしかども限りときけば悲しかりけり

師の翁なくならせたまひしのち岡屋にて

ことにのみ寂しといひし萩の風みにしむ秋になりにけるかな

本居建正ぬし身まかりぬと聞きて藤垣内翁のもとにつかはしける

しら玉は君が手かれて紀の海のかへらぬ浪になどしづみけむ

九月ばかり寺田茂久がみまかりけるを霜月になりてとぶらひて

秋かぜに散るをばしらで言の葉の色そふとのみ思ひけるかな

駿河國水戸島の深澤何がしの妻袖子はちかきころおのがをしへ子となりたる人なりさるをそが夫強盗のまがにあひてうせぬとてとり〴〵に聞えつれどよく聞きさだめずてはとひやるべくもあらずて過ぎぬるを月頃へ

○玉だれの越智の大野に　[illegible]の枕詞。越智は大和高市郡小市郷。
○荒木田末壽　すゑほぎ、通称[illegible]谷大夫、伊勢[illegible]の禰宜、本居宣長の門人。
○二たびすまぬ　二度住まぬと澄まぬとかけた。
○師の翁　石川依平の師、栗田土満。[illegible]
○本居建正　通称長衛、大平の長子、文政二年歿。
○[illegible]　本居大平の門。[illegible]茂樹、通称十内、伊勢松阪の人、[illegible]の子、宣長の門に学び後養子[illegible]、大平の[illegible]、天保四年[illegible]十一月歿、年七十八。
○[illegible]
[illegible]、大[illegible]神社に仕へ[illegible]枝の國に住んだからだ。
○強盗のまが　強盗の奇禍。

○こざまのことにて云々　非業の死であつて残念さに心の晴るべくもありません。

○およづれごと　妖言、いつはり言。

○よの常なさの云々　世の無常で當然死ぬる筈でも、死のわかれは悲しきに、まして横死での別れは、いよ〳〵悲しいことであらう。

○さ月の玉のをだえせしより　五月の菖蒲の緒絶えさ、玉の緒即ち父の命の絶えたとをかけた。

○ひなさへづり　雛囀り、自己の弔辭を卑下したのである。

てかしこよりせうそこしてしか〳〵なむ侍る夫にわかるゝだにあるをよこざまのことにてむねあくべくも侍らずあしたゆふべになげきやるかたなさによみつるうたとて長歌をもよみて筆加へてよとあるにいとあはれにこゝろぐるしくて其のうたにことくはへなどしてかへしやるとてよみてつかはしける

玉ほこの道のちまたにほの聞きしおよづれごとはまことなりけり

大かたのよの常なさのたぐひだに終のわかれは悲しきものを

河村秀篤さ月つごもりの日身まかりけるにその子秀攀のもとへ

ほとゝぎすいかになくらむ年ふりしさ月の玉のをだえせしより

桐田直勝十月ばかり身まかりけるを月ごろへて後に聞きてかなしみてよめる

袖ぬれむものともしらでかみな月たゞ大かたのしぐれとぞみし

小栗廣伴身まかりて後大場重光がとぶらふにあつらへていさゝかのものひなさへづりなど靈前にそなふるに歌は

言のはの道かたらひてゐみ栗のゐみし面輪はわすられなくに

九月ばかりつまのみまかりけるころ

○ひとりあれとは　地下に埋められて寂しく甚獨りだけあれとは。

○なよ竹　弱竹となしこをかけた。弱竹は細くしなふ若竹。千尋、ふし、若竹の縁語。

○あふち散る　樗、小さき紫の花が咲くので、紫の雲を連想した。[illegible]

○大猷院　三代將軍家光公

○あえもの　長壽にあやかるもの

嵐ふく此のかた山の若林にひとりあれとは思はざりしを

八月ばかりわらはは依隆がとみにうせける時よめるおのれけたはやくより
こゝちなやましきほどなりければ

もろくちる小萩が上の秋風としらで我が身になにいとひけむ

かきすさびたる竹の繪などをみて

ちひろにと思ひしかひもなよ竹のわすれぬふしはなどかとゞめし

縣居翁靈祭會に紅葉をみていにしへをしのぶといふことを

よにてりし昔のかげと故郷の岡部のもみぢ見つゝしのばむ

おなじ翁の五十年の靈祭會に、故郷月

ふるさとの軒もる月のさやかにも君がみかげをしのぶよはかな

大慈寺殿の三百五十回忌に、秋懷舊

いまもなほ糟やの野べの露はらに昔の秋の風や吹くらむ

妙玄禪尼の二百年忌に、夏懷舊

あふち散る樹をみても紫の雲ときえけむむかしをぞおもふ

禪尼は酒井家の先祖雅樂介正親ぬしの室なり百二十歳まで世におはし
けるを大猷院の大將軍きこしめしてあえものにとてその衣服をこひた

まひて著させたまひしとぞ

駿河國志貴昌芳の追慕會に、秋懷舊

人みなのそでに露ちる秋風はことしを去年にふきかへすらむ

内藤かつ子が一めぐりの忌に、冬懷舊

去年かれし松陰とへば今も猶こゝろにひゞく雪をれの聲

馬場長英が追慕會に、冬懷舊

おきな草霜にかれにしそのかみを忍ぶも遠しむさし野のはら

長英はもと掛川のひとにて大庭延香が從弟なり江戸に住みて村田春海につきて歌よめりし人なり

竹内春平が三回忌にかの家にてよめる

君まさで三たび袂をぬらしけり花散るころの春雨のそら

丸尾清貞が追慕會に、寄萩懷舊

露をおもみ風待つ庭の萩すらも昔にこひて打ちなびくらむ

かくよめるは清貞さきつとし松島みにゆきて宮城野の萩をほり持ち來て庭にうゑおきしことをおもひ出でてなむ

内藤まつ子が七回忌に

○雪をれの聲　雪のため松の折れた音、若死した人に譬へた。
○馬場長英　通稱[illegible]、遠江掛川の歌人、村田春海の門。
○おきな草　翁草、菊の異名。
○竹内春平　通稱玄壤、遠江掛川の醫者、歌をよくした。
○丸尾清貞　通稱[illegible]、遠江の醫、文政七年本居春庭の門に入る

およびをりかきかぞふれば七種もけふの手向と花咲きにけり

九月ばかり穂井田忠友身まかりけるを十一月になりて冬月といふ題にて追慕のまとゐすと聞きて

影きえしみやこの空の秋の月しのべば今も霜ぐもりして

鈴屋翁二十七回忌に、寄海懐舊

いせのうみや浦かぜそよぐ濱荻のおきふし君をしのぶ頃かな

師翁の十年の祭に、秋懐舊

影きえし秋をこひつゝ夕月夜おぼつかなくも十とせへにけり

夏日鰹麻呂の三十三回忌に、夏懐舊

こゝにてもあやめの枕ひきゆはば昆陽野の昔夢にだに見む

いつばかりにかありけむ同じ人の像をみて

おもひやるさかひはるけきこやの野の露よ何しか袖にみだるゝ

竹内そへ子の三回忌の會に夏の懐舊のうたよみて夜をあかしてそのよのことどもかたらひつゝ披講をはりて俊夫など二三人笛ふき出でたり

面影の空にきえゆく心地して今はたかなし有明の月

四宮氏のむすめの髪置の祝に、寄鶴祝

○およびをり云々　萬葉集巻八の歌「秋の野に咲きたる花をおよび折りかき数ふれば七種の花」七草をし回忌に思ひ寄せたのである。

○穂井田忠友　通稱[illegible]、賀茂を號す、後雅を棟花と改めた。三河の歌人、平田篤胤及び香川景樹の門人、天保四年九月十九日歿、年五十六。一説弘化四年歿。

○鈴屋翁　本居宣長。

○おきふし　寝ても[illegible]。常の意。

○あやめの枕　五月端午菖蒲を枕の下に敷く事。

○四宮氏　四宮晴成であらう。通稱與右衛門、號は霞窗、遠江掛川侯の家士、和歌茶道に達した。文政十一年歿。

○髪置の祝　男女三歳で始めて頭髪を蓄へる祝ひ。多く十一月十五日を式日とした。

かめの子の萬世こもる生ひさきのしるしをけふぞみつといはふし

中村覺足がむすめの九歳のいはひに

瑞垣のあたりに近き小松原よごもる末は神ぞまもらむ

三河國寶飯人山本賞が五十賀によめる字は子善といひて桃によせてつけたるなりと聞きて

もゝちゞの春の花みてくらすべく意富加牟豆美の神や守らむ

袴田勝彦が五十賀に、秋祝

八束穗のいなほのかづらつら／＼にかけて千とせを君はへななむ

後鈴屋翁の六十賀に、春祝

みづ枝さすといほの森の陰高みこのめ春風千代よばふらむ

中山吉埴が六十賀に、寄山祝

位山わけのぼりたる君なれば千年の坂もやすくこえなむ

朝比奈泰茂の六十賀に、寄竹祝

竹の葉の垣内にそよぐ音きけば君が八千代をよばふなりけり

高林方朗が六十賀に、春祝

あら玉の河ぞひ柳はるごとにゑみのまゆさへ開けそふらむ

○みつといはふし　見つと三つとかけた。三つは三歳の意を含ませたのである。
○中村覺足　通稱[illegible]、阿波德島の人、本居大平門の國學者。
○よごもる末　世籠る末、將來春秋に富む、生先長き將來。
○意富加牟豆美の神　おほかんづみのみこと。伊邪那岐命黄泉國から黄泉醜女に追はれて逃げられた時、坂本なる桃の實を投げて助かつた。その桃をかく名づけて神とされた。古事記上卷にある。
○袴田勝彦　通稱[illegible]、遠江赤坂の人、文政十年本居[illegible]の門人となつた。
○いなほのかづら　稻穗の鬘、つらつらは連ね／＼の意。
○みづ枝さす云々　みづ／＼しき若枝の生ずる。
○はるごとにゑみのまゆさへ　春每と萌える春とかけ、笑みの眉と柳の黛とをかけた。萌は芽のふくらみて開かぬもの。

おなじ人の七十賀に、秋祝

都にて君がめでけむもみぢばのちしほや千世の色の初しほ

村田春門が七十賀に寄竹祝をよめるその家の名を篠の隈といふと聞きて

君がへむ千世の根ざしはさゝ竹のねはふ隈にやこもりたるらむ

内山眞龍が八十賀に、寄松祝

雲居にもこゑきこえてし長濱の浦の松かぜ千代よばふなり

高岡宗某が八十賀に、寄竹祝

むら竹の千尋の陰にすむ君はいまを世ごもる程とこそみめ

寄神祇祝

みとしいはふ廣瀬龍田のみぬさには神のこゝろも打ちなびくらし

家の會はじめに、春祝

野に山にめぐむ草木をためしにて言の葉さへに百世にもがな

戸塚竹窗隱居せりと聞きてよみてつかはしける

くれ竹のよをへだてつゝ窗の内にゐまちふしまち月やみるらむ

四海清

島のさき海布かり鹽やく袖までもうらやすげなるうらかぜぞふく

○村田春門　幼名を一四郎清樹と云ふ、[illegible]、循子園と號す、伊勢白子の人、後[illegible]の守、大阪に住んだ、本居宣長の門人、和歌に巧みであつた。天保七年十一月二十四日歿、年七十二。

○長濱　伊勢[illegible]の海岸。

○いまを世ごもる　今を若い盛り世は竹のよ(節と節との間)とかけた。

○廣瀬　大和北葛城郡、廣瀬神社。

○ゐまちふしまち　居待月と寢待月にかけた。八月十八日と十九日の月。

○うらやすげなる　心安げなると浦安げとかけた。

○玉相留　たまさかる、容易に逢ふ事の出來ぬ。
○狛劒　わがの枕詞。わにかけて云ふ詞。
○小垣内能　をかきつの、垣の内の。

「含而雖有　ふゝみてあれども、」蕾は未だ蕾であるが。

○筑波山尾上之嬥歌　萬葉集卷九筑波嶺に登りて嬥歌會をする日詠める歌に據つた。
○津國能歌垣山　風土記に「雄伴郡比具利岡、西有歌垣山。」とある現今の攝津武庫郡宇治であらうと云ふ。

柳園詠草下

長歌

聞鶯鳴暫友人歌

宇々良々等　加須牟春日爾　玉相留　友待不得而　古草爾　新草萬自里　毛延出留　庭護平之　狛劒　吾多知待者　小垣内能　志太理小柳　春風爾　靡伎起臥　其枝能　見能宜毛　見渡乃　竹能林爾　打羽振　來居鶯　其聲能　聞乃宜母　朝不去　志奈布柳母　夕不放　鳴宇具比須母　吾情　蓋哉志禮留　我如久　戀可喧良無　宇留波之伎　友待久良須　長伎春日爾

反歌

青楊者加豆良二爲倍久成爾家利作樂者伊末陀含而雖有

盆踊　詠進

金風爾　乎花靡　夕露爾　眞芽子夜多和牟　初乎花　靡久爾毛不有　秋芽子能　多和牟爾毛不在　庭毛勢爾　未通女壯士乃　往集比　踊多波禮弖　立走　阿蘇夫乎見者　筑波山　尾上之嬥歌　津國能　歌垣山乃　曾乃可美能

布留伎手振乃　思保由良久爾

暮秋登阿波々山作歌

御食向　阿波々能山者　朝爾食爾　雖見不飽　鏡成　見賀保之山　其山乎　打超見武等　思布等　手携弖　鴈金能　渡良布秋乃　乎花落　野邊行過弖　背面從　騰里弖見禮婆　本邊爾波　黄葉一　實比　多藝知行　磐瀨毛清之　末邊庭　樹奴志美佐備　木奴禮吹　秋風寒之　影面乃　石根爾多知弖　天原　振放見者　不盡乃根者　雪零積弖　白雲能　上爾拔出　志留波能海　澳行船毛　香切火能　保能爾見衣都々　阿々夜々爾々　浦妙山曾　阿波々乃山者

反歌

羣山乎　麓爾成弖　取與呂布　阿波々高嶺者　神左備爾氣理

過近江湖邊時述心緒歌

磐走　淡海之海乃　邊津方爾波　夕浪左和伎　奥邊庭　加萬目都賦喚　鳥尙毛　然曾妻呼　此間爾爲弖　家八方何處　艸枕　客之氣長美　稚草能　嬬香待覽　愛八師　子可毛泣良無　其思者　情毛思努爾　家之所偲

反歌

客人能　袖吹返須　大日枝能　嵐者寒之　速歸理奈牟

○御食向　粟の枕詞。
○朝爾食爾　あさにけに、毎朝毎日。
○本邊爾波　もとべには、もとのかたに。末邊には對する詞。
○志美佐備　しみさび、茂り古び。
○木奴禮　こぬれ、木の末。
○影面乃　かげともの、南の。
○香切火能　かぎろひの、陽炎の如く。
○取與呂布　とりよろふ、完備せる。
○邊津方爾波　へつへには、岸の方には。奥邊庭に對する詞。
○加萬目　かまめ、鷗。

詠弘安神風歌

須米呂伎能　神能命乃　神隨　高知坐留　天下　平安宮能　伊爾之能　遠
津大御代爾　蒙古知布　國能己爾伎之　左比豆留也　夜能八十國　末都濔敝
弖　勝能進爾　負氣奈久　御國世米牟登　多波和邪乎　千々爾波可良比　曾
古良久能　軍乎於己之　和田能原　浪爾伎保比弖　都久之能海　博多能濱爾
直渡　伊武可比來奴禮　島能前　守利加多武留　物部乃　益良建男波　白浪
能　來依留濱備爾　百千能　楯衝竝倍　百八十能　簇押奈姚計　梓弓　執取
負而　劒太刀　多知武可比乍　葦花乃　知良布我如久　負征箭乎　千尋射渡
之　去鳥能　安良蘇布波之爾　天原　雲踏安多之　雷能　動美爾登與美　級
戸邊乃　神能伊夫伎乃　神風爾　伊不伎末斗波之　百千能　船乃己登其登
荒磯能　岩根爾久太計　千萬能　賊能盡　荒海能　浪爾多太與比　和多都美
能　千尋能底爾　青波乃　五百重我下爾　潮沫乃　消弖曾守勢之　八百萬
知與呂豆神乃　皇神能　守太布斗之　天皇能　御稜威加之己之　天地乃　彌
遠長久　語繼　言繼由可牟　日本能　也未登能國乃　以可之御稜威者

反歌

風雲毛與利弖都可布留天皇能志伎末須國曾山跡乃國者

○神隨　神の御心のまゝにて人爲を加へざること。
○己爾伎之　こにきし、古の朝鮮語と云ふ、三韓王をさす。
○末都濔敝弖　まつろへて、征服して。
○多波和邪乎　たはわざを、愚かな事を。
○曾古良久能　そこらくの、そこばくと同じ、若干の。
○級戸邊乃神能伊夫伎乃云々　級戸邊の神は風を支配する神。その風の神が息を吹く神風で吹きまどはせて、
○以可之御稜威者　いかしみいづは。おごそかなる御威光は。
○志岐末須國曾　しきます國ぞ。知ろしめす國ぞ。

答出雲國造尊孫歌一首

比來以一區額題字乞出雲國造尊孫君々卽書柳園書室之四字併製長歌以被惠感荷之餘敬和歌其詞曰

吾苑能　志太利柳者　梓弓　春爾至婆　淺緑　打奈毘氣拆毛　淺等奈留　色爾之有乎　風流士乃　蘰爾爲閉久　白露乃　玉貫枝登　風能音乃　遠音爾伎加之　遠々之　出雲國　畏伎也　大宮能邊乃　鶴山能　高伎志良倍乎　此園乃　柳之宇禮爾　白玉等　可豆計給敝禮　曾許乎之毛　綾爾多布斗美　許々乎之毛　安夜爾宇禮之美　後世能　語爾須倍久　其玉乎　木奴禮爾懸弖　其玉乃　加我與布母許呂　打志奈比　左加衣曾由可牟　彌年能端爾

反歌

千代經登布鶴山於呂之青柳能左枝爾加欲布春爾逢爾氣理

大慈寺公三百五十回忌辰追慕往事聊述鄙懷歌

古昔能　遠津大御代爾　鷄我鳴　東能國乃　刈薦能　亂忠々之美　吾君能　遠津御祖　源能　朝臣乃美許登　千磐破　人袁和之弖　平良可爾　顯米牟毛能等　軍人　安騰毛比多末比　劍太刀　腰爾執佩　梓弓　末布里於己之　相摸嶺能　攀根樹莫毛　靡得　踏左久美都々　武藏野乃　茅原菅原　如此依禮

○柳之宇禮爾　柳のうれに、柳の梢に。
○木奴禮爾懸弖　こぬれにかけて　梢にかけて。
○加我與布母許呂　かゞよふもころ。輝ふ如く。
○安騰毛比多末比　あどもひ給ひ　率ゐたまひ。
○踏左久美　踏みさくみ。強く踏み行き。

○年月末禰倶　年月まねく、歳月を積む事多く。

○人乃中言　人の讒言。

○都我能木乃　栂木の、栂は常磐木で常に繁り榮える木であるから其の語音を繰返し、つぎ〳〵と言はん序詞に用ゐる。

等　押靡可之　璞乃　年月末禰倶　指擧留　御旗能奈妣伎　引放都　荒木能眞弓　伊向波武　敵能奈家禮婆　間遠久能　國等盡　御稜威乎之　仰藝恐美　御功績波　立祁留毛乃乎　美太禮世波　爲便奈伎毛乃可　垣穂成　人乃中言　鎌倉能　扇我谷爾　狹霧奈須　立隔利弖　雲隱　伊隱坐伎　雖然　高佐御名波之　雷能　等抒呂久我如　末能世乃　語爾須禮婆　伊夜之氣伎　賤能男吾母　玉手次　懸弖會偲布　恐可禮騰毛

反歌

都我能木乃彌繼々爾其御名乎稱曾由可年萬代左右爾

柳園詠草　終

良寛歌集

良寛和尚

良寛歌集

長歌

風雪雨春の徒然

風まぜに　雪は降りきぬ　雪交り　雨は降りきぬ　梓弓　春にはあれど　鶯も　いまだ來なかず　野に出でて　若菜も摘まず　たれこめて　草の庵に　籠りつゝ　打ち數ふれば　睦月もや　すでに半ばに　なりにけるかな

雪の雁

風まじり　雪は降りきぬ　雪まじり　雨は降りきぬ　此のゆふべ　おき居て聞けば　鴈金も　天津みそらを　なづみつゝゆく
久方の雲居を渡る鴈金も羽白妙に雪や降るらむ

きさらぎ

冬籠り　春にはあれど　埋火に　足さしのべて　つれ〴〵と　草の庵に　とぢ籠り　打ち數ふれば　きさらぎも　夢の如くに　過ぎにけらしも

手毬をよめる

○風まぜに　風交りに。
○なづみつゝゆく　行きなやみつゝ歩む。
○冬籠り　春の枕詞。

冬籠り　春さり來れば　飯乞ふと　草の庵を　立ち出でて　里にい行けば
玉鉾の　道の巷に　子供らが　今を春邊と　手毬つく　ひふみよいむな　汝
がつけば　あは歌ひ　あがつけば　汝は歌ひ　つきて歌ひて　霞たつ　長き
春日を　暮しつるかも

霞立つ長き春日に子供らと手毬つきつゝ今日も暮しつ

鉢の子

鉢の子は　愛しき物かも　敷栲の　家出せしより　朝には　腕(かひな)に掛けて　夕
には　たなへに載せて　新玉の　年の尾長く　持たりしを　今日よそに　忘
れし來れば　立つらくの　たづきも知らず　居るらくの　術(すべ)をも知らず　刈
菰の　思ひ亂れて　夕づゝの　か行きかく行き　谷蟆(たにぐゝ)の　さ渡る底ひ　天雲
の　向伏す極み　天地の　寄合の限り　杖つきも　つかずも行きて　留めな
むと　思ひし時に　鉢の子は　此處に有りとて　我が許に　人は持て來ぬ
いかなるや　人にませかも　千早振　神の法かも　ぬば玉の　夜の夢かも
嬉しくも　持て來るものか　よそしなへ　持ち來るものか　その鉢の子を

道の邊に菫摘みつゝ鉢の子を忘れてぞこし其の鉢の子を

鉢の子をわれ忘るれど取る人はなし取る人はなしはちの子あはれ

○春さり來れば　春しあり來れば　春になれば。
○飯乞ふと　良寛が絶えず托鉢して歩いた事は周知の事實である。彼の歌に「飯乞ふと我こしかども春の野に菫摘みつゝ時をへにけり」其の他飯乞ふ歌は本集に多い。
○玉鉾の　道の枕詞。
○手毬つく　良寛は子供等と手毬つくをその樂しみの一つとした。
○ひふみよいむな　一二三四五六七、手毬をつく數を數へた所。
○あは歌ひ　吾は歌ひ。
○あがつけば　吾が手毬をつけば
○鉢の子　單に鉢と同じ、元來印度に於ける食器、僧が托鉢のため用ゐるのである。
○敷栲の　元來衣袖などの枕詞であるが、時より轉じて家にかけた。
○家出せしより　良寛は越後出雲崎の舊家の嫡子であつたに拘らず十八歳で家出したのである。
○たなへに載せて　手上にのせて
○忘れし來れば　良寛は物忘れする癖があり、後には所持品を書き記し、他家を出る時、讀み合はせて忘れぬやうにしたと云ふ逸話がある。
○谷蟆の　ひきがへるの異名。此の一句は萬葉集卷五の「天雲の向伏すきはみ、谷ぐゝのさわたるきはみ」を採つた。
○よそしなへ　他と同じく。

○つぬさ生ふ　岩の枕詞。
○さねこじの、根こじに掘り。
○村肝の　心の枕詞。
○手をあかち　手を分ち。
○かくみつゝ　圍みつゝ。
○八握の髯を云々　花ぬす人と呼ばれし昔を忘れて得意な様をひやかしたのである。
、野積のや　越後三島郡野積村海岸を野積濱と云ふ。

山寺梅

つぬさ生ふ　岩坂山の　山越しに　み寺の梅を　垣越しに　仄見てしより
さねこじの　根こじにせむと　村肝の　心に掛けて　霞たつ　長き春日を
忍びかね　夕さり来れば　唐錦　里立ち出でて　旗薄　大野を過ぎて　千鳥
なく　濱邊を通り　まきたてる　荒山越えて　岩が根の　こゞしき道を　踏
みさくみ　辿り／＼に　忍びつゝ　うら門まはり　大寺の　垣根に立てば
寺守の　こや盗人と　呼ばはれば　里に聞えて　里人は　おのも／＼に　手
をあかち　しもとを取りて　足曳の　み山もさやに　笹の葉の　露をおしな
み　玉鉾の　道もなきまで　かくみつゝ　然しよりして　天が下に　花盗人
と　なのらへし　君にはませど　空蟬の　世の事なれば　いつしかも　年の
經ぬれば　葦の屋の　伏屋がもとに　終夜　八握の髯を　掻い撫でて　おは
すらむかも　この月ごろは

何事もみな昔とぞ成りにける花に涙をそゝぐ今日かも

又

野積のや　み寺の園の　梅の木を　ねこじにせむと　梓弓　春の夕に　岩が
根の　こゞしき道を　踏み分けて　軒端にたてば　人は見て　盗人なりと

鐘を打ち　鼓をならし　足引の　やまとよもして　集ひけり　しかしよりして　みな人に　花ぬす人と　よばはえし　君にはあれど　いつしかも　年の經ぬれば　葦の屋の　丸屋がもとに　終夜　おはすらむかも　この月頃は

國上山

足曳の　國上の山の　山陰の　乙子の宮に　宮つかひ　朝な夕なに　岩とこの　苔むす路を　蹈みならし　いゆき歸らひ　十寸鏡　仰ぎて見れば　み林は　神さびたてり　おち瀧津　水音さやけし　そこをしも　あやに乏(とも)して　皐月には　山郭公　をちかへり　來なきとよもし　長月の　時雨の時は　紅葉ばを　ひきて手折りて　新玉の　あまた月日を　こゝに過しつ

露霜の秋の紅葉と時鳥いつの世にかは我忘れめや

みはやし

大殿の　とののみ山の　み林は　幾世經ぬらむ　千早振　神さび立てり　庵をしつゝ　朝には　いゆきもとほり　ゆふべには　そこにいで立ち　立ちて居て　見れども飽かぬ　これのみ林

えにしあらば又も住みなむおほとのの森の下庵いたく荒すな

山陰の荒磯の波の立ちかへり見れども飽かぬこれのみ林

○やまとよもして　山を動搖させて。

○國上山　くがみ山、越後出雲崎に近き山、西蒲原郡國上村文化元年良寛四十八歳の時、山の中腹に庵を營み住む、五合庵と云ふ。

○乙子の宮　國上山頂に寶篋印塔あり傍に乙若塚がある。これを祭つたのが乙子の宮で國上寺境内にある。若義法神。

○あやにともして　ほんとに珍らしく面白く。

○いゆきもとほり　行き徘徊し。

○百傳ふ　いの枕詞。
○伊夜日子　越後彌彦山、山に彌彥神社がある。
○有り通ひ　絶えず通ひ。
○まぐはしも　美妙であるよ。
○天保元年　彼の七十四歳の時。
○鬼の醜草　紫苑の古い異名。但しこゝでは單に雜草の意に用ゐてある。醜草を拔き除いて多くの名ある草を育てたのである。

伊夜日子

百傳ふ　伊夜日子山を　いや登り　登りて見れば　高嶺には　八雲棚引き　麓には　木立神さび　落ち瀧津　水音さやけし　越路には　山は有れども　此の山の　いやますたかに　此の水の　たゆる事なく　有り通ひ　いつきまつらむ　伊夜日子の神

同じく

伊夜日子の森の陰道踏み分けて我來にけらしその陰道を

伊夜日子の　麓の木立　神さびて　幾世經ぬらむ　千早振　神さび立てり　山見れば　山も貴し　里見れば　里も豐けし　朝日のまぐはしも　夕日のうらぐはしも　そこをしも　綾に乏しみ　宮柱　太敷立てし　伊夜日子の神

大風　天保元年

我が宿の　垣根に植ゑし　秋萩や　一本薄　女郎花　紫苑撫子　藤袴　鬼の醜草　拔き捨てて　水を注ぎて　日覆して　育てしぬれば　玉鉾の　道も無きまで　蔓りぬ　朝な夕なに　往き戻り　そこに出でたち　立ちて居て　秋待遠に　思ひしに　時こそあれ　皐月の月の　二十日餘り　四日の夕の　大風の　競ひて吹けば　荒金の　土にのべ伏し　久方の　雨に亂れて　百千々

に　成りにしぬれば　門さして　足摺しつゝ　寢ねぞしにける　甚も術なみ

手もすまに植ゑて育てし八千草は風の心に任せたりけり

月の兎

天雲の　向伏す極み　谷蟆の　さ渡る底ひ　國はしも　澤に有れども　人はしも　數多有れども　御佛の　生れます國の　あきかたの　其の古の　事なりし　猿と兎と　狐とが　言を交して　朝には　野山に遊び　夕には　林に歸り　斯くしつゝ　年のへぬれば　久方の　天の尊の　聞召し　僞り眞　知らさむと　旅人となりて　足曳の　山行き野行き　なづみ行き　をし物あらば　給へとて　尾花折り伏せ　息ひしに　猿は林の　ほつえより　木の實を摘みて　參らせり　狐は簗の　あたりより　魚をくはへて　來りたり　兎は野邊を　走れども　何もえせずて　有りしかば　汝は　心元なしと　戒めければ　はかなしや　兎うからを　たはくらく　猿は柴を　刈りて來よ　狐はそれを　焚きてたべ　任けのまに〳〵　なしつれば　焰に投げて　あたら身を　旅人の贄と　成しにけり　たびとはそれを　見るからに　しなひうらぶれ　こひ轉び　天を仰ぎて　よゝと泣き　土に僵れて　やゝありて　土打ち叩き　申すらく　いまし三人の　友達に　勝り劣りを　云はねども　あれは

○手もすまに　手も休ませず暇なきまでに。
○御佛の生れます國　印度をさす
○なづみ行き　行きなやみ。
○をし物あらば　食物があるなら
○ほつえより　梢から。
○簗　魚をとる簗。
○うからをたはくらく　兎はその同族をあざむいて。
○任けのまに〳〵　兎の命令通りに猿狐がしたのである。
○あたら身を云々　旅人に何もすることが出來なかつたので自分の身を贄として捧げた。
○しなひうらぶれ　しをれ弱り、苦しがり。
○こひまろび　ころび倒れ。

兎を　愛しとて　元の姿に　身をなして　からを抱へて　久方の　天津み空を　かき分けて　月の宮にぞ　葬(はふ)りける　然しよりして　樛の木の　いや繼繼に　語り繼ぎ　言ひつぎ來り　久方の　月の兎と　云ふ事は　それが由にて　有りけりと　聞く我さへも　白妙の　衣の袖は　とほりて濡れぬ

秋の寐覺

此の秋は　歸り來なむと　朝鳥の　訪れぬれば　小男鹿の　朝伏す小野の
秋萩の　萩の初花　咲きしより　今か〳〵と　立ち待てば　雲居に見ゆる
鴈金も　いや遠ざかり　行くなべに　山の紅葉は　散り過ぎぬ　今更に　君
歸らめや　古里の　荒れたる宿に　獨り我　有りがてぬれば　玉襷　掛けて
しぬびて　夕星(ゆふづゝ)の　か行きかく行き　刺竹(さすたけ)の　君も逢ふやと　わけ行けば
五百重山　千重に雪降り　棚ぐもり　袖さへさえて　戀むる　心はなしに
唐錦　立ち歸り來て　草の庵に　侘びつゝぞ居る　逢ふよしをなみ

　秋山の紅葉は過ぎぬ今よりは何によそへて君を忍ばむ

冬籠

足曳の　國上の山の　冬籠り　日に〳〵雪の　降るなべに　往來(ゆきき)の道の　跡も絶え　故里人の　音もなし　浮世をこゝに　門さして　飛驒の工匠が　打

○有りがてぬれば　ひとり住みづらいから。

○打つ繩　匠の持つ墨繩を云ふ、一筋と言はん序詞。

つ縄の　たゞ一筋の　岩清水　そを命にて　新玉の　今年の今日も　暮しつるかも

わが宿は國上山もと冬ごもり往來の人のあと方もなし

今よりは故里人の音もなし峯にも尾にも雪の積れば

山陰の眞木の板屋に音はせねど雪のふる日は空に知れけり

柴の戸の冬の夕の寂しさは浮世の人のいかで知るべき

小夜ふけて岩間の瀧津音せぬは高根のみ雪降り積るらし

初時雨

神無月　時雨のあめの　をとつ日も　昨日も今日も　ふるなべに　山の紅葉は　玉鉾の　道もなきまで　散り敷きぬ　夕され來れば　さすかけて　妻木焚きつゝ　山たづの　向ひの岡に　小男鹿の　妻よび立てて　鳴く聲を　聞けば昔の　思ひでて　浮世は夢と　知りながら　憂きに堪へねば　さ筵に　衣かたしき　うちぬれば　板敷の間より　足曳の　山下風の　いと寒く　吹き來るなべに　あり衣を　有りのこと〴〵　ひきかづき　こひまろびつゝ　ぬば玉の　長き此の夜を　えも寐かねつゝ

○をとつ日も　一昨日も。

○さすかけて　横木を架けるに用ゐるもの、叉首。こゝでは妻木をたてかけてよく燃えるやうにするのである。

○やまたづの　向ふの枕詞。

○あり衣を云々　ある限りの衣を悉くありのこと〴〵音の繰返し。

行く水は　せけば留るを　高山は　こほてば岡と　なるものを　過ぎし月日のかへるとは　文にも見えず　空蟬の　人も語らず　古も　斯くし有るらし　今の世も　斯くぞありける　後の世も　斯くこそ有らめ　彼にかくにすべなきものは　老にぞ有りける

ねもごろのものにも有るか年月は賤が宿までとめて來にけり

又

行く水も　せけば留るを　おいらくの　又かへるとは　うつそみの　人も語らず　外國の　書にも見えず　古も　かくや有りけむ　今の世も　かくぞ有りぬる　後の世も　かくこそ有らめ　彼にかくに　すべ無きものは　老にぞ有りける

鹽法坂

越の浦　角田の海人の　朝凪に　誘ひて汲み　夕凪に　こりて燒くてふ　鹽法の　坂はかしこし　上見れば　目にも及ばず　下見れば　魂も消ぬべし千里行く　駒も進まず　み空行く　雲も憚る　其の坂を　善けく安けく　平らけく　成しけむ人は　如何なるや　人にませかも　千早振　神の法かもみ佛の　つかはせるかも　ぬば玉の　夜の夢かも　現かも　云はむすべ　せ

○とめて來にけり　求めてやって來た。

○おいらくの　老の名詞。

○鹽法坂　昔彌彦神が巖を開いて鹽を探つたと傳へられる五箇濱の地名であらう。

○角田　西蒲原郡彌彦山の一嶺。同名の濱もある。

○こりて燒くてふ　鹽を煮凝らせ燒くと云ふ。鹽と地名とをかけた。

むすべしらに　鹽法の　坂に向ひて　三たびをろがむ

鹽法の坂は名のみに成りにけり行く人忍べ萬代までに

白髪

宵々に　霜は降れども　よしゑやし　明くれば融けぬ　年の端に　雪は降れども　よしゑやし　春日に消えぬ　しかすがに　人の頭に　降り積めば　積みこそまされ　新玉の　年はふれども　けぬとは無しに

白雪は降れば且消ぬしかはあれど頭に降れば消えずぞありける

白髪はおほやけものぞ尊きや人の頭もよくと云はなくに

同じ

かけまくも　綾に尊し　云はまくも　畏きかもな　久方の　天の尊の　み頭に　白髪生ふる　朝には　臣を召さしめ　しろがねの　毛拔を持ちて　その髪を　拔かし給ひて　白銀の　箱に祕め置き　天傳ふ　日嗣の皇子に　傳ふれば　日嗣の皇子も　樛の木の　いやつぎ／＼に　斯くしつゝ　い傳へますと聞くがともしも

世にみつる寶といへど白髪に豈及ばめや千々のひとつも

白髪はよみの尊の使かもおほにな思ひそその白髪を

○よしゑやし　えゝまゝよ。

○おほやけもの　公有の物、一般の物。

○よくと云はなくに　個人の頭をよけて白くしないと言はぬに。

○よみの尊の使かも　白髪の多くなるのは、やがて死に近づく故に、黄泉の神の使と云つた。

○おほにな思ひそ　いい加減に思ふな。

○彌頻々に　いや繁く。繁く散ると繁く悲しいとをかけた。

○かげの如　やせ衰へし形容。

黄昏に　國上の山を　越え來れは　高峯には　鹿ぞ鳴くなる　麓には　紅葉散りしく　鹿の聲　音にこそ鳴かね　紅葉ばの　彌頻々（いやしくしく）に　物ぞ悲しき

同じ

夕暮に　國上の山を　越え來れば　高根には　紅葉散りつゝ　麓には　鹿ぞ鳴くなる　紅葉さへ　時は翔るといふを　鹿すらも　友し呼ぶらむ　かへらへや　物もてりとは　空蟬の世の　人にしあれば

同じ

足曳の　國上の山を　たそがれに　我が越え來れば　高根には　鹿ぞ鳴くなる　麓には　紅葉散りしく　小男鹿の　音にはなかねど　もみぢ葉の　いやしき〳〵に　ものぞ戀しき

夕暮に國上の山を越え來れば衣手寒し木の葉ちりつゝ

人にかはりて

我が脊子が　みまかりしより　新玉の　年の八年と　つれもなく　荒れたる宿に　手弱女が　獨りし住めば　慰むる　心はなしに　歎きつゝ　積りつもれば　かげの如　我が身はなりぬ　今更に　世には有れども　有りの實の

有り甲斐なしと　思ひとて　一日に千度　死なめとは　思ひはすれど　我が
脊子が　筐に殘す　二人の子　見るに心も　忍びずて　彼にもかくにも　云
はむ術　爲む術知らに　隱り居て　ねのみしなかゆ　朝な夕なに
　眞十鏡手にとり持ちて今日の日も眺め暮しつ影と姿と
　我がごとやはかなきものは又も有らじと思へばいとゞはかなかりけり

わくらば（辭世）

わくらばに　人となれるを　打ち靡き　病の牀に　臥しこやし　癒ゆとはな
しに　いたつきの　日にけに增せば　そこ思ひ　みをおもそふに　思ふ空
安から無くに　歎く空　くるしきものを　あからひく　晝はしみゝに　水鳥
の　息衝き暮し　ぬば玉の　夜はすがらに　人のぬる　安いはいねず　垂乳
根の　母かましなば　搔い撫でて　只まさましを　若草の　妻かありなば
執り持ちて　羽含まましを　家とへば　家もはふりぬ　同胞も　何地いぬら
む　うからやも　獨りも見えず　つれもなく　荒れたる宿に　空蟬の　よす
がとなせば　鶉鳴く　古里すらを　草枕　旅ねとなせば　一日こそ　堪へも
しつらめ　二日こそ　忍びもすらめ　新玉の　長き月日を　いかにして　明

○一日に千度死なめとは　萬葉集卷四「思ふにし死にするものにあらませば千度ぞ我は死にかへらまし」に據つた。
○辭世　良寛は天保二年正月六日七十五歲で寂した、その前に豫め作つたのであらう。
○わくらばに　稀に。
○臥しこやし　臥し寢る。
○おもそふに　思ひ添ふに、思ふ上に更に思ふに。
○あからひく　日、晝の枕詞。
○晝はしみゝに　晝は茂く、連續して。
○母かましなば　母でも居られたらば。
○家ゅはふりぬ　家も零落した。
○たまきはる　命の枕詞。

けれは　彼にもかくにも　すへをなみ　音をのみそなく　爲荒男にして

新玉の長き月日をいかにして明かし暮さむあさて小ぶすま

おなじ（末期）

わくらばに　ひととなれるを　なにすとか　あしきやまふに　ほださえて　ひるはしめらに　水鳥の　肩衝き暮し　ぬば玉の　夜はすがらに　ひとのぬる　やすいはいねず　垂乳根の　母かましなば　かきなでて　たゞまさましを　若草の　妻か有りせば　はがひもちて　はぐゝまましを　いへとへば　家もはふりぬ　はらからも　いづちいぬらむ　つぶもなく　荒れたる宿を　空蟬の　よすがとなせば　一日こそ　たへもしつらめ　二日こそ　忍びもすらめ　新玉の　この長き日を　いかに暮さむ　麻手小衾

百傳ふいかにしてまし草枕旅の庵に逢ひし頃はも

五陰皆空と照見して一切の苦厄を度すと云ふ心を讀める

世の中は　はかなき物ぞ　足曳の　山鳥の尾の　しだり尾の　ながくし代を　百代つぎ　五百代をかけて　萬代に　極めて見れば　枝に枝　巷に巷　わかろへて　立つらくの　たづきも知らず　老いらくの　すべをも知らず　解き衣の　おもひ亂れて　浮雲の　行方も知らず　云はむすべ　爲むすべ知

○あさて小ぶすま　麻手小衾、麻の衾。

○ほださえて　しばられて。

○五陰皆空　宇宙をなす五大、地、水、火、風、空、皆むなしの意。

○わかろへて　分れて。
○解き衣の　解きし衣の如く。

○鴨のもころの　鴨の如く。
○へつな　へさきの綱。
○心もいれず　心もいら〱せず
○花咲きをゝり　花咲き撓み。

らず　沖に棲む　鴨のもころの　水鳥の　八尺の息を　衝き居つゝ　誰に向ひて　うたへまし　大津のへに居る　大船の　へつな解き放ち　とも綱とき放ち　大海原のへに　おし放つ事の如く　をち方や　繁きがもとを　八重鎌の　利鎌もて　打ち拂ふ事のごとく　五つのかげを　さながらに　五つの陰と　知るときは　心もいれず　事もなく　わたし盡しぬ　世の事々も

空蟬のうつゝ心のやまぬかも生まれぬ先にわたしにし身を

伊夜日子に詣でて

百傳ふ　伊夜日子山を　いや登り　登りて見れば　高根には　八雲棚引き　麓には　木立神さび　落ち瀧津　水音さやけし　越路には　山は有れども　越路には　水は有れども　こゝをしも　うべし宮居と　定めけらしも

國上

足曳の　國上の山に　家居して　いゆき歸らひ　山見れば　山も見かほし　里見れば　里もゆたけし　春べには　花咲きをゝり　秋されば　紅葉を手折り　久方の　月にかざして　新玉の　年の十とせも　すぐしつるかも

一つ松（五鈷掛松）

○立ち返り　波の緣語。

には　い往きもとほり　夕には　其處に出で立ち　立ちて居て　見れども飽かず　一つ松はや

山陰のありその波の立ち返り見れども飽かぬ一つ松かも

鉢の子

鉢の子は　愛しきものかも　幾年か　我が持てりしを　今日道に　置きてし來れば　立つらくの　たづきも知らず　居るらくの　すべをも知らじ　刈菰の　おもひ亂れて　夕づゝの　か行きかく行き　とめ置けば　此處に有りとて　我が許に　人は持て來ぬ　嬉しくも　持て來るものか　其の鉢の子を

有則におくる

野積のや　み寺の園の　梅の木を　根こじにせむと　かぎろひの　夕さり來れば　岩が根の　險しき道を　踏み分けて　辿り〳〵に　忍びつゝ　垣根に立てば　人の見て　盗人なりと　呼ばはれば　おのも〳〵に　笞取り　鐘打ち鳴らし　足曳の　山とよもして　集ひ來ぬ　然しよりして　皆人に　花盗人と　呼ばれたる　君には有れど　いつしかも　年の經ぬれば　篠原の　繁けき小屋に　終夜　八握の髯を　かい撫でて　在すらむかも　この月頃は

卯月の二十日ばかり國上より山越えに野積へ行くとて

足曳の　野積の山を　ゆくりなく　我が越え來れば　少女らが　布さらすかと　見るまでに　世を卯の花の　咲くなべに　山時鳥　をちかへり　おのが時とや　來鳴きとよもす

　時鳥鳴く聲きけばなつかしみ此の日暮しつ其の山の邊に

貧しきをのぶる

足曳の　山田の田居に　庵して　晝はしみらに　飯乞ふと　里に出で立ち　かぎろひの　夕さり來れば　山越しの　風を時じみ　門さして　あし火たきつゝ　古を　思へば夢の　世にこそ有りけれ

國上の山を出づるとて

足曳の　國上の山の　山陰の　森の下屋に　幾年か　我住みにしを　唐衣　たちてし來れば　夏草の　思ひしなへて　夕づゝの　か行きかく行き　其の庵の　いかくるまでに　其の森の　見えずなるまで　玉鉾の　途の隈ごと　隈もおちず　かへり見ぞする　其の山の邊を

國上

國上の　山の麓の　乙宮の　森の木下に　庵して　朝な夕なに　岩が根の

○世を卯の花の　世を憂く思ふと卯の花をかけた。

○晝はしみらに　晝は頻繁に。

○あし火　葦を燃やす火。

○途の隈ごと　道の曲り角毎に。

○隈もおちず　一つの曲り角も缺かさず。

逆り逆りて いたつきは 身に積れども 空蟬の 人し知らねば はひ〳〵
て 朽ちやしなまし 岩木のもとに

國上

足曳の 國上の山の 山もとに 庵をしつゝ をちこちの 里にいゆきて 飯を乞ひ ひと日ふた日と すごせしに あまたの年の 積りきて 身にいたつきの おきぬれば たちゐもよ 心にそはず 空蟬の しりにし人も 紅葉ばの すぎてゆければ 今更に 世にはありとも ありぎぬの あり甲斐なしと もひしより 飯も乞はずて とぢ籠り 國上の山の 山もとに みまかりにけり 朝露のごとや 夕露のごとや

國上

足曳の 國上の山の 山陰に 庵を占めつゝ 朝にけに 岩の角路 踏みならし い行きかへらひ 十寸鏡 仰ぎて見れば み林は 神さびませり 落ち瀧つ 水音さやけし そこをしも あやにともしみ 春邊には 花咲きたてり 皐月には 山時鳥 うち羽ふり 來鳴きとよもし 長月の 時雨の雨に 紅葉ばを 折りて頭插して 新玉の 年の十とせを 過しつるかも

國上山のうた

○たちゐもよ心にそはず 起居もまあ、自分の思ふ通りにならず。
○紅葉ばのすぎてゆければ 紅葉ばの散る如く去つて歸くなり行けば。
○もひしより 思ひしより。

○うち羽ふり 羽をうちふり。

足曳の　國上の山の　山かげの　乙子の宮の　神杉の　杉の下道　ふみ分けて　い往き徘徊(もとほ)り　山見れば　高さは高し　谷見れば　深さは深し　その山の　彌(いや)高々に　其の谷の　心深めて　有り通ひ　齋き祀らむ　萬代までに

乙宮の宮の神杉しめ結ひていつき祀らむおぢなけれども

寺泊に飯こひて

こぎ走る　鮎にも我は　似たるかも　朝には　かみにのぼり　かげろふの　夕さり來れば　下るなり

彌彦の椎の木

伊夜日子の　神のみ前の　椎の木は　幾代經ぬらむ　神代より　斯くし有るらし　ほつえには　照る日を隱し　中つ枝は　雲をさへぎり　しづえはも　蔓にかゝり　ひさかたの　霜は置けども　しなとへゆ　風は吹けども　とこしへに　神の御代より　斯くてこそ　有りにけらしも　伊夜日子の　神の御前に　立てる椎の木

鉢坊主

鉢たかき　鉢たかき　昔もいまも　鉢たかき　鉢たかき　鉢たかき　鉢をた

○おぢなけれども　甚だ怖れあることではあるが。
○寺泊　出雲崎の東北にある港、佐渡へ航行の要港。
○こぎ走る　漕ぎ走る、鮎を舟に喩へた語。

○ほつえ　末の枝。
○しづえ　下の枝。
○しなとへゆ　科戸邊より。科戸の神は風を支配する神。

○鉢たかき　鉢たゝきの訛であらう。

人に代りて

二十日講の　こむなさか　塗物　たゞはくるゝとも　おらいやよ　漆地ほしぬらひくは　投げはけの　たつた一はけ

鉢の子

鉢の子は　愛しきものかも　今日よそに　置きてし來れば　立つらくの　たづきも知らず　居るらくの　すべをも知らず　夏草の　思ひしなへて　夕づつの　か行きかく行き　久方の　雪は降るとも　よしゑやし　足曳の　山をも越えて　尾もこえて　我とめゆかむと　思ひし折に　玉鉾の　道に有りとて　我が許に　人は持て來ぬ　うれしくも　持ち來るものか　我こそは　主には有らめ　その鉢の子の

手毬

梓弓　春さり來れば　飯乞ふと　里にい行けば　里子供　道の巷に　手毬つく　我も交りぬ　その中に　ひふみよいむな　汝がつけば　あは歌ひ　汝が歌へば　あはつきて　つきて歌ひて　霞立つ　長き春日を　暮しつるかも

霞立つ長き春日を子供らと手毬つきつゝ此の日暮しつ

岩室の松

○二十日講　十月二十日の惠比須講、商家で福の神として祭る。
○こむなさか　こんな嫌なの意か
○ぬらひくは　漆の乾かずぬらつく意か。
○投げはけ　投げ刷毛であらう。漆の塗り方の粗なるを云ふのである。

○手毬　此の長歌は前のと大同小異である。反歌も「此の日暮しつ」と「今日も暮しつ」と異なるだけである。

岩室の　田中に立てる　一つ松　今日見れば　時雨のあめに　濡れつゝ立てり　一つ松　人にありせば　笠かさましを　蓑著せましを　一つ松あはれ

岩室の田中の松を今日見れば時雨の雨に濡れつゝ立てり

蒼溟

わたつみは　常世にあれや　天津日を　天にめぐらし　露霜を　國にへだて　香しき　花は咲けれど　足らはしき　月は滿つれど　海潮の　色は變らず　朝はふる　風のまに〳〵　夕はふる　波を廻らし　沖津浪　八重に折りしき　立つ波を　沖に廻らし　寄する浪　畳に湛へて　天地と　愈遠長に　神ろぎの　いましゝものか　うまこりの　綾にあるかも　わたつみの神

たがやのこつを見て讀める

たがやさん　たがやさん　色もよ　あやにたへなり　たがやさん　肌もよ　いともうるはし　たがやさん　たがやさん　たがやさん　たがやさんには　猶しかずけり

定珍がもとにて

彼方には　紅葉を瓶にさし　此方には　紅葉を紙に摺り　紅葉の歌を　讀みあうて　秋の名殘は　この宿にせむ

〇常世　永久に變らぬ仙境。

〇神ろぎの　高皇産靈神の尊號。

〇うまこりの　妙に織りしの意、綾の枕詞。

〇たがやのこつ　たがやさん製の笏であらう。後にたがやさんの彫刻の歌がある。これと同じ時の作か。たがやさんは鐵刀木、棕櫚朴の常綠木、堅き木。

〇定珍がもとにて　渡部村に住む阿部定珍、嵐窗と號す。本集中阿部氏とあるのも、同一の人であらう。

○

こぎ走る　鮎にも我は　似たるかも　朝には　かみにのぼりて　夕には　しもへ下りて　又其のしもへ

○

朝な〳〵　霜はおけども　よしゑやし　年の端に　雪は降れども　よしゑやし　積れば消えぬ　うつしみの　頭に降れる　白雪は　つみこそまされ　梓弓　春はくれども　消ゆとはなしに

○

こしなるや　松の山邊の　少女子が　母に別れて　しぬびずて　逢ひ見む事を　村肝の　心にもちて　新玉の　年の三年を　過せしか　師走の暮に　市に出で　物買ふ時に　方寸鏡　手にとり見れば　なが面の　母に似たれば　母とじは　母にますかと　喜びて　ゐますひのごと　言問ひて　有りの限りの　價もて　買うて返りて　朝なけに　見つゝしぬぶと　きくがともしさ

○

夜や寒き　衣や薄き　すみのをと　閨の文　一筆染めて　顏あけて　昨日は恨み　今日はまた　戀し牀しき　とり〴〵の　何からききへ　あしゝむき

○こぎ走る云々　此の長歌は「寺泊に飯こひて」と題せる前出の歌と最後の句が異なるだけである。

○朝な〳〵云々　此の長歌は前出の白雪の歌と大同小異である。

○こしなるや松の山邊の云々　鏡を知らぬ人の話、即ち松山鏡の説話を取材したのである。

○なが面の　汝の顏の。

○ともしさ　珍らしさ。

○すみのをと　墨の緒か。長く續く筆の跡の意か、或は炭の音の假名違ひか。

○あしゝむき　惡しきしむけの意か。足に寒さの徹える意をかけたのか。

○

久方の　雪かき分けて　刺竹の　君が掘りけむ　早百合根の　早百合根の　その早日合根の　あやにうまさよ

○

山陰の　森の木下の　冬籠り　日毎々々に　雪ふれば　往來の人の　跡もなし　岩根もりくる　苔清水　そを命にて　新玉の　今年の今日も　暮れにけるかも

○

はふつたの　別れてしより　ぬば玉の　夢にも見えず　玉づさの　使もこねば　たちてみて　居てみてみれど　術をなみ　庵を出でて　見渡せば　いほへやま　ちへに雪ふり　雲がくり　そでさへひぢて　慰むる　心はなくに　かへりきて　寝屋に籠りて

○

常磐木の　常磐かきはに　ましませと　君がほぎつる　豐みきに　とよみきに　我醉ひにけり　その豐みきに

○

○刺竹の　君、大宮などの枕詞。

○山陰の森の木下の云々　前出冬籠と題する長歌と大同小異。

○はふつたの　這ふ蔦の、別れの枕詞。

○いほへやま　五百重山、多くの重なれる山。

○そでさへひぢて　袖までもぬれて。

○常磐かきは　常磐堅磐。永久の意。

○とよみき　とよは美稱、御酒。

足曳の 國上の山の 山もとに 庵をしつゝ 朝夕に 岩の陰道 踏み分けて いゆきかへらひ 山見れば 山もみかほし 里みれば 里も賑はし 春されば 椿花さき 秋べには 野邊につまこふ 小男鹿の 聲をともしみ 新玉の 年の十とせは 過ぎにけるかも

○

このよらの いつか明けなむ このよらの 明けはなれなば をみなきて はりを洗はむ こひまろび 明かしかねけり 長き此の夜を

○

形見とて 殘す二人の子 見るに心の ほだされて 彼にもかくにも 云はむ術 爲む術知らに 隱りゐて ねのみしなかゆ 朝な夕なに

○

み園生に 植ゑし秋萩 旗薄 菫たんほゝ ねぶの花 芭蕉朝顔 藤袴 しをに露草 わすれ草 朝な夕なに 心して 水を注ぎて 日おひして 育てしぬれば 常よりも ことにあはれと 人も云ひ 我ももひしを 時こそなれ 皐月の月の 二十日まり 五日の暮の 大風の くるひて吹けは 荒金の 土にのべ伏し 久方の 雨に亂れて 百千々に もまれにければ あた

○このよらの　此の夜の。

○はりを洗はむ　はりははりの意であらう。尿。

○ねぶの花　合歡樹の花。

○わすれ草　萱草。

○我ももひしを　我も思ひしを。

○皐月の月の二十日まり云々　前出大風に關する長歌に據れば、天保元年五月二十四日である、此の歌では五月二十五日となつて居る

○あたらしと思ふものから　惜しいと思ひながら。

らしと　思ふものから　風のなす　わざにしあれは　爲むすべもなし

我が宿に植ゑて育てし百草は風の心に任すなりけり

○

敷島の　大和の國は　古ゆ　言あげせぬ國　然れども　我は言あげす　過ぎし夏　弟のたまひし　つくり皮　いや遠白く　たへのほに　ありにし皮や　我が家の　寶と思ひ　行く時は　負ひてもたらし　寢ゐ時は　衾となして　束のまも　我が身を去らず　持たりせど　奇しき驗も　いちじろく　有らざりければ　此のたびは　深くかうがへ　殊更に　夜の衣の　上にして　そが上に　我が肌つけて　ふしぬれば　夜はすがらに　うまいして　ほのり〱と　ま冬月　春日に向ふ　心地こそすれ

何をもて答へてよけむ玉剋命(たまきはる)にむかふこれのたまもの

しかりとて默(もだ)にたへねば言あげす勝ちさびをすな我が弟の君

○

足曳の　國上山もと　神無月　紅葉は庭に　散りしきぬ　時雨の雨は　ひめもすに　降りみ降らずみ　するなべに　向ひの岡に　小男鹿の　妻戀ふこゑの　うたてはるけき

○言あげせぬ國　言葉で言はぬ國

○弟のたまひし　良寛が繼ぐ可き出雲崎の本家橘屋山本氏を讓つた實弟であらう。

○つくり皮　なめし革。

○たへのほに　楮の穗に、白き意を表はす語。

○持たりせど　持つて居たが。

○深くかうがへ　深く考へ。

○うまいして　熟睡して。

○命にむかふ　命と匹敵する價値ある。

○勝ちさびをすな　勝ち誇るな。

飯乞ふと里にも出でず此の頃は時雨の雨の間なくし降れば

○

空蟬の　假の浮世は　ありてなき　ものともへこそ　白妙の　衣にかふる　ぬば玉の　髪をもおろす　しかしより　天津みそらに　ゐる雲の　あとも定めず　行く水の　そこともいはず　うちひさす　宮も藁屋も　はてぞなき　よけくもあれ　あしけくも　あらばありなむ　思ひしみの　なぞもかく　思ひしやまぬ　わが思ひ　人しるらめや　此の心　誰に語らむ　語るとも　いふともつきぬ　荒磯海は　深しといへど　高山は　高くしあれど　時しあれば　つくる事しありと　云ふものを　彼にもかくにも　つきせぬものは　我が思ひはも

世の中に門さしたりと見ゆれどもなどか思ひの絶ゆることなき

○ゐる雲の云々　空にある雲の如く、居る所を定めず。

○世の中に云々　世間とは絶縁して、門戸をさしたと見える自分であるが。

旋頭歌

春若菜摘むとて

梓弓春野に出でて若菜摘めどもさすたけの君しなければ樂しくもなし

渡部なる祝の家に宿りて

此の宮の宮のみ坂に我いで立てば久方の深雪降りけりいつ柏がへに

定珍がもとにて

足曳の山のたをりのもみぢ葉を我濡れつゝも君がみためと手折り來し我

○

やまたつの向ひの岡に小男鹿立てり神無月時雨の雨にぬれつゝ立てり

秋の野の千草おしなみ行くは誰が子ぞ白露に赤裳の裾の濡れまくもをし

あはれさや人まつ蟲の音信にふりいでてなく鈴蟲のぬべの千草のつゆにぬれてむ

春されば木々の梢に花は咲けども紅葉ばの過ぎにし子等は歸りこなくに

足曳の西の山邊に關も有らぬかもぬば玉の今宵の月を留めて有らむ

山陰の眞木の板屋に雨も降りこねさす竹の君がしばしと立ち留るべく

○さすたけの　君の枕詞。
○渡部なる祝の家　渡部村にある神官の家、阿部定珍の家であらう
○いつ柏がへに　いつ柏の上に。尊嚴な柏の上に。
○やまたつの　向ふの枕詞。
○人まつ蟲の　人を待つと松蟲とかけた。
○ふりいでて　鈴の緣語。
○ぬべの　野邊の。
○紅葉ばの　紅葉ばの如く散り過ぎし。
○降りこね　降り來ね。

○すみ渡るなり　水の澄むと住むとかけた。

○君がほぎつる　君が祝つた。

○さら〳〵とせし心こそ　物に執着せぬ恬淡な心こそよいよ。

○こがねのみづを　黄金の水を、螢に甘い水をやると云ふ童謠と同じ心持であらう。

○たまふとはば　賜ふと言はば。

此のさとに往來の人は澤にあれどもさす竹の君しなければ寂しかりけり

足曳の國上の山の冬籠り岩根もりくる苔水のかすかに世をすみ渡るなり

墨染の我が衣手の廣く有りせば世の中の貧しき人を覆はましもの

白雪は幾重も積れ積らねばとて玉鉾の道ふみ分けて君が來なくに

昔も今もうそも誠も晴れやらぬ峯の薄雲立ち去りてのちの光と思はずや君

常磐木の常磐かきはに君がほぎつる豐みきに其のとよみきに我醉ひにけり

岩室の田中に立てる一つ松の木今朝見れば時雨のあめに濡れつゝ立てり

山陰の眞木の板屋に音はせねども久方の雪のふる夜は空にしれけれ

人は僞るともいつはらじ爭ふとも爭はじ僞り爭ひすててこそ常に心は長閑なれ

さす竹の君と語りし秋の夕は新玉のとしはふれども忘られなくに

春といへば天津みそらはかすみ初めけり山の端に殘れる雪も花とこそ見め

我が宿の葉びろ芭蕉を身にきませ君秋風に破ればなしけむ葉廣の芭蕉

山笹にあられたばしる音はさら〳〵さらり〳〵さら〳〵とせし心こそよけれ

墨染の我が衣手の豐(ゆた)にありせばあしびきの山のもみぢ葉おほはましものを草のへに螢となりてまちをらむいもかはゆこがねのみづをたまふとはば

一つ松人にありせば笠かさましをみのきせましを一つまつあはれ

短歌

春

古里に花を見て

なにごともうつりのみゆく世のなかに花はむかしの春にかはらず

きさらぎの十日ばかりに飯乞ふとて眞木山てふ所に行きて有則が家のあたりを尋ぬれば今は野らとなりぬひと本の梅の散りかゝりたるを見て昔を思ひ出でて詠める

そのかみは酒にうけつる梅の花つちに落ちけりいたづらにして

睦月の初めつかた渡部の祝司が許にやどりてつとめて宮に詣でたりけるに雪のおもしろう林にふりかゝりたるを見て詠める

このみやの宮のみ坂に出で立てば深雪降りけりいつ柏が上に

由之の尋ね來りし時に

手を折りてかきかぞふればはるはなかばになりにけらしも

籠鳥を見て

○祝司　はふりつかさ、神官。

○手を折りてかきかぞふれば　指折りて數へれば。

久方の雲居の上になく雲雀今を春邊と籠のうちに鳴く

由之の尋ねしとき折しもしきりにふゞきて北面の窗にはら／＼と音せしをわびしさに

きさらぎに雪の隙なくふることはたま／＼きます君やらじとか

睦月十六宵

月雪はいつはあれどもぬば玉の今日の今宵になほしかずけり

彌生のつごもりの夜はらから集ひて詠める

まろゐしていざ明かしてむ梓弓はるは今宵を限りとおもへば

本覺院に集ひて詠める

山吹の花を手折りて思ふどちかざすはる日は暮れずともがな

出雲崎にて

春の野に若菜つみつゝ雉子のこゑきけばむかしの思ほゆらくに

春の歌とて定珍と同じくよめる

はるがすみ立ちにし日より山川にこゝろは遠くなりにけるかな

春の野に咲けるすみれを手に摘みて我が古里を思ほゆるかな

おしなべて緑にかすむ木の間よりほのかに見ゆる弓張の月

○ふゞきて　吹雪の動詞。

○君やらじとか　雪まで君を歸すまいとてか。

○いつはあれども　月雪のよいのはいつでもであるか。

○今宵を限り云々　三月三十日であるから、春は今夜限りと思へば。

○思ふどし　思ふ同志。

○むかしの云々　出雲崎は產れ故鄕であるからだ。

足曳の此の山里の夕月夜ほのかに見るは梅のはなかも

春の野のかすめる中を我くればおちかた里に駒ぞいなゝく

うちなびき春は來にけり我が園の梅の林にうぐひすぞ鳴く

墨染の袖ふりはへて春の野に菫を摘みしことも有りしか

おほとのの尾上に立てる松柏も今は春邊と打ちかすみけり

薪こり此の山陰に斧とりて幾度か聞くうぐひすのこゑ

友垣のもとより歸る道にて雉子の鳴くを聞きて詠める

はふつたのわかれし暮はさのつ鳥同じ思ひの音をや鳴くらむ

うづき三日の夜友垣のもとにまかりて

わりなくも思ふものから三日の夜の月とともにや出でてぞ我が越し

鵲齋の「我が宿の梅も咲かねば鶯もいまだ鳴かぬに君は來にけり」のかへし

うぐひすもいまだ鳴かねばみ園生の梅も咲かぬに我は來にけり

かへし

梓弓春はいまだしけふふればきみが言葉のはなぞ咲きける

西行法師の墓にまうでて花を手向けてよめる

手折りこし花の色香は薄くとも憐み給へこゝろばかりは

○うちなびき　打靡き、春の枕詞。

○ふりはへて　袖を振ると、わざわざの意をかけた。

○さのつ鳥　野の鳥。こゝでは雉子をさした。

○わりなくも思ふものから　別れがたくせんすべなく思つては居たが。

○いその上　古の枕詞。

きさらぎの末つ方なほ雪の降りければ

久方の雲居を渡る鴈金も羽白妙にゆきやふるらむ

梅の梢に雪のかゝれるを見て

春されば梅の梢に降るゆきを花と見ながらかつ過ぎにけり

鶯春を知る

いざ我も浮世の中に交りなむ去年の古巣を今日立ち出でて

○

いざさらば山邊に行かむ櫻見に明日とも云はば散りもこそせめ

命あらばまたの春邊にたづね來む山のさくらを眺めがてらに

伊勢の海浪靜かなる春に來てむかしの事をきかましものを

いざ子供山邊に行かむ菫見に明日さへ散らばいかにせむとか

色も香も昔の春に咲きつれどあひ見し人はいづちいぬらむ

いその上こその古野のすみれぐさ今は春べと咲きにけるかな

はる山に櫻かざして思ふどち遊ぶこの日はくれずともよし

去年の秋むしの音聞きにこしのべに若菜つみつゝ歸る今日かも

春の野に若菜つめどもさす竹の君と摘まねば籠に滿たなくに

○誰がさかしらに價つけけむ　誰がりこうぶつて値をつけたのであらう。蘇軾の「春宵一刻直千金、花有清香月有陰。」をさす。
○雪海苔　冬採る海苔であらう。

○なづみつゝ行く　惱みつゝ行く雪のためである。

○月讀めば　月を數へて見れば。

春の夜の朧月夜のひと時に誰がさかしらに價つけけむ
はる毎にきみがたまひし雪海苔を今より後は誰かたまはむ
鳥はなく木々の梢に花はさく我も浮世にいざまじりなむ
待たれにし花はいつしか散り過ぎて山は青葉になりにけらしも
お指折りてうち算ふれば如月もゆめの如くに過ぎにけらしも
雪の夜に寐覺めてきけば鴈金も天津みそらをなづみつゝ行く
此の夕寐覺めてきけば鴈金も天津みそらをなづみつゝ行く
霞立つ永き春日をこの宿に梅の花見て暮しつるかも
霞立つ永き春日にうぐひすの鳴くこゑきけば心はなぎぬ
かぜさそふ柳のもとにまとゐして遊ぶ春日はこゝろ長閑けし
霞立つ永き春日に子供らと手まりつきつゝ今日もくらしつ
小山田のかど田の田居に鳴く蛙こゑなつかしき此のゆふべかも
世の中を憂しと思ひてうぐひすは常磐の國へつれて往ぬらむ
よの中のはなを袂にこき入れて立ちかへるらむ白くものやま
月讀めばすでに彌生になりにけり野邊の若菜も摘まずありしに
つぼ菫さくなる野邊に鳴く雲雀きけどもあかず永き春日に

○心なぎさの　心なきと渚とかけた。

○人もすさめぬ　人も賞美せぬ。

○手たづさはりて　手を埋火に觸れて、あぶりて。

○かたまけぬ　春も其の方へかたよつた。萬葉集卷五「梅の花散りまがひたる岡びには鶯鳴くも春かたまけて」

何事もみな昔とぞなりにける花に涙をそゝぐ今日かな

足曳の山の椿や戀ひくらし我も昔のおもほゆるらむ

ながむれば名も面白し和歌の浦心なぎさの春に遊ばむ

村肝の心樂しも春の日に鳥のむらがり遊ぶを見れば

梅の花ちるかとばかり見るまでに降れどたまらぬ春の沫雪

梅のはな老がこゝろを慰めよ昔の友は今あらなくに

梅の花今宵の月にかざしてば春は過ぐとも何か思はむ

梅の花折りてかざして石の上古りにし事を忍びつるかも

うぐひすはいかに契れる年の端に來居て鳴きつる宿の梅が枝

空蟬の人もすさめぬ深山木も春には花の咲くてふものを

埋火に手たづさはりて算ふれば睦月もすでにくれにけるかな

梅が枝に花ふみちらす鶯のなくこゑきけばはるかたまけぬ

梅のはな散らばをしけむ鶯の聲の限りはこの園に鳴け

草の庵に足さしのべて小山田の山田の蛙きくが樂しさ

この園の梅の盛りとなりにけり我老いらくの時に當りて

心有らば尋ねて來ませうぐひすの木傳ひ散らす梅の花見に

〇みつかては　みづがしはの訛であらう。

〇蛙なくころ山ぶきの花　良寛は明らかに春秋より晩春初夏を好んだのである。

聲立てて鳴けやうぐひす我がやどの梅の盛りは常ならなくに

子供らと手携はりて春の野に若菜を摘めば樂しくもあるかな

この宮の森の木下に子供らと手毬つきつゝくらしぬるかな

子供らと手毬つきつゝ此の里に遊ぶ春日は暮れずともよし

此の里の桃の盛りに來て見れば流れにうつる花のくれなゐ

はる風の柳のもとにまとゐして遊ぶけふしはこゝろ長閑けき

みつかては我とめゆけば梓弓春の野末に浮ぶかげろふ

かすみたつ長き春日に子供らと遊ぶ春日は樂しくあるかな

梓弓春はそれともわかぬまに野邊の若草染め出づるなり

あしびきの山邊の田居になく蛙こゑのはるけきこのゆふべかも

新玉の年はふるともさす竹の君がこゝろを我わすれめや

道の邊に菫摘みつゝ鉢の子を我忘るれど取る人もなし

梓弓はるになりなば草の庵をとく訪ひてませ逢ひたきものを

さす竹の君が庵に來て見れば春ものどかに百の鳥なく

春と秋何れ戀ひぬとはあらねども蛙なくころ山ぶきの花

此の宮の森の木下に子供らと遊ぶ春日は暮れずともよし

足曳の山田の原に蛙鳴くひとりぬる夜のいねられなくに
春雨の降りしゆふべは小山田に蛙鳴くなり聲珍らしも
さきてゝふ鹽のり坂をこえてこむ山のさくらの花の盛りに
さきくてよ鹽法坂を越えて來む木々の梢に花咲く頃は
佐渡がしま山は霞の眉引きて夕日まばゆき春の海ばら
ゆくりなく我來にけらし春の野に若菜つみつゝ君が家邊に
道のべにすみれ摘みつゝ鉢の子を忘れてぞこしあはれ鉢の子
見ても知れ何れこのよは常ならむ後れ先だつ花も殘らじ
いのちあらばまたの春邊に來るて見むながめも飽かぬやまの櫻を
久方の雨のはれ間に出で見れば靑み渡りぬ四方のやまく
久方のあまぎるゆきと見るまでにふるはさくらの花にぞありける
久方の春日に芽出る藻鹽草かきぞ集むる和歌の浦わは
百千鳥鳴くや深山も春の來て心空なる四方の眺めや
すみれぐさ咲きたる野邊に宿りせむ我が衣手にしまばしむとも
春は又浮世の外や山櫻ものの哀れは秋にこそあれ
花をのみ惜しみなれにし三芳野の木の間に落つる有明の月

○さきてゝふ　次の歌のさきくてよと同じ意味の語で或は誤りであらう。

○あまぎる　天を霧り蔽ふ。きるは霧の動詞、曇る意。

○しまばしむとも　草に寢て衣に草の汁がいくら染め出されても。

足曳の片山影の夕月夜ほのかに見ゆる山梨のはな

我が園の梅の一ふさ殘りけり春の名殘を憐めよきみ

梓弓四方の山邊にはたはせむ春のこゝろぞおきどころなき

あしびきの山のさくらはうつろひぬつぎて咲きこせ山吹のはな

はるさめのわけてそれとは降らねどもうくる草木のおのがまに〱

足曳のよもの山邊にはたはせむはるの心ぞおきどころなき

ちんばそに酒に山葵にたまはるは春は寂しくあらせじとなり

朝菜摘む賤が門田の田の畔にちきり鳴くなり春にはなりぬ

この園の柳のもとにまろゐして遊ぶ春日は樂しきをづめ

新玉のとしはふれども俤はたゞ目の前に見るこゝちせり

今日もかも子らが有りせば携へて野邊の若菜を摘まましものを

百鳥の木づたひて鳴く今日しもぞさらにや呑まむ一つきの酒

梓弓春さり來ればみそらより降り來るゆきも花とこそ見め

足曳の國上の山の山吹の花の盛りにとひしきみはも

百鳥の鳴く我が里はいつしかも蛙の聲となりにけるかな

山吹のはなのさかりに我來れば蛙鳴くなり此の川のべに

○山梨のはな　いぬなしの異名、鹿梨、薔薇科の落葉喬木、春白い花を開く野生植物。

○はたはせむ　將心を馳せよう。春を思ふ心のおき所がないから。

○ちんばそ　海草の名。

○ちきり　越後の方言による動物の名であらう。

○をづめ　田舍人の郊外で集まり遊ぶを云ふ。萬葉集卷十六「住の江のをづめに出でて」云々。

○一つきの酒　一杯の酒。

蛙なく野邊の山吹手折りつゝさけにうかべて樂しきをづめ

山吹の千重を八千重にかさぬとも此の一花の一重にしかず

梓弓春の山邊に子供らと摘みしかたこをたべば如何あらむ

日めもすに待てど來ずけりうぐひすはあかき白きの梅は咲けども

眞垣こし庭にはふりてかけは鳴くわれうぐひすに劣らましやと

思ほえずおくれ先だつよの中を嘆きやはてむ春はへぬとも

山杉のねもころ〴〵に今日の日を引き留めなむ青柳のいと

鉢の子に菫たんほゝこきまぜてみよの佛に奉りてむ

飯乞ふと我こしかども春の野に菫摘みつゝ時をへにけり

えにし有れば又このたちにつどひけり花の紐とくきさらぎの宵

花はちるとふ人はなし今よりは八重葎のみはえ茂るらむ

たまきはる命しなねばこの園の花咲くはるにあひにけらしも

足曳の青山こえて我くればきゞす鳴くなり其の山もとに

村肝の心はなぎぬ永き日にこれのみ園に林を見れば

さくら花散るかとばかり見るまでにふれど積らぬ春の泡雪

つきて見よひふみよいむなやこのとを十と納めて又始まるを

○かたこ　かたくりの異名。片栗百合科の多年生草本。片栗粉を製する。

○日めもす　日ねもすと同じ、終日。

○はふりて　羽を振って。

○かけ　鷄の異名。

○山杉の　ねと言はん序詞。

○このたちに　此の館に。

○花の紐とく　花の開く意。

○つきて見よ云々　手毬の歌、ひふみよ云々は一二三四五六七八九十と手毬つく數を數へたので、十と數へて又つき始めるのだ。

○つはぶきのはな　つはぶきは菊科の多年生草本、秋淋しい黄色の花を開く。春の歌に入れたのは誤りであらう。

○いろぐはし　色精し、色がよい。

○こじくもしるく　わざ〳〵乞食して來たのも著しくの意。乞食は飯乞ふと云ふ意を良寛自身かく云つたのである。乞食の和訓である。

○しひてをしませ　強ひて飲みませ。

○はれあかりける　春の日の霽れ明るくなるに、酒に顔の醉ひ赤くなるのをまぎらす意。

假初に我こしかども此の園のはなにこゝろを移しつるかも

うたやよまむ手毬やつかむ野にや出でむこゝろ一つを定めかねつも

子供らよいざいでいなむ彌彦の岡のすみれの花にほひ見に

山里の草の庵に來て見れば垣根にのこるつはぶきのはな

我が庵の前の門田の田のあぜにちきり鳴くなりはるは來にけり

かすみ立つ永き春日にいろぐはしさくらの花の空に散りつゝ

ことさらにこじくもしるくこのその梅の盛りにあひにけるかも

わが宿に一もと植ゑし菫草今は春邊と咲きそめぬらむ

松の尾のはびろの□つき椿見にいつか行かなむその椿見に

我が屋どは竹の柱にこもすだれしひてをしませひとつきのさけ

春の日の早くも暮れなばさす竹の君はいなむと云はましものを

限りなくすゝむるはるのさかづきは藥の中のくすりとぞきく

殊更にすゝむべらなり春の日のはれあかりけるこれのまぎれに

久方の空てり渡る春の日は庵のどけきものにぞありける

このごろの一日二日にわがやどののきばの梅もいろづきにけり

うぐひすのこゑを聞きつるあしたより春のこゝろになりにけるかな

はるかぜに軒端の梅はや、咲かむ今宵の月よ君と共にせむ
さす竹の君がみためと久方のあま間に出でて摘みし芹ぞこれ
山ぶしの峯かけ衣何と染めよかたすそもよぎ袖はくれなゐ
此の宿にこじくもしるし梅の花今日はおひ見てちらば散るとも
春風にみ山の雪はとけぬれど岩まによどむ谷川のみづ
かぐはしき櫻のはなのそらに散るはるの夕はくれずもあらなむ
山里にさくらかざして思ふどち遊ぶ春日はくれずもあらなむ
いざ子供山邊に行かむさくら見に明日とも云はばちりもこそせめ
すめらぎの千代萬代の御代なれやはなの都に言の葉もなし
我はもよいはひて居らむ平らけく小山田ざくら見てかへりませ
見ても知れ何れ此の世は常ならぬおそくともちるはなの梢を
しきたへのそでふりはへてはるの野にすみれをつみし事も有りしか
久方の空より渡る春の日はいかにのどけきものにぞ有りける
足曳の尾上に立てる松柏も今は春邊と打ちかすみけり
春の日に海の表を見渡せば霞に見ゆる天の釣舟
我が宿の軒端の峯を見渡せば

○あま間に　雨の晴れた間に。
○かたすそもよぎ　肩と裾とを萠葱に染めるのである、腰は他の色に染める染め方の一種。此の歌は春の山を山伏の衣に喩へたのであらう。
○此の宿に云々　此の家に乞食しに來たのもしるく。
○しきたへの　敷栲の、袖の枕詞。

おしなべてみどりにかすむ木の間よりほのかに見ゆるは梅のはなかも
夜を寒み朝戸をあけて我見れば庭白妙に泡雪ぞ降る
このみやのみ坂に見れば藤浪のはなのさかりになりにけるかも

夏

五月すぐるまで時鳥の鳴かざりければ

相つれて旅かしつらむ時鳥合歡のちるまでこゑのせざるは

刈羽郡妙法寺妙見嶺

かすみ立つ沖見の嶺岩つゝじ誰が織りそめし唐錦かも

青き扇に養老の瀧の白玉を注ぎて形とせるを見て

養老のたきの白玉ためおきて君がよはひの有り數にせむ

○

いづ地へか鳴きて行くらむほとゝぎす小夜更け方にかへるさの道
今人のゆくさ來るさのみをさけず持てるうちははこれに有らずや
時鳥なが鳴くこゑをなつかしみ此の日暮しつその山の邊に

○合歡　ねむの木、初夏白き花咲く、豆科の落葉喬木。花は淡紅色の種類もある。

○ゆくさ來るさの　往來の。
○みをさけず　身を離さず。

瀧津瀨の音さへなくば足曳の山の下庵靜けからまし

時鳥いたくな鳴きそさらでだに草の庵は寂しきものを

ほとゝぎす空ゆくこゑのなつかしみ寢さへうかれて昔思はる

蓬のみ茂り〳〵てわが宿は尋ぬるひとも道まよふらし

朝露にきほひて咲ける蓮葉の塵にはしまぬ人のたふとさ

久方のあめもふらなむ足曳のやま田の苗にかくるゝまでに

夏山を我こえ來れば時鳥こぬれたちくき鳴きはぶく見ゆ

夏衣たちてきぬれどみ山べはいまだ春かもうぐひすのなく

浮雲の身にしありせば時鳥しばなくころをいづこにまたむ

植ゑおふし咲き出る頃は行きて見む君がみ園の早百合根のはな

國上山松風涼し越えくればやまほとゝぎすをちこちになく

國上山茂る楠の繁しとて鳴きて越ゆらむ山時鳥

八木山の木陰涼しくきを折るは神のめぐみと今は思はな

この頃は早苗取るらし我が庵は形を繪にかき手向けこそすれ

我さへも心もとなし小山田の山田の苗のしをるゝ見れば

○寢さへうかれて　寢るのまで忘れ、心浮かれて。

○こぬれたちくき鳴きはぶく　木の末を立ちくゞり、鳴き羽をふる。

○夏衣たちてきぬれど　夏衣を裁ち著て來たが。立ち來とかけた。

○しばなく　繁く鳴く。

○植ゑおふし　植ゑ生育さし。

浮雲の身にしありせばほとゝぎすしばなくころはいづち行くらむ
青山の木の間たちくき時鳥鳴くこゑきけば春はすぎけり
あしびきの國上の山のほとゝぎすよそに聞くより哀れなりけり
足曳の國上の山をいまをかもなきてこゆらむ山ほとゝぎす
あしびきの山田のをぢが終日にいゆきかへらひ水運ぶ見ゆ
五月雨の晴間にいでてながむれば青田すゞしく風渡るなり
手もたゆく植うる山田の少女子がうたのこゑさへやゝ哀れなり
み山邊を辿りつゝ來しほとゝぎす木の間たちくきなきはふる見ゆ
しのび音をいづこのそらにもらすらむまつ間久しきやまほとゝぎす
久方のあめにぬれつゝほとゝぎす啼くこゑきけばむかし思ほゆ
ひとりぬる旅寢のゆかのあかときに歸れとやなく山ほとゝぎす
物思ひすべなきときは打ち出でて古野におふる夏菜をぞつむ
やまかげの岩根もり來る苔清水有るかなきかに世をわたるかも
あさぎりの中にきみますものならば晴るゝまに〳〵うれしからまし
五月雨の雲間をわけて我くれば經よむ鳥と人はいふらむ
卯の花のさきのさかりは野積山ゆきをわけ行くこゝちこそすれ

○たちくき　前出、立ち潜り。

○歸れとやなく　時鳥が不如歸と啼くと云ふ支那思想。

○苔清水　苔清水の如く。

○經よむ鳥　鶯の異名、こゝでは僧である作者自身を戯れてかく呼んだのである。

わくらばに訪ふ人もなき我が宿は夏木立のみ生ひしげりつゝ

ほとゝぎすわがすむ山はおほかれど今宵の蛙ましめづらしも

たび人にこれを聞けとやほとゝぎす血になくなみだかわかざりけり

時鳥しきりに鳴くと人はいへど我はきかずも成りにけるかも

あさゆふのつゆのなさけのあき近み野邊のなでしこ咲きそめにけり

早苗ひく少女をみればいそのかみふりにし御代の思ほゆるかも

わくらばに人も訪ひ來ぬやまざとはこずゑにせみのこゑばかりして

やまかげの垣根に咲ける卯の花は雪かとのみぞあやまたれける

なつぐさのしげりに茂るわがやどはかりとだにやも訪ふ人はなし

ほとゝぎすきかずなりけりこのごろは日にけにしげき事のまぎれに

あしびきの國上の山のほとゝぎす今をさかりとふりはへて鳴く

乙宮の森の下屋のしづけさにしばしとてわが杖うつしけり

日ぐらしのなく夕方は別れにし子のことのみぞおもひ出でぬる

時鳥わがごとやまにはふりてむこひしき毎に音信はせよ

きゞすなくやけのの小野のふるをみきもとの心をしる人ぞなき

みあへする物こそなけれ小がめなる蓮のはなを見つゝしのばせ

○わくらばに　稀に。

○かりとだにやも　一寸だけでも刈りと假とかけた。

○ふりはへて　殊更に、わざ〳〵。

○みあへする　饗應する。

足曳の國上の山をこえくれば山時鳥をちこちになく

こゑ立てゝなけほとゝぎすことさらにたづね來れる心しりなば

はなはちる訪ふ人はなし今よりは夏木立のみ生ひ茂るらむ

わが庵は森の下枝をいつとても靑葉のみこそ生ひ茂りつゝ

秋萩の咲くを遠みと夏ぐさのつゆにぬれつゝ訪ひし君はも

○咲くを遠みと　萩の咲く秋を待ち遠さに。

こゝろあらばくさの庵にとまりませ苔のころものいと狹くとも

あしびきのみやまの茂み戀ひつらしわれも昔の思ほゆらくに

うきわれをいかにせよとか若草の□□□立てゝ小男鹿なくも

草むらの螢とならばよひ〳〵に黃金のみづをいもたまうてよ

○いもたまうてよ　戀人よ、給へよ。

身がやけてよるは螢とほとれども晝はなんともないとこそ知れ

○ほとれども　ほとほるの約、熱すれども。

このやどはわれ來て見れば夏木立しげりわたりぬ雨のとぎれに

秋

渡部の月華亭にて　（阿部氏）

このやどの一本薄なつかしみ穗に出る秋はとめてわれ來む

○とめてわれ來む　求めさがして私は來よう。

○口もはなたず　石榴から口を離さぬ。
○七のたから　佛敎の七寶に七個の石榴を喩へた。
○ことに置かぬを　白露は變へて置かぬ、公平に置くのを。

新津の桂氏より石榴七つ贈られたる返禮として

いつとてもよからぬには有らねども呑みての後はおやしかりけり

かきてたべつみさきてたべ割りてたべさてそののちは口もはなたず

くれなゐの七のたからを諸手にて推し戴きぬ人のたまもの

由之に問ふ

白つゆはことに置かぬをいかなればうすく濃くそむやまのもみぢ葉

都良子がしにけりと人のいひければ

あきの川や立田の山のもみぢ葉のちるとしきけば風ぞ身にしむ

諸共にわれも散りゆくもみぢ葉のいろづかぬまをたのむばかりぞ

山風はときし知らねばもみぢ葉のいろづかぬまを何か頼まむ

いとはやくちれる紅葉におどろきてわが身のあきはおもはざりけり

遲しとて何かわかたむうつせみのありてなきよと思ひ知らずや

ありてなき世とは知るとも空蟬の生きとしものは死ぬるなりけり

あきの夕蟲音を聞きに倂ひとりをち方里はきりにうづまる

水月

○鳥ともひてなち給ひそ　鳥と思ひて手を打ち給ふな。

○すゑものに　陶器に
○をしに來し　食べに來た。

○みぎりしみゝに　砌に茂くひまなく。

鳥ともひてなち給ひそ御園生の海棠の實をはみに來つれば
今日も又海棠の實をはみに來ぬえかくれ給へ我かへるまで
讃岐のや伊豫の國なる土佐が繪をうつしてぞ見るこれの御園は

かへし

すゑものにさけを携へ足曳のやまの大根ををしに來しわが

いとねもごろなる道の物語に夜も更けぬれば

白妙の衣手さむし秋の夜の月なかぞらにすみわたるかも

秋は必ずとふ可しと契れるが心地例ならねばしばしためらひてなど

秋はぎのはなのさかりも過ぎにけりちぎりし事もまだとけなくに

筋冥居士都良がみまかりし頃せんざいに朝顔のいと清げに咲けるを見て

かくばかりありけるものをよの中はなに朝顔をもろしと思はむ

○

ゆめならばさめても見まし萩のはな今日の一日はちらずやあらなむ
飯乞ふとわれ來て見れば萩の花みぎりしみゝに咲きにけらしも
いかならむえにしあればか七夕のよを限りてぞ契りそめつる

いまよりは千ぐさは植ゑじきりぎりす汝が鳴くこゑのいともの憂きに
いく人かえもねざるらむ足曳の山の端出づる月を見むとて
飯乞ふと我來にければこの園の萩のさかりにあひにけるかも
飯こうてわれこのやどに過ぎしかばはぎのさかりに遇ひにけらしも
思ふどち門田のくろに圓居して夜は明かしなむ月の淸きに
あだなりと人は云ふとも淺茅原あさわけ行かむおもふ方には
いつはとは時はあれども寂しさは蟲の鳴く音に野邊のくさばな
えにしあればふた歳つゞきこの殿に名だゝる月を眺むらむとは
花の野に枝折やせまし久方のまた來む秋は尋ね來むため
はぎの花さくらむ秋を遠見とてきませる君がこゝろうれしき
晴るゝかとすれば曇れるあきのそらうきよの人のこゝろしれとや
はださむみあきもくれぬと思ふかなこのごろ絶えて蟲のねもなし
仁保の海照る月影の隈なくば八つの名所一目にも見む
足曳の國上の山をもし問はばこゝろにおもひ白くもの外
友呼べる門田のかりのこゑきけば獨りや寂し物やおもはる

○門田のくろ　家の前の田の畔。
○仁保の海　心の海、琵琶湖の異名。八つの名所は近江八景をさす。
○おもひ白くもの外　心に憂き事を思ひ知らぬとかけた。

この間に柚木こりてむ久方の時雨のあめのふらぬまぎれに

おもひつゝ來てぞ聞きつる今宵しもこゑをつくしてなくきり〳〵す

女郎花紫菀撫子さきにけり今朝のあさけのつゆのきほひて

置く露にこゝろはなきをもみぢ葉のうすきも濃きもおのがさま〴〵

をちこちの山のもみぢ葉ちりすぎてそらさみしくぞなりにけらしも

音にきく樋曾の山邊のもみぢ見に今年はゆかむ老の名殘に

小鳥のねぐらにとまるこゑならで月見る友もあらぬやまざと

わがまちし秋は來にけり月草のやすの河原に咲き行く見れば

我が宿をいづくと問はば答ふべし天の河原のはしの東を

我がまちしあきはきぬらしこよひしも絲引蟲のなきそめにけり

わがやどのまがきに植ゑしつたかづら今日この頃はもみぢしぬらむ

我が宿をたづねて來ませ足曳の山のもみぢを手折りがてらに

飯乞はむ眞柴やこらむ苔清水時雨のあめのふらぬまに〳〵

わたつ海の青海原は久方の月すみ渡るところなりけり

わが庵はきみがうら畑夕さればまがきにすだくむしのこゑ〴〵

我がまちしあきは來ぬらしをちこちの草むらごとにむしの聲する

○樋曾の山邊　越前西蒲原郡比曾山であらう。

○やすの河原　天の川を云ふ。天の川の空に白く見えるやうになつたので、秋の來たのを知つたのである。

○絲引蟲　蟋蟀の方言であらう。絲引と云ふ蟖の一種はある。

○高砂の尾上にひゞく云々　彼が青年時代備中玉島の圓通寺に在りし時の想出の歌であらう。

○たをゝに　撓むまでに。

○かぜすゞし月はさやけし云々　良寛の好きなものの一つに踊があつた、拙い女裝して踊り、人がわざと誰であらうと怪しんだのを、非常に喜んだと云ふ逸話がある。

○すぎがてに　行き過ぎにくさうに。

○月よみの　月讀命、單に月をさす。

わがまちし秋は來にけり高砂の尾上にひゞく日ぐらしの聲

我がやどのまがきがもとの菊のはなこのごろもはや咲きやしぬらむ

わがまちしあきや來ぬらし此の夕くさむらごとに蟲のこゑする

わたつみの波かよするとみるまでに枝もたをゝに咲ける白菊

かぜすゞし月はさやけしいざこども踊りあかさむ老のなごりに

よもすがらねざめてきけばかりがねの天つくもゐをなき渡るかな

玉鉾の道惑ふまであき萩はちりにけるかも行く人なしに

玉鉾の道行きぶりの初もみぢ手折りかざして家土産にせむ

たそがれに國上の山を越え來れば高根に鹿の聲ぞきこゆる

誰しにもうきよの外と思ふらむ隈なき月のかげを眺めて

旅ごろも寂しさ深き山里に雲居おなじき月を見るかな

宵闇にみちやまどへる小男鹿のこの岡をしもすぎがてになく

つゆとみしうきよを旅のまゝならば我が家もくさの枕ならまし

月よみの光を待ちてかへりませやま路はくりのいがの多きに

ねもごろにたづねて見ませ久方の天の河原は何處なるやと

ながきよにねざめて聞けば久方の時雨に誘ふ小男鹿の聲

の…に隠して山に庵を結ばれた事がある、其の折の詠であらう。

○御洗河　單に社前の川。

○淺きこゝろを　薄紅葉にかけた

笹間に我來しものを秋の野のはなにこゝろをつくしつるかも

山住みのあはれをたれにかたらまし稀にも人の來ても問はねば

まつと云へばあやしきものぞ今日の日の千年の如も思ほゆらくに

うちつけにちりなば惜しきもみぢ葉を見つゝしのばむ秋の形見に

戀ふる日にあまたありけり逢ふと云へばそこぞともなく明けにけるかな

天の川かはべのせきや切れぬらし今年のとしはふりくらしつゝ

くさばなのさかりな過ぎそ小男鹿は臥戸あれぬとおもふらむかも

八重葎かばまたもひまをばとめもせむ御洗河へ持ちて捨てませ

山奥に見捨ててかへる薄紅葉われをおもはむ淺きこゝろを

山里はうら寂しくぞなりにける木々の梢のちり行く見れば

やさしくも來ませるものよなでしこのあきの山路を辿り〳〵て

山かげのきみが庵にかへるころ紅葉見ながら一日たづねむ

やり水のこのごろ音のこゑせぬは山の紅葉のちりつもるらし

又もきみ柴の庵をいとはずばすゝき尾花をわけて訪ひ來よ

ふしておもひ起きて眺むる七夕のいかなることの契りをかする

又も來よ柴の庵をいとはずばすゝき尾花のつゆをわけつゝ

ふるあめに月の桂もそまるやと仰げば高し長月のそら

ふるさとをよる〱こゝに武藏野の草葉の露とけぬる君はも

此の夕秋は來ぬらし我が宿のくさのまがきにむしのなくなる

此の岡のあき萩すゝき手折りもて三世の佛に奉らばや

越のそらも同じ光の月影をあはれと見るやむさし野の原

この野邊に枝折やせまし久方の又來む秋は尋ね來むため

此の夕ねざめてきけば小男鹿のこゑのかぎりをふりたててなく

小鳥のねぐらにとまるこゑならで月見る友もあらぬ山住み

こよひしもねざめにきけば天津鴈雲居はるかになきつれてゆく

水やくまむ薪やこらむ菜やつまむ秋のしぐれのふらぬその間に

秋風を待てばくるしも河の瀨にうち橋渡せその河の瀨に

天の川やすの渡りは近けれど逢ふよしはなし秋にし有らねば

秋かぜに赤裳の裾をひるがへし妹か待つらむ安の渡りに

あはれさはいつはあれども葛の葉のうらふきかへす秋の初風

○枝折やせまし　枝を折り置きて案內とするのである。

○小鳥のねぐらに云々　前出、但し下句は「友もあらぬ山里」

○うち橋渡せ　假橋わたせ。七夕の歌であらう。

○赤裳の裾をひるがへし　棚機つ女を詠じた歌。

あきの野のくさ葉おしなみ來しわれを人なとがめそ香にはしむとも

秋の野の千草ながらに手折らなむ今日の一日はくれば暮るとも

秋の野の尾花に置ける白露を玉かとのみぞあやまたれける

秋の野に咲きたる花をかぞへつゝきみが家邊にきたりぬるかも

あきの野の尾花にまじる女郎花月の光にうつしても見む

秋風の尾花吹きしく夕暮は渚によする浪かとぞおもふ

秋萩の枝もたをゝにおくつゆを消さずにあれや見む人のため

あき日和染むる花野にまとゐして蝶もともねのゆめをむすばむ

秋の野を我こえ來れば朝霧にぬれつゝ立てり女郎花のはな

いざ歌へ我立ち舞はむぬばたまのこよひの月にいねらるべしや

月雪はいつは有れどもぬばたまの今日のこよひに猶しかずけり

秋風になびく山路の薄の穗見つゝ來にけりきみが家邊に

秋の日に光かゞやくすゝきの穗こゝのお庭に立たして見れば

あきの野のはぎのはつ花咲きにけり尾上の鹿のこゑまちがてに

○こゑまちがてに　鹿の聲を待ちかねて。

秋山を我こえ來れば玉鉾のみちも照るまでもみぢしにけり

あき山にさきたるはなをかぞへつゝこれの扉に辿り來にけり

○のどろかに　ゆつくり、のんびり。
○やまのたをりの　山の頂上などのたわみたる所。
○聞きがてに　聞きがてらに。
○何によそへて　何にかこつけて
○ちりのまがひに　散り亂れるのに。
○あだなるを　浮華で散り易いのを。

のどろかにわれ來しものを秋の野の花にこゝろをつくしつるかも
あしびきのやまのたをりのもみぢ葉を手折らずに來て今はくやしき
あきさらばたづねて來ませわが庵を尾上のしかのこゑ聞きがてに
秋山のもみぢはすぎぬいまよりは何によそへてきみをしのばむ
あきの夜はながしといへどさす竹のきみとかたれば長くしもあらじ
秋のよもやゝ肌寒くなりにけり獨りや寂しあかしかねつも
あきもやゝうら寂しくぞなりにける小篠にあめの注ぐをきけば
秋雨の日に／＼降るにあしびきの山田の老翁は晩稲かるらむ
秋もやゝ衣手さむくなりにけりくさの庵をいざとざしてむ
あしびきの國上のやまの松が枝にあらはれ出づる月のさやけさ
秋の野の花の錦のつゆけしやうらやましくもやどる月影
あきの野のくさばのつゆを玉と見てとらむとすれば且消えにけり
秋萩のちりのまがひに小男鹿の聲のかぎりをふり立ててなく
秋山をわれこえくれば朝霧にぬれつゝ立てり女郎花のはな
あはれさはいつはあれどもあきのよのむしのなく音に八千草の花
あきの野の千草ながらにあだなるをこゝろに染みてなぞおもひける

○いさよふ　遲く出る形容。

○ひるとはなしに　ぬれし衣の乾るとはなしと、晝とかけた。

○ちらまくはゆめ　決して散るな

○行くさ來さ　行く時かへる時。

秋萩のちりもすぎなば小男鹿の臥戸荒れぬとおもふらむかも

足曳の山のもみぢ葉ちりすぎてうら寂しくもなりにけるかも

あきの夜の月のひかりのさやけさに辿りつゝ來しきみが扉に

秋風につゆはこぼれてはなすゝきみだるゝかたに月ぞいさよふ

あきの野ににほひてさけるふぢばかま折りておくらむその人なくも

秋のよはながしといへどさす竹のきみとかたれば思ほえなくに

あきもやゝよさむになりぬわが門につゞれさせてふ蟲のこゑする

秋のあめの日に〳〵ふれば唐衣ぬれこそまされひるとはなしに

あき風の日に〳〵さむく吹くなべにともしくなりぬきり〴〵すの聲

さよふけてたかねのしかのこゑきけばねざめ寂しくものやおもはる

うば玉の夜のやみ路にまよひけりあがたのやまに入る月をみて

里子等の吹く笛竹もあはれきくもとよりあきのしらべなりせば

來て見れば我が故郷はあれにけりにはもまがきも落葉のみして

はぎがはな今さかりなり久方のあめはふるともちらまくはゆめ

きみがやどの一本すゝきなつかしみ穗にづるあきはとめてわれ來む

行くさ來さみれどもあかずわがやどのすゝきが上における白露

○藜　あかざ。一年生の草本、若い葉は食用に供する、野生の植物。
○籠にみて　かごに一杯入れて。

夕かぜにつゆはこぼれてはなすゝきみだるゝ方は月ぞいさよふ
夕月夜ひとり扉に聞きぬれば時雨に誘ふ小男鹿のこゑ
夕ぐれに國上の山をこえ來れば衣手さむし木の葉ちりつゝ
行く秋のあはれをたれにかたらまし藜籠にみてかへる夕ぐれ
夕霧にをちの里邊は埋もれぬ杉立つ宿に歸るさのみち
み草かり庵むすばむ久方の天の河原のはしの東に
み山邊のやまのたをりにうちなびく尾花眺めてたどりつゝきし
白妙のそでふりはへて七夕の天のかはらにいまぞ立つらし
はぎの上に置く白露の玉ならば衣の裏にかけて行かまし
おくやまのもみぢふみわけ殊更に來ませるきみをいかにとかせむ
白妙の衣手寒しあきのよの月なかぞらにすみ渡るかも
白露にみだれてさける女郎花つみて贈らむその人なしに
しきたへのまくらさらずてきり〴〵す終夜なく枕さらずて
人の中は憂しとおもへど七夕のためにはいかにちぎり置きけむ
久方の時雨の雨の間なくふれば峯のもみぢ葉ちり過ぎにけり
久方の月の光の清ければ照らしぬきけり唐も大和も

○みはやしの　社の林。

百草の千草ながらにあだなれどこゝろにしみてなぞ思ひける

もみぢ葉はちりすぐるとも谷川にかげだにのこせあきの形見に

もみぢ葉のふりにふりしくやどなれば訪ひ來む人も道まがふらし

もみぢ葉のさきを爭ふよの中に何を憂しとて袖ぬらすらむ

かりそめにわかれしかどもこのその萩にこゝろをうつしつるかも

もみぢ葉のちりにし人の面影を忘れて君を訪ふぞ嬉しき

すみぞめの衣手さむしあきかぜに木の葉ちり來る夕ぐれの空

住めばまたこゝろおかれぬやどもがなかりの篠屋のあきのよの月

こひしくばたづねて來ませ足曳の山のもみぢを手折りがてらに

柴の庵を打ち出でみればみはやしの梢もり來るつきのきよさよ

長月のもの悲しきにくさまくらたびのやどりにはてしきみはも

あきもやゝのこり少なになりぬれば尾上とよもす小男鹿のこゑ

わが庵は森の下庵いつとてもあさぢのみこそ生ひ茂りつゝ

我が園にさきみだれたるはぎの花朝な夕なにうつろひにけり

つれ〴〵につきをも知らで更科や姨捨山もよそにながめて

ふるさとをはる〴〵出でてむさし野のくまなき月をひとり見るかな

はるは花あきは千草にたはれなむよしや里人こちたかりとも

ふるさとのごとおもひ出でてやきみはしも有明の浦に月や見るらむ

みどりなるひとつ若葉と春は見し秋はいろ〳〵に紅葉ぢけるかも

音にのみきかぬよはなしすゞむしのありし昔のあきを思ひて

わが庵のかきねに植ゑし八千ぐさのはなもこのごろ咲きそめにけり

渡守早船いだせぬば玉の夜霧は立ちぬかはの瀬ごとに

わがやどはしとゞにぬれぬうつせみのあきのよながきことを思ふに

あしびきの山のたをりに打ち靡く尾花手折りてきみが家邊に

夕ぐれに國上の山を越えくれば高根にしかのこゑを聞きけり

行く水はせけば止るをもみぢ葉の過ぎし月日のまたかへるとは

なほさらに我こむものをあきの野のはなにこの日をくらしつるかも

寂しさにくさの庵を出で見れば稲葉うごかしあきかぜぞふく

よをさむみ門田のくろに居る鴨のいねがてに鳴くころにありける

長月のねざめにきけば高砂の尾上にひゞく小男鹿のこゑ

あきもやゝうら寂しくぞなりにけるいざかへりなむくさの庵に

女郎花おほかるのべにしめやせむけだし秋風よきぞふくかと

○こちたかりとも　里人は煩はしくとも。

○みどりなるの歌　古今集卷四、「緑なる一つ草とぞ春は見し秋はいろ〳〵の花にぞありける」がある。

○もみぢ葉の過ぎし月日の云々　紅葉ばの散り過ぎしと、過ぎし歳月とをかけた。行く水は堰けば留るが、すぐる光陰は、再びかへらうや。

○しめやせむ　標繩を張らうか。

○よきぞふくかと　秋風がよけて吹くかしらんと。

もみぢ葉のちる山里は聞きわかぬ時雨する日もしぐれせぬ日も

あき山の紅葉はちりぬ家づとに子らがとひせば何をしてまし

この岡のあきはぎ薄手折り來てわがころも手につゆはしむとも

あさもやゝ衣手さむくなりにけりつゞれさせてふむしの告ぐれば

玉鉾のみちの隈ごと枝折せむ又來むあきはたづねこむため

心あらばむしの音聞きに來ませ君あき野のかどをなのるわが宿

秋もやゝうらさみしくぞなりにけりくさの庵をいざとざしてむ

白つゆにさきたるはなを手折るとてあきの山路にこの日くらしつ

秋の野のすゝきかるかや藤袴きみには見せつちらばちるとも

ねもごろに我を招くか旗薄はぎのさかりに逢ふらく思へば

等閑に日をくらしつゝあら玉のことしの秋もくらしつるかも

あきの雨のはれまにいでてこどもらと山路たどれば裳の裾ぬれぬ

露は置きぬ山路は寒し立ち酒ををしてかへらむけだしいかゞあらむ

秋風にちりにちりしく萩の花はらはば惜しきものにぞありける

秋の野にたれきけとてか夜もすがらこゑふりたててすゞむしの鳴く

天つたふ日はゆふべなり蟲はなくいざやどからむきみが庵に

○ちらばちるとも　もう君に見せたから、散るなら散ってもよい。

○立ち酒　立ちしまゝ飲む酒。○をして　飲みて。良寛は酒好きであった。

もみぢ葉のすぎにし子らがこともへばほりするものは世の中になし

いまもかも棚機つめは久方の天の川原に出で立たすらし

久方のあまの河原の渡守河なみたかしこゝろせよかし

小夜更けてきけば高根に小男鹿の聲のかぎりをふり立てゝなく

肌さむみあきもくれぬとおもふかな蟲の音も枯る時雨するよは

秋もやゝのこりすくなになりぬればほと／＼こひし小男鹿の聲

あきかぜのよごとに寒くなるなべにかれのにのこるすゞむしの聲

をやみなく雨はふり來ぬ久方のあまのかはらのせきやくゆらに

十日あまり早くありせばあしびきのやまのもみぢを見せましものを

わがやどの秋はぎのはなさきにけり尾上の鹿はいまかなくらむ

萩かしは咲けばとふみとふるさとのくさの庵をいでこしきみか

あしびきのやまのもみぢをかざしつゝあそぶ今宵はもゝよつぎたせ

むしはなく千草はさきぬぬば玉の秋のゆふべのすぐころもをし

足曳のやまのたをりのもみぢ葉を手折りてぞこしあめのはれまに

わがそののかきねの小萩ちりはてていとあはれさをなくきり／＼す

草むらのたみちになにかまよふらむ月はきよくも山の峯にかくる

○はりするものは　自分のほしいものは。

○くゆらに　崩れん許りに。

○もゝよつぎたせ　百夜も繼ぎ足せ、興が盡きないから。

○すぐころもをし　過ぐる時間も惜しい。

○たみち　田の間の路。

○あさずをせきみ　摘えず食べよ君。

やみぢより暗路にかよふ我なればつきの名をさへ聞きわかぬなり
しばらくはこゝにとまらむ久方の後には月のいでむとおもへば
月よみの光をまちてかへりませきみが家路は遠からなくに
しらつゆに咲きみだれたるはぎの枝錦を織れるこゝちこそすれ
あきかぜにちりみだれたる萩の花はらはば惜しきものにぞありける
ちりぬるは惜しくもあるか萩のはなこよひの月にかざして行かむ
あしびきの國上の山の山畑にまきし大根をあさずをせきみ
八重葎誰かわけつる天の川とわたる船もわれまたなくに
もみぢ葉の流れてとまるわたつみは紅ふかくなみぞ立つらむ
つきよみにかど田の田居に出で見れば遠山もとにきり立ちのぼる
ゆふさればむしの音聞きに來ませきみ秋野ののらとなのるわがやど
足曳のやまだの畔になく鴨のこゑきくときぞあきはくれける

冬

由之をゆめに見てさめて

いづこよりよるのゆめ路を辿りこし深山はいまだ雪のふかきに

神無月のころ蓑一つ著たる人の門に立ちてもの乞ひければ古著ぬぎて取らせぬ其の夜嵐のいとさむくふきたりければ

いづこにか旅寢しつらむぬば玉のよはのあらしのうたてさむきに

梅の梢にゆきのかゝれるを見て

はるされば梅の梢にふるゆきをはなと見ながらかつすぎにけり

文臺先生を招くときに

久方のゆきのはれまにきませきみくさの庵に一夜かたらむ

にぎたへを人の贈りければ

久方の雪氣のかぜはなほ寒しこけの衣にしたがさねせむ

こたへ

久かたのしぐれのあめにそぼちつゝきませる君をいかにしてまし

定珍が「國上山杉の下道ゆきふかし跡ふみつけてかへりされきみ」とよみたるかへしに

君きませゆきはふるともあととめむ國上の山のすぎのした道

ゆきのふるをみて主人に代りてよめる

白雪はちへにふりしけわが門にすぎにし子らがくると云はなくに

○にぎたへ　和栲、こゝでは絹布の意に用ゐたのである。
○こけの衣　苔の衣、隱者、僧侶などの著る衣、こゝでは僧衣。
○ふりしけ　降り頻れ。しけく降れ。

小夜ふけてあらしのいたう吹きたりければ

山かげのくさの庵はいとさむし柴を焼きつゝよをあかしてむ

霜月十日ばかりの程

くさの庵にねざめてきけばあしびきの岩ねにおつるたぎつせの音

○

古を思へばゆめかうつゝかもよるはしぐれのあめを聞きつゝ

いつはともときはあれども寂しさはむしの音もがな時雨する夜半

いまよりはふるさと人の音もあらじみねにも尾にもつもる白雪

よの中にかゝはらぬ身と思へどもくるゝは惜しきものにぞありける

飯乞ふとさとにも出でずなりにけり昨日も今日もゆきの降れれば

かき暮しふるしら雪を見るごとにむろの高嶺のむかし思ほゆ

我がやどはこしの山もと冬ごもり氷も雪もくものかゝりて

よもすがらくさの庵にわれ居れば杉の葉しぬぎあられふるなり

よはさむしこけのころもはいとせましうきよのたみに何をかさまし

埋火もやゝ親しくぞなりにけるをちのやまべにゆきやふるらむ

軒も庭もふり埋めけるゆきのうちにいや珍らしき人の音信

○いつはともときはあれども　寂しい時は、いつでもあるが。

○むろの高嶺の　播磨室山、これも良寛が玉島滞在中の見聞であらう。

○をちのやまべに　彼方の山邊に

くさまくらたびねしつればぬば玉のよはのあらしのうたてさむきに
やまかげの眞木の板屋に音はせねどゆきのふるよは寒くこそあれ
ふゆのそらむすぶ柳のいとながく千年のはるに逢ふを待たばや
冬枯のすゝき尾花をしるべにてとめて來にけりこれの庵に
ふりつみしたかねの深雪それながらあまつみそらはかすみ初めけり
木の葉ちる森の下屋は聞きわかぬしぐれする日も時雨せぬ日も
この夕いはまのたぎつ音せぬはたかねのみ雪つもるなるらし
越の海野積のうらの雪海苔はかけてしぬばぬつきも日もなし
こしのうみのづみの浦の海苔をえば分けて賜はれいまならずとも
越のうらのおきつ波間をなづみつゝつみにし海苔はいつもわすれず
あしびきの山田の田居になくかもの聲きくときぞ冬はきにける
逢ふことはまたいつの日もしらゆきをふりながれ行く人ぞ愛(いと)なき
さよふけて高根の深雪つもるらし岩間に瀧津音だにもなし
小夜更けてあめやあられの音すなり今やみ神の出でたたすらし
さよふけてかど田のくろに鳴く鴫の羽がひの上にしもやおくらむ
みゆきふるかた山かげのゆふぐれはこゝろさへにぞきえぬべらなり

○いとながく　柳の絲といふことかけた。

○かけてしぬばぬ　心にかけて想ひ起さぬ。

○いつの日もしらゆきを　いつの日かも知らずと白雪とかけた。

むらぎものこゝろ悲しもあらたまの今年のけふも暮れぬと思へば

たにのこゑ峯のあらしをいとはずばかさねてたどれ杉の陰みち

霙ふる日もかぎりとて旅ごろも別るゝそでをおくる浦風

水や汲まむたきゞやこらむ菜やつまむ朝のしぐれのふらぬその間に

ふるゆきにとしをまがひて梅咲きぬ香さへちらずば人知るらめや

柴の戸のふゆの夕の寂しさをうきよのひとにいかでかたらむ

しらゆきの日毎にふれば我がやどはたづぬる人のあとさへぞなき

白雪は幾重もつもれ唐(もろこし)の室のたかねをうつさむとぞおもふ

たまさかにきませるきみを小夜嵐いたくなふきそ來ませるきみに

みやま邊にふゆごもりする老の身を誰か訪はまし君ならなくに

日はくれてはまべを行けば千鳥なくどうとは知らずこゝろ細さよ

わが宿のあさぢおしなみふるゆきのけなばけぬべき我がおもひかな

はら〳〵とふるは木の葉の時雨にてあめを今朝きく山里の庵

我が庵は國上山もと冬籠りゆききのひとのあとさへぞなき

さよふけてかぜやあられの音きけば昔こひしうものやおもはる

石瀬なる川中にたてる一つまつ時雨のあめにぬれつゝ立てり

○としをまがひて　新年とまぎらせて。

○唐の室のたかねを　唐は枕詞に用ゐたのであらう。

○どうとは　何とは。

○けなばけぬべき　降る雪の如く消えなば消えぬべき。消え入る程の。

やますみの冬の夕の寂しさをうきよの人は何とかたらむ

久方のゆき野にたてるしら鷺はおのが姿に身をかくしつゝ

白雪はふればかつけぬしかはあれども頭にふればきえずありけり

いそのかみに旅寢をすればいとさむしこけのころもを我にかさなむ

人はみなはなのたもととなりにけり苔の衣よかわきだにせよ

よをいとふこけの衣はいとせましかさねばうとしいざふたりねむ

久方のあまぎるゆきのふる日には杉の下庵おもひやれきみ

かぜまぜにゆきはふりけり終日にわれかへるさのみちもなきまで

いと早き月日なりけりいと早くとしはくれけり我老いにけり

山水の音さへさむきこの庵にふゆごもりする老のきみはも

柴やこらむ清水や汲まむ菜やつまむ時雨のあめのふらぬまぎれに

岩室の田中の松をけふ見ればしぐれのあめにぬれつゝ立てり

木の葉のみちりにちりしくやどなれば又來む折は心せよ君

我がやどは國上山もとふゆごもりゆききの人のあとさへぞなき

こしにきてまだこしなれぬ我なれやうたて寒さのはだにせちなる

飯乞ひとさとにも出でずこの頃は時雨のあめの間なくしふれば

○よをいとふこけの衣は云々　後撰集雜歌「世をそむく苔の衣は只ひとへ貸さねばうとしいざ二人寢む」に據つた。あるひは記憶して居ての暗合か、あまりによく似て居る。

○かぜまぜに　風交りに。

○こしにきて　越に來て、越後に來て。越後人の良寛が、かく言ふのは笑止しい樣であるが、良寛は若く出家し、越後を去つて他國を流浪する事二十三年、四十四歲で歸郷した(寛政十一年)、であるから越に來ての感じが、新なるものであつたであらうと考へられる。

○つぎてしら雪　ひき續いて白雪が。

○あへぐさ　馳走する材料。

○まさに我が身といひつべく　降ると古るとをかけた、年を老いるのは、まさに我が身の上と云ふ可く。

このごろは森の下やは聞きわかぬしぐれするよも時雨せぬ夜も

おしなべて山にも野にも雪ふりぬきえざるをりは粉に似てあるべし

時雨の雨はまなくしふれば我がやどはかぜの木の葉に埋もれぬらむ

よをそむくこけの衣はいとせまし柴をたきつゝ夜を明かしてむ

いまよりはつぎてしら雪つもるらし道ふみわけてたれかとふべき

やま里の冬のさびしさなかりせば何をか君があへぐさにせむ

み山べにふゆごもりする老の身をたれかとはまし君ならずして

この岡に薪こりてむ久方のしぐれの雨のふらぬまぎれに

久方の雪ふみわけて來ませきみしばの庵に一夜かたらむ

そのかみを思へばゆめかうつゝかもよるはしぐれのあめを聞きつゝ

やまかげの眞木の板屋に音はせねど雪のふる日は空にしるけり

ふりしけばまさに我が身といひつべく思へば雪のそらにふりつゝ

雜

水瓶のうた

古にありけむ人の持てりてふ大みうつはをわれはもちたり

今よりは塵をもすゑじ朝な夕な我見はやさむ痛くな侘びそ

これのみは移りゆくともとゞめ置きて語りもつがめ後のよまでも

ありきつるみよの佛のつくらせる大みうつはは見るに尊し

　光枝大人のみまかり給ひぬと聞きて

いまさらに事の八千度くやしきは別れし日より訪はぬなりけり

　明石

濱風もこゝろして吹け千早振かみの社にやどりせし夜は

　五合庵に題す

濁るよをすめともよはずわがなりにすましてみする谷川の水

うきよをばたかくぬかれて國上山赤谷川のみづをしるべに

　鶴の圖に

としへても和歌のうらわにすむ田鶴は君がよはひのためしにぞ見る

　次の日は唐津てふところに至りぬ今宵も宿のなかりければ

おもひきやみちの芝くさ折りしきてこよひも同じかりねせむとは

　往生安養をよみし時

我ながらうれしくもあるか彌陀佛のいます御國へゆくとおもへば

○塵をもすゑじ　塵をもかけまい

○見はやさむ　賞美しよう。見てもてはやす。

○痛くな侘びそ　水瓶に言ふ詞。

○五合庵　良寛自身の營んだ國上山の中腹にある庵室。貞享年間、萬元阿闍梨が退隱した舊址で、同阿闍梨が毎日五合の米を食した逸話があるので、かく名づけたと云ふ。

○よはず　言はずの訛か。

○唐津てふところ　肥前唐津。良寛は備中玉島に居る事、前後十八年、其の間に中國九州に行脚し、長崎から渡清せんとして果さなかつた。其の折の詠であらう。

○安養　極樂の一名。

○唐ごろも　たちの枕詞。

○にはたづみ水潦、水たまり。

楊貴妃の畫を賛して

形さへ色さへ名さへ綾さへにこのよの人とおもはれなくに

子供のみまかりたる親の心に代りて

唐ごろもたちても居ても術ぞなき鬂のかるものおもひみだれて

人の子のあそぶをみればにはたづみ流るゝ涙とゞめかねつも

去年のはる折りてみせつる梅のはな今は手向となりにけるかも

梓弓はるな春ともおもほえず過ぎにし子らがことをおもへば

をさなきころよりねもごろに語らひし人ありけり田舍をすみわびて東の方へいにけりこなたよりも彼方よりも久しう言傳もせでありしにこのごろみまかりぬと聞きて

かからむとかねて知りせばたま鉾のみちゆく人に言傳てましを

このくれのうら悲しきにくさまくら旅の庵にはてしきみはも

人の安心のこゝろをよめといひければよめる

かにかくにものなおもひそ彌陀佛のもとの誓ひのあるに任せて

定珍ぬしにおくる

誰人かさゝへやすらむ玉鉾のみち忘れてか君がきまさぬ

○赤穂　播磨赤穂。

○たづねていなむ　尋ねて行かむの意。

蘭甫におくる

つく／＼と借宅庵のあきのあめうくせのこともおもひいづらめ

國上山にのぼりて

國上山岩のこけみちふみならし幾度我はまゐりけらしも

赤穂てふところにて天神の森にやどりぬ小夜ふけ方あらしのいとさむうふきたりければ

山おろしよいたくな吹きそすみぞめの衣かたしきたびねせし夜は

よの中こゝろうくやおもひけむ庵求めにとて嵯峨へいぬる人によみて遣はしける

ことさらにふかくな入りそ嵯峨の山たづねていなむみちの知れなくに

人の許より文おこせたりけりこのごろは事繁しことはてなば行きてあひ見むとそののちは音もせざりけりひと日ふた日はことしげからめいつ日なぬ日は事しげからめこの人はとはにことしげき人や

事しあればことしありとてきみはこず事なきときは音信もなし

文のはしに

逢坂の關のこなたにあらねども往來の人にあこがれにけり

さす竹のきみがみためと久方の雨間に出でてつみし芹ぞも

人の身はならはしものぞ子供らをよく教へてよねぎらひまして

某の禪師集めたまふみ經のすでにらせむとするをなげきて

あしびきのにしの山邊にちかき日をまねきてかへす人もあらぬか

み經のふたゝびみ寺にかへるを見てこれの主人のみこゝろを悦びて

あさもよしきみがこゝろのまことより經はみ寺にかへるなりけり

高野のみ寺にやどりて

紀のくにの高野のおくの古寺に杉の雫を聞きあかしつゝ

大地震

武士の眞ゆみしら弓あづさゆみはりなばなどかゆるむべしやは

人の國にはありもやすらむしらずこの國には疱瘡(いも)の神とて七としに一たび國めぐりすといふ怪しのものありて小兒(をさなき)ものを惱ましける此年(ことし)は異(こと)としにも似ず病める者の生けるはなしからうじて生けるは鬼の面(おもて)となる故子もてるものは人のこゝちせず毎日(ひごと)に野に送る櫃をかぞふれは大指(おゆび)も指なえつべしこのころその病にてをさなごを失ひし人の許より彼是(そこく)のあつらへものとて自らのも添へてもたせておこしたりけるもたせておこせた

○ならはしものぞ　習はし物ぞ。習はし修養によつて、どうにでもなるものぞ。

○ねぎらひまして　あなたが子等をよく骨折り慰めになつて。

○にしの山邊に云々　落日を以て經卷の散佚せんとするに喩へた。

○あさもよし　きの枕詞。

○高野のみ寺　良寛父の訃に接し歸國の途次、紀伊高野山に立寄つたのである、寛政十一年、四十四歳の折。

○人の國　外國。

○疱瘡の神　疱瘡を掌る神。

○野に送る櫃　疱瘡で死せる子を葬送する棺。

○指なえつべし　指が數へ疲れるであらう。

○あつらへもの　誂へ物、備へあつらへるのであるから、法號戒名の類であらう。

りし人なむをさなごの兄（このかみ）にてありけるさて末の殘りしはいかにといへばこれも同じやまひにてをとつひ空しくなりにたりといふを聞きて親のもとへよみて遣はしける（以下四首）

煙だに天津みそらに消えはてて面影のみぞ形見ならまし

又かくも

なげくともかへらぬものを空蟬はつねなきものと思ほせよ君

さてその法名はといへば信誓と答へばかくなむ

御佛の信誓（まことちかひ）の如あらばかりのうきよをなにねがふらむ

その夜は法華經を讀誦して有緣無緣の童に回向すとて

知る知らぬ誘引（いざな）ひたまへみ佛の法の蓮のはなの臺に

福井の矢垂橋にて

福井なる矢たれのはしにきて見れば雨はふれれど日は照れれども

功成名遂而身退天之道也

おもへきみこゝろ慰む月花もつもれば人の老となるてふ

松樹千年の歌によりてあとにて思ひ出して

ことしより君がよはひをよみて見むまつの千年をありかずにして

○煙だに　なき骸を燒ける煙までも。

○法の蓮　法蓮華經と極樂の蓮の臺とをかけた。

○功成名遂而身退天之道也　老子に「富貴而驕自遺其咎、功成名遂身退天之道也。」

○ありかずにして　世に生存する齡の數。古今集卷七「わたつみの濱のまさごを數へつゝ君が千年のありかずにせむ」

○よの中の玉も黄金も云々　萬葉集卷五「しろ金も黄金も珠も何せむにまされる寶子にしかめやも」に據つた。
○かしの實の　ひとりの枕詞。
○思ふぞへあへず　思ふぞよ、堪へ得ないで。
○こゝろつくしに　心やりにやはり歎くよ。

○たち酒に　立ちながら飮む酒にも云ふが、茲では出がけに飮む酒であらう。

○藥をあけたり　藥の手腕を上げた意であらう。

よの中の玉も黄金もなにかせむひとりある子に別れぬる身は

かしの實のたゞひとり子に捨てられてわが身ばかりとなりにしものを

思ふぞへあへずわが身のまかりなば死出の山路にけだしあはむかも

いつまでかたに歎くらむなげけども甲斐なきものをこゝろつくしに

なげけどもかひなきものをこりもせでまたも涙のせきくるはなぞ

子どもらを生まぬさきとはおもへども思ふこゝろはしばしなりけり

嵐窗に宿りて　渡部村阿部定珍氏の別墅

忘れては我がすむ庵とおもふかな松のあらしのたえずしふけば

又すゝめたべければ杯をとりて

さす竹のきみがすゝむるうまさけにさらにや飮まむそのたち酒に

久しく病みて

人はみな藥をあけたりといふなれど我は思案をせぬとこそすれ

ながらへむ事やおもひしかくばかり變りはてぬるよとは知らずて

諸人のかこつ思ひをせきとめておのれひとりにしらしめむとか

いさゝか病中の心やりに

としつきの誘ひていなば如何ばかりうれしからましその老いらくを

我がやどを箱根のせきとおもへばや年月はゆく老いらくはくる

年月はゆきかもするに老いらくのくれはゆかずに何つもるらむ

過ぎにし人のことをかにもかくにも忘られぬと聞きてかくなむ

生みの子を愛しとおもはば百姓（みたから）を打放（うちはふ）らすな愛子（めぐは）と思へば

老人のなげかすと聞きて

老人は意弱（こゝろよわ）き者（もの）ぞ御こゝろをなぐさめたまへ朝な夕なに

老婆の圖に題して

よの中のうきもつらきもなさけをもわが子を思ふゆゑにこそしれ

提婆品

あしたには後の山の薪こり夕は軒の流れをぞくむ

三條の御坊にて

不可思議の彌陀のちかひのなかりせば何をこのよの思出にせむ

「忘れずばみち行く人の手向をも此をせとせよ夕暮の岡」（在西蒲原郡國上村大字國上）と萬元禪師のよみ給ひし跡にて

夕暮の岡のまつの木人ならば昔のことも問はましものを

○生みの子をの歌　下句一本「打ち放らさずいつくしみませ」○打ち放らすな　うち捨てて構はずに置かるゝな。

○提婆品　法華經提婆品、五逆の提婆達多が修行成佛して、天王如來となる事が説かれて居る。

○萬元禪師のよみ給ひし跡　良寛の住める五合庵をさす。

ゆふぐれの岡にのこれる言の葉のあとなつかしやまつ風ぞ吹く

本願を信ずる人の爲によめる

おろかなる身こそなかなかうれしけれ彌陀の誓ひにあふと思へば

鶴の圖に

なれなれて何をうれへむあし田鶴ぬ御園にあそぶつるぬゆゝしき

行燈の前に讀書する圖に

よの中に交らぬとにはあらねどもひとりあそびぞ我はまされる

故鄕を憶うて

くさまくら夜毎にかはるやどりにも結ぶはおなじふるさとのゆめ

竹森の星彦右衞門へ杖を忘れて

老が身のあはれをたれにかたらなむ杖を忘れてかへる夕暮

人の死を痛みて

水の上に數かくよりもはかなきはおのがこゝろをたのむなりけり

定珍の「けふの日のくれぬときみはもどりけりあすさへきみをいかにとどめむ」のかへし

うきくもの待つこともなき身にしあればかぜの心にまかすべらなり

○本願　阿彌陀如來の遍く衆生を救はんと誓はれし願ひ。

○あし田鶴ぬ　葦田鶴の。ぬはのの古い語法。つるぬもつるのと同じい。

○水の上に數かくよりも云々　伊勢物語の「行く水に數かくよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり」に據つた。

○うきくもの　浮雲の如く。

等閑に外に出でて見れば日はくれぬ又たちかへるきみがやかたに

　かへし

なみ／＼の我が身ならねばすべをなみたまさかに來しきみをかへせる

　かへし

うちはへて只一筋のふるみちをふまむふまじは君がまに／＼

　はらからの阿闍梨のみまかりし頃にみなきて法問のことなどかたりて

俤のゆめにうつろふかとすればさながら人のよにこそありけれ

　五韻を

くさ／＼の綾織り出す四十八もじこゑとひゞきをたてぬきにして

　たらちをの書き給ひしものを見て

水くきのあともなみだにかすみけりありしむかしのことをおもへば

　たがやさんの木にていと巧に刻みたるを見て

たがやさむいろもはだへもたへなれどたがやさむよりたがやさむには

　あるとき與板の里にあそびけるが中に君はいろ黒く衣もくろければ今より烏とこそ申さめといひければ

いづこへも立ちてぞ行かむ明日よりは烏てふ名を人のつくれば

○うちはへて　末長く、際限もなく。

○五韻　こゝでは、五十音の各行の五音をさす。アイウエオの五音。

○たてぬき　織物の絲の名稱、縱絲、横絲に五十音を喩へた。

○たらちを　父。良寛の父は山本家の養子、荒木左門と云ふ、寛政三年五十六歳で京都に走り、勤王の志士となる。寛政七年桂川に投身して歿。一説には自殺と見せ高野山に晩年を送つたと云ふ。

○はだへ　木の肌。

○たがやさむよりたがやさむには　鐵刀木と云ふ樹名と耕さむにはとかけた。かかる銘木を彫刻して日を送るより、農夫となつて田畑を耕さむには若かずと戯れたのである。

日も暮れぬれば宿りにかへり又明日こそとはめとて

いざさらばわれは歸らむきみはこゝにいやすく寢ねよ早明日にせむ

友がきの身まかりしころ

このさとのゆききの人はあまたあれど君しなければさみしかりけり

友垣のみまかりて又の春野邊へまかる道にてすきて見れば住む人なくて

はなは庭にちりみだれてありければ

おもほえずまたこのやどに來つるかなありしむかしの心ながらに

うまさけをたぶ何酒と問へばくびきさけといふを句の頭におきて

くさの庵にひとり棲みぬるきみもとはばさこそ靜けきけふと思へば

くりのおつひにもぞ君はきますなるさこそわは思ひけだしいかゞあらむ

肱夢老人の植ゑましし柏木を見てよめる

むな木にもなるべくなりぬ柏の木うべわがとしの老いにけるかな

所感ありて

彼是となにあげつらむよの中は一つの玉の影としらずて

黒板山の麓にやどりて

あしびきのくろさかやまの木の間よりもり來る月を終夜見む

○くびきさけ　越後頸城郡頸城あたりより産する酒の意であらう。
○句の頭におきて　所謂折句にしたのである。

○むな木　棟木。

○あげつらむ　あげつらふの意、議論し合ふのか。
○一つの玉の影　佛の本體を意味する。

○みくさのみして　みは接頭語。草のみ生ひての意。

○つぎてあはむと　ひき續いて逢はむと。絕えず逢はむと。

里人のしきりにみまかりける時

忘れては驚かれぬる紅葉ばのさきを爭ふよと知りにつゝ

○

いかにして誠のみちにかなひなむ千年のうちに一日なりとも

いかにせばまことの道に適はめとひとへに思ふ寐てもさめても

石の上古のふるみちしかすがにみくさのみしてゆく人なしに

いにしへのふみにもみえず今日の日の再びかへるならひありとは

いとはねばいつか盛りはすぎにけり待たぬに來るは老にぞありける

いまよりはおもふまじとは思へどもおもひ出してはかこちぬるかな

今よりはつぎてあはむとおもへども別れといへば惜しきものなり

いく度かくさの庵を打ち出でてあまつみそらを眺めつるかも

いつ〳〵と待ちにし人は來りけり今は逢ひ見て何か思はむ

今よりは幾つ寢ればかはるは來む月日よみつゝまたぬ日はなし

いざこゝに我が身は老いむあしびきの國上の山のまつの下陰

古のかはらぬものは有磯海とむかへにみゆる佐渡がしまやま

いにしへのますらをのこのかたみぞとみつゝ忍ばむ年はふるとも

いまよりは夜ごとに人をたのみてむ夢もまさしきものにありせば

いかなるやことのあればか我妹子があまたの子らをおきていにつる

伊夜日子のすぎのかげみちふみわけて我來にけらしその陰道を

えにしあらばまたもすみなむ大とののもりの下庵いたくあらすな

よしあしの難波のことはさもあらばあれ共につくさむ一つきのさけ

知るべなきみちをしるべときくからにそのふる道をふみそめにけり

いにしへの人のふみけむふるみちはあれにけるかもゆく人なしに

何をもて答へてよけむ玉きはるいのちにむかふこれのたまもの

しかりとも默にたへねば言あげすかちさびをすな我が弟のきみ

いまよりはなにをたのまむ方もなし教へてたまへ後のよのこと

露霜のあきのもみぢとほとゝぎす何日のよにかはわれ忘れめや

いでことはつくせざりなむあしびきのやまの椎柴折りつくすとも

いづみなる信太がもりのくずの葉のいはのはざまにくちはてぬべし

いつまでかなになげくらむなげけどもつきせぬものを心惑ひに

いざさらばわれもこれよりかへらましたゞしら雲のあるにまかせて

はれやらぬ峯のうすぐも立ちさりてのちのひかりとおもはずやきみ

○いかなるやことのあればか　奈何なる理由のあればであるか。

○これのたまもの　此の頂戴物。

○しかりとも歌　この歌八六八頁の長歌の反歌として出てゐる。

○いでことは云々　いや言葉では到底言ひ盡す事は出來まい。たとひ山の椎木は折り盡すとも。

○うまさびせむ　馬らしくなるの意か。

○あだくらべせむ　あだ心の何れに多いかを爭ふ意であるが、茲では、つまらぬ競爭の意である。

○くすりしの　藥師の。醫者の。

○鐸　ぬてはぬりでの畧。大きな鈴、こゝでは社の鈴である。

○かよりかくより　本來は藻の靡く樣を、婦人の慕ひ寄る形容などに用ゐた語。彼方此方に寄り。こゝでは唯ぶら／＼して居る樣。

鉢の子をわれ忘るれど人とらずとる人はなしあはれ鉢の子

八幡の森の木下で子供らとあそぶ夕日のくれまをしかな

はじめよりつねなき世とは知りながらなぞわが袖のかわくことなき

とこしへにたづねに立たばけだしくもうまさびせむと人のいふらむか

飛ぶ鳥もかよはぬやまのおくにさへすめば住まるゝものにぞありける

苫葺きのひまをもわくる夜半のあめひとりやきみがあかしかぬらむ

ちはやぶるいづれの神を祈りなばけだしや老をはらはさむかも

ぬば玉のゆめのうきよに長らへてたとへこゝろにかなひたりとも

ぬば玉のよるのゆめ路とうつゝとはいづれまさるとあだくらべせむ

いま二日三日もたちなばさすたけのきみがみ足もよくなほらまし

くすりしのいふもきかずにかへらくのみちは岩みちあしのいたまむ

乙宮のもりの木下に我居れば鐸（ぬて）ゆらぐもよ人來るらし

沖つ藻のかよりかくより斯くしつゝきのふもくらし今日も暮しつ

乙みやのもりのいほりにわれ居れば人來るらし鐸の音すも

何處にも朽ちやしなましみほとけのみ法のためにすてしその身を

おもほえず又このいほに來にけらしありし昔のこゝろながらに

おゆびをりうちかぞふればなき人のかぞへがたくも成りにけるかな

遠近のあがた司にものまをすもとのこゝろをわするゝなゆめ

乙みやのもりの下庵とふ人はめづらしものよ森のしたいほ

思ふまじおもふまじとは思へどもおもひ出してはそでしぼるなり

千代かけて頼みし人も仇し野のくさ葉のつゆとなりにけらずや

足曳のやまべに住めばすべをなみ樒つみつゝけふもくらしつ

さすたけのきみがすゝむるうまさけにさらにや呑まむその立ち酒を

よもすがらくさのいほりに柴たきてかたりしことはいつか忘れむ

大御酒をみつきいつつきたべ醉ひぬゑひての後はまたでつぎける

我ありとおもふ人こそはかなけれゆめのうきよに幻の身を

わが宿は國上山もとこひしくばたづねて來ませたどり／＼に

わびぬれど我が庵なればかへるなりこゝろやすきを思出にして

十日餘り五日はたてど平坂をこゆらむ子らが音信もなし

別れにしこゝろのやみに迷ふらしいづれか阿字のきみがふるさと

わすれても人ななやめそましらもよなれも報いはありなむものを

わびぬれど心はすめりくさのいほその日／＼を送るばかりに

○みつきいつつき　三杯五杯。

○阿字の　阿字本不生の佛說を語る事、阿の聲音があらゆる聲音の本源であるが如く、一切諸法の本源も唯一空である。空であるから事物の新たに生ずるものなしと觀ずる說。

○人ななやめそ　人を惱めるな。

かにかくにかわかぬものは涙なり人の見る目をしのぶばかりに

かりそめのこととな聞きそからごろも今朝立ちながらいひしことの葉

かりそめのこととおもひそ唐衣ことのはのみとおもふなよきみ

かくありとかねてしりなばたまほこのみちゆく人にことづてましを

かたりつぎいひつぎからの海士もなし磯邊にふりし松のむかしを

かさねてはとあれかくあれこのたびはかへりたまはれもとの里邊に

かくあらむとかねて知りせばなほざりに人に心はゆるすまじものを

よのなかにかゝはらぬ身と思へどもくるゝは惜しきものにぞありける

よの中のほだしを何と人とはばたづね極めぬこゝろとこたへよ

世の中はすべなきものと今ぞしるそむけばなどしそむかねばうし

夜あくれば森の下いほからすなく今日もうきよの人のかずかも

よしやきみいかなるたびのすゑにても忘れたまふな人のなさけを

世にみつる寶といへど白髪におよばめや千々のひとつも

うまさけとさかなしあらばあすもまたきみが庵にたづねてぞ來む

よの中は何にたとへむ山彦のこたふるこゑのむなしき方と

よをいとふ墨のころものせばければつゝみかねたり賤が身をさへ

○からごろも　たちの枕詞。

まじものの誤用、良寛には此の語法が他にもある。

○ほだし　束縛。

○そむけはなぞし　世に背けば、行きなやむ。なぞしはたづむを良寛特有の語法で用ゐたのであらう

○からすなく　前に自身が鳥と仇名せられた事が出て居る、これは自嘲の歌であらう。

○人のかず　人の數であらう、人の澤ではあるまい。

○うまさけとさかなしあらば云々　うまい酒と、その酒の肴とだけあるなら。

○はゝの形見のあさゆふに云々　母の形見として佐渡島をなつかしむのは、母は佐渡相川の同族山本庄兵衞の長女秀子で、出雲崎の良寛の家に養女として來たのであるからだ、佐渡は母の產れ故鄉であるからだ。
○祇園精舍　印度舍衞國の須達長者、祇陀園に精舍卽ち寺を建てたのである。
○諸行無常　あらゆる物に永久性無きこと。
○他力　他力易行道、唯ひたすら佛の力にすがる信仰。
○なよたけの　はにかけた枕詞。
○葉下なる身　物の數に入らぬ身
○ねぎてまし　願ひ祈らう。

高砂の尾上のかねの聲きけばけふのひと日はくれにけるかも
垂乳根のはゝの形見とあさゆふに佐渡のしまべをうち見つるかな
尊しや祇園精舍のかねのこゑ諸行無常のゆめぞさめけり
他力とは野中にたてし竹なれや寄りさはらぬを他力とぞいふ
靈山(りやうせん)の釋迦のみまへにちぎりてしことな忘れそよはへだつとも
僧の身はまことはいらず行不行菩薩の行ぞ殊勝なりける
津のくにのなにはのことはよしゑやしたゞに一足すゝめもろ人
あしびきのやま田のかゞしなれさへも穗拾ふとりを守るてふものを
秋の夜の小夜更くるまで柴の戶にかたりしことをいつか忘れむ
津のくにの難波の事はいさしらずくさの庵にけふもくらしつ
ねもごろのものにもあるかとし月はしづがふせやもとめて來にけり
うまさけにさかなもて來よいつも〳〵くさの庵にやどはかさまし
こよひ逢ひあすは山路をへだてなば一人や棲まむもとの庵に
なよたけの葉下なる身は等閒にいざくらさまし一日々々に
何をもて君がよはひをねぎてまし松も千年の限りありせば
なかさきの森のからすのなかぬ日はあれどもそでのぬれぬ日ぞなき

苗々とわがよぶこゑは山越えて又やまこえて谷の褶越え

なるかみの音もとゞろに久方の雨はふりこで我がおもふとに

何ごともみなむかしとぞなりにける涙ばかりや形見ならまし

難波江のよしあし知らぬ身にぞあれば阿吽の二字はありときけども

昔より常世のくにはありといへどみちを知らねば行く人もなし

むらぎものこゝろをやらむ方ぞなきあふさきるさにおもひまどひて

幾年かたのみし人も仇し野のくさ葉のつゆとなりにけるかな

うつせみの人の憂けくをきけばうし我もさすがに岩木ならねば

うつりゆくよにし住居はうつせみの人のことのはうれしくもなし

うちつけに云ひ立つとにはあらねどもかつやすらひて時をし待たむ

うたてしきものにもあるか歳月はやまのおくまでとめて來にけり

うつせみのうつゝごゝろのやまぬかも生まれぬ先にわたしにしみを

けふ別れ明日はあふみと思へどもはかりがたきはいのちなりけり

うき雲のまつこともなき身にしあれば留めむとゞめぬ風のまに／＼

のりのみちまことわかたむ西東ゆくもかへるもなみに任せて

法の塵にけがれぬ人はありときけどまさめに一目見しことあらじ

○我がおもふとに　我が思ふ時。

○阿吽　人の呼吸。

○常世のくに　仙境、不死不老の國。

○うちつけに　いきなりに、突然に。

○うたてしき　歎かはしき、いやな。

○わたしにしみを　渡しにし身を佛の御手に渡した身であるを。

○まさめに　確かな目。

○くさばのつゆの　草葉の露の如く。
○八ちまたに　さま〴〵に。
○またれにし身にしありせば　佛に待たれた身であるならば。

くさのいほに立ちても居てもすべぞなき此のごろ君が見えぬ思ひは
國上山森のしたやのしづけさにしばしとて我杖うつしけり
いざなひてゆかば行かめど人のみて怪しめ見らばいかにしてまし
武藏野のくさばのつゆのながらへてながらへはつる身にしあらねば
八ちまたにものなおもひそ彌陀佛のもとの誓ひのあるにまかせて
やまかげの岩間をつたふこけ水のかすかに我はすみわたるかな
かたらずにあるべきものをこと〴〵に人の子ゆゑにぬるゝ袖かな
天が下にみつるたまよりこがねよりはるのはじめのきみが音信
あら玉のとしはふれども面影の猶眼のまへにみゆる心か
ますらをがふみけむ世々の古みちはあれにけるかもゆく人なしに
松の尾のまつのあひだをおもふどちあるきしことはいまも忘れず
またれにし身にしありせば今よりはかにもかくにも彌陀のまに〳〵
ます鏡手にとりもちてけふの日もながめくらしつ影と姿と
ふるさとへゆく人あらばことづてむけふ近江路をわれこえにきと
不二もみえ筑波もみえてすみだ川瀬々のことの葉たづねても見む
いまよりは野にもやまにも交りなむ老の歩みのゆくにまかせて

みねのくもたにのかすみもたち去りて春日にむかふこゝちこそすれ

きみまさば愛でてみるらしこの頃は手向くる花もつゆばかりにて

こゝろもよことばも遠くとゞかねばはしなく御名を唱へこそすれ

子をおもひ思ふ心のまゝならばその子に何のつみをおほせむ

子をおもひすべなきときは己がみをつみてこらせど猶やまずけり

ことのはもいかゞかくべきくもかすみはれぬるけふの不二の高根に

この頃は戀しきものははまべなる蠑螺のからのふたにぞありける

こひしくばたづねて來ませあしびきの國上の山のもりの下庵

ことの葉のはなになみだをそゝぐなり世すべなき身の何しらずとも

こゝとくもとりみとらずみ見つれども此のおほみうちはよろしかりけり

越路なる三島の沼にすむとりも羽がひかはしてぬるてふものを

こひしくばたづねて來ませ我が宿はこしのやまもとたどり／＼に

手にさはるものこそなけれ法のみちそれがさながらそれにありせば

手を折りて打ちかぞふればなき人の數へがたくもなりにけるかな

あすあらばけふもやかくやとおもひてむきのふのくれぞ昔なりける

あるはなくなきはかずそふ世の中にあはれいつまで我が身歎かむ

○御名　佛の御名。

○己がみをつみてこらせど　自分自身を抓つて懲らせども。

○蠑螺のからのふた　世と隔つ事が出來るからである。

○こゝとくも　こゝたくもの訛か許多。

○此のおほみうちは　近江瀬扇の假名の誤りかと思はれる。未詳。

○三島の沼　越後刈羽郡三島の沼

○あるはなくの歌　新古今卷八哀傷小野小町「あるはなくなきは數そふ世の中にあはれいづれの日まで歎かむ」によつた。或はこの歌を良寛が誤り書いたのを。その作としたものか。

○あだ人　心の浮薄な人。
○きくものゆゑに、聞くものながら。
○うちつてに　うちつけにの意に用ゐたのであらう。
○きぞのよ　昨夜。
○ほやのぼるらむ　火事があるのであらうの意。
○こぼたましものを　掘り崩し度いものよ。
○いたまくもをし　痛むもをし、いたましいのも可哀相である。
○つきの木　槻の木、楡科の落葉喬木。つきけやき。

足曳の山の椎柴折りたきてきみとかたらむ大和ことの葉
あだ人のこゝろはしらずおほよその花におくれてちりやしぬると
相待つときくものゆゑにうちつてにおもはぬとひにまさるべらなり
さはるべきものこそなけれ法のみちそれがさながらそれにありせば
さす竹のきみがこゝろのかよへばやきぞのよ一夜ゆめに見えけり
小夜あらしいたくなふきそさらでだに柴の庵の寂しきものを
さよ中に螺ふく音のきこゆるはをちかた里にほやのぼるらむ
きみがやどわがやどわかつ靈法の坂を鍬持てこぼたましものを
きかずしてあらましものを何しかも我に告げつるきみがよすがを
今日の日をいかにけたなむうつせみのうきよの人のいたまくもをし
ゆくみづはせきとめてともありぬべしかへらぬものは月日なりけり
このにはに立てるつきの木人ならばとはましものを幾世へぬると
行く水はせきとむることもあるらめどかへらぬものは月日なりけり
ゆくりなく一日人目を送りつゝ六十あまりになりにけらしも
ゆめのよに且まどろみてゆめを又かたるも夢もそれがまに／＼
ゆめのよにまほろしの身をおきながらいづくのくにへ家出しつらむ

行くさ來さおなじ國ちのさと人にことづてやせむ鴈のたまづさ

ゆめのよにまた夢むすぶくさまくらねざめ寂しくもの思ふかな

往くさ來さ見れどもあかず石瀬なる川中に立てる一つまつかな

みをすててよを救ふ人もますものをくさのいほりに暇求むとは

我もおもふきみもしかいふこの庭に立てる槻の木ことふりにけり

しる知らぬ行くもかへるも諸ともにわがふるさとへゆくといはまし

み佛のしろしめしつる古を今にうつして見るがたふとさ

わがやどはこしの奥山こひしくばたづねてきませ杉の下みち

いく千代もさかゆる松になぞらへば年はふれどもきみはおいせぬ

いざこゝにわがよはへなむ國上のや乙子のみやのもりの下いほ

しげやまにわれ杣立てむ老いらくの來むてふみちにせきすゑむため

しろしめす民があしくば我からと身をとがめてよ民があしくば

しら浪のよする渚をみわたせばすゑは雲居につゞく海原

枝折してゆくみちなれど老いぬればこれやこのよの名殘なるらむ

然りとていたみたへねばことあげすかちさびをすな我が乙のきみ

白髪やおほやけものぞかしこしや人の頭もよくといはなくに

○國ち　くぬち、國內。

○ますものを　いますものを。

○杣立てむ　杣木を立てよう。

○我からと　自分の惡いためと。

○ことあげす　言葉に出していふ。この歌九二三頁に同じやうなのがある。

○久方のくもふきはらへ云々 長雨の霽くを祈り止めんとする歌であらう。

○つゞやはたちを 十九や二十をつゞらをりの音の繰返し。

柴の戸に立ち居て見てもすべぞなきこのごろ人の見えぬ思ひは

津のくにの難波のことはいさ知らず木の下やどに三人ふしけり

大丈夫や共泣きせじとおもへども煙見るとき咽せかへりつゝ

久方のくもふきはらへ天津風うきよの民のこゝろかよはば

久方の雲のあなたにせきすゑば月日のゆくをけだしとゞむかも

人の善惡(さが)きけば我が身を咎ぬばや人はわが身の鏡なりけり

くさまくらねざめ寂しきやまざとに雲居同じき方を見るかも

あしびきのいはまつがねにうたげしてかたりし折をいつか忘れむ

からくにの賢き人の親つかへ見ればむかしの思ほゆらくに

もろ人のかこつおもひをせきとめておのれ獨りに知らしめむとか

彌彦のを峯打ち越す九折(つゞらをり)坂つゞやはたちを限りとをして

すみ染の我が衣手はぬるゝとも杉のかげ道ふみ分けて見む

墨ぞめのわがころも手はぬるゝとも法のみち芝ふみわけてみむ

すてし身をいかにとゝはば久方のあめふらば降れ風吹かばふけ

すみぞめのわがころも手の豐(ゆた)ならばうきよのたみにおほはましものを

良寛に辭世あるかと人とはば南無阿彌陀佛といふとこたへよ

はるは花あきはもみぢにたはれなむよしやさと人こちたかりとも
おほにおもふ心をいまゆ打ち捨ててをろがみませす月に日にけに
立田山紅葉のあきにあらねどもよそにすぐれてあはれなりけり
うまさけをのみくらしけりはらからの眉白妙にゆきのふるまで
こゝろさへかはらざりせばはふ葛のたえず向はむ千代も八千代も
ことたらぬ身とはおもはじ柴の戸に月もありけり花もありけり
天もみづも一つに見ゆる海の上に浮きて見ゆるは佐渡のしま山
都どり隅田川原にすみなれてをちこち人に名やとはるべき
うか〱と浮世を渡る身にしあればよしやいふとも人はうきゆめ
このよさへうから〱とわたる身は來ぬ世のことを何思ふらむ
あしびきの山の庵に住み居ればきのふもけふもとふ人もなし
やまかげのいは根もり來るこけ水のあるかなきかに世を渡るかも
くさの庵に立ち居てみてもすべぞなきあまの刈藻の思ひみだれて
此の間は越の浦曲に生ふるものかにもかくにもなみのまに〱
こゝつかにつけのよろしきしのぶ草ゑひてやゑひぬ人しひずとて
惜しめども盛りはすぎぬまたなくにとめくる者は老にぞありける

○おほにおもふ　いい加減に思ふ
○いまゆ　今より。
○をろがみませす　拝みませ。
○はふ葛の　たえずの枕詞。
○うから〱と　ぼんやりと、うつかり〱。
○つけのよろしき　時機のよい事よ。

つちでくがいそ邊の波にあふられて引く潮ごとにとくるどろばう
獨りねのねやのともしび打ちきえてわがかげにさへ別かれまゝかな
いくたびか參るこゝろはかつを寺ほとけのちかひ頼もしきかな
はなみなぎ急ぐ小舟に帆をあげてふけかしかぜの吹かであれかし
うつせみのもぬけしからかこれほどにしらぬ山ぢをとへとこたへむ
よの中におなじこゝろの人もがなくさの庵に一夜かたらむ
世の中を厭ひはつとはなけれどもなれしよすがに日を送りつゝ
甞室の田中のまつは待ちぬらし我まちぬらし田中の松は
みほとけのまこと誓ひの弘くあらばいざなひ給へおぢなき我を
あま人のつたふみけしか久方の雲路をかよふこゝちこそすれ
なにはえのなにはおもはずおとはのやとはうたのしも人の遊びは
よの中を思ひ思うてはて〳〵は如何にや如何にならむとすらむ
あし引の我が住む山は近けれどこゝろは遠くおもほゆるかな
足曳の山立ちかくす白雲はうきよをへだつせきにてこそあれ
國上山杉の下路ふみ分けて我がすむやどにいざかへりてむ
同じくはあらぬよまでも共にせむ日は限りありことはつきせじ

○つちでくが　土人偶、土で作つた人形。
○どろばう　泥坊、こゝでは土人形を云ふ。
○かつを寺　攝津三島郡豐川村に在る隣眞山蓮華寺、眞言宗。
○はなみなぎ急ぐ小舟に帆をあげて云々　山崎宗鑑の犬筑波集春部の附句「吹けかし風の吹かであれかし」「花見にさいそぐ小舟に帆をあげて」を記憶して居た暗合か、良寛は讀んでいたかであらう。
○おぢなき我を　拙劣な私を。
○みけし　御衣。
○あらぬよまでも　未來の世までも。

野邊にきてはぎの古枝を折ることは今來むあきの花のためこそ

いつまでも朽ちやせなましみほとけのみのりの爲にすてしその身は

おくやまのくさきのむだに朽ちぬとも少し木の實をまたやくたたむ

なき折は何によそへておもはましあるにならひしけふのこゝろは

わがそでは涙に朽ちぬ小夜ふけてうきよの中のことをおもふに

敎へとは誰が名づけけむしらいとの賤がをだまきまきもどしみよ

あしびきの森の下屋のしづけさにしばしとて我枕うつしけり

ぬば玉のこよひもこゝにやどりなむ君がみことのいなみがたさに

あたらねばはづるともなきあづさゆみそらを目あてにはなつもの故

もとゞりにつゝめるたまのひさにあるをいまやおくらむ其の時にかも

よの中に何か苦しと人間はばみのりを知らぬ人とこたへよ

天傳ふ日はかたぶきぬ玉ほこの家路は遠しふくろは重し

沖つかぜいたくなふきそくものうらは我がたらちねのおきつきどころ

法のみち誠は見えて昨日の日も今日もむなしく暮しつるかな

さしあたるそのことばかり思へたゞかへらぬむかし知らぬ行末

極樂にわがちゝはゝはおはすらむ今日ひざもとへゆくとおもへば

○あるにならひし　あるに馴れ増長した。

○しらいとの　知らずと白絲とかけた。

○をだまき　苧環、つむいだ麻苧を内の空しい圓形に巻いたもの。巻きもどすはその縁語。過去、本源にたち還れの意。

○もとゞりにつゝめるたま　髻にかくして居た大切な珠。佛敎の眞精神などを云ふのであらう。

○みのり　御法。佛敎。

○ふくろは重し　托鉢した頭陀袋である。

○かへらぬむかし知らぬ行末　還らぬ過去、知らぬ未來の事は氣にしないで。

○三界六道　三界は衆生の轉生する三つの世界、慾界、色界、無色界。六道は衆生の來世に行く可き道、餓鬼、畜生、地獄、修羅、人間、天上。
○田をさ　死出の田をさ、時鳥。
○三つ瀨の河　三惡道、畜生、餓鬼、地獄へ行く道の前に流るゝと信ぜるれる川、三途川。
○しめ結はゞ　しめ繩を結べば。
○業　佛教の因果の作用をさす。
○みづのさやぎに　出水の騷ぎに
○かをのごとある　顏のごとあるの假名の誤用。
○くにさかり　國離れ。

むらぎものこゝろかなしもあら玉のことしのけふもくれぬと思へば
さとべには笛や太鼓の音すなり深山は澤にまつのおとして
たゞたのむ三界六道の田をさ來て三つ瀨の河になき渡るかな
きみや忘るみちやかくるゝこのごろは待てどくらせど音づれのなき
玉鉾の道の隈ごとしめ結はば行きしかと言ひて蓋しかへらむ
業(ごふ)はたゞ萬事はいらず淨・不淨菩薩の行(ぎやう)ぞ殊勝なりけれ
あたらしきものにもあるか年月はやまのおくまでとめて來にけり
つれ〴〵にながめくらしぬ古寺ののきばを傳ふあめを聞きつゝ
籠田より村田の森を見渡せば幾世經ぬらむ神さびにけり
忘れても人をばえしさ嫉むなよわれからとへばかこもあるもの
村肝のこゝろをやらむ方もなしいづこの里もみづのさやぎに
ふでもたぬ身は憐れなり杖つきて今朝もみ寺のかど叩きけり
うちわいてくさの庵を出て見ればをちのやまべは雲居たなびく
おほぞらのかをのごとある君なればくるとはすれどめには見ずけり
ことさらにわきて賜はる山わさびいつかわすれむきみがこゝろを
くにさかり國へだつともおなじよとおもふこゝろを君たのみなば

このごろのよるの闇路にまどひけりあかたのやまに入る月を見て

我がごとやはかなきものは又もあらじとおもへばいよゝはかなかりけり

あら金の土の中なる埋木の人にもしらでくちはつるかも

白雪をよそにのみ見てくらししにまさに我が身につもりぬるかな

たまさかに來ませる君を小夜あらしいたくなふきそきませるきみに

山里の寂しさなくば殊更に來ませるきみに何をあへまし

うちつけにうらやましくぞなりにけるみねの松風岩間の瀧津

雨晴に嚢の褐ぬれてきしきみを一夜こゝにといはばいかゞあらむ

手を折りて昔のともをかぞふればなきは多くぞなりにけるかな

泡雪の中に立ちたる三千大千世界又其の中にあわゆきぞふる

あしびきの岩の苔道ふみ分けて我來にけらしきみが庵に

山かげの木の下庵に宿かりてかたり果てねば夜ぞふけにける

間瀬の浦のあまの刈藻のより〳〵にきみもとひ來よ我も待ちなむ

いつとてもしひてみあへはなけれども立つことかたき此のいほりかな

我が袖はしとゞにぬれぬうつせみのうきよの中のことをおもふに

くさのいほに寢てもさめても申すこと南無阿彌陀佛々々々々々々

○しらで　知られでの意。

○三千大千世界　此の世は小千世界、それが集まりて中千世界、それが集まりて大千世界を成して居ると云ふ佛教思想、約言して三千大千世界。實は十億世界である。

○果てねば　はてぬに。

○間瀬の浦　越後西蒲原郡間瀬村の海岸、野積浦の北。

武士の眞弓しらゆみ梓弓弛みにしよりその日をしらず
古にありけむ人も我がごとやもののの悲しき世を思ふとて
彼是と何あげつらむよの中は玉にうつろふかげとしらずて
いざさらばあはれくらべむ越路なるおとわかの春と有明のあき
いざさらば我もやみなむこゝのより十づゝ十をもゝとしりなば
我がやどの竹の林をうちこして吹き來るかぜの音のきよさよ
足曳の岩間を傳ふ苔水のかすかに我は住み渡るかも
かにかくに物な思ひそ彌陀佛の元の誓ひにあふとおもへば
乙宮の宮の神杉しめ結ひていつき祀らむおぢなけれども
水の上にかずかくよりもはかなきはみ法をはかる人にぞありける
如何なるが苦しきものと問ふならば人を隔つる心と答へよ
渡しにし身にしありせば今よりはかにもかくにも彌陀のまに〳〵
ありそみの上に朝毎立つ市のいよ〳〵ゆけばいよ〳〵消えにけり
足乳根のはゝがみくにと朝夕に佐渡のしま根を打ち見つるかな
天雲のよそにみしさへ悲しきにをし足らはせしちゝのみこはも
浦波のよする渚を見渡せば末は雲居につゞくうなばら

○あげつらむ　あげつらふらむの意、議論し合ふのであらうか。
○おとやかの春と有明のあき　乙宮は國上山頂の乙宮森附近をさす。有明は恐らく良寛青年の迴國有明海の思出であらう。

○み法をはかる　佛教を信仰せず勝手に測る。
○渡しにし　佛に任せてしまった。
○ありそみの云々　ありそ海の、有磯海。これは荒磯海でなく固有名詞と見るべきであらう、越中伏木港の西北の海岸。但し文に同じやうな歌があり、それには荒磯海とある。尤も萬葉の家持を詠じたのである。富山灣は由来蜃氣樓で有名。
○はゝがみくにと　母の故郷と。良寛の母の故郷が佐渡相川なる事は既に述べた。
○たらはせし　十分に滿足を與へて呉れた。

○わた中のをぢ　佐渡にある母の兄弟達をさす。

○すたべ　棄戸。奥津棄戸の略。上古の家屋。社の意に用ゐた。

○くものはたて　雲の旗手。雲のたなびく様の旗に似たるを云ふ。

さすたけの君がすゝむるうまさけをさらにや飲まむそのたちさけを
あすよりは後のよすがはいさしらず今日の一日は醉ひにけらしも
山陰のありそのなみのたちかへり見れどもあかぬこれのみはやし
庭にのみ我はありぬときみによりことづてをせむわた中のをぢ
人のみはならはしものぞ殊更によく教へてよさきくいまして
百傳ふいかにしてましくさ枕たびの庵に逢ひし子らはも
今日も又君まさばやとおもふかな立ち返るべきむかしならねど
水鳥のゆくもかへるもあとたえてふれどもみちは忘れざりけり
やへふかばもしもひまをやとめもせむみたらひ川へ持ちて行きませ
横崎のすたべをろがみ石の上古りにしことをしのびつるかも
荒磯海のうへにあさ毎立つ市のいよ〳〵行けばいよゝけにけり
浮草の生ふる水際に月かげのありとはこゝにたれか知るらむ
久方のくものはたてを打ち見つゝ昨日も今日もくらしつるかも
深山邊の深雪とくれば谷川に淀める水はあらじとぞおもふ
新玉の年の内より待ち〳〵て今はあひ見て何かおもはむ
わがこゝろ雲の上までかよひなばいたらせたまへ天つ神ろぎ

○柳の巣守　柳のかげの荒れたる宿の番人。

○夕顔も絲瓜も知らぬよの中は　玉石混淆の世の中は。

○したくだちゆく　かげに朽ち行く。

○とぼしき　羨ましい。

○まきの戸　槙の戸。

わがこゝろ有哉不有と探り見ば空吹くかぜの音ばかりなり

このうちはおくりし人は誰人ぞまつの下庵柳の巣守

待つと云へばあやしきものぞ今日の日の千年の如もおもほゆるかな

難波津のよしやよの中梅の花むかしを今にうつし見るかな

我はもよいはひて居らむたひらけく小山田さくら見てかへりませ

夕顔も絲瓜も知らぬよの中はたゞ世の中にまかせたらなむ

足曳の山のしげみを戀ひつらむ我も昔のおもほゆらくに

訪ふ人もなき山ざとにいほりしてひとり眺むる月ぞわりなき

百草のはなの盛りは有るらめどしたくだちゆくわれぞとぼしき

あきはぎのはな咲くころは來て見ませ命全くばいざかざしてむ

うか〳〵と渡るもよしやよの中は來ぬよのことを何と思はむ

瀧津瀬の音きくばかり庵しめてよをしら雲に送りてむかも

たぎつせのおときくばかり庵しめて浮白雲によは送りてむ

我がやどをわれのやぶとしあらせればみだれても鳴くむしのこゑかな

なきたまのかへりやするとまきの戸もさゝでながむる曉の空

あめはやみぬこのよあけなば木したのや岩の苔道うちはらひてむ

○百中の　多くの中の。
○いさゝめに　かりそめに。いささの音の繰返し、次のいさゝかも同じく繰返し。
○我がやどのたけのはやしは云々　良寛があらゆる生物を愛した心持は竹にまで及び、彼の庵室の牀の下から筍が生じ、彼は切るに忍びず終に穴を明け、屋根に穴をあけてやつた逸話が存する。

たび衣野山をこえてあしたゆく今日の一日もくれかゝるかな

立ちて見つ居て見てみれどすべぞなき蜑の刈藻のおもひみだれて

小山田の山田の花を見む日には一枝送れかぜのたよりに

くれ竹の世はうきふしの多きかな集我が身ばかりの上ならなくに禪師

よの中の憂さをおもへばうつせみのわが身の上のうさはものかは

さす竹のきみと逢ひみて語らへばこのよに何か思ひのこさむ

百中のいさゝむら竹いさゝめにいさゝかのこす水莖のあと

かたみとて何かのこさむはるは花山時鳥あきはもみぢ葉

我がやどのたけの林は日に千度ゆきて見れどもあきたらなくに

良寛歌集　終

昭和十三年三月十五日印刷
昭和十三年三月二十日發行

（非賣品）

校註國歌大系
第十七卷

編輯者　中山泰昌

發行者　東京市神田區錦町一丁目五番地
小川菊松

印刷者　東京市本所區厩橋一丁目二十七番地
西尾眞八

印刷所　東京市本所區厩橋一丁目二十七番地
凸版印刷株式會社本所工場

發行所　東京市神田區錦町一丁目五番地
株式會社誠文堂新光社
電話神田自二一二六番至二一二九番
振替東京四五三四〇番

昭和三年六月十五日印刷・昭和三年六月十八日發行

I